

ハイスクールD×D —魔法使いと龍—

shellvurn 次郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一人の魔法使いと、龍の物語。

イツセーはドラゴン達と戦い、共に強くなる――

とある魔法使いの息子として生まれたイツセー。力をつけ、強くなりながら、

過ごしていく。

この作品はハイスクールD×DのIF、もしイツセーが普通の一般人ではなく、魔法使いの子供として生まれたらというものです。

この作品は主人公強い系です。

私は他の作品とは違う方向にしたいです。我が道を突き進みます。

これは自身の考えたものを構想して書いています。ドラゴンが少し優遇され気味かもしれませんが、苦手な方はブラウザバックを。

随分と拙い文章ですが、それでもいいよって方はどうぞ先にお進みください。

感想を是非よろしくお願いします。良かった点、悪かった点を書いていただきたいです。やはり人からの見方というものも大事です。自分じゃ気づかない点もあると思います。今後の改善の為によろしくお願いいたします。

目次

第壹章 プロローグ

N O, I し誕生し 1

N O, I I し予知そして、成長し 10

N O, I I I し悲劇し 20

N O, I V し覚醒と偽の力し 31

N O, V し真なる覚醒し 49

N O, V I し決意し 68

N O, V I I し龍霊界し 80

N O, V I I I しアーティファクトし 94

第貳章 修行編

N O, I X し新たなるスタートし 109

N O, X し特訓し 122

N O, X I し進化の道筋と魔導書し 140

N O, X I I しドライブグちゃんのメタモルフオーゼし 155

N O, X I I I し再びし 171

N O, X I V し襲撃し 186

第参章 イッセーと聖書神話の三大勢力

N O, X V し日の本の魔法使いし 209

N O, X V I し仲間、そして駒王学園し 223

N O, X V I I し堕天使し 236

N O, X V I I I し学園の悪魔し 252

N O, X I X し特訓！withシスターズし 268

N O, X X し友達し 283

N O, X X I し強さと力し 298

N O, X X I I 　↳力を扱うには鍛錬　↳

N O, X X I I I 　↳衝突　↳

N O, X X I V 　↳継続は力になる　↳

N O, X X V 　↳動き出す　↳

N O, X X V I 　↳聖剣　↳

N O, X X V I I 　↳戦闘準備開始　↳

N O, X X V I I I 　↳明かされる真相　↳

N O, X X I X 　↳戦闘！そして　↳

N O, X X X 　↳戦闘後・・・　↳

N O, X X X I 　↳邂逅　↳

N O, X X X I I 　↳前夜　↳

N O, X X X I I I 　↳会谈開始　↳

N O, X X X I V 　↳会谈その二　↳

N O, X X X V 　↳会谈その三　↳

N O, X X X V I 　↳会谈其の四　↳

第肆章 動乱の序章編

N O, X X X V I I 　↳帰還　↳

N O, X X X V I I I 　↳もう一つの世界のヌシさん　↳

N O, X X X I X 　↳収穫　↳

N O, X L 　↳激闘、邪龍　↳

N O, X L I 　↳訪問　↳

N O, X L I I 　↳来訪者　↳

N O, X L I I I 　↳行動開始　↳

N O, X L I V 　↳剣闘龍　↳

N O, X L V 　↳北歐の大神と日本の太陽神　↳

314

327

341

358

373

390

402

418

436

449

464

474

484

496

509

527

539

554

567

581

595

611

624

638

N O, L X I	N O, L X	N O, L I X	N O, L V I I I	N O, L V I I	N O, L V I	N O, L V	N O, L I V	N O, L I I I	N O, L I I	N O, L I	N O, L	N O, X L I X	N O, X L V I I I	N O, X L V I I	N O, X L V I
						〜ペンドラゴン家の魔法使い〜	〜英雄の子孫たち〜	〜京の都〜	〜西の妖怪勢力〜	〜新人獲得〜	〜白龍皇チーム!〜	〜ロキ戦〜	〜悪神襲来〜	〜決戦前〜	〜寝坊助〜
849	837	825	815	808	792	781	765	751	738	723	708	693	679	667	652

第壹章 プロローグ No. 1 誕生

——この世界には、様々な生命が存在する——

人間はもちろんのこと、神、天使、堕天使、悪魔、吸血鬼、エルフ、ドラゴン、死神、聖獣、魔獣、妖怪、精霊、幻獣などが生息している。力を求めるもの、安息を求めるもの、戦いを求めるもの、彼らの意思は様々である。

しかし、人間はいつだって弱者だ。特別な力もない。悪魔や、吸血鬼のような、長い寿命もない。悪魔や堕天使が少しでも力を出せば、簡単に殺される。

いつだって、弱いものは、強いものにいいようにされる。この世界もそうだ。人間は特別な力を、異形に対抗しうる力を持っていない。持っているとするれば、全人類の一部の魔法使い、そして神話にでてくる英雄のみだ。大半の人間は異形の存在、裏の事情を知らない。勝手な都合で理不尽に殺され、虐げられる。

聖書の神、ヤハウェが残したものの、神器。それは人の枠を超えるようなもの。

しかし——それを宿した人間はさらに不幸だ。「危険だ」、「人間には過ぎたものだ」などといった理由で殺され、利用され、虐げられ、ろくな人生を送ることなく、寿命を迎える。

それはそうだろう。悪魔や堕天使たちは、自分たちの脅威になるであろう者をみすみす放置するわけがない。悪魔にいたっては、自分のステータスを上げるため、無理やり眷属にする。

しかし、人間からしたら、たまったものではない。どちらが正しいのか。それを判断できるものはいないだろう。なぜなら、どちらも掲げる正義、守るもの、立場が違うからだろうか。価値観さえも。

だが、人間も伊達に長い時間を掛けて繁栄したのではない。人間は確かに弱い。全員が全員強いわけではない。しかし、

数百万分の一、いや何千、何億、何兆分の一、何千年、何万年に一人という確率で生まれてくる異能を持った人間。異形に対抗しうる力を持った人間が生まれ対抗してきた。

——それは英雄といわれるもの。人間を異形から守っていた者がいた。

世界のとある場所では、また一人、異形に対抗しうる、いや、異形を圧倒できる力を持った人間が生まれようとしていた。それは、後に裏の世界で伝説、レジェンドとなりうるもの。

その人間と邂逅した者たちはこう言った。

「あり得ない。」「化物」と。

これは、人間が、世界が生み出した【奇跡】

——三人称 side ——

「ううっ、ああっ！」

「頑張れ、???。もう少しだ。もう少しで生まれる。」

世界のとある場所、一組の夫婦がいた。見たところ出産しているところのようだ。女性男性ともに若々しく見える。女性は出産の苦しみにひたすら耐えていた。男性はその苦しむ女性に寄り添い、ひたすら声をかけて励ましている。

そして、しばらく時間が経った——

「——!!!」

生まれた赤ん坊の産声が響き渡る。健康そのものだ。赤ん坊の生まれた瞬間、男女二人の顔が幸せいっぱい、という笑顔で満ちている。「やったぞ、???。生まれたぞ!!よく頑張ってくれたな。」

「ええ、本当に・・・最後まで寄り添ってくれてありがとう、あなた。」

「当たり前じゃないか。なんてたって、待ちに待った、待ち望んだ俺たちの子供なんだから。」

「ふふっ、そうね。元気に生まれてくれて、よかつたわ。」

「そうだな。それにしても、凄いな。生まれた時点でこのオーラとこの魔力。凄まじい質と量だな。」

「どうやら、この子供は魔力という異能を持つらしい。この夫婦も一般人ではないようだ。」

「もしかしたら、???をこの時点で超えてるんじゃないか?」

「もしかしたらじゃなくて、確実にこえてるわ。ふふっ、少し悔しいわ。我が子とはいえ、この時点で私の魔力を超えているなんて。とんでもないことよ?。」

「ははっ。そうだよな。世界最高で君の右に出る魔法使いはいないと言われている君をはるかに凌駕する魔力だもんな。いやはや、僕も驚いているよ。」

「なに言ってるのよ、あなただって、とても強くて最高の魔術師じゃない。」

二人は互いをほめ合っている。

「この子、将来私をはるかに超える魔法使いになるわ。」

「そうだな。多分、いや、確実にだな。この子は過去、現在、未来で最高にして、最強の魔法使いになるよ。」

「私もそう思うわ。そうになったら誇らしいわ。」

「ああ、ホントにな・・・君の子供だからだよ、???。」

「あなたの子供でもあるからよ。こんなにも才能で満ち溢れているのは。」

「そうだな。俺たち二人の、愛の結晶だ。」

「そうと決まれば、早いうちからこの子に色々と魔法のことを教えますしょう？あなた。」

「そうだな。他にも体術も教えておこう。」

「あなた、これだけの、ほぼ無限に近い魔力なのに体術はいらぬの？」

男性の言葉に疑問を思ったのかコクツ首をかしげて、美女がかわいらしく質問する。

「まあ、確かに??の言う通り、この魔力なら、魔法だけでもそこそこは行くだろうな。だが、体術はあつて損じゃない。」

と、見た目は20代にしか見えない男性が語る。

「でも、魔法は万能つてわけじゃない。もし、魔法を封じられたら魔法使いは何もできない。それに体を鍛えれば、魔力の絶対量が増えるし、一度に使える量も増えるんだ。だから、以外と魔法使いにとって鍛えるというのは無視できないものなんだ。これをやるだけで、魔力が少ない魔術師でさえ、訓練次第で見違えるようになることもあるんだ。」

「そう言われれば、一理あるわね。」

男は更に続けて話す。

「魔法使いは魔法が厄介といわれているが、魔力が尽きれば、魔法が使えなければ雑魚だと言われるのは其のせいさ。研究ばかりに没頭して、鍛えることをしないから、やられるんだ。」

男はまるでその経験があるかのように言う。

「それにこの先何があるかわからない。この子はこのオーラにこの魔力だ。あの意地汚い悪魔や墮天使がこの気配を嗅ぎ付けて襲ってくるかもしれない。」

「デーモン悪魔・・・フォーリン・エンジェル墮天使・・・私たちのかわいい子を、悪魔や墮天使なんかにわたしてたまるもんですか!!」

突然出てきた「悪魔」という単語に過剰に反応し、女性は声を荒げ、凄まじい魔力とオーラを放つ。下級悪魔、下級墮天使、並みの魔獣なら、降れただけで消し飛ばすほどの密度だ。

「ちよつとちよつと、落ち着いて。まだそうと決まったわけじゃないし、そうならないように鍛えるんじゃないか。」

男性が諫めると、女性は濃密なオーラを抑える。

「ごめんなさい。私としたことが。少し、熱くなり過ぎたわ。」

女性は静かに謝罪する。しかし、その顔は苦渋の表情だ。

「いや、気にしないで。当然さ。だって君の家族や友人は……」

「うん。私は悪魔が憎い。でも、この子を授かった以上、復讐者になるわけにはいかない。」

「でも、僕もつくづく思うよ。悪魔、堕天使、天使特に悪魔と堕天使は完全に人間を見下している。悪魔は神器所有者や力を持つ者を無理やり転生させて、眷属にしていると聞く。許せないさ。」

「そうね。神器所有者だったり、力を持つものは、戦いを、不幸を引き寄せるのね。」

そう。いつだって神器所有者は不幸になる。ろくな人生を送らない。だが、その要因の多くには、神器を恐れた愚か者どものがする所業によってだ。

「ああ。弱肉強食の世界だ。弱いものは罪といわんばかりのな。だから、俺たちもやるしかないんだ。」

「そうね。って、いけない、暗い話になってしまったわ。折角この子が生まれてきてくれたのにね。ってあれ、もうすやすや寝ているわ。」

どうやら夫婦二人で話しているうちに寝たようだ。つまんなかったかな。赤ちゃんには。当然のことだけど。

「それにしても、可愛い……可愛すぎよ。この子将来絶対イケメンになるわ。女泣かせのね。」

「ははっ、君に似て整った顔してるよ。」

「そう？あなたにも似てるわよ？」

先ほどの暗いシリアスな話と打って変わって、和む雰囲気だ。

「この子を見てると、悪魔や堕天使なんてどーでもよくなるわ。愛って偉大ね。」

「そうだね。この子を授けてくれた神に感謝しないとね。」

「うふふ、あなた、神ってどこの神に感謝しているの。」

そう。神といえども、この世界には数多の神が存在する。

「んんんんこの神だろうね。もしかしたら、龍の神様、かもね。」

と、冗談交じりに言う。

「龍の神って。あの無限の？」

「いやいや。あれは神じゃないでしょ。別だと思うよ？僕はね。そもそも、無限の龍は神格を持っていないと思うよ。勝手に龍神とつけたんだろうさ。」

「そうなの。でも、だいたいどうしてドラゴンなの？」

「ほら、前に話してくれたじゃない？あの話。君を助けたあの存在。」

「それ大分昔の話よ？というか、ドラゴンかもわからないのよ？」

「でも、たすけてくれたんでしょ？」

「まあ、結論はそうね。」

「会ってみたいね。その存在。」

「もう一度言うけど、いるかもわからないのよ?」

「いるかどうかわからない、って神ぼくていいとは思わないかい?」

「うふふつ、面白い人ね。そんなところも好きよ。」

と急に惚気る。

「なんなの急に?」

「んくん。言いたかったの。」

「ありがとう。僕も愛してる。」

「私も。」

そういつて二人は唇を重ねる

「ねえ、あなた。この子の名前まだ決めてなかったじゃない?」

「そうだね、いろいろ考えたけど、まだだったね。」

「んく。どうしよう。アルベルト、ジーク、ジョン……………」

「あなた……………ジョンは初歩的過ぎじゃない?」

女性はブツブツとつぶやいている男性に呆れ顔で言う。男性の方はネーミングセンスが皆無のようだ。

「そういわないでくれよ、頼むから……………」

どうやら落ち込んでいるようだ。

「まあ、昔からそうだったしね。」

「ブツブツ……ん？ イッセー？」

さっきからブツブツと言っていた男性が突然名前のような言葉をつぶやき、ひらめいたような顔をした。

「どうしたのあなた？」

突然シリアスな顔をした夫に彼女は疑問を持った。

「名前、イッセーはどうだ？」

「イッセー？ 不思議な名前ね？」

男性が口にした名前、イッセーのような名はありきたりなものではなかった。それはこの時代では珍しい名前であった。

「でもなんでだろう？ なんかとてもしっくりくるわ。でもあなた、どうやって思いついたの？」

「わからない、自分でも。無意識に自分の頭に浮かんだんだ。こう、ビビツって来て、イッセーって。」

「ふふふ、何か受信したみたいね。いいわねイッセーって。ねえ、あなた、これにしましょう？」

「そうだな。これにしよう!!」

こうして、人間が生んだ奇跡のこの名が決まった。

そしてこの瞬間、子供は目を覚ました。まるで、この時を待っていたかのよう。

「だあ〜」

そして、子は声をあげた。

「あなた、この子いつの間にかおきてるわ。名前、気に入ったのかしら?」

「だったら、うれしいな。」

そんな冗談を言つて、男性は子を抱いて掲げていった。もしや、この赤ん坊、否イツセーが起きたのは必然かもしれない……

「よし、今日からお前の名は、イツセー……」

【イツセー・ヴァーミリオン・アンブロシウス】

だ！　　」

NO, I I く予知そして、成長く

「お前の名前はイツセー、

【イツセー・ヴァーミリオン・アンブロシウス】だ!!」

こうして、一人の、奇跡の子が生まれた。
そのころ、

—???
SIDE—

とあるところ

「む?これは・・・」

「?おや、どうかされました?主よ。」

そう尋ねるのは、カジュアルな服装をした理知的な男性。

「あ、いや、なんかこう・・・ビビッてきてな。」

このよくわからない返答を返すこれまた、男性。しかし、なんとも
神々しく、とんでもないほどの聖なるオーラと底の知れない力を感じ
させるものだ。

「はあ・・・それではよくわからないのですが。」

「なんか、頭の中に突然映像が流れてきたんだよ。」

「ほお。ちなみにそれは一体どんな?」

先ほどの男を主と呼んだ男性はそのヴィジョンが気になったのか、
さらに追及をする。

「子供の映像だ。人間のな。」

「人間?ですか。我らと相いれない種族の。我らの同胞の多くはは
彼らに淘汰されてきた。」

どうやら、彼らは人間ではないらしい。

「それはそうだが、戦いなのだ。それも致し方ないだろう。弱ければ、倒される。どこの世界でも同じだろう。」

「しかし、なぜ人間の映像を？人間など、一部を除けば脆弱でしかないでしょう。」

「従者？の男が言うことはもつともだが、主と呼ばれた男はそれを否定する。」

「いや、俺が見たのはそれだけじゃないんだ。」

その男は更に、興味深そうに続ける。

「その子供、龍、ドラゴンに関心があるようなんだ。しかも、その未来では龍と暮らしていやがる。」

「！なんと！そんなことが！あり得ない。」

「ホントに流れてきたんだ。そんなヴィジョンが。」

男はそう、念を押す。

「クククク。面白い。実に面白いぞ。よもや、我らを理解し、肯

定するとは。そやつに一度、あつてみたいものだな。そうは思わないか？」

「確かに、私も興味があります。」

「ククツ、だろう？」

男は何か楽しみができたかのように笑う。はてさて、ここは何処なのか。一握り以下の物しか知られていない世界。

ズドン！！！！

すると！外からとんでもない衝撃波と音がこちらに到達した。

「やれやれ、あいつら、またやってんな。」

「そう思うなら止めて下さいよ……あのレベルの者たちが本気でぶつかってたらたまったものじゃないですよ……それにしても、ここまで衝撃が来るとは……流石ですね……」

「ハッハッハ!!あいつらはこの世界でもトップ10レベルだもんなあ。まあ、ダイジョブだろ。ここから10000キロは離れてるんだからよ。」

男は笑いながらさういうと、座っている席から立つ。

「強くなれよ、小僧!!」

主と呼ばれた男はその頭に流れてきた映像に映っていた少年に向かつて声を荒げた。

??? SIDE OUT

??? SIDE

我は夢を見る。次元の狭間を泳ぎ、様々な夢を、幻を見る。子供たちの夢を。

故に我は、様々なものを見てきた。それらは希望に満ちたもの、あるいは絶望に満ちたもの。様々なものだ。

今日も我は夢を見る。

そんな中、我は一人の少年の夢に目が留まった。

『ぼくね……と……するんだ!』

此処を泳ぐこと以外、興味を持たなかった我が、初めて抱いた興味。初めての感覚だ。心底面白い。

強くなれよ、少年。そして我を楽しませてくれ。

??? SIDE OUT

そして、イツセーが誕生して5年の月日が経過

—イツセーSIDE—

こんにちは!ぼく、イツセー。5さいだよ。ぼくはおとーさんと、おかーさんがだいすき!いつも、たいせつに、やさしくそだててくれるんだ!

おかーさんはとってもゆうめいなすっごいまほうつかいさんなんだって!そして、おかーさんはぼくがさいこうのまほうつかいになるって、ほめてくれたんだ!だから、ぼくはおかーさんからまほうを

すこしずつおしえてもらってるんだ。

それと、おとーさんは「魔法だけじゃ、強くは成れないぞ。」っておしえてもらって、たいじゅつだったり、かくとうじゅつをまほうといっしょにおしえてもらってるんだ。それと、「いい？ いっせー、強いだけじゃ、ダメなの。頭もよくないとね。私たち人間は知識が武器なの。魔法だって学問なのよ。」っておかーさんいつてたから、いろんなほんをよんだりしているし、おかーさんからも、いろんなことをまなんだよ。

まなぶことつてとつてもたのしいし、ちしきがじぶんのなかにはいつていくのつて、しあわせくつてひとりごとをいつたのをおかーさんにきかれた。おかーさんはなんかうれしそうな、しんぱいそうなかおしてたし、おとーさんはなんかこんわくしてた。

ぼくつておかしいこと、いつてないよね？

とある日――

きょう、ぼくはルーン文字？というのをまなぶんだ。これはぼくがまなんでいるまほうのべつのたいけいのまほうなんだつて。おかーさんからそれにかんしてのほんをわたされてよんでみたけどあんまりむずかしくなかった。すぐによみおわつて、まほうのかたちにするのができた。ほんとにまほうつておもしろいね。

――イッセーSIDE OUT――

――イッセー、S マミーSIDE――

イッセーが生まれて早5年。我が愛しの息子はすくすくと成長してくれた。

イッセーには驚かされてばかりだ。2歳で言葉を話し始めたのは普通だった。だがそこからだった。3歳で言葉をマスターし、他国の言語まで理解し始めていた。言語だけではない。数学、そして、魔法を教え始めてからの伸びが尋常ではないかった。魔法の基礎である属性魔法の基礎は見本を見せたら2, 3回で成 功させちゃうし、今

日教えようとしていたルーン術式までもう理解しようとしていた。ルーン術式なんて、5歳が理解できるはずがないのに……私、自信無くしそう……私ですら、ルーン術式なんて初見で理解できなかったのに。

私は息子の魔法の才能、もとい頭の良さにはほんとに驚かされてばかり。私もいち魔法使いとしては、悔しいけど、息子の魔法技術がみるみる上達していくのを見てるととても嬉しい。

これは将来、私なんか比較にならない大魔法使いになれるわ。そのために、息子にもつと魔法を教えてあげなくちゃ。

「イツセー。」

そう思っつて、私はイツセーを呼ぶ。

「なにー？おかーさん。」

「いい？イツセー、今日は魔力についての勉強よ。」

「はーい。でも、まりよくはしってるよ。まほうをしえきするのにひつようなちからでしょ？」

「そうよ。今日はそれ含めての話よ。」

私はイツセーに教えるためにその手の本を机に積み上げる。イツセに毎日つきつきりで教えている。教育ってほんとにやりがいあるわね。息子が育つていくのを見るだけでも嬉しいわ。

「じゃあ、はじめるわよ。それではね——」

……そしてその後。

「へー、そのあくまっつてしゅぞくのちからをにんげんがつかえるようにしたんだー。すごいなあ。」

「そうなのよ。そこから、魔法は始まったの。人間にも魔力はあるの。でも、それを直接使えないの。一部の人たち、いわゆる天才って呼ばれる人たち以外はね。だから人間が魔力を効率よく使いやすくなるために魔力を解析して魔法というものに技術化したの。魔法というのはね、感覚とかではなく、理解。事象の仕組みが分かってないと扱うことができないの。魔法は計算や演算なの。だから頭が良い人ほど優秀になれるのよ。」

「へー、まほうつてがくもんなんだね。」

「その通りよ、イツセー。だから、沢山勉強してね。」

「うん、ぼくがんばるよ!!」

「偉い偉い。」ナデナデ

イツセーをなでながらほめる。かわいい・・・♡

「えへへ・・・」

イツセーは嬉しそうに頭をなでられる。

「でもすごいよね〜」

イツセーは魔法の凄さを分かっているようだった。

「うん、凄いでしよう?魔法って。」

「それもあるけど、まりよくをかいせきしてまほうをたいけいかするつてもつとすごいことだよね。いつたいだれがそんなことをこなしたんだろう?おかしさんしってる?」

イツセーはそこに注目した。私は嬉しさのあまり気分が高まる。

「ええ、もちろん知ってるわ。」

「ええ!ほんと!?!だれなの?おしえておしえて!!」

「うふふ、誰だと思う?」

私は少し意地悪を試みる。

「ん〜わかんない。」

知ってたら逆に怖いわよ・・・息子よ。

「正解はね、今まさにあなたの前に立っている人よ。」

「・・・てことは・・・ええ〜!おかしさんの!!」

「うっふふ、そうよ。」

「すごいなあ〜。そんないだいなひとがおやだなんて、ぼくのほこりだよ!!」

「ふふっ、ありがと、イツセー。とっても嬉しいわ。」

ああ、息子にこんな風に思ってもらえるなんて。良かったわ、魔法の道に進んで。

ありがとう、イツセー。私は幸せよ。

—イツセー、S マミーSIDE OUT—

—イツセーSIDE—

すごいなあ。おかあさんはまほうのだいいちにんしやだったんだ。よおし、ぼくもがんばっておかーさんとならぶくらいのだいまほうつかいになるんだ!!!

ぼくはそれから、いろいろなまほうについてまなんだ。そのなかでもぼくがきょうみをもったのはしろまじゆつとか、くろまじゆつ。そのことをおかーさんにいつてみたら、もつとたくさんのしゆるいがあるんだって。ぜつたいにものにしたいな。

まほうのほかにも、たくさんまなんだよ。せかいにすんでいるのは、にんげんだけじゃないんだって。かみさまや、てんし、だてんし、あくま、せいじゆう、まじゆう、ようかいがいるんだって!!

むかしよんだほんにはじっさいにはいないってかいてあつたけど、ほんとにいたんだ!はやくあつて、たたかってみたいな。そこで、ぼくはきになつておかーさんにきいてみたんだ。

「ねえねえ、おかーさん。いちばんつよいしゅぞくつてなあに?」
って。

—イツセーSIDE OUT—

—イツセー、S マミーSIDE—

イツセーに質問されるのはいつものこと。その9割が魔法のことだけどね。しかし、今日は以外な質問をされた。

「ねえねえ、おかーさん。いちばんつよいしゅぞくつて、なあに?」

前に天使や、悪魔のような異形の存在を教えたけど、まさかそんなことを聞かれるなんて思ってた。強さに興味がでるなんて。あの人の血かしら♪私はイツセーに偽りなく答える

「ドラゴン。龍よ。」

「りゆう?」

イツセーはそう復唱する。

「そう、この世界でもっとも優れていてかつ、強い種族。それが、ドラゴンよ。イツセー。ドラゴンは知能も高い。魔法だって使えるドラゴンもいるのよ。」

「へええええ、魔法も?!すごいなあ!おかーさんはみたことあるの?」

イツセーは目をキラキラさせながらさらに質問してくる。眩しい……

「残念だけど、ないわ。滅多に見れるものじゃないのよ。それに、ドラゴンは戦いを求めるもの。遭遇したら最後。やられちゃうわ。」

「そんなにつよいの?!」キラキラキラ

イツセーの目の煌きはさらに増す。どれだけキラキラしてるの……

「ええ。もう手が付けられないほどにね。」

「よおし、きめた。ぼく、きめたよ、おかーさん。」

「何を決めたの?」

「……どうしてだろう?なんか嫌な予感……」

「ぼく、たたかうよ!!ドラゴンとたたかいたい!!」

「イツセー、無理よ。ものすごく強いんだよ?」

「じゃあ、ぼくもつよくなる!まほうと入いこうして、からだもきた

えて、まほうをしゅじくにしたきようじやになる!!」

今日、イツセーからとんでもないことを聞かされた。ドラゴンとたたかうなんて、、ムチャにもほどがあるわよ、、

でも、本当に強くなりそうね。そんな予感がする。むしろその予感しかない。

頑張りなさいイツセー。真つすぐなあなたなら、なんだってできるわ。そう、人間は本気になれば、なんだって、出来るんだから、、

—イツセー、S マミーSIDE OUT—

—??? SIDE—

……次の宿主に移ったようね……

私の名は赤龍帝ドライブ。

天龍と呼ばれたうちの一角。

私はその昔、ライバルだった白龍皇、アルビオン・グウイバーと共に二天龍と呼ばれ、強者との戦いに明け暮れていた。私はそのさなか、ブリテンで鯨い龍との戦いになった。何とかして勝ちましたものの、決して浅くはない傷を負い、しばらくの間身を潜めていた。そしてしばらく経つと、私の周りを囲っていたの。大軍が。訊けば、アルビオンと焰の龍、鯨い龍の三つ巴の戦いになっていたという。その戦いは次第に神話体系の一つ、聖書の三勢力の戦争をも巻き込んだ戦いになっていった。三体の龍は戦場を荒らしまくり、三勢力は手を組んで龍との戦闘になったという。結果、アルビオンと焰の龍は倒されて神器に封印され、鯨い龍は私との戦闘での傷が祟ったらしく、先にやられたらしい。

そして三勢力は結託して残った私を危険と判断して総攻撃。私も

抵抗はしたものの、やはり、あのときの戦いの傷が癒えず、私は負けた。

結局、私は神器に封印され、アルビオンと焔の龍と同じ道を歩むということになった。あちら側は神と四大魔王が死ぬ、という結果になった。

そして、神器となつて第二の生を始めた。当然、封印された恨みはある。だが、そんなことを言ったところで、後の祭りだ。身体が無く、封印されているのだから。

今まで幾度となく、白龍皇を宿した者と戦っては死を繰り返した。先代の宿主が死に、今代に移ったが、今代はとてつもない才能があるようだ。私たちを封印した魔王や神と同等、いやそれ以上の魔力量と密度だ。

これは、歴代最強の赤龍帝、ベルザードを超え、過去現在未来において最強の赤龍帝になる。

よろしくね、今代の宿主さん♪

—ドライグSIDE OUT—

NO, IIII 　　〈悲劇〉

そして、さらに数年後――

―イツセイSIDE―

やあ、僕、イツセイ。

おかーさんに魔法を覚えてもらってからはや5年以上たった。最初は簡単な魔法しか出来なかった。でも、年を重ねるごとに使える魔法の種類も、一度に使える魔力量も増えていった。鍛錬の成果が表れ始めていた。

魔法の練習もさることながら、身体を鍛えることも怠らず、少しずつ努力していったよ。走り込みや、筋力アップのトレーニングとかをしていった。数年前から、僕はおかーさんに手足に魔法で負担をかけることをお願いしたけど、「まだ小さいからダメ。」って言われちゃって、そのことはもっと大きくなってからということになったのだ。

でも、今日から身体に負担をかけることを許してくれる日。それでも、掛ける負担はまだ1キロまでっていう制約付きだけどね。

僕は朝、夜に魔法で手足に負担掛けてもらってトレーニング、日中はおかーさんと魔法とその他の学問の勉強っていうような暮らしを送った。他のみんなとちよつと違う生活習慣だけど、僕は満足してるし、不満もない。ほんとに幸せだ。

だって、魔法が楽しいから。

僕は絶対、世界最高の魔法使いになる!!それくらい出来なきゃ、ドラゴンさんに挑む資格なんてないよね。

それにしても、一体、どんなドラゴンさんたちがいるんだろう、、、早くあつて、戦ってみたいなく

僕はそんなことを夢見ながら、布団に入った。この時の僕は、思いもよらなかつた。僕の日常があんな風に壊れるだなんて。

―イツセイSIDE OUT―

— ???
SIDE —

此処は冥界のとあるところ……

「どうだ？見つかったか？」

見るからにプライドが高く、強欲そうな貴族の格好をした男は一人の側近にそう尋ねる。どうやら、何かを探しているようだ。

「はい。主様の言った通りでございます。これが調査結果です。かなりの力を有していると思われれます。」

その側近はそう答えて、調査の報告が書いてある書類を貴族の男に渡した。その書類には、10代に達しているか、いないかくらいの男の子の姿も載っていた。さらに、住む場所、家族構成、その写真、そして魔法のことまで、ありとあらゆる細かいことが掲載されていた。

「どれどれ、つぶ、ははは！やはりか。ようし、これを眷属にできればかなり上に、いや頂点にまでのし上がれるぞ！これで私の地位、名声は更にかかる！そうは思わないか？」

貴族の男は声を上げ、その書類を机に雑に叩きつける。

「おっしゃる通りでございます。しかし、人間でここまでの魔力。一歩間違えば魔王様をも超えているかと推測されるかもしれません。しかも、驚くことにまだ子供。潜在能力も素晴らしい。鍛えれば、もしかすると冥界最強になるのも決して不可能ではないと思われれます、主様。」

「ほう、それはこの俺様を超えているとでも言いたいのか？」

「失礼を承知で申し上げるならば、その通りでございます。」

「はっはっは、言うようになったではないか。」

「申し訳ございません。客観的事実なので。私も実際見たところ、そうとしか申し上げられません。」

側近はその標^{ターゲット}的をよく調査しているようだ。

「しかし、低めに見積もっても、主様と同格。残りの悪魔の駒^{イヴァイル・ピース}で足りるでしょうか？」

そう。悪魔の駒で他種族の者を転生させるとき、その転生者の実力が高ければ、高いほど駒を多く消費する。個々には価値があるのだ。

「ふむ。残っているのは兵士^{ポーン}が一つ、そして……」

「戦車、ですか……」

「これでは、悪魔に転生させることはできないかもしれない。お前は どう思う？」

「私も、主様の意見と同じです。戦車の駒の価値は兵士5分。この強さからすると、足りないでしょう。女王ならば、可能性がありました。が……」

二人は駒の価値が足りるか議論を交わす。

「女王は女でないとダメだ。」

「そのような規約ごさいませんでしょう……」

「いや、俺は認めん。女王は名の通り、女であるべきだ。」

「確かに、眷属を持っている上級、最上級悪魔の女王が男性という方は少数ですが。」

女王を男に充てるというのは些か抵抗があるのだろう。

「それに、女王はすでにいますからね。」

「ああ。俺の自慢の女王だ。会議やパーティに行った時は他の奴らは俺様に嫉妬や羨望の視線を向けよる。はっはっは、滑稽なものさ。」

「しかし、そうなりますと手が無いのでは？こうしているうちに他の悪魔に知られでもしたら、先を越されてしまいます。それは極力避けたいところです。」

「なに、慌てるな。まだ一つ、方法は残っている。」

「ミューテーション・ピース、変異の駒ですか。」

「ああ。あれさえあれば、このガキを眷属化できる。」

「それは、そうですが、どう手に入れるんです？」

「そう、そこだ。それが問題だ。」

男は顔をしかめながら、自信の戦車の駒を手取る。その瞬間、男が手にした戦車の駒が激しく発光した。

「うっ、なっなんだ!!これは!」

「ま、眩しい!」

駒はさらに光を発し、もう目を開けていられないほどの閃光を発する。男二人はあまりの眩しさに目を瞑った。

——しばらく経つと、その駒の光は徐々に弱まっていった。完全に発光が終わると、二人は目を開ける。

「くっ、さっきのは一体何だったんだ。」

「わかりません。え、あ、主様、駒を見て下さい！」

「!?こ、これは何ということだ・・・」

男はそういわれ、駒を見ると、驚嘆した。なんと、駒は赤色に変色し、形も少し変化していた。これはもはやあれ以外ありえない。

「ま、まさか、これは変異の駒!!」

「そ、そうなのですか!?!」

「ああ、間違いないだろう。大分昔ではあるが、他の悪魔が持っていた変異の駒を見せてもらったことがある。あいつのは銀色だったがな。聞いたところによれば、変異の駒は持つ者によって色などの外見が違うらしい。」

「なるほど、これが変異の駒。初めて見ました。」

「しかし、ともあれ運がいい。まさか、こんなタイミングで変化するのはな。天は俺様に味方したな。いや、天じゃないな。冥界か? まあ、そんなことはどうでもいい。」

男は座っている席を立って言う。

「くっくっく、アーっはっはっは!よし!これで今回の計画の一番の問題は消え去った!」

「そうですね、主様。」

「よし、では近々、目標のもとに訪れるとしよう。」

「畏まりました。ではその準備をしまいにします。」

「うむ。よろしい。」

「それで、主様、目標には家族もいると思われれます。抵抗された場合は?」

「その場合は殺せ、家族ともどもだ。そして転生させる。」

「了解いたしました。では、眷属の同行は?」

「そうだな、では、保険をかけて同行させる。確実に仕留めて眷属にする。そうだな、半分の7人を同行させる。」

「了解いたしました。では、伝えてまいります。」

「頼むぞ。」

「はっ。では、失礼いたしました。」

側近、もとい眷属は部屋から出ていった。

「ふっ、待っている。この俺様がその力、使ってやる。そして、冥界のスターにしてやるよ・・・クツクツク・・・」

冥界のとある最上級悪魔は着実に計画を進めていった――

――冥界SIDE OUT――

イツセーSIDE

「行つてきまーすー!」

ぼくは今日もひとけのない場所までランニング（魔法でふかをかけながら）で行つて魔法のを練習した。

だんだん出力もスピードも上がってきた。身体もきたえることも同時にやつてきて、その成果が出るのが僕の幸せだった。この調子でぼくはさいきょうの魔法使いになる!

ガサツ!

?!「だっ、誰?!」

魔法の練習をしていたら、とつぜん音がした。たぶん、生き物の動く音。ぼくが声を上げたときには、もう気配はなかった。そういえば、このごろはよくまわりに人のけはいがする。なんか、かんしされているような、、、、気のせいだといいけど。

とにかく、このことはおとーさんと、おかーさんに言っておこう。何かあつてからじゃ遅いし。

それにしても、なんだろう? いやな予感がする・・・

――イツセーSIDE OUT――

――冥界SIDE――

コンコン

「主様、私です。」

一人の男はドアをノックし、中の人に声をかける。

「入れ。」

「はい、失礼します。」

「アルヒトか、何の用だ？」

「はっ、主様、例の計画の件です。準備が整いました。後は今日偵察、監視に行かせている者がもうすぐ帰還します。そのものが戻り次第、いつでも出発できます。」

用件とは、先日話していたことのようなだ。この者たちはとりわけ有能なのだろうか。ほぼ滞りなく着々と進めていったようだった。

「ほう、もう準備ができたか。意外と早かったな。」

「恐れ入ります。」

「よろしい。ではその者が戻れば、すぐに出発する。」

「はっ、了解いたしました。失礼いたしました。」

男はそういつて部屋を後にした。

「ククツ、ようやくか。待ちわびたぞ。」

部屋に残った男は笑みをこぼした。

—冥界SIDE OUT—

—イツセー、Sマザー SIDE—

「行ってきまーす!」

「はーい、いつてらっしやい。」

イツセーは今日も鍛錬に逝った。全く、毎日するなんて、ホントに鍛錬が好きなのね。数日前、イツセーから気になることを聞いた。

—誰かに監視、されてるかもしれない—と。

イツセーは勘違いかもしれないと、付け加えていた。でも、油断できない。私はイツセーに言われるまで、気がつかなかった。ちよつと

用心しておく必要があるわね。そのことを旦那に相談し、ちよつと調査してみる、ということになり、私は旦那と一緒に外にでた。

「!？」

家から少し離れたところに着くとその瞬間、結界らしきものが張られた。そして、正面の地面に魔法陣が現れ、そこから、6、7人の悪魔が現れた。

「ツ！悪魔ね。その気配。」

忘れるはずがない。昔、幾度となく相対し、戦ってきた敵。

「その通りだ。人間の魔法使いよ。」

「此処を知っていた、てことは今まで監視していたのは貴様らだなっ!!」

旦那が声を荒げる。

「ほう、気づいていたか。」

「いつからだ？一体、いつから、俺たちをつけまわっていた？」

「なに、まあまあ最近の話だよ。」

「!?何てこと・・・イツセーの言っていたことがホントだったなんて!」

「何のようだ？」

旦那は見るからに敵視している。ま、私もだけど。

「なに。ちよつとしたようだよ。まあ、厳密には君らの息子、に用があるんだがな。」

「なんだと、貴様っ!!」

「どんな用か、は君たちが知る必要は無い。なぜなら、ここが君らの墓場だからだ。やれ。」

そう言つて眷属であろう部下に指示を出す。くっ、こっちは二人、あつちは倍の人数。やばいわね。あいつらの目的は十中八九、息子を眷属にすることだ。どこまでも、しつこいことこの上ないわね。私の子供にまで目をつけるなんて。でも、そんなこと、絶対にさせない!

「私の息子を眷属なんかにさせやしない!」

そう言つて、私は魔法陣から杖を出し、向かってくる魔力の弾を防御の魔法陣で受け止める。こっちは魔力を主体で戦う眷属2人と剣

士が一人。旦那の方は何も持っていない者が2人と剣士、魔法使い各1人ずつ。正直言つてきついわね。しかも、一人の力が高い。旦那の相手をしている近接派の悪魔はおそらく上級でも上位レベルの実力。魔法をかなり極めて今まで悪魔たちと相対したけど、今までとは比べ物にならない強さだわ。間違いないくあそこのリーダー格はこいつらより強い。これは最上級悪魔レベルかも。

出し惜しみしてる余裕はないわね。私は自信の前に魔法陣を出し、攻撃する。しかし、それを防がれ、剣士には避けられた。なんて速さなの!!?

ヒュウン

「!? ああっ!!」

そうしている間に、死角からとんでもない速さで飛んでくる魔力に反応しきれず、なんとか防御結界を張ろうとしたが間に合わず、喰らってしまった。

「ほお、今のをくらったとはいえ、威力を弱めたか。中々やるじゃないか。」

なんとか立ち上がって治癒魔法を掛けたが、まずい。あつちはまだピンピンしていて3人。王も含めて4人。旦那の方も相当消耗している。

「ふむ、しかし相当消耗しているようだがな。どちらも。ならばここで使わせてもらおう。」

男は何か隠し玉をだすようだ。一体なにが……

「アイリオン、フェリア、あれを使え。」

「了解です。主様。」

王はさっきの魔力使いに命じると、二人は結界になにか細工した。私は構わず、魔法を発動させた、筈だった。

「なっ、魔法が発動しない?」

何故か、魔法が発動しなかった。魔力が尽きたわけでもない。

「はっはっは、驚いたかね? 二人はね、相手の魔法を無効化させる結界を創れるのだよ。ま、デメリットも多いがね。」

!? 私はそれをきいた瞬間冷静さを失った。魔法を封じられた今、私

に勝ち目ない。

「君たち魔法使いの無力化に為の物さ。ま、こんなに使わせたのはキミらが初めてさ。誇っていい。さあ、行け!!」

その声を聴いた魔法使いは目くらましに煙を発生させた。視界を奪われ、私は周囲を見回した。

「くっ、見えな・・・きゃああああああ」

しかし、遅かった。

もう一人の魔法使いに電撃を浴びせられ、拘束魔法で束縛された。

「!? マーリン!! 今行く!」

「遅い!!」 「させると思うか?」

「ぐああああああ!!」

私同様、旦那も切られる。

「ふむ、終わったか。」

「クソツ、貴様ら・・・」

私は出血が酷く、意識を必死に保ち、声を上げた。

「フハハハハ! 無様だな。何、もうすぐに死ぬさ。」

眷属は王のもとに集まる。王は上機嫌で大声で笑った。

「息子とはもうお別れだがな。何またあっちで会えるさ。一万年後

くらいにな、フハハハハハハ!」

眷属も主が笑った後に続いて笑いだす。私は余りの悔しさに歯を

食いしばる。すると、眷属の一人がリーダー格の悪魔に尋ねた。

「あの、主様、ちよつといいですか?」

「ん?なんだ。」

「あの女、好きにしちゃっていいですか?」

「!? 私はその言葉を聞いた瞬間凄まじい嫌悪感を抱いた。」

「貴様!・・・マーリンに手だしてみろ、殺して、ゴボツ」

「あなた!!」

旦那は血の塊を吐く。悪魔どもはそんなことも気にせず、勝手に話を進める。

「ふむ、確かに魔法使いの女のほうは中々の上物だな。よし、後で俺

にも回せよ?」

「ありがとうございます!!」

その男は上機嫌で喜ぶ。

「そっちの男の方はどうします?」

「先に殺っておけ。」

「はい。」「へへへ、りよーかい。」

「そんな・・・やめて!おねがい!」

「はっはっは、おまえはそこで見ておけよ。どうせこの後俺たちに犯されんだからよお!!」

「そんな・・・やめっ「グサツ!」イヤアアアアアアアア!!」

剣士の悪魔は容赦なく心臓に剣を突き刺す。そして、間もなく絶命した。私の視界が歪む。

「よおし、これでたっぷり楽しめるな。おい!アイリーン、フェリア先帰ってる!俺たちはやることがあっからよ!」

「スポルコ、すでに二人はいませんよ。」

「ええ。二人とも、ゴミを見るような表情をしながら帰っていきましたよ。」

「ケツ、まあいいや。」

男はそういつてこつちを見る。汚らわしい欲望に染まった視線をこちらに向けてくる。それだけで吐き気がしそうだった。

「んじゃ、始めるとするか」

「い、いや・・・来ないで・・・」

私はだんだんと近づいてくる男たちが恐ろしかった。何も出来ない無力な私は後ずさった。

「逃げんたって」

「これからすっげえ気持ちよくしてやっからよお」
「ビリビリビリッ!!!」

私の服を二人がかりで破く。

「おお!!」

「すっげえ!!」

「これはいい・・・今まで抱いた女の中で最も美しい」

「ウツ、ぐ……」

「さて、じゃあ始めるぞ」

最も強かった悪魔が前に出る。

「ククク……せいぜい、壊れないでくれよ」

そのあと、私の意識はどこかに行ってしまった

— イッセー、スマザー SIDE OUT —

No, IV 　　く覚醒と偽の力く

—イツセー SIDE—

・・・僕は急いでいた。

とにかく、自分が出せる全速力で――

今日も鍛錬の為に朝から家を出て、家からある程度離れたいつもの鍛錬場所で魔法の練習をひたすら続けていた。最近になって、僕らをつけていたり、監視している奴がいるかもしれないと両親に報告しておいた。もちろん、確証はないし、僕だって自分の勘違いであってほしいと願っていた。

しかし、現実はそのはいかなかったのだ。

鍛錬をし始めてから数時間たったとき、僕はそれを感じ取った。ここからそう遠くないところでかなり強い力のオーラと波動が1人とそれよりも弱いが中々の強い力が7。

――それによく知った2人の存在。

間違いない！おとーさんとおかーさんが何者かに襲われている!! きつとここ最近つけてたやつだ！嫌な予感的中した。やっぱり、勘違いじゃなかった。

僕は落胆したが、そうは言ってられない。すぐに僕はその場へ、両親の元へと急行した。お願い！間に合ってくれ！

そう心の中で叫びながら・・・

—イツセー SIDE OUT—

—悪魔 SIDE—

「ふう、始末完了つと。」

「だな。いやしかし、良い体験だった。」

「全くだな。」

男の悪魔達はやることやった後、始末を終えたところだった。そこ

に力の一段と強い悪魔が現れ、声をかける。

「アーマルク、始末は終わったか？」

男はただずつと立っていた男に問いかける。

「はい、この通りです。もう息はしていないでしょう。」

「よし、ご苦労。」

「しかし、良ろしいのですか？このまま放置しておいて、そのターゲットを待つというの？」

「なに、構わんさ。両親がいないとなれば、探しに来るだろう。先ほど、ターゲットの気配がした。こちらにもう向かってきている。ここで待ち伏せておけばいいだろう。」

「なるほど。確かにそうすれば、我々がわざわざ探さなくても向こうから来てくれますからね。」

男性悪魔はそういつて納得する。

「よし、ではターゲットがここに来たら、作戦を開始する。それまでは各自待機だ。」

「了解です。」「分かりました。」

主とみられる悪魔は指示を出す。

「アイリーン、フェリア、居るか？」

悪魔は指示を出すと同時に女悪魔を呼ぶ。

「はい、主様。」「お呼びでしょうか？」

すると、数秒と経たないうちに魔法陣から赤髪、金髪の二人の女性悪魔が現れる。

「お前たちは結界を張れ。ターゲットが近づいたら、頃合いを見て発動させろ。それと魔法無効化結界は行けるか？」

「はい、可能です。先ほどお時間がありましたので、魔力は回復しましたので。」

「よし。では結界を張ったあと、戦闘になる。その時、こちらで時間を稼ぐ。その時に発動させよ。」

「了解です。」「分かりました。」

「頼むぞ。お前たちが今回の作戦の成功のカギを握っているんだからな。魔法使いの魔法を使えさせなくすることが出来ればこちらが

圧倒的に有利になるからな。」

「はい、お任せください、主様。」

「このアイリーン、主様の為に全力を尽くします。」

「よし。では作戦開始だ！」

「「「「「はっ。「「「「」」」」」」」

「クッククック、いよいよだな。これで俺も最上級悪魔の中でもさらに上へ、レーティングゲームの覇者への道も近づくぞ。クッククック、アーツハツハツハ!!」

作戦は成功すると確信したのか、男は顔を狂喜に染め、高笑いをし、森にはその男の笑い声が木霊した、、

—悪魔SIDE OUT—

—イツセーSIDE—

——5分くらいで僕は力を感じ取った場所の近くに着了た。

しかし、二人の、両親の気配が、力が全く感じられなかった。僕はますます不安に駆られ、周辺をくまなく搜索した。両親を見つけたとき、最悪の光景が目にも映るかもしれない。そんなことが頭に浮かぶ。しかし僕は、両親が、二人が生きていることを信じて探し続けた。

木や蔦をかぎ分け、進んでいくとちよつとした開けたところに出た。今まで鬱陶しい木々からようやく解放されたと思つたが、そこには僕にとつて悪夢、絶対に見たくない最悪の光景が広がっていた。そこには、2人の人が倒れていた。血まみれの姿で。

「おとーさん?おかーさん?.....」

自然と声が出た。それはもう弱々しい、消えそうな声。そして僕は、そばに近寄つた。

「そんな.....どうして.....おとーさん、おかーさん.....」
見間違えようもなかった。自分の両親だった。血まみれで、鮮血は周りにも飛び散っている。二人とも、心臓を貫かれていた。しかも、

おかーさんに至っては裸の状態で。さらに何か白い白濁液みたいなものが全身についていた、

「酷い・・・クソツ、一体誰が・・・誰がこんなことを・・・なんの為に・・・」

僕はいつも温かく帰りを待つてくれていた両親の変わり果てた姿にショックを受けざるを得なかった。気づいたら僕は泣いていた。涙が地面に滴り落ちる。それと同時に地面に膝をついた。

「グスツ、ヒッグ・・・おとーさん、おかーさん・・・」

余りのショック、そして絶望に頭が真っ白になり、手を地面について涙を流す。それしか今の僕には出来なかった。

「アツハハハハハ！ いい気味だなあ！ おい！」

僕が哀しみのあまり泣いていると、突然後ろの方から僕を嘲笑う声が聞こえた。

でも僕は後ろを振り返る余裕はなかった。

「おいおいおい！ シカトかよ！、ちよとはリアクリオンを返してくれよ」

さっきの台詞をほざいた奴は更に煽ってくる。だが、相手にしない。

「おい、スポルコ、少し慎め。」

「分かりましたよ、主。」

今度は少しクールな声が聞こえ、先ほどの男を黙らせた。僕はようやく立ち上がり、後ろを振り返った。そこには、男女合わせて、8人いた。

「、まるで、僕を待っていたかのように。」

「よお、ようやく来たか。君を待っていたんだよ。」

やはり、僕を待っていた。まあ、この人たちは隠れている気は無かったようだけど。

僕は口を開く。

「ねえ、お前たち、誰？」

「貴様っ、口の利き方に気を付けろ！ 誰に向かってお前と言ってやる！」

「まあ、落ち着け、クライザー。」

「しかし！」

「クライザー、主もこうおっしやっているのです。落ち着きなさい。」

「はあ、分かったよ。」

一人の剣士が男を諫めると、リーダー格の奴が口を開く。

「さて、まずは先ほどの質問に答えるでしょう。俺の名はアヴァデーダ、アヴァデーダ・マモン。最上級悪魔だ！」

そう名乗った男は先ほどの口調とは打って変わって激しい口調でそういう。

「悪魔……悪魔^{デーモン}か……それで何故悪魔たちがここに来たの？」

それと、マモンといったか？確か、ソロモンの72柱の悪魔の名にマモンという名は無かったはず……何者だ？だが今は名などどうでもよかった。ただ僕は真相を知りたかった。

「それはだなあガキ、おめえをよ、俺の眷属にするためさ!!」

「眷属……だって？この僕を？」

殺すつもりが無いらしい。その代わり眷属という言葉が出てきた。僕は復唱した。

「ああ！そのとおり。」

「何故、僕が？」

「ああ、お前は俺から見てもとんでもない潜在能力を持っているんだ。俺はそのちからを使いたいのだ。その力を使って俺は最上級悪魔の中でもさらに上を目指すのさ。最上級悪魔でも強い弱いはあるからな。だとすれば上にのし上がった方がいいだろう？勿論、他にも目的はある。最近流行りつつあるレーティングゲームもな。それで活躍出来ればさらに評価を上げられるってわけだ。そーいうわけで、将来有望なてめえに目を付けたってわけよ!!」

男はご機嫌で話した。全て自分の為だった。それには嫌悪感を抱いた。

「それって、全て、自分の為じゃないか!!」

僕はきつく言った。

「自分の為だあ？当然じゃねーか!!自分の為に力を使って、何が悪い！力を求めて何が悪い!!力をとは自分の為につかうもんだろ！俺たちや、古来からそうやってきてんだよ！」

僕の返した言葉にさも当然みたいに戻してくる。そして僕は一番の目的について話す。

「それで、一応確認なんだけど、おとーさんとおかーさんを殺したのは、お前たちなのか？悪魔？」

僕は殺気を放ちながら訪ねる。

「ああ、そうさ。」

「何故だ？何故、二人を狙った!!?!」

「ふん。おめえを眷属にすると言ったら、抵抗してきたからだ。抵抗されたら、邪魔だろう？鬱陶しいから排除させてもらった。」

「てめえ、汚いぞ！僕が狙いなら僕だけを狙え!!」

「ハッ、欲しいものはどんな手段を使っても手に入れるってのが俺のやり方なんだよ！俺はマモン。俺は強欲のマモンだからなあ!!」

「貴様、己の欲の為に……おとーさんとおかーさんを……」
僕はあまりの怒りと憎悪に握りこぶしをつくる。爪が食い込んで血が出ていることにすら、僕は気が付かなかった。痛みを全く感じなかった。おそらく、痛みなんかより、目の前の悪魔への憎悪が勝っているからだろう。

「心配すんなよ、また会えるさ。一万年後くらいになあ！」

男はそういつて合図を出し、他の悪魔たちを戦闘態勢にして前に立たせた。

「俺の傲慢の眷属たちだ。俺が結構長い時間かけて選りすぐって集めたんだぜえ？冥界の眷属悪魔の中でも、かなり実力が高いともいわれてるんだ。この俺が、実力を見て選んだからな。行け！お前たち!!これから新しい後輩となるやつに、先輩の見本を見せてやれ!!」

「「「「はっ!!」」」」」

その眷属たちはその声と共に動き出した。

「おら、行くぜえ！」

何も持っていない悪魔が突撃してきた。

ガッ

僕はその悪魔の拳を受け止める。続けてくる連続攻撃も受け止め切って、カウンターを一発食らわす。僕のカウンターを食らってよろめく男と入れ替わりで新手の悪魔が攻撃をしてくる。僕は焦ることなく、冷静に動きを見極める。そして悪魔の攻撃をいなし、足を払って体勢を悪くさせ、蹴りを入れる。

「グッ!?こいつ、中々やるな?!」

「ほう、魔法使いでここまで体術ができるとはな。大したものだ。素晴らしいの一言だ。自分の肉体も鍛えている、ますます眷属に欲しいものだな。」

リーダー格の悪魔はそう素直に称賛した。大方、魔術師や魔法使いは接近戦闘が点でダメダメだと思っていたのだろう。

「これは、おとーさんの教えの賜物だ!!」

「ああ、なるほどな。先ほど殺した男。お前の父親だったか。確かに、武術も中々に秀でていたぞ。だが、甘いな。こちらにはまだ3人、剣士が2人いるぞ?」

「?!グアッ!」

その瞬間、後ろに既に回られていて、蹴りを喰らってしまった。受け身を取ってすぐに体制を立て直す。

「ほう、受け身まで。魔術師でここまで体が動くとは。どおりで主様が欲しがるわけだ。」

声の主は剣を持ってすぐ目の前に来ていた。そして剣で攻撃を次から次へとしてくる。僕はその太刀筋を何とかギリギリで読み、躲す。そして魔法で距離を取りながら反撃する。

「グッ?!」

剣士は魔法を喰らって10メートルくらい吹っ飛ぶ。

「ハッハッハ、良いぞ。ここまでやるとはな!ハルマートの剣を躲し、反撃までするか!やはり、ここまで来た価値があったってもんだな!!」

戦闘の様子を伺ってた男はそういう。

「ええ、本当です。しかもかなりの威力。効きましたよ。」

さつきぶつ飛ばした剣士はよろよろとしながら歩いてきた。?!もう復活したのか!! まずいな、いくらなんでも多勢に無勢だ。

「よし、あれを使え! アイリーン、フェリア!」

「はい!」 「行きます!」

男は魔法陣を準備した女性二人に指示をだす。何をする気なんだ

?!

「魔法無効化結界」

すると、僕らを囲った結界に付与をし始める。

「よし、行け!」

「てりやあ!!」 「はっ!」

二人の悪魔が距離を詰めて殴りかかる。僕は魔法で迎撃しようとしたが、魔法が発動しなかった。

「!? なっ!? 魔法が!」

僕は思わず声に出した。

「残念だったな! この結界にいる間は魔法は使えねえぜっ!」

!? そうか、さつきのはそれだったのか

「グハッ!」

「よっしやあ! アーマルク、セルドルフ、囲め!」

「ええ、分かっていますよ!」

「任せな!」

からくり気づいたとき、僕は蹴りを喰らい、結界の壁に激突。そこから追撃を喰らい、袋叩きにされ、身体が動いてくれなかった。

「ぶっ、終わったか。」

戦いを眷属にさせた男は悠長に歩いて近寄ってきた。

「そーいえば、お前の親もこの結界で倒したな。」

おかーさんも、おとーさんもこれにやられたのか。魔法をふうじられたちやあな、...

「そのあと、お前の母親を好きにさせてもらったぜ!」

「!」

僕はその言葉を聞いた瞬間、驚愕した。

そしてその男の方に顔を向けた。

「何があつたか知りたそうって顔だな。まあいいや。サイコーに良かったぞ？アツハハハハハハ!!」

男は醜悪な顔をしながらゲラゲラと高笑いする。

「散々弄んだあと、罫り殺しにしたけどな!!」

僕は絶句した。そして、自分が悪魔に狙われたせいで、二人にそのような目に合わせたことを悔やんだ。

「おとーさんとおかーさんは……」

「あ？何だつて？」

「おとーさんとおかーさんはな……悪魔や墮天使たちに散々な目に合わされたって聞いた。僕が、生まれる前から……」

そう、これは偶然、おとーさんとおかーさんが二人で話しているところを聞いてしまった話だ。

「ほう、それで？」

「家族も、友人も奪われたって。」

「それは、それはホントに災難だなあ。」

「ホントは復讐したかったはずだったんだ。でも、二人は自分たちのことよりも僕を優先したんだ。僕を育ててくれた。それなのに、それなのに……お前たちは!」

「はっ！関係ないな！俺から言わせればな……ざまあねーなあ!!ハツハツハツハ！いい気味だ!!」

「クツ……チクシヨウ……」

悪魔はその境遇を聞いても何ともないようだ。むしろ、ざまあないなど嘲笑してくる。僕は悪魔をにらみつけた。

「なに、そう怒った顔すんなよ。これからは、俺の眷属だ。もう、悪魔に狙われることはないだろう？よかったじゃねえか。それによ、出世して、地位を上げて、力をつけることができれば、お前だつて好きに生きていけるんだぜ？金も、女も、地位も、好きなだけ手に入る。好き勝手にできるんだ。最上級悪魔になればなおさらだ。しかも、お前にはそれになれる才能がある。資格がある。な？悪かねえだろ？」

男はさつきとは打って変わって優し気な顔を向けた。しかし、僕には嫌悪感しか感じなかった。ポケットから駒みたいなのを取り出す。

「ま、全く動けないお前は何も抵抗できないな。大人しく眷属になれや。ククク、これでやつと手に入るぞ。」

男は何か唱え始めた。僕には何を言っているのか聞こえない。怒りでどうかなりそうだった。

——そして、怒りが頂点に達したとき、僕は覚醒した。——

ドウ!!!

「何だ?!これは?!グハアツ!!」

「主様!!」

僕の体から、今までとは比較にならない魔力があふれ出た。量、密度、質それは今までとは次元が違う。僕に近づいて何かしようとした悪魔はぶっ飛んで反対側の結界の壁に激突した。

「ユルサナイ……ボクハ、ゼツタイにオマエタチヲ、ユルサナイ。ユルサナイ!!!」

ゴゴゴゴゴゴ

さらにオーラは増す。まだまだ上がる。その上がりようは天井知らずのようだった。

そして、左手に力を込めると、赤い籠手が僕の腕に出現した。

「なっ!?そ、それは!?!」

悪魔の一人が驚きの表情を見せる。

「あれは、セイクリッド・ギア神器か?!しかもあれは!赤龍帝の籠手!!!」

「バカな!?!」ロンギヌス神滅具……

「どうなっている?!調査では、神器の気配はなかったはずだ!」

悪魔たちの動揺が普通ではなかった。無意識に発現させたこれほとんどでもないものだと思感で悟った。へえ、そうか赤龍帝の籠手っていうんだ。伊達に長く生きていない悪魔がそう呼んでいたの、間違いないだろう。それに、龍の力なのか。僕はそれを自覚すると、突然セイクリッド・ギア神器から声が聞こえてきた。

〈コロセ〉〈コロセ〉〈ニクキヤツヲヲコロセ〉

ささやくような声。僕に訴えかけてくるように。

(殺す?)

〈ソウダ〉〈コロセ〉〈コロセ〉

(あの、クソ悪魔どもを?どうやって・・・)

〈【覇 龍】ダ〉〈【覇 龍】〉〈【覇 龍】ヲツカウノダ!〉

〈サア〉〈ハヤクコロセ〉〈ホロボセ〉

そうだね、殺してやる。おとーさんとおかーさんを殺したやつを。

僕はその声達に耳を傾ける。そして尋ねた。

(ねえ、その【覇 龍】を使えばさ、悪魔どもを殺せるの?)

〈ハハハ、グモンダナ〉〈トウゼンダ〉〈ソンナコト、イウマデモナイナ〉

僕はその答えを聞いて安心した。よし、これであいつらを殺せる。

僕はそれを実行しようと、その声たちに手順を聞いた。

(ねえ、その【覇 龍】ってさ、どうやるの?)

〈ジユモンヲトナエロ〉〈サア、トナエロ〉〈ワレラニツツケ〉

(呪文?分かった。やるよ、【覇 龍】を。)

僕はその声に言われた通りにする。そうすれば、クソ悪魔どもをこの地上から消せると信じたから。僕は兎に角、悪魔を殺すことで頭がいっぱいだった。

〈まっつて!お願い!その力は使っちゃだめ!それは危険な力なの!〉

〈そうだぞ!坊主!力に飲まれば、その先にあるのは破滅、それだけだ!〉

すると急に声がした。今度の声は意思がはっきりとある声だった。さっきのは片言で虚ろな声だったのに。若い男と女の声だ。

〈そうよ!お願い、そいつらの声に耳を傾けないで!〉〈ダメマツテイロ!〉〈ジャマヲスルナ!〉〈キャッ!〉

〈!エルシャ!〉

さっきの片言の声を発していた者が女の人の声を遮る。ありがとう。これで【覇 龍】を使うことができるよ。

〈サア〉〈サア〉〈イクノダ〉〈トナエルノダ〉

僕はその声に誘われ、頭に流れてくる呪文を唱える。

『我、目覚めるは——』

—イツセーSIDE OUT—

—ドライブグSIDE—

私は今回の宿主から外の一連の出来事を見ていた。悪魔たちが宿主を袋叩きにするところも。まだ十にもなっていない子供に大の大人が寄つてたかつて……私はいままで数十人の宿主を見てきた。理不尽に殺された者、逆に殺した者、力に飲まれた者、破滅の道を辿つた者、力に飲まれずに生きた者様々だ。

でも、宿主に対してこれといって特に感情を抱いたことは無かった。ある二人を除いて。でも、今回の宿主は違つた。悪魔に襲われていることに心を痛めた。それと同時に宿主に多人数で襲い掛かつている傲慢な悪魔どもを嫌悪し、恨んだ。それは私の過去にも関係していないと言えばウソになるが。自分でも何故かわからない。ここまですべてに、人間にここまで感情を抱いたことは無かった。それゆえになにか不思議な気持だつた。

そして、私はこんなことを思った。肉体があれば、肉体がありさえすれば、今すぐあの悪魔どもを焼き殺せるのに、滅ぼせるのに。自分の無力さを恨んだのは初めてだつた。しかし、神器に封印されている身。どうすることもできずただ宿主が痛めつけられているのを見ることしかできなかつた。

それに、宿主はまだ齡一桁。いくら神をも殺せる超常の力、神滅具、赤龍帝の籠手を持つていても、発現させ、それを使役することが出来なければいくら神^{ロンギヌス}滅具といえども、なんの価値もない。

そう思っている、予想だにしないことが起きた。突然、神器に魔力が流れ込んできた。そして宿主は神器を、赤龍帝の籠手を腕に発現させていた。私はそれに驚きを隠せなかつた。この年で神器を発現させるなんて。しかも左手に力を込めただけで。

ともあれ、これで反撃の機会ができた。微かな反撃の希望が見え、喜んでいると、次は予想外の事態に発展した。なんと、宿主は神器を発現させただけでなく、歴代所有者達と意思の疎通が出来るよう

だった。禁手にもなっていないのに……

勿論、こんなことは前代未聞だった。そして、その歴代所有者は今代を【覇 龍】へ誘おうとしている。私はこの凄まじい魔力があるとはいえ、危険なことには変わりない覇龍を使わせるわけにはいかない。子供の体で覇龍を使えば、どうなるかわからない。

「エルシヤ、ベルガード！お願い！歴代達を止めてきて！」

〈分かったわ、ドライグ。〉〈へりよーかいだ〉

私は咄嗟に歴代の中でも意識が完全に覚醒している2人に頼む。この2人は力に飲まれず、怨念も無い。この二人に掛けたのだ。しかし、私の目論見はすぐに崩れる。

〈ダメ、ドライグ。私たちだけではあの怨念たちを抑えられない！〉

「そう、やっぱりダメなのね……」

〈ああ。しかも、今代の復讐心もあって、さらにその怨念の力も高まっているようだ。〉

（何てこと……このままじゃ、また繰り返してしまう。どうしたら……）

この時点でほぼ詰んでしまっていた。あの怨念たちは凄まじい。この私でさえ、近づくことは避けているほどだ。私にはどうすることも出来なかった。私のことはまだ認識できないだろうし。

『——我、目覚めるは——』

〈始まったよ〉〈始まったね〉〈始まってしまっうね〉

〈！始まったか！〉〈こんなになん早くに覇龍を……〉

どうこうしているうちに宿主は呪文を唱え始めていた。

『——覇の理を神より奪いし二天龍なり——』

〈いつだって、そうでした〉〈そうだ〉〈そうじゃな、いつだってそうじゃったよ〉

『——無限を噛い、夢幻を憂う——』

〈世界が求めるのは——〉〈世界が否定するのは——〉〈世界が肯定するのは——〉

『——我、赤き龍の霸王と成りて——』

〈いつだって、力でした〉〈いつだって、愛でした〉〈いつだって、憎

しみでした」

《お前たちは、何度でも、破滅を選択するのだなっ!!》

禍々しい凄まじいオーラを放ち、どんどんその姿を変えていく。

「ック、これでまた、繰り返されるのかよ!」

「「「「「「——汝を紅蓮の煉獄に沈めよう——」」」」」」

また、繰り返されてしまう。そう思っていると、奇跡とも言えることが起きた。予想もしない存在に出会うなんて、思ってもみなかった。

『Juggernaut Drive「悪いが、その力を、認めるわけにはいかないな」!』

キーン—— ドウウウウウン!!

Juggernaut Driveと言う前に、ある声が聞こえた。その瞬間、凄まじい閃光が目の前を襲う。あれだけ禍々しく、聞いているだけで精神が可笑しくなるような怨念たちがもの見事に簡単に消し飛ばされ、歴代たちの不完全な意識は全て消し飛ばされた。歴代で残っているのはエルシャとベルザードのみだった。一体何なの?これは……

「何だ!!さっきの声は!」

「嘘……あの凄まじい怨念をあんな簡単に……」

残された二人は驚きを隠せていない。私ですら、思考が停止していた。覇龍は強制的に解除させられたようだ。

「誰なの?!姿を現して!」

「私だ。」

「!?!」 「!?!」 「!?!」

私達の後ろから急に声が聞こえた。後ろを振り返ると、そこには、

とんでもなく大きな、真っ黒い龍がいた。

「な?!……これは……」 「!?!……」

私たちはあっけにと取られて見上げていた。その真っ黒い龍を。この伝わってくるオーラとプレッシャーは尋常ではない。まだ私が現役、肉体があったころにもこのレベルのものは感じたことは無かつ

た。そして、実力は私ですら到底、底が知れなかった。あの不動の存在をも超えるこの波動。私では足元にすら及ばないであろう。恐怖すら感じた。疑った。こんな、このような存在がいたのかと。そして私は近いところにいながら、全くその存在に気付かなかったことを。

「あ、貴方は？一体……」

私はどうにか気を保ちながらその存在に尋ねた。

「私は見ての通り、そなたと同じ存在。ドラゴン龍だ。」

その龍は見た目に反してとても礼儀正しい口調だった。声は……おそらく女性寄りの声音だと思うが、正直見分けはつかない。

「私の名は、『ジル・ニトラ』だ。以後、お見知りおきを、ウエルシュ・ドラゴン赤龍帝ア・ドライグ・ゴツホよ。」

その龍はジル・ニトラと言った。私はそのような名は全く聞いたことが無かった。もともと、あの不動の存在すら凌駕するのなら、知られていてもおかしくない。しかし、このような存在は私ですら知りもなかった。対して、その龍は私のことは知っているようだ。私が思考を巡らせていると、その龍は私の思考を読んだかのように話す。

「赤龍帝、ア・ドライグ・ゴツホよ、そなたが私のことを知らないのも無理はない。わたしのことを知る者は、この世界では、グレートレッドしか知らないのだから。」

「!?グレートレッドのみなの!?なぜ、あいつだけが……それと、この世界では、って……」

「とにかくだ、自己紹介は事が終わった後にしよう。ア・ドライグ・ゴツホ。」

「ええ、そうしましょう。」

龍は冷静に、外で起きていることを言っているのだろう。とにかく、気になることは山ほどあるけど、そちらに気をまわした。

「二つだけ、聞いてもいい?」

「手短かに頼むぞ。」

「覇 龍を解除したのは、なぜ?」

私は一番聞きたいことを聞いた。

「あれか。そのことだが、あとで答えよう。取りあえず、我らの宿主

をここに呼ぶぞ。その質問には宿主も交えて答える。」

「分かったわ。」

私はその答えに納得して、宿主が来るのを待つ。

「来たぞ。」

その龍が言うと、私たちの前に、小さな男の子がいた。その子を覆っていた怨念はきれいに取り払われ、正気に戻っていた。

「んん……ここは？」

少年は気を取り戻したようだ。

「我を宿す人間の子よ、ここは精神世界だ。そなたのな。」

その龍は少年に語り掛ける。

「!?龍……?それに二体もいる……もしかして、僕の中に宿っていた？」

「ほう、気が付いていたのか?それとも、頭の回転が速いのか。」

私は驚きを隠せなかった。急に私たちを目の前にして、こんな冷静でいられるなんて。普通だったら、パニックに陥るはずだ。しかし、この少年は恐れることなく、真つすぐにこちらを見ている。それになぜか嬉しそうだ。

「ううん。知らなかったよ。あなたが僕の中にいたことは。でも、僕の精神世界にいるのなら、僕に宿ってたってことだよね。」

少年は動じることなく、質問に答える。

「そういうことだ。つふ、頭がキれるな。」

「ありがとう。あ、自己紹介がまだだったね。僕、イツセー。イツセーって呼んでよー!」

「そうか、では、イツセーと呼ばせてもらうぞ。私の名は、ジル・ニトラ。好きに呼べばいい。」

「そっか、じゃあ……ニトラってよんでいい?」

「ああ。」

「よろしくね!!ニトラー!」

「ああ、こちらこそ、よろしく頼むぞ。イツセー」

私を片隅に、すぐに仲良くなる二人。私はむっとしながらも、宿主に話そうとする。

「そつちにいる、綺麗な赤い龍ドラゴンさんは？名前教えて欲しいな!!」

少年は私の存在を忘れることなく、名を聞いてくれた。私はそれだけで何故か嬉しくなった。綺麗ななんて言われたことなんて、過去一度たりとも無かった。ある一体の龍を除いては。

「私は、ドライグ。あなたの持っている神器、赤龍帝の籠手に封印されている、龍よ。よろしくね、宿主さん。その……私もイツセーって呼んでいい？」

私は恐る恐る聞いたけど、宿主は笑顔で答える。

「うん！もちろんだよ!!僕も、ドライグって呼んでもいい？」

「ええ！ぜひお願い！」

私も、名で呼ぶことが許されてほっとした。

「さて、その辺でいいか？」

名を知ったところで、その龍は訪ねて来る。

「兎に角、詳しいことは全てを片付けてからにしよう、二人とも。」
先ほどの嬉しさに浮かれているところをどやされる。そうね、今はそんなことしてる時じゃないわね。

「さて、イツセーよ。先ほど、お前が使おうとしていた力、覇龍だが、強制的に解除させてもらった。」

そして、その龍は早速本題に入る。

「そうだった、僕、急に声が聞こえてきて、何かを唱えようとしてたんだ。」

イツセーは鮮明に覚えているようだった。なんて精神してるの……
「覚えていたか。そうだ。イツセー、貴方はあの危険な力を使おうとしていたのだ。正直、あの力は忌々しい。確かにイツセーのその魔力を使えば制御できなくもないだろう。だが、危険には変わりない。それに、個人的なことになってしまいが、私的にあの力は偽物もいところだ。だから、強制解除させてもらった。これも、詳しいことは後にしよう。」

その龍は覇龍のことを完璧に知っていた。禍々しいことも。でも、偽物というのはいまいち引つかかった。

「取りあえず、あの力はダメだ。」

「そっか、僕は力に飲まれるところだったんだ。」
イツセーは今の話から理解できているようだ。ホントに、頭がきれいわね。

「そうだ。力に飲まれれば、その先には破滅しかない。」

「ありがとう、ニトラ、僕を救ってくれて。」

イツセーは素直に礼を言う。そして、話を切りだした。

「礼には及ばないさ。さてそれを踏まえてだ、イツセー。お前は外にいる三下どもをどうしたい?」

— ドライグSIDE OUT —

t o b e c o u n t i n e

NO, V 真なる覚醒

—イツセーSIDE—

「さて、それを踏まえてだ、イツセーよ。お前は外にいる三下どもをどうしたい—」

やあ、僕はイツセー。

おとーさんとおかーさんを殺され、自分も袋叩きに遭い、僕はクソ悪魔どもの眷属にされようとしていた。でも、その時、僕の中にある力が目覚めた。ドラゴンのちからに。そして、聞こえてくる声に誘われ、力に飲まれようとしていた。

しかし、突然気高く、透き通った声が僕の心に届いた。そして、その龍と精神世界で遭遇した。聞けば、力に飲まれるところを助けて貰った。その龍には感謝してもしきれなかった。僕の世界にはその龍のほかに、綺麗で美しい赤き龍にも出会った。あれだけ夢見たドラゴンが、龍が今僕の目の前にいる。それも二体。それだけで、僕は嬉しかった。

そして僕はその龍に、ニトラに聞かれた。「どうしたいか?」って。つまり、僕たちを襲った悪魔どもをどうしたいかってことだ。僕はニトラに隠すことなく本心を告げる。

「許せないよ、絶対に。僕のおとーさんとおかーさんを奪った。あまつさえ、僕を悪魔に変えようとしたんだ、殺してやりたい。」

ニトラの問いに嘘偽りなく答える。するとニトラはこう返してくる。

「復讐か?それもいいだろう。だがイツセー、お前は復讐のことでか考えず、結局力に飲まれる選択をしたんだ。今ここにいる二人の間たちの忠告を聴かずに。復讐の為に力を、求め、飲まれるのか?そんなことをしても結局は自身で身を亡ぼすことになるのだぞ?」

ニトラは核心に迫る質問をした。僕を試しているんだろう。ああ、そうだ。僕は一度過ちを犯したんだ。両親だって、何度も言っていたじゃないか。復讐だけを考えすぎるなって。

そこで僕は悟った。僕はまだまだ、未熟だったんだな。僕は両親の

教えを結局実戦で生かせなかった。それを思い改め、ニトラの問い、いや、試練に応える。

「そうだ、僕は一度力に飲まれるという、間違った選択をしてしまった。ニトラが居なかつたら、僕は身を滅ぼしていた。でも……でもっ！ぼくは両親を殺したあいっらがっ！悪魔が憎い！このままじゃあ、僕はその憎むべき悪魔にされてしまう！だから……」

僕は必死に頭の中で言葉をつなげて吐き出した。

「だから？」

「だから……僕に力をかして！貸してください！」

僕はニトラに頭を下げながら言う。

「ほう。」

「僕一人じゃ、できない。ひとりじゃ、力に飲まれる。でも、二人がいてくれたら、飲まれずに正しく使える気がするんだ！」

「もうあんな力に、危険な力に飲まれて身を滅ぼしたくない！それに、あんな奴を今ここで討たなきゃ、また、僕と同じ不幸な目に遭う人が出てきちゃう！」

僕は必死に言葉をつなげ続ける。

「だからお願い!!お願いします！力を貸して！僕に、戦い方を教えてください！」

僕は考えられること全てを話した。ニトラにこれが届くだろうか……断られたら、どうしよう。心配になったが、それは杞憂になつた。

「つふ、良い答えだ、イツセー。その言葉を私は待っていたのだぞ。合格だ、イツセー、お前は我が力を与えるに相応しい男だ。これで、あのようなことはもう起きまい。」

ニトラは嬉しそうな表情をしながら答えてくれた。やった、僕の願いが通じたんだ！

「！ありがとうございます！ニトラ!!」

『私もよー！イツセー。私も、貴方に力を貸すし、戦い方も、神器の使い方も教えてあげるわ!!』

ニトラだけでなく、ドライグもそう言ってくれた。

「ありがとう!! ドライグっ！」

「ふふっ、当然よ。イツセー、貴方は今代の赤龍帝なのだから。」
嬉しい。ドライグは僕を認めてくれたようだ。

「そうだな、私も個人的にあの三下の悪魔どもは気に入らなかつたのでな。さあ、あの悪魔どもを滅ぼそう。」

「そうね、私も、あの悪魔どもが許せないわ。絶対に。イツセーのお父様とお母様の敵をとりましょう。」

〈そうねー〉〈目の前の敵を倒す！〉

ドライグも、そして、二人と一緒にいたおねーさんとおにーさんも同調してくれた。

「おねーさんと、おにーさんは？」

名前を知りたかつたから二人に聞いてみた。

〈私はエルシャ、エルシャ・エスタロッサ。よろしくね！イツセー君♪

〈俺はベルザード、ベルザード・ディーベリウスだ。前赤龍帝だ。よろしくな、イツセー！〉

〈あ、ちなみに私はあなたの二代前の赤龍帝よ♪〉

金髪の綺麗な20代くらいのおねーさんはエルシャさん。茶髪でダンディーな髭を少し生やしているおにーさんはベルザードさん。二人とも僕の先輩。しかも、エルシャさん、ベルザードさん、僕と続いている。凄い偶然だ。この二人はあの時僕を止めようとしてくれた人だ。あの怨念達とは違って、姿、形もちゃんと見え、ニトラによって消されなかつた。すごい、ニトラはちゃんと力の使い方がわかつているんだ、、

「二人はね、歴代最高で、最強の赤龍帝なのよ♪」

と、ドライグが補足をしてくれた。

「そうなんだ!! よろしくお願ひします！エルシャさん、ベルザードさん！」

〈おうよー〉〈ええ、よろしくっ！〉

そんな仲睦まじい光景が終わると、ニトラは話を切り戻してきた。

「さあ、イツセーよ。私の力を貸してやる。私の手をとれ。」

ニトラはそう謂って、僕の身長の数十倍はある人差し指を僕の前に差し出してきた。

真つ黒に染まった指だ。でも、優しい感じがした。僕は迷うことなく、そのとつても大きな指をつかんだ。ニトラは僕が指をとると、ウムと満足そうにうなずいていた。ニトラだけでなく、ドライブも手を僕に向かって伸ばしてきた。ニトラよりもはるかに小さいが、それでも、僕より断然大きかった。僕はドライブの指を左手でとつた。そうすると、ドライブはうふふつと笑みを浮かべる。かわいい……。
〈俺たちもついているぜ！〉〈そうよ！〉

エルシャさんと、ベルザードさんは僕の肩に手をのせる。僕は、僕たちの思いは一つになったような気がした。そして、僕の体から光が発せられた。

「よし、イツセー、お前を現実世界へ戻す。悪魔たちはまだいる。気を抜くなよ?」

「うん。分かったよニトラ。」

「いい子だ。」

ニトラは自分の子供をほめるかのように言う。

「イツセー、大丈夫。私たちがついてるから。」

ドライブがそう謂うと、エルシャさんとベルザードさんも同調してうなづく。

「うん、ありがとう、ドライブ、エルシャさん、ベルザードさん。じゃあ、僕行くね?」

「ええ、終わったらゆつくり話しましょう?」

「うん!」

〈頑張つて!〉〈気をつけろよ!〉

僕は4人に見送られながら現実へと帰還した。今度は絶対に飲まない。そう肝に銘じて、…

—イツセーSIDE OUT—

—悪魔SIDE—

「……………!」「……………ください!」「……………!」

誰かが俺を呼んでいた。

「……………るじ!」「……………さま!」

まだ視界がぼうつとしていている。視界には緑色のようなもの映っている。

「主様!」「起きて下さい!」「主様!!」

しばらくすると、先ほどから聞こえてくる声ははっきりして来た。

「主様!!」

「!!」

俺は主様、と聞こえたとき意識がはつきりし、すぐに体を起こす。

「主様! やつと起きましたか。」

「ああ、済まない。少しウトウトとしていた。」

「もう、こんな時にですか?」

「ああ、済まないとしか言えないな。」

俺はどうやら少しの間気絶していたようだ。眷属の前で失態を犯してしまった。そして唐突に重要なことを思い出し、眷属に訊いた。

「!!? そうだ! 状況はどうなっている!?!」

俺は途中からの記憶がない。だから眷属に訊くしかない。

「はい、ターゲットに主様が近づいたとき、とてつもない波動が起き、主様を吹っ飛ばしました。そのあとです。ターゲットは尋常ではないオーラと魔力を放出し続けました。私たちですら近づけないくらいレベルです。」

「そんなことが……………」

眷属はさらに続けた。

「さらに悪いことが起きました。」

「なんだと? 悪いことが?」

「はい。」

俺はまだそんなことがあるのかと尋ねた。

「ターゲットが神器を発動させました。」

「!?! なんだと!?!」

「はい。」

俺は驚いた。まさかあの魔力に加えて神器まで持っていたことに。調査ではそんな兆候は見られなかった。それに、表情を見るに事態は相当深刻なようだ。それに加え嫌な予感がした。

「……ちなみに、神器はなんだ？」

すると、眷属はとんでもないものを口に出した。

「ロンギヌス
ブーステッド・ギア神滅具。赤龍帝の籠手です。」

「なっ!?なんだと!?……赤龍帝の籠手だと?!」

俺は耳を疑うようなことを聞いた。まさか、あの、世界に13しかない神器の名を聞くなど。過去に一度、赤龍帝と相對したことはあった。まさか、狙っていた奴が今代の赤龍帝だったとは。何という偶然なのか。

「事実です。さらに、一時的に禍々しいオーラを放ち、ドラゴンの姿になりかけていました。」

「何だど!?なりかけていただと!」

俺は、ドラゴンの姿という言葉に反応した。あれだ。恐ろしい力のことだ。あの力は本当に苦勞した。だが、俺は成りかけていたという言葉に疑問を持った。

「はい、何故か、元に戻っていったのです。そして今は強固な結界の中に。」

「そうか。」

俺はその言葉を聞いてほっとした。あの厄介極まりない力を自ら解除するとはな。俺はその隙をつこうと思い、指示を出す。

「よし、ならば、結界から出てきたところを叩くぞ。いいな?」

「御意に。」

俺はそれから眷属を集め、再度、指示をだした。この作戦を必ず完遂させる。赤龍帝を眷属にした、そんなことがなつて、冥界に広まったら俺の地位と未来は完全なものとなる。俺が目指していたものももうすぐそこにあつた。

「ククク、まさか赤龍帝というとんでもないおまけもついていたとはな。クツクツク、アーツ八ハツハ!!これで俺は更に上へのし上がれる!!」

俺は未来の自分を想像しながら向かっていった。

—悪魔SIDE—

—イツセーSIDE—

パチリ

目を開けると、僕がいた世界が目映る。ちゃんと戻ってきたようだ。そして、僕はいつの間にか、結界でおおわれていた。それを疑問に思っていると、頭の中に声が聞こえてきた。

「その結界は私が張ったものだ。イツセーを覇 龍から戻すときにな。それは魔法の一種だ。イツセーなら、意のままに操れる。」

ニトラはそのように説明する。僕はニトラの言うように、操作すると解除できた。

「流石だな。もうできるようになるとは。」

そうでもないよ。

そのようなやり取りをしていると、さきほどの悪魔たちが視界に映った。

「よお、ガキ。てめえ、赤龍帝なんだってな。」

さつき僕が吹っ飛ばした悪魔が言う。

「ああ、そうだよ。僕が今代の赤龍帝だ。」

僕は低い声で悪魔に向かって答えた。

「俺も正直驚いたぜえ。俺も、過去に赤龍帝の強さというのは身をもって体感済みだからよ。だが、こりゃあいい!!うれしい誤算だ!俺が、かの赤龍帝を眷属にすりゃ、さらに箔が着くつてもんよ!!やっぱ、てめえを狙ってここまでやってきて正解だったぜ!!」

悪魔は喜々としてそうほざいた。やっぱり強欲なんだな。悪魔って。というか、こいつ赤龍帝と戦ったことあるんだ。

(ねえ、エルシャさん、ベルザードさん、もしかしてこの悪魔と相對したことがあるの?)

僕は疑問に思ったので先輩二人に訊いてみた。

「いいや、俺はこんな悪魔は知らないな。」

「私も、この悪魔、マモンって言ったかしら?こいつとは戦ったこと

は無いわ。多分、私よりも前の赤龍帝のことじゃないかしら？
そうなんだ。前の赤龍帝・・・あの消えた怨念たちのどれかってことか。まあ何にせよ、僕はこんなふうにして好き勝手している悪魔に心底嫌悪した。悪魔はこんな奴しかいないのかと。

やはり、生かしては置けないね。

「ふん。さつきからそう言っているけど、僕が大人しく眷属になるとでも思ってるの？」

「だよなあ!!そうじゃなきゃ面白くねえ!!てめえをぶち殺して、眷属にしてやるよお!!」

悪魔は大声で叫ぶ。他の悪魔たちも戦闘態勢に入った。

「さあ、行けえー俺の眷属たちよ!!第三回戦だ!!」

「はあ!!」「行くぜ!」

他の悪魔たちが地を蹴って、向かってくる。

ツサツサ

僕は向かってくる奴の攻撃をことごとく避ける。しかし、なんだろう？前よりも相手が遅く見える。さらに身体も軽い。もしかして、神器を発動させたから？そう予測を立てていると、また脳に声がする。

『そうみたいね、イツセー。あなたが神器を発動させたことによって、変化が生じたみたい。』

ドライグが答えてくれた。どうやら正しかったらしい。すべての攻撃を避け、カウンターをする。

「グッ!?」「ガッ!」「クソツツ!!」

全員を退け、僕は呼吸を整える。そして、ある言葉を叫ぶ。

「赤龍帝の籠手!!!」

僕は神器の名を叫んだ。すると、僕の左手に赤い籠手が発現する。今度は無意識ではない。自分の意思で神器を発現させた。一発でやれるかと心配したが、成功だ。

「ちい!!神器をだしたか!」

僕が神器を出すと、悪魔は毒づく。

「主様。」

やはり、動揺はしているようだ。

「うろたえるな!!あくまで出しただけにすぎねえ!人数で畳みかけろ!!あの状態はそんなに脅威ではない!」

「「「「了解!!」」」」」

あの悪魔は全く動揺していないようだ。それどころか、さらに嬉しそうな顔をした。

『Boost!』

すると、神器から声が出た。その瞬間、僕の力が倍になった感覚が出た。

『イツセー、赤龍帝ブーステッド・ギアの籠手の能力は10秒ごとに持ち主の力を倍加していくわ!』

ドライブから説明を受ける。なるほど、だからブーステッドなんだ。

それにしても、能力凄すぎない?

『ウフフ、だから神滅具なのよ!』

ドライブは自信満々に言った。

ともかく、これで戦える!

「はあ!!」

今度は僕から攻撃を仕掛ける。

『Boost!!』

ドゴツ!バキツ!ズガツ!

「グアツ!!」「ガアツ!」「ツク!」「チイツ!」「クソツ!」

結果によって僕の本職である魔法は使えない。肉弾戦に持ち込む。相手の土俵ではあるが今までとは違った。身体が前より軽い。パンチの威力も上がっている。

『倍加でイツセーの力が上がっているのよ。しかも、イツセーの地力が高いから数回の倍加でも、ここまでいけるのよ!!ホント、凄いわ!!』

「クソ……」「うぐ……」

悪魔たちを一歩的に殴り続けている。全員を地に伏した後、強い力が来る。

ドゴツ!!

僕は突然来る拳に何とか反応してガードする。

「ほう、完全な不意打ちに反応するとはな。とことんてめえが眷属に欲しくなるぜ。」

今まで高見の見物だった奴がついにしかけてきた。どうやら眷属じゃあ、相手にならないと悟ったようだ。

「主様……」 「申し訳ありません……」

「お前らは見ておけ。こいつの相手は俺がやる。どうやら見くびっていたようだ。今のお前の力、波動、どう見ても上級悪魔を越してやがる。」

悪魔は真剣な眼差しをこちらに向け、声を発する。

「ふん、僕だって神器が無かったら、こんな力が出なかつたさ。ドライグがいなきや、成しえなかつたものだ！」

そう、これは僕だけの力じゃない——みんなの力だ。

「ハッハッハ!! そんな事を言うやつは初めてだぜ!! よし、俺も本気を出すか!! おれだってよ、鍛錬で力上げてんだぜ?」

男はそういつて力を解放した。ツ!! 凄い、この肌に伝わってくる波動、プレッシャー。

こいつ、強い!! いうだけのことはある!!

『イツセー、あいつは中々の悪魔のようね。今のあなたでは届かないわ。』

ドライグは僕に謂う。そうだ、あれはさつき僕がやった悪魔たちとは全く違う。魔力だってそうだ。

「行くぜえー!」

キュウイン——バシユンバシユン!

「クッ!!」

男は魔力を飛ばしてくる。凄い魔力だ。しかも、こんな大量に!! 魔力がぶち当たった地面はちよつとしたクレーターが出来ていた。

「クソ! やはり強い!!」

「オラオラ!! まだまだ行くぜ!」

やはり、赤龍帝と戦って生き残っているだけあって強さは本物だっ

た。

「どうしたら!!」

『イツセー、おもしろいよ。』

すると、ドライグから言葉を発せられる。

(おもしろい?.....)

ドライグの言葉にそう返す。

『そうよ、おもしろい。神器は思いが強ければ強いほど、応えてくれる。今のイツセーなら、できるはずよ!!!』

ドライグにそう言われ、その通りにする。思い……両親の敵……強敵……僕は……こいつを倒したい……倒さなければならぬ……

自分の思いを確認したところで、声に出す。

「神器よ、赤龍帝の籠手よ、僕に力を。あいつを、倒す力を。僕の思いに応えろ!!!ブーステッド・ギアアアアア!!」

『Welsh Dragon Balance Breaker
!!!!』

すると、神器は赤い光を放ち、形状を変えた。

『驚いたわ。まさか、この土壇場で成功させるなんて……イツセー、貴方は本当に面白くて最高よ。』

「む? イツセーはやったのか?」

『ええ、イツセーは至ったわ。 バランス・ブレイカー 禁手!!!』

「それは、危険ではないのだな?」

『ええ、そのとおり。これは神器本来の力。』

僕は力いっぱい叫ぶと、神器は光を発し、僕の体を覆っていく。身体を赤い全身プレート・アーマー鎧で覆われていく

そして、全身を覆い終える。そして、手には槍みtainな武器が現れる。背中からはドラゴンの翼が生えてきた。

「な……馬鹿な、ここで禁手だど?俺が前に相対した赤龍帝とは比較にならないじゃないか……」

悪魔がみるからにうろたえている。

「これが、俺の禁手、バランス・ブレイカー 赤龍帝の鎧だ!!!」

『正確には亜種ね。こんなのは見たことないわ……。そうね……。赤龍 帝 の 焱 方 天 戟《ブーステッド・ギア・スケイルメイル・ブレイズ・ハルバード》ってどこかしら。』

「バカナ……。こんなことが……。しかも亜種だど?……。」
悪魔のうろたえが尋常ではなかった。それもそうだろう、禁手を目の当たりにしているのだから。しかも、手には見るからに恐ろしい武器を持っていた。

「主様!!」「私たちも戦います!!」
すると、さつきまで倒れていた他の悪魔たちも参戦する。

「ああ、頼むぞ。」

「さあ、かかってこいクソ悪魔。誰が来ようと、関係ない。貴様ら全員、跡形もなく完全に滅ぼす!!!」

『ええ、イッセー。私たちの逆鱗に触れた愚か者どもを屠ってあげましょう。』

「!!はあっ!!!」

すると、悪魔は僕に集団で魔力攻撃を放つ。
僕はすぐに倍加させる。

『Boost!!Boost!!Boost!!Boost!!Boost
!!Boost!!Boost!!Boost!!Boost!!Boost
!!Boost!!Boost!!Boost!!Boost!!』

倍加させ、こちらに向かってくる攻撃を叩き切る

「バカナ!!」「ツク！」

「はあっ!!!」

ドゴツ 「グハッ！」

その勢いで一人の悪魔の顔面を思い切り殴り、吹き飛ばし、方天戟の柄で突いて二人を同時に攻撃する。

「させません!」「はあ！」

剣士二人が同時に切りかかる。だが、それは僕の体に届かない。

キーン!!

「なっ!!!」「バカナ!私の剣を!」

僕は片方の人差し指と親指でつかみ、片方を方天戟で防ぐ。

男は痛烈な悲鳴を上げ、背から鮮血を散らせながら地に落ちる。どうやら翼には相当神経が集中しているようで相当痛いようだ。

「クソが!!これでもくらえ!!」

もう一人の男が魔力で大量の槍を形作り、僕に向かって放つ。男は間違いなく当たったと思っっているだろう。しかし結果は違った。

『Penetrate!!』

「な!?!」

僕に向かってきた槍は僕をすり抜けていった。しかし、男は繰り替えし魔力で槍を創って飛ばしてくるが、一つたりとも当たらない。

「クソがアアアア!!なぜ当たらねえ!!なぜすり抜けんだよおお!!」

『Penetrate!Penetrate!Penetrate!Penetrate!Penetrate!Penetrate!Penetrate!Penetrate!Penetrate!Penetrate!』

その声が聞こえるたび、攻撃は当たらない。そして、僕はその男の前に一瞬で移動し、殴り倒す。そして、足を片方踏みつぶす。

「つがあああああああつあああ!」

男は絶叫した。当然だろう、なんせ、骨まで砕いたから、もう足はペしゃんこで使い物にならない。ホントに軽く踏んだだけなのに、足はペラペラになった。悪魔って、脆い。

しかし、ここで終わらない。僕は自分の魔力を手に出現させる。

「うーんと、こうだっけな。」

僕は手の魔力を剣の形にする。

「待て.....何を.....」

男は逃げられないので、僕を見上げていた。

「簡単には殺さない、」

僕はそう吐き捨て、男に剣を向けた。男は絶望した顔になっていた。

「待て!やめろ!そつ、そうだ!お前になんでも、お前が望むものをやろう!これでも俺は最上級悪魔だ。冥界じゃ、俺の影響力と権力は高い。金でも、地位でも、女でm「黙れ」グアアアアアアアア、痛

い!!痛い!!痛い!!いいいい!!」

僕はためらわずまず、男の耳を切り飛ばす。痛みで発狂している。まったく情けない。

「ま、待ってくれ!タノム!!悪かった!俺が悪かった!!だからタスク「うるさい」アアアアアア!腕があ!!俺の腕があああ!!」

僕はよくある命乞いを無視し、次は男の右腕を切断する。

「そのように、お前に命乞いしてきた者を、騙し、拳銃殺してきたのだろう?ならば次は貴様の番だ。因果応報というやつだよ。」

「!!!」

僕は男を簡単に殺さないよう、切り刻んだ。方天戟ハルバードを使えば一瞬で灰にしてしまうので、良く切れる魔力の剣で、少くしずつ、少くしずつ切り刻んでいった。残っている、足、太もも、男性器、指、手、腕、耳、鼻、目、口、腹、顔、体の至る処を切り刻んだ。死なないように。さらに――

【Transfer!!】

「ぎやあああああああああぐぼおおお!!」

ドライグの能力の一つ、【譲 渡】を使ってクソ悪魔の痛覚を強化した。もう声がでないくらいの痛みだろう。ただ、痛みとショックで気絶することがあったので、その都度、魔法で意識を強制的に取りもどさせた。気絶したまま死なんて許さない。

一番滑稽だったのは最初、自信満々で偉そうにしてた奴が 終始、泣き叫びながら命乞いしていたことかな。よく結界内に木霊していた。

そして、男をしばらく切り刻んでいくうちに、反応がなくなった。否、もう残っているのが頭しかなかった。

「ああ、もう終わりか・・・早いなあ・・・」

(こんなセリフを言ったのを両親に知れたら、やばいな・・・)そんなことを思いながら、汚らわしい刻んだ残骸を方天戟の焔で焼き尽くした。ついでに、翼をもうで叩き落した悪魔を回復魔法で起こす。

「ううう・・・主様?」

こいつ、誰かと間違っていないか?

そう思っていたら、その悪魔は間違いに気づいたようだ。

「ひい!!」

悪魔は悲鳴を上げ、逃げようとするが、そうもいかなないので捕まえる。

「タノム!!お願いだ!!!助けてくれ!!命まで取らないでくれ!!!俺たちは!ホントはこんなことをしたくなかったんだ!俺たちは、主に!!いやあいつに無理やりやらされたんだ!!だから!!頼む!!命だけは見逃してくれ!!!」

男は恐怖のあまりか、こんなことを言い出し始める。おいおいこいつ裏切るのかな。今までノリノリでやってたじゃないか。はあ……ホント悪魔ってのはしょうがないな。都合のいい時だけこーいうことを言い出すのか……

『ふん!全く反吐が出るわね。早く屠っちゃいましょう、イツセー。』
「同感だ。今、この下種の記憶を見てみたが、無理やりなんてのは無かった。むしろ、この下種はイツセーの親をためらわず殺している。挙句の果て、真つ先に強姦までしている。」

やっぱりな。ユルサナイ。

「待ってk「待つわけないだろ。」そ、そんな、ぐぎやあああああああああああ!!」

取りあえず、さっきの奴同様、耳を切り飛ばす。

案の定、泣き叫んだな。

「ツクーお、お前に!お前に良心は無いのか!!」

僕はそのセリフに耳を疑った。なんかおかしなこと言ってるな。

「はい?良心?その言葉、そっくりそのままお前に返すよ?」

そのセリフを言った後、さっきの奴と同様、簡単に死なないうよう、切り刻んでいく。さつきは思ったよりも早く終わってしまったので、さらに丁寧にやっついていこう。勿論、痛覚の倍加も忘れず、徹底的に。途中から触れただけで気絶したな。それもそうか、僕が譲渡した倍加数は優に20を超えている。痛覚が通常の2、20倍。数字にして104万倍だからな。空気に触れるだけで尋常じゃない痛みに襲われ

るはずだ。途中から「やめてくれ」から「もう、殺してくれ」って叫んでたな。おめでと。こんな体験、多分経験しないと思うよ。貴重な体験だったね。

「またもやこの結界内に声にならない悲鳴が鳴り響いた。まあ、さつきよりは長持ちしたな。更に細かく刈ったから。そして終わった後はきれいに火葬した。」

「ふう、終わったと。あ、まだ終わっていなかったなあ。」

「ひいひい!!」「あ……」

僕がまだやってない奴がいた。そう、結界内で魔法を使えなくした女二人だ。

僕が振り向き、目が合うと、二人は怯え、失禁した。

「うぐっ、ズビツ……あの……お願いです……うえっ……謝りますからあ……貴方の奴隷にでもなんでも……なりませうがらあ……」

「お願いです……殺さ、ころさないでください……」
「またもや命乞いだった。ふむ、たしかに女をさっきのクソ悪魔たちと同じように刻むのは僕としても少し後ろめたい。しかも、二人はまあまああ容姿だ。なので……」

「そうだなあ、僕もあなたたちのような女性を切り刻むのはちよつと気が引けるしなあ。」

「!!じゃあー!」

僕がこういうと、二人は嬉しそう顔をした。助けて貰えると思っているのか。

「ああ、なので……」

二人はもはや神を見るような輝いた眼をした。悪魔なのにそんな手を合わせていいのか。

「なので、せめて、苦しませよう一瞬で終わらせてあげよう。」

僕がこういうと、二人は次は絶望した表情をした。コロコロ顔が変わるなあ。面白い。

「そ……そんな……」

「逆になんで助けてくれると思ったの??ちよつと虫が良すぎると思

わない?」

そう言つて僕は翼で再度宙に浮かぶ。

「ま、でも安心してよ。せめて痛みを感じることなく逝かせてあげよう。よかつたね、僕が女性に優しい紳士で。」

僕は槍を杖替わりにして、魔法陣を浮かべる。別に魔法には杖は必要不可欠つてわけじゃないけど、武器や杖みたいな物があると力を集めるイメージがしやすいから魔法の速さや規模、強度も増すからやってみる。方天戟は長いから使いやすい。それで武器にもなるから一石二鳥だ。

「それではさようなら、綺麗なおねえさんたち。また来世で、悪魔以外の種族だったら、仲良くなるよ♪広域殲滅魔道収束砲!!」

その瞬間、魔法陣からぶつといビームのようなものが照射される。これは、魔道収束砲。魔力を集めて打ち出すものだ。さらに、ドライグの倍加も当然使ってるから、直撃でなく、その爆風だけでも、消し飛ぶだろう。

それをもろ受けた二人は跡形もなく消し飛んだ。

「ふう、終わったか。」

『イツセー、お疲れ様!!凄かつたわよ!!』

「ふむ、確かに圧倒的だったな。だが、あの切り刻むのは別にいいと思うが、あそこまで痛覚を倍加させるのはある意味悪魔より悪魔だったぞ?」

『いいじゃないのよ、あんな奴ら。慈悲なんてかける価値のない塵以下じゃない。いえ、それだと塵に失礼ね。』

ニトラにそう言われる。ドライグは僕を擁護してくれたが、終わってみたら少し自分でもそう思ったが、後悔はしていなかった。

「まあ、いいや。」

「ごめんね、ニトラ。あれはこれきりにするから。」

僕はニトラに謝る。

「いや、いいんだ。イツセーの気持ちを考えれば、分かるさ。こっちこそ済まない。」

「ううん。いいよ。」

こうして、悪魔たちを全滅させ、襲撃を乗り越えた。長いようで、短く、衝撃的な1日だった。

そして、僕の心に深い傷を負った1日だった。

—イツセ—SIDE OUT—

t o b e c o n t i n u e

NO, VI く決意く

—ドライグSIDE—

「——大丈夫よ、イツセー。私たちがついていているから——」

イツセーが力に飲まれそうになったところを、私でも初めて見る龍ジャガーノート・ドライグが強制的に覇ジャガーノート・ドライグ龍を解除して、イツセーを助けた。そして、ニ

トラがイツセーに対して問う。これからどうするのか——と。でもイツセーは真つすぐな瞳でニトラに動じることなく、答えた。私たちが、頼つてくれたんだ。あてにしてくれた。イツセーは力に飲まれたけど、今は完全に理解しているんだ。そして、私たちから学ぼうと、吸収しようとしているんだ。ホントによくできた子ね。齡二桁にも達していないこんな小さな子が、あんな覚悟を伝えられるなんてフツーじゃない。でも、こんな覚悟を見せられた以上、私はこの子に尽くす——そう決めた。

そして、イツセーの意識は現実に戻ろうとしている。イツセーには激励の言葉を掛けたが、それでも不安はあった。それはそうだ。なんだかんだ言っても、まだ小さな子供。この年で神器を扱う。そんなことは前代未聞なこと。そして相手は成熟した悪魔。それも子供相手に8人、、

「イツセー、、」

自然に私の宿主の名が口からこぼれる。不安しかない声が。すると、そんな声を聴いたのであろうニトラが私に声をかける。

「何をそんなに不安がつている？」

「それは……」

「イツセーが相手を倒せるか、どうかか？」

「……」コクン

私はニトラに凶星を突かれ、何も言葉を発することができず、ただうなずいた。

「……赤龍帝ドライグ、貴女が宿主を、イツセーを信じなくてどうするの？力を貸すと、教えるといったのでしよう？ならば、イツセーがしたいことのサポートをしてあげなさい。」

それでも私は不安をぬぐい去ることは叶わなかった。まだ心のどこかに、イツセーが殺され、悪魔のいいようにされてしまうのではないかと。

〈何を弱気になってんだよ、ドライグ。〉

〈そうよ、あなたらしくもない。いつもの強くて凛とした貴方は何処へ行ったの？〉

ベルザードとエルシャにもどやされる。ホント、いつから私はこんなに弱気になってしまったのだろうか。

〈イツセーを信じてあげましょー！〉

〈そうだ、何も心配いらねえよー！〉

そうだ、イツセーを信じてあげなきゃ。ベルザードとエルシャに謂われ、上を向く。すると、イツセーが悪魔どもと戦闘に入っていた。そこには、私が心配しているようなことは無かった。体術だけで、数で圧倒的に不利なのに悪魔の猛攻を軽々と凌いだ上、攻撃まで食らわせていた。

(凄い・・・)

正直に思った。すると、ニトラは感心したように謂った。

「イツセーはやはり、かなりの実力者だ。相当鍛錬を積んできているのだろうな。」

〈ええ、イツセー君は本来なら魔法使いのはずよね？〉

「そのとおりだ。」

〈でも、魔法を封じられていて、あの落ち着き、そしてあの身のこなし。凄いわ。魔法使いの範疇を超えてる。〉

〈ああ、俺も魔法使いをそれなりに見てきたが、あんなに体術をこなすやつはいなかったぜ。全員、魔法にかまけて自分の体は鍛えねえかなイツセーの両親、いい教えをしていたようだな。〉

「全くだな。」〈本当ね。〉

私は3人の会話を聞いていたがその通りだった。だが、さらに驚くことは続いた。

『Welsh Dragon Balance Breaker
!!』

イツセーはこの土壇場で禁手に至った。たった、あれだけのアドバイスで、、、

余程、その思いが強く、真つすぐだったのね。

〈ふふふ、イツセーには驚かされてばかりね♪〉

〈全くだな。しかも、あれは普通の禁手じゃね。亜種だ。〉

ベルザードのいう通り、イツセーの手には恐ろしい槍みたいな武器が握られていた。見たことないものだった。

〈ベルザード、あれ、何か知ってる？〉

エルシヤも気になったようで、ベルザードに質問する。

〈ああ、あれは方天戟って武器だ。以前、資料で見たことある。ヨーロッパではハルバードと言うらしい。俺も、あんなに凶悪な実物を見たのは初めてだ。〉

あの最強の赤龍帝で、戦いに明け暮れ、2度白龍皇を退けたベルザードでさえ、見たのは初めてだという。私はその情報をもとに禁手の名前を即興で作り上げる。

「なら、禁手の名前は赤龍帝の焱方天戟☒ブーステッド・ギア・スケイルメール・ブレイズ・ハルバード☒ね!!」

〈おおーそれいいなー〉〈ふふ、それで決まりね♪〉

即興で作ったにもかかわらず、二人も賛成してくれたようだ。禁手に至ったイツセーはそこから凄まじかった。倍加を10回以上も平気でしている。しかも、それを平気で保ち続け、リセットされない。それにも、私は驚きを隠せなかった。私の顔を見たニトラはそのことについて話す。

「イツセーはもともと、体術も魔法と同じくらい鍛錬していた。自身に重力魔法で負荷もかけてな。」

私はその言葉に何も言えなかった。

・・・イツセー、あなたやり過ぎよ・・・

ベルザードとエルシヤもその事実には驚きを隠せていない。

「更に、私の魔力でイツセーの体を強化している。これで、仮に倍加とやらを無限にしても大丈夫だ。」

やはり、この龍は次元が違った・・・

しかも、この魔力は何？それはもはや、魔力とよぶにはあまりに強すぎる。質も密度も桁違いだ。

更に、イツセーが方天戟で相手を切りつけると、驚くことが起こった。

「ねえ、ドライグ、あれ……」

「ええ、そうよ……あれは……」

「おいおい……マジかよ……」

そう、掠っただけなのに、悪魔が数秒で塵と化したのだ。

「私の……焔……」

それは、間違うことのない。私の生前の力だった。封印されていたはずの力が解かれるなんて……

「最強の赤龍帝であるベルザードでも、これまでは引き出せなかったのに……」

「ああ……全くだ。イツセー！おめえにはつくづく驚かされるぜ！」

「イツセー、貴方は過去、未来、現在において、最強の赤龍帝よ。間違いないね。」

これにはベルザードとエルシャも迷いなくうなづく。赤龍帝の、生前の力を引き出したのは過去一人もいない。それだけに衝撃的だった。それに嬉しくもあった。また、これが見られることを。

そこから、イツセーはもう圧倒的という言葉すら温かった。悪魔たちを一方的に蹂躪した。オーラと魔力は私たちが封印した神や魔王とは比較にならないほどの領域だった。あの無限にも到達しうるかもしれないほどに。

——と同時に戦慄した。!!!

「あガアアアアアアアアアア」

神器内に悪魔の痛烈な悲鳴が響き渡った。イツセーは悪魔のリーダー格を切り刻んでいた。

「イツセー……」

二人は顔を青くしている。イツセーは喜々として、悪魔をいたづっている。でも、私は見ても何も苦にならなかった。むしろ、いいぞ、

もつとやつちやえ、イツセー♪悪魔に死んだほうがましと思えるくらい
の苦痛を与えてあげて。

「……うん。こんな考えでいたら邪龍ね。完全に。まあ、それも
いいかな。」

「うわああああ……見てるこつちが痛い……」

「ううう……もうっ無理……あんなにかわいいイツセー君
が……喜々として悪魔を刻んでる……」

二人は余りのイツセーの行動に耐えきれず、音を上げていた。情け
ないわね。まあ、内臓とか、内臓とかいろいろ見えてるケド。

「二人とも、どうしたの？顔が青いわよ？」

「うう……ドライグ見ての通りだ、ドライグ……」

「ドライグ……あなた逆にあれをみて平気なの……？」

二人は予想通りの質問をしてきた。二人はとても苦しそうだ。何
も思わないかって？フフツ♪愚問ね♪

「いいえ、思わないわ。むしろスカツとしたわ。悪魔のあの醜い姿
を見ることができて。いい気味だわ。」

「ドライグ……あなた……」

「ドライグ、おめえ、もしかして邪龍の気質でもあるのか？」

二人はジト目で私に応える。んもう、邪龍なんて失礼しちゃう！心
のなかで否定すると、さらに追い打ちをかける。

「いや、まさに邪龍そのものでしょ？その思考は。ほぼ無抵抗の者
にあれだけやっているイツセーに共感するなんて。」

「もう!!あなたまでそういうの？」

「自覚なし……」

「ふうむ、宿主とその龍がこれでは将来、イツセーは邪龍たちに好か
れそう。と言うか、邪龍たちと暮らしてそうだ。」

「ああ、なんとなく想像できた自分がある……」

「俺もだ……」

「まあ、それはそれで面白いと思うがな。」

「……言われてみれば、なんとなく想像できてしまった。そんな
ことを言っているうちにイツセーは悪魔どもを片付け終わっていた。」

私はイツセーに話しかけた。

「イツセー!! 凄かったわ!! まさか、ベルザードとエルシャでも目覚めなかった私の生前の力である【透 過】や【? □の炎火】を初めての禁手で発動させるなんて!! 私、鳥肌が立ったわ!」

「そう? ありがとう、ドライグ。」

私が誉めると、イツセーは少し頬を赤く染めながら礼を言った。照れているんだろうか。かわいい……

〈ああ! 凄かったぜ、イツセー!〉

〈ホントよ! 今の時点でベルのあの【覇 龍】と同等かそれ以上のパワーだったんですもの〉

〈ああ、まさかこの時点で並ばれるとはな……〉

「その通りだわ。ふふふ、イツセー、あなたは間違いなく過去、未来、現在最強の赤龍帝よ!」

〈それどころかよ、ドライグ、もしかして全盛期のお前に届くんじゃないか?〉

「ええ、その可能性も十分あるわね♪なんせ、封印された私の【透 過】や【? □の炎火】さえも発現させたのだから♪」

〈マジかよ……〉〈これを開いた口が塞がらないっていうのね……〉
「ありがと、みんな……」

イツセーはそうは言うが、そんな嬉しそうな声ではなかった。イツセーは禁 手を解除し、とある場所へ歩いて行った。つらそうな顔をしながら。その場所はそう、イツセーの両親がいる場所だ……しかし、二人はもう……目を覚まさない。

「……おとーさん……おかーさん……」

「イツセー……」

〈……〉〈へイツセー君……〉

イツセーのつらそうな声が神器内に届く……聞いているだけでこっちまでつらくなってきた。イツセーは声をあげて泣かなかった。ただし、ずっと涙を流していた――

—ドライグSIDE OUT—

—イツセーSIDE—

「おとーさん．．．おかーさん．．．」

クソ悪魔どもを始末したあと、僕はとある場所へ向かった。そう、おとーさんと、おかーさんがいる場所だ。二人とも、見るに堪えない姿だった。体中傷だらけ．．．おかーさんに至っては何故か衣服がはぎ取られていた挙句には白い液体みたいなものが全身に付着している。目をすぐにつぶりたくなるような、そんな悲惨な姿で殺されていた．．．

「．．．．．」

ポロツ、ツーーー

そして、自然と涙がこぼれてきた、、単純に大好きな二人を殺された哀しみだけではなかった。悪魔への怒りを通り越した感情、二人を死なせてしまった罪悪感、いろいろな感情があふれてきた、、そんな涙なのだろうか。僕はずっと、そこから動くことが出来なかった。ずっと両親の亡骸を見つめていた。もつとも、目は終始ぼやけて何が目に映っているのかわからなかったが。

『イツセー．．．．．』

ドライグは苦しそうな声で僕の名を呼んだ。ドライグも悲しんでくれているのだろうか。優しいな．．．さらに時間は過ぎていく。するとニトラはその空気に耐えられなくなったのか、僕に謂った。

「イツセーよ、取りあえず、両親をうめてあげよう、、悲しいのは十分分かる。しかし、ずっとそうしているわけにもいかないだろう？もう、悪魔どもは襲ってこない、なんて保証はないのだから。両親の体が腐敗してしまう前に。」

「うん．．．．．そうだね、ごめんね。頭、真っ白になってて動けなかった。」

「いや、仕方のないことだ。お前はまだ幼い。このようなこと、受け入れられないぞ、普通は。お前は、強いな．．．」

「強くなんか、ないよ……」

そう、強くなんかない。強かったら、二人を……おとーさんとおかーさんを死なせずに済んだんだ。

「違う。イツセーの心の方だ。齡10を越していない子が両親の死を、受け入れ、落ち着いていられるわけがない。」

ニトラは僕を称賛する。

「違うよ……それは、ニトラやドライグ、ベルザードさんとエルシャさんが、みんながいるからだよ。もし、ここに僕だけしかいなかったら、僕は僕じゃ無くなってた。みんながいたから、何とかなってるだけだよ……」

僕がこうしていられるのはみんなのおかげ。一人だけだったら何も出来なかった。一人じゃ何もできない……そんな自分が嫌になる。

「子供が一人で何もできないのは当然だ。そうだ、イツセーはまだ未熟だ。だから、失ってしまった……」

『?!ちよつと!!イツセーに何言ってるの!』

ニトラの言った言葉にドライグが激怒した。やっぱ、一人じゃ何もできない、僕が弱かったから……

「だから、イツセー。強くなれ。これから。もう、二度とこんな目に合わないように。私がついている。分からない事があるなら、教えてやる。」

「ニトラ……」

『イツセー、私もイツセーの為なら尽くすわよ!』

〈おうよ!俺もだぜ!!あんなの見せられたんだ、これからだ!〉

〈そうね、なんたつて私のかわいい弟分だからね!〉

「みんな……ありがとう……」

みんなの優しさが心にしみてくる……僕はここで立ち止まったら、おとーさんとおかーさんに合わせる顔がない。僕はここで決心した。

「みんな、僕、やるよ。強くなる。」

「よく言った、イツセー。」

『そうよ、このまま終わるわけにいかないもんね!』

〈流石だ。〉〈強い子ね。おねーさん惚れちやいそう♡〉

みんな、僕の決意を認めてくれた。若干一人違ったけど。

「イツセー、取りあえず、両親を埋葬してあげよう。安らかに眠れるように」

「うん、そうだね。」

ニトラが言ったように、僕は大切な両親の遺体を埋葬する準備をした。まず、魔法を駆使して二人の身体を綺麗にした。魔法はニトラに教えてもらった。すると、実際に実行した僕でも驚いた。おとーさんとおかーさんの傷ついた身体は見違えるように綺麗になった。もう動きだしてもおかしくなくらいなほどに。僕はここでニトラに訊いてみた。

「ねえ、ニトラ・・・死者を生き返らせる、なんて魔法・・・ない?」

僕は、もしかして両親が生き返ってくれるんじゃないか、そんなわずかな希望に掛けて訊いた。

「・・・」

ニトラは困ったという風に、うなり声をあげた。その声から察して僕はやっぱり、と諦めたが、ニトラからとんでもない言葉がこぼれる。

「無い・・・こともない。」

「っ?!ほ、ホントに?!」

まさか、あるなんて思いもよらなかった。魔法ってホントに無限大なんだな、と改めて思った。だが、現実はそのなにごくは無かった。

「だが・・・イツセーの両親は生き返らせることは叶わない・・・」
ニトラの重みのある言葉が僕の心に突き刺さる。やっぱりだめだったか。ニトラは説明を続ける。

「確かに、私は生前、そのような力を使ってきた。実際それを使って蘇らせた事もあった。だが、厳密に言えば生き返らせるのではなく、蘇生、復元の方が近い。」

『どっぴうっぴうっぴ』

ドライブが不思議がつている。勿論僕もだ。何が違うのだろうか。

「私が行ったのは肉体を創り、魂をそこに定着させた、ということだ。」

『なら、イツセーの両親だって……』

「残念だが、私の力ではできない。私が蘇生したのはいずれもドラゴン。知っているだろうか？ドラゴンはたとえ、肉体が滅ぼされていても魂はその場に残る。だから、【神器】というものに入れられているんだろう？」

『ええ、まあ。』

ドライグはその言葉に納得する。

「それは、ドラゴンの魂が強いからだ。その強さ故、その場にとどまり続けることができる。だが、人間はそうはいかない。人間の魂はドラゴンと比べれば脆弱だ。死を迎えれば、その魂は行くべき場所へとすぐに向かつてしまう。それに、ドラゴンほど魂の格が高く、気配も強ければ魔法で探し出し、とどまらせておく事も出来なくはないが、人間では感じ取ることはできない。余程、魂やそちら系の物に精通している神クラスの者でない限りはそのような芸当は難しいだろう。」

「うん、やっぱ無理だね……」

「済まない……イツセー……」

「ううん、違うよ。ニトラが謝ることなんてない。」

そう言つて、僕は埋葬の準備をする。おとーさんとおかーさんの身体を綺麗にして、衣服を着せる。両親が生きていたときに着ていた服。魔法で穴を掘り、二人をその中に優しくそっと入れる。おとーさんとおかーさんの肌は冷たい……あの温かった手は、冷たかった……土をかぶせるとき、僕は目の瞑つて静かに眠っているおとーさんとおかーさんに声を掛けた。

「おとーさんとおかーさん……僕はもつと一緒にいたかった。でも、その願いは敵わない。おとーさんもおかーさんも魔法をもつと極めたかったよね……もつと、やりたいことはあったよね。僕、イツセー・ヴァーミリオン・アンブロジウスは二人の夢を、受け継ぐよ。魔法を極めるよ。僕は大丈夫。一人じゃないから。それと僕、赤龍帝だったよ。これって何かの運命なのかな。それと僕の中には大きな

黒いドラゴンがいたよ。すっごく強くて優しい……ニトラっついてうんだよ。ドライグ、ニトラ、ベルザードさんとエルシャさん。僕、一人じゃなかったよ。助けてくれたんだ。みんな。いい人たちだよ。僕はもう立ち止まらないよ。グスツ……ウツ……だ、だから、安心して……安らかに……眠って……それと、このイツセーって名前、大好きだよ……つけてくれてありがとう……産んでくれて、ありがとう……」

僕は涙を流しながら、最後の別れを告げ、うめた。もう、二人の姿は見えない。

『イツセー……』へ……くへ……グスツ……く
「……」

ニトラも、ドライグも、エルシャさんもベルザードさんもみんな僕の姿を内側で

見ている。

みんな、見届けてありがとう。

「あ、わすれてた……」

僕は大事なもの思い出し、すぐ実行に移した。

『イツセー？何を忘れてたの？』

ドライグは不思議がって僕に訊いてきた。

「ん、ああ、お墓に大事なものだよ。」

僕はドライグの質問に詳しいことは言わず、岩が多いところに行き、大きな目の石を二つ魔法で切り出し、うめた場所に戻る。そして、形をそれらしくして文字を彫って地面に突き立てた。

『ああ、なるほどね。立派なお墓になったわね。』

「これなら、両親もさぞ喜んでるだろう。」

「えへへ、そうだといいな。」

『絶対そうよ♪』

僕は、おとーさんとおかーさんのお墓を立てた。そんなに豪華ではないけど、自分としては満足している。喜んでくれるといいな。

？ええ、じゅうぶんよ……？？？ありがとな、イツセー？

？今、声が聞こえたような……

『イツセー、帰りましょう?』

「うん、そうだね。」

僕はそういわれて、帰る場所へと歩いて行った。

1???年

マーリン・アンブロジウス

ここに眠る

1???年

クリスチャン・ローゼンクロイツ

ここに眠る

No, VII 龍靈界

—イツセーSIDE—

「おとーさん……おかーさん……どうか、安らかに眠って……」

おとーさんとおかーさんを丁寧に埋葬し、お墓を立てた後、僕は自分の家に取りあえず帰った。おかーさんとおとーさんのお墓から家はそんなに離れていない。でも、帰ったときには外を見るとつくに日が沈んでいた。夜になっていた。そして、きれいな三日月が雲一つない夜空を照らしている。

「ただいま……」

いつものように帰ったときのあいさつを忘れない。誰も、いつものように「おかえり」とは返してくれないけど。家に着いたらまだやることはある。おとーさんとおかーさんの部屋を整理しておきたい。でも、おとーさんとおかーさんが生きていたときのままにしておきたいという気持ちもあった。こうしてどうしようかと迷っているとトラ達が声をかけてきた。

「イツセー、取りあえず今日はもうゆつくり休んだ方がいい。時間も遅い。子供はもう寝る時間だ。」

『そうよ、イツセー。今日は色々とありすぎたのよ。少しは休んだ方がいいし、これ以上起きているのは子供には体にとって毒よ。』

二人はの僕を心配して提案してくる。

「うん……そうだね……今日は疲れたから、もう寝るよ。」

僕としてはもう少し起きて考えたかったけど、素直に二人の提案に乗ることにした。

「それがいい。」

僕は自分の部屋に行き、ベッドに寝転んだ。すると、すぐとんでもない睡魔が僕を襲ってきた。瞼も重い。今日はこれまでにないくらい眠れそうだ。

「さて、私も眠りにつくとするか……お休み、イツセー。」

『ふわあ〜、私も。お休み、イツセー……』

うん、お休み……ニトラもドライグもお休みを言っただけで眠りについた。やっぱみんな疲れてたのかな……そうして僕は意識を手放した。

—翌日—

チウンチウンチウン……

外からは小鳥の泣く声が聞こえてきた。朝日が僕の部屋の窓から差し込んでくる。その光と鳴き声で僕は目を覚ました。

「ん……朝か……」

こんななんでもない日常に僕は帰ってきた。昨日のことから。

「起きたか、イツセー。」

そんな日常を複雑な気持ちで感じていると、僕の頭に声が聞こえてきた。

「あ、ニトラ。おはよう。もう起きていたの？早いんだね。」

「ああ、おはよう。起きたばっかで悪いがもう少し目を瞑って横になつて貰えないだろうか？少し話しておきたいことがあるんだ。」

「どうしたの一体？」

「なに、身体は眠っている状態でイツセーの意識だけを精神世界に連れていく。」

「ああ、昨日のあのニトラ達がいた場所に？一体どうして？」

「なに、これから長く付き合うイツセーに自己紹介をとおもってね。」

昨日は名前くらいしかいってなかったから。赤龍帝ドライグにも『早く教えて。』と急かされてな。」

「ああ、そういうこと。」

ニトラの意図がわかった。そういわれれば、僕、まだニトラのことを何も知らないんだよなあ。長くドラゴンとして生きているドライグでさえ知らないっていうくらいだもの。

僕だって、恩人であるニトラのことを知りたいという気持ちはある。それにドラゴンの中にも。あれだけ会いたいと切望していたドラゴンが僕の中に宿っている。こんな幸せはない。折角なのでニトラの提案に乗る。

「分かったよ、ニトラ。ありがとね、わざわざ。」

「なに、お互いを知りたいと思うのは私だって同じだ。」

そうして僕は再びベッドに横になって目を閉じる。そうすると僕は昨日行つた自分の精神世界へとたどり着く。そこには既にドライグ、ニトラはもちろんのこと。ベルザードさんとエルシャさんもいる。ベルザードさんもエルシャさんも知りたいたいだね。

『あ、来たのね!! イッセー! おはよう!』

僕が来るとすぐにドライグは嬉しそうな顔をして僕に挨拶してくる。

「うん、おはようドライグ。」

〈おお、イッセー来たか。〉〈おはよ、イッセーくん♪〉

ベルザードさんもエルシャさんも各々挨拶してくる。

「おはよ、ベルザードさん、エルシャさん。」

僕はこのやり取りがたまらなく好きになった。おとーさんとおかーさんを失って、もう挨拶をできないと思つていたけど、こうして僕にまるでホントの家族のように接してくれる人がいる。

「みんな、いるな。」

そうしたやり取りをしていると、ニトラが来た。ニトラが来るとさっきの雰囲気から一転、シリアスな雰囲気になる。

ドライグもニトラの方をじつと見つめていた。複雑な気分なんだろうか。ドライグは何とも言えない表情をしている。

しんとした雰囲気に包まれていたが、その雰囲気を断ち切つたのはドライグだった。

『それで? 約束通り、話してくれるのでしよう?』

ドライグは念を押すようにニトラに突き付けた。

「ああ、自分で事が終わつたら詳しく話すと、あの時言つたのでな。自分が言つたことくらい、責任持つき。」

ニトラは自分のことを話すつもりらしい。

かつて強大な実力を持ち、この世界で最強と言われた二天龍。その二天龍でさえ知らなかった存在。

たぶん、この世界で僕たちが初めてその存在を知ることになるだろ

う。なんだか何とも言えない気持ちだが、それと同時にとてもワクワクしてきた。これはいわゆる未知。未知との遭遇なのだから。

そうやって密かにワクワクしていると、エルシャさんとベルザードさんが僕に耳元でささやいてきた。

「なんだか、楽しいことになってきたね、イツセイ君。」

「ああ、俺も不思議とワクワクしてきたぞ。俺たちが知りもしなかった存在だからな。こんな経験、赤龍帝だった時代にもなかったことだからな。」

「やっぱみんな気になるんだな。僕だってそうだから。」

「まず先に言っておこう。私は種族は龍、ドラゴンであるがこの世界で生まれたドラゴンではない。」

『——ッ!?!』

僕たち—ドライグもエルシャさん、ベルザードさんもまずそこに驚いた。そことはこの世界で生まれたのではない、ってところだ。僕たちが住む世界は人間界。悪魔、、デーモンが住む場所は冥界、天使、、エンジェルが住むのは天界と昔、おかしさんが教えてくれた。だがそれ以外にも違う世界があるのだろうか？僕はさらにその話に引き込まれそうだった。

『この世界ではないって……私だってアルビオンだって、ほかの龍たちもここで生まれたはずなのに!?!』

此処でドライグはそう返す。自分生まれた場所がこの世界なのだから。

「もちろん、この世界で生まれたドラゴンもいる。それは確かだが、違う世界で生まれるドラゴンもいるのだ。現に私という存在がいるのだからな。」

ドライグの言葉を聞いてもニトラはその姿勢を崩さない。

「へじゃあ、貴方が生まれ、育って、生きてきた場所ってどこなの？—
—こんどはエルシャさんが疑問を投げかけた。」

「私が生まれた場所……そこは……」

『……ゴクッ』

「そこは……」

なぜか緊張してきた……ドライブからもその空気故に唾をのんだ音がした。

「そことは、ドラゴンが支配し、ドラゴンが生まれ、生きていく世界。いわゆるドラゴンの世界だ。」

「ドラゴンの為の世界……」

僕はニトラの言葉をつぶやいた。

『その世界に名はあるの?』

「もちろんあるさ。その世界の名は、龍霊界。通称、ドラゴニアだ。」

『ドラゴニア……』

「そうだ、私が生まれ育った地であり、私が生きていたところだ。」

「ニトラの住んでいたところ……」

僕はその龍霊界、ドラゴニアに凄く興味を持った。ドラゴンがたくさんいるのだから。

僕はその話をさらに掘り下げていく。

「そのドラゴニアって、どこにあるの?」

「もちろん、この世界の中にはない。全く別の次元にある。この世界には冥界というものがあるのだろうか?それと似たような感じだ。その冥界も普通の方法ではいくことはできないだろうか?次元を通っていかなければならないのだから。」

『そうね。確かに冥界は魔法陣か何かで行かなければならないわ。じゃあ、そのドラゴニアにはどうやって行くの?それともこちらからは行く方法が無いの?』

「行く方法が無いわけではない。ただ、魔法陣などでは行けない。」

『じゃあ、どうやって……』

「次元の狭間。」

〈!?!?〉

『!?!?』

ニトラが言った、次元の狭間という言葉。始めて聞いた言葉だ。まず、僕はそれを知りたかった。

「ねえ、その次元の狭間っていうのは?」

僕の質問にはドライブが答えてくれた。

『イツセー、次元の狭間って言うのはね、様々な世界の隙間にある空間よ。人間界と冥界の間にある空間もそれのうちの一つよ。』

「そうなんだ。そこってどんなどころ?」

『次元の狭間はね、様々な色をしているわ。』

「へー綺麗などこなんだ。」

『見た目だけはね。そこは何もない世界・・・完全な無の世界よ。』
「無の世界・・・」

僕は新しい概念に引き込まれた。何もない世界・・・この時何かに似ているなって思った。なんだっけな・・・忘れちゃった。

「その次元の狭間は上も下も、右も左もない。方向感覚も失われる。そして、その場所に長い間居続ければ、その次元の無に当てられて消滅してしまう。そんな世界だ。」

「ええ!!消えちゃうの!?!」

僕はニトラの補足せてくれた説明に驚いた。

「ああ、相当実力があるもの、もしくは何か対策をしている以外はな。例えば、何かしらの結界で自分を覆う、とかな。」

「そっか、それなら行けるんだね?」

僕はその方法があることに安心して確認してみた。

「ちよつと?イツセー君?もしかして、その次元の狭間に行く気なんじゃ、...」

「え?言っちゃダメなの?」

「へなに行く気満々になってるのよ!」

「へそうだぞ、イツセー。あそこは気軽に行つていいもんじゃない!」

『イツセー、私もあそこに行くのはお勧めしないわ。』

「うーくん、みんなが言うなら・・・はあ、残念・・・」

「イツセー、まだあそこに行くのはまだ早い。大きくなってからでもいいじゃないか。まだ時間はあるのだから。」

「わかったよ、ニトラ。」

僕はさすがに次元の狭間に向かうことは諦めることにした。

『それで、次元の狭間にあるというの?』

僕が話の腰を折ってしまったが、ドライブは本題に戻す。

「ああ。正確には、その狭間を通るのだ。次元の狭間の最深部。次元の狭間で最も無が強いところだ。その場所では、たとえ神であろうと無の力に耐えきれずに消滅するだろう。その最深部に、ドラゴニアへの入り口がある。」

〈そんなところにあるっていうのかよ……〉

〈超危険ゾーンじゃない……〉

『そんなところにあるのね……どおりで知らないはずだわ。』

「そうだ。だから、普通のものに近づくとすら敵わない。」

「そうなんだ。」

ニトラから知らされる新しいこと。僕はますます心が躍る。

「その世界を知っているのって、こっちの世界にいるの?」

「ああ、いるぞ。」

僕の質問にニトラは肯定する。その答えはニトラではなく、ドライグが答えた。

『アポカリユプス・ドラゴン真なる赤龍神帝、グレートレッドのことですよ?』

「そうだ。」

「ドライグ、そのグレートレッドって?」

『アポカリユプス・ドラゴン真なる赤龍神帝グレートレッド。夢幻を司る、最強のドラゴンよ。

その強さ故に不動の存在、真龍ともいわれているの。』

僕はドライグが言った最強という言葉に反応した。

「最強!? ドライグよりも強いのか!?!?」

「ええ、悔しいけど、私じゃ手も足も出ないほどよ。」

「へえー、そんなに強いんだ……」

『それで? そのグレートレッドだけがどうして知っているの?』

「簡単なことだ。グレートレッドもかつてはドラゴニアにいた龍だからだ。」

『うそでしょ!?!』

「事実だ。そうしてグレートレッドは次元の狭間を泳ぎ、そのバランスを保っているのだ。」

『そんなことが……』

「ん? ……いや、まてよ……」

「ん？どうしたの、ニトラ？」

「済まない、ドラゴニアのことを知っているものはグレートレッドだけではなかった。もう2体いたな。」

ニトラはまたしても衝撃の事実をカミングアウトした。

「その二体ってドラゴン？」

僕は興味深くその二体のドラゴンのことも聞いた。

「ああ、もちろん二体とも龍だ。ただな……」

『ただ？』

「あの二体は相当力を持っていたのだろうな。驚いたことにあの二体は自力で次元の狭間を通ってこちらの世界にやってきた。あのグレートレッドと同レベルの力を持っていたことになる。その二体はずっと戦っていてな。戦っているうちに次元の狭間に入っていつて、次元の壁を突き破ってきた。」

『何なの……そのドラゴン……』

「すごいね……」

〈……〉

僕はそれを聞いて引いた。戦いの末、次元の壁突き破るとかどんだけ強い……

ドライブもエルシャさんもベルザードさんも若干引いてた。

「私も当時のことは鮮明に覚えている。中々衝撃的だったのでな。懐かしい話だ。あちらにいるドラゴンたちも様々なことを思っていただろうさ。なんせ、ドラゴニアにこちらの世界のドラゴンが来るなど、前代未聞のことであつたからな。」

『それで、その二体のどらごんはどうなったの？』

「ああ、流石のあの二体のドラゴンも、私たちを前にして争いはやめざるを得なかった。自分たちを上回るドラゴンがわんさかいたのである。」

『!?あっちには、それすらも超えるものがあるというの!?』

ドライブはニトラに訊く。

「当然だ。ドラゴンの世界なのだから。この世界のドラゴンより強

いドラゴンなど、沢山いるに決まっている。特に、向こうにいる五体のドラゴン、実質あの世界を支配している五体のドラゴンはホントに強いなんてものじゃない。私から言ってもあれらは化物の類だ。」

『!?じゃあ、私がこの世界にいつて戦ったら・・・?』

「はつきり言うが、瞬殺だ。赤龍帝ドライブ、あなたはこちらの世界では最強クラスだろう。私から言ってもいい線いつている。だが、あちらでは全くもって通用しない。こちらで言う二天龍クラスなど、ドラゴニアでは当たり前。いや、弱い方いつていい。一瞬で消し飛ばされるぞ。特に、向こうの上位陣にはな。」

『うつ・・・そんな・・・』

へ嘘・・・ドライブでもそんななの・・・

へなんつー世界だ・・・

ドライブはショックを受けていた。それはそうだ。今まで培ってきた力が全く通用しない世界があつたなんて知つたのだ。

「ちなみに、先ほどの次元を突き破つたドラゴン、あの二体はドラゴニアに今も住んでいる。」

「えっ!こつちに帰らなかつたの?」

「ああ、どうやら、ドラゴニアの方が面白いそうだ。その二体曰く、〆元の世界はもうつまらない、元の世界のヤツラは弱すぎる〆、だそうだ。今も喜々として戦つてゐるだろうさ。」

『それはそうよ・・・だって、あのグレートレッドレベルなのだから・・・』

それはそうか。一体単騎で世界取れるんだから。

「ちなみに何故かその二体は夫婦になつてゐるぞ。」

「へへええっ!!!」

こここにきて新事実。なにがいつたいつたどうなつて夫婦に!?

「ねえ、なんで夫婦になつてゐるの?その二体のドラゴン、ずっと戦つてたんでしょ?」

僕はニトラに真相を聞いた。

「さあな。私にもさつぱりだ。ただ・・・」

『へへただ、?』

僕たちはニトラの話に興味津々だ。

「ただ、オスの方のドラゴンの目がな……死んでいた……」

〈……〉

『……それは……』

「眼が死んでいた……？どゆこと？」

〈イツセーくん、それはね、あれよ……〉

〈あれだな。イツセー、何も言わないであげてやれ〉

「う……ん。それじゃわからないよ」

『イツセー、大きくなったら分かるわよ。』

僕は一切詳しいことが聞けなかった。ただ、大きくなれば分かる
と、それしか言ってくれなかった。

「そーいうものなの？」

『そーいうものよ。』

「ふ……ん。」

ドライグも、エルシャさんもベルザードさんも、何故か哀れみの眼
差しを向けていた。

『〈あぁ……その二体のドラゴンのメスのほう、思いをこじらせ
てヤンデレ化したんだ……〉』

「ふふふ、それにしても懐かしい。私が生前の時は色々やったこと
を覚えている。」

ニトラは昔のことを懐かしむように話す。

僕はふと気になったことをニトラに訊いてみた。

「色々って何やってたの？」

色々ってところに僕は疑問を抱いた。僕は知りたかった。ニトラ
が生前名をしていたのかを。

「そうだな、ホントにいろいろだ。魔法を極めたり、鍛錬に励んだ
り、戦いを求めて強者達と戦いに明け暮れたりとな。私もあの頃は若
かった。勝てるはずもない相手に幾度となく挑んだものだ。」

ニトラでも戦いを求めたんだ。そんなニトラの一面を見て僕は
嬉しかった。それに魔法を極めたってこつちで言う魔術師みたいだ。

僕と似ている気がする。

そんなニトラの話聞いて僕はふと疑問に思ったことを口にした。

「ねえ、ニトラって戦いに明け暮れたのでしょ?」

「そうだ。」

「凄く知りたいことなんだけど、ニトラはどれくらい強かったの?」

僕がその質問を言った瞬間、ドライグもエルシャさんもベルザードさんもニトラに一齐に注目した。やはり、気になっているようだ。

「私か?・・・中々適切な言葉が見つからないが・・・お前たちの世界の者と比較するならば、お前たちが不動の存在呼んでいる存在、グレートレッドならば、片手間で捻りつぶせる、といったところか。」

『ッ!?!』

〈はあ!?!〉

〈んなばかな・・・〉

「・・・・・・・・」

今日一番の驚愕な事実、だった。僕は余りのスケールの大きさに言葉を失った。

この世界で傷つけることのできるものはいないと言われる、グレートレッドを片手間で倒せるって・・・ニトラってとんでもない存在だった。

『あなた・・・ホントに何者なの・・・?』

ドライグは声を震わせながら正体を訊いた。

「私の名はジルニトラ。かつて捨てた名は、
龍^マ 炫^{グナス} の 魔^{ロード} 法^{オブ} 神^{ドラゴン}、ジルニトラ。かつて魔法の神と
言われた、神格をもつドラゴンだ。」

『神格を持つドラゴンって・・・』

〈龍 炫 の 魔法 神・・・〉

へちよつと待ってくれ、神格を持つてゐるってこたあ、龍の神ってことなのか?だとしたら、グレートレッドも神格を持っているのか?!
ベルザードさんは神格について聞いた。

「ふむ、龍の神か・・・残念だが、私は違う。ただ、神格を持つて

いるというだけだ。神格を持つドラゴンは私のほかにもいたのだ。まあ、格が桁違いに上だがな。二つ目の質問だがな、グレートレッドは神格を持っていないはずだ。お前たちがそのような勝手に真龍と名称なをつけたのであろう?」

〈何故、そう言い切れるの?〉

「神格を持っているか、いないかは一定の実力があれば分かるさ。それに私はグレートレッドのことはある程度知っている。なぜなら私はグレートレッドがこんな小さい時から知っているのだからな。」

ニトラはそういつて自らの手で具体的な大きさを形作る。その大きさは大体10メートルくらいの大かさだろうか。かなり小さい。ドライグの3分の1以下つてところだ。

『あのデカイ龍にもそんなときがあつたの……?』

ドライグはいまいち信じきれないようだ。

「ああ、だがその時にはもうかなりの強さを誇っていたがな。」

〈そ、そうなのか……〉

〈全く知りもしなかつたわ……〉

「つまりはそういうことだ。私のことはジルニトラとも、イツセーのようにニトラとも呼んでくれて構わない。よろしく頼むぞ。」

ニトラは気さくにそう言う。

『じゃあ、私はジルニトラつて呼ばせてもらうわよ。私のことはドライグでいいわ。ジルニトラ。』

「ああ、よろしくね、ドライグ。」

『ええ、よろしく。』

ドラゴン同士だからなのか。ニトラとドライグはすぐに打ち解け合っている。

〈じゃあ、私はニトラつて呼ぶわねー〉

〈俺ジルニトラと呼ばせてもらうぞ。よろしくな。〉

「ああ、こちらこそ……よつと。」

ニトラはエルシャさんとベルザードさんにも挨拶するとなんと、ニトラの大きな体は突然輝きだし、ドラゴンの体から人間の姿に変身した。

「ええ?!うそ?!」

〈・・・〉へすげえな・・・こんなこともできるのかよ。〈

「どうかな?わたし的にはこうした方がなじみやすいと思っつてな。あんな大きい体のままでは慣れないだろう?」

ニトラは女の人の姿だった。さらさらで腰まで伸びた綺麗な黒い髪。瞳も黒色。それでいて、とても美人さんだった。

「綺麗・・・」

つと、僕は自然にそんなことを言ってしまった。

「うふふ、ありがとう、イツセー♪」

どうやら僕の口走った言葉はニトラに聞こえていたようだ。恥ずかしい・・・

『うう・・・なぜジルニトラだけ・・・私だつて・・・私だつてえ・・・』
ドライグは何か悔しそうだった。ここにはドラゴンは一体だけになっている。今のニトラは何処からどう見ても、超絶綺麗な人に見えない。

「ははは、ドライグよ、お前もこれを覚えたいか?」

『当然よ!私だけ仲間外れはや!』

ドライグの口調が幼児化している。かわいい・・・

「あとで教えてあげるさ。」

『約束だからね!!』

「ああ。わかったよ。」

『よおし!!』

ドライグはガッツポーズをする。余程嬉しかったらしい。

「さてと、これで一通り終わったな。」

「うん。ありがとね、ニトラ。お蔭でたくさんを知れたよ!!」

「礼には及ばんさ。さあ、イツセーもう現実世界へ行っても構わな
いぞ?」

「うん。そうするよ。今日からまた、やらなくちゃいけないことはたくさんあるからね。」

そう言つて、僕は精神世界から現実世界へと戻った。

—イツセーSIDE OUT—

t
o
b
e
c
o
u
n
t
i
n
u
e

NO, VIIII ~アーティファクト~

—ドライグSIDE—

やつほー。私はドライグ。

今、私はかつてない存在と遭遇し、驚愕している。

神器としてイツセーに宿っていた私のほかにも、もう一体、ドラゴンが宿っていたの。

そのドラゴンにはジルニトラといった。昨日は名だけしか教えてもらえなかったから、今日、こうしてイツセーの精神世界にて、色々聞かせてもらっている。

そのドラゴンからはその存在を認識した時から強烈なオーラ、プレッシャー、そして魔力を感じていた。それも強烈なものだ。私とて、長い間生きてきてはいたが、このレベルの力は本当に初めてだ。

今まで相對してきたヤツラとは比較にならなかった。いや、比べる価値すらないほどだった。そんなぶつとんでいる存在の口からきける話というものはどんなものなのか——私はかなり面白い話を聞ける、そう確信していた。そして未知なる存在にワクワクいた。

だが、このドラゴンはいい意味で私を裏切ってくれた。

私が想像していたもののはるか上をいつていたのだ。

龍霊界、ドラゴニア、次元の狭間の最深部……そしてグレートレッド。

私が知りもしなかったことが次々と出てくる。そして、あの不動の存在、グレートレッドのことも。

あげく、私でも滅多に入ろうとはしなかった次元の狭間でもお構いなく喜々として戦闘を繰り広げ、さらには次元の壁をも突き破るなんて言う意味不明なことをやってのける二体のドラゴン。

私の知らないものがこれでもかと出てくる。それは私にとつてもとても有益なことであった。私はその地へ赴き、戦いに興じてみたい。しかし、私の希望は打ち砕かれた。私では通用しない。瞬殺されて終わりだと告げられた。私はこの言葉を突き付けられ、内心シヨツ

クだった。私は戦いで力をつけ、この世界ではほぼ最強というところまで到達し、二天龍と呼ばれるまでになった。それでも、龍霊界、ドラゴニアでは全く通用しないということだ。私自身、それなりに自身も、プライドもあった。それだけにこの事実は私の心を打ち砕くのに十分すぎるものだった。

さらには……

「私か……？ そうだな……これといった適切な言葉が見つからないが……そうだなあ……お前たちが不動の存在と呼んでいるドラゴン、グレートレッドならば、片手間で捻りつぶせる、といったところか——」

「?!?!」

イツセーが何となく聞いたであろう、どれくらい強いのか？ そんな疑問にそのドラゴンはとんでもない爆弾を投下して返した。

そして私は怖くなった。グレートレッドを片手間でひれりつぶせるって……

私の想像の域を超えていた。そこで、私は声に出したのだ。

「あ、あなたは……一体なにものなの……？」

いや、自然と声に出た。私はこんな話をきいて正気を保っていたのかわからない。

「私の名は、ジルニトラ。かつて捨てた名は、マ龍グ 炫ナス の ロ魔ード 法ドラ 神ゴン、ジルニトラ。かつて魔法の神と言われた、神格をもつドラゴンだ。」

私は最初にそう聞いたとき、ジルニトラというドラゴンの存在が良くわからなかった。

もはや、それはドラゴンなのか。

神格を持つドラゴンなど、聞いたことが無い。ただでさえ、強力な力を持つ種族、ドラゴンに神格なんてものがあつたら、それこそ無敵にもほどがある……

ドラゴンにも神はいたのだ。

確かにそれを聞けば、このドラゴンがグレートレッドを超え説明がつく。確かに、あのグレートレッドや、オーフィスでさえ、神格はもつ

ていないだろうし。

「私のことはジルニトラでも、イツセーのようにニトラと呼んでく
れても構わない。」

ジルニトラはあんなとんでもないことを言い、絶対的な力を持って
ても、気さくに私たちに接している。私はとりあえず、ジルニトラと
よぶことにした。

すると、ニトラは突然輝きだし、なんと人間の姿になった。器用な
のね……………

「綺麗……………」

するとイツセーはジルニトラの美貌にくぎ付けになってそんな台
詞を自然と口にする。

ムスツ

私は何故か機嫌が悪くなった。

私の中でとある感情が渦巻いていた。私のこの感情は……………嫉
妬なのだろうか？

何故かイツセーがジルニトラだけをほめているのが気に入らな
い……………

それに、ジルニトラは頬を赤く染めているし、

私はそんなイツセーとジルニトラのやり取りを複雑な気持ちで眺
めていた。私だけこんな仲間外れみたいでいやだった。

「ははは、ドライグよ、お前もこれを覚えたいか？」

私の心の中が分かっているのか。ジルニトラはまるで私の今思っ
ていることを当ててきた。

「そ、そうだよ！私だけ仲間外れはや！」

本音が出てしまった……………しかも言葉遣いもなんか幼くなってし
まっているし。

「ふふ、分かったよ、あとで教えてあげるから。」

「や、約束よ！」

「ああ、わかっている。」

ジルニトラはなんだかんだいって優しい……………

私がいっきまで抱いていた嫉妬の感情がいつの間にか無くなって

いた。私はそんなニトラの優しさに浸っていた。

—ドライグSIDE OUT—

—イツセーSIDE—

——パチリ

「ううん……戻ってきたか。」

目を開けると僕の目には天井が映る。精神世界から戻ってくるのはこれで二回目だが、それにも慣れてきたところだ。これからは自分の意思でいけるようにしないと。

「しかし、驚いたなあ……」

そう、さつき精神世界でニトラから聞いた話には驚きしかなかった。僕らの知らない存在。龍霊界、そこにいるドラゴンたち。ドライグをも超える存在。次元の狭間。この事とはおとーさんとおかーさんも知らないことだろう。だが、とても興味がわいた。そんな世界にいるドラゴンたちは一体どんなやつなのか。ドラゴンたちと戦いかけた僕はさらにその衝動が強くなった。これから強くならねばならないからね。

そんなことを思いながら僕は体を起こし、とりあえず朝食を食べようと寝室を後にした。

いつもご飯を食べるところで朝食を食べていると、声が聞こえてきた。

『それにしてもイツセー？昨日悪魔を葬り去った魔法、凄かったわね。』

「ああ、最後の二人を葬ったやつ？」

『そうそう、それ。』

「あれは少し前にまあまあ名のある魔術書に載っていた魔道収束砲だよ。もちろん魔法の一種だね。あれはただ見ただけで練習もしてなかったけどね。あのときできて良かったよ。」

『……イツセー？あのレベルの魔法を一発で発動させたってこと？』

ドライグは声を少し震わせながら聞く。

「うん・・・まあ結果的にはそうだけど。」

『やっぱりあなたとんでもないわね・・・ホントに・・・』
ドライグは半分呆れながらいう。

「いや、たいしたことないよ。」

『いやいやいや！とんでもないわよ！全盛期の私ですら当たれば無事じゃ済まないあれだけの魔法を即興で発動させるとか十分おかしいわよ?』

〈おいおい、全盛期のドライグに致命傷を与えるのか?あれは・・・〉
〈だとしたらあれはオーバークイルもいいところね・・・〉

そんなことをドライグと話していたら、エルシャさんとベルザードさんも加わってきた。最強の赤龍帝までそういうんだ・・・

「えへへ、ありがとう二人とも。最強の赤龍帝にそう言われたら照れるよ・・・」

僕は頭の後ろを書きながら言った。

『何言ってるの?イツセー?歴代最強の赤龍帝はもうこの二人じゃないのよ?』

そう言ってドライグは僕の言葉を否定する。

〈そうだぞ?イツセー。まず9歳でバランス・ブレイカーに至ってんだからな?しかも普通のバランス・ブレイカーの状態で俺の切り札と同格かそれ以上なんだからな?〉

〈そうよ、イツセー。しかも亜種の禁手に至ってるのよ?あの凶悪な武器にドライグのあの絶技が伴っているってもうおかしいのよ?〉
すると歴代最強の二人もそう言葉を重ねる。

「そ、そう?ありがと、二人とも。」

僕は純粹嬉しくて二人にお礼を言った。

〈お、おう・・・〉

〈うっ・・・なによあの笑顔・・・反則よ・・・〉
『~~~~~!?!』

すると3人はなんか様子がおかしかった。なんでだろう?そんな空気をドライグがただすように変えた。

『づつづん・・・話題変えちゃうけど、イツセーの禁手・・・あ

れは亜種なんてもものじゃないわ。もはやあれは禁手の上位種いいえ、バランス・ブレイカーを超越したといっても過言じゃないわ。』

〈言われればそうだな……〉

〈あれを見せられたらね……〉

二人とも、ドライグの言うことに同意した。

「そうなのかなあ……」

『私が言うのだから、間違いないわ！あんなのは前代未聞よ！しかも、初のバランス・ブレイカーに至りながらもその状態であれだけの【倍加】【譲渡】【透過】の能力を軽々と使えるなんてね。普通は初めてバランス・ブレイカーに至ったときは発動させながら能力を使用するなんて出来ない事よ。』

「えっ!? そうなの?」

僕はドライグの説明に驚いた。

『ええ。ベルザードだって、最初に禁手に至ったときは【倍加】も

【譲渡】も使えなかったのだから。』

〈ああ、そうだったな……それから時間がたってイツセーのように使えるようにはなったがな。ま、その【透過】というやつは最後までできなかつたけどな。始めてみたぜ。まさか敵の攻撃を受けずにすり抜けさせるとはな。〉

『いいえ、私の【透過】は本来、敵の防御をすり抜けて攻撃を直接当てさせるものよ。あの使い方はイツセーの応用よ。』

〈ええ……まさか応用までやってのけたていうこと? イツセーといい、ドライグといい、あなたたちはやっぱりとんでもないわね。〉

〈まったくくだな。〉

みんなが言うように僕はそれだけのことを初めてやってのけたらしい。それはそれで嬉しいな。

『イツセーは私が持っている4つの能力のうち、早くも3つ発現させたわ。これなら、最後の能力も発動させる可能性は十分あるわ!』
するとドライグはそんなとんでもないことを言った。

〈嘘!? ドライグ! あなたはまだそんなのがあったの?!〉

〈おいおい……それは聞いてないぜ……〉

「あと一つ……ドライグその能力って？」

これにはエルシャさんもベルザードさんも初耳だったようだ。

『その能力とはね、【増 加】よ。』

「【増 加】……」

〈ドライグ、それはどんなやつなんだ？〉

〈私も聞きたい。〉

『その名の通り、あるものを増やす能力よ。』

「何を増やすの？」

『臓器とか骨とかかな……』

するとドライグは意外なものを口に出す。僕はそのワードが不可解で仕方なかった。なんで体の内部のものをふやすんだろう……。それにドライグも心なしか歯切れが悪かった。

〈ん？よくわかんねえなあ。〉

『この能力は余りあてにならないというか、とある天敵に対抗するための能力よ。私はその昔、生前の時のことよ。私は毒を打ち消す龍ともいわれた事もある。でも、これを知る者は片手で数えるくらいなだけだね。』

〈毒を、ねえ……〉

「ドライグ、その天敵って？」

ドライグが天敵に対抗するためと確かに言った。僕は更に深く追求した。

〈なあ、ドライグ、それってもしかして……〉

『ええ、ベルザード、あなたが思い浮かべた存在で間違いないわ。』

「ベルザードさん、その存在って？」

〈そいつはな、白バニシング・ドラゴンい龍。かつてドライグと共に二天龍と呼ばれた、片割れのほうさ。〉

「白い龍……バニシング・ドラゴン……それがドライグのライバルだったの？」

僕はドライグに確認してみる。

『ええ、私と同レベルのドラゴンよ。名はアルビオン。アルビオン・グウイバー。』

「アルビオン……」

ドライグからはそのドラゴン、バニシング・ドラゴンの名を聞いた。アルビオン……確か、白い丘って意味だったような気がするが。

『そのドラゴンの能力と対になる、私の【透 過】はそんなものよ。でも、あいつはあの能力を使わなかったわ。あいつはその能力を自身で嫌悪してたけどね。』

「自分で？嫌ってたの？」

僕はその真実にはすこし疑問を持った。

『ええ、だから、余り触れないであげて。』

「うん、わかった。」

ドライグは少し真剣だった。なので僕はこのことはすぐに忘れようとした。

〈しかし、白龍皇か……〉

するとベルザードさんから初めて聞く言葉が頭に聞こえた。

「ん？白龍皇？」

〈さっきのドラゴンの二つ名よ。ほら、ドライグだって、赤龍帝って
いう名があるじゃない？〉

「なるほど、そういうことか。それにしても、かっこいいよなあ。白龍皇って。」

『ムスツ……』

〈あつ、〉

〈ドライグが拗ねた。〉

そんなことを口走ったらドライグが不機嫌になった。

『ねえ……イツセー……』

なんか少しばかり冷たくてトーンの低い声でした。

「ど、ドライグ、もしかして怒ってる？」

『んーん？全く。私全然怒ってないもん。』

なんか少し口調が幼くなった。

『ねえ。それよりイツセー！私の赤龍帝はかっこよくないの？』

少し怒りが混じったような声で聴いてきた。かっこいいかだつて？
応えるまでもないだろう？

「カツコイイに決まってるよ！僕好きだよ？赤龍帝ってなまえ。」

『うふふー！そうでしょ？そうでしょ?!』

こんどはドライグが凄く上機嫌になった。

「こんなドライグ初めて見た……」〈ホントにね……〉

ドライグはキャツキャウフフのような空気を醸し出していた。

「まあ、その白龍皇、今代はどうなんだろうか……」

「ん？今代って……もしかしてそのドラゴンもドライグと同じように神器に？」

「察しがいいな。イツセーの言う通り、神器になってる。ドライグとアルビオンは神器になっても戦っている運命なんだよ。」

「そうなんだ。じゃあ、ぼくm『ダメよ！イツセーそんな運命にはさせない。』ドライグ？」

さっきのウフフな雰囲気はどこへやら。ドライグはいつになく真剣だった。

「イツセー？白龍皇は毎回そうだったけど、力に飲まれているの。遭わない方がいいわ。赤龍帝と白龍皇がぶつかれば、どちらが勝とうが負けようが、戦地になったところ一帯が更地になるから。まあ、あなたが負けることは無いだろうけど。それに、もう私はあいつと戦う興味なんてこれっぽっちもないわ。多分弱すぎて話にならないだろうし。まあ、イツセーに届くやつが現れれば考えるけど。」

「うーん、僕もまだやりたいことあるしなあ。魔法の研究もしたいし。ドライグの言う通りにするよ。」

『ホント?!ありがとうイツセー!』

「んーん。こちらこそ、心配してくれてありがと、ドライグ。」

〈ほんと、ニトラの教えが生きてるわね。〉

〈けどよ、あつてしまったらどうすんだよ?〉

ベルザードさんはもしものことを言う。僕はその疑問に迷いなく答える。

「僕からは合わないし、仕掛けない。まあ、もし僕の居場所を探し当てて、ここへ来るのなら、容赦はしない。それだけ。」

「ウフフ、頼もしいわあ。」〈ハッハッハ!!ヨユウだな！イツセー。〉

『流石最強にして最高の赤龍帝ね。』

「ねえ、ドライブ。そのバニシング・ドラゴンのこと、もつと詳しく聞かせてよ。それにさつきベルザードさんが言った切り札って?」

『いいわイッサー。時がたったら教えてあげる。』

〈俺もだ。神器使った鍛錬するんだろ?そんなときの暇なときな。〉

「ありがと!約束だよ!」

〈おう!〉『ええ!』

そんな仲睦まじい会話をしていると、あつという間に時間がたって、朝食も食べ終えていた。

すると、ニトラはその時を待っていたかのように僕に話しかけてきた。

「イッサーよ。」

「ん?ニトラ、どうしたの?」

「ああ、イッサーはこれからどうするのだ?」

ニトラは心配してくれているのだろうか。僕の今後のことについて訊いてきた。

「そのことなんだけどさ、とりあえず、僕は両親の意思を継ぐ。だから、魔法を、極めようかと思う。」

「ふふふ、魔法か。」

ニトラは嬉しそうに言った。

「うん。僕は魔術師と魔法使いの子だから。」

「私と同じ道を歩むのか。私は嬉しいぞ?」

「ニトラも?」

「ああ、だからイッサーとも気が合うのは私たちの本質が似ているからだろう。」

「そんなの?だとしたら嬉しいな。」

「私もだ。それに魔法なら私も共に教えながら研究できるぞ?」

ニトラから思ってもみないことを聞いた。

「ホント!?魔法の神様、しかもドラゴンさんから学べるのか〜嬉し〜」

「ふふふ、そうか。」

「その前に、おとーさんとおかーさんの部屋、片付けるよ。魔法の研究とか残ってそうだから。」

「そういえば、イツセーの両親は中々の魔術師だったな。」

「うん。そう聞いているよ。」

「なるほど、楽しみだ。人間の魔法の研究を見るなど、初めてだからな。」

「うん。僕もわくわくしてるよ。」

ニトラと会話しながら僕は朝食のかたづけをパパッと済ませて、水回りの場から出て、とある部屋の扉の前に立った。

そう、他でもない、今は亡きおとーさんとおかーさんの部屋だ。

ガチャ

僕は少し躊躇ったけど、意を決してその扉を開け、その部屋に入る。

「おお~~~~」

「ほう……」

僕の視界には大量の本やら、紙の束やら他にも宝石？みたいなものやら杖、剣に至るまで、いろんなものがあつた。僕はこの壮絶な景色に度肝を抜かれた。

ニトラはというと、かなり関心があるようだ。

「これ、凄い……全部魔法のことに關しての物なのかな？」

余りの多さにびっくりした。

「いくつか手に取ってみたらどうだ？」

「うん。」

ニトラにそう言われて取りあえず一番近くにあつた本棚にぎつしり詰まっている本のうち、一冊を手にとってパラパラとページをめくってみた。

「うん。魔法の本だね、これは。」

少し確認したら、次から次へと本を漁っていく。どれもこれも魔法に關する本ばかりだった。

僕はこれらの本に夢中になってしまって、読んでしまっていた。

「ちよっと、イツセー。読むのは良いが、散らかってきてるぞ。」
するとニトラは呆れたように僕に謂う。

「ああーいけない。」

気づかないうちにもう本の山積みが出来ていた。

「全く。時間を忘れて魔法にのめりこんでしまうとは。昔の私を見ているかのようだよ。」

僕はニトラからそんなことを聞いてきよんとした。でもそれはすぐ嬉しさに変わった。

「ニトラもそうだったの。僕たち、とても似ているねー！」

「ああ、ほんとだな。」

そんなやり取りをニトラとしてみると、不意に声が聞こえてきた。

『ねえねえ、イツセー、何してるの?』

声の主はドライブグであった。

「ああ、ちよつとおとーさんとおかーさんの物を整理しようかと。

エルシャさんとベルザードさんは?」

『二人は暇だとか言って鍛錬みたいなことやってるわ。魔法なんだよね?ちよつと見せてよ。』

「いいよ。」

そう言つて僕は手に取っていた本を開く。ドライブグやニトラは僕の目を介してその景色を見れるらしい。

『・・・何が書いてあるかあまりわからないわ。』

「だろうな。ドライブグが魔法の知識があるわけがないだろうからな。」

『うっ・・・それはそうだけど・・・』

「これは、初歩的なものだ。基本の中の基本のなかの基本のそのまま基本でところだろうな。」

『うそでしょ?!これで!』

「そうだよドライブグ。この本は僕が3、4歳の時に見たものだよ。」

「ほう・・・その年でこれが理解できるか。流石だな。」

「えへへ、ありがとう。」

『3、4歳、、、』

「ふむ、ドライブグちゃんには少し難しかったかな?」

とニトラはドライブグを煽る。

『ニ・ト・ラ!!子ども扱いしないで!!』

ドライグの怒号が飛ぶ。

「ははは……」

「僕らはそんな会話をしながら作業を進めていった。」

「——そしてしばらく時間がたった。」

「よしっ、これで全部確認し終わったぞ。」

僕はある後、ほんのテーマや似ている内容ごとに整理し直していった。すべてが魔法に関連したものではなかった。比率的には魔法関連が6、それ以外のものが4といったところか。数は馬鹿にならないものだったが。

そして、机には書きかけの魔法陣だったりいろいろな紙が束ねてあった。結構雑に。おとーさんとおかーさん。整理はどっちかかっていうと苦手な方だったからなあ。そんな懐かしいことを思いながら手を動かしていった。

——またさらに時間が経過——

「ふう……これできれいになった。」

『お疲れ、イツセー。』

「うん。ありがと、ドライグ。」

机は最初、ひどく物で散らかっていたが、今は机で作業できるレベルにはなっている。

「机、綺麗にしないと、魔法の研究やら、作業やらできないからね。」
僕は椅子に座りながらつぶやく。

「イツセー、これから魔法の研究をやっていくのだろうか?」

「うん。そのつもり。」

『え、じゃあイツセーは神器は使わないの?』

ドライグは不安そうな声で言った。

「鍛錬もやっていくよ。神器をもっと使いこなせるようにしないとね。」

「もう十分だとは思うが。」

『確かに……』

二人はこんなことを言っているが、僕としては物足りなかった。

「僕はもつと上を目指したい。そして、ドラゴンと戦えるように……」

『イツセー……』

「……」

二人は僕の望みを聞いて黙る……

「そうか、ならばイツセー。魔法を極めよ。」

「ニトラ……」

『そうね、イツセー。ホントにドラゴンたちと戦うなら、もつと力を
つけないきやね♪』

「ドライブ……」

二人は僕の望みを否定はしなかった。

「そうだ。この世界のドラゴンの強さというものは私はあつたことが無いから知らない。ただ今言えることは今のイツセーでは戦えん
だろう。そうじゃないか？ドライブ？」

『う〜くん微妙なところね。確かに、天わたしたち龍クラスじゃあ届かない。

でも、龍王クラスなら戦えるわ。むしろ勝つてしまおうかも。』

「ほう……龍王か……」

『まあ、もちろんバランス・ブレイカーを使っただけど。』

「どちらにせよ、今はその時じゃあない。」

「そうだね。僕は頑張るよ。修行も、研究も。だから、ニトラ、ドライブ。力を貸してほしい。」

僕は再び決意を明かし、お願いをする。

「ふっ、いいだろう。だがイツセー。私はな、魔法のことに関しては
うるさいぞっ。」

「うん！覚悟はしてるよ！」

「そうか、では厳しくいかせてもらう。弱音を吐くなよ？」

「もちろんだよ!!」

「ふふふ、よろしい。」

ニトラは嬉しそうに言った。

『じゃあ、私は神器のことで、バランス・ブレイカーを教えるわね。
といつても、イツセーはバランス・ブレイカーの域を既に超えてし

まっているから、私でも教えられることは無いかもしれない。だから、こつちも研究、解析、みたいなことになるかもね。はつきり言つて【神器】の可能性を試すことになるわ。こんなことは前代未聞だから。』

「うん、わかったよ!!あ、そうだ、このこと、取りあえずおじさんに
謂わなきや。」

こうして、僕の新しい生活がスタートした。

でも、この時の僕は思いもなかった。まさか、こんなことが起きるなんて・・・

t o b e c o n t i n u e d

第貳章 修行編

NO, IX 〽新たなるスタート〽

—イツセーSIDE—

チウンチウンチウン

空が明るくなってきた、窓に朝日が差し込んでくる。小鳥たちがまるで朝が来ていると知らせるように鳴いている。

その音によって僕は目を覚ました。そしてこの日から、僕に与えられた、新たな日のスタートだ。

昨日、僕はおとーさんとおかーさんのアーティファクトを整理しながら、ニトラとドライグに僕のこれからと決意を打ち明けた。

僕はニトラとドライグに反対されるのではないかと心の中では思っていた。でも、そんな心配はいらなかった。二人は心よくそうか、がんばれ、と認めてもらえた。それどころか、僕を内側から支えてあげる、と言われた。僕はそれがうれしくてたまらなくなった。

そして日が経って、新らなる日が来た。僕は新たな日に胸を躍らせながらベッドから飛び起きて着替えて、朝食の準備のために自分の部屋を後にする。

『おはよ♪イツセー♪今日も早いね。』

移動しているとき、ノリノリといった感じの声で僕に挨拶してくれたのはドライグ。僕の宿している【神器】ブーステッド・ギア 赤龍帝の籠手に宿っているドラゴンだ。

そして僕の相棒である。

「あ、おはよう、ドライグ。なんか勝手に目が覚めちゃうんだよ。」

『そうなの♪規則正しくていいわね♪』

「ニトラは起きているの？ドライグ？」

「起きていますぞ、もうとっくにな。」

ニトラの様子をドライグに訊くと、ドライグの応答を聞く前にもう一人の声が聞こえてきた。そう、この凛々しくて透き通るようなきれいな声の持ち主、ニトラだ。口調はいかにも清楚な女性ってわけじゃ

ないけど、不思議なほどにしっくり来ている。

「ああ、ニトラも起きてたの。おはよ。」

「おはよう、イツセー。」

僕らはあの日。僕の人生が一気に変わったあの日から、挨拶を忘れずにしている。おとーさんとおかーさんが居たときのように……そんな日常をくれるドライグとニトラには感謝している。

そうしているうちにおとーさんとおかーさんの部屋に入る。魔法の研究はここでやることにした。全てを移動させるのは骨が折れるからね。

「よしと、じゃあ始めるとするか。」

「そうだな。」

「ん〜と、じゃあ最初はこの魔法書から始めようかな。」

手に取った魔法書を開くと僕の知らないことが記してあるものが多い。それらを理解していく。それが基本である。そしてそれを行使できるようにしていく。

「え〜と、ここがこうなつて……」

「イツセー、そこは〜〜〜だ。」

「ああ、そうか。わかったよ。」

たまにニトラに助言や指摘をもらいながらやっていった。そんな生活を僕は送っていった。

「イツセー、大分時間がたったのではないか？」

しばらく魔法の研究をしていると、ニトラからそう聞かれた。

「う〜と、うわっ!!もう夜になつてる。全然気が付かなかつたなあ。」

「イツセーはとんでもない集中力だな。ここまで没頭し続けるのか。」

僕はニトラに半分呆れられながら言われる。

「う〜ん、なんか魔法のことになると他のことが頭からすっぽりと抜けてき、何も聞こえなくなったりするんだよね。」

僕はニトラにありのままのことを伝えた。そう、僕は魔法の研究をしていると、周りの音が一切聞こえなくなつてそれだけにのめり込む

こんでしまう。でも、その感覚は不思議で魔法のことに集中できるからとても気持ちがいい。

「まあ、それだけ一つのこと集中できるのなら効率もあがるだろう。」

「そうなんだけど、なんかとても疲れるんだよね。」

僕は今へロへロの状態にある。運動しなくても、ここまで疲れるもんなんだ。こんなに力を注いだのはなんだかんだ初めてだ。正直、あるとき悪魔どもを抹殺した時より疲れている。

「それは当然だろう。人間の体にも限度はあるだろうな。しかし、イツセーはもはや常人の域ではないな。」

「え、そうなのかな？」

「でなければ、周りの音が聞こえなくなるほど集中力を極限まで高め、なおかつそれだけの長い時間持続させられないさ。」

僕はニトラにそう評価される。嬉しいな。

そんなやり取りをしながら研究材料一式を整理してまた明日できるようにして部屋を出て、ダイナーの準備をしていると、ドライグが話しかけてきた。

『イツセー、魔法の研究終わった？』

「うん、終わったよ。」

僕は少し疲れた声で答えた。

『お疲れ様。そんな長い時間やっていられるなんて凄い集中力だね。イツセー、疲れてるでしょ？』

ドライグに的確に当てられる。

「うん、ホントに疲れたよ。」

『今日は早く寝た方がいいわよ。』

「うん、そうする。」

『ふふ、素直ね。私はそんなイツセーが好きよ？』

「ありがとう。僕もドライグのこと、好きだよ。」

僕はドライグにそう言われてうれしかった。なので僕もありのまま、本心を伝える。

『っ！あつ、ありがと、イツセー。』

ドライグの様子が一瞬おかしかった……顔も赤い。まあいいか。大丈夫みたい。

そんなドライグのことを思いながら、デイナーを済ませ、入浴をして自分の寝室wへ向かった。ベッドに倒れ込むと、睡魔に襲われ、その日はすぐ眠りにつくことが出来た。

―数日後―

「よつと。」

今、僕は人気のない場所にいる。

今日は午前で魔法の研究を切り上げ、【神器】の扱いを修行するためだ。ここまでは自宅から結構離れている。そこまで重力魔法を自身に掛けながら移動した。

『よし、じゃあ、始めよつか、イッサー。』

「うん。」

僕はドライグの言葉に頷く。僕は集中し、とある名を叫んだ。

ブーステッド・ギア
「赤龍帝の籠手!!」

僕がその名を叫ぶと、自分の左手に赤い籠手が出現する。

『出したわね。まずはその状態だけでやってみましょう。』

「分かった。」

『Boost!!』

一度目の倍加がかかる。そしてそのまま自分の周囲を取り囲む巨大な岩などに魔法も織り交ぜながら攻撃していく。

ドゴオ!!ズガツ!!

岩は大きな音を立てて、粉々になっていく。このとき、僕が自身に掛けた重力魔法は倍加で体が軽くなってしまっているのでその都度強化している。

『イッサー、そのまま、禁手よ!!』

「うん!!」

ドライグにいわれた通り、僕は禁手、バランス・ブレイカーに至る体勢に入る。

バランス・ブレイク
「よしっ!!禁手!!」

!!

『僕は何回やったかわからないほど【倍 加】を使って、自分を強化して、山に突進した。そして、

『やあっ!!!』

ズガアアッン!!!

思いつ切り、拳を山にぶつけた。すると・・・

カツ!!ドゴゴゴゴオオオオン!

『・・・す、すごいわね・・・イツセー・・・』

僕が標的にした大きな山がきれいさっぱり消えていた。これにはドライブも引いていた。解せん。

「まだまだだ!」

僕は倍 加の状態を保ちつつ、空中に浮かび、とある魔法を発動させる。

そう、あの時悪魔を葬った魔法、広域殲滅魔導収束砲だ。それを、消した山の隣の大きな山に向ける。

「行けっ!!」

ドウツ!!!

ぶつとい青白い光が山にぶち当たる。すると、これまた大きな山が一つ、きれいさっぱり消え去った。

「はあ、はあ、はあ・・・」

流星に一気に力を使ったせいで、肩で息をするくらい消耗した。だが、高めた【倍 加】はまだその力を失っていないし、禁手も解けていない。

・・・まだやれるな。

『・・・』

あれ?そーいえば、ドライブがさつきから何もしやべっていない・・・

そんなことはお構いなく、僕はもう少し、修行を続けた。

ドサッ

乱暴に腰を下ろした。

あれからしばらく修行を続けた。

僕は半分疲労が来ていたので、禁手を解除して休憩を取っていた。ただ、どうせ休憩するなら休憩にピッタリなところにしよう、このあたりで偶然見つけた景色がとてもきれいなところで一休みしている。

ザーザーと川の流れる音も聞こえてくる。目の前にはとてもきれいな湖が広がっている。川の水も澄んでいてとてもきれいだ。飲んでも問題なかった。

ホントに、絵にかいたようなところだ。

「ふうくくく結構やったなあくくく」

と疲労もあって、こんなふうに自然と口に出ていた。しかし、とても気持ちの良い疲れでもあった。魔法の研究をしているときは、ずっと座ってばつかだったからなくこんな風に体を動かすのも悪くない。修行も兼ねているけど。

『イツセー、取りあえず、お疲れ様。』

僕が物思いにふけて、視界に広がる景色を遠目で見ていると、ドライグが声をかけてきた。

「うん、中々修行になったんじゃないかな？」

僕はドライグにそう訊いた。

『なったどころじゃないわよ!!何なのアレ?禁手になったかと思えば、倍加をあんな回数軽々と行使して、拳であんな大きな山を粉碎したり、魔法で山一つ消したりして!いきなり飛ばし過ぎよ!!あんな芸当、もはや普通じゃないわよ!』

ドライグは声を荒げる。

へふっ、開いた口が塞がらないとはまさにこの事だな・・・

へアハハハハ・・・

すると、ドライグの言葉にベルザードさんとエルシャさんが同調している。そんなにおかしいかなあ・・・僕はベルザードさんに訊いてみた。

「え?でも、ベルザードさんもあれくらいできるでしょ?」

へいや、出来ねえよ!?俺は切り札使つてようやくあれ半分消し飛ば

せるかどうかってとこだよ！」

「いやいや、ベルザードも十分おかしいからね？」

「でも、全盛期のドライグの方が凄いいよね。あれくらい簡単でしょ？」

僕はドライグに期待をもっていた。

『え？わ、私？た、確かに全盛期の肉体があつたころはあれくらいできたけど……』

ドライグからは僕の期待していた通りの答えが返ってきた。やっぱ、凄いな……ドラゴンは。僕じゃ、まだ届かないな。

「じゃあ、僕はまだまだだね。あれくらい片手間でできないとね。」

『いやいや、イツセー？それはおかしいからね？あれが軽々出来たらもう人間じゃないからね？』

ドライグは声を震わせながら言う。

「うん。そうなるつもりだよ。」

「……」

と僕が言うと、みんな絶句してた。

「ハハハ……イツセーは一体どこまで強くなるつもりなんだよ……」

「そりゃ、もちろん、どこまでも！」

『うふふ、どこまでも、か。でも、イツセーならホントにどこまでも行けそうね。』

「ああ、何となく想像できた。」

そんな会話をしながら僕は休憩をしていた。

そんな中、僕は気になっていることを言った。

「ねえ、ベルザードさん。」

「なんだ？」

「ベルザードさんの言っていた切り札ってなに？」

「ああ、そのことか。」

「そういえば、言っていなかったわね。ねえ、ベルザード、この際だから話したら？」

『私もいい機会だと思わよ？』

「へそうだな。そんじゃ、話すとするか。」

僕はとてもわくわくしていた。最強の赤龍帝の真の力とは何なのか。それをとても知りたかったことの一つだ。

「俺の切り札って言うのはな、言っちゃえば、【覇龍】のことさ。」

僕はその言葉に絶句した。あの力なのか・・・しかし、僕は何か引っかけた。ホントにあの力なのかと。

すると、僕が抱えている疑問はすぐに消え去る。

「ああ。だがな、イツセーの知っている【覇龍】ではない。」

「僕の知らない、、、？【覇龍】、、、？」

僕はますます興味深くおもった。考えてみれば、あの強さを持っているベルザードさんの切り札がただの覇龍なわけがない。

「その覇龍って・・・？」

「それはだな、【覇龍】を進化させた奴といったものだ。」

「覇龍の進化?!?!」

僕は驚きのあまり声を荒げた。あの禍々しい力を・・・進化させた・・・？それは一体どういうものなのか？すると、その先はドライグが答えた。

『ええ。ベルザードは当時、【覇龍】の危険をいち早く感じ取った。そして、覇龍を使わない方向で生きていった。その選択は正しかったわ。でも、ベルザードはあろうことか、修行を続け、【覇龍】を進化させてしまったのよ。初めてのことで、私も驚きを隠せずにはいられなかった。こんなこと、初めてだったもの。』

覇龍を進化・・・そんなことをやってのけるなんて、やっぱりベルザードさんはすごいなあ。これが、歴代最強と言われた所以なのだろう・・・

「ここで僕はあることを聞いた。」

「ねえ、それって、その・・・力に飲まれたりとかはしないの？」

『結論だけ言うとね、その心配は全くないの。』

「ええ?!ほ、ほんと!?!」

僕は驚きが頂点に達する。

『ええ、全くね。ベルザードは覇龍を全く力に飲まれない、理性を保てるような方向に独自に昇華させたわ。しかも、その力も普通の覇龍以上。まさに、最強という存在だった。』

「す、すごい……」

僕はゴクツと唾液を飲み込んだ。

『ええ。その名も、朱紅の極覇龍☒エヴァンスヴィル・エクストリーム・ドライブ☒。ベルザードだけの覇龍よ。』

「朱紅の極覇龍☒エヴァンスヴィル・エクストリーム・ドライブ☒……紅き覇龍……」

かっこいい……僕は直感でそう思った。

〈あれを使うときなんてのは滅多に無かったがな。〉

「それでも、凄いよ!!ねえ、もしかして、エルシャさんもなんか覇龍を進化させてたとか?」

僕はエルシャさんにもなにかあるのではない、訊いた。

〈いいえ、私はベルザードみたいな昇華をさせることは出来なかったわ。せいぜい、覇龍を完全に制御することだけだったわ。10分くらいだけど。〉

「ええ!覇龍を完全に制御できたの?!」

僕は予想は外れたが、とても凄いことを聞いた気がする。

『エルシャは女性ながら、覇龍を完全に制御してね。もちろん、命を削り続けるなんてこともなくね。ホント、この三代は驚かされてばっかだったわ。』

「ベルザードさんは覇龍を独自に昇華させ、エルシャさんは覇龍を完全に制御した。やっぱ、凄いね。二人とも。流石は歴代最強の赤龍帝だ!!」

〈うう、イッサー……ほめても何も出ないわよ?〉

〈真なる歴代最強のイッサーに言われても嬉しくないぞ……それに、俺の切り札をもってしてもイッサーのあの禁手には届いていないかもしれないのだぞ。〉

『ホントね……さらに私の【?☒の焔火】までもできるものね……』
〈ホント、今代の赤龍帝……イッサー君は凄すぎね。〉

!! Boost!! Boost!! Boost!!』

「はあ!!」

さつきよりも倍加をし、また狙いを定めて攻撃をしていく。
ドゴツ!!ズウン!!!

人の気配が全くないこのあたり一帯には常人が聞けば一発で気絶するくらいの騒音が鳴りひびいていた。

「ふう、今日はこれくらいにしておくか・・・」

またしばらく修行を続けていたが、もう辺りは暗くなっていた。
いい時間になったので今日は切り上げて家路についた。

地形が変わり、クレーターだらけになった地を背にして・・・

『イツセー、これからはもう少し抑えてほしいな。』
すると、家に帰る途中、ドライグは言う。

「いいけど、どうして?」

『神器がね、もう少しでオーバーヒートするところだったのよ。
イツセーのパワーについていけないみたい。』

「ええっ!そんなことあるの?!」

僕は驚いた。まさか神器の方が追い付いていないなんて。

『いいえ、今まではこんなことあり得なかったのよ?』

「なら、それは一体・・・?」

『そうね・・・これは推測でしかないのだけれどね、イツセーのあの倍加といい、無茶な修行といい、急にあのレベルまで力を上げて力を振るった。それもあると思うけど、一番はイツセーのあの亜種とも、
上位種とも言えるあの禁^{バランス・ブレイカー}手ね。』

「僕のバランス・ブレイカーが?もしかして、ドライグの封印された能力の【透 過】だったり、ドライグのあの絶技、【?☒の焔火】を目覚めさせたから?」

『ええ、恐らくね。しかもイツセー、今日その力をフルに使ってたから。』

「ああ・・・確かにそうだった・・・」

そう、僕は【倍加】で身体を強化したり、魔法を使ったりだけじゃ

なく、禁手の武器、方天戟ハルバードを使ったり、【?・□の焱火】も発動させた。あの焱は本当に凄すぎる。ほんのちよつとでも大地を灰にできる。『イツセーはあの焱を使い過ぎよ。あれは加減を間違えたらホントにやばいものなのよ?』

「うん・・・そうだね。」

僕は少し反省する。

「それでも、【?・□の焱火】、凄だねドライブ。」

『ええ、当然よ。全盛期の私の切り札ジョーカーだったのだから。』

「ジョーカー、か。ピツタリだね!!」

『まあ、ね。神をも焼き尽くす事も出来たの。』

「ええ!?!神をを焼くことが出来るの!?!」

『ええ。』

今日一番驚いた。神・・・神格を持つ者でさえ、灰燼に帰すのか。「す、凄い・・・なるほど、そんなに凄いなら、封印されるのも当然だね。」

『そうね。自分をも殺せる力なのだから、封印したのもあるけど、神器という器でも私の焱には耐えられなかったから封印したのでしゅうね。』

「でも、僕はその封印されし力を解いてしまった・・・」

『ええ、しかも、あんなに連発したら、神器もオーバーロードしちゃうわ。イツセー、これから、気を付けてね。』

「うう、わかったよ。」

ドライブにそう言われては仕方ない。焱の威力を最低にして神器に負担を掛けないようにしないと。

『まあ、これから神器の修行で考えていきましょう。何か方法があるかもしれないわ。私の焱をフルに使える方法を見つけましょう。』

「うん!!頑張るよ!僕。」

『その意気よ、イツセー。あなたは赤龍帝の再来、全盛期の私自身になるかもしれないわ!』

そうして、僕たちは神器を用いての初修行を終え、帰宅した。

—イツセーSIDE OUT—

NO. X 特訓

—ドライブグSIDE—

〈このとんでもない騒音なんなの!?ドライブグ!〉

エルシャは声を荒げながら訊いてきた。

『イツセーが修行として、神器使って山を粉碎しまくってる音よ。』
私はありのままのことを言った。

〈ありや、マジでやばいな。ホントに俺のあの切り札を超えているかもな。〉

すると、あり得ない、なんて顔をしながら冷静に分析するベルザード。いま、まさにとんでもないことを聞いたような気がする。

〈ベルザード、それってあなたのあれを?〉

〈ああ、間違いねえな。俺の切り札、朱紅の極覇龍□エヴァンズヴィル・エクストリーム・ドライブ□を超えてやがるな。〉

ベルザードは冷静に言うが、これはとんでもないことだ。歴代最強で覇龍を進化までさせ、白龍皇とも戦い、今まで最高となる、3人の白龍皇に勝利したベルザードがだ。

しかし、私も認めるしかない。

〈でも、パワーなら同じじゃない?〉

エルシャはそういうが、ベルザードはすぐに否定する。

〈いや、パワーも負けているだろうな。山をあれだけの数粉碎し続けられるほど、俺は強くない。しかも、イツセーが覚醒させた【?□の焔火】を使われたらおしまいさ。〉

『そうね。イツセーのが繰り出すあの焔、威力は全盛期の私の焔6割くらいといったところよ。確かに私の全盛期の焔ではないけれど、それでも威力は十分すぎるほどね。悪魔の中でも結構上位にあたる実力を持つ奴らを触れただけでも一瞬で灰にした・・・ベルザードが切り札を使ったとしても、少しでも切られれば、ただじゃすまないわよ。』

へそ、そこまで強いというの・・・」

「ドライグの言うことはあつてと思うぜ。俺も、最初にドライグの焔、【?】の焔火」を目の当たりにしたときはゾツとしたからな。あの焔はやばいって本能でも感じ取った。あれを向けられるところを想像しただけでも、冷や汗が止まらない。」

私の力を振るう者を傍からこうして見ているけど、恐ろしいと思った。あの焔はこんなに恐ろしい技だったのか。私は改めてその技の脅威を再認識した。

まあ、もつとも恐ろしいのはその力を振るっている、イツセーなんだけど・・・

山が一瞬にして平地になり、平地が巨大なクレーターになるイツセーの修行はしばらく続いた――

・・・・・・・・・・

「ふう、疲れたな〜今日は結構やったな〜」

結局、イツセーは手を緩めず、こんな日が暮れるまでやっていた。あたりはもう完璧な夜になっていた。

そんなこんなで今日の神器での初修行は幕を閉じた。

修行した場所を離れる事数十分、イツセーは自宅に到着した。

「ただいま。」

イツセーは誰もいない家に帰ったとしても、無言で入らない。必ずただいま、という。

この光景を見てると、今でも胸が苦しくなる。イツセーの表情も少しだけ寂しそうな顔をする。そんなに大きな変化ではないけどね。

「ふう、今日は疲れたな〜。」

イツセーはそんな雰囲気打ち消すように夕食を準備しながら今日を振り返る。

『そうね。イツセーがバトルジャンキーのように暴走しまくるからね♪』

私は冗談交じりにイツセーに言う。

「ええ〜ドライグ、暴走はしてないよ〜いただきます、と。」

『うふふ、冗談に決まってるじゃない♪』

こんなやり取りを私はとても気に入っている。

「ふむ、お疲れだったなイツセーよ。」

イツセーが夕食を食べ始めているとき、今まで会話に参加してこなかったジルニトラがイツセーに声を掛けた。

「あ、ニトラ。うん、今日は頑張ったよ。」

「ああ、すっかり見ていたぞ。」

ニトラ、ちゃんと見ていたのね。こーいうところはちやつかりしてるんだから。

「それで、どうだった？」

「ふむ、あの時よりも力は上がっているぞ。良かったな。日頃の鍛錬がこうして生きていな。ドライグの神器、ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手というものは特性上、持ち主の自力が強ければ強いほど、その価値というものは格段に上がっていく。そうだろ？ドライグよ。」

『ええ、もちろんよ。』

ニトラは神器なんてものを知らなかったはずだけど、こうして的確に射ている的確なことを述べている。流石ね。

「毎日の魔法に加えての鍛錬が成果に表れている。素晴らしいぞ、イツセー。」

「ホント？嬉しいな。ニトラにそう言ってもらえて。」

ジルニトラのイツセーへの評価はとても高いようだ。私としてもそれは嬉しい。今代の宿主で愛しのイツセーの成長をこの目で見ることががね。しかも、イツセーは子供ということもあって、可愛い弟みたいな感じだ。

へうふふ、イツセー君、可愛いわよね？

そんなことを思っていると、エルシャは私の心を読んでいるかのようには聴いてきた。

『ええ、そうね。本当に。』

そんな可愛いイツセーが成長していることを実感していると、ジルニトラは耳を疑うようなことを言った。

「それにしてもイツセーよ、良くあそこまでできるようになった

な。」

「うん!!だって、頑張ったもん!!」

「それでも私は驚いているぞ?重力魔法を身体に掛けているのに加え、魔力の制限魔法までかけているのだからな。使える魔力をあそこまで制限してよくあの攻撃を繰り返せたものだ。」

『ええ!?ちよつとまっつて!それどういうこと?!』

私は二人の言っていることが理解できないので問いただした。

「ああ、私の提示した修行でな、イツセーには重力魔法で体を重く体感させ、使える魔力を制限させたのだ。魔力を制限させたことで、私を介してイツセーに流れる私の魔力は無限から激減したのだ。具体的に言えば、この世界でいうならば、あの時の悪魔レベルの魔力量と行ったところか。まあ、そうでもしなければ、今のイツセーが神器を使えば山どころかあの一带全てが更地と化していたからな。」

「うん!でもドライグのおかげであそこまで威力出せるよ!」

『.....』

私は何も言えなかった。魔力を制限したのにもかかわらず、山一つ消せるくらいの威力を出せたってこと?いくら神器の力で底上げできるといってもあのレベルの魔法を繰り返すには相当な魔力がいるはず...そしてあの威力だ。

「イツセーの修行あってこそのことだろうな。」

『と、とんでもないわね。と言うか、私知らなかったわよ?イツセーが色々と制限をかけているなんて。』

「うん、まあ言っただけだからね」

『次からは、ちゃんと行ってよね?』

「うん、わかった!」

『ありがと♪』

とイツセーはすぐに了承してくれた。

イツセーは夕食を食べた後、身体を洗い、すぐに自分の部屋に向かった。そうだよ、今日はとてつもない修行をこれでもかというくらいしたものだね。疲れて当然ね。

ふふふ、あくびなんかしちゃって。可愛いんだから♪

「じゃあ、僕もう寝るよ。」

『ええ、イツセー。今日はしつかりと休んで。あれだけやったんだから疲れたでしょ。』

「うん。そうだね。じゃ、おやすみなさい。」

『おやすみなさい、イツセー。』

イツセーは横になると、すぐに寝息を立てていた。眠りにつくの早いわね・・・相当疲れてたのね。

さて、イツセーが眠ったところで、私は私ですべきことをやろうかしら。この時間しか、ないからね。

『ねえ、ジルニトラ。ちよつといい?』

『む?お前から声をかけてくるとは珍しいな。』

『え?そう?そんなに珍しいかな?』

そう言われてみれば、珍しいような、珍しくないような・・・微妙なところね。

まあ、そのことは置いておいて、本題に入る。

「まあ、冗談はさておきだ。なんの用だ?」

『実はね、私と戦ってほしい。』

すると、ジルニトラはきょうとんとしたような表情をしていた。珍しい、と言うか以外ね。ジルニトラでもそんな表情かおをするのね。

「意外だな、って思っているな。」

そんなことを思っているとジルニトラはまるで私の心を読んでいくかのように凶星を指してきた。

『え、どうしてわかったの?まあ、その通りだけど。』

「私だつて驚くときは驚くし、怒るときは怒るさ。機械ではないのだからな。」

『じゃあ、どうしてそんな顔をしたの?』

「いや、ちよつと意表をつかれただけだ。てつきりあなたはあの時に約束した例の人化の術のことを教えてくれ、なんていうと思ったのだがな。まさか、戦ってくれ、なんて言われるとは思ってもみなかったよ。それが少しそう思っただけのことさ。」

なるほど。そういうことね。でも、私はそれと同時にある感情が芽

生えてきたのだった。

『確かに、それもあるけどね。』

「そうだよな。イツセーに褒めてもらいたいもんな。」

『そうそう………って、そうじゃなくて!!』

うう………また凶星を突かれてしまった………

今の私、絶対顔赤い………

「なんだ？違うのか？」

『あつ……いや………違わないけど………ってからかわないで!!』

うう………さつきからジルニトラのいいようにされてる………

「わかったわかった。済まなかった。」

『まったく………ただ、貴方と戦ってみたい。そんだけよ。単純でしょ？』

そう。私の中で潜んでいた思い。戦闘欲。私はジルニトラと言う存在を知ってからというもの、その思いはたしかに強くなっていった。私たちの知らない未知のドラゴン………その強さ、格、そしてそれらが支配する世界。すべてが未知の存在。そんな奴らとも戦ってみたかった。私がどこまでやれるか、それも知りたかった。

私はドラゴンでも数少ない、雌だ。中には私を雄だと思っている奴もいるけど。そんな私でも、いつの時代も強者たちと戦ってきて、そうして今の力を入れた。この世界では最強クラスとなった。そんな私が挑戦者になるほどの存在。あの無限の龍や次元を泳ぐドラゴンと対峙した時とはまた違った感覚だ。いや、むしろ、ジルニトラという存在に出会った時の方が印象が強かった。胸が躍った。

私はそんな思いを抱きながら、ジルニトラを見る。

そのジルニトラはというと………

「クッククック………ハッハッハッハッハ………」

笑っていた。馬鹿にされている、そんな笑いではないような気がする。

『それで？答えは？』

私はそれでも、すこしイラつとしながらも訊いた。

「いや、すまない。ちよつと嬉しくてな。」

『嬉しい?』

「ああ。私と戦いを望むか。ドライグ、やはりそなたもドラゴンだな。勝てないと知っていながら、それでも挑むか。ふっ、そなたは雌だというのにな。」

『あなただつてどちらかと言えば雌でしょ? そんなに綺麗な容姿を
していて。イツセーに褒められていたくせに。』

私はここでジルニトラに反撃をする。

「む? この姿か? というか、ドライグ。あなたは少し根に持つのね。
まあ、ほめられることは嫌じゃないけど。」

『そう言うわりには顔、赤かったけど?』

「っ・・・う、うるさい!」

私の返しにジルニトラは言葉を詰まらせ、少し顔を赤らめた。人間の姿になつているので、さらに分かりやすい。まあ、私から見ても、ジルニトラは美人だが。

「とっ、とにかく、私と、戦う、そーいうことでいいんだな?」
ジルニトラはさっきのことはなかったような振る舞いを見せる。

『ええ。楽しみだわ。』

〈ねえねえ、二人とも何してるの?〉

ジルニトラとそんなやり取りをしていると、こちらにベルザードとエルシャが近寄つてきた。

『これからジルニトラと軽く手合わせするのよ。』

私がそう答えると、二人は驚愕した。

〈!? お、おいおいドライグ、それ本気かよ?〉

〈ドライグ・・・し、死んじやだよ?〉

『二人とも・・・そんな激しくしないわよ・・・』

〈いやいや、だつてよ・・・グレートレッドすら片手間で捻りつぶせるといふわけわからんレベルの強さなんだろう? ジルニトラは。〉

〈そうよ、ドライグ。あなたなんてジルニトラにとつたら赤子同然よ? ホントに大丈夫?〉

エルシャとベルザードは心配をしてくる。余計なお世話なんだけどね・・・

『そうだとしてもよ。むしろ、こんな存在が近くにいるのだから、戦わなきゃもつたないじゃない。こんなこと、長く生きていてそうなのよ？他のドラゴンたちだって知らないことだからなおさらね。』

二人に私はこう返した。

〈はあ。ドライブグは相変わらずだな。〉

〈ふふふ、そうね。それでこそ、赤龍帝、ドライブグね。〉

二人はそうやって納得する。

「さてと、では始めるとするか。」

ジルニトラはこちらの様子を見て、準備に入る。

そして、ジルニトラの体が光り輝いた。そして、その光はどんどん眩しく、大きくなっていき、最終的に巨大なドラゴンの姿となる。それは、初めて会った時と同じ大きさ。グレートレッドを軽く超すような体躯だ。わたしなど、手にすっぽり余裕で入ってしまうほど。

〈……ほーー〉

〈何度見ても、大きいわね〉

ベルザードとエルシャは呑気に見上げていた。この二人は見上げることしかできなかつた。だが、私は違つた。

『っ!?!?』

巨大化し、真の姿となつたジルニトラは私を目を向ける。その眼はまさしくドラゴンの目。闘志を秘めた綺麗な黒と緋のオッドアイ。

しかし、実際問題、今からこのドラゴンと戦う、と思うと腰が引ける。尋常じゃないオーラを醸し出しているジルニトラ。足がすくんで来たかもしれない……この私が、威圧されただけでこんなになるなんて……それほどヤヴァイ奴なのね……

「ふむ……ドライブグよ、もしかして……」

『っ!?!?』

ニトラは私が少し、怯えていることを悟つたようだ。

「ふむ……」

私に気圧される、そんな目を向けているジルニトラは何か考え事をしているかのような様子だつた。

そして、何か思いついたようにぱつと顔を上げた。

「よし・・・そうだな。ドライブグよ、そなたとの戦いにハンデをもうけよう。」

ジルニトラから驚きの発言が飛び出した。

私がハンデ・・・？普通、納得できるわけもない。手を抜いてやるといっていると同義なのだから。・・・なんだか複雑だ。

へハンデ、ね。いいんじゃないドライブグ？

そんな風に思っていると、エルシャから助言が入る。だが、言われるまでもない。私はエルシャの助言を受け入れる。

『そうよね。その提案、受け入れる。』

「！」

私は迷いなく、ジルニトラに受け入れるといったら、ジルニトラは驚いた。

『？どうしたの？』

「ああ・・・いや、私ははつきりハンデをくれてやるといったのでな。てつきりあなたの逆鱗に触れたかと思っただけ。」

なるほど、ジルニトラはそのことを気にしてたわけね。

『まあ、確かに、はつきり手を抜いてやる、なんて言われたのに対して怒ってない、なんて言ったらうそになるけど。でも、実力差がわからないほど私は馬鹿じゃないし、むしろそれでも勝てないからちょうどいいわよ。でもね・・・』

『でも・・・？』

『いつか見てなさい！今度はハンデくれる余裕なんてなくしてやるんだから!!』

「！ふっ、ふふふ。」

私がそういうと、ジルニトラは嬉しそうに笑った。

「ドライブグ。やはり私はドライブグのことが好きだ。私はドライブグのそういうところがとても好きだぞ。」

『なっ!?!・・・何言ってるのよ・・・』

ジルニトラの突然の告白に戸惑う。

「ん？いや、私は純粋にドライブグのそのような性格とかが好きって言っただけだ。そなたとは気も合うからな。」

『そ、そうなの・・・』

「ああ。では・・・ハンデとしては、まず一つ。魔法は無しにしようか。それと・・・」

すると、見上げなければ顔を見れないほどの超巨大なジルニトラの体軀は再び輝き始める。

「ふう。これくらいかな？」

『へえ、そんな事も出来るのね。』

「まあね。これも人化の術の延長みたいなものだから。」

ジルニトラを覆う輝きが消えると、先ほどの巨大な体軀から一転、私と同じサイズまで小さくなった。

「さて、これでドライグと同じくらいの大きさになったことだしな。始めようか、ドライグ。」

そういつてジルニトラは再度、私を見る。同じ大きさになったことで目線が同じなのだからか、先ほどよりも威圧感はない。だが、プレッシャーや伝わってくる波動は変わらない。否、むしろ小さくなったことでさらに密度がまっているような気さえする。

『ええ、始めましょうか。ジルニトラ。』

私も負けじとジルニトラに目を向ける。

「つふ、良い眼だ。それこそ、真のドラゴンの眼。それに綺麗な眼だ。私はその眼も好きだぞ？はあ。これでまた、ドライグの好きなところを一つ、見つけてしまったな。」

『くっ・・・もう精神攻撃のつもり？誉めても何もでないわよ？』

平気で私に好きとか恥ずかしいことを言ってくるジルニトラ。私は少しムズムズしながら言った。

「いやいや、そんなつもりはない。ただ、思ったことを口に出しているだけだ。他意はない。」

つく、何なのよ。イツセーと同じでこいつもとんだ天然ジゴロね。しかも性別関係なしにこーいうこと言ってくるから余計質が悪い。すると、ジルニトラはそんな空気を仕切り直すように謂う。

「それにしても私は嬉しいぞ？こちらの世界のドラゴンと戦えると

はな。楽しみで仕方がないぞ?」

ジルニトラは嬉しそうだ。

『ええ、私もよ。』

私とジルニトラとの距離はそんなに離れていない。せいぜい20メートルくらいだ。その短い間の空間は今までとは違う空気が流れている。

〈これは、楽しみだな。〉

〈そうね。ドライグー!少しは善戦してねー!〉

ベルザードとエルシャは楽しそうにこちらを眺めている。

「さあ、来い。」

『っ!』

私は一瞬でジルニトラとの距離を詰める。

そして、ジルニトラに拳で攻撃を仕掛ける。

「ふっ・・・」

ドゴおおおん!!!!

ジルニトラは涼しい顔をしながら私の拳を難なく受け止める。しかも、指二本で。

「まだまだ、甘いな。ほら、もっと来い!」

『分かっているわよ!!』

ジルニトラにカウンターの間時間すら与えないよう連続攻撃を仕掛ける。お互い、音速を軽く超えるようなスピードでかち合っていく。もうすでにベルザードとエルシャが居たところから離れ、二人は見えない。

私は先ほどから攻撃をしかけている。だが、その攻撃は一度たりとも有効打には成らず、全て受け流される、もしくは無効化されていく。ジルニトラ全く反撃をしてこない。

「ふむ、なるほどな。中々の強さだ。」

ジルニトラは交戦中にも関わらず、余裕のある表情をし、つぶやいた。

『なら!』

ズドン

!!!!!!!

「ぬっ!？」

私は今までとは違う攻撃をしたためたか、初めてジルニトラの態度が変わった。

『なるほどな。今の。ドライブグの【倍加】か・・・』

『ええ。忘れたわけじゃないよね？私の能力。使わせてもらうわ!!』

倍化を使って、自分の力を強化しながらさらに追撃する。戦いはより激しさを増していく。お互いの速度も先ほどよりもはるかに速く、音も尋常ではない大ききさになっていく。

『ふう、なるほど。倍加でここまでになるか。流石だな。』

だが、ジルニトラは今だ涼しい顔を変えていない。それどころか、余裕がまだあるって感じだった。

『つく、さつきから反撃してこないけど、どういうつもり?』

私はやる気はあるのかと思ひ、ジルニトラに訊く。

「これからさ。今まではホンの小手調べ。ここから行かせてもらうぞ。」

『何ですつて「ズドツ!!」うぐっ!!』

そう言ったジルニトラは私の反応スピードを軽く超す速さで、私を攻撃した来た。

私は下に叩き落され、精神世界の床に激突する。

『グッ!どこをどう攻撃されたか、分からなかった・・・』

私は規格外の速さ故に思わず声に出した。何故か痛みすら感じなかった。そんなことを思っていると、ジルニトラはすでに目の前にいた。

『なっ!?!』

『ほら、どんどん行くぞ。ついてこられるなら、ついてこい。』

そこから私は超スピードで攻撃を喰らう。全くついていくことが出来ず、その攻撃の食らい続けた。しかし、最後の方は少し慣れてきたって感じだった。

『はあ、はあ、はあ・・・』

「私のスピードに、少しは慣れてきたな。まあ、本気じゃないけど。」

『くっ！じゃあ、これはどう?!』

私はジルニトラに向かって、我がジョーカーである絶技、【?】の焔火」を放つ。

「!?ほう、イツセーが使っていた、あれか!」

ジルニトラ待っていました、と言わんばかりの顔をする。

カツ!!ズドオオオオオオオオオオン!

『なっ!?!』

驚いたことに、ジルニトラはそれを避けようとせず、喜々としてそれを受けた。

しかし……

「ふう、いいねこれ。中々の威力だ。まあ、あいつらになら少しは効くかもな。ああ、魔法は使ってないぞ。もろに受けたから、」

燃え盛る焔の中からは全くの無傷であるジルニトラが出てきた。

ノーガードで無傷……色々とオカシイ……

『やっぱり、ダメか……』

私の焔でもジルニトラは倒せない。と思っていたけど、全くの無傷。分かってはいたけど、やはり私にはくるものはある。

「さあ、続けようか。」

『ウグッ!』

ジルニトラは超速で私との距離をゼロにし、容赦なく攻撃してきた。

そのあとと言うまでもなく、ジルニトラに蹂躪された。

へドライグ、お疲れ様。ボロボロね♪

『ああ、何もできなかったよ。』

私は攻撃され続けた結果、元のベルザードとエルシャが居たところまで飛ばされた。そこでこの戦いは終わった。

「大丈夫か?ドライグ。」

ジルニトラは戦った相手である私を心配している。なんてお人よしなのだろうか。

『ええ、平気よ。あなたが手加減してくれたからね。』

「勿論だ。私が力を全力で出せば、そなたの魂ごと消えてしまう。」
〈魂ごとって、恐ろしいなおい。ただだけ規格外なんだよ・・・〉
ジルニトラの言葉に少しヒヤツとしたが、直ぐにそれはおさまった。

「よし、ドライグ、その傷を治してやる。」

『いいわよ、このままです。』

「ダメだ。」

ジルニトラはそう言って、私を魔法で治してくれた。傷はもともと深くなかったので、すぐに終わった。

『ん、ありがとう。そういえば、あなた、一度も私の顔を攻撃しなかったわね。』

「ああ、そうだな。まあ、ドライグは女の子だからな。可愛い顔を傷つけるのは少し心が痛んだからね。男だったらもう少し本気出したがな。」

『なっ!? あ、あなただって、女でしょう!?!』

「まあ、そうだがな。」

「つく・・・これだからジルニトラは・・・」

ここでもジルニトラはこんなキザなことを言ってくる。同性にこんなこといってどうするのよ・・・

〈なあ、ジルニトラ、俺とも、戦ってくれないか?〉

『ベルザード?もしかして戦いたくなかった来ちゃった?』

〈ああ、まあな。ドライグの戦いを見ていたら、俺までも、な。〉

「ふっ、いいだろう。」

ジルニトラはベルザードの要求を了承すると、今度は人化をした。

「ベルザードは人間だから、私もこの姿でやろう。」

〈そりゃ、ありがてえ。〉

「エルシヤはどうするのだ?」

〈私はいいわ。ベルザードの戦いを見ていることにする。〉

「ふふ、そうか。」

誘いを断られたジルニトラは少し悲しそうな表情をしたが、目の前のやる気満々のベルザードに視線を戻した。

そのベルザードは間接をポキポキと鳴らしていた。

〈えらく久しぶりの戦いだな。〉

「さあ、見せてもらおうぞ。【最強の赤龍帝王】と呼ばれたあなたの力を。」

〈よしてくれ、ジルニトラ。俺のその名はもう終わったんだ。それにもう俺は最強から陥落した。その名こそ、イツセーの方がふさわしいんじゃないか?〉

ベルザードは当時付けられていた二つ名のことを話題に出されたが、直ぐに否定した。

「いや、イツセーは帝王というのは私的にはあまりしっくりこない。イツセーは魔法使いだからな。そうだな・・・赤龍魔帝というのはどうだろうか。」

〈あ、それいいかも!〉

『私もいい名じゃないかしら。』

イツセー本人のいないところで二つ名がつけられた瞬間であった。

「さあ、ベルザードよ、始めようか。」

〈ああ、いくぞ! バランス・ブレイク 禁手!!〉

キーン——ドゥーン!!!

ベルザードの体を赤き全身プレート・アーマー鎧が覆っていく。

その光景はとても久しぶりなものだった。

〈ああ、懐かしいわね。ベルザードの禁手。確かにイツセーほどではないけれど、十分すぎる波動ね。〉

「ほう、なるほどな。」

『ええ。ベルザードが現役赤龍帝だった頃、もう既に歴代との実力はもう隔絶していたほどだったからね。』

〈はあっ!〉

ドゴン!!

ベルザードはジルニトラに攻撃を仕掛けるが、全く通じない。

それからベルザードはしこたま反撃を受ける。

ベルザードは覚悟をしたのか、とあるものになろうとしていた。

〈やはり、あれをやるか。〉

『ベルザード、どうやらあれをやるみたいね。』

《―我、至りしは―》

《―□の絶対を赫?に貫きし二天龍なり―》

《―極めるは、天龍の頂―》

《―昇は、赤龍の覇道―》

《―我らは無限を降し、夢幻を誘う―》

《―無限の理と晦冥の夢を穿ちて覇道を進む―》

《―我、赫焉たる龍の帝王と成りて―》

《―汝を、朱紅の幻想と光明の極限へと誘おう―》

《―朱紅の極覇龍□エヴァンズヴィル・エクストリーム・ドライブ□
!!》

紅き輝きがこの一帯を覆いつくす。

輝きが収まると、そこには先ほどとは姿が全く違ったベルザードがいる。

「ほお、それがベルザードの力か！面白い！」

ズドン!!!!

至ったベルザードとジルニトラはなお激しい戦闘をした。

しかし、当然のごとく、ジルニトラに圧倒され、戦いが終わったころには……

へ………<チーン

チーンというお決まりの言葉がお似合いな無様な状態でジルニトラに首根っこをつかまれながら、帰ってきた……

何はともあれ、こうしてジルニトラとの初戦は幕を閉じたのであった。

―ドライブSIDE OUT―

――SIDE――
?????

とある自然豊かなところに、巨大な城、宮殿などが立ち並び、その下には町がある。

その城の中に、一人の男が居た。

白を基調としたローブに身を包み、頭に王冠をかぶっていた。すると、コンコンと、ドアを叩く音はその部屋に聞こえた。

「王よ、私です。」

「入れ。」

「失礼します。」

入ってきたのはこれまた白を基調とした甲冑に身を包んだ騎士だった。腰には剣を携えている。その鞆は白と金が主な色で、輝いている。神聖な気を放っていた。

「どうした？ローレンシア？随分慌てているではないか。」

「王よ！実は——」

「——何？ローレンシア、それは本当か?!」

「ええ・・・確定情報です・・・」

「その情報元は!?!」

「それを知らせた人物は・・・」

「——っ！そうか。分かった・・・下がれ。」

「はっ！失礼しました。」

ローレンシアと呼ばれた騎士はその部屋を後にした。しかし、その騎士の表情はまさに無念といったものだった。

ここに残っている王もまた、同じ表情だった。

「まさか、そんなことが——信じられない・・・」

その王はよほどショックなのだろうか。言葉を漏らす。

「とりあえず、息子と娘にもこのことを伝えるべきか・・・」

王は複雑な表情をして、悩んでいた。

「そうか・・・死んでしまわれたか・・・」

王はそう呟いた後、テラスに出て、しばらく黄昏ていた。

?????

SIDE OUT

to be continue

NO, XI く進化の道筋と魔導書く

—イツセーSIDE—

「えっと、ここが……—であって……」

「そうだなイツセー、ここは……で、そこは——だな。」

「ああそういうことか……ふー、それにしてもこれ、凄い魔法だな。そう思わないか？ニトラ。」

「ああ、まさか、私と同じような魔法をつづついているとはな。全く、イツセーの両親はとんでもないな。この私と思考が同じとはな……」

「ああ、全くだ。なんせ、魔法神と似たような魔法理論を構築しているとはな。父さんと母さんが恐ろしく思えてくるな。流石としか言いようがない。」

よう、俺イツセー。

あれから9年くらいたった。

今の俺も、昔の俺も相も変わらず、こうやってニトラと一緒に魔法の研究を続けている。そして、その合間に神器を使って特訓したりしていた。昔よりも俺ははるかに強くなった……と思いたい。自分自身に多大な負荷を掛けながらの修行に鍛錬。基本に忠実にこなしてきた。しかし、時には負荷をかけ過ぎてつらい時もあった。だが今はこうして乗り越えている。

『大丈夫よ、イツセー。あなたは昔よりも格段に強くなっているわ。そのことはこの私が保証するわ。魔法の研究を優先にしていたから、あまり鍛錬には時間を割けなかったのはあるけれど、十分すぎるくらい成長している。というか、このことは前にもいったわよ？』

「そうだぞ、イツセー。昔のお前と今とでは明らかに違うぞ？生身の状態でもはやあの時の悪魔を間違いないで越しているのだぞ？昔は神器の力を使わなければ、超すことはできなかったのだから。」

俺はホントに成長しているのか、少し不安に思っていると、ドライグとニトラが声をかけてくれた。

「いや、それでも少し心配だな。この頃はあまり鍛錬に時間割けてないしな。」

『もう、心配性ね。イツセーは。少しは自分に自信を持つたらどうなの？昔は幼かったから仕方ないけど、今やイツセーを倒せる者は多くはない。それこそ、イツセーの上位禁手、赤龍帝の焱方天戟 \square ブーステッド・ギア・スケイルメイル・ブレイズ・ハルバード \square を使えば、それこそ倒せるものなどさらに限られてくるわよ。』

「それはそうだが、はつきり言って、今のままじゃ、二天龍レベルには届かないよな？」

『うつ・・・まあ、そうだけど。』

俺の言った言葉にドライグは言葉を詰まらせる。しかし、ニトラは俺に言う。

「イツセー、一人の人間がドライグに並ぼうなど、普通は考えないことだがな。後から聞いた話ではあるが、ドライグを含めた二天龍はその昔、聖書勢力というのはこの世界の組織の中では一番の数を誇っていたらしい勢力と戦った。そんな一勢力をもドライグとアルビオンはたった二体だけでそれらを圧倒していたという話だ。そりゃ、強いに決まっているさ。イツセーは聖書勢力を単騎で上回ろうというのか？」

ニトラは適格なことを言う。確かにそうだ。一勢力を単騎で圧倒できる力を求めるなど、少しばかり傲慢が過ぎるというもの。

「それほど強いのは知っている。けどな、俺は強者と戦いたい。その強者はドラゴン。それらと戦うならば、それだけ強くならなきゃいけないだろ？」

ニトラとドライグは俺の思いを聞くと、二人ともふっ、と笑う。

「イツセーも強者との戦いを求め、力を求めるか・・・やれやれ、もはやドラゴンだな。思考が。はてさて、一体誰に似たのやら・・・」

ニトラは少し苦笑いしながらドライグの方に目を向ける。

『何よ、ジルニトラ。私のせいだって言いたいの？』

「いやいや、そんなことは一言も言っていないが？」

『じゃあ何なのよ？その眼は？』

ドライグはニトラに向けられた目を不満に思っているようだ。

「ああ、誰とは言わないけど、どつかで似たような者を見たなくくと

思って。」

『へえ〜、それは誰よ?』

『さあ?誰だろな〜?』

ドライグとニトラはそのような冗談混じりの軽口をたたき合っていた。聞いていると微笑ましいように聞こえなくもない。だが、放置しておいたら戦いに発展してしまうかもしれないので、ここは俺がおさめる。

「二人とも、俺がこうな思うようになったのは俺の意思だ。まあ、100パーセントそうかと言われれば違うが。ニトラとドライグの二人に影響されたのは事実だが、今は間違いなく俺の意思で戦いたいとおもっている。」

『そう。ふふ、なんだかんだ言って、赤龍帝はやはり戦いをもとめちやうのね。』

ドライグがそういうのも仕方ない。この思考は歴代らと何ら変わらない。

「というか、さり気にも私も入ってたな・・・まあ、しかしだ。戦いを求める、そこだけが歴代、私が消し飛ばしたあの怨念たちとの共通点であって、他は違う。力に飲まれずにここまでやってきたのだ。魔法の研究というものをしながら、無謀なことをせず、着実にここまできているのだ。」

だが、ニトラがそう言ってくれた。大事な人にそう思ってもらえているのは素直にうれしい。

『そうね。イツセーはあいつらとは違うわね。それにイツセーはまだ二天龍にはとどかないって、言っているけど、背中が見えないってほどでもないわよね?ほら、あるじゃない?イツセーが自身に掛けている魔力制限魔法と、重力魔法。あれを解除すればさらに力はあがるじゃない?』

「ああ、そうだったなー」

ドライグが言っているのは俺が自身に制約として掛けている魔法。いわば、パワーダウンをさせている。

『イツセー?まさか忘れてたの・・・?』

「ああ・・・長い時間かけ続けていたから・・・」

そう、俺はその魔力を制限している魔法と重力魔法はあの時から一度たりとも解除したことは無い。年齢をおうことに連れ、その重力もどんどん上げていった。今はこの地球の重力のおよそ50倍くらい。最初はきつかったが、今じゃ慣れてセイクリッド・ギアを使わなくても何ら問題なく日常生活を送れるまでになっている。

「それだけかけ続けていたらわからなくもないがな・・・しかしそれを解除した時はどうなるのだろうか。」

ニトラは解除することを少し楽しみにしているようだ。

「まだ、この魔法を解除するつもりはない。時が来るまで・・・」

「ふっ、なるほどな。戦うときまでか・・・」

ニトラは悟ったようだ。俺のことをよく理解している。もちろんドライグもな。

『ならイツセー、もつと鍛錬しなきゃね。こんどは重力100倍なんて言うのはどう?』

ドライグはさらに負荷をかける提案をする。

「そうだな。50倍にもなれたし、今は鍛錬できないからそうするか。今の重力を乃4倍。地球の200倍で行くか。」

『ええ・・・さらに掛けるの?冗談半分だったんだけど・・・しかもいまの四倍じゃない・・・』

「半分は本気なんだろう?それに最近物足りなくなってきたからさ。」呆れているドライグにそう言って、魔法を唱え、自分にかかる重力をさらに上げる。

ドンッ!

「ぐっ」

自分に重力がさらに強くかかり、身体の重さが増した感覚がした。

『イツセー?大丈夫?』

ドライグが心配してくる。

「ああ。心配ない。むしろいい負荷だな。」

「このようなことを進んでやっているのはイツセーくらいだろうな。」

ニトラは俺の行動に呆れながら言った。

「それでもしなければ、強くなれないだろう？それに俺は人間。一番弱い種族だ。俺にやれることはなんでもやるさ。ドライグや、グレートレッドみたいなの超常レベルの強さをもった者に届かせるにはこれじゃ温い方だろうな。」

俺がそういうと、ドライグは呆れながら言う。

『いやいや、イツセー？私はともかく、グレートレッドは次元が違うからね？あれは私でも勝てないから。』

「たとえばよ、たとえば。」

『引き合いに出すレベルじゃないから、それ……』

ドライグのツツコミが入る。中々切れがある。

「まあ、それはともかくだ。とても鍛錬をしたいが……この魔導書にも大変興味があつてこつちからも離れ慣れん。」

「それは同感だな。実にこれは面白い……」

『もう、イツセー！……少しは私の力も使ってよ……』

「す、すまないドライグ。しかし、どうしても本分がな……」

『私、魔法まったくのからつきしだからわかんないのよ！イツセーともまったくかかわれないじゃない……最近どころか結構前から神器の鍛錬もやってないし……』

ドライグがシュンとして悲しそうに言った。

『うう……そ、それは……すまん。』

いわれてみれば、最近はずっとニトラと一緒にこの魔導書を解析している。

『うう……』

もうドライグは泣きそうになっていた。あの逞しく、凜々しいドライグは何処へ行ったのか……

「なら、ドライグの為に、早くこれを解析しよう。それしかない。」
ニトラはドライグのことを思ってたか、解決策を言う。

「そうだな。済まない、ドライグ。も少しだけ待ってくれ。」

俺は申し訳なく、ドライグに言う。

『うん。わかった。』

ドライグは分かってくれたようだ。ホントいい人だ。感謝しかない。あとで、絶対お礼をしなきゃならないな。そういえば、あの時からずっと俺を支えてくれたもんな。

「ああ、それなら、精神世界でドライグと戦えばいいのではないか？ほら、私とドライグがいつもやっているようにな。」

さらにニトラは名案をいった。

『ああ!!それよーなんでいままで気がづかなかったのよ!それなら、わざわざ人気のいない場所まで移動することなくできるわね!』ニトラが言った案を聞くと、ドライグは今まで悲しそうだったのが急に明るくなっていった。もうニコニコである。

「そーいえば、前にニトラとドライグは戦い続けているって言うたね。」

『ええ。イツセーも頑張っているからね。私も、と思って。それに個人的にもジルニトラとは戦ってみたかったの。』

「へえ。ニトラ、ドライグはどれくらいなんだ？ニトラから見て。」ドラゴン同士の対決。とても面白そうなのでニトラに訊いてみる。「ああ、今は最初に戦った時と比べれば、はるかに強くはなっているな。だが、伸びしろはイツセーの方が上だ。」

「え!?そうなんだ。」

俺はニトラから意外な吉報を聞いて耳を疑った。

「ああ。ドライグはいはば、完成された強さだからな。伸びはやはりイツセーに劣る。しかし、それでも中々に強くなったがな。」

「へえ、やっぱ凄いなドライグは。これじゃあ、俺との差が縮まらないな。」

俺はドライグの様子をニトラに訊くと、どうやら、ドライグはまだ進化をするらしい。そんなドライグを見て、俺は素直に驚いたし尊敬した。背中を追い続ける身としてはその背中がさらに大きく、遠くなるのは悔しいがそれと同時に嬉しくもある。それだけ、肩を並べたときの達成感は大い。

『そ、そう?ありがと、イツセー。でも、伸びしろはイツセーの方があから、差は少しずつだけ縮まっているわ。今のイツセーだった

ら多分吸血鬼の始祖や大妖怪、聖書勢力の熾天使たちや魔王たちと戦えると思うわ。』

すると、ドライグからそんなことを言われる。魔王、天使か。それいづらも中々強いんだろが、俺はまだ足りない。もつとだ。もつと強くなる。妥協はしたくない。

「なるほど、魔王に天使か。そいつらとも戦ってみたいが、今は魔法に専念したいからな。それに、実力がまだ足りん。今の状態じゃ、一勢力はまだ相手にできんからな。」

魔王や天使は一勢力の者たちだ。ケンカ売ればそれまるまる相手にしなければいけないかもしれないからな。

『あら、戦わないのね。』

「ああ。まだ、な。」

「まだ、ということとは、いずれは戦うのだな？」

「可能性としてはな。今は魔王や天使たちより、ドラゴンの方が興味ある。いつそ、ドラゴンに関する研究でもしてみたいとも思っている。」

俺がドラゴンに対して思っていることを言うと、ドライグは笑いながら言う。

『うつつふ。ドラゴンの研究をしてみたなんて・・・そんなことを言うのはもうこの世界でイツセーだけね。』

「はは、そうだな。だがそれほどまでにドラゴンへの関心を示すのは何か理由でもあるのか？」

ニトラから質問がくる。

「ああ、あるよ。」

「そうか。」

俺がこう答えると、ニトラは笑ってそうか、とだけ言った。それ以上は聞いてこなかった。

「まあ、どちらにせよ、ドラゴンと戦うのなら、この魔導書を完全解析し、この魔法を得とくしていかねばな。」

「ああ、そうだな。」

このごろ、俺がずっと家を出ずに魔法の研究に没頭している理由。

それはこれらの魔導書にある。

【ローゼンクロイツの魔導書】

【アンブロジウス魔法典章】

これは俺の父さんと母さんが書いたものだ。こいつを見つけたのは今から1年くらい前の話だ。

——1年前

『よし、今日も始めるか。』

俺はその日のことはよく覚えている。その日はいつもと変わらず魔法の研究をおっぱじめていた。午後には鍛錬でも行こうかと思っていた。だが……

パサツ

『ん？何だこれは？手紙？』

とある魔導書を開いたとき、挟まれていた紙が床に落ちた。

最初はただの紙きれかと思っただが、織り込まれていて、簡単な魔法までかかっている、開いてみると手紙だったのだ。父さんと母さんからのものだったのだ。

俺は母さんが残してくれた手紙を読んだ。

イツセーへ。

この手紙をあなたが読んでいるってことは、まず間違いなく、私はもうこの世にはいないでしょうね……

元気でやっているかしら……？

多分あなたのことだから、いつも魔法の研究に明け暮れて言うでしょうね。

まあ、それでこそ、私たちの子供ね。私たちが歩んできた道を、貴方も進んでくれるのは嬉しいわ。もし、イツセーが魔法とは別の道へ行くというのなら、私たちは止めないでおこうと夫と相談していたの。

でも、そんなことは無く、あなたが生まれて、魔法に興味を持って一緒にやってこれたことはホントにかけがえのない時間だったわ。

ホントはもつと、イツセーと、夫と魔法に携わりたかったのだけど

ね・・・

でもいまさらそんなこと思っても、もう後の祭りだものね・・・

？俺もだよ・・・母さん、父さん・・・？

その手紙はまるでもう自分が死ぬのは分かっていた、そんな書きぶりだった・・・

あ、そうそう、イツセー？ちゃんと規則正しい生活、送ってる？

ギクツ!!

手紙に書かれた言葉にヒヤツとさせられる俺・・・

痛いところを突かれた・・・

俺は魔法に集中するあまり、入浴もしない、徹夜も当たり前、食事をとらない。なんてことも数えきれないほどあった。

そんなことを思い返しながら、手紙の続きを見た。

もう!!イツセー!!ダメじゃない!!食事を抜いて、お風呂にも入らない、寝ずに夜通し魔法の研究に没頭するなんて。まったく!魔法にめり込むのは良いけど、休む時はしっかり休みなさい!!

手紙に怒られた・・・

手紙にはオレガしていることがばっちり書かれていた。何なの？ エスパーなの？というか、なんで俺の生活ばれてんの？

当然じゃない!!かわいいかわいい息子のことを知らない親なんていないわよ。

マジっすか・・・もうそれは知ってるなんてレベルじゃないんじゃないですかね・・・

と・に・か・く!!私の言いたいことは!しっかり寝て、しっかり食べて、身なりを整えた上で、やりなさい!!そうじゃないと、少なからずは集中力とか、効率は下がるのよ?

うう・・・いや、でも、俺こうした生活おくっているけど、集中力とか効率下がってn

口答えしない!!い・い・わ・ね?

ひい・・・さらに怒られてしまった・・・

はい・・・わかりました・・・母さん・・・

うん!! よろしい!! そういう素直なところ、大好き。

ありがとう・・・

なんだかんだ怒るときはしっかりと怒ってくれる、そして、やさしい母だ。こんな人の子供であることには感謝しなきゃな。

このような手紙でまで俺のことを思ってくれていた母さんのことを思いながら、まだまだ続く手紙を見る。

ポタツ

あ、やば、涙で手紙が。

自然と涙が垂れてきて、手紙に滴り落ちる。字の上に落ちたというのになのになぜか、その字はにじまなかった。凄いな・・・この紙・・・さてと。ちよつと無茶をするかわいなおつちよちよいな息子の説教はこれくらいにしてと。本題に入りましょうか。

え？ さつきまではただの茶番だったの・・・？

そんなことないわよ。あれも大事なメッセージ。それでね、イツセー。

何？

貴方に、託したいものがあるの。

たくしたいもの？

ええ。それは私こと、マーリン・アンブロジウスが書いた魔導師と、私の夫である、大魔術師、クリスチャン・ローゼンクロイツが書いた魔術書よ。

ま、魔術書!!? そんなものあったの!?

ええ。あるのよ。

そ、そんなもの。いつの間に・・・

ふふふ。実はね? まあ、これは昔話になるのだけどね。夫であるクリスと出会うまでは私はとあるところに仕えていたの。宮廷魔術師として。

きゅ、宮廷魔導師・・・

ええ。私がそこにいるときに書いたもの。そして、夫であるクリスも同じ宮廷魔術師だった。そこで出会ってね。こうしてイツセーが生まれたの。みんないわってくれたわよ。

そ、そうだったんだ。

それで、今でもその魔術書は残っているの。だから、それを、貴方に。

母さん、父さん・・・ありがとう。

うふふ、お礼はいいのよ。どっちみちイツセーに託そうと思つてたから。でもね、イツセー。あれは今まであなたが研究してきた魔法とは比べ物にならないほどの難易度を誇るわよ？なにせ、私やクリスでも、理論だけで終わってしまったてね・・・実際に発動させることはほぼなかったの。それにね、中にはほとんど未完成なものや、途中で止まってしまうものもある。それにとても古いもの、遺跡で見つけたものまである。それでも投げ出さないうで出きる？

ああ、やつてやるさ！簡単に解けてしまつては面白くないからな！！
うふふ、その意気よイツセー。あなたならきつと完成させることができるわ。

それで、その魔導書は何処に？

それはあなたも一度行ったことのある場所にあるわ。

なるほど。あそこにあるのか・・・おじさんに一度言つておこうかな。

大丈夫。もう言つてあるから。私の息子が行きますよーって。

はや！もういつてあるの・・・

とにかく、イツセー私はいつまでも見守っているからね・・・達者でね・・・

うん。おとーさんもおかーさんも――

そんなことがあつて俺はその手紙を読んだ翌日に其の場所へ向かい、そのお目当ての魔導書を手に入れてきた。おじさん達に合うのはとても久しぶりだった。母さんと父さんの死を知っていたのでとても心配された。こちらに住んでもいいのだぞ？とまで言われた。

でも、おれは自分の生まれたところで研究したいといつて、丁重に断つた。

でも、おじさんはいつでもきてくれていいから、と言って見送ってくれた。ホントにいい人だ……

そうして持って帰ってきたのがこれだ。

【ローゼンクロイツの魔導書】 【マーリン・アンブロジウスの魔法典章】

この二つ。マジで分厚いうえに難解であった。一年かけて進んだのはたった十数ページくらいだった。しかも、これ、父さんと母さんだけの知識や文字じゃない。大量の知識が詰まっていた。

おじさんによれば、これはとんでもないレアものだという。あと何十年かたてば、この二つはどんな金銀財宝よりも価値が付くという。まあそれも当然か……

ああ、ちなみに名前は俺が勝手に付けた。父さんと母さんの名前をとらせてもらった。

もともと魔導書と魔法典章と言う名しかなかったからな。

「ふむ。イツセーでもこれくらいスピードだったか。これは掛かるな。時間が。」

「ああ。だがそれでこそやりがいがある。」

「そうだな。じゃあ、続きをやるか。」

「おう！」

そう言つて、また研究に没頭した。

「ふむ。イツセーよ、今日はもうこんな時間だ。今日はもう終わりにしようか。イツセー、両親たちからの手紙……忘れたわけではあるまいな？」

「ああ、分かっているよニトラ。徹夜に食事抜きなんて生活をしていたら、まくた父さんと母さんに叱られちまうからな。」

あの手紙を読んで、天国にいる父さんと母さんに叱られてからというもの、ちゃんといいつけを守っている。

徹夜をしないで、食事をきちんととり、入浴も欠かさずに行っている。しかし、意外なことにそうなるようになってから心なしか、進みが早くなっていることも無きにしも非ずであった。まあ、ニトラとドライ

グがそうしないとうるさいほど言ってくるのでどっちみちダメなのだが……

そんなことを思いながら、食事をとり、入浴を済ませる。すると、ドライグが話しかけてきた。

『ところでイツセー？今日も当然、やるわよね？』

「ああ、勿論だ。」

何をするのかと言えば、言うまでもなく、実戦だ。精神世界でな。あれから時がたって自分の意思で精神世界に入り、戦えるようになった。

〈お、今日もやるのか！イツセー〉

「ああ、今日もよろしく頼む。ベルザードさん。」

ちなみに、この修行にはベルザードさんも一緒にやっている。

まあ、現実で出会うはずのない、歴代先輩と対決できるのは面白い。

「それにしても、歴代最強、赤龍帝王と戦えるなんて嬉しいね。精神世界とはいいものだ。」

〈おいおい、それはお互い様だ。イツセー。俺だって、一つ下の後輩で、真なる歴代最強にして、過去・現在・未来永劫の最強。それどころか、ドライグの全盛期の強さに至る可能性を持つ者と一戦も二戦も交えることが出来るなんてな。願ったりかなったりだ。〉

ドライグとニトラはもう準備満タンだ。

「よし、では始めるとするか。ドライグよ。」

『ええ、こっちはもうとくに準備は出来てるわ！』

「ふっ、ならば行くぞー！」

〈おし、じゃあイツセー。こっちも始めようぜ！〉

「おうー！」

バランス・ブレイク

〈禁手！！〉

『Welsh Dragon Balance Breaker
！！！！』

ベルザードさんだけがバランス・ブレイクを発動させ、俺は生身のままで戦う。そのかわり、こちらは魔法を主に使う。さらに、自身に掛けている重力は軽くする。魔力を制限はいつもと同じでい

る。これで俺はベルザードさんより少し劣る力関係になる。

〈「はあっ！」〉

ズガン!!

ファーストアタックはお互い体術のぶつかり合い。

俺はそこから、魔法を高速で連射していく。だがベルザードさんはその屈強な肉体に赤龍帝の鎧もあってほとんど無傷だ。俺はこうした自分の力が少し届かない状況で戦っている。完全に負けはしない。が、ベルザードさんの禁手を崩すのは難しい。今までこうした戦いは100回はやっている。だが、勝ったことがあるのはせいぜい10回もない。それ以外は俺の劣勢もしくは負けという状況で終わっている。

だが、ベルザードさんは切り札である、覇龍、朱紅の極覇龍□エヴァンズヴィル・エクストリーム・ドライブ□を使っていない。一度頼んでなくてももらったが、勝てなかった。負けた。惜敗だった。

それから、俺はまずベルザードさんの普通の禁手との勝率を上げるために努力している。

——しばらくして、今日の分の戦闘はおわりだ。

「ふいー今日も勝てなかった〜」

どさつと大の字で倒れ、悔しさを孕んだ声をだす。

へいいやいや、イツセー? あなた神器を使わず、さらに自身の魔力をそんなに制限した状態で禁手状態のベルザードとあんなに戦えるとかおかしいからね? 普通は負けて当然なのよ?」

すると、近くにいたエルシャさんがツツコミを入れる。

「でもなあ。ベルザードさんはその分魔法使えないし。」

〈それも込みの話よ・・・〉

へふう〜イツセーマジでつええな・・・全く倒しきれねえ・・・俺は禁手使ってるてのによお・・・

ベルザードさんは悔しそうに謂う。

「ベルザードさんは切り札の朱紅の極覇龍□エヴァンズヴィル・エクストリーム・ドライブ□使っていないじゃないか。」

〈それをいうならイツセーもだろ? 赤龍帝の焱方天戟□ブーステツ

ドギア・スケイルメール・ブレイズ・ハルバード☒。あれ使ってねえ
じえねえか。〉

「まあ、そうだけど・・・」

〈それにしてもイツセー君。強くなったわね・・・〉

〈全くだ。禁手なしの生身の状態で俺の禁手レベルとか笑えねえ
ぞ・・・〉

〈当然、私は禁手使っても、生身のイツセー君にすら勝てないわ
ね・・・〉

二人は半ば呆れながら目を遠目にしていった。

「それは魔法があるからだよ。もし、魔法を全面禁止にされたら、勝
機はゼロだ。そうだったら、禁手使うしかない。」

〈つーか、俺まだ、イツセーの禁手と戦ったことねえなあ・・・〉

「ああ、そういえばそうだ。」

〈なあ、イツセー。〉

ベルザードさんは何かを言おうとしたが、察せたので俺は言った。

「ああ。わかった。次は俺も禁手を使う。」

〈ああ、頼むぜ。イツセーの禁手マジエグイからな。俺も、朱紅の
極覇龍☒エヴァンズヴイル・エクストリーム・ドライブ☒を使う
か・・・〉

「楽しみにしてる。」

〈どうやら、ドライグ達も終わったようね。〉

ドライグ達も決着が付き、今日は終わりということ、俺は精神世
界を後にし、眠った。

—イツセーSIDE OUT—

— to be continued —

NO, XII くドライグちゃんのメタモルフオーゼ

)

—ドライグSIDE—

「そうだ、ドライグ。もう少しで出来るぞ。ガンバレ。」

『うん……』

ヤッホー、私ドライグ。

イツセーに宿っているドラゴン。赤龍帝よ。

今、私はかつてないほど集中している……

私は今、魔術のようなものを習得している最中なの。ジルニトラからマンツーマンで教えてもらっている。

そう、それは人化の術。ジルニトラが自己紹介の時に人間の姿になったのはとてもびっくりしたわ。それと同時に羨ましいと思えた。どうして羨ましいと思ったのかは、その……察して欲しい……

どうして今やっているのかと言うと、実はイツセーが両親から受け継いだ魔導書の解析、研究に没頭し始めてからイツセーの鍛錬はかなり減った。それに伴って、当然神器を使った鍛錬も少なくなってしまった。そんな時に折角なのでジルニトラから人化の術を教えてくださいました。

こうして教えてもらってから、大体2週間以上は経ったかな……それだけの期間、その魔術に私も没頭している。

私は生まれてこの方、魔術、魔法、その他もろもろ、扱ったことがない。全くのからっきしだ。そんな超ビギナーな私は基礎の基礎からやるしかなかった。でも、私はジルニトラに教えてもらって良かった。こんな基本もわからない私に手取り足取り教えてくれていた。凄く優しく……いや、別に惚れたわけじゃないからね！惚れそうになりかけたのも無きにしも非ずだけど……

そんなこんなでジルニトラに教えてもらい始めてから、半月。今、私はほぼ完成に限りなく近づいていた。

〈ドライグー、ガンバレー♪〉

〈もうひと踏ん張りつてところだな。〉

エルシヤもベルザードも私をこのところ支えてくれていた。

へんー、それにしてもドライグの人間の姿かー。一体どんな感じなんだろうね♪〉

〈そうだな。俺も興味があるな。なんせ、一緒に戦ってきた仲間なんだからな。それにだ。ドラゴンが人の姿を取る、なんてのはそういうことだからな。〉

「……………」

ベルザードとエルシヤは成功後の話をしている。その傍らに、今まで私の面倒を見てくれたジルニトラ。ジルニトラはずっと無言で真剣に私を見守っている。

—————
そして、その時は訪れた。

—————
カッ

〈うおっ！まっぶし！〉

〈これって…………もしかして…………〉

「ああ…………成功だ…………」

私の体は光に包まれていく。そして、みるみる目線が下がっていく。

そして、自分を覆っていた輝きが失われ、眩しくて閉じていた目を開けてみる。

パチッ

恐る恐る目を開けてみる。まず最初に人間の姿になっているジルニトラやベルザードとエルシヤが視界に入る。しかし、今までとは違い、目線の高さと同じになっている。

そして、次に自分の手を見る。今までのゴツく、赤い色ではない。白色の肌…………人間のそれであったのだ。

『成功したのね…………？』

私は不安交じりに訊いた。

「大丈夫だ、ドライグ。成功したぞ。おめでどう。何も不安がることは無いぞ？」

ジルニトラから、勇気づけられ、祝福される。

〈そうよ!!ドライブグ!!ちよーキレイよ!!とつても可愛い!!〉

〈ホントだぜ?ドライブグ。お世辞でも何でもない。見惚れたぞ。自身もつていいんじゃないか?〉

〈ホントよ!私、自信無くしちゃうわ・・・〉

『ホント・・・?』

それでも不安をぬぐい切れないうた。

「ドライブグよ、こっちを向いてみて。」

ジルニトラから、そう言われて振り返ってみると、ジルニトラは魔法で鏡みたいなものを作り出し、宙に浮かせていた。

それを見ると、自分の顔が映った。

『え・・・うそ・・・これが、私?』

私は鏡に映った自分が自分ではないのような錯覚に陥る。

「ああ、紛れもない。お前自身だ。ドライブグ。」

『ありがとう・・・ジルニトラ。あなたのお蔭よ・・・』

私は嬉しさのあまりに少し涙交じりになってジルニトラにお礼を言った。

—ドライブグSIDE OUT—

—イツセーSIDE—

「えっと、この黒魔術は、つと・・・▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲・・・■

■●●●●●

よお。イツセーだ。

今日も相も変わらず、ひたすら魔法の研究に没頭している。

「イツセー。その部分は、????ではないか?」

『ああ、なるほどな。じゃあ、ここが・・・——だな。』

今日はいつになく調子がいいというか、進みが早い。父さんと母さんから受け継いだ魔導書、【ローゼンクロイツの魔導書】、【マーリン・アンブロジウスの魔法典章】序章にして、早速あった最難関の部分の

攻略が折り返し地点からグット進んだ。

魔法使い、魔術師として、大きな進歩になったかは分からない。しかし、嬉しい、という気持ちも無きにしも非ずって感じだった。

これによつて、新たな未知の魔法の一部を垣間見ることになるかもしれない……。

俺はその扉の前に立っている。

もう少しで、最初の魔法にたどり着く……しかし、長かったといえるな……一年以上費やして、まだ一つの魔法も完成できていない。しかもそれがまだ大量にある。この魔導書もまだまだページはある。しかし、それでこそ魔法だ。簡単にできる魔法ほど、つまらないものはない。

「ふむ、イツセーよ。今回は大きな一歩になったといえるのではないか？」

すると、ニトラは今回の成果を考察する。

「まあ、この魔法の正体が見え始めたところだからな……まあ、そう捉えられなくもない。」

ニトラに自分の正直な気持ちを言う。

「この成果でそんな自己評価か……厳しいな、イツセーは。」

「そうか？そこまで厳しいか？自分でも妥協した部分はあるのだから……。」

「普通の魔法使いだったら、これで大騒ぎするだろうな。」

「この程度で大喜びしているようじゃ、たかが知れてるってもんだよ。魔法の全てを理解したわけでもないのにな。せめて、魔法を全て完成させ、行使できるようにしてから初めて喜べる。」

「ハッハッハ、まあ、そうだな。」

ニトラも納得したのか、俺の言ったことに同意を示す。

「しかし、イツセーよ。この魔法の正体。これは中々の超高等魔法だ。」

するとニトラは興味深そうにとんでもないこと謂った。

「ん？ニトラ。もしかして、この魔法のこと、分かったのか？」

俺は恐る恐る聞いた。

「ああ。まあな。大まかなところは分かった。」

「マジかよ・・・流石だな。」

ニトラのスペックの高さにはいつも驚きを通り越して呆れるレベルだ。

「なに、こちとら魔法神なのだ。魔法のことはこれくらいできないとな。そして付け加えるならば、この魔法、私が全盛期に使っていた魔法と酷似している。」

更にニトラから驚愕の事実を聞かされる。

「ニトラの全盛期の魔法・・・?ということは・・・」

「ああ。この魔法といい、この魔導書といい、いやはや、イツセーの親には驚かされるな。これははるか古代に存在したものだな。」

はるか古代の魔法・・・

「父さんと母さん・・・こんな何処から見つけてきたんだ・・・」

「さあな。ただ、その魔法はもちろん人間に理解できるはずもない・・・神たちのみが理解できる文字も使ってあったのだろうか・・・ここまで記してあるのは驚きだ。」

「そんなものまであるのか・・・」

父さんと母さんはやはり凄いな・・・心の底から尊敬する・・・

「まあ、これで見通しを持てたな。今日はここまでにしよう。これから忙しくなるな。」

ニトラから毎度毎度の言葉。父さんと母さんからの手紙の影響だな・・・

「ああ。そうしよう。」

ニトラに指摘されたので、今日はここで切り上げる。今日まで進めたところに印をつけてから魔導書を閉じる。

そうしてから、夕食の準備をするためにキッチンへ移動する。

キッチンで料理を始めているときのことだった。

『イツセー、ちよつといいい?』

ドライグが話しかけてきた。

「ドライグか。いいよ。いま夕食準備しているだけだから。ドライグとしゃべりながら料理位余裕だからさ。」

俺は料理をあの日以来、ずっと継続させている。最初はお世辞にも上手とは言えないものだった。しかし、簡単なものからずっと続けている。まあ、魔法の研究に没頭し始めてからは、そもそも食わずに研究をぶっ続けでやっていたからしなかつた日も多々あった。しかし、そのようなことも母さんと父さんに叱られてからは必ず食事をとっている。

そんなこんなでかなり料理スキルというものはかなり上がったと自負している。まあ、

自分しか食べないのだからおいしいと思えばいいと思っ
ているが。

『それでね・・・今日もその・・・来てほしいの。』

ドライグは歯切れの悪い声で言ってきた。そのことを訝しく思い、ドライグに訊いてみる。

「?どうしたんだドライグ?そんなに改まって。寝る前の精神世界での鍛錬はいつものことじゃないか。少しおかしいぞ?」

『え?・・・そう・・・?』

どうやら、ドライグに自覚はないようだ。心配だな・・・

「ああ・・・一体どうしたんだ?」

『ええっと・・・』

「イツセーよ、」

「ニトラ、ドライグの様子がおかしいんだ。何か知らないか?」

ドライグが返答に戸惑っていると、ニトラが声をかけてきた。そこでいつもドライグと一緒にいるニトラに訊いた。

「イツセー。ここでは何も言わないで上げてほしい。そして、いつも通り、こちらにきてくれないか?こちらに来れば、ドライグがなくなっていた理由が分かるはずだ。」

ニトラにも、お茶を濁された。

しかし、ニトラが何の根拠も理由もなくこんなことを言うはずがないのは分かっている。なにかあるのだろう。

此処はニトラの言うことに従うことにする。

「分かった、ニトラ。とにかく、この後精神世界そちに行けばいいんだな

？」

「ああ、ありがとう。そうして欲しい。」

『(ジルニトラ・・・ありがとう)』

「(いや、礼には及ばない。大丈夫だ。)」

「？なんかドライグとニトラがボソツと何か言っていたような気がするが、何を言ったのか聞き取れなかった。まあ、良いか。」

ニトラと約束したあと、俺は夕食を取り、入浴をして自分の部屋に来てベッドに倒れ込む。そして、精神世界に意識を接続させる。

そして、いつも通り、一面真っ白な世界に足を入れる。

「来たか、イツセー。」

すると、ニトラが既にいたのだ。人間の姿で。ホントにきれいだよなあ・・・間違いなく母さんに匹敵している。というか今思えば、母さんも美人だった・・・俺を生んだというのにあの美貌。今だから言えることだが、あれは人間を超えてるな・・・その隣にはベルザードさんとエルシャさんもいる。しかし、一人足りなかった。

「なあ、三人とも。肝心のドライグは何処にいるんだ？姿が見当たらないのだが？」

俺は三人にそう訊いた。

「ん？何を言っているんだ、イツセー？ドライグなら、イツセーのすぐ後ろにいるではないか？」

すると、ニトラは不可解なことを言った。

「ニトラこそ、何言ってるんだ？ドライグの気配なんてどこにも・・・」

そう言いながら、後ろを振り向く。すると・・・
ダキツギユウウ

なんか柔らかい感触がした。そして、凄いギユウウとされていった。

俺は状況を理解できずにいた。

柔らかいものが自分の胸板に押し付けられる。

「ちよっ、く、苦しい・・・」

俺は思わず本音を溢した。

『あ、ぐ、ぐめんなさい……』

すると、聞いたことのある声が聞こえた。そして、今まであった感触がなくなる。

それから、俺はようやく状況を理解した。

「なっ……ドライグ……だよな……？」

俺のすぐ目の前にいたのは、とんでもない美女であった……。赤く、腰まで伸びた綺麗な髪……。すらっとした非の打ち所がない抜群のプロポーション……。そして、引き付けられるような翠色の瞳……。気づけば、俺は見惚れていたのだった

『ええ、そうよ。イツセー。』

そう、その正体は間違えるはずもない……。あの時から俺を支えてくれていた神器に宿るドラゴン、ドライグだった。

「今まで、ドライグには人化の術を伝授していてな……。今日、成功に至ったのだ。そういうわけで、あんな様子だったのだ。」

俺が呆気にとられていると、ニトラが説明してくれた。

「そ、そうだったのか……。おめでとう、ドライグ。」

『う、うん……。その……。ありがとう……。』

ドライグは詰まりながらもお礼を言った。なんか新鮮だな。こんなドライグを見るのは初めてだからな。

そのように思っていると、ドライグが口を開ける。

『イツセー……。えっと、その……。あの……。ど、どうかな？』

ドライグは何故か顔を真っ赤にしながら何かはつきりしないような口ぶりでどうかと問うてきた。少し返答に困った。しかし、俺は本心と言う。ドライグを見たときのことを。

「えっと、その……。見惚れたよ……。ドライグがこんなに美人さんだったなんて……。いや、ドラゴンの姿も綺麗だったから当然か。と、とにかく、き、綺麗だ。ドライグ。抱きしめたいくらい……。」

俺はよく考えてみれば、とんでもなく恥ずかしいことを口走ったよ
うな気がする……

ああ……。穴があつたら入りたい……

多分、俺、今顔赤いだろうなあ……

『うう……そ、その……あう……あ、ありがと……』
するとドライグの顔はさらに真っ赤に染まった。もうドライグの髪の色と同じくらい……

熱でもあんのかな？↑そんなわけない

へうっふふ、ね？ドライグ心配ないって言ったでしょ？

すると、エルシャさんとベルザードさんは顔を真っ赤にさせ思考停止しているドライグに駆け寄って声をかける。

『う、うんそうだったわね。』

へでしよでしょ？

へ良かったな、ドライグ。イツセーに綺麗ってほめてもらえて。

『うん。ありがと、二人とも……』

ドライグは少し涙目になっているような気がする。

へおいおい、泣くほどのことか!?ドライグ。

へうふふ、可愛いわあ……ホンワカする。可愛い妹が出来たみたい！

『も、もう……からかわないでっ!!』

ドライグがそんなこと言っているが、正直そんな照れながら可愛く言ってもやめないと思う。

へああん♡もう！ホントにかわいいわ

へまさか、一緒に戦ってきたドライグがこんなになるとは思わなかったな。

さらにエルシャさんとベルザードさんはドライグを褒めちぎる。

その二人のラッシュにドライグはさらに照れる。もうそろそろヤバそう。

「ふ、二人とも、それ以上褒めちぎると、ドライグ恥ずかしさで死んじゃうからもうその辺で辞めなさい。」

正直もつと見ていたいが、助け船を出す。

へうふふ、そうね。

へまあ、この辺にしておくか……

そう言って二人は褒めちぎりラッシュを終えた。

へにしても、イツセー？驚いた？私たちのサプライズ。〈

エルシャさんは俺にそう聞いてくる。サプライズ？その言葉が引つかかる。そして、ある答えにたどり着く。

「なるほど。最初来た時、もうドライブグは居たんだな。しかし、ドライブグには認識阻害かなんかの魔法で見えなかったんだな。この魔法をドライブグに掛けたのはニトラだな。」

「ああ。エルシャが思いついてな。どうせならサプライズにしようということになった。どうだ？驚いただろ？」

ニトラは頷き、そう言った。

「ああ、驚いたさ。ドライブグがいきなり抱き着いてきたんだ。しかも、あんな美人な人間になって。可愛らしさもあってもういうことなしだ。それに、あんな美人さんに抱き着かれたらうれしいな。」

『うぐっ……あう……きゅ……』
バタン！

へあつ、ドライブグが倒れた。〈

そんなふうに通っていたら、ドライブグが倒れてしまった……どうやら、また褒めちぎってしまった、とうとうドライブグの処理能力を超えてしまったらしい。ここで俺がとどめをさしてしまった……

少しばかりほめ過ぎてしまったか……？

ドライブグは目をまわしていた。ぐるぐるになっている……
そんな姿も愛らしい……

「ふむ、イツセーの言葉が心にグサグサ刺さってしまったているな。いやはや、予想通りの結果だったな。」

ニトラは冷静に解説をしている。

「と、とにかく、目が覚めるまで寝かせておこうか……」

ドライブグを横向きから仰向けにして、寝かせる。まだ目がぐるぐるになっている。

「さてと。じゃあ、取りあえず、いつものをやりましょう。」

へああ、いいぞ。イツセー！〈

「よろしく。」

「イツセー、それが終わったら、次は私とやろう。二連戦になってし

まうが、いいか？」

「ああ、構わない。頼む、ニトラ。」

「ああ、了解した。」

ドライグが目をまわしている分、今日は二連戦だぜ。ハードだが、たまにはこういうのもいい！

〈じゃあ、いくぞ！イッサー！バランス・ブレイク禁手!!!〉

『Welsh Dragon Balance Breaker
!!!』

いつもの掛け声とともに、ベルザードさんを赤色の全身鎧プレートアーマーが全身を覆っていく。そして、禁手状態へと移行する。

〈よっしゃあ！行くぜ！イッサー!!!〉

ベルザードさんはいつになく雄たけびを上げ、俺にいつもより速いスピードで突っ込んでくる。

「はあ!!」

俺は防御魔法で自分に向かって来るベルザードさんの正面に魔法陣の楯を顕現させる。

〈おらあ!!〉

パリンパリンパリンパリンパリンパリン!

俺の発動した六重の防御魔法陣を難なく突破し、こちらに向かってくる。

「っふー!」

俺は拳で迎撃に出る。ドゴンという音が鳴り響き、それを起点に激しい近接戦闘が繰り広げられる。

〈はっはっは！神器のみでここまでになるとはな!!〉

戦闘中、ベルザードさんはそう言ってくる。

「ベルザードさんも、初めて戦った時から相当強くなっててでしょ。それにいま本気ではないでしょうに。というか、今日はいつもより乗りに乗ってませんか？」

〈まあな。ドライグの人化サプライズもあつたからな。まあ、それにつられたのさ!〉

「くっ!」

ベルザードさんはそう言いながら、俺に一撃を喰らわせる。俺がひ
るんだところで、一気に畳みかけてきている。

〈行くぞ!!〉

ドゥッ!

『Boost!!Boost!!Boost!!Boost!!Boost!!Boost!!Boost!!
Boost!!Boost!!Boost!!Boost!!Boost!!Boost!!Boost!!
Boost!!Boost!!』

ベルザードさんは自分の魔力を圧縮して撃ちだしてきている。し
かもご丁寧な倍加まで使って。

「くそ!!」

俺は体勢をすぐ立て直し、大量に飛んでくる圧縮魔力弾を避けてい
く。しかし、あちらのほうが早い。避けられないものは防衛魔法陣で
防衛する。その魔法陣は魔法陣をあっさり突き破る。しかし、それ
でも時間に余裕ができるからやららないよりはましになる。

〈はははーまさか一撃もあたらないとは流石だ!!〉

そうして、しばらく戦いは続いた。

すると、ベルザードさんはずいぶんでもないことを言い始める。

〈よし、今日は折角だ。あれを使う!!〉

「なっ!!」

〈――我、至りしは――〉

ベルザードさんはそう発言すると、あの切り札の呪文を唱え始め
る。

〈―― \square の絶対を赫?に貫きし二天龍なり――〉

〈――極めるは、天龍の頂――〉

〈――昇は、赤龍の覇道――〉

〈我らは無限を降りし、夢幻を誘う〉

〈無限の理と晦冥の夢を穿ちて覇道を進む〉

〈我、赫焉たる龍の帝王と成りて〉

〈汝を、朱紅の幻想と光明の極限へと誘おう〉

〈朱紅の極覇龍 \square エヴァンスヴィル・エクストリーム・ドライブ \square

!!>>

カツ!!

眩い光と共に、ベルザードさんの姿が変わってゆく……
ベルザードさんだけの覇龍。歴代最強と言われた所以……

「つく、今までの100戦、使つてこなかったが、今日は使わせても
ブーステッド・ギア
らう。赤龍帝の籠手!」

俺の左手に神器が現れる。

「イツセーも使うか!!」

「ああ。と言つても、倍加だけだ!」

『Boost!!Boost!!Boost!!Boost!!Boost
!!Boost!!Boost!!Boost!!Boost!!Boost
!!Boost!!Boost!!Boost!!Boost!!Boost
!!Boost!!』

倍加させ、ベルザードさんと拳を打ちあう。

すると、自分でも信じられないくらい強化されている。朱紅の極覇
龍☒エヴァンズヴィル・エクストリーム・ドライブ☒を使ったベル
ザードさんの動きに反応できるようになりつつあった。

「うおっー今まで己の肉体だけでやってきた成果か!!」

距離があき、遠距離戦となる。魔力弾をベルザードさんは撃つてく
る。しかし、神器を使っているから、俺の防御魔法陣がその魔力弾を
弾く。そして、俺の攻撃魔法が火を噴く。

「っくー」

俺の放った攻撃魔法がベルザードさんに向かう。ここにきてよう
やく攻撃が通るようになった。ベルザードさんは避けながら攻撃す
ることにチェンジした。そのおかげか、手数が減ってきた。

そこに漬け込み、さらに攻撃していく。

そうして、さらにしばらく戦闘は続いた……

「はあ、はあ、はあ……」

「はあ、はあ……」

お互い、息が上がっている。

「ここままでだな。」

ベルザードさんの覇龍の時間が来た。

「ふう〜負けた〜!!」

俺は悔しさ混じり声を上げる。

「何言ってるんだイツセー。まさか、倍加だけであそこまで強くなるとか凄すぎだ！俺も少しひやひやしたんだぞ!?」

ベルザードさんは声を荒げながら言う。

『つか、俺まだイツセーの禁手と戦ってないんだが?』

次は不満げに言った。

「だって、修行のためにやってるんだから・・・己が強くなればなるほど、この神器は光ってくるから。」

俺はそう言い返した。

「それには賛成だがな・・・」

ベルザードさんはまだ納得しきれていない。

「えっと、また今度ということ・・・」

「はあ、その今度とはいつになることやら・・・」

「もつと強くなってから・・・」

「ほんと、どこまで行く気なんだ・・・」

ベルザードさんは呆れていた。解せぬ。

「さあ、イツセー。次は私だぞ?」

すると、頃合いを見てなのか、ニトラが現れる。

「イツセー。ひさしぶりに神器を使ったのか?」

「ああ、そうだ。」

「さらに強くなったな。イツセー。」

「ああ、ありがとう。ニトラ。」

ニトラにまた強くなったといわれる。そのことは俺のモチベーションになる。

「さあ、イツセー。始めよう。禁手になってもならなくてもよいぞ?」

「素のまんまで行く!!」

そうして、ニトラとの第二戦が始まった。

結果は見事にボコられました。しかもニトラは右手だけで俺を負

かしたのだった。

—イツセーSIDE OUT—

—ドライブグSIDE—

『う．．．ううん．．．』

〈あ、ドライブグ、起きた？〉

私は気づいたら、寝ていたのだった。取りあえず、身体を起こすと、エルシヤが居た。

『ええ。私は確か．．．イツセーに色々言われて．．．』

〈ああー！ドライブグまた赤くなっただけ！さてはイツセーに謂われたことをおもいだしてゐるな？〉

『うっ！そ、そうよ．．．』

エルシヤに凶星を言われ、あつさりと認める。

〈よかったね。ドライブグ。イツセーに褒めてもらえて。〉

すると、エルシヤはさつきとはうって変わってそう言ってくる。

『ええ。本当に．．．』

はあ．．．イツセー．．．私はイツセーのことを思い始める。愛しい宿主。少し前は子供だったから可愛かった。でも今はとてもかつこいい。正直どストライクだ。

そして、私は思った。もつと、イツセーと長く居たい。でも、イツセーは人間。人間の寿命は短い。この幸せな生活もあと60年くらい．．．そう思うとそう思うと、苦しくなる。締め付けられる。出会は別れ育てるのだ。イツセーはこのこと、どう思っているのか．．．私は少し落ち込んでいた．．．

しかし、この時の私は思っても見なかった。

まさか、この胸の苦しみが衝撃的な形で消え去ることを。

—ドライブグSIDE OUT—

t o b e c o n t i n u e d

No, XIIII 再び

—イツセーSIDE—

よお、イツセーだ。

今日も相も変わらず、母さんと父さんが残した魔導書を解明している最中だ。この前のまだ見たことのない魔法はもうそろそろ、完全解明することが出来そうなどころまで来ている。最後のまとめるところだ。しかし、これがまた中々簡単にいきそうもないがな。流石はおじさんや、他の宮廷魔導士たちの頭を幾重にも困らせた魔導書だ。おじさんに仕えている宮廷魔術師たちもこれを見たらしいが、ことごとくギブアップして、20ページと進んだ人はだれ一人としていなかったらしい。ちなみに俺は今、25ページを超えたところだ。

「ふう〜」

俺はため息をつき、開いている窓の外を眺めた。

今は正午を過ぎたところか。綺麗な青空と白い雲が見える。

「どうした？イツセー。少し疲れたか？」

そんな時にニトラから話しかけられる。

「ああ。まあな。今もう大詰めだからな。結構神経使うから、少し休憩。」

「ああ、あの魔法か。あともう少してところだな。実際、あれができるようになれば、それ一つで戦闘に事足りるレベルだからな。それがもう完成にほど近いとはな。」

「ああ。もうひと踏ん張りするさ。」

俺とニトラは魔法の見込みを話した。普段、俺とニトラはこんな魔法に関した会話から、日常の雑談までいろいろなことを話しながら魔法の研究を主に二人で進めている。これがデフォルトだ。まれに俺一人でやることはあるが、それは数えるほどしかない。

「ああ。ガンバレイツセー。私から見てもあれはもうすぐだ。」

そんなことを思っていると、ニトラから激励の言葉を掛けられる。

「ああ。ありがとう、ニトラ。」

俺はニトラに励まされ、礼を言った。

「しかし、イツセー。お前はもうすでに次の魔法に手を掛けているな？」

すると、ニトラは次なる魔法の話題を繰り出した。

「ああ。あれはこの魔法に途中の魔法式までは似ているものだったからな。大体5分のいまではすんなり進んだぞ。」

ニトラにそう答える。

「仕事が速いな。しかも、この魔法、あれと同じく強力な魔法だぞ？
イツセー。決定的な切り札になるぞ。」

「ああ。そうだな。確か、これもニトラが生前に使ってた魔法と似ているんだろう？」

俺はニトラに訊いた。

「ああ。そうだ。これも私が使っていた魔法だ。まあ、威力は段違いにこちらの方が劣ってはいるがな。」

ニトラは少し残念そうに言った。

「いやいや。ニトラが全盛期に放っていた魔法なんかを同じ威力で撃てたらまずこっちの体がもたないだろう。」

俺がツツコミをいれる。

「いや、それくらいいしないと奴らには効かなかったのだ。」
ざらりとんでもないことを言うニトラ。

「魔法を使わず、手加減してドライグや俺たちを簡単に倒せるニトラの全力の魔法は計り知れんな。」

「まあ、こちとら魔法神をやっていたからな。」
と、ニトラは少し自慢げに言った。

「しかしだ、イツセー。この魔法。私の魔法と比べてもかなり威力は落ちるが、それでも十分すぎるぞ。この世界の神やドラゴン、天使、悪魔や魔物に十分すぎるほどのダメージを与えられるぞ。」

「条件はあるがな。」

「こんな魔法が完成したら、この世界では一勢力に数えられるぞ……力の均衡が一気に傾くレベルだ。」

ニトラは真剣に分析する。

確かになあ……これを最初に見たとき、俺も思わず驚嘆したし

なあ・・・

「さらに、持っているだけでも抑止力になるな。どちらにせよ、使えるカードは多い方がいい。」

「それは同感だな。」

そう言つて、俺は外から机の上にある魔導書に視線を戻し、作業を再開させる。

こうしていつもの日常を送っていく。

しかし、変わったことがある。

『ジルニトラ、ジルニトラ、こつち来て見てよ！』

ドライグがニトラに謂つた。

「なんだ、ドライグ。できるようになったのか？」

『そうよ！だからあなたにチエツクをしてもらいたくて！』

「ああ。わかつた。すぐに行く。」

まず一つ。ドライグが魔法を学ぶようになったことだ。ドライグ曰く、人化の術を覚えたときに少し興味を持ったとか、なんとか・・・そういうことで、ニトラが基礎を教えているらしい。ニトラ曰く、「ドライグは魔力は決して多くはない。が、とても要領が良く、覚えも速い。」と言っていた。まあ、ニトラは実戦で使えるまでにはならないだろう、と言っていたが。それを聞いてドライグは少し落ち込んでいたが、励ましたらすぐに元気になった。

というか、ドライグは魔法なんかわざわざ使わなくても強いからな。

あと一つ。それはやはりドライグが人化したことか。

ドラゴンが人化するのはいやほいや驚くものがあるし、面白い。まあ、まだドライグとニトラにしかあつたことないから何とも言えんがな。他のドラゴンも人化できるのだろうか？調べてみたいな。

そんなことはさておき、初めてドライグの人の姿を見たときは・・・目を奪われた・・・

今思えば、そのときは俺の顔、赤かつただろう。

仕方ないじゃないか。あんな美人に抱き着かれたのだから。

ドライグが人化に成功させてからというもの、精神世界に行つて、

いつもの鍛錬を終えたあと、精神世界から帰る時は必ずドライグに抱き着かれる・・・

もちろん嫌じゃない。む、むしろ俺としても、う、嬉しい・・・
柔らかいし、いい匂いが・・・それになんか癒される・・・

しかし、とんでもなくあ、あれだ。恥ずかしい・・・

だって、ニトラとエルシャさんとベルザードさんがそろってニヤニヤと俺とドライグを見てくるから。ずくずくと・・・

そのおかげでだ。俺はいつも顔を真っ赤にしている。自分でもわかる。顔を真っ赤にしながらドライグに抱き着かれたまんま時間を過ごす。

しかし、ドライグは凄い幸せそうにしている。まえ、余りの恥ずかしさに少し無理にドライグを引きはがそうとしたら、涙目でこちらを見てきた。というか、泣きそうだった。そんなことがあれば、受け入れるしかない。幸せそうだからいいけど。

そんなこんなで、俺はちよつと違った生活に変わったのである。しかし、何の不満もない。こんな日常が続けばいいと思った。ドライグもそう思って・・・くれてる・・・と思いたい。それにもつと一緒に居たい。

しかし、その願いは意外なことでは叶うのであった。このことをこの時の俺はまだ知らない――

――イツセーSIDE OUT――

――冥界SIDE――

ところ変わってここは冥界。

自然豊かな土地に佇む巨大な城。その巨大な城を囲む高い柵。

いかにも莫大な資産を持ち、地位の高い貴族が住んでいるのを思わせるものであった。

その城の中のとある一室に女性が一人、とある男の帰りを待ちわびていた――

「主様……一体、いつになったら帰ってくるというのですか……？」

私の名は、イベリア。イベリア・ベルフェゴール。番外の悪魔、ベルフェゴール家の初代当主であるロスフォード・ベルフェゴールの次女である。私には双子の姉がいる。姉の名前はロイガン・ベルフェゴール。彼女は今私の出身家であるベルフェゴール家にいる。しかし、私はマモン家にいる。なぜ私たち姉妹は離れ離れになっているかというと、私はとある最上級悪魔の眷属をしているから。私たち姉妹は昔から同じように育ってきた。悪魔社会に出るための勉強もしかり、作法や礼儀など、訓練をしてきた。

しかし、私たち姉妹には決定的な差があった。私には才能があったのだ。それは魔力だったり、戦闘術であったりするもの。それが、私たちの暮らしを分けた原因だった。この私の才能故、本来ならば、私がベルフェゴール家の次期当主になるはずだった。しかし、最上級悪魔、現私の王である、アヴァデーダ・マモン様にオファーされたのだ。私たちが生まれたときにはもう成人で、昔からそれなりに付き合っていた方だ。私たちに取っては少し年上のお兄さんみたいな感じだった。そんな方からのオファーということもあって、私のお父様もキツパリと拒否することも出来ず、私の意思もあって晴れて私はお兄さんの眷属、女王となった。姉のロイガンは私の才能を妬んでいたし、これでよかったと思う。

しかし、今、私たちには信じられないことが起きていた。

主様が行方不明になってもう8年たつだろうか……

8年まえ、主様は他の眷属、7人を連れて、この城を出ていった。聞いた話によれば、新しい眷属候補が見つかったというので、その獲得に向かったという……この話を外に漏らせば、他の悪魔たちも獲得に向かい、収拾のつかないことになってしまうと、その時のターゲットの資料は全て破棄され、今は何一つ手がかりは残っていない。しかし、幸運なのか、その破棄されたらしい資料のかけらが残っていた。それを復元に時間を費やしていた。その結果が出るまで行方不明、ということしか公にはできていない。本当に、どこいかれてしまった

のでしょうか……

そんなことを思っていると、コンコンとノックの音がした。

「入っていいわ。」

「はい、失礼します。」

私が返事をする、見慣れた女性が入ってくる。

「バレンシア。どうしたの？」

この子はバレンシア・カタルーニャ。我らがアヴァデーダ眷属の戦車^{ルック}で、私が眷属となった後に入ってきた子である。

「はい、イベリア様。報告があります。」

「それは、主様の件について？」

私はそう訊いた。すると、彼女から待ちわびた答えを聞く。

「はい。資料の復元がようやくできました。とは言っても、ほんの少ししかできませんでしたが。」

「いいえ、少しでも情報がつかめるのなら十分です。」

本音を言えば、すべての情報を手に入れる事が出来ればよかったのですが、今はもうそんな事を言っていられる状況ではないことは分かっている。

「それと、今回の件について、私たち、眷属の会議を開くという声が挙げられています。後は、女王のイベリア様のみです。いかがなさいますか？」

「その会議、開くことにします。」

私はその会議を迷いなく開くことにした。

「わかりました。では、今からきっかり3時間後に始めます。その時間までに、会議室にお越しください。」

「分かったわ。それまでに準備をします。」

「はい。よろしく願います。失礼しました。」

バレンシアはそう言って、この私の部屋から退出した。

「やっとこの日が来ましたわ。主様……無事……ですよね……？」

私はやっとの思いでこぎつけたこの機会に声を漏らした。

そして、3時間後――

「皆さん、ごきげんよう。」

3時間が経ち、私は今日の重要な会議に出るため、会議室に入る。私とその部屋に入った時にはもう既に残った眷属全員がもう着席完了していて、私を待っていた。

「おお、イベリア殿。来ましたか。」

私のあいさつに返事を返したこの壮年の男性。名前はユーラン・マルセイユ。アヴァデーダ眷属の兵士^{ポーン}である。一番の最古参で、兵士^{ポーン}でありながら、実は剣も使えるという、実力者でいる。

「すみません。少し待たせてしまいましたか？」

「いいいえ。お気になさらず。時間どおりです。むしろ、私たちが早すぎたのでしよう。」

私の謝罪に応えたこの女性はヴァルモニカ・ハイデルベルク。こちらと同じく兵士^{ポーン}。魔法を得意としている。

「そうですか。では早速ですが、始めましょう。」

こうして、私は席につき、会議の幕を上げた。

それと同時に、全員の顔が先ほどとがらりと変わり、皆、顔をこわばらせていた。

「ではまず、主様が動いた原因である、眷属にする予定だったターゲットについての資料の復元結果からお願いできますか？」

会議の最初の主題に上げたのはもちろんこれであった。これがなければ動くこともできないから。

「はい。それは私が報告します。」

そう言っただけで席を立った女性は兵士^{ポーン}のトリエステ。

「主様、アヴァデーダ様は8年前、とある人間に目を付けたようです。おそらく、眷属にされようとしたのでしよう。」

トリエステは資料をすらすらと読み上げていく。

「その人間について、分かったことは？」

「はい。そのターゲットはどうやら魔法使いを親に持つ子供だったようです。しかし、その才能、魔力を鑑みて相当なものだったようで

す。その子供が住んでいるところはブリテンです。主様はそこに行かれたと思います。すみません。あとのことは残念ながら損傷が激しすぎて8年かけて復元出来た情報はこれだけです。」

トリエステは報告したあと、申し訳なきように謝罪した。

「いいえ、十分です。あなたたち復元班は良くやってくれました。」

「そうだけ。トリエステ。むしろ、あんな状態になっていた資料をよくそこまで復元したな。」

「ジェノヴァ殿の言う通りですぞ、トリエステ嬢。お主は良くやってくれた。」

「そうだな。」

「ありがとう、トリエステ。」

私の言葉を皮切りに眷属は皆、トリエステに称賛の言葉を掛けた。

「み、皆さん……ありがとうございます……」

トリエステの報告を聞き、会議を次の主題に移行させる。

「さて、皆さん。この報告を聴き、どうお考えになりますか？」

「「「「「」」」」」」

私がそういうと、眷属は全員、黙りこくった。皆、私のこの質問の返答に困っているのだろう。それもそうだ。眷属にするために出ていった主様はこの8年間、いつこうに帰ってこなかった。連れて行った眷属7人を含めて。

皆、口を堅くなに閉じていた。この8人しかいない会議室に沈黙が流れる。

私もまた、口を閉じていたままだった。

「……認めたくは……ありませんが……」

しばらく時間がたった後、この中で一番の古参眷属であるユーランがこの沈黙の殻を破った。

皆、ユーランに注目がいつている。

「主殿は……そのターゲットとやらの眷属化に失敗したのではありませんかな……?」

「「「つ……」」」

ユーランの言葉に皆それぞれ違った反応を示す。

「ユーラン、それは、つまり……?」

「可能性の話……主殿は……眷属化に失敗……そのターゲットに返り討ちにされた……」

「なっ!」

その考えに皆驚きを隠せていなかった。

「おい!ユーラン!あんた、主が人間に殺されたとしても言うのかよ!」

すると、ジェノヴァがユーランの考えに激昂し、声を荒げてユーランに反論した。

「落ち着きなさい。ジェノヴァ。可能性の話と言ったでしょう。」

私はジェノヴァを諫める。

「そんなのあり得ねえよ!大体な!主はこの冥界の悪魔の中でも相当強い方だろ!上から数えていったほうが確実に速いだろ!」

「そ、そうだよなあ……」

「確かに……」

ジェノヴァの反論に皆頷く。

確かに、主様の強さはあの魔王様方、ほかの最上級悪魔の方々にも知れ渡っている。主様の名はこの冥界全域に届いているくらいだ。

「そうだろ!みんな!あの強さを誇る主が、人間なんかには殺されるわけねえ!」

ジェノヴァの意見は確かに筋が通っていないこともない。しかし、わたしはどうにも腑に落ちなかった。

「しかしだな、ジェノヴァよ。だとしたら主様はなぜ帰ってこない?8年もどこかで油を売っているわけもあるまい?それに人間をあまり侮っていると痛い目にあうぞ?なんせ、人間には英雄というやつがいる。その者たちは最上級悪魔を屠ることが出来る。わしはそのような奴を一度見たこともある。それにだ。ここで主様が生きると希望を持っておいて、あとで真実を知った時の絶望は大きいからな。故に変な希望を持たぬ方が良くはないか?」

「グツ!!だがよお!!」

ユーランもユーランでの射ている考えを出している。
ジェノヴァもそれに反論をしている。

このままでは收拾がつかなくなってしまう。

「皆さん。一度落ち着きなさい。」

私がいっつもより低い声で言うのと、皆シーンと先ほどの沈黙のようになつた。

「とにかく、主様が8年も帰つてこないというのは今現在進行形で起こっているのです。眷属化に成功したのなら、寄り道をする事もないでしょう。だとすれば、主様の身に何か起こったことは間違いないでしょう。最悪の場合、主様と同行した眷属は、その者に倒されたということも考えるべきでしょう。」

「イベリア姐、あんたまでそういうのかよ。」

「ジェノヴァ。これは最悪の場合の話です。ですが、否定できない事なのです。そう考えて行動するしか今できることはありません。とにかく、場所が分かったのは幸運です。トリエステ、その場所に偵察隊を派遣しなさい。そのターゲットが今どうしているのかを調べましょう。その確認が出来たら、次にどうするか考えましょう。」

「わ、分かりました。」

私はトリエステに指示を出し、続けた。

「そして、このことは、私の実家のベルフェゴール家、主様の御実家、マモン家、主様と婚約なされているカレリア様のご実家、アルシエル家、つながりのある他の家に報告します。そのお家の方たちを招き、そこで最終決定を出していきます。それで、よろしいですか？」

私はこの会議における結論を出す。

「私は、構いません。」

「儂もそれが妥当じゃと思う。」

「わたくしも。」

皆、この結論に賛成していく。

残ったのは先ほど激昂していたジェノヴァだけだ。

「・・・俺も、今回はそれでいい。だが・・・俺は納得はしていない。そいつのところへ行って、拷問して聞き出してやる。」

ジエノヴァは攻撃的な反応をする。

「分かっています。私も納得はしていません。恐らくですが、仕掛けに行くことだと思います。特にカレリア様はその人間を決して許さないでしょうし。」

私が推測を出すと、ジエノヴァは嬉しそうな顔をする。

「はっ！そうこなくちやな。」

「では、皆さんこれでよろしいですね？」

私は再度、全員に確認を取る。

皆、この問いに頷く。

今回の会議は有意義なものだった。ここまでまとまれば、調査後、次の会議での行動方針を決定できる。

「では、皆さん、今日はここまでです。お疲れさまでした。」

こうして、私たちは会議室から退出し、それぞれ自身の部屋に戻った。

「ふう・・・何とかうまくいきましたね。」

私はほつとした。この会議、收拾がつかなくなると懸念していましたが、どうにか皆、まとまったのが良かった。

おっと、こうしている場合ではありませんね。さっそく、偵察部隊の派遣・・・はトリエステに任せただので、実家に連絡を入れなければ。

私は魔法陣を出し、実家につなげる。

『おお、イベリアか。久しいな。』

『お久しぶりです。お父様。』

『おお、珍しいこともあるものだな。お前から連絡をよこすとはな。』

確かに父の声は久しぶりに聴くし、連絡もあまりとってはいなかった。

しかし、今はそんなことを気にしている場合ではなかった。

「お父様、今はそんなことを言っている場合ではないのです。」

私がそういうと、父は少し悲しそうにした。

『そんなことって・・・イベリア・・・私は少し傷ついたのだぞ・・・全く。それで、そんなに急いでいるということは、何かあったのだな

？もしかして、今現在行方が分からなくなっているアヴァデーダ君とその眷属のことについてか・・・？』

さすがはお父様。私の言わんとしていることを真つ先に当ててくるとは・・・

私は答える。

「はい、そのとおりです。お父様。」

『なに、私も家の者を使って色々調べているのだが、これといって何もつかめなくてな。私も持ち詫びていたのだ。それで、どうなのだろうか？』

父も父で探してくれていた。私は嬉しかった。

「はい、実は――」

『・・・そうか・・・彼は眷属にしようと、人間界へ・・・そのまま帰ってこず、か・・・』

「はい。なんでもその人間は中々の強さだったようです。私たち眷属で話し合った結果、最悪の状況も考えられます。」

あまり言いたくはないが、隠さず父に話す。

『ふうむ・・・そうだな・・・私も人間に倒された・・・という可能性は決して低くない。むしろ高いと考えてもいいかと思う。どちらにせよ、帰ってこないなら、彼の身に何か起きたのは間違いない。』

「はい。私もそう考えております。今現在、偵察部隊をその地に派遣しています。」

『何？ということはその場所がどこか分かったのか？』

父は少し驚いたようだった。

「はい。眷属の一人が当時破棄された資料を8年かけて復元してくれましたおかげです。」

『なんと・・・あっぱれだな・・・』

彼女の手腕に父も驚く。

「その偵察の結果をもとに、次の会議で我々の行動を決めようかと思えます。」

そして、私は父に結論を伝えた。

『分かった。その会議には私も行こう。マモン家や、他の家の協力は私が取り付けよう。お前は次の準備にあたってくれ。』

ここで、父が他の御家の連絡を取ってくれることになった。

「ありがとうございます。助かります。」

『何。つながりのある者なのだ。これくらいするさ。』

「はい。よろしくお願いいたします。」

『うむ。』

そう言った後、連絡は切れ、魔法陣は消えた。

私は内心嬉しく思った。

計画は順々に進んでいる、と。

「アヴァデーダ様・・・」

私はここにはいない主様の名をつぶやいた。夜空を見ながら……しかし、この時の私は思いもよらなかった。

私たちは、いえ、悪魔という種族は、とんでもない敵を生み出してしまったことに……

—悪魔SDIE OUT—

—SIDE—
?????

ところ変わって、ここは人間界。豊かな自然と美しい景色が広がる土地に聳え立つ城と、その下に広がる街。

その城の宮廷では、何やら騒がしく、甲冑被ったものや、ローブを来たものがいきかい、ただ事ではないようだった。

「おいー！こつちだ！いそげ！」

「なあ、これ何処に運ぶんだっけ？」

そんな騒がしい城の庭を見守っている、王冠をかぶり、白い鎧を身にまとったものが居た。

「父上！」

すると、その白い鎧を身にまとった壮年の男性に声を掛ける若い青年と、その青年の後ろからついてくる金髪の美少女。

「おお、お前たちか。」

「父上、一応、指示されたことはすべて終えました。」

「うむ、ご苦労！」

壮年の男性は二人に元気よくそう言う。

「これで、8年目、ですね。」

「ああ、そうだな。」

青年がそういうと、三人の間に沈黙が流れる。

「父上、なぜ、マーリン殿とクリスチャン殿は……」

「……私も、悔しいさ……」

「マーリン様……クリスチャン様……」

3人は悲しそうな表情をする。

「あら3人とも、ここで何をやっているの？」

すると、そこに少し年を取った貫禄ある女性が近づいてきた。

「イグレイン……」

「お母様……」

「あなた、悲しいのは分かりますけど、もうすぐお二人の命日です。

そんなことをしている場合ではありませんよ。」

その女性は王に強く言う。

「ああ……わかつている……」

「それ입니다。一番つらいのは、イツセー君なのですよ？そのイツセー君が前向きに生きています。我々がいつまでもそんな弱気ではないけません。」

その女性の言葉は王に深く染みる。

「アーサー、アルトリア。あなたたちもですよ。それにイツセー君が前に来たときは、とても前向きだったではありませんか？」

「はい……」

「そのとおりです……」

「なら、あなたたちもいつまでもよくよしない。」

「はい、わかりました！」

「はい、よろしい。では準備を済ませてしましましょう。」

そう言つて、4人は各々動き始めた。

—ブリテンSIDE
OUT—

NO, XIV 〱襲撃〱

—イツセーSIDE—

よつす、俺、イツセー。

今日も相も変わらず、魔法の研究をしている。

いつもこんなことしかやってないじゃないか、だつて？

魔法使いなんだから、仕方ないだろ。本分なんだから。

まあ、それはともかくとして、また魔法の成果が上がったんだ。

その魔法を完成させ、次なるステップへ上がるために日々努力している。

昨日の精神世界での鍛錬、あれは凄かった……いろんな意味で……

ドライグが鍛錬終了後に抱き着いてくることは日常茶飯事なことだ。しかし、昨日はニトラまで抱き着いてきた。全くもって、恥ずかしいことこの上ない……

ニトラのことだ。きつと俺の反応を見たいから、冗談半分で俺をからかっているのだろう。しかし、こつちからしてみればとんでもない。ただでさえ綺麗なんだから。あんなに抱き着かれて密着されたらたまったもんじゃない。

それにドライグはその間とんでもなく不機嫌になっていた……ニトラもニトラでドライグを煽っていくスタイルだし……これじゃ、今日の鍛錬後はもうやばいだろうな……

「ああ、そーいえば、もうすぐだな。」

そんなことを思っていると、ふと頭にあることが浮かぶ。

「何がもうすぐなの？イツセー。」

俺のつぶやきに先ほどまで共に研究に携わっていたニトラが訊いてくる。

「実はもうすぐなんだ。9回目の、命日だ。」

俺はキーワードだけ答えた。

「ああ、そうか。そういえば、イツセーの両親の命日がもうすぐだったな。」

ニトラが思い出したように言った。

そうだ。あのときだ。あのときから、俺の生活が、がらりと変わったのだ。忘れはしない。いや、決して忘れてはいけない日なのだ。

「うん。だから、その日にまた、お墓に行かなきゃ。それと、アヴァロンにも行かないとね。父さんと母さんの元居たところだし。」

実はユーザーおじさんから、命日の儀式の招待状をもらった。母さんと父さんを弔い上げるための。

お墓は父さんと母さんが殺された場所にあるが、立派なものがやはり欲しかった。そこで、遺体は流石に運べなかったが、アヴァロンにも、石碑を立ててもらった。以来、毎年その儀式に呼ばれて参加している。

ユーザーおじさんや、イグレイン叔母さん、アーサー兄さん、アルトリア、他の騎士たちも皆そろって俺の母さんと父さんの冥福を祈ってもらっている。毎度毎度申し訳がないが、向こうも向こうでこれくらいはする、と言ってきている。そして、その命日の日にアヴァロンの城へ行くところちに住まないかとか、心配だとか言われる。確かに、命日の日にしか、会わないが、やはり自分の家が安心する。だからいつも申し訳ないが断っている。

「ならせめて、もう少し顔を合わせる頻度を高くした方がいいのではないか？一年に一回などという寂しい回数しか会わないから、毎度のごとく心配されるのではないか？」

ニトラが的確なことを言ってくる。ううん・・・確かにそういわれればそうだ・・・

「そうだなあ・・・もう少し向こうに行った方がいいのかな・・・一年に5回くらい・・・」

俺は早速その案を出してみる。

「まあ、それくらいならいいのではないか？」

「そうだね。じゃあ、今回言ったら、このことを伝えようかな。」

「それがいいや。」

ニトラもこれに納得してくれた。

「それとだな、イツセー。」

先ほどのような柔らかい口調ではなく、ニトラは少し真剣な様子で

言った。

「ん？なんだ？」

俺は少し疑問に思ったので、ニトラに訊いた。

「イツセーの両親の命日の話とはそれてしまうのだが……最近、この辺がおかしくはないか？」

「そういわれれば、最近周囲がな……」

ニトラの懸念に俺は同意する。

「ああ。もしかしたら、また何者かが、この辺をうろちよろしているかもしれない。」

俺はニトラが言った、その何者かがのところに反応する。

「何者かが、ね……しかしだ。この雰囲気と言い、この気配といい……似ているな。」

「そうだな。悪魔か……」

『イツセー。』

「ああ。ドライグも気づいていたか。」

『ええ、もちろん。最近何かおかしな気配がしていたのよ。』
すると、ドライグもこの会話に参加してきた。

ここで、ドライグ、ニトラ、俺の見解は一致した。

「しかも、よりによって、両親の命日に近いとは……」

そう、あの日。悪魔たちが襲来してきたときとそっくりだ。ここで俺の頭の中にある懸念が生じた。

「まさか、復讐に来るとでも言うのか……？」

「どうだろうな。しかし、その可能性もゼロではない。あのような品のかけらもない種族のことだ。きつと恨みを持っていることかもしれん。自分たちは他の種族に好き勝手働く癖に、いざ自分がやられるとなると許せなくなる。大方そんなような連中だと、私は思うがな。」

ニトラはそう主張する。しかし、とても説得力のあるものだ。

「なあ、ニトラ、ドライグ。」

そこで、俺はドライグとニトラに声を掛けた。

「ああ。」

『ええ。』

内容を言わなくてもそれは通じた。

「もしかしたら、来るかもな。どうもあの時、あの日に似ているからな。」

「ああ。今度はどんな奴が来るのか・・・イツセー。」

ニトラは俺の名を呼んだ。

またしても内容など言っていないが、俺にはニトラが何を言おうとしているのか分かった。

「ああ。たとえどんな奴が来ようが関係ない。戦ってやるさ。」

俺はニトラにそう言った。

「そうか。ということはイツセー。今周りをちよろちよろとしている小者は排除しない、ということだな？」

「ああ。しばらく泳がせておく。あの日と同じ、俺の近辺を調査しているのだろうか。恐らくそいつらがここから引いたとき、真打ちが登場つてところだろう。わざわざこちらから行かなくても、向こうから現れてくるはずだ。だったら、仕掛けてくるところを返り討ちにすればいいだろうさ。今ここで雑魚を消しても、真の敵が炙り出せない。」

「それがいいな。その雑魚と真打ちをまとめて一網打尽にすれば、手間もかからない。」

ニトラは俺の見解に賛成する。

『そうね。それにしても、あちらは私たちに気づかれないと思っっているのかしらね。』

ドライブが悪魔たちを小ばかにしているように言う。

「さあな。こちらをさそっているのか、それともただのバカなのか。これで気づかれないなど思っているのなら、相当技量がないな。甘すぎる。わざと気づくようにしているというなら、それはそれで嘗められているな。」

ニトラはこちらが見下されていると思っけていても、客観的に言う。全く油断していないということなのだろう。

『でも、今回はもうあの時のようにはいかないわ。』

「ああ。イツセーは怠ることを決してしないで、鍛錬をしてきたのだから。」

「まあ、最近は魔法にかまけてしまったがな。」

俺は少し自虐的に言う。

「そのかわりに、精神世界での修行があつただらう?」

「まあな。」

「ふっ、そうだろう?」

ニトラが言った、精神世界での修行。あれはとてもすごかった。ドライグやニトラのようなドラゴンたちとの手合わせはもちろん、歴代最強の赤龍帝であり先輩でもあるベルザードさんとの戦いもあった。ベルザードさんが赤龍帝王と呼ばれた所以、あの覇龍は強かった……。しかし、とてもいい経験だったことは間違いない。

『ふふ。今のイツセーは強いわ。あのとときの悪魔レベルならバラス・ブレイカー禁手にならなくても十分対抗できるわ。今のイツセーは、魔王が来たって勝てるのだから。』

「ありがとう、ドライグ。」

ドライグからお褒めの言葉をもらう。

そうだ。何度来ようが、真正面から叩き潰してやる。

「かかってこい。悪魔ども。来るなら、返り討ちしてやる。新しい魔法、味合わせてやるよ。完成途中だが。」

俺はニヤツとしながら言った。

「ほう。では、イツセー。あれを使うのか?」

俺の言ったことにニトラは反応する。

「ああ。どうせ片付けなければならぬからな。これを使うにはいい機会じゃないか?」

「悪魔などという者にはもつたない気がするがな。まあいいのではないか?しかし、完成途中のあれは大丈夫なのか?」

すると、ニトラは魔法のことを聞いてきた。

「あれも確かに途中だが、試しに行使してもいいだろ。どれほどの効果か分かるだろう?」

「まあ、実戦で使ってこそ、魔法なのだからな。だが、無理はするなよ。」

ニトラは俺に忠告というか、注意を喚起する。

「ああ、分かっている。」

俺はそんな意思を再確認して、また魔法の研究に励む一方、父さんと母さんの命日の準備と、アヴァロンに行く準備をした。

—イツセイSIDE OUT—

—悪魔SIDE—

冥界の豪華な屋敷。それは屋敷というよりはもう城である。

その巨大な城の入り口、門を老若男女、何人もの悪魔たちがぞろぞろとくぐり、屋敷の敷地内に入っていく。

「おお、イベリア殿。久しぶりですな。」

この屋敷は私の実家、ヴェルフエゴール家の屋敷。

私が門の前に立ち、来賓される方々をお出迎えしていると、とある方に名を呼ばれる。

「これはゼルドルフ・マモン様。ご機嫌麗しゅう。」

私は呼ばれた方の方へ行き、挨拶をする。

この方は現マモン家当主、ゼルドルフ・マモン様である。我が主の父君。

「お綺麗になられましたな。」

「ありがとうございます。今日はよろしくお願いします。」

私は今日の会議のことを言い出す。

「ああ、こちらこそ。それで、わかったのですな？我が息子の一連の出来事が。」

ゼルドルフ様は真剣な顔でこちらに確認を取る。

「はい。このことは後程、会議にてお話しします。とりあえず、御早く指定の場所へ向かってください。」

「ふむ、了解した。では頼むぞ。」

「はい、お任せください。」

ゼルドルフ様はこちらに念を押しした後、屋敷の門をくぐり、庭の中に入っていた。

最後の呼ばれた方が来た後、門を閉め、屋敷の中に入り、父のもとへと向かう。

「父上。最後の方をお出迎えしました。準備は出来ています。」

「分かった。では向かうとしよう。」

私は父と一緒に今日の会議の場所へ向かう。

「皆さん、ごきげんよう。」

ガチャつとドアを開け、その会議室に父と共にいる。父はここにいる方々に挨拶をする。

「おお、来ましたか。お久しぶりですな、ベルフェゴール卿。」

そうあいさつしたのは、私が先ほどあいさつしたマモン卿。

「お久しぶりですな。元気でしたかな？ベルフェゴール卿。」

次にあいさつしたのは、ベルファスト・アルシエル様。主様の婚約者、カレリア様の父君。

「お久しぶりです。マモン卿、アルシエル卿。私はこの通りです。心配ありません。」

父上もいつも通り、挨拶を返す。

「ベルフェゴール卿、席にお着き下され。あとはあなただけですぞ。」

「ええ。」

父は短い返事を返した後、あと一つ残っている席に座る。

父上が席に座ると、全員の視線が父上に集中する。

「さて、皆さん。今回はこのような会議にご集まりいただき、感謝する。」

ここにいるのは、マモン卿、アルシエル卿、主様の眷属、主様の婚約者のカレリア様、つながりのあるマルバス家、ブザス家、グサイン家の当主様とそれぞれの御家の付き人である。

父前置きから始める。

「何故、皆さんにご集まりしてもらったかはもう既に知っておられ

るだろう。そう、我が娘の主である、アヴァデューダ・マモン殿の失踪事件だ。」

その言葉を聞くと、皆顔がこわばる。

「皆さまに以前伝えた通り、マモン卿の御子息は8年前、失踪し、行方が分からずじまいだ。」

この言葉を聞いても、皆無言で話を聞いている。

「だが、眷属の皆と我が娘のイベリアがその真相に迫ることが出来た。」

「おお・・・」

すると、会議室内が少しざわざわとした。

「まず、そのことについて報告する。イベリア。」

「はい。」

父に呼ばれて、私は前にでる。皆さんの注目が父から私へ移る。

「では、私たち眷属が新しく得た情報を申し上げます。我が主は8年前、とある人間に目を付けられました。」

「人間じゃと？」

人間という言葉に、マルバス卿は反応した。

「はい。どうやら、眷属化することが目的だったようです。私たちが復元した資料を見るに、その人間はかなりの逸材だったようです。そのため、主様は極秘でそれにあたったようです。眷属を半分のみ引き連れ、人間界へ向かわれました。資料は破棄されており、復元するのも時間がかかったため、このようなことになりました。」

このことを聞き、みなそれぞれの反応を示す。

私は続けた。

「私も、残った私たちはこのことをまったく知らされていません。女王の私でさえ、人間界へ行く、としか知らされていませんでした。そして、主様は行ったまま帰ってこず、8年の月日が流れました。」

「アヴァデューダ殿が向かわれた場所は？」

「はい、人間界、ブリテンです。先日、その場所へ偵察部隊を派遣。結果、8年前主様がターゲットにしていた人間の存在を確認しました。私たちが恐れていた最悪の展開となりました。これが全てで

す。」

「またもや、この室内がざわつとなる。」

「というわけです。これを聞いて、あなた方の意見を聞きたい。」

私の報告の後、父上が皆様に訊く。

「つまり、私の息子は、人間に負けたというのか……. なんと
いうことだ!!」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

マモン卿の悲痛の叫びに一部の者たちは黙る。

「そのようなこと、あつてはなりません…….」

それに同調するようにグサイン卿は言う。

「その通りです。私はその人間を許しません。その人間に裁きを降
します。」

カレリア様はとても低い声で言う。なんというか……. 黒いオー
ラが出ています…….

「私もです。」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

カレリア様の発言を皮切りに、みな発言をしていく。

「……. 満場一致で、その人間に仕掛ける、ということによろし
いですか？皆さん。」

父上が最後の確認を取ると、ここにいる全員がこクリと頷いた。

「では次のステップに移りましょう。どういった方法で奴をやる
か、です。」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

会議の主な主題に移る。みな、少し悩んでいる。

「相手は、アヴァデーダ殿を倒した相手……. アヴァデーダ殿
はこの冥界でも名のある悪魔であり、かなり力を持った最上級悪魔
だ。そのアヴァデーダ殿を倒すということは中々やりませぬ。」

アルシエル卿は冷静に言った。

「確かに…….」

「その者は何者なのだ？イベリア殿。」

「分かりません。魔法使いということ以外、全て不明です。」

「なんと・・・魔法使いだと・・・」

「魔法使いはそんな脅威ではなかったはずだ・・・」
みな魔法使いということに驚く。

私も、ここまで魔法使いが強いのは聞いたことが無かった。

「となりますとこちらは数で押すということが一番よいでしょう。」
マモン卿が一つの案を出す。

「私もそれがいいかと。私の家から、戦闘部隊を出しましょう。」
ブサス卿からそのような提案がでる。

「ブサス卿、とてもありがたいが、良いのですか？」
マモン卿が訊く。

「ええ。私もあなたの御子息にはいろいろ世話になっているので
す。このような事態なのだ。手を貸すのは当然でしょう。」

「かたじけない。」
マモン卿は頭を下げる。

「私の家からも部隊を派遣します。」
「私の家からもだ。」

ブサス卿の支援を皮切りに他の御家からも支援をしていただける
ことになった。とてもありがたい。

「そうなれば、私の家から出さないわけにはいかないな。」
父上もそう言った。

「私も、眷属を総動員します。」
そう言ったのはカレリア様。彼女の眷属は相当な実力者集団。と

ても心強い。
「ということは、この兵力全員でそのブリテンに乗り込むのですか
な？」

方向性が決まったことで、つぎはどう戦闘に持ち込むかという話
になる。

「しかし、向こうにターゲットの仲間が居れば、それらとも戦うこと
になるのではないか？」

「いや、ターゲットはそもそも仲間がいるのか？」
今度はそのことでまた議論になる。

此処で私の頭に案が浮かぶ。

「皆さん。私に案が。」

私が発言すると、皆私の方に注目する。

「ふむ、聞こう。」

「はい。少数でまず、ブリテンに乗り込み、仕掛けをするのです。」

「仕掛け？」

皆私の発言を疑問に思っている。

「はい。偵察によると、ターゲットの近くに墓があるようです。そこにわなを用意し、ターゲットが来たところに発動し、ターゲットを冥界に強制転移させます。」

「そうか！」

私が言わんとしていることが伝わったのか、マモン卿が声を上げる。

「はい。強制転移させた場所にあらかじめ、こちらの部隊を待機させておき、そこで攻撃を開始します。大勢を向こうに転移させて敵地に乗り込むより、ターゲットをこちらに來させた方が、何かと都合がいいでしょう。大勢で移動すれば、気づかれる危険性も高まります。」

「なるほどな。しかも我らの地である冥界ならば有利になるな。」

「ほほう・・・それは名案ですな。」

みな、私の案に感嘆する。

「ふむ、皆さん。これ以外に案は？」

父上が訊くと、みな何も言わず、こちらを同意の目で見える。

「ふむ。異論はないようですな。では、この作戦で行こう。」

「ですな。」

全員一致で作戦が決まる。

「では、いつに決行しますかな？」

「作戦決行は、4日後。主様が屋敷を出られる前日です。調査から推測しますと、あの人間はその日にその墓に現れると思います。」

「皆さまも異論有りませんか？」

「ああ。」

「それでいこう。」

「ターゲットを強制転移させる魔法陣はこちらが準備しておきます。」

私は名乗りを上げる。

「ふむ、了解した。」

「頼みましたぞ、イベリア殿。」

「はい、お任せください。」

私は皆さまに念を押される。

「これで、すべて決まりましたな。皆さん、今回の会議ですべてが決まりました。ありがとうございました。これで、行けますな。」

「いや、ベルフェゴール卿。わたしも今日は有意義な時間を過ごさせてもらった。感謝する。」

「私もだ。勝てますな。我々は。」

「その通りですな。イベリア殿も、アヴァデーダ殿と同じくらいの強さ。そして眷属も強力だ。そして、こちらの戦闘部隊もいる。」

それぞれの御家の方々はみな勝利を確信していた。そうなるとういのですが……

「イベリアさん。」

私が弱気になっていると、カレリア様から声を掛けられた。

「あ……カレリア様。」

「今回はアヴァデーダの為にありがとう。」

カレリア様からお礼を言われる。

「い、いえ、これくらい当然です。私の主様なのですから。」

「それでもです。絶対に、人間を討ち取りましょう。」

「は、はい……」

カレリア様からの言葉に私は弱々しく応える。

「不安なのはわかりますよ。」

「やはり……わかってしまうのですね。」

カレリア様は私のことを見抜いていた。

「敵はアヴァデーダを倒した人間。確かに一筋縄ではいかないでしょう。しかし、私はその人間を許せない。絶対に。こう見えても私、もう我慢の限界なのですよ。アヴァデーダを殺した人間が憎く

て仕方ない。その人間を早く殺したいの。何より、アヴァデーダの為だ。」

カレリア様は思い思いに語っていく。そんなに思いつめいてられたのでしょうか。

そうですね、いけません。弱気になつては。必ず！主様の敵を取る！

「はい。すみません。私もその人間に復讐します。絶対に。もう迷いません！」

「ふふ。お願いしますね。」

「はい！」

私の決意を聞くと、カレリア様は朗らかに笑い、この部屋を後にした。

カレリア様は私に克を入れてくれたのか・・・

「私です。はい、会議は終わりました。さっそく準備を。」

私は彼女に感謝しながら、さっそく眷属に指示を出し、動いた。

4日後。

強制転移させる予定地に、今回の作戦の実働部隊全員が集まった。

この地を集まったのは予想を超える人数だった。ゆうに1000人を超えていた。

「皆さん。集まっていたいただき、ありがとうございます。」

そう全員に言うのはカレリア様。

いつになく強気でいらつしやつた。

「私たちは、冥界の宝を失いました。今は亡きアヴァデーダの為に、人間を屠つて差し上げましょう！」

「「「「「おおおおおー—————」」」」」

！！！！！！

カレリア様の言葉に皆声を上げた。

皆とてもやる気だ。

『イベリア様。』

すると、ブリテンに行き、ターゲットを転移させる役のトリエステから連絡が来る。

「トリエステ、どうなっていますか？」

「私はあちらの状況を確認した。」

『準備は完了しています。いつでも行けます！』

「分かりました。ではそちらで待機を。あとはこちらから指示をだします。」

『了解です。』

指示を出し、通信を切る。

そして、今回の作戦の指揮するカレリア様に状況を伝える。

「カレリア様。転送魔法陣の準備は完璧です。いつでも行けます。そろそろ配置についた方がいいかと。」

「分かりました。では皆さん！所定の位置へ移動を。」

カレリア様の指示で、それぞれの位置に行き、この場には私とカレリア様のみとなった。

「いよいよですね。」

「ええ。ようやく、この日が来ました。」

「絶対に、成功させましょう。」

「ええ、そのためにやってきたのですから。」

そう言っ、私たちはそれぞれの持ち場に行った。

『イベリア様、ターゲットが現れました。』

しばらく経った後、トリエステからの通信が入る。

「魔法陣には入ったのですか？」

『もうすぐです。』

「わかりました。皆さん、もうすぐ発動させます。よろしいですね？」

『了解。』

『こちらにも。』

『いつでもどうぞ。』

強制転移地にスタンバイしている他の部隊に確認を取る。

すべての確認を得たところで、通信をそのままにして、トリエステとの通信に戻る。

『イベリア様、今魔法陣有効範囲に入りました。』

「よし、では転移魔法を発動させて。」

『了解!』

すると、強制転移地に定めた魔法陣が光る。

「皆さん!ターゲットが来ます!!」

通信で皆さんに伝える。全員、攻撃態勢に入る。

そして、そのターゲットが現れる。

「全員、攻撃——————!」

カレリア様の指示でそのターゲットに一斉攻撃した。

—悪魔SIDE OUT—

—イツセーSIDE—

「さてと、それじゃあ。行きますか。」

そうやって俺は自宅を出る。

あれから数日後、今日は父さんと母さんの命日の前日だ。

家を出る前にその準備をしていた。明日はユーザーおじさんのところで父さんと母さんの弔いあげをするから、父さんと母さんの墓参りをしたあと、そこに行くことになっている。だからそのための準備だ。

そしてしばらく移動した。

そして、父さんと母さんが眠っているところへ到着した。

俺の視界には父さんと母さんのお墓の目印である石碑が映る。俺

はそこへ向かって歩き出した。

「ん?」

すると俺は少し違和感を感じた。

「なんだ?まさか、来たのか!?!」

予想していた悪魔たちが襲来したのかと思い、俺は戦闘態勢に入る。

しかし、敵は現れない。

「イツセー!足元だ!」

ニトラから声がする。

「これは・・・」

ニトラの言う通り、足元を見ると魔法陣が浮かんでいた。

一瞬攻撃魔法かと思ったが、それは違った。

「くっ！」

魔法陣は光りながら発動する。

するといつの間にか、さっきまでの俺の視界とは違った景色が映る。

「ここは・・・どこだ？」

あたりを見回すと、森で囲まれているが、俺が経っている場所は草原で周囲にはリンゴのような果実を実らせた木が立ち並んでいた。空は青ではなく、紫色だ。

「!?」

「イツセー！」

すると、急に周りからたくさんの悪魔の気配が現れる。

一斉に魔力が自身に飛んでくる。ニトラもこの攻撃を感知し、俺に叫んだ。

俺は即座に魔法で障壁で自身を囲み防御する。

ダウン!!!

大量に向かってきた魔力弾が障壁に当たって大きな爆発となり、それに伴い、騒音が鳴り響く。濃い煙も発生する。

「やったか!!」

「ざまあねえなあ!!」

すると周囲から下品な声が聞こえた。悪魔たちか・・・
やった気になっていられるのは癪なので、俺は口を開けた。

「いきなり俺が居た場所から強制的に転移させ、拳句に待ち伏せて不意打ちとはやってくれるじゃねえか。」

煙がまだ残っているが俺は言った。

「やはり、防ぎましたか。」

今度は女性の声が聞こえた。

「なあ・・・悪魔さん達よお。」

煙が自然消滅し、悪魔たちの姿があらわになる。

正面には女の悪魔が立っていた。それだけじゃない。俺の周囲を悪魔たちが取り囲んでいた。

多いな・・・

「イツセー、どうやら、100匹はいるようだ。」

ニトラから正確な数が伝わる。

よくもまあ100人も集めたものだな。

「来ましたね。人間。」

その女は憎悪の目でこちらをにらむ。

「何の用だ？悪魔。俺はこんなことをしているほど、暇じゃないんだが？」

俺はそう言いながら睨み返す。

「あなたになくても、こちらにはあるのですよ。人間。」

女悪魔は俺のにらみに臆することなく言った。更に女悪魔は続けた。

「単刀直入に聴きます。アヴァデーダ・マモン、この名に心当たりは？」

「マモン？ああ、前にそんな奴いたなあ。」

上の名は覚えてねえが、マモンという名は、忘れてなかった。いや、忘れるはずもない。

「その方を、どうしたのです？」

その質問から察するに、仇討ちか・・・

俺は隠す理由などないから、真実を言う。

「殺したよ。そいつに付き添っていた奴らもな。」

「そうですか、それだけ聞ければ十分です。死になさい!!!」

俺の短い返答を聞いただけで、目の前の悪魔はさらに憎悪を強めた。そして、攻撃をしてきた。

俺は構わず障壁を展開して防御する。

「そうか。なぜか最近周りをうろちよろとする奴が居たかと思えば、てめえらか。」

「なるほど・・・気づいていましたか。」

女悪魔は俺の問いに驚きながら答えた。

「気づいてた？おいおい笑わせるなよ、悪魔。あの程度で気づかれていないと思っていたのか？うぬぼれ過ぎだ。どうやら悪魔は相当弱いようだな。」

俺は挑発するように言った。

「んだとてめえ!!」

「調子に乗るなよ!!クソが!!」

俺の挑発に案の定乗ってきたヤツラが居た。

「バカが。」

そいつらは馬鹿の一つ覚えみたいに突っ込で来る。そいつらを魔法で難なく撃破し、吹っ飛ばした。

「こいつ!!」

「やりあがった。」

これを見て周りの悪魔はさらに冷静さを失う。

「奴の挑発に乗るな!!陣形を乱すな!」

しかし、先ほどの女悪魔が冷静に指示を出す。

「へえ、悪魔にもあんたみたいなのやつがいるんだな。挑発すればすぐに乗るバカしかいないと思っていたが。」

さらに俺は挑発する。

「貴様。その減らず口をすぐに閉じさせてやる!」

その女はさらに攻撃してくる。

さらにそれに同調し、周りの奴らからも魔力攻撃をしてくる。

「ふっー」

俺は防御魔法陣で防ぎながら空を飛ぶ。

「くっ!!こいつ、素早い!」

悪魔たちは集団で攻撃してくるが、俺には当たらない。俺に当たらない魔力弾は周囲の木々や岩にぶち当たっていく。森林はどんどん焼けていく。

「そろそろ反撃だ。」

俺は幾重にも魔法陣だし、火、雷、水、風などのあらゆる属性の魔法で攻撃する。

「ぐああ!」

「ぐおっ！」

魔法攻撃が悪魔たちに炸裂していく。それと同時に、木々にもぶち当たって、そこが消し飛んでいく。果実が出来ている木々はほとんどが消滅してしまった。

「ん？」

「はあっ！」

シユン!!

突然現れた剣士が剣を振るう。

しかし、気づいていたので、身体をひねって斬撃を躲す。

「なっ!!これに反応するのか!!」

「まだまだ甘いつてことだ！」

「グハッ！」

その剣士を蹴りでぶっ飛ばす。

「てめえ!!」

間髪入れずに新手が攻撃してくる。その相手は拳を振るって来る。俺は同じくそれを拳で迎え撃つ。ドゴンという音を立て、俺の腕に拳が当たる。

「人間が！殺してやる!!」

その悪魔は憎しみを込めて言う。

「はっ！やってみろ！」

「くっ！」

俺はカウンターで攻撃を食らわす。

『イツセー、どうしたの？神器を使つて!』

戦っていると、ドライグからそう言われる。

(ドライグ。ここは恐らく敵地、十中八九冥界だろう。ここで神器を使えば、悪魔たちに気づかれる。ここで使うわけにはいかない。)

『それはそうだけど・・・』

(心配ない。この程度ならば、使うまでもない!)

「はっ!!」

俺は攻撃の手を緩めることなく、攻撃していく。

あらかた攻撃した。しかし、相手は弱っていなかった。

「ふふふ。これはフェニックスの涙。この日の為にためておいたのよ。これを使えば傷は治るわ。」

それを聞いて俺は素直に驚く。

「ほう。悪魔にもそんなものがあつたのか。少しはやれるようだな。」

「悪魔を、甘く見ないで!」

女悪魔はそう言って、攻撃を仕掛けてくる。

だが、攻撃は全く俺には届いてこない。そして、魔法でそいつを吹き飛ばす。

「カレリア様!」

「くっ、想定外です。ここまですとは……」

「な、何故だ……? 何故勝てない……? この人数差だぞ……? しかも相手はたった一人の人間……なぜだ……何故なんだ!?!」

悪魔が顔を歪ませながら嘆く。

俺はこれから消え去る悪魔にその答えをつける。

「なぜ勝てないか……? それは貴様らが鍛錬をしないからだ。」

「鍛錬だと……?」

俺の答えに悪魔がそう言う。

「才能。それは貴様らにも才能の有る無いはあるだろうな。それは一般に言えば魔力と言うやつだろう。だがな、才能をもってしても、それを生かせない奴は、時として努力をし続けた才能のない奴に劣る。どうせ、貴様らは才能に驕って鍛錬もろくにしてないのだろうな。もったいないとは思わないか? 才能を持ったのなら、何故その先に行こうとしない? 貴様らはそんなことだから、弱いんだよ。」

「くっ……」

奴らは凶星を疲れたのか、沈黙した。

「イツセー。この人数だ。面倒だから早くかたづけてしまおう。」

すると、ニトラがかったるそうに俺に言う。

「そうだな。あれを使う。」

俺は両手を前にかざし、ある魔法式を演算する。

「なっ!! なんなんだ・・・あの光は・・・」

悪魔は驚きと恐怖を含んだ声を上げる。

俺の手には文字が輪のように囲む光の弾があらわれ、おれの後ろには八芒星が現れる。

悪魔たちはみな俺を畏怖の目で見ている。

「な、なんなのだ。あんな魔法、見たことがないぞ・・・」

「よろこべ、俺が今開発途中の新魔法だ。こいつをお見舞いしてやるよー!」

さらに光が強くなる。

「くらえ!! 太古の魔法、エンジエント・スベル 審判魔法!!」

俺がそういうと、更に光が強くなり、とんでもない波動がこの一帯にふきあれた。

「「「「う、うわあああああああ!!!」」」」」

悪魔たちは断末魔を上げながらどんどん消し飛んでいく。

「こ、こんな・・・こんな人間が・・・いたなんて・・・信じられない・・・」

最後に残っていた悪魔も無念の声を上げながら消えていった。

「終わったな。それにしてもこの魔法、相当な代物だ。加減してもこれだ。まだまだ改良の余地はあるな。さて、帰るとするか。」

そうして、俺は魔法陣で人間界へと帰った。

「ふう、帰ってきたと。」

俺は父さんと母さんの墓のもとへ行き、祈った。

そして、おじさんのもとへ向かった。

「イツセーよ、あの魔法を使ったはいいが、問題ないな。」

その途中、ニトラに心配される。

「大丈夫だ。しかし、あれはまだ改良の余地がある。これからだ。」

「ああ、そうだな。あれはまだ使い勝手が良くない。しかも未完成だ。」

「これからってところだ。」

俺はニトラを心配させないようにいう。

しかし、そうはいったが何なんだろうか……この違和感とか……不快感というか……

俺は少し不安に思ったが、すぐ直るだろうと思いきんだ。

「くっ……はあ、はあ……」

おかしい……明らかにおかしい……

今俺はおじさんの城の近くまで来ている。

少し前はわずかな不快感しかなかった……しかし、今は明らかにおかしかった。

動悸がするし、呼吸も荒い。冷や汗も掻いていた。

『イツセー？どうしたの？さっきからおかしいわよ？』

ドライグが心配そうに言う。

「だ、だい……じょうぶ、だ。」

俺は途切れ途切れにいった。

「大丈夫なものか。明らかに異常をきたしているぞ。イツセー、どこがおかしいのだろう？正直に言え。」

「そ、それは……」

もう隠しきれないところまで来ていた。

自分でもわからない……俺は一体……どうしたというのだ……？

俺はそう思いながら、城の中に入っていった。

「おおー！イツセー殿！待っていましたぞって、イツセー殿、顔色が悪いんですぞ？具合が悪いのですか？」

王宮に入り、おじさんの側近の騎士に出会う。

「ああ、だ、大丈夫だ。とにかく、おじさんたちは？」

「いや、明らかに大丈夫ではないですぞ……王ならば、いつもの場所いらつしやいますが……」

「そうか、すまない。ありがとう。」

「ちよ、イツセー殿！休んだ方が！」

「ああ、でもまずはおじさんに会っておきたいんだ……」

俺はその忠告を聞かずにその場所へ行った。

「あっ!! イッセー!!」

途中でアルトリアが見えた。キラキラと輝くような笑顔でこちらに手を振っている。

「おお、アルトリア、久しぶり……」

アルトリアのもとへ行こうとしたら、視界がぐらツと歪む。

そして俺は床にドサツと倒れる。

「え、イッセー、イッセー!!」

アルトリアは急いで俺の方へ走ってくる。

『イッセー!! どうしたの!! しっかりして!!』

「おい! イッセー!! どうしたというのだ!! 意識をしっかりと保て!!」
ドライグとニトラも俺に声を掛ける。

しかし、その声がどんどん遠のいていった。

「イッセー、いっ——」

そして、俺は意識を失ったのだ——

—イッセーSIDE OUT—

to be continued

第参章 イツセーと聖書神話の三大勢力
No, XV く日の本の魔法使いく

『王よ!!!』

『我が主!!』

『アーサー様!!』

『お父様!!』

『つく!!アーサー兄さん!!』

『イツセー……イツセー……は……何処に……いる……?』

『ここに!!俺はここにいるぞ!!』

『イツセー……お……まえに……頼みが……ある……』

『なんだ!なんでも言ってくれ!!アーサー兄さん!!』

『お……まえを……一人……残して……しまうことに……なってしまった……すま……ない……』

『何で兄さんが謝るんだよ!!兄さんは悪くない!!勝手にこんな体になつた俺が悪いんだ!!』

『それで……だ……私の……我が……一族をどうか……見守つては……くれまいか……?』

『ああ!!それくらいお安い御用だよ!!兄さんがこうして頼まなくなつて、するさ!!』

『そ……うか……すまない……礼を……言う……』

『何言つてんだよ、今更。俺と兄さんの仲だろ……』

『ああ……そうだったな……それとだ……』

『なんだ?兄さん?』

『イツセー……お前に……あの剣を……託したい……』

『あの剣を……?いいのか?兄さん。あの剣は……ペンドラゴン家の家宝じゃないか……』

『いいんだ……むしろ、お前に使って……ほしいのだ……』
『だが、あれほどの剣を俺が扱えるのだろうか……宝の持ち腐れになるのでは……』

『心配……ない……イツセーは、私や、アルトリアと剣戟を……
幾度となくかわしてきた……私やアルトリアの指南を受けて
きた……イツセーが扱えないことは……ないはずだ……』
『し、しかし……』

『それにだ……あの剣を……愛剣とし……戦ってきた……
今は亡き、アルトリアの魂が……籠っている……気がするのだ……
アルトリアの意思を継ぐのは……イツセーしかない……』

『アルトリアの……』
『見て……みる……剣がお前を……呼んでいる……お前に……
呼応している……』

『っ!!』

『さあ……剣をとれ……イツセー……』

『……』

チャキン——

パアアアアアアア——

『なっ!!これは!!』

『ふふ……だろう? 剣は、お前を、選んだのだ……剣を……
手にした時の……その……輝きが……紛れもない……証拠
だ……』

『アルトリア……』

『こ……れで……私は……心置きなく……向こうへ……
いけるな……』

『兄さん!!!ア—サー兄さん!!』

—イツセーSIDE—

プ———!

ガヤガヤ

「ねえねえ、今日どこ行く?」

「ん〜どこにしようかな?」

「ないなら私、貴方を連れていきたいおすすめのあるんだけど。」

「ホント!?じゃあそこにいこうか。」

「うん!!そうしょ!!」

よう、俺イツセーだ。久しぶりだな。

俺は今、とあるところの広い通りを歩いている。

実は、ここは俺が生まれたブリテン、今はユナイテッドキングダムだったな。その地から遠く離れた極東と呼ばれる島国、日本にいる。

外をこうして歩いていけば、多くの人が行きかい、自動車と呼ばれる機械が道を走っている。

最初にそれを見たときは驚いたものだ。

それまで、俺は魔法のこと以外は全く知らないも同然だった。俗世にとらわれず、自分の家に引きこもっていたからな。

あれからもう何年たっただろうか……

「ふふ、イツセーよ。あれからもう300年は経っているのではないか?」

そんな回想に浸っていると、俺に声がかかる。

「そっか……もうそんなに経つのか……俺も大概人間半分やめてんだもんな〜〜〜」

俺が軽い気持ちでそういう。

「まあ、イツセーがそんなに長い時代生きているきつかけはそれで

はないがな。」

「まあな……」

そう。俺は今言った通り、明らかに人間の寿命を超え、今もなお、こうして生きて地を踏みしめている。

「外見は全く変わっていないがな」

「そうであってよかったと思うよ。」

ニトラからそう言われる。

あの時

『エンCHANT・スベル太古の魔法、ジャック審判魔法!!!』

『『『『うわあああああああああ——』』』』』

『ふう……さて……いくか……』

!!!!!!

300年前、俺は父さんと母さんの命日の前日、悪魔たちの襲撃にあった。俺は当時、未完成だったとある魔法を用いて撃退し、ユーサーおじさんの城へ向かったのだ。しかしだ……

『うう……ぐあ……』

バタツ!

俺は、城に着いたはいいものの、アルトリアの前で気絶してしまっただけ。当時の城の内部は騒然としたとか。

俺は10日間眠っていた。起きたときは魔法を放った後の不快な症状はなく、いたって気分爽快だった。まあ、俺が起きたときにはアルトリア、アーサー兄さん、ユーサーおじさん、イグレインおばさんはもちろん、騎士のみんなや宮廷魔術師たち、宮殿の召使いの人たちに迷惑と心配をかけてしまったが。

とにかく、何の問題もないと思って、安心してた。

しかし、年を追うごとに異変が顕著になって顕れた。

俺は、全く外見が変わらず、肉体の衰えもなかったのだ。

周りの人はどんどん年を取っていった。そして、俺だけが生き残り続けた

結局、そのまま俺はこの現代まで生きてる。

見た目は俺がああ魔法を放った歳、17歳から変わっていない。歳をとっていないのだ。

今年で300回目の17歳というわけだ。

普通に考えれば、人間が歳をとらずにこんな長い時間生きるわけがない。1万年という長い時を生きる悪魔や吸血鬼、神より生まれし天使ならともかくだ。

俺は人間ではないのかもしれないと当時思った。しかし、自分で調べてみても人間をやめた形跡はない。寿命という概念がきれいさっぱり消えただけで後は変わりはないかったのだ。

そのおかげで大切な人を失いはした。しかし、いつまでも悲しんではいられず、アルトリア、アーサー兄さん、ユースーおじさん、イグレインおばさん、みんなの思いを胸にこうして生きている。

「しかし、まあこんなに世の中が変わっているとは思わなかったな。」

俺は周りを見回しながらそう呟いた。

「本当だな。イツセーが魔法を研究していた時代とはガラリと変わったな。」

ニトラも俺の言葉に同調する。

俺は今から大体140年前あたりに両親からの形見である2つの魔法書の研究・解析がほとんど終了した。その時に一度外に出る事にしたのだ。とある目的もあったのだが。

外に出てみたら、俺が今まで見た光景とはがらりと変わっていた。俺の家は緑豊かな田舎に佇んでいるのだが、街に出てみれば今まで無かったデカイ建物がたちならび、その建物にある煙突から煙がモクモクと出て、鉄の棒の上を走る乗り物、今で言う鉄道が走るようになっていたり、あまりの様変わりに目を丸くした。それと同時に興味を持った。

今まで興味のきの文字もなかった歴史を学んでみた。魔法の研究が終わったころにはもうとっくに俺の故郷では産業革命があったらしい。そんな産業革命を機に、どんどん発展し、今ではこれだ。魔法使いもこの時代に沢山いるが、この人類の科学の発展に影響を少なからず受けているっぽいな。

「日本か・・・毎回思うが、中々にいいところだ。別荘を持っておい

て正解だな。」

そう、俺は今、日本にも住んでいる。

実は今から50年くらい前の話だ。一度、日本に来ていた。とある者と会うために。もちろん一般人ではない。裏の者たちだ。そうして俺は日本に足を踏み入れた。なんでも、基本はぶらついているやつで、たまに京都にいと聞いた。京には日本の妖怪たちが裏の京に住んでいて、そのような奴らとも出会った。九尾の狐は中々に強かったな。

そんな中、俺はお目当ての人物と遭遇。戦いを挑んだ。ギャラリ―も多数いた戦いだった。結果だけ言うならば、俺は勝てなかったが。それが終わり、俺はその京に少しばかり滞在した。そのあと色々な出来事が起き、なんやかんやあって、この地に別荘を持つことになった。

京都に別荘を持つと京都に行く価値がなくなってしまうので、今の経済大国、日本の首都に近い近郊の都市に構えることになった。

この地に住むからには、と言うよりは、今の時代は色々と手続きという行為が必要だった。住民票、戸籍、税金などだ。そんな手続きを役所ですまし、表向きは一般人という形で落ち着いた。

こうして俺はこの地で一在日外国人として別荘生活を送っている。まあ、向こうに帰るときも多々ある。なんせ、向こうでやることもあるからな。

「ふ、戦いもたくさんあったな。」

「そうだな〜」

裏の住人、魔法使いと言うこともあり、戦うことも挑むこともあった。まあ、そのことはまたの機会に。

まあ、あれからの出来事は大まかにこんなところだな。

「あ、あの〜ちよつといいですか？」

そんなことを回想しながら、この街を買い物がてら散歩していると、後ろから声が書けられる。

「Me?」

振り返ると、とても可愛らしい格好をした3人組の女の子たちだっ

た。

俺もこの都市の準住人として笑顔で答えた。少し意地悪をして英語で。

「うえっ！外国人だった・・・」

「う、うそ・・・私ネイティブとなんてしゃべれない・・・ユウキあんたしやべれる？」

「ちよっ・・・無茶謂わないでよりリカ・・・ボクには無理だよ・・・」俺が英語で返すと、3人ともあたふたと戸惑っている。腰まで伸びた栗色の髪の子と茶髪のショートヘアの子と紫がかつた紺色の長い髪の子だ。

もう少し意地悪してみようと、俺は頭に？が浮かんでいるような表情をしながら3人の返答を待つ。

「ちよっと、超イケメン外人さん待ってるよ。ここはアスカ言つてよ。」

「ええー！」

「あんたが声かけようって言いだしたんじゃん。」

「うう・・・だつて日本人だと思つたもん・・・」

「ふふふ、またこうなつたな、イツセー。」

美少女たちがわちやわちやしているのとニトラがそう言う。

「(ああ・・・そうだな・・・全くなんでこんなに多いのか・・・)」

俺が心の中で愚痴を溢す。

「私から見てもイツセーはかつこいい。いや、かつこよすぎるからだ。しかもどこことなくこの国の人間の容姿に似てないこともないからな。目や髪は違うが。」

「(そ、そうなのか・・・)」

「アスカ！フアイト！」

「うん・・・頑張ってみる・・・」

決心がついたのか、栗色の髪の子が返答をするようだ。

「え、えーと、どういえばいいんだろ・・・う、ウツyou like
e.....」

彼女は片言の英語で必死に話し出した。しかし、思い通りに言えないのか、だんだん涙目になってきた。

流石にかわいそうなので、助け船を出す。

「ごめんな。ちよつとからかってしまつて。ホントはこの通り、しやべれるんだ。」

俺はこの地に着て30分で覚えた日本語で話した。

「えー！日本語!」

「ホントだ!」

案の定、3人とも驚いている。

「外国人ではあるよ。でも、ここに住んでるんだ。」

「そうなんですか。」

「おにーさん、日本語とつても上手いね!!日本人みたい。」

俺が日本語を普通に話すと、紫がかった紺色の髪の子がほめてくれた。た。

「ああ、ありがとう。日本人にそう言ってもらえるのなら、うれしいよ。覚えた甲斐があつたもんだ。」

俺はその誉めてくれた子に、にこやかにお礼を言う。

「う、うん……」

その子はなぜか顔を赤くしながらうつむいてしまった……なぜだろう……?熱でもあるのか……?

「はあ……これだからイツセーは……」

ニトラは呆れたように言った。

「(ニトラ、これだからつてどういうことだよ?)」

俺はニトラに訊いた。

「いや、なんでもない。」

「そ、それで何か用かな?」

俺は美少女たちに訊いた。

「い、いえ。あまりにカッコよかつたから……」

「すこし……」

「お話したいなあ……と。」

すると三人は途切れ途切れに言った。

「そ、そうなんだ。」

俺は何てことない返事を返す。

「そ、それでどうですか……?」

俺に声を最初に掛けた栗色の髪の子は上目づかいで訊いてきた。

こ……断りにくい……

「え、えつと……ここで少し立ち話ならいいぞ。」

俺はホントはすこし急いでいたが、この子たちのあまりの必死さに押された。

「いいんですか!?!」

その子は俺の肩をつかみながら訊き返した。

「う、うん。」

「やった!!」

「よし!!」

「グツジョブ、アスカ!!」

俺の返答を聞くと、三人は三者三様に喜んだ。

「それで、何を話そうか。」

俺が会話を始めた。

「じゃあ、まず自己紹介しようよ!!」

紺色の髪の子が言う。そうだな。まずはそうするか。

「じゃあ、ボクからね!ボクは黒野ユウキ!よろしく!おにーさん
!」

「私は悠木アスカです。」

「私は霧崎リリカよ。」

「俺はイツセー。イツセー・ヴァーミリオン。」

アンブロシウスが抜けているが、まあいいだろう。

「イツセー……」

「ヴァーミリオン……」

三人とも俺の名前を珍しそうに唱えた。

「変だろ?」

俺は三人に言った。

「い、いえ!」

「イツセーって日本ぽいなくと。」

「うんうん！ヴァーミリオンって性も珍しいね。」

「まあ、母国じゃこんな名は見ないからね。でも、俺は気に入ってる。父さんと母さんが名付けてくれたから。」

「私はすてきだと思います。」

「うんうん！ボクもそう思う！」

「じっくり来ている気がするわ。」

三人ともそう言ってくれた。

「ありがとう、みんな。それでみんなは高校生か？」

「はい、そうです。私たちこの近くの駒王学園っていう私立に通ってます。」

俺の質問にアスカと言ったか。その子が答える。

「駒王学園・・・ああ、あのやたらとデカいところか。しかも小中高大とエスカレーター式の。」

「はい、それです。」

「とつてもいいところですよ〜」

「そうなのか。」

俺は学校というものには行ったことがないからな。少し羨ましく思う。

「俺と同じ年つてところなのか。」

「えー！じゃあ、留学ってことですか？」

俺が歳の話をするると、3人は驚いて訊いてきた。

「いや違うんだ。もう社会人だ。」

俺は首を横に振って答える。

「え、じゃあ・・・」

「実は飛び級でな。もう大学は出ているんだ。」

俺が今言ったのは一応一般人としてのこの都市の役所に提出してあるプロフィールだ。

「えー！私たちと同じ年で大学卒業!？」

「え、エリートだ・・・」

「そのうえ日本語ペラペラでイケメン・・・うちの学園の王子様と

は比べ物にならないじゃない……」

3人とも、俺の返答に驚く。なぜ王子様とやらを引き合いに出したのかは知らんが。

「じゃあ、そろそろ行くよ。」

「あ、はい!!」

「ありがと!! イッセー!!」

「また。」

あのあと数十分会話して、俺は帰路についた。

「全く。イッセーはどれだけモテるといふのだ。しかもその声を掛けられるたびに応じおって……このたらしが……」

ニトラは妙に恨めしそうに言った。

「いや……たらしって……俺はただ普通の会話をしているだけじゃないか……」

「いやいや、イッセーに声かける女どもはどう考えても「どうお近づきになろうとか」、「もつと仲良くなりたいたい」とかそんなことを内心思っつてちかづいてきてるに決まってる。」

「俺が住むこの都市の住人だから、会話くらいしていいだろう? それにニトラとは長く濃い絶対に切れない関係じゃないか。今更ガキになびきはしない。」

俺はニトラに本心と言う。

「確かにイッセーとは密接な関係だがな……それとこれとは別だ。今日、精神世界こっに来てもらうからな!」

おやおや、ニトラさんはどうやら納得がいかないのか。

「わかったよ。言われなくてもそうするさ。」

「ふふ、そうかそうか。」

俺がそう約束すると、ニトラはすぐに不機嫌な状態から上機嫌になった。

「それにしても、駒王学園、か……」

俺は先ほどの三人との会話で気になった単語を口に出す。

「ん? どうしたのだ? イッセー。」

ニトラは俺に尋ねてくる。

「ああ、さつき話していた少女たちの通っているあのバカみたいにデカイ学園のことだ。ここ数年、妙な気配を感じないか？」

「ああ、そのことか。」

ニトラは俺の言わんとしていることが分かったようだ。

「この気配。十中八九悪魔に違いない。その気配が、あの学園の辺りからする。」

「イツセーをまた狙いに来た、と言うわけではなさそうだな。今のところエンカウントはないからな。それに数も多いわけではない。実力も相当低いようだしな。」

ニトラは淡々と言う。

「あれで狙いに来たなんてのはがっかりするがな。まあ、あの程度では正直戦う気にならないが。もしかして、あの学園に通っているのか……?」

「それが一番ありそうだな。なぜわざわざ人間界の学校に通うのか理解できないが。」

ニトラはその悪魔たちが鬱陶しそうに言う。

「ホントだな。」

俺も同意する。

「どうするのだ?イツセー。奴らを排除するのか?」

ニトラはその悪魔たちの扱いをどうするか聞いてくる。

「……2, 3年様子を伺ってきたが、人間に危害を加えるわけもなく、俺のように一般人に溶け込んで生活をしている。かといって、ただ学園生活を送っているわけでもなさそうだ。」

「それはあの原型をとどめていないような醜悪な姿の悪魔たちと関係ありそうだな。」

「そうだな。」

ニトラが言ったのは、この辺りをうろちよろしている悪魔のことだ。大半がトチ狂ったりしていてもはや会話すら成り立たない奴もいた。俺も時たま出会う。そのたびに葬っているが。

「どうやらそいつらをあの学園の悪魔どもが刈っているらしい。」

「ほう、一応それらしいことはやっているのだな。形上、この地域を守っている、そう取れなくもないな。」

「ああ。まあ、それを鑑みれば放っておいていいだろう。そいつらごときに無駄な労力をかける必要もない。」

俺はその選択を選ぶ。何もなければ、な。

「だが、向こうが向かってきたら、もちろん？」

ニトラはワクワクしながら訊いてきた。

「それ相応の対処はするさ。売られた喧嘩は買うのが主義だ。勿論武力でな。」

「ははは、それでこそイツセーだ。まあ、余程の愚か者ではない限り、歯向かつてはこないだろうな。」

ニトラは笑いながら言う。

「だが、なぜだろうか。これから何かが起こりそうな気がしてならない。あの悪魔どもがこの地にいるとな。」

根拠はないが直感で感じたことを言う。

「まあ、イツセーがいる時点で察しはつくが。」

ニトラはそう返す。

力は力を呼ぶ。

古から常に言われ続けてきた言葉だ。

「しかも、ここにはあいつら悪魔にとって敵である天使・教会勢力までいると来た。」

「何？ そうなのか？」

ニトラは少し興味を沸かせたようだ。

「過去にはなるがな。この街には教会があつたんだよ。廃墟だがな。しかも、その教会に最近出入りする奴がいるようだな。」

「ほう、それはまた。面白いことが起きそうだ。」

「一般人は巻き込まんで欲しいが。」

俺は別にいいがな。むしろ戦いはバッチ来いだ。しかし、ここに住む以上、そんなことばかりは言えない。何も知らない表の住人は表だけにいるべきだ。こちらの世界は、表の世界よりもはるかに理不尽だからな。

俺は自身の経験からそう思う。

「イツセーは昔からそうだったな。だから、今はここまで強くなった。私は嬉しいぞ♪こんなに強く成長したイツセーを見ることが出来て。大好きなイツセーが成長していく姿を見ることが出来て。」
そんなことを思っていると、ニトラは急にこんなことを言い出した。

「な、なんだよニトラ。急に。」

俺は少し顔を赤くする。

「うふふ。なんでもなく〜い。気にしないで。」

「そ、そうかよ・・・。」

ニトラはたまにこういう恥ずかしいことを平気で言ってくる。

全く、心臓が五月蠅い。

先ほどの三人から分かれて歩き続けて数十分後、自分の別荘に到着する。

俺の別荘はこの都市のはずれにある。

この家は二代目。50年前のものだったから、最近魔法でちよちよいと改装をして最近の新築どうぜんにした。周辺にある民家と何ら変わらない普通の一軒家。

4階建てだけど。

門を開け、玄関へ向かう。

「ただいま〜」

ドアを開け、いっどおりの挨拶を忘れずする。

「「「おかえり〜〜〜」」」

俺がただいまというと、家の中から俺におかえりと返す声が聞こえるのだった。

—イツセーSIDE OUT—

——to be continued

No, XVI く仲間、そして駒王学園く

イツセーが外出しているころ、イツセーの別荘では女性が一人と無邪気にじゃれ合っている小さな子供たちがリビングにいた。

その家のリビングはこの現代の日本の一般家庭のインテリアだ。しかし、所々に一般の人間から見ればそれはそれは摩訶不思議なオブジェだったり、あり得ない現象がみられる。どれも現代の物理法則では説明できない代物だ。土台に支えられていない完全に空中に浮いている得体のしれない模様が描かれた魔法道具。壁にかかっている杖らしきもの。誰もいないはずキッチンで独りでに食器が洗われている。インテリアは現代のものだが、一般人が見れば驚くものばかりだ。一部だけを見れば、魔法使いの家であろう。

そんな普通でありながら普通ではない部屋で遊んでいる子供たちは見たところ、小学生の低学年と言ったところだろうか。人数は4人。全員可憐な女の子だ。「わー!」「きゃー!」と大きな声を上げながらじゃれ合っていた。それに対してソファーに座りながら目の前で遊んでいる少女たちを見守るように優雅にティーカップを手に持ち、紅茶を味わっている女性は若い女性。大人びており、漂わす雰囲気は普通ではない。傍から見てもスタイルは抜群で美しさと可愛さを持つている。100人に「美人か?」と尋ねれば全員が肯定するだろう。

「ねえーねえー、???ねえ。」

そんな中、先ほどまでじゃれ合っていた可憐な4人の少女のうち、1人の少女が女性に近づいて名を呼ぶ。

「ん?どうしたんだ、ルル?」

名を呼ばれた女性はルルと言う少女にそう訊き返した。

「にいたん、いつ帰ってくるのー?」

ルルは可愛らしく首をかしげながらその女性に訊いた。

「イツセーのことか?すぐに帰ってくる。」

その女性は首をかしげる小さな少女が愛らしかったのか、ほほえ

み、ルルの頭をなでながら言った。

「んー？すぐっていつー？」

ルルは待ちきれないのか、更に詳しく訊いてくる。

「心配するな。もう少しで帰って来る。だからいい子で待ってるんだ。」

その女性は今度は少女の柔らかかそうな頬つぺたをムニムニとしながら答えた。

「んんん〜ホント〜？」

「ああ、本当だ。」

その女性と少女は仲睦まじくスキンシップを取り合う。美女と美少女（美幼女）がこのようなスキンシップを取り合っている様子は傍から見ていてとても微笑ましい。

「ただいま〜」

そんな中、玄関の方から声が聞こえた。

「あーにいたんの声だ!!」

その声にすぐに反応するルル。とても嬉しそうな表情をしている。

「どうやら帰ってきたようだな。ほら、ルル。愛しのおにいさんを迎えてあげなさい。」

「うん!!!」

ルルは元気に返事を女性に返し、女性のもとを離れる。

「みんなあー!!いっしょにいたんのところへ行こー!!」

ルルは遊んでいた3人のもとへ行き、一緒に迎えに行こう、と誘う。

「おにいちゃん!!」

「うん!行く行くー!!」

「おにいさま・・・今行きますよ。」

遊んでいた3人の少女たちはルル呼びかけに答えて遊びをやめて立ち上がり、4人一緒に玄関の方へとととと早歩きで向かった。

そんな姿をソファーに座っている女性は微笑みながら見守っていた。

「ふふふ♪本当に可愛らしい♡本当にいい子たちだ♪こんな生活ができるのも、可愛い妹分とスキンシップを取ることができるのもイッ

セーのおかげだな。」

その女性はティーカップを持ちながら言い、紅茶を嗜む。

「ふふふ、さて、私も行くとするか。愛する我が弟のもとへ――

」
女性はカップをテーブルに置き、先ほどの少女たちの後を追って玄関に向かった。

イツセーSIDE

先ほどの子たちと別れ、自分の別荘に向かう。

それから歩き続け、この都市のはずれにある自分の家に続いている道に入る。

そして、この道に張ってある結界をくぐり抜ける。この結界は他者を近寄らせない、侵入させないようにするために張った俺特性の超特殊結界だ。過去幾度となく異形の奴らと戦い、それらの経験を生かして作った。ここにまた悪魔や堕天使が襲撃してこないとも限らない。だから久しぶり真剣になった。

この結界はそこら辺にいるような三下どもには絶対に突破されない。結界があることすら気づかないだろう。もし、こいつを突破できる奴を挙げるとすれば、各神話の主神クラスでも上位の実力を持ったヤツラだけであろう。

そんな結界を後にして、門をあけ、庭を通って玄関にたどり着く。扉を開けていつものあいさつを言う。

「ただいま〜〜〜」

「「おかえり〜〜〜!!!」」

俺がいつものあいさつをすると、奥の方からおかえり、と返してくれる。

すると、奥からとてとてと4人の少女たちが出迎えてくれた。

「にいたん!!おかえり!!」

「おにーさん、待ってたよ!!」

「おにいちゃん、私たち、ちゃんといい子で待ってたよ。褒めて?」
「おにいさま……遅いです……」

4人の美少女たちは笑顔で出迎えてくれたり、頬を緩ませていたり、ほんのちよつと不機嫌だったりしている。しかし、みんな違ってみんな可愛い……

4人の可愛さに心を討たれ続けるわけにもいかず、俺は少女たちに言った。

「ユキ、ルル、イズナ、アウローラ。ただいま。ごめんな?少し散歩していたら遅くなっちゃったんだ。みんなあとで一緒に遊んであげるから、おにいちゃんのこと許してくれないか?」

俺は少し困った顔をしながら4人にそう言った。

「うん!約束だからね!!」

「おにーさん、私は許すも何もおこつていないよ。」

「おにいさま……かっこいいです……」

「おにいちゃん大好き!!」

よかった。4人ともそう言ってくれて。本当にかわいくていい子たちだ……。俺、この子たちに嫌われたらちよつと立ち直れないからな。

この子たち、今は俺の妹、みたいな位置づけだ。勿論、実妹ではない。ましてや、人間でもない。ドラゴンだ。

俺のことをにいたん、と呼ぶこの子の名前はルル。上級種のドラゴン、フレイム・ドラゴン 朱炎龍の幼体だ。赤いさらさらとした髪をもつ元気な子だ。

次に俺のことをおにーさん、と呼ぶ他の3人よりも少しだけ大人びている子の名はユキ。同じく上級種のドラゴン、ブリザード・ドラゴン 氷雪龍の幼体。白い綺麗な髪を持つ大人しい子。

次に俺のことをおにいちゃん、と呼ぶこの子の名はイズナ。この子も同じく上級種のドラゴン、スプライト・ドラゴン 蒼雷龍の幼体。青色の髪を持つお兄ちゃん子。

最後に俺のことをおにいさま、とまるで中世のお嬢様のように呼ぶこの子の名はアウローラ。この子はとても珍しいといわれていて、個体数が他の上級種のドラゴンと比べて圧倒的に少ないといわれている。

る種、虹スベクター・ドラゴン 龍の幼体。虹と言う言葉通り、七色のとてもきれいなグラデーシヨンの髪を持つ礼儀正しい子。

出会った当初、大体2，3年前だがみんな幼い龍の姿だった。しかし、この子たちを教育していくと、人間の姿を取れるようになった。最初は時間制限があったものの、今ではその制限はない。

この子たちの親ももちろんいて、その親全員にこのことは話してある。この子たちを預かっている、という言い方もできる。この子たちを育ててほしい、と言われたときは驚きはした。それはそうだろう。ドラゴンの子供を育てるなんて、魔術師でも滅多にない経験だ。しかし、俺は嬉しかった。俺はこの子たちに愛情持って接した。

「ふむ。愛情持って接するのは良いことだが、少し度が過ぎないか？」すると、ニトラが俺にそう言う。

「そうか？俺はそうは思わない。むしろもつと必要だと思うが。」俺はニトラに反論する。

「しかしな・・・この子たち、どう見てもブラコンだろう・・・」

「いいじゃないか。俺はこの子たちに好かれているんだ。それで十分だ。」

「はあ・・・イツセーもシスコンだったか・・・」

ニトラは少し呆れ気味に言った。

失礼な・・・大体、兄としてこんな可愛い子たちに好かれたら誰でもシスコンになるだろう。抱き着いて来るこの子たちを突き放すことが出来ようか？いや、絶対にできない。

「うへへくくおにいちゃん・・・」

「ううん♪にいたんくくく」

「あつ・・・おにいさま・・・気持ちいいです・・・」

「おにーさん・・・もつとしてえ・・・」

妹たちが呆けた幸せそうな顔をしている。

俺はどうかやら無意識のうちにこの子たちを抱きしめ、頭をなでていたようだ。

だが、この子たちが嬉しそうにしているから続けよう。

「おお、イツセー帰ったか。それにしても相変わらず、妹たちのこと

が好きだな。」

俺が玄関で妹たちとスキンシップを取っていると、奥から一人の女性が近づいてきた。

「ああ、ただいま、ティア。と言っても、ティアもこの子たちは好きだろ?」

俺は4人の妹たちの頭を撫でながらティアに訊き返した。

「ああ。この子たちは可愛すぎる。」

と、俺が訊いたことに肯定したこの女性はティア。もちろんティアもドラゴンだ。しかも、ティアはただのドラゴンじゃない。伝説に名を遺す、龍王、天魔の業龍カオス・カルマ・ドラゴンティアマツト。腰まで伸びた綺麗な青い髪をもち、誰もがうらやむスタイル抜群のプロポーシオンを持つ。

「ありがとな。この子たちの子守りをしてもらって。」

「いや、気にするな。私としてもこの子たちを見守るのは楽しいし、退屈しない。」

「そうか。あとの4人は修行か?」

俺はティアにもう4人の妹たちについて聞いた。

実はいうと、俺の妹たちは4人ではなく、8人だ。しかし、今は家にはいなさそうだ。

「ああ。4人とも張り切っていたぞ。イツセーに褒めてもらいたいだろう。」

「ははは、嬉しいな。妹たちが強くなるのを見るのも。ジルニトラもこんな感じだったのだろうな。」

俺はジルニトラの気持ちがかかった気がした。いぎ、こちらが見守る側に立つと、違う感じ方もするのだろうな。

「そうだな。ジルニトラはイツセーをもう数百年一緒にいるのだから。ま、とにかく大丈夫だろう。今修行をしている4人には、もう一人、頼れるお姉さんがついてるから。」

「違ういな。」

俺とティアはそう笑いあった。

「さて、取りあえずリビングに行くか。さつきからずっと玄関にいるからな。」

「そうだな。ルル、ユキ、イズナ、アウローラ、行くよ。」

「はい♪」

「うん！」

「分かりました。」

俺が妹たちに呼びかけると、みんな快く返事をしてくれた。

そしてみんなとととと歩き始め、リビングに入った。

そして妹たちは遊び始めた。

そんな姿を見て、俺はまた自然と頬を緩ませる。

そして、窓の外を見上げながら俺はある人に呼びかけた。

—— かあさん、とうさん、アーサー兄さん、アルトリア、見て

いるかい？俺の大切な仲間が、一緒にいてくれる仲間が、こんなにも

増えたよ。——

良かったわね、イツセー

イツセー、その幸せを、ぜってー離すなよ？

俺を見守ってくれている父さん、母さん、アーサー兄さん、アルト

リアがそう言ってくれたような気がした——

イツセーSIDE OUT

?????
SIDE

チリリリリリリ

朝日が窓に差し込む。

目覚ましの音で俺は眠りから目を覚ます。

「ううん……」

カチツ

俺は睡魔に負け、目覚まし時計のアラームを止めて二度寝をする。

「誠……朝よ……起きなさい……い！」

下から母さんの声が聞こえる。

いつまでたっても起きない俺を起こしてくれる。

俺は朝が得意な方ではないからいつもこんな感じなのだ。

「ん……今行く……」

俺はやるせない返事をしてベッドから身を起こす。

「さあ〜と。今日も張り切っていきますか。」

時計を見てみると、もう7時をとつくに超えている。まあ学園には十分間に合うな。

俺は支度をして朝食を食べ、家を出る。

「行ってきま〜す。」

「気を付けてね〜」

俺の名前は布藤 誠一。両親、同級生は俺のことをそのまま誠一と呼ぶ。

青春を謳歌している高校二年生だ！

通っている学校はこの都市に住む人なら知っているであろう駒王学園だ。あそこは他のがっこよりも偏差値も高く、小中高大とエスカレーター式の学校の上、就職、進学実績も素晴らしいとか。

だが!!勘違いしないでらおう。俺はその為だけにここに入學したんじゃない!この駒王学園は女子が多いのだ!実はこの学園、ほんの数年前までは女子高だったんだ。それが男女共学となり、男子も一昨年から入れるようになったんだ!

俺は運がいい。とてもな。当時中学生だった俺は駒王学園が男女共学になったと聞いたときは嬉しさのあまり発狂したレベルだ。

俺が通っていた中学からも毎年のように頭のいい女子たちや、美人な子たちが駒王に進学していた。そんな学校に行けるなんて夢のようだった。

だから俺は友人2人と一緒にガチ勉強を中学二年の夏から始めた。そのかいあつてか、今こうして念願の学園生活を送っている。

俺はこの学園でハーレムを創る!!いつか絶対に実現させると夢見て今日も張り切っていくぜ!!

いつもの通学路を歩いていると、立派な校門が現れる。

「あつ!おはよー!リリカ」

「あ、おはー、ユウキ。まったたく、あんたは朝から元気ねー」

「元気なのは良いことじゃん。」

「ま、そうだけどや。」

この時間帯は一番登校してくる人数が多い。みんなあいさつを交

わし合っている。

くうー！ー！俺も朝「おはよう」、と挨拶してくれる女の子が欲しいぜ！！

そんなことを思いながら俺は校門を通って、校舎へ向かう。

ドゴツ

「ボヘエツ」

向かっている途中、俺は急に後ろから背中を叩かれる。

「よう！！誠一。相変わらず一人だな！！」

俺を鞆で攻撃するやいなや、俺にそう言ってくる奴とその連れ。

「んだよ松田かよ。」

「んだよとはなんだ。一人寂しく女っ気一つないお前にからんでやってんだよ！」

「それを言うならお前もだろ、松田。おまえこの学園に入学した時、彼女の1人や2人、余裕とかほざいといていまだゼロじゃねえか。」

「グハツ！！」

俺の返しに松田はダメージを受ける。今ダメージを負ったこいつは松田。頭を丸刈りにした野郎だ。

「誠一、それは触れてはならんぞ。」

5のダメージを負った松田のフォローをしたこいつは元浜。キザっぽくカッコつけていて眼鏡を掛けている。こいつらとは中学からの友人だ。ともにこの駒王学園でのハーレムを夢見てきた同士でもある。

「元浜、おめえも彼女出来ねえようだな。」

俺は元浜にもそう言った。

「ふ、愚問だな。彼女が出来たら、今ここでお前たちとつるんでいるわけなからう。」

元浜は眼鏡をクイツと上げながら言う。カッコつけていても言うてることが残念だが。

「とにかく行くこうぜ。HRもうすぐだからよ。」

「そうだな。」

俺らはいつもと変わらぬ会話をしながら自分の教室へと向かった。

昼休み。俺はいつものメンバーで机くつつけて昼食を食べていた。

「お、元浜、誠一、見ろよ！窓の外。」

松田が唐突に窓に張り付きながらそう言った。

「ん？何だよ松田？おつ、リアス先輩と朱乃先輩に小猫ちゃんじゃないか。」

「マジかよ!!」

俺ら二人も窓に張り付く。と言うか、クラスのほとんどの奴らが外にいる先輩たちを見ていた。

「かあ〜くやつぱリアス先輩はいいよなあ〜」

松田は先輩を絶賛する。

「確かにな。この学園はマジでレベルたけえ。」

「同感だな。さらには俺たちのクラスの片瀬や村山、そして俺らの学年ならぶつちぎりで人気のあるユウキちゃんやリリカちゃんやアスカちゃんもいる。ホントこのクラスでよかつたわ。」

元浜は涙を流しながら熱く語る。こいつは学年のお姉さまより同級生のほうを推しているらしい。

「しかし、その人たちはよく告られていたりするが誰かと付き合い合ったという話は全聞かんが。」

松田は疑問を投げかけた。

「あの方たちと付き合える奴なんてそういないだろう。イケメンならともかく。」

「クソツ！イケメンの話はするな。」

イケメンね・・・この学園に王子様とかいうやつがいたな・・・女子の人気を一気にかっさらっていくいけすかねえ奴が。

「ちくしよ〜何故だ？何故こんなにも彼女が出来ないのか・・・」

「はあ・・・言うな。余計悲しくなる。」

俺たちはこの世の理不尽さに落胆する。やつぱイケメンなのか？ そうなのか？

「よし、お前ら、やるぞ。」

唐突に松田が何かを決意する。

「やるって、何をさ?」

「決まってるだろう?いつものあれさ。」

松田が言っているあれ。あれとは覗きである。剣道部の部室には外から更衣室が見えるようになっていいる。俺たちはそこに目をつけてやっている。

「そうだな。いっちゃやるか。」

こうして俺たちはコツコツといつものクエストを実行した。しかし、結局ばれまして叩きのめされました。

「くうくういてえくくあいつら・・・竹刀通り越して木刀持ち出してくるかよ・・・俺じゃなかったら死んでたな・・・」

あのあと叩きのめされた俺は一人静かに校舎を後にしていた。ズキズキと痛むところを摩りながら。

この学園特有の立派な校門を通った時のことだった。

「あ、あのーちよつといいですか?」

これは夢なのだろうか・・・

俺に声をかけてきた子はすんごい美人だった。綺麗な黒髪清楚系の少女だった。

「あ、はい何ででしょうか?」

俺は突然のことに超動揺した。きよどつてしまった。

「わ、私、天野夕麻といいます!あの!わ、私と付き合ってください!!」

え??聞き間違いかな?今この子、俺に告白したのか?

「す、済まない。もう一度言ってくださいか?」

聞き間違いだったら恥ずかしいので俺はもう一度言ってくれるようをお願いした。

「あ、貴方がことが好きです!私と付き合ってください!!」

!!!!!!!

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

聞き間違いじゃないよな!?!この子、付き合ってくれと言ったよな?!
この子の告白を聞いた瞬間、俺の中のテンションが急上昇した。
この俺が・・・この俺が・・・こんな可愛い子に告白されるなん
て!!

やっぱ、天は俺に味方したようだ。

「あ、あの、それで・・・返事は・・・?」

俺が一人で勝手にフィーバーしていたら、この子を放置してしまっ
ていた。いかんいかん!

「も、もちろんOKだよ。俺の名前は布藤誠一。よ、よろしくな、
えつと・・・夕麻ちゃん。」

おれはもちろんOKした。だってそうだろう?童貞で彼女の一つ
も出来なかつた俺がこんな美少女に告白されたんだからよ!!

「あ、はい!よろしくお願いします!!誠一君と呼んでいいですか?」
うおおおおおー!!!名前呼び!!!

「ああ、ぜひそう呼んでよ。」

「はい!!誠一君!!」

夕麻ちゃんは凄い笑顔でほほ笑んだ。め、女神だ・・・女神が
降臨なされた・・・

夕麻ちゃんの笑顔を見てこっちも自然と笑ってしまう。

こんな可愛い子が彼女か・・・こんなうまくいっていいのか・・・
今までなんだったんだ・・・

「あの、メアドと電話番号交換しない?」

来たアアアアアアアアアアアアアアアア!!メアド&電話番号交換イベント!!

「ああ、勿論だ。」

俺は快諾し、メアドと電話番号を交換する。

「ありがと、誠一君。あ、そうだ、今度の日曜日、デートしよう?」

デ、デート・・・デート・・・待ちに待っていましたあああああああ
!!!!

「ああぜひしよう。10時に駅集合でいい?」

「うん!いいよ!」

俺の提案に彼女は笑顔で答えてくれた。ええ子や・・・

「じゃあね、誠一君！また日曜日ね!!」

夕麻ちゃんはそう言って笑顔で手を振りながら俺の帰路とは反対の方向に帰っていった。

うおおおおおおおおー—————|—————|—————|—————|—————|

遂に、遂に、俺にも彼女が出来た!!!!!!

マジでか!!?夢じゃないよな!!!!!!

俺は頬を引っ張ってみる。!!!!!!

「いってえ……」

ちやんと痛みはある。

ということは……現実だああアアアア!!!!!!

今、俺はあいつらを追い越して勝ち組になった!!

「よっしやああああ!!」

俺は嬉しさの余りバカでかい声を上げながら家に帰った。

誠一SDIE OUT

t o b e c o u n t i n e d —————

No, XVII I 　　↓墮天使↓

誠一SIDE

チュンチュンチュン……

朝日が昇り、朝が訪れる。

その朝日がカーテンとカーテンの隙間から部屋に入りこむ。

『セー君、セー君、起きて。朝だよ？……起きないの……？お、おきないんだつたら……いたずら……しちゃうよ……？』

時計の針が7時を指したところでアラームが鳴る。

「……ううくくん……」

目覚ましを止め、俺——布藤誠一は体を起こす。

最近買ってみた女の子が起こしてくれる目覚まし時計だ。今日は幼馴染の声だ。

はあ……俺にも、こんな風に起こしてくれる幼馴染が居たらなあ……

クソツ!!可愛い幼馴染を持つ同じクラスの国分のヤローが羨ましいぜ!!

って、今までの俺だったらそう思っていただろうな。だがしかし、今の俺は違う。今や俺は勝ち組だ。これでようやく彼女持ちとなったのだ。

俺は珍しく上機嫌で学校に行くための身支度をする。

「母さん、おはよう。」

身支度をし終わって、階段を下りていくと、朝食の用意をしていた母さんがいた。

「あら誠一、おはよう。今日は一人で起きれたのね。」

「まあな。そう言えば、父さんは？」

「もうとつくに仕事に言ったわよ。」

「そうなんだ。」

珍しいな。俺がいつも遅くに起きていてもここで新聞とか読んでいるのに。

「誠一、なんかうれしそうね。」

母さんが俺の変わりように気づく。俺そんな分かりやすかったか？

「え、そう?」

「ええ。とつても。何かいいことでもあったの?」

母さんは原因を聞いてくる。

「ん〜まあ嬉しいことはあったよ。」

「そうなの!!良かったわね〜」

母さんは笑顔で喜ぶ。まるで自分のことのように。

「ああ。そうだな。」

俺は冷静に言った。

「ちなみに、どんな嬉しいことがあったの?」

母さんは真相を詳しく聞いてくる。

「ん〜簡単に言えば彼女が出来たよ。」

俺は別に隠す理由もないから正直に言った。

ガッシャン!

キツチンの方から調理器具が床に落ちた音がする。

「.....え?誠一今なんて.....?」

母さんは目を点にしながら訊いてくる。聞こえなかったのか?

「え、だから、彼女が出来たの。」

「ええええええええええ!!!」

母さんは彼女と言う言葉に絶叫した。

「ほ、ホントに?!ホントなの?!」

「ほ、ホントだよ.....」

「だって誠一、いつもエロエロなことばっかしているし.....私、

誠一に彼女なんて一生できないと思ってた。」

「かあさん.....」

母さんが俺に抱いていたことを暴露する。

何気に酷いな.....

「妄想じゃないよね?」

「ホントだよ。はいこれ。」

俺は母さんがいまだ信用してない様子なので、俺は携帯に撮ってあ

る彼女である夕麻ちゃんの写真を見せた。

「うっそ?!?!超かわいい!!」

「だろ?俺の自慢の彼女さ。」

案の定、母さんは驚いている。

「誠一にも春がやってきたのね・・・大切にしなさいよ?」

「ああ、分かってるさ。じゃあ、俺もう行くわ。」

「はくくい、いつてらっしやい。」

そうこうしているうちにもう学校に行く時間になったので俺は急いで残りの朝食を平らげて家を出た。

校門を通り、校舎へ向かう。

いつもの教室に入ると、松田と元浜が既にいた。

「よお、誠一。今日はいつもより早えじゃねえか。」

「ふむ。それにいつになく嬉しそうだな。何かあったのか?誠一よ。」

「ああ、まあな。」

俺は二人の問いにそっけなく答えた。

「ほう、それは興味深そうだ。詳しく聞かせてもらいたい。」

「俺もだ。」

二人は興味津々だ。

「ああ、いいぜ。」

俺はドカツと雑に席に座り、話を始めた。

「それで、なんだ?もしかしていいお宝本か、DVDでも見つけたのか?」

「それともああいう系の店か?」

元浜が予想を言った。

ふっふっふ・・・残念だったな元浜、松田・・・DVDとか、お宝のエロ本とか、そう言う系の店とかそんなチンケな出来事じゃないんだよ・・・

聞いて驚け。

「全然違うな。正解は、俺に彼女が出来たのさ。」

俺は自信満々にカツコつけながらそう言った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺の突然の発言に二人は絶句している。そりゃ、俺だって最初は信じていることが出来なかつたさ。彼女いない歴〓年齢の俺にとつて、それはそれは素晴らしい夢のようなシチュエーションだった。『それなんてギャルゲ?』みたいなこと言われてもおかしくはないが、起こつたんだ。現実にな。奇跡だった。

ふつ、無理もあるまい。俺とこいつらじゃ、もう見えてる世界が別だからな。

「何を言っているんだ? 誠一よ? どうした? 頭でも打つたのか?」

「松田氏に同意だ。誠一よ、お前にしては面白くない冗談だ。」

二人とも第一の発言が俺の頭の心配だ。こいつら全く信じてないな。

「おいおいおい、お前ら。俺に彼女が出来たことがそんなに信じられないか?」

俺はそう反論する。

しかし、松田と元浜は真顔で言った。

「? 当然だろう? お前に彼女ができるはずがない。本当に大丈夫か? お前。」

「ああ、さてはあまりに彼女が出来なくて脳内彼女を作ってしまったか。なんと哀れな・・・・・・・・」

そう言つて二人は俺に憐みの目を向ける。

こいつら・・・・・・・・まじで一端シバいたろうか?

はあ。親にも疑われ、友にも疑われるか・・・・・・・・全く・・・・・・・・涙がちよちよ切れてくるぜ!!

仕方がないので俺は証拠を出す。

俺の携帯にある夕麻ちゃんの写真をこいつらに見せる。
さてさて・・・・・・・・こいつらどんな顔をするか。見ものだなあ。

「嘘じゃねえって。これ見てみる。」

「んだよ・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

写真を見た瞬間、こいつらの顔が先ほどよりもヤバくなっている。魂抜けてるぞ。

まあ、無理もない。こんな高嶺の花とも形容できる美少女だ。俺たちごときでは手の届かない女の子が俺の彼女なんだからな。

つぶ見たか？これでこいつらも信じるだろう。

そう高をくくつていると、こいつらは叫びだした。

「せいいち~~~~！貴様、この子を何円で買った？！？」

「金で彼女をつくるだど！！貴様あ~~~~！！許せん！！！！万死に値する！！！！」

またこいつらは俺のことを疑っている。

はあ……そんなに認めたくないのか。

「金なんて一銭も払ってねえ！！ガチで告白されて、勝ち取った彼女だボケエ！！」

流石にこのいわれようなので、俺は反撃に出た。

「な!?マジなのか……」

「じゃあ……この子は……」

俺が怒鳴るのはそうないことなので、こいつらは流石に大人しくなった。

「ああ、マジだ。」

「く、クソツ……誠一が一番乗りだともいうのか……」

「誠一、俺たちのモテない同盟はどうなったというのだ!?誠一!?!? いまだに諦めない松田。必死だなあ。」

「あ？俺たちのモテない同盟？そんなものあったか？ま、とにかく俺もこれで晴れて彼女もち、勝ち組だ。おめえらも速く彼女を作れよ。マジで見える世界が違うからな。ああ、それと俺は今週末に夕麻ちゃんとデート行くから。」

俺は勝ち誇ったようにこいつらにとっては衝撃的な事実を口にする。デート。ああ、なんて言い響きなんだ……

「なんだと!?貴様!?なんと羨ましいことを!!!」

「この裏切り者が!!!」

「はっはっは、何とでも言え。」

まるで血涙を流すかのような様相の松田と元浜。

残念だったな。どうやらお前らに天の神様は振り向かなかつたらしいな。

まあ、ガンバレや。俺たちは友達だからな。応援してるぜ。

このあと、俺こと布藤誠一に超かわいい彼女が出来たっていう話が学校中に広まった。もてない男子共は「なぜあんな野郎に!!」などと妬みを含んだ言葉を一日中口にするようになったのだった。

そして約束の日曜日。

今日は待ちに待った夕麻ちゃんとのデートだぜ!

前々から練っていたデートプランを実行するときが来た!!

この日の為にどれだけ時間を費やしただろうか。初彼女を楽しませるために頑張った!それだけじゃやない。昨夜から何度も歯を磨いた。それこそもうこれ以上取り除く歯垢がないくらい。この日の為に新しいパンツだって買った。何が起こっても大丈夫なようにな。そんなこんなでチエリー根性マックス状態で挑むデートだ。

家から歩いて数十分、予定していた集合場所に到着した。夕麻ちゃんはまだ来ていない。そりやそうだ。約束の時間の2時間前だからな。彼女を待たせるわけにはいかないもんな!彼氏として当然だ。まあ、緊張して早く起きてしまったということもあるが。

しかし、流石に早過ぎたので、俺は道行く女の子たちをばつちり数え上げる。その途中、なにやら怪しげなチラシ配りに遭遇した。『あなたの願いを叶えます!』って怪しげな魔法陣が描かれたいわゆるオカルト的な代物だ。

これ貰っても正直困るが、捨てに行く機会がないので取りあえずポツケに突っ込んだ。

「誠く〜ん!!!」

そうこうしているうちに、遠くから俺の名を呼ぶ可愛らしい声が聞こえた。

俺はその声をした方を向いた。夕麻ちゃんちゃんだった。手を振りながらこつちへ向かってきていた。すっごい笑顔で。

かわいい!!!

俺はそう思った。これはやばい!!

「お待たせ、誠一君。待たせちゃった?」

おお!!よくあるシチュエーション!!

「いいや、待ってないよ。俺もほんの数分前に着たところ。」

「そうなの?よかった?」

夕麻ちゃんはそう言つて可愛らしい笑みを浮かべる。

くうううううううううう!!

男なら絶対に言つてみたい台詞!!マジで現実になつたぜ!!

俺は内心ガッツポーズをする。

「さて、夕麻ちゃん。いこつか。」

集合も出来たことだし、俺は夕麻ちゃんに手を差し出して言つた。

「うん♪」

夕麻ちゃんは躊躇いもなく、俺の手を笑顔で握ってくれた。全く、最高の彼女だぜ。

「この日の為に考えた場所に連れてくよ。」

「ホント?嬉しいなあ〜」

夕麻ちゃんには好評のようだ。

こうして俺たちの最初のデートは始まったのだ。

誠一SIDE OUT

◆◆◆
イツセーSIDE

「みんな〜!はやくはやく!」

「も〜イズナちゃん!前向いてないと転ぶよ!」
よう。

イツセーだ。

俺は今、俺の別荘がある都市の公園に来ている。イズナ、ルル、アウローラ、ユキたちとな。

四人とも、元気いっぱいこの公園内を満喫している。

俺は公園を走り回っている妹たちに目を向ける。

「わあ〜待って待って〜!!」

「逃がさないよ～～～！」

「捕まえますよ」

「……………少々元気すぎる気がするがな。」

妹たちが『遊びたい』とのことだったので俺は4人を連れてこの街の中心へとやってきた。

まあ、こうして妹たちと遊ぶのも、妹たちが元気に走り回っているのを見るのもいいものだ。

「ちゆかれた～～～」

「いっばいあそんだね～～～」

しばらく時間がたつと、4人とも俺の座っているベンチに腰掛けた。

「あの後4人とも遊び倒したのだ。」

公園内を縦横無尽に駆け巡り、敷地内にある遊具などでも遊んでいた。もちろんこの公園には一般人、人間の子供もいる。その子供たちよりも圧倒的に運動量が多い。種族が違うからな。

「可愛らしい元気な子たちですね。」

ベンチで休憩していると、隣のベンチに座っていた人から声を掛けられた。見たところ、20代の若い女性だ。ルルたちより歳下であろう小さい女の子とベビーカーに乗っている小さな子を連れていた。

「ありがとうございます。」

俺は一般的な受け答えをする。

「妹さんですか？」

「はい、そうですよ。そちらの子はお子さんですか？」

俺はその女性に訊いてみた。

「ええ。3歳といま6か月です。」

「二人とも女の子ですか？」

「はい。それにしてもいいお兄ちゃんしてますね。休日に妹の面倒を見ているなんて。」

女性に褒められる。なんか照れ臭いな……………

「ええ、まあ。これも俺の役目だと思ってます。それに、妹の元気な姿を見るのも好きなんですね。」

「あらあら、ふふふ。妹さんのこと、大好きなんですね。いいお兄さんを持ったのですね、妹さんたち。」

女性は妹たちに微笑みながらそう言った。

「うん!!」

「おにーさんはかつこよくて好き!!」

「おにいさまは理想の人です。」

「ルルもーにいたんのこと大好き!」

4人とも無垢な笑顔でそう言う。妹たちにそう言われるのはやはりうれしいものだ。

そのあと、しばらくの間この女性とその他3人、俗に言うママ友的な人たちと世間話をしていた。皆、俺が外国人だということを告げると驚かれた。なんでもこんなに日本語が流ちょうなのは珍しいんだと。その中の一人の女性に妙にこちらにアプローチを掛けてくる人がいた。なんでも未亡人だとか。しかし、俺はさりげなくスルーするような返しをする。

ルル、イズナ、アウローラ、ユキは自分たちより小さな子たちと遊んだり、面倒を見たりしていた。俺はその子供たちの母親とその微笑ましい光景を見ていた。

公園を後にし、商店街の方を歩く。

「ねえねえ、お兄ちゃん。アイス食べたーい。」

「あ、ルルもルルも!!」

「私も欲しいです。」

「私も〜」

途中、イズナがアイスを欲しがる。イズナがそう言ったのを皮切りにルル、アウローラ、ユキも同調した。あれだけはしゃいだから甘いものが欲しいのだろうな。

「よし、分かった。じゃあ、アイスクリーム売ってるところに行こうか。」

「わーい!」

「楽しみだね、あーちゃん!」

「ええ。」

妹たちは嬉しそうだ。良かった良かった。

俺たちは商店街の方の通りに入り、その手の店を探し始めた。

「にいたん、みんな早く早くー！」

ルルがみんなを急かす。

「もうーるーちゃん！走っちゃダメ！」

ユキがルルを注意している。流星は一番上の子だ。

「お兄様、早く行きましょう。」

「お兄ちゃん、おいていかれちゃうよ。」

そんな光景を見ると、アウローラとイズナからそう言われる。

「ああ、待ってくれ。」

俺は少し間が空いてしまっていたので、駆け足で4人に追いつく。

この通りを歩きかう人々。休日なので人は多い。

俺の横を男女二人組がすれ違う。

ちようどその時だった。

「ん?？」

俺は咄嗟に後ろを向いた。

今、俺とすれ違った二人組の男女。特に黒髪の長髪の女に注目した。

「(・・・・・・・・・・あの女、人間ではないな。あの気配は墮

天使か・・・・・・・・となりの男は人間だ。何を企んでいる・・・・?)」

俺は思考を巡らせた。

墮天使がこんなところにいるとはな。

しかも人間の男を侍らせている。

「イツセーよ。今のは――」

そうこうしていると、俺の中に宿るドラゴンにして神、ニトラも気づいたようだ。

「(ああ。墮天使だ。どうやらこの都市にいたようだ。)」

「そこは大したことではないな。あの墮天使と共にいた人間。間違はなく龍、ドラゴンの気配がした。もしか、ドラゴンを宿しているのか?」

ニトラは同族だから墮天使よりも気になるのだろう。

「(恐らく、セイクリッド・ギア 神 器を宿しているのだろうな。この気配はかなりの力を持つドラゴンだ。恐らく、ロンギヌス 神滅具に近いかもしれない。)」

「そうか——とこころであの人間はそれに気づいているのか?」

「(さあな。しかし、あの人間からは強さは感じないな。墮天使ということも気づいているのかも怪しい。)」

俺はニトラと頭の中で会話しながら歩く。今ここで手を下すのは簡単だが、あの人間が邪魔をするかもしれない。あの墮天使の真の目的もわからない。それとも、本気で人間と交際でもしているのか?」

「にいたん、どうしたの?」

「お兄様、考え事ですか?」

俺が思考を巡らせていると、妹たちから不意に声を掛けられる。

「ああ、済まない。ちよつとな。」

取りあえず、妹たちもいるということで、今日はスルーすることにしました。

「あ、あつたー!!お兄ちゃん!!こつちにあつたよー!」

「ああ、今行くぞー」

イズナがアイスクリーム屋を見つけたので、俺たちはそこに向かう。

「いらっしやいませ。ご注文は何にしましょうか?」

アルバイトであろう女の子が注文を取る。

「ルルこれ〜」

「イズナはこれがいい!!」

「私は抹茶がいいです。」

「え〜と、私はチョコレートで。」

みんな好きな種類をそれぞれ選んでいく。

「は〜い。バニラ、ストロベリー、抹茶、チョコレートですね。お兄さんはどれにしましょうか?」

実は妹たちだけにするつもりだったが、折角聞かれたので、俺も注文することにした。

「じゃあ、俺はこのラブポジションフォーティワンで。」

「畏まりました。全部で760円です。」

俺はその金額を払う。

お店の女の子は注文の品をこしらえながら、俺とちよつとしたトクをする。

「妹さんですか？すつごく可愛いですね。髪の色も凄く綺麗ですね。」

店の女の子は出来たアイスクリームを手渡しながら言う。

「ありがとうございます。自慢の妹たちなんですね。そういわれると俺も嬉しいよ。」

「羨ましいです。私ひとりっ子なんです。はい、ご注文最後の品です。」

「ありがとうございます。」

女の子は全員分のアイスクリームををわたし終える。

すると、女の子は少し顔を赤くしながらもじもじとし始める。

「あ、あの。また、来てくださいね？」

「ああ。また来るよ。」

俺がそう返すと、女の子は凄く笑顔で喜んだ。

ふふ、妹たちがそんなに可愛かったか。また会いたいのだろう。

「(全く。だから違うといっているだろう。)」

ニトラが何やら言っていた気がするが、まあいいだろう。

俺たちはアイスを食べながら帰路についた。

「ん〜〜おいひ〜〜」

「もう、イズナちゃんもルルちゃんもほつぺにアイスついてるよ。」

「とってあげます。」

アイスを食べながらしばらく歩き、家への一本道を歩く。

途中、妹たちが俺のアイスを欲しがったので、一口ずつ分けたり逆にもらったりした。

そうこうしていると家に着く。

「「ただいま〜〜！」「」

「今帰りました。」

ルルが勢いよく戸を開ける。

「おかえり。みんな。」

「あ、ティア姉にみんな!!」

「「「きゆう〜〜」」」

そういつて出迎えに来てくれたのはティアとちびドラゴンたち。
俺の妹たちだ。

「おかえり」と言ってくれているのだろう。

ティアはティアで妹たちとじゃれ合っている。

「あ、おかえり、イツセー。帰ってたのね。」

すると、奥から声が発せられた。俺が何年も聞いている透き通った
綺麗な声。

その声の主が現れる。

赤い髪。誰もがうらやむ抜群のプロポーションに整った素顔。

神器の中でいつも顔を合わせていた龍^{ひと}だ。

「ああ、ただいま。ドライブ。」

俺が名を呼ぶと、ドライブはにっこりと笑顔を浮かべた

イツセーSIDE OUT



誠一SIDE

「うおおおおおおおおおおお」

!!!!!!!

よう!誠一だ。

猛ダツシユ中である。

今、俺は人生最大の山場を迎えているぜ。

「全く、ちよこまかと。待ちなさい!!」

ひいひいひいひいひいひい!!

後ろからゾツとする声が聞こえる。

俺——初彼女に狙われてます——

なぜこんなことになったかと言うとだな……………

——数十分前

「誠一君……………」

「ゆ、夕麻ちゃん……」

デートは凄く充実していた。夕麻ちゃんにも受けは良かった。そして、帰り道。夕暮れの公園で俺たちは向き合っていた。

こんなシチュエーション、いつも夢見ていたものが現実になったんだ。

「誠一君、今日は私たちの記念すべき初デートだね。」

「ああ、勿論だ。」

色っぽい声。くううくうくたまらねえ!!

「じゃあ、その記念に、私聞いてほしいお願いがあるの。いいかな？」

「お、お願い……?」

お願いってあれか!?!?キ、キスだよな!?

しかもこのシチュエーション!!この夕麻ちゃんの恥じらう姿!間違いないねえ!!

俺はキスに違いないと確信し、夕麻ちゃんの願いを聞いた。

「何だい?俺にできる事なら何でも言つて。」

この台詞。完璧だ。俺はそう思っていた。

「じゃあ、死んでくれないかな?」

………

俺の頭には?しかなかった。

「ね、ねえ夕麻ちゃん。今よく聞こえなかった。もう一度言つてくれないかな?」

き、聞き間違いだ。そうに違いない。夕麻ちゃんが「死んで」なんて……そんなことあるはずがない。

「死んで?」

言った………間違いなく、「死んで」と言った。

意味が分からない。なぜ?どうしてそんなことを?

「全く、夕麻ちゃんは冗談きついでく」とか言おうとした。バサツ!

すると、夕麻ちゃんの背中からあり得ないものが生えた。

「なんだそれ……翼?」

黒い翼を広げて宙に浮かぶ夕麻ちゃん。その姿は幻想的だ。ネットによくある絵そのものだ。

「楽しかったわ、誠一君。初々しい子供のままごとに付き合えた気分だったわ。あ、でもチョイスは悪くなかったわよ。」

何とも冷たい。口元は冷笑を浮かべている。

ブウン

ゲームの機械音よりも重苦しい音が空気を揺らし、俺の耳へと入ってくる。

その音を立てながら、夕麻ちゃんの手に表示された。

紫色に輝く槍のようなものだ。

ヒュッ!

「うおっ!!」

ドン!!!

その槍は俺に向けて放たれた。しかし、俺は間一髪のところを避け、その槍はコンクリートの道路にぶつ刺さった。

そんなこんなで俺はガチマラソンしているわけだ。

結構走ってきた。

そろそろ撒けたか?

「もう鬼ごっこは終わり?」

.....そんなことは無かった。

夕麻ちゃんは俺の正面にいた。

「マジかよ.....」

「私の槍を避けたのはほめてあげる。」

そう言つて夕麻ちゃんは槍をまた顕現させる。

くっ! マジでやべえ。走ってきてもう疲れた。次はまじで避けられねえな。

「クソッ! 夕麻ちゃん。どうせなら、君と愛し合つてから死にたかつたぜ.....」

俺はそう吐き捨てる。

「無、理♪さようなら。私の彼氏君。」

グサツ!!

俺の腹に槍が刺さる。

槍は霧散し、俺の腹に空いた風穴から血がとめどなくあふれる。

ちくしょう。ここで終わりか。まだ二十歳にもなっていない……

わりい、親父、お袋……親孝行も出来なくて……

俺は腹に手をあてる。俺の手にはべっとり血がついている。

紅い……紅か……この血の色と同じ色の髪をもつ学園の先輩を思い浮かべる。

あんな美人の腕の中で死にたいと思ってしまっ。夕麻ちゃんがいながらこんなこと思ってしまう。浮気性なのだろうか？あ、でも刺されたから分かったってことでいいのか？

だんだん意識が……眼ももうぼやけてしまっている。

「あなたね？私を呼んだのは。」

突然、視界に紅い光が差し込む。

誰かが俺に声をかけてきたようだ。しかし、ぼやけて何も見えな。人型のシルエツトが見えるだけだ。

「死にそうね……傷は……!!へえ……あなた、面白いじゃない。」

くすくすと笑う女性の声。

一体何がそんなに面白いのか……

「消えそうなの命。私が拾ってあげる。あなたの命、私の為に生きなさい。」

誠一 SIDE OUT



No, XVIII く学園の悪魔く

誠一SIDE

『さようなら、誠くん♪』

夕麻ちゃんは笑みを浮かべながら顕現させた光の槍を俺目がけて投げる。

ドツ!!

放たれた槍は見事に俺の腹に突き刺さる。

『ゴフツ……』

俺は吐血しながら倒れる。

夕麻……ちゃん——

『オキナサイ!オキナサイ!オ、オキナインダツタラ……キ、キス、スルワヨ?』

「……う……ん……」

夢か……

目を開けると朝を知らせる光が窓から入ってきている。

今なった声はツンデレバージョンか……残念なことに声だけで、起こしてはくれないものだが。

それにしても最悪の夢だな……汗びっしよりだ。

夕麻ちゃんに殺される夢だ。冗談ではない。せつかくできた初彼女に殺されるとか笑えない。

ん?夕麻ちゃん?

「はっ!!」

ガバツつと俺は勢いよくベッドから体を起こす。

あれだけ目覚めが悪かったが、この時だけはしゃっきりしていた。

「き、傷は?」

俺は自身の体を確認した。

「傷が……ない……?」

着ているパジャマをめくってみたものの、傷は無かった。おかしい。全く持つて不可解だ。

俺は間違いなく、あの時——

『せよなら、誠くん♪』

って夕麻ちゃんに殺された。そのはずだ。

しかし、俺はいまこうして生きている。マジで夢だったとでも言うのか……？

どういうことだ？それとも不思議なパワーでも働いたのか？

俺があれこれ考えていると、下の方から俺を呼ぶ声が聞こえた。

「ちよつと誠一ー！何やってるのー！早く起きなさい!!」

母さんの声だ。結局呼ばれてしまったな。

「ああー!!今行くー!」

「速くしなさいよー!」

取りあえず、考えていても仕方ねえ。

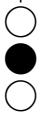
こうして生きているのなら、ラッキーと思えばいいか。

俺はとりあえず、今まで通りの生活を送るようにした。

しかし、これは俺の生活が180度変わる兆候の始まりだったのだ。

俺はベッドから立ち上がって着替えを始めた。

「ん……?おかしいなあ。なんか身体がだるいぞ……」



一週間後

「誠一ー!!起きなさい!!」

「うう……朝か……」

あれから一週間半くらいたった……

今日も最悪の目覚めだ……

あれからいつも夕麻ちゃんに殺される夢を見ては起きるの繰り返しだ。そのうえに学園だ。

「誠一ー!まだ寝てるのー!」

「わかった、今起きる!!」

俺は鉛のように重い身体に鞭を打ちつつ、学園へ行く準備をした。

「誠一、遅刻ギリギリよ?この頃多いわ。夜更かしのし過ぎよ。」
階段を下りて行ってダイニングに行くと母さんが少しご立腹でい

らっしやった。

「ああ。わかってるよ。」

「全くもう・・・ホントにわかってるのかしら」

「わかってるって。じゃあ、行ってきまーす！」



「ふあ~~~~あ」

あくびをひとつかみ殺しながら学園へ向けて歩を進める。

通学の途中、朝日がどうしても厳しい。そのせいで目を細めてしまい、視界も悪くなる。

あー！ーホンとーにダルイ。

最近。いや、正確に言えば殺されたおかしな日からどうにも俺は朝が極端に苦手になった。いや、そりやもとから朝は苦手だったけどさ。ここまでひどくはなかったはずだ。おまけにいつも必ず山から顔を出す太陽が苦手だ。陽光が俺の肌を突き刺すようでキツイことこの上ない。

このおかげで朝は全く起きられなくなった。今では母さんの朝の一声なしでは起きられない。

さらに悪いことに、逆に夜は活発になってしまう。体の内側からスゲエパワーが満ち溢れるような感覚がしてならない。俗に言う夜の超ハイテンション状態と言うやつだ。夜の時の俺はそれはもう凄い。ひとたびエロ本を見れば興奮マックス状態。お得意の自家発電も効率アップ。パンツいっちょで町内一周できるってくらい。

まあ、簡単に言えば夜型人間だ。これが朝起きられない原因の一つだ。

おかしい。吸血鬼かよ!!

今まで徹夜なんてしたこともない。夜更かしって言ってもせいぜい1時くらいまでだ。

それが今は3時4時は当り前になっていた。

夜の感覚は恐ろしい。頑張れば起きていられるくらいな。

試しに夜、そとに出てみた。走れば体育測定のときの俺の走りが何だったんだって位くらいの速度が出た。どんだけ走っても疲れな

フルマラソンも余裕つくくらいだ。

どう考えても俺は異常者だが、夜はホントに心地よかった。

「はあ……辛……」

なのに朝はこれ。夜型人間乙。



朝のダルさに耐えつつ、学園に到着する。

私立駒王学園。

初等部から大学部まであるエスカレーター式の学校。偏差値は西東京では私立公立合わせて8番目。

俺は高等部から外部生として入った。その理由は単純。女子生徒が多いから。

そこに目をつけて俺は必死こいたのも今は昔の話だ。

さて、この学園には大きく分けて2種類の男子生徒が存在する。

容姿良し、学力良し、運動神経良し、性格良しで女子生徒に好意をもたれ、モテるイケメン。それが優等生。そしてその他、どれか一つはあっても他が足を引っ張ってモテない男。それが劣等生だ。残念なことに俺は劣等生だ。

入学当初、この学園に通う男子は全員彼女持ちになれると思っていた。しかし、現実は甘くない。女子が自分から寄ってくるのは一部のイケメンだけだった。どれかが欠けた俺たちには寄ってこない。この学園に入学した時から優等生と劣等生は決まっていたかのように。そんなことを思いながら俺は自分のクラスの教室の自分の席に座る。

「はあ……」

ため息が自然に出る。

「よー、心の友よ。貸したお宝DVDはどうだったよ？素晴らしかっただろう？」

と、声をかけてきたこいつはセクハラ発言は日常茶飯事である変態、『エロ坊主』『セクハラパラッチ』こと松田。

「ふっ……二人とも、今日は風が強かったな。おかげで女子高生のパンチラが拝めたぜ。」

と、キザ男のようにカツコつけるこいつはメガネを通して女子の体型を数値化するという能力をもつ特殊能力保持者。レアスキル・ホルダー『エロメガネ』『スリーサイズスカウター』こと元浜。

とまあ、いつものメンバーが集まる。

「いいものが手に入ったぞ。」

松田が鞆から惜しげもなく堂々と卑猥なものを机の上に並べていった。

「ひいっ!!!」

女子生徒の悲鳴が聞こえる。

「うわっ！朝から最悪!!」 「死ね！エロガキ！」

女子たちは俺たちを蔑みの目で罵倒する。

「騒ぐな！これから俺たちのお愉しみタイムなんだ！女子共は禁制だ！脳内で犯すぞ!!」

普通に聴いてたらとんでもない事を言い出す松田君。君、マジで最低だぞ。

机に置かれたものはどれもお宝だ。

しかし、生憎俺は素直に喜べない。

「おーおー、これだけのお宝前にしてなんだよ。おめえのその顔はよお。」

嘆息する松田。

「誠一、最近ノリが悪いぞ。おかしい。いや実におかしいぞ。」
メガネをくいと上げながら言う元浜。

「そりゃよ、俺だって声を上げて叫びたいが、いかんせんこのところ精力がな、減退しててよ……」

「病気か？誠一。エロの権化であるお前がそんな簡単に風邪を患うわけがない。」

失礼なやつだ。俺だって風の二つや二つひくさ。

「それともあれか？お前に彼女がいたって話か？夕麻ちゃんだったか？」

「ああ……なあ、ホントに覚えてないのか？」

俺はそういうものの、二人は哀れなものを見る目で言う。

「だから知らねえって。」

「そうそう。何度も言うが俺たちはそんな女の子のことはお前の口からきかされてない。病院に見てもらったらどうだ？」

そう。俺が夕麻ちゃんの話も振ってもこれだ。「知らない」だの「病院に行け」の一点張りだ。

確かに俺はこいつらに言ったはずなんだ。写真も見せた。こいつらは「なぜこんな美少女が誠一なんかの彼女にー?!?!?」「貴様、金で女を作ったのかー?!?」などと失礼なことを言ってきた。

俺も上から目線で「お前も早く彼女作れよ。」と、かましたはずだ。しかし、その記憶がこいつらにはない。いや、まるで最初からいなかったかのよう。

この世には超常現象とか幽霊などのオカルチックなものがあるとうわさされる。俺は今まで信じてなかったが、おれは本当にあるんじゃないかと思いつける始末。

他にも夕麻ちゃんの正体を突き止めようと奔走したがそんな人物はいなかった。

「ま、誠一よ、そんな時もあるさ。」

いや、ねえよ。こんなことホイホイあってたまるか。

「とにかく、誠一を元気づけよう。今日、俺の家で鑑賞会だ。」

「それはいい。松田君。是非とも誠一を連れていくのだ。」

「はあ・・・わーったよ。今日は無礼講だ。」

「ふっ、分かっているじゃないか。それでこそ誠一だ。」

初彼女が幻として消えたのは納得できないが、今日のところは気を紛らわすことにした。

「おい!!外見ってみろ!『お姉さま方とその一行』が歩いてるぞ!!」

そんなとき、誰かが叫びだした。

その叫びと同時に、クラスの奴らのほとんどが窓の外を見た。

お姉さま方。それを指すのはリアス先輩のことだ。

本名リアス・グレモリー。紅色の髪をもつ美少女。聞いたところによると北欧の人だとか。あんな綺麗な髪を持つ人、北欧にもそんないないのではないだろうか。

この学園の三年生だ。一年と三年の男子には絶大な人気だとか。二年生にももちろん人気はあるが、我がクラスの三大マドンナにも人気があるため、5:5といったところだろう。実際告白する奴も多いと聞いた。そんな三大マドンナたちもリアス先輩を見ている。やはり相当な人だ。

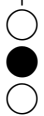
そんなふうにはリアス先輩とその一行を見ていると彼女の眼が俺をとらえた。

——っ！

心まで見透かされるような視線。

今のは何だ？俺を見ていた？しかし、俺と先輩に接点はない。一体何だったのだろうか？

しばらくして彼女たちはもう視界から消えていた。



あのあと、俺は松田の家に行ってDVDの鑑賞を行った。

松田が泣きながら体育館裏で女子にカツアゲされたと言っていたが、あれは流石に同情したな。危うくもらい泣きしそうだったな。

もう夜の10時だ。真つ暗な道に向かって歩いていく。

やはり夜はいい。実にいい。

この時間になってくると力があふれてくる。

しかし、今回は良いことだけではなかった。

さつきから感じる視線。得体のしれない空気を感ずる。

体が小刻みに震え始めた。

スーツ姿の男がこちらをうかがっていた。

やべえ。あの殺意の眼は以前にも感じたことがある。

すると、男はこちらへ近づいてきた。

間違いない。これはやばいやつだ。

「これは数奇なものだ。このようなところで貴様のような存在と遭遇することになるとはな。」

男はそう言いながら距離を詰めてくる。

俺は警戒する。

こいつの言っていることが正直分からんが、こいつがおかしな奴だ

ということが分かる。

とにかく、夜でパワーアップしている状態なら逃げ切れるかもしれない。

そう思っただけは全力ダッシュをする。

「逃げ腰だな。貴様の主は誰だ？このようなところを縄張りにしているような輩だ。低級なものか、物好きのどちらかだ。貴様の主は誰なんだ？」

こいつは俺の全力ダッシュについてきやがった。

そして更にわけ分らんことを言い出す。

とにかく俺は無視して突っ走った。

そして、公園にたどり着いた。

ここは――

「逃がすと思うか？低級なものはこれだから困る。」

追いかけてきた男は見覚えのある翼を生やし、宙に浮かんでいた。

「お、おまえ、その姿は……」

殺された、夕麻ちゃんそっくりの翼。

やばい――これ、あの時と同じだ。

「ふむ。主の気配はなし。仲間もいない。消えるそぶりも見せない。魔法陣も使えないか。お前は『はぐれ』か。ならばここで始末してもいいだろう。」

男は手をかざし、光のようなものが集まっていく。そしてそれは槍の形になる。

マジかよ!?!?こいつも夕麻ちゃんと同じ存在とでも言うのかよ!?!?

しかし、気づいたときには俺の腹に穴がまた開いていた。

血が大量に流れる。

なんだこれ？超痛え!!

夕麻ちゃんやられたときは比較にならんぞ……

「つぐ……クソ……」

しかし、意識はなぜかあった。あのときはすぐに眠たくなったってのに。

とにかく俺ははつきりと見える男を睨んだ。

「ほお。かなりの強さの光力を込めたというのに貴様にそんな目を向ける力があるとはな。低級なものと高をくくっていたが、思いのほか力があるじゃないか。次は全力を出そう。これで貴様を葬れるはずだ。」

男は先ほどよりも強い光の槍を作る。

あれをくらえばもうダメだ……

「その子に触れないでちょうだい。」

「ぬっ?!?」

その時だった。俺の目の前に颯爽と現れた紅の髪の少女。

見れば男の手からは煙が上がっており、鮮血が流れている。

この人が攻撃してのだろうか。

「……紅い髪……グレモリー家の悪魔か……」

男は憎々しげに女性を睨みつけた。

グレモリーって言わなかったか?あの男。ならばこの人は……

「私はリアス・グレモリーよ。ごきげんよう、堕ちた天使さん。取りあえず、消えてもらえないかしら?この子にちよっかい出すというのなら、私も容赦しないわ。」

リアス・グレモリー。

学校で人気な先輩。まさにその人であった。

あの先輩が守ってくれるとは……

「ふ……ならばその者はおたくの眷属だったか。それならば今日のところは詫びよう。だが、そうやすやすと放し飼いにするのは控えることだ。こちらとしても、散歩がてらに狩ってしまうかもしれない。」

「ご忠告痛み入るわ。この街は私の管轄。邪魔をするなら、そのときは容赦なく消させてもらうわ。」

「そうか、ならばそのセリフ、そっくりそのまま返そう。我が名はドーナシーク。再び見えないことを願おう。」

その男はそう言って去っていった。

その光景を最後に俺の視界は暗転した。



『オキナサイ……オキナサイ……オキナサイ……オキナサイ……』

「う、ううん……」

目覚ましが鳴り、目を覚ます。

いつもの苦しい朝だ。

全く、昨日は散々だった……

また腹刺された……全く。なんてことだ。

しかし、もう痛みはない。おかしい。また不思議なパワーってやつか？

しかもおれ全裸だし。

とにかく俺は起きる準備をする。

むにゆん

「むにゆん？」

俺が起きようとする、不思議な柔らかい感触がした。すんばらしい感触だ。まるで、おっぱいのように。

「まさか……」

俺は布団を引っぺがしてみる。

するとそこには……

「ううん……あん♡……」

色っぽい声を出す赤い髪の少女、我が学園のアイドルであり、人気者の先輩。

リアス・グレモリー先輩が寝ていた。

全裸で。

もう一度言う。『全裸』で!!!

「あら、おはよう。」

じつと見ていたら、先輩は目を開けていた。

「あ、おはようございます。」

「いい朝ね。」

「はい、そうですね。」

いやいやいや、そうじゃねーだろおおおお!!

何この状況!?

フツーに会話しちゃってるよ!!

「誠一、何してるの!?!さっさと起き……」

そんな状況の中、さらに悪いことに、母さんが俺の部屋のドアを開け、この何とも言えない状況を目の当たりにしていた。

「おはようございます。」

先輩フツーになっこりとあいさつしちやつてるううううう!!

見てよ!!母さんの顔凍ってるよ!!唾然としちやつてるよ!!

「……オハヨウ。ハヤクシタク、シナサイネ。」

そう言っつて母さんは下りて行つた。

「……いやいやスルーうううううううううう!!?

「あ、あああああなたあー!!誠一があ!!!」

「どっとうした!!かあさん!!また誠一が布団を真っ白に汚したの

かあ!!!」

「セツ、セ○クスー!!!!し、しかも国際的ー!!」

「と、とにかくおちつけえ!!!」

と、母さんはしたで大騒ぎだ。

「うふふふ、にぎやかだね。」

「えつと……先輩。」

「そうそう。お腹、大丈夫?」

先輩が俺の身を案じる。

「え、ええ。この通り穴あいて無いです……もしかして、先輩が

?

俺はそう訊いてみる。

「ええ、そうよ。こうやって裸で抱き合つてね。」

は、裸あ!?!?

ブツ!!!?!

鼻血が出る!。すこし刺激が強すぎたようだ!!

「は、裸ですか……」

「そうよ。でも驚いたわ。あなた、凄く頑丈なのね。こうして抱き

合うだけで傷が塞がったわ。それに覚えているのね、昨日のこと。」

「ええ、まあ、大まかなことは。それで、色々聞きたいことが……」

「分かつてるわ。そのことは今日の放課後に話すわ。とりあえず、

学園にいきましょう。」

「わ、分かりました。」



そして放課後。

「やあ、待たせてしまったかな？」

俺を訪ねてきた男子。

さわやかな笑顔を周囲に振りまいていて、女子共はキャーキャー騒いでいる。

「それで、お前がグレモリー先輩の使いなのか？木場。」

木場裕斗。この学園でぶつちぎりのイケメンである。男子ではグレモリー先輩同様有名人だ。爽やかなスマイルで学園中の女子のハートを打ち抜いている。俺たち男子に彼女が出来ない理由にはこいつにお熱な女子がすぎるという説も濃い。

「ああ、そうだよ。と言うわけで、僕についてきてほしい。」

「ああ、わかった。」

全く、いつもこんな感じの笑顔を振りまく。やってらんねえぜ。

「いやー！ー!!」

「そ、そんな！なんで木場さんと布藤と一緒に歩いてるの！」

「汚されてしまうわ、木場くん!!」

「木場さんと布藤のカップリングなんて許せない!!」

廊下を歩いていればこのぎまだ。訳の分からないことを言われる。つかさ、最後の台詞はあかんだろ。

全く。もと女子高と言うこともあり、俗に言う腐女子と言うやつが一定数いるんだよなあ……

ホントにやめていただきたい。

「ごっちだよ。」

俺は口を開かずに木場についていく。

なにやら敷地内にある林に足を踏み入れた。

こんなところ、あつたんだなあ。

すると何やら木造の建物に着いた。

此処は旧校舎だな。少し古いが、そこまで酷いものではない。

「さあ、ついたよ。ここに部長がいるよ。」

中に入り、階段を上つてとある部屋にたどり着く。

『オカルト研究部』

オカルトか・・・かくいう俺も少し方向性はちがうものの、そんなものにかまけてた時もあった。サキュバスとか・・・

話を元に戻そう。ここに、先輩がいるのか。

「部長、連れてきました。」

「ええ、入って頂戴。」

扉が開かれる。

室内はいたるところに面妖な文字が記され、中央には魔法陣が描かれていた。

と、ソファアに座っている女の子を見つける。

一年生の搭城小猫ちゃんだった!!

こんな人気者がいたとは!!

「小猫ちゃん、こちら、布藤誠一くん。」

木場が紹介してくれた。小猫ちゃんはぺこりと頭を下げてる。

「あ、どうも。」

俺も頭を下げる。

部屋の奥からシャワーの音。

ん？シャワー？

「部長、これを。」

「ありがとう、朱乃。」

二人の女性の声があった。先輩のほかに誰かいるようだ。

それにしてもいい光景だ。すんばらしいく

「いやらしい顔・・・」

おっと、小猫ちゃんに厳しい一言をもらってしまった。

シャワー

カーテンが開き、部長ともう一人の美人な女性が出てきた。

「待たせてしまったわね。昨夜、シャワー浴びることが出来なかったから汗を流していたの。」

もう一人の女性は!?学園二大お姉さまの一人じゃありませんか!?

「あらあら。初めまして、私は姫島朱乃と申します。以後、お見知り

おきを。」

ニコニコ顔で丁寧なあいさつをしてくれた。

「ど、どうも。布藤誠一です。はじめまして。」

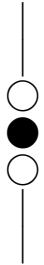
「これで、全員そろったわね。布藤誠一くん。えっと、セーイチって呼んでいいかしら?」

リアス先輩からそう聞かれた。

そんなもん決まってるぜ。

「は、はい! ぜひそう呼んでください!」

「ありがとう。では私たち、オカルト研究部はあなたを歓迎するわ。悪魔としてね——」



「——って感じよ。大まかなことを理解できたかしら?」

「ええ、まあ、なんとなくは……」

としか言いようが無かった。

まさか、悪魔とか、天使が実在するなんて。あ、でも天使は素晴らしい女性がいるに違いない。ぐへへ……

「まあ、納得できないのもわかるけど、事実なのよ。」

「はあ……それで部長」

「なにかしら?」

「それでその……なんでしたっけ? せ、せいくなんちやら」

セイクリッド・ギア
「神 器だよ。」

と、木場が補足をいれる。

「そうそう、その神 セイクリッド・ギア 器が原因でおれはその、堕天使に狙われたんですか?」

俺は、夕麻ちゃんのことの真相を探る。

「ええ。人間のみが宿すといわれているものよ。」

「歴史上の偉人のほとんどが宿したと言われ、人知を超えた力を行使できるんだ。」

「普通の神器は人間規模でしか影響しない。しかし、時には悪魔や堕天使の存在を脅かすほどの力を持ったものがあるです。セーイチ君がその例なのです。」

「そ、そうなのですか……」

俺は困惑した。あんな奴らが恐れるほどの力が俺に？おれは一瞬で殺されたんだぞ？別に生かしておいてもいいじゃないか。

「セーイチ。手を上にかざしてみてちょうだい。」

「え？」

「いいから。」

俺はリアス先輩に急かされておれは言われるとおりにする。

「眼を閉じて、あなたが一番強いと思う何かを心の中で浮かべて。」

「強い存在……」

「それを想像して、その人物が一番強く見える姿を思い浮かべて。」

「はい……」

「そして、その人物の最も強く見える姿をまねて。」

リアス先輩に言われた通りにやっついていく。

しかし、これは恥ずかしいことになりそう。

「力を込めてね。半端なことじゃだめよ。」

こういわれてしまった。しかし、やるしかない!!

「ドラゴン派あああああ!!!」

俺は声を張り上げて空孫悟のドラゴン派の真似をする。

カッ!!!

するとどうだ、俺の右腕が赤ともオレンジともとれる光が発現した

!!!

な、なんだ!?

光は形となっていく、俺の右腕には赤とオレンジ色の籠手のようなものが装着されていた?!!?

「な、なんじゃこりやあああああ!!」

思わず叫んでしまった。

そりやそうだ。

なんにもないところからこんなのが現れてくるんだからよ!!

質量保存の法則どこいった!?仕事しろよ質量保存!!

「でたわね。初めてにしてはすぐ出たわでね。あなた、筋は悪くな

いわ。それがあなたの神セイクリッド・ギア器よ。これからあなたの意思でいつでも

発言できるわ。それがあつたから、あなたは殺される羽目になったの。」

「これが……」

俺は自身の腕に装着された籠手を見る。

「殺されているあなたをこうやって生き返らせたの。あなたが生きたいって強く願ったから。ただし、悪魔としてね。」

バサツ！

すると、みんなの背中から蝙蝠のような翼が生えた。

俺の背中にも生えていた。みんなと同じような翼が。

「改めて紹介するわ。裕斗。」

「僕は木場裕斗。キミと同じ二年生だ。よろしく。ぼくも悪魔だ。」

「……一年生……搭城小猫です。悪魔です。よろしくお願ひします。」

「三年生、姫島朱乃ですわ。この部の副部長です。今後もよろしくお願ひいたしますわ。セイイチくん♪うふふ。」

「そして、私が彼らの主であり、悪魔、グレモリー家のリアス・グレモリーよ。家の爵位は公爵。よろしくね、セイイチ。」

こうして俺はとんでもない世界に足を踏み入れたようだ。

しかし、この学園の人気者の方たちと関わることとなった――

誠一SIDE OUT

No, XIX 　　く特訓！withシスターズく

イツセイSIDE

カーテンから朝日が差し込む。

俺はその明るい光によって、目を覚ました。

「ん、朝か。」

ここ最近は何かとゆったりした生活をしていた。

この日本という国に住んで辺りからだろうか。

平凡というくらいだ。

時々生まれ故郷あっちに帰っての超刺激的な生活をすることも中々気に入っていたが、こうした生活も悪くない。家に引きこもってひたすら研究に没頭した生活も好きだったな。今思えば。そのおかげで、社会に取り残されはしたが。

そんなゆったりとした生活の良さを噛み締めつつ、身体をおこし、リビングへ向かった。

「あ、にいにだ！」

俺がリビングに行くのと、驚いたことにすでにもう起きている者がいた。そのうちの一人が俺に気づいて俺のもとへトテトと寄って来る幼女。

「おお、おはよう、スイ。早いなあ、起きるの。」

「うん！どう？えらい？」

「ああ、偉いぞ。」

可愛らしく撫でて撫でてと言わんばかりのこの仕草に俺は耐えきれず、頭を撫でる。

さらに一人、こちらへ寄ってくる。

「ああー！スーちゃんだけずるい！にいちちゃん！私も！」
スイ同様に撫でてあげる。

「ああ。フローラ、お前もな。」

「えへへへ」

撫でると嬉しそうな顔をしながらほほ笑む。何とも可愛い。
くいつくいつ

すると、俺の袖を引つ張ってくる二人の幼女。

「むう……」

「にい……」

二人ともむくれた顔でこちらを見つめる。

そんな顔もかわいい。

「そんな顔するな。二人も撫でてやるさ。」

俺は袖を引つ張って不機嫌だった二人の頭も撫でる。おまけに頬をすりすりするスキンシップもとる。

二人は一瞬でご機嫌になった。

「四人とも、おはよう。みんな、人化の術を覚えたのか。」

「うん!!」

「ドライグのおねーちゃんが教えてくれたんだよ。とつても丁寧にね。」

「うん……クロ、とつても頑張った……」

みんな各々そう言った。4人とも今まで人化は出来なかったようだが、近頃の特訓で成果が出たようだ。みんなすごく頑張ったようだ。みんなこんなに幼いのに術を覚えている。少し前は全くできなかったのに。みんなすくすくと成長しているようだ。ドラゴンとしての力も日々、微弱ながら強くなっている。伸びしろは小さいものの、これは良いことだ。

俺は四人とも褒め、頭をなでる。

四人ともとても幸せそうな顔をしている。こんなに喜んでもらえることは嬉しいものだ。

最初に俺にトテトテと来た俺のことを「にい」と呼ぶこの子はスストリーム・ドラゴンイ。上級種の龍、水 龍の幼体だ。綺麗なマリンドブルー色の髪を持つ子だ。

次に俺のことを「にいちゃん」と呼ぶ緑色の髪の子はフローラ。こウインドミル・ドラゴンちらも上級種の龍、風 龍の幼体。

3人目に俺のことを「にい」と呼ぶこの子はクロア。上級種の龍、スキーム・ドラゴン暗影 龍の幼体だ。漆黒の髪を持つ大人しい子。そして頭が良い。

知能だけ見れば、8人のうち一番だ。

最後に俺のことを「にーさん」と呼ぶ子はヒカリ。上級種の龍、
閃光龍ライトレイ・ドラゴンの幼体だ。光り輝く金髪を持つ元気な子だ。

この子たちとルル、イズナ、アウローラ、ユキ合わせて8人が俺が預かっている妹たちだ。

フローラ、ヒカリ、スイ、クロアはルルたちよりも小さい。人間で言えば、3, 4歳つてところか。だからルルたちは少しお姉さんということになる。一番年長のユキ、アウローラはお姉さんと言うことを自覚しているのだろうか、よくこの子たちの面倒を早くから見ている。少し早熟な気がしないでもない。だが、こちらとしても凄く助かっている。

「そうか。おにーちゃん嬉しいぞ。お前たちが成長してくれて。」

俺がそう言つてあげると4人は喜ぶ。

そのしぐさは愛らしい。

「でも、私たち、この術使っていると眠たくなっちゃってドラゴンの姿に戻っちゃうの。」

「うん……クロアたち、時間制限付き……」

「そうだね〜早くユキおねーちゃんたちのようになりたい。」

この子たちが言うように人化の術はまだ制限付きのようだ。まだ体力だったりはその術の維持に追いついていないのだろう。

「大丈夫だ。ユキもアウローラもルルもイズナも最初はそうだったんだ。みんなもこれから頑張ればずっと人の姿でいられるさ。」

俺が少ししよんぼり気味な4人を励ます。

「ホントに……?」

「ああ。俺もお前たちをちゃんと成長させる。」

「やった〜」

「じゃあ、じゃあ、にーさんにも今日私たちの特訓見てほしい!」

「同意……いにも見てほしい。」

「ああ、分かった。」

4人ともがぜんやる気だ。俺としてもうれしい。

よっしゃ!!今日は特訓だな!

「あら、おはよう。イツセー、スイ、フローラ、クロア、ヒカリ。早

いわね。」

そうこうしていると、ドライブがリビングへ来た。

「あー！ドライブおねーちゃん！おはよう！」

「ドライブ姉ーちゃん！遅いよ！」

「ごめんね。ちよつとばかり眠かったの。」

ドライブはいつもスイ達4人と一緒に部屋で寝ている。いつもはドライブと一緒に起きるのだが、今日は違ったらしい。

「おはよう。ドライブ。いつも済まないな。この子たちの面倒みてもらって。」

俺は妹たちと戯れているドライブに礼を言う。

「ううん。いいの。私もこの子たちを見守るのが好きだから。可愛い妹が出来て私も嬉しい。それに、今こうしてこんな生活できるのもイツセーのおかげだから。イツセーの頼みだったからね。」

ドライブはホントに幸せそうな顔をしながら言う。俺は少しそのドライブの笑顔に見惚れる。しかしよかった。俺も少し無茶をしたかいがあつた。

「そうだ、ドライブ。今日もこの子たちの特訓、頼めるか？俺も一緒に行きたいんだ。」

「ええ。勿論喜んで。」

ドライブは快く承諾してくれた。

「なにになに〜みんなそろって何の話〜？」
とそこにルルが現れる。

そのすぐあとから、アウローラ、イズナ、ユキ、そしてティアがりビングへと入ってくる。

「おお、イツセーもドライブも起きていたのか。それで何の話をしていたんだ？」

「ああ、この子たち特訓の話だよ。今日も行こうって話をしてたところなんだ。」

「あつー！スーちゃんもフーちゃんもクーちゃんもヒーちゃんも人の姿になれたんだね！おめでどうー！」

ルルは4人に飛びつく。

「あつルルおねーちゃん……」

「く、くるしいよ……」

「あつごめんね……うれしくなっちゃって」

「凄いよみんな！」

「おめでとう。」

ユキ、アウローラ、イズナも4人をほめている。ちゃんと姉妹している。とても微笑ましい光景だ。

「なる程な。よく頑張ったな。」

ティアもそう言いながら、4人に近づいて撫でる。

「とまあ、こんな感じだな。ルル、ユキ、アウローラ、イズナ、お前たちも特訓に来るか？」

俺は4人に訊いてみる。ま、言うまでも無いとは思うがな。

「うん！」

「私もいきます。」

「そーだね。妹たちがこんなに頑張ったんだもんね。」

「私たちも負けてられないよ！」

お姉さん4人組もがぜんやる気だった。

「と言うわけなんだティア。ティアにもついてきてもらいたい。」

「ああ、もちろんいいぞ。まあ、いつものことだからな。」

ティアは妹たちとスキンシップを取りながら頷いた。

そんなこんなで今日は特訓日と言うことになったわけだ。



というわけで、俺たちはあのあとリビングから移動し、地下にあるドアからいつも訪れている特訓場所に行った。

此処は強力な結界で囲まれた場所。岩場、森林、草原、湿地だったりと様々な地形が設定されている。

そして、この結界で囲まれた修行場の入り口はこの小さな小屋にあるドアである。このドアは俺たちが住んでいる日本の別荘に繋がっている。ここに使われているのは父さんの魔法書に載っていた空間歪曲魔法の応用だ。この場所と別荘の地下のドアをつないだのだ。

俺の第一の故郷の実家にも同様の仕掛けがあるのだが、そのことは

また次の機会に紹介しよう。

「きゅうくくく」

そして、ドラゴンの姿となった妹たちがそれぞれの特訓に入っていた。

俺が今見ているのはドラゴンの姿になっているルルとイズナである。

ルルは自然の現象である火を操ることのできるドラゴン。赤色の小さな体軀はそれを表している。イズナは雷を操ることのできるドラゴン。青色のその体軀は蒼雷と言う名にふさわしい。

ルルは炎を操っている。身体の周りに炎を作ったり、炎の弾を形作って、飛ばしたりしている。また時折り口から炎を吹いている。炎の威力は中級悪魔にそこそのダメージを与えられる程度と言ったところ。まだ生まれてから5年しかたっていない幼体ながら上出来だろう。

イズナは雷を操っている。雷を身体に纏う、周囲に展開して雷の楯を作る、電撃を飛ばすなど、中々に上達している。威力はルルと同じか少し上だ。

龍の代名詞、ブレスも威力は上がりつつある。火のブレスはともかく雷のブレスは中々珍しいが。

ルルやイズナだけじゃなく、みんな上達している。ユキは主に氷、アウローラとヒカリは少し異なるが主に光、スイは水、クロアは影、フローラは風を操っている。ティア曰く、「今はまだ未熟ではあるが、将来的には龍王の攻撃力に匹敵するレベルまで高めることが期待できる。」とのこと。現役のドラゴンであり、龍王最強のティアが言うなら、間違いないだろう。俺としても、妹たちが将来の龍王候補となるのは嬉しいことである。

とは言っても、俺がこの子たちに教えてあげられることはそんなに多くはない。俺は魔法に関して自信があるが、ドラゴンの力の使い方は分かったものではない。ここは現役のドラゴンであるドライグやティアが教えた方がずっと良い。俺はあくまで二人のサポート的存在だ。

それにしてもドラゴン界ではこの8人の子たちはとても幸運なんだとか。龍王や天龍に力の使い方を教えてもらうなんてことはめつたにないらしい。まあ、ドライグに関してはより一層そうだろう。ここ1000年とちよつと、ドライグは滅んで神器になっていたのだから。これが公に出れば、とんでもないことだからな。

「少し休憩を取るか。」

開始して数時間後、ティアの一声で休憩を取る。

「ティア、ドライグ、みんなの調子はどうだ？」

俺は見えていない妹たちのことを聞く。

「こっちは上々だ。3人とも少し威力が上がっている。」

「私のところも。3人とも頑張っていたわ。」

ドライグとティアがそれぞれに言った。どうやら心配はないな。

「なあ、ドライグ、ティア。終わりになったら、俺たちも少しやらな
いか？」

俺はせっかくここに来たので提案をした。

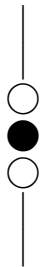
「ああ、私もそう言おうとしてたところだ。」

「奇遇ね。私も。」

どうやら思考回路は俺たち三人とも一緒だったらしい。

そんなわけで、修行の終わり掛け、妹たちが見る前で、俺たちは軽く戦った。ティアもドライグもさすが龍王、天龍としか言いようがない実力であった。昔よりも確実に実力は上がっている。ドライグは全盛期時代、聖書勢力大戦時の自分を大きく超えている。天龍が強いというのはもう昔の話になってしまった。ティアも同様だ。龍王最強である彼女はいまや過去の天龍レベルに到達していると言っている。そしてそれさえも超えようとしている。これからも強くなっていくだろう。

修行を開始してから半日が経過。日ももう落ちようとしている。いい時間なのでドアを通過して家に戻っていった。



家に帰った後、妹たちはドライグ、ティアと一緒に入浴している。家に帰った時間は午後6時だったので入浴にはちょうどよい時間だ

ろう。

俺はと言うと近くのコンビニで食べ物を購入している。ドライグ達は入浴中で一人で暇だったからな。

人数分のアイスを購入し、帰路に入る。

その途中、廃屋の横を通ろうとした時だ。

「きゃあーーーーー!」

女性の悲鳴が聞こえた。

しかし、それだけではなかった。

「(この気配……)」

女性の悲鳴が聞こえた位置から、見覚えのある気配がした。

悪魔の気配だった。それも二体。

俺は異形の者たちが関わっていることなので廃屋の中に入っていった。

「ヒヒヒヒ、さしぶりの獲物だぜ。」

「ああ。この女も中々のものじゃないか。」

「う……うう……た、たすけ……」

「ひゃひゃひゃ、助けなんてこねえよ。ここはちよつとした結界を張っているんだ。人なんて近づいてこねえよ。」

中に入ると案の定二匹の悪魔が女性を襲っていた。このような光景は到底許せないな。心底うんざりする。

俺は女性に対するこの酷い仕打ちを見逃せず、堂々とこいつらの前に姿を現す。

「ん？何故ここに人間が？結界があつたはずだ。」

「おい、人間おまえはお呼びじゃねんだよ。」

チンピラみたいな言葉遣いをする二匹の悪魔。

俺は構わずこの二匹の悪魔に問う。

「お前らこそ、ここで何をやってるんだ？」

「何って、お前が見ての通りさ。さあ、貴様のことは見なかったことにしてやる。さあ、帰った帰った。」

悪魔どもは余裕そうに言う。

「そう言うわけにはいかないな。特に……貴様ら悪魔たちはな。」

「!? 貴様……こちらの世界を知るものか……何者だ……？」
二匹の悪魔は俺が正体を言い当てると咄嗟に顔の色が変わる。
すこし焦りもあるようだ。

「俺が何者かは知らんでいい。ただの一般人だ。」
こいつらに言う必要もないので適当に言っただけ。

「一般人がこの結界を通るかよ……」

「ふん……不気味な奴だ……」

二匹は俺を警戒する。

「貴様らはいわゆるはぐれだろ？ ここには上級悪魔(笑)居て、そいつがここを自身の領地とかほざいているぞ。貴様らいいのか？ その上級悪魔に刈られるぞ？」

俺はこいつらにとっては都合が悪い情報を出す。

「なに!? 聞いていないぞ!？」

「こんなところに上級悪魔が!？」

なんだこいつら、知らなかったのか？

というか、こいつら相当うるたえているな。

「ど、どうする?。」

「んなもん一つしかねえ。ズラかるぞ。」

「わかった。」

と、こいつらの答えが出たらしい。

こいつらは我が物顔で逃げようとしている。

「じゃあな、人間。感謝するぜ。」

「ホントなら殺していたところだが、礼だ。殺さないで置いてやる。」

とカツコつけながら俺の横を去っていく。

しかし、そんなことはさせない。

ゴッ!!

「グハあ!!!」

俺は振り返って悪魔に攻撃を与えた。その悪魔はぶっ飛び、廃屋の壁にぶち当たった。

「テメツ！ゴハア!!」

引き続き二匹目の悪魔も攻撃する。

「誰が逃がすといった？ 貴様ら悪魔はここが墓場だ。」

俺は吹っ飛んだ二匹に一応宣戦布告する。

「ゴホツゴホツ・・・貴様・・・こんなことをして、生きて帰れるとでも？」

「不意打ち程度で調子に乗るなよ？ 人間。」

悪魔どもは立ち上がり、こちらを睨んでくる。相当切れているな。

「ふっ、馬鹿な奴だ。折角見逃してやろうと思っていたのにな。」

「しゃべってないでさっさとかかってこい。」

「・・・後悔するなよ、人間・・・ふん!!」

悪魔は魔法陣を展開し、魔力攻撃を放ってくる。

見たところ、中級以上だな。

こちらも防御結界で防ぐ。

「なるほど。口だけではないようだ。ならー！」

悪魔どもの腕に見覚えのあるものが出現した。

「貴様ら。それは・・・」

「ふっ驚いたか？ これは神セイクリッド・ギア器トウワイス・クリティカルの龍スターリング・グリーンの手だ。」

「こちらは緑 光 矢だ。」

なんと、どちらの悪魔も神セイクリッド・ギア器を所有していた。

「はあ!!」

トウワイス・クリティカルの 手を持った悪魔がこちらに肉弾戦を挑んでくる。

両手に炎を纏いながら。

「さらに俺の神器は亜種だったらしいな。炎もだせんだよ!!」

俺はことごとく攻撃をさばいていく。

緑色の矢も後ろからとんでくる。こいつらの連携攻撃は中々に洗練されている。

「だが、甘いな。」

「何!? グハあ!!」

俺は拳に魔法を纏わせ、鳩尾を殴りつけ、蹴り飛ばす。

矢を放ってきた悪魔には魔法で波動を食らわす。

「く、クソ!? 何故だ・・・? この俺が人間に劣るだ?!」

「ゴホツゴホツ……何だこれは……？この強烈な痛みと苦しみは……」

二体の悪魔は血を吐きながら苦しみます。

何故かわからないようなので答え合わせをしてやる。

「苦しいだろう？貴様ら悪魔にとっては。どうだ？俺が開発した光魔法。貴様らの天敵、天使共が操れる光力と同じような力だ。」

「光魔法だと……?!」

「貴様、まさか教会からの刺客か！」

光と言った言葉から見当違いなことを言う悪魔。

「全く違うな。」

俺はとどめの魔法を展開する。

「な……なんだ……それは……」

絶望する表情がうかがえる。

「光魔法、^{スビデア}光の槍。」

天使共が使うただの光力の槍を魔法で発現させ、悪魔どもに向けて放つ。俺の全力の1パーセント以下の力だ。もつと上位の威力の槍の魔法もある。それでもこいつらを消滅させるには十分だ。

ザシユツ!!

「ゴボオツ!!」

槍は悪魔の体を穿つ。悪魔は血一滴遺さず消滅した。

「終わったか……」

処理を終え、襲われていた女性のもとへ行く。

「大丈夫か？しっかりしろ。」

「はい……ありがとうございます……」

どうやら大丈夫なようだ。しかし、服をめちやくちやに破られていたので、魔法で修繕し、着せてあげる。

と、少し気になることがあった。

「ん？君はもしかして、妖怪の血が混じっているのか？」

この少女からは異形の気配がした。

「はい……妖狐と人間のハーフです……と言ってもそんなに力はありません。母はただの妖狐で父は普通の人間でした。」

「そうか・・・」

この少女の話を聞けば、両親は行方不明。悪魔から逃亡中だったらしい。そのさなか、はぐれに遭遇してしまったらしい。

「あ、あの・・・私は・・・これからどうすれば・・・」

少女はあまりにつらかったのか、泣き出す。

「泣かないでくれ。わかった。取りあえず、行くところが無いなら、家に来い。」

俺がそういうと、少女は驚いた顔をする。

「え？いいんですか？」

「ああ。構わない。少し騒がしいけど、それでもいいなら。」

「い、いいえ。それでもお願いします。」

「ん。わかった。立てるか？」

「はい・・・」

俺は手を差し出し、少女は俺の手を掴む。少女はまるで生まれた小鹿が初めて立つかの如く、弱弱しくたった。腰が抜けるほど怖かったのか。

「あ、あの・・・のまま手を繋いでもらっていいですか？」

「ああ、構わない。」

「ありがとうございます・・・」

少女は少し嬉しそうにしながら歩く。

「俺はイツセー。よろしくな。普通に名前で呼んでくれて構わない。」

「私は伽耶です。よろしくお願いします・・・イツセーさん。」

俺はとりあえず、このハーフ妖狐を保護することになった。

しかし、ティアとドライグにみっちりとしごかれた。

ナンデ？

イツセーSDIE OUT



誠一SIDE

おっす！俺は誠一。

リアス部長の下僕悪魔になって悪魔家業を終えて部室に帰還した

ところだ！

そして、ゆくゆくは上級悪魔になってハーレムを築くんだ!!
実はここに来る前にとある子と出会った。

そのこの名はアーシア。イタリアから来たらしい。
なんでも、この街の教会に赴任することになったんだって。

しかし、迷っていたので案内した。あの教会、どう見ても使われて
ないようなところだったがな。

それにしても穏やかで優しい子だった。また会えるかな。
そんなことを思っていると、部長に厳しいお怒りをくらう。

「教会に近づいちゃだめよ。」
部長はいつになく険しい。

「いい？教会は私たち悪魔にとっては敵地。踏み入れることはすな
わち領地侵犯になるの。悪魔と天界の間で問題となるの。いつ光の
槍が飛んできてもおかしくないのよ？教会の関係者にも関わっちゃ
ダメ。悪魔祓いは本当に厄介なの。神器保有者セイクリッド・ホルダーともなれば死と隣り
合わせとなるの。セイイチ。」

「は、はい。」

あまりの迫力に俺は気圧される。

「悪魔祓いを受けた悪魔はね、完全に消滅するの。普通の、人間とし
ての死と違うの。無に帰してしまう・・・それがどういうことか分
かる？」

「……………」

俺は無言になるしかなかった。

「ちよつと熱くなつてしまったわね。ごめんなさい。とにかく、こ
れからは軽はずみな行動はしないでちょうだい。」

「分かりました。」

俺はこのリアス部長の言葉を重く受け止める。こんなに必死に
なつてくれてるんだから。

「あらあら。お説教は終わりました？」

「朱乃さん。」

リアス先輩のお説教が終わった直後、朱乃先輩が来た。タイミング

良いな。

「朱乃、どうかしたの？」

「部長、アガレス大公から討伐依頼が届きました。」

部長の顔が曇る。どうやら何かが始まるようだ――

○●○

はぐれ悪魔。

そんな存在がいるらしい。

主のもとを離れた悪魔。

なるほど。あの時の堕天使のおっさんが言っていたはぐれ悪魔ってのはそういうことか。納得。確かにリアス部長の近くにいなかったな。

力に溺れ、いろんなところで好き勝手やっているらしい。

そのような存在に関しては滅ぼしても構わないという三大勢力間でも暗黙の了解があるらしい。

俺たちはそのはぐれ悪魔がいる廃屋の近くに、部長、朱乃さん、木場、小猫ちゃんと共に来た。

ちなみにはぐれ悪魔のことは木場から教えてもらった。

「みんな、敵と遭遇するわ。気を引き締めて。」

「二はいい、部長。」

俺含め、全員の顔が険しくなる。

俺たちは警戒をしながら、そのはぐれ悪魔が根城にしている廃屋に侵入していった。

「.....」

その廃屋は誰もいなかった。静かだった。嵐が過ぎ去ったあとのように。

「部長、誰もいませんよ。」

俺は部長に言った。

「おかしいわね。確かに大公から承った依頼はこの場所のはずなのに。」

「部長、これを。」

朱乃さんが何かを見つけたようだ。

「これは……」

「戦ったあとね。あつちの壁にも何かが凄い勢いでぶつかった跡があるわ。」

「魔力痕はありません。」

「あちらには血の跡がありました。しかし、致死量の物ではありませんでした。ここで死んだとは考えにくいです。」

「どうします？ 部長。」

部長はこの残った後から考えて、判断する。

「朱乃、大公には私から直接連絡するわ。」

「わかりました。」

「みんな、取りあえず、今日は帰っていいわ。獲物が死んだのか、逃げたのかは分からないけど、いないなら仕方ないわ。ただ、何者かが戦ったのは間違いないわ。これからは、はぐれ悪魔に加え、その者も見つけたら連絡して頂戴。私の領地に侵入した者を捕まえるのよ。」

「了解！」

今日は戦闘することではなく、帰ることとなった。

誠一 SIDE OUT



No, XX く友達く

????
SIDE

……次の宿主に移ったかな。

今回の宿主は……まだ僕を覚醒させてないか……
見たところ普通の人間らしいしなあ。

まあ、才能はゼロってわけではないとは思うけど。とは言っても歴
代の中でも低い方だしなあ。

へおいおいおい、なーに弱気になってんだよ、????

僕がボーっと宿主の生活を見ていると後ろから僕の名を呼ぶ声
がした。

振り向くと、一人の少年がいる。桜色の髪をもつ少年だ。

『ああ、??いやね、今回の宿主には期待できそうにないなあって思っ
てさ。』

へまあ、確かに今の時点では強くはないな。仕方ねえさ。フツの
学生だったからな。今は悪魔ってやつに転生してるが少しマシに
なった程度だ。く

『そうでしょ?』

へでもよ、????。弱くてもこれからの鍛え方次第でわかんえぞ? 最弱
からあそこまで登った奴もいるじゃねえか。く

??が言っているのは歴代最弱の宿主のことだね。その宿主は当時
の予想を覆し、戦いによって歴代で二番目までに力を上げたんだ。あ
れは正直僕もおどろいたなあ。

『それはそうだけどさあ……』

??にそう言われるが、どうにもそうは思えない自分もいた。

へんだよ、????。もしかして、まーだぬぐい切れてねえのかよ。女々し
いぞおい、????。そんなことじゃあ、実際にあつた時にも、がっかりさ
れるぞ。く

??に呆れられる。

『うるさいなあ。だつてしょうがないじゃないか。僕はあのひとに
憧れて、ここまで来たんだよ?僕にとってはホントに憧れなんだよ。』

僕はそう言い返す。女々しいなんて言われては僕だって黙っちゃ
いられない。絶対にね。

へそうだったな。何って言ったけ？そいつ。たしか、すっげー強
かったんだろう？」

『そうだよ。僕とは比べ物にならないほどだったよ。いつも戦って
いたんだ。僕はそんな姿に憧れた。』

へたしかく二天龍だっけか？」

『うん。そうだよ。』

僕はそのひとの姿を思い出す。

赤い体躯に凜とした雰囲気をもつ、ドラゴン。

僕が神器に封印されたときはかなり絶望した。もうこれから会え
ないのかと。あつたとしてもこんな様だ。きつと蔑まれるだろうと。
しかし、そのひとも僕と同じく神器に封印されたって聞いたときは我
を取り戻した。

それから月日は流れ、神器にされてだいぶたつ。

だというのに、そのひとにはいまだ会えていない。そのひとの神器
の宿主はいつも赤と白の運命のごとく戦ってはどちらかの宿主が
散ってるらしい。

しかし、ここ300年は二天龍の争いの話を全く聞かない。おかげ
で、僕の宿主が白い龍と戦う羽目になってる事も多い。白い龍は白
い龍で『赤いのが一向に姿を現さん』って気が立ってるらしい。
ほんとに、どこにいるの？なにをしているの？

ドライブさん

????
SIDE OUT

誠一SIDE

「はぁー」

よう、誠一だ。

俺今、絶賛サボり中さ。

今日は平日。もちろん学校もある日だ。

しかし、俺は何となく今日は学園に行く気になれず、父さんと母さ

んには悪いが仮病を使って休んだ。そんなもって今は近くの公園に散歩しがてらボーっとしながらため息をついている。

「アーシア・・・」

俺の口から不意にある少女の名前がこぼれる。

この間この公園で出会って教会まで道案内した子。

俺はその子との出来事で今こうしてサボっているのだ。

昨日――

『朱乃！セーイチを回収して本拠地へ帰還するわ！早急にジャンプの用意をお願い!!』

『はい!』

『待つてください!!部長!!あの子も!あの子も一緒に連れてってください!!』

『無理よ。この魔法陣を通して移動できるのは悪魔だけなの。さらにこの魔法陣は私の眷属しかジャンプは出来ないわ。』

『そんな!!』

『セーイチさん。私は大丈夫です。私は・・・殺されませんから・・・』

『でも!アーシア!!』

『セーイチさん。また、会いましょう――』

俺はアーシアを。目の前で泣いている女の子を、助けることも出来ず、俺はまんまと逃げた。逃げる事しか出来なかった。アーシアに助けられもしたんだ。あんなにか弱い女の子にすら、助けられる。男が聞いてあきれるぜ。俺は自分を恨んだ。女の子一人すら助けられない己の弱さを。

ズキッ

「いってて・・・」

俺の右足が痛む。

昨日やられた傷跡がまだ完治していない。

この足では悪魔稼業もまともにできず、部長から休むように言われたんだ。

朝から何も口にしていないので腹が鳴る。

俺は朝からずっと考えていた。

俺の、悪魔としての生活、アーシアのこと。

どうやって救おうか……

しかし、そのための力が無い。

じゃあ、強くなるしかない。

でもどうやって？

あつちは子供のころから戦闘訓練なるものを叩き込まれている奴らだ。とうぜん容赦がない。平気で人間をメツタ切りにできるイカレタ奴らだ。そんな奴ら相手に対抗できる術がない。神セイクリッド・ギア器があつてもこの様じゃあなあ……

筋トレか……それとも木場のやつに剣術でもならうか……

あれこれと思い浮かぶ方法。

いまいちしつくりこない。しかし、悩んでいる場合じゃない。とにかく思いついたことをやろう。

それにしても、あの神父。名前は知らねえがぜってえー許さねえ。ぶちのめしてやる。

俺はそう決意し、重い腰をベンチから上げる。

そんな時だ。視界に金色が映りこんだ。

ハツと思つて顔を向けると見知った金髪の少女が立っていた。

あちらも俺のことに気づいたのか、驚いていた。

俺も当然驚いた。よもやこんなところでまた会えるなんてな。昨日の今日だというのに。

「アーシア……」

「セイイチさん……また、会えましたね。」

アーシアは嬉しそうに言った。

「ああ、そうだな。元気そうで何よりだ。」



「アーシア、これは包み紙をこうやって、少しずつずらしながら食べるんだ。」

ハンバーガーをマジマジと見るだけのアーシアに俺は苦笑しながらお手本を見せた。

「そ、そんな食べ方をするんですね！」

アーシアは不慣れながらも俺が見せたお手本をそのまま真似る。まあ、初めてにしては上出来だ。

というか、そもそも今ではメジャーなファストフードを食べるどころか注文すらしたことないとはな。珍しいものだ。

「お、おいしいです!! テレビでしか見たことなかったので食べてみたかったんです!!」

「そうか、それは良かったよ。」

嬉しそうに言うアーシア。そして、おいしそうにハンバーガーにかぶりつく。

俺はそんな愛らしい姿を見ていながら、俺もハンバーガーを食した。

お互い、ハンバーガーを食べ終えたところで、アーシアに言った。

「アーシア、今日、時間あるか？」

「はい、大丈夫ですよ。」

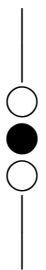
「じゃあ、遊ぶか。」

「え、遊ぶ、ですか・・・?」

アーシアは訝しげに言った。

「まあ、とにかく俺についてこい!」

俺はいまだにどうしていいかわからないというようなアーシアの手を引っ張ってこの街へ駆け出して行った。



「あー、少しはしやぎ過ぎたな〜」

「そ、そうですね・・・疲れましたあ〜」

俺たちは互いに苦笑しながら道を歩いている。

ゲーセンでカーレースしたり、クレインゲームで景品を取ったりと、はしやぎまくった。

他にもいろいろな店に赴いた。

そのたびに、アーシアの反応は新鮮で、まるで初めて世界を知った少女のようだ。

「おつとつと、いててて・・・」

ふいに訪れた足の違和感と痛みに俺はつまずきそうになる。

「……セーイチさん、けがを？もしかして、先日の……」
アーシアの表情が曇る。

せつかくの笑顔を台無しにしてしまった……
せつかく楽しい時間を過ごしていたというのに。

「ズボンをあげて、患部を見せてください。」

アーシアは俺の傷を見てくれようとしている。

俺は罪悪感に駆られながら、アーシアの言う通り、患部を見せた。
アーシアの手の平から緑色の温かい光が発せられる。

その光は俺の傷をいやした。

「どうでしょう？？」

「凄いぜーアーシア。違和感と痛みがなくなっただけ！」

俺は少し大げさに小走りをその場でする。

彼女を心配させたくない。

俺のこの姿を見ると、彼女も嬉しそうに微笑んだ。

「スゲエよな、アーシアは。その力。神セイクリッド・ギア器だよな。」

「はい、そうです。」

やっぱりな。普通の人間が手をかざしただけで傷なんて治せるわけないもんな。

「俺も、神セイクリッド・ギア器を持っていき。大して役には立ててないけど。」

俺の告白にアーシアは目を丸くする。

「セーイチさんも……全く気付かなかったです。」

「俺のはまだ何なのか不明なんだよ。それに比べ、アーシアの力は凄いで。人から悪魔まで、ほとんどの者を治せるんだから。」

アーシアはとても複雑そうな表情を浮かべ、うつむいてしまった。
そして程なくしてアーシアの頬に一筋の涙が流れる。

それは一度限りではなく、徐々に流れ出し、アーシアはその場で泣いてしまった。

俺、何か彼女の琴線に触れるようなことを言ったのだろうか？

俺はなぜ泣いてしまったのかわからず、取りあえず座れる場所にアーシアを連れて行った。

「アーシア……」

「セーイチさん……私のお話、聞いて、くれますか……？」
「ああ。聞くよ。」

それから、アーシアの口から語られたのは、『聖女』として祭り上げられ、墮とされた哀れな少女の話だった。



「そんなことが……」

俺は絶句した。

なんだよそれ。

ありえねえだろ!!

勝手に祭り上げといて……何が聖女だ!!

俺はアーシアに対して行った教会の行動に怒りを覚えた。

「それはきつと、私の信仰がたりなかつたのです。」

なのに、アーシアは自分のせいだという。

俺は彼女に掛けるべき言葉さえ失う。

「これも主の試練なのです。私が、世間のことを全く知らないシスターですから。こうして修行の機会を与えてくれてるんです。」

アーシアは自分に言い聞かせるように言う。

なぜ、そうまでして……

「お友達もいつかたくさんできると思ってますよ。夢なんです。お友達と一緒に、服を買ったり、本を買ったりして……」

アーシアは涙をあふれさせていた。

彼女はやはり、我慢してきたのだろう。

ずっと、自分を押し殺してきたのだろう。

なんで、神様はこんなにも従順な信徒を救わないんだ……
神様よ……あんたがやらないなら、俺がやってやる!!

「アーシア。」

「はい……」

彼女の名を呼んだ。

「アーシア。俺たち、もう友達だろ?」

「え?」

アーシアはきよとんとしていた。

目に涙を浮かべながら。

「俺は悪魔だけど、アーシアの友達になる！」

「……どうしてですか？」

「どうしたもこうしたもない！今日、俺とアーシアは一緒に遊んだ。話した。笑いあった。これを友達と言わずして、なんとするって話だ！もちろん、悪魔の契約なんかじゃねえ!!俺たちは本当の友達になるんだ！ややこしいことは全部抜きだ！話したいときに話し、遊びたいときに遊ぶ！どうだ!?!」

我ながら残念極まりない会話をしていると思う。

だが、アーシアは口元を手で押さえながら涙を溢れさせていた。

「セーイチさん。私、世間知らずで日本語もしゃべれない、友達と何を話せばいいかもわからないですよ？こんな私でも……」

アーシアが言い切る前に俺はアーシアの手を強く握ってこういつてやった。

「世間知らずなら、俺が街へ連れて行ってやる！日本語も文化も俺が教える！それに俺たち、こうしてすでに話せているじゃないか。それでいいんだよ。」

「……私と友達に、なつてくれますか？」

「ああ、もちろんだ！これから宜しくな。アーシア。」

「はい！」

アーシアはうれし涙を流しながら、頷いてくれた。

これでいい。

俺たちは友達になった。

ずいぶんと恥ずかしいことを言ってしまった。しかし、アーシアの笑顔を勝ち取れたのなら、この程度の事なんでもない。

「それは無理な話よ。セーイチくん。」

この雰囲気の水を差すような第三者の声が俺の耳に入った。

その声があった方向を向けば、見知った顔があった。

決して忘れはしない。

「……」

俺は無言でその者を睨んだ。

「生きていたのね。人間はやめたようだけど。」

「殺しておいて、よく言うよ。」

「あら、仕方ないじゃない。殺す必要があったのだから。」

俺たちは軽口をたたき合う。

おれってばどうかしてる。

殺された相手にこんな会話するなんて。

「レイナーレ様……」

「アーシア、困るわ。勝手に歩き回って。」

俺をのけ者にして、アーシアとレイナーレだっけか、二人は会話をする。

「おいおい。レイナーレ。何の用だよ。」

俺は少しキレ気味に言った。

「あなたには用はないわ。それと、下級悪魔ごときが私の名前を呼ばないで。」

こいつはどこまでも俺を見下してくる。

全く、本性は嫌な奴だ。

「私……あの場所には戻りたくありません。」

「何を言っているの？アーシア。私たちの計画に、あなたは必要なの。私と一緒に帰りましょう?」

レイナーレは近づいてくる。

「おい、まてよ。レイナーレ。アーシアに近づくな。」

俺は怯えるアーシアの前に立つ。

「私の名前を呼ぶなど言った。あなたには関係のないこと。邪魔するなら……また殺すわよ?」

レイナーレはこちらに殺気を飛ばしながら言う。

レイナーレは手に光を集めだした。

何度も見た、光の槍だろうか。

「何度も、何度も、同じ手で死ぬわけにはいかねえよ!!こい!!

セイクリッド・ギア
神器!!」

俺は天に向かって叫ぶ。

俺の右腕を赤とオレンジの光が覆い、籠手へと変貌していく。

「ふっ、ふふふ」

俺の神セイクリッド・ギア 器を見たレイナーレは突然笑い出した。

「何が可笑しい?」

「あなたの神セイクリッド・ギア 器はね、ありふれたものなの。龍トゥワイス・クリテイカルの手。所有者の力を倍にするものだけど、あなたごときの力が倍になったところでそう変わらないわ。」

なんだと・・・

俺はそれを聞いて絶句した。

俺のは、ありふれたものだったなんて。

じゃあ、なぜ、部長は俺を・・・

いや、そんなことは後回しだ!

ないよりは、マシだ!!

「おい! 神セイクリッド・ギア 器! 動きやがれ! 俺の力を倍にしてくれんだろ!!」

俺は神セイクリッド・ギア 器に向かって叫んだ。

しかし、何も起きない。

何故だ!

なんで何も起きねえ!

あいつが言ったことが正しければ、俺の力は上がるはずだ!

グサツ!!

「ぐっ!」

俺の腹部に光の槍が突き刺さる。

「ははははは! まさか、神器の力も使えないなんて! 滑稽だわ。わかった? 私との差は埋められるわけないの。」

「セーイチさん!!」

アーシアは泣きながら俺のもとへ駆け寄る。

アーシアはすぐに治療してくれた。

「サンキュー、アーシア。」

「大丈夫ですか?」

「ああ。」

同じ結果になってしまったが、アーシアが居てくれたおかげで死なずに済んだ。

「アーシア。その男を殺されなくなかったら、私と一緒に来なさい。次はホントに殺すわよ?」

レイナーレの眼は本気だった。

いくな、アーシア……

行つてははダメだ……

「わかりました。レイナーレ様と一緒にいきます。だからこれ以上は……」

「良い子ね、アーシア。」

アーシアはレイナーレのもとに行つた。

「アーシア!!」

「セーイチさん。今日はホントに、ありがとうございました。楽しかったです。」

レイナーレはいやらしい笑みを浮かべた。俺が惚れたあの笑顔なんかとは、天と地の差だ。

「さて、アーシア!!俺たちは、友達だろう!!」

俺はアーシアに叫んだ。

「さようなら。」

しかし、その叫びは届かない。アーシアはうつむきながらただ一言。さようなら、と言つた。

「うつふふ、命拾ひしたわね。下級悪魔。アーシアに感謝することね。」

レイナーレは最後まで俺を見下しながら空の彼方へ去っていった。

「……………」

ちくしょう……

ちくしょおおおおおおおおおおお!!

守り切れなかった。

こんなんじやあ……これじゃだめだ!!

「ちくしょおおおおおおお!!」

ドゴツ!!

俺は叫び、コンクリートに拳を打ちつけた。

コンクリートには、ひびが入っていた。



イツセーSIDE

よう、イツセーだ。

今、ちよつとした不審者に後をつけられている。

「……………」

「ふふふ、イツセーよお前もモテモテだな。」

ニトラがからかってくる。

「(冗談はよしてくれ。あんな男に好かれても困る。ひじょーに困るだけだ。)」

「ははは。冗談さ。しかし、このままにはしておくまい?」

「(当然だ。少し、遊んでやるさ。)」

男は……ついてきている。俺との距離が常に一定だ。まあ、雑魚にしてはまあまあだな。

やつは墮天使。この前に見たあの女の墮天使の連れか?

どちらにせよこちらをつけている以上、こちらのことを少しは分かっているのか。

俺は歩くのをやめ、立ち止まった。

「おい、その不審者。さつきからこそこそとつけてきて、何の用だ?」

俺は勝負を仕掛ける。

「いやはや、気づかれてしまったか。こちらとしては気配を隠していたのだがな。」

男はやれやてと言った感じで正体をこちらに晒してきた。

「あれで隠していたつもりならもつと腕を磨け、墮天使。そこが知れるぞ。」

「中々言うではないか。人間。貴様だな?こちらの世界を知った人間と言うのは。先日、この近くの廃屋ではぐれ悪魔とそれらしい魔力反応を察知した。それと、もしかすれば神器も所有している可能性もある。」

俺の挑発には乗らないか……

こいつが言っているのは先日、廃屋ではぐれ悪魔との戦闘のことだ。

まさか、察知しているとはな。

はてさて、少しはやるようだ。

次からは結界を張ってからにした方がよさそうだ。

「何だ、気づいていたか。それと神器と言うのはこれか？」

俺はこの墮天使の力量に感心し、あえて神器セイクリッド・ギアを見せてあげることにした。

「ほう、可能性の範囲の話だったが、ホントに持っているとはな。」俺の左腕には籠手が装着されている。

「ふん。しかし、龍トウワイス・クリテイカルの手か。残念ながらありふれたものだな。」

こいつ、もしかして神器セイクリッド・ギアの知識が無いのか？

これはそんなちんけなものじゃあない。

ブーステッド・ギアロンギヌス、赤龍帝の籠手、神滅具なただけだな。

だが、こいつの言っていることもあながち間違いではない。

まあ、そのことはまたの機会に。

「しかし、そんなありふれた神器セイクリッド・ギアといえども、貴様はあの下級悪

魔よりも力量はある。少しでも脅威になりえるものは排除することになっている。と言うわけで、倒させてもらおう。」

「そうかよ、かかってこいよ。」

俺は指をクイックイツとしながら挑発した。

これにはさすがに頭にきたようだ。

「人間が、なめるなよ!!」

墮天使は光の槍を作り、こちらに向かって投擲してくる。

下級墮天使の割には光力はあるらしいな。

放たれた槍はどんどんと近づく。

奴は決まった、みたいな顔をしている。

だが……

キーン

「何!?!」

俺に放たれた槍は俺に届く前に俺の目の前で光の粒子となり、消失

した。

「バカな、そんなことが！」

墮天使はそうとう動揺している。

「おい、どうした？まさか、あれで終わりなんていう最高につまらないことはないよな？」

俺はさらに挑発をする。

「人間!!後悔するなよ!!貴様は必ず殺す！」

墮天使は顔を歪ませ、さらに槍を俺に向かって放つ。

だが、その槍は俺に一本として届くことは無く、すべて俺の目の前で消失する。

「バカな!!なぜ！何故届かない!!?!人間ごときに!!なぜ!!」

墮天使は相当困惑している。

これはもちろん俺が発動させている魔法だ。

どんなものかはまたの機会に。

「はあ、はあ、はあ……」

「どうした？もう終わりか？」

肩で息をする墮天使。

「クソ!!クソ！クソ!!死ねえ——!!!」

激昂した墮天使はここ一番の威力を持つ槍を放ってきた。

やりやあ出来るもんだな。これなら、上級悪魔にも致命傷与えられるんじゃないか？

バシィ!!

「なんだと!!」

俺はそんな槍を素手でつかみ取った。

「俺の最高の渾身の槍を素手でだど!?ありえない。これは悪夢だ……」

「ほれ、この槍、返すぞ！」

俺は掴んだ槍を投げ返した。俺はあえて墮天使の左腕を狙った。手加減をして頑張ればこの投げ返した槍を避けられるくらいの速さにしてあげた。

ザシユツ!!

「ぬぐっ?!?!」

残念ながら奴は避けられなかったようだ。

俺の投げ返した槍は墮天使の左腕を吹き飛ばし、空の彼方へ飛んでいった。

墮天使の左腕の肘から下がなくなっている。

血も噴出している。

「くっ貴様……よくも……」

墮天使はこちらを睨んでくる。

「自分の攻撃がそっくりそのまま帰ってくるのはどうだ？珍しい体験だろ？それで？まだやるか？なんなら付き合おうぜ。」

俺は少し殺気を奴にぶつけながら言った。

「くっ……やむを得ん。」

奴は脱兎のごとく、消えていった。

「軽い運動にもならん。」

「仕方ない。あの程度ではな。」

俺はそこらへんに飛び散った汚らわしい血を除去し、帰路についた。

イツセーSIDE OUT

NO, XXI く強さと力く

イツセーSDIE

「ふっ、ふっ、ふっ……」

よう、イツセーだ。

最近出番がない？

おいおいおい、待て待て待て。そんなことはない。

まあ、それは置いといてと。

俺は今、修行中だ。

倒立しながらの腕立てをやっている。

今は朝の5時くらいだ。早朝トレーニングを行っている。

ティアやドライグ達はまだこの時間には起きていない。妹たちも

この時間にはさすがに起きてはない。

そんなわけで言うわけで超久しぶりにソロトレーニングと言うわけだ。場所はこの別荘の庭で行っている。

「ふふふ、こんな日も久しぶりかな。」

俺が腕立てをしていると、ニトラがそう言う。

「そうだな。今までは、訓練相手が居たり、妹たちの鍛錬を見たりしていたからな。」

俺がティアたちに出会う前は俺は現実の世界じゃあいつも自分一人で鍛錬を続けていた。精神世界ではいつもドライグやニトラ、ベルザードさんやエルシャさんもいたからそこでは相手との実戦だったかな。

「ふっ、懐かしいな。イツセーが研究を終えたころか。あの時はあの時で色々あった。」

俺は昔のことを懐かしみながら腕立てを続ける。

500回に到達したら、次は片手で倒立しながらの腕立てに入った。しかし、ただそれだけでは物足りない。

「よし、ふっ！」

俺は自信に重力魔法をかけ、自身にかかる負担を増大させる。ただトレーニングをしても何もプラスにならないからな。

この状態で今度は500回片腕だけで腕立てを開始する。

「魔法使いでこんなことをするのはこの広い世界といえど、イツセーただ一人だけだな。」

ニトラが苦笑しながら言う。

「確かにな。」

今の魔法使いたちはそう昔と変わりはない。

自分の人生を魔法の研究に捧げる。自分の研究するテーマを決め、それを突き詰めるのだ。かくいう俺も、長い時間を研究に捧げた。

「だが、魔法だけじゃあニトラには勝てない、そうだろ？」

「当然だ。まだまだイツセーには負けないさ。」

ニトラはえっへんと言った感じで嬉しそうに言った。

今の俺の目標はニトラに少しでも近づくことだ。魔法の神にして、ドラゴンであるニトラに勝つには魔法のみならず、自身の体も鍛えていける。こうでもしなければニトラに近づけないのだ。

元々、俺のこの習慣は父の教えから来ている。その教えが、今でも生きている。父さんには感謝しなければならない。

ニトラの壁は余りにも高い。いや、もはや高いという言葉だけでは表せないほどだ。全く、強すぎにもほどがある。

「とは言え、イツセー。お前は昔とは比べ物にならないほど強くなったのは明らかだ。いまや、お前に完勝出来る者を探す方が困難なくらいにな。」

と、ニトラから称賛される。

「それはこの世界だけの話だろ？ニトラ。」

俺は素直に喜ばないでいた。

「それはそうだが、それでも私は十分すぎるほど成長したと言い切れる。それに、ライバルがいるお前は非常に恵まれているぞ。」

「確かにそうだな。俺には、強力なライバルがいるからな。あいつらもいたから今の強さにも到達することができたからな。」

強くなるための方法。それは強くなったやつの数だけ、あると思う。

元からその強さを持つ神仏。

力の塊であり、力を象徴する龍種。

修行してその力を身に着けた者。

様々な強さがある。

勿論、俺にも強さを身に着けるための自論がある。

ニトラが言うように、俺がこのレベルになることが出来たのはニトラという、最高の師に出会えたこと、ドライグという最高の相棒に出会えたこと、やさしい姉のような存在のティアに出会えたこと、そしてあいつらのような戦闘バカと死闘を演じたことが大きな要因だろう。

しかし、それだけではない。自分がやってきたことに自信を持つことも、また強さだ。

「イツセー、そんなにほめるな。照れるじゃないか。」

「なんだ？ニトラ。照れてるのか？ニトラはそんなたまじやないだろう。」

「失礼な。私だってな、その、あれだ……す、好いてる男にそんなこといわれたら……うう……心臓が……」

ニトラがなにかブツブツ言っている。良く聞こえなかったが……

「ん？ニトラ、何か言ったか？最後の方が聞こえなかったぞ。」

俺はニトラに訊く。

「ふっ、何でもないさ……」

ニトラは少し寂しそうに言った。

「へんだよ、イツセー。俺にあったことは糧にならなかつたのか？〜すると、久しくしていた男から愚痴がこぼれた。」

「いやいや、そうはいってない。ベルザードさん。」

と俺がなだめた相手は俺の一代前の先輩である赤龍帝王、ベルザードさんだ。いつも俺の精神世界で修行相手をしてくれてた人。

男性最強の赤龍帝だった男だ。

3代の白龍皇を倒すどころか一方的に血祭りに上げたっていうほどだ。その伝説は凄まじい。赤龍帝王の名で知られ、裏社会でその武勇伝は今だ廃れてない。

「ホントかよイツセー。なんかおまけ感が満載な気がするんだがな

？

ベルザードさんは少しムスツととしている。

「まったく、イツセーくんはそんなこと言っていないでしょ。なに拗ねてるのよ。」

と、ベルザードさんを諷めるのは女性最強の赤龍帝であるエルシャさん。独特な戦い方で白龍皇を退け、家族を守ったんだとか。

二人とも、俺の尊敬する先輩たちだ。

「へていうか、私たち久々の登場ね。」

「メタいぞ、エルシャ。」

「はい。」

エルシャさんのメタい発言は置いておいて、俺は3人と会話を挟みつつ、修行に励んだ。

「へつか、俺の名前を今でも聞くっていうのは少し大げさじゃないか？」

ベルザードさんはいぶかしげに言う。

「そんなことはない。何年か前にもベルザードさんの名前を聞いたよ。その人曰く、ベルザードさんの武勇伝に憧れてんだってさ。」

「それ何処だよ。」

「ちよつとした修行先で。」

「ふーん。」

ベルザードさんは興味なさそうにしれっとしているが、少し嬉しそうだ。

俺が修行相手になったそいつだが、俺の知り合いである。これから成長するだろう。

「良かったじゃない。ベルザード。私なんて名前残るほどでもなかったのよ。」

エルシャさんは不満げに言った。

「エルシャさんの名前も残っているぞ？」

不満をもらすエルシャさんにとっては吉報を言う。

「え？ほんとに？」

エルシャさんは疑り深く訊いてくる。

「ああ。エルシャさんはベルザードさんみたいに大々的に表に出ているわけは無くしてな、密かに語り継がれているようだ。それに特に女性の方々に人気だつて言つてた。そう言つてたのは前に出会つた女性戦士と魔法使い。」

〈そうなのね〉

この女性戦士と魔法使いは同じく俺の知り合い。

特に魔法使い。魔法なんだが時々俺のもとにやつてきて指南を受けている。才能は抜群である。

何はともあれエルシャさんは嬉しそうだ。

もし裏社会のことを歴史の教科書にするならば、この二人は必ず掲載されるはずだ。

他の赤龍帝は聞いたところによればどれも力に溺れた愚か者だつたらしいが。

〈にしても平和ね〉

〈ほんとだぜ。俺が現役だつた頃はとにかく白い奴がうるさかつた。〉

エルシャさんとベルザードさんは自身の昔を懐かしむ。

「俺もだ。二人の話は聞いていたが、まさかここまで一度もその白い龍つてやつに合わないとは思わなかつた。」

俺自身も正直驚いている。

一度や二度、ぶつかるのは覚悟してたんだ。

〈ホント、白と赤の運命つて終わつちやつたわね〉なんかもほつとしたわ。私が相手した白い龍もお馬鹿さんだつたわけだし。〉

エルシャさんはこれまた嬉しそうに言った。

〈だがよ、白い龍が全員愚か者だつたわけじゃない。〉

ここでベルザードさんが意外なことを言った。

〈そうなの？〉

「初耳だな。是非その話を聞かせてほしい。」

「私も聞こう。」

面白そうな話だつたので俺は倒立片腕立てを終えて少し休憩に入つた。

「わかった。これは現役人ときにドライグにしてもらった話だ。」
俺はその話に聞き入る。

「白龍皇にも強い奴はいたらしいんだ。たった一人だけだがな。もちろん、力に溺れずにいた。」

「そうだったの。少し見方を考えなきやね。」

ベルザードさんはエルシャさんの見解に相槌を打ち、さらに続けた。

「そいつは初代、白龍皇だ。強さは中々にぶっ飛んでいたらしい。生命力を吸い取り、暴走する危険な『ジャガーノート・ドライブ覇龍』だが、そいつは制御していたらしいな。ただ、時代が俺たちよりもはるかに前だったから会わなかったんだ。ドライグもそいつのことだけは認めてたんだ。たくよお、どうせ遭遇するんだつたらそいつが良かったぜ。」

ベルザードさんはとても残念そうにため息をこぼす。

「へえ、凄いいじゃない。あれを制御できるなんて。普通に私より強いわね。」

エルシャさんはそう称賛する。

まさか、そんな奴がいたとはな。

「会ってみたかったな。そいつにさ。」

おっと、悪い癖が出てしまった。

「ふふ。イツセーも戦闘好きよね。」

「一度くらいは白い龍と戦いたいから。ぜいたくを言えば、バニシング・ドラゴン白い龍、白龍皇アルビオン・グウィバー本人と。」

「はっははは！ そう来たか！ もはや神器所有者では物足りないか！」

ベルザードさん大声で笑う。

「白龍皇もこう言われては気の毒よねえ。それ以前に今現在何をしてるのでしょね。今代の白龍皇は。」

「さあな。その話は聞かんが。」

ベルザードさんの言う通りだ。

白龍皇のことなど今まで興味なかったからずっとほったらかしにしてた。

でもベルザードさんの話を聞いて興味がわいた。

あーなんか戦いたくなってきた。

「探しに行こうかな。」

俺はそう呟いた。

〈いいんじゃない?〉

〈おう、今のイツセーは負けねえよ。ぜってえー。〉

二人とも背中を推してくれるようだ。

俺は今赤龍帝ではない。元がついてしまいが戦いにいくことにした。暇なときには。

そう話をしていると完全に日が出ていた。

そろそろみんなが起きるころだろう。

「さて、良い時間だし切り上げるか。」

〈そうか。〉

〈イツセーまたあとでね。〉

「ではな。」

全員とのコネクトが切れる。

俺は庭から家に戻り、シャワーで汗を流す。

「ふう、さっぱりした。」

「あ、イツセーさん。おはようございます。」

バスルーム、ドレッシングルームから出ると、俺に元気よく挨拶をする少女と廊下でばったりと出会う。

「おはよう、伽耶。」

この少女は伽耶。一時的にここで保護している妖怪のハーフだ。金髪にピンとたった耳が特徴だ。今までは隠していたのだが、ここで保護したことで隠す必要は無くなったため、こんな姿でいる。

「どうしてシャワーを?」

「朝の鍛錬してたんだよ。」

「そんなに早くから・・・だからあんなにお強いんですね。尊敬します。」

「まあ、いつも続けていることだから。」

伽耶は目をキラキラさせながら言う。俺にとっては当たり前のこと

とだが、尊敬されるのは良いものだ。

「お腹へったろ？今から作るから。」

俺は朝食の準備をする。

「へ？家事もするのですか？」

伽耶はきよとんとしている。

「そうだぞ？以外か？」

「い、いえ！素敵だと思います！」

「そうか。」

「わ、私手伝います！ここに住まわせてもらっている身です！何も
しないわけにはいきません！」

伽耶は自分から手伝いを申告する。

いい子だなあ。別に保護しているんだからいいのに。でも決意は
固そうだな。引いてくれなさそうだ。

「わかった。一緒に作ろう。」

「はい！」

伽耶は笑顔でおれと朝食を作るのだった。

伽耶と朝食を作っていると、リビングに人が入ってくる。

「おはよーにいたん！」

「おはようございます、おにいさま、伽耶さん。」

「おはよう、二人とも」

ルルとアウローラ、ティアが最初に入ってくる。

「おはよう、ルル、アウローラ、ティア。」

「おはようございます、ルルちゃん、アウローラちゃん、ティアさ
ん。」

俺たちもあいさつをかえす。

「おにいちゃん、おねえちゃんおはよう。」

「おはよう。おにいさん。伽耶さん。」

「にーさん、おねーさんおはよ。」

「にいちゃん、ねえちゃん、おはよう。」

「にいに……おはよう……」

「にい……おは……よう……」

ユキ、イズナ、ヒカリ、フローラ、スイ、クロアもあいさつする。
スイとクロアは人見知りで伽耶には挨拶できていない。

「おはようございます、皆さん。」

「おはよう。スイとクロア、ちゃんと伽耶にも挨拶しないとダメだぞ。」

ダメなところは叱ってあげる。ただ甘いだけではだめだ。

「うん、にい、ごめん……」

「ごめん、なさい……」

「い、いいんですよ！ イッセーさん。気を使わなくても！」

伽耶はそう言っているが、そう言うわけにもいかない。

「そういうわけにはいかないよ。ほら、クロア、スイ。」

「おはよう……」

「おはよう……ございます……」

「おはよう、スイちゃん、クロアちゃん。」

二人ともぎこちないが頑張った。

「よく言えた、ふたりとも。」

俺は二人をなでてあげる。

やればできる子たちだ。

「おはよう、イッセー、伽耶ちゃん。」

「おはよう。」

「お、おはようございます、ドライグさん。」

ドライグが来て、全員そろったところで朝食をとる。

今日は妹たちとドライグ、ティア、伽耶と過ごした。

伽耶の面倒見の良さには舌を巻いた。

伽耶は人間でいえば中学生くらいだ。お姉さんってこともあって妹たちと一緒に遊んで上げたりと、妹たちによくしてくれている。

しかし、感心してばかりはいられない。伽耶のこれからのこと、考えていかねばならない。

「イッセー、そう言えばこの前墮天使と戦ったそうだな。」

夜、伽耶のこれからのことを考えている最中、ティアから先日のこととを聞かれた。

「ああ。大した力もない下級なやつだ。」

とはいえ、最後の攻撃はまだマシになったな。

「倒したのか？」

「いや、片腕もっていったら直ぐに逃げやがったな。」

「珍しいな。イツセーともあろうものが仕留め損ねるとは。」

ティアが珍しそうに言った。

「あの程度の相手、別にいつでも殺せるさ。ただ、このへんをちよろちよろされるのも面倒だ。次は逃がさないさ。墮天使の仲間もな。」

「ふっ、そうか。今日の夜にでも狩りに行っていいんだぞ？ドライグ達にはうまくいって置いてやるが。」

ティアからそう提案される。

「そうだな。気が向いたらそいつらの根城へ向かおう。」

「イツセーよ、それはすなわち行かないと言っているようなものだぞ？」

「別にそうは行っていないが。」

「いや。イツセーが気が向いたこと今までであったか？特にその墮天使は弱いのだろうか？弱きものに興味を抱かないのがイツセーだ。」

ティアは自信満々に言う。

俺のことはどうやら見抜かれているようだ。

「俺のこと、よくわかってるな。ティアは。嬉しいぞ。」

「当たり前だ。イツセーと何年一緒にいると思っっている。」

「違いないな。」

俺たちは苦笑しながらリビングへ戻っていった。

イツセーSIDE OUT



誠一SIDE

よう、誠一だ。

俺は今、木場、小猫ちゃんと一緒に教会へ向かってるぜ。

しかし、教会に近づくとつれ、悪寒が走る。

「墮天使は確実にいるようだね。」

木場が確信をもって言う。

やはりな。

この身体を走る嫌な気配。間違いようがない。

「着いたね。」

教会が見える位置につき、身を隠した。

木場が教会の図面を広げ、内部構造を把握する。

「よし、取りあえず分かった。」

「いきましよう。」

俺たちは遂に敵地に侵入する。

聖堂に入ると、ロウソクに火がともされ、内部を照らしている。

見た感じは普通の教会だ。

すると、俺たちの前に神父が現れる。

「おやおやおやあ〜？なんかいると思ったら、悪魔さんじゃ、あ〜りませんか〜」

俺たちの目の前に現れたのは銀髪の神父だった。

手には銃を持っている。

小猫ちゃんも木場も警戒を強めている。

「何者だい？」

「俺はフリード・セルゼンでござんす！悪魔祓いの組織の末端の管理職やつてるつすよ。それで？悪魔さんたちはなぜここに？あ、もしかして？ぼくちゃんにぶつ殺されにきてくれたんすかあ〜？そんならぼくちゃん本気だしちゃいますよお！首ちよんぱですわ！」

フリードはふざけた態度でしゃべりながら懐から光の剣をだす。

「おい、アーシアがいるところはどこだ？」

俺は焦りを孕みながら言った。

「ああ？アーシアたんだあ？そんならその祭壇の地下への階段おりたところですよ？」

以外にもこいつはあつさり吐きやがった。

「まあ、通すとは言ってないですがねっ！」

神父はこちらに切りかかってくる。

「やらせないよー！」

木場はその攻撃になんなく対応する。

木場と神父は互いの攻撃をいなす。互角じゃねえか!! すごい! やるじゃねえか木場!

「やるね、かなり強いよキミ。」

「あんたもなやるじゃん。なら、俺ちよつと本気出しちやいますわ。」

ドゴッ!

神父はつばぜり合いから木場の剣を弾き、蹴りを入れる。

「ぐっ!!」

木場はその攻撃によるめく。

「・・・つぶれる」

次は小猫ちゃんが机を投げつけた! なんつー怪力だ!

「おっとー!」

神父は机を剣で切り裂いた。

まずいぜ。あいつ、つええじゃねーか

「セーイチくん! ここは僕たちが引き受ける!」

「セーイチ先輩は先に行ってください。」

木場と小猫ちゃんは俺を先に行かせようとしてくれる。

「ここは頼んだぜ!」

俺は二人の厚意を受け取り、地下へと進んだ。

とある部屋の前にたどり着いた。

そして、扉を開くとそこには――

「あら、来ちゃったの? でも、残念。一步遅かったね。」

そこには、床に倒れているアーシアと自分の手にあるアーシアの神器に見惚れているレイナーレがいた。

「アーシア・・・」

俺は床に倒れているアーシアに目が行った。

「ああ、その子もう持つてつていいわよ。用済みだから。これで私は至高の墮天使になれたから。」

「アーシアああ!!」

俺はアーシアのもとに行き、彼女を抱き上げる。

アーシアは目を閉じたままだ。

それに、少し冷たかった。
俺の怒りは限界を超えている。

こんな奴の為に、アーシアは……
こいつを倒す。絶対にだ。

俺はアーシアを傷つけないように部屋の隅へ移動させた。

セイクリッド・ギア
「神器!!」

俺は神器を出現させ、再びレイナーレのもとに来た。

「あら、どうしたの? てつきり逃げるかと思っただけど。」

「うるせえ。てめえを倒すに決まってるんだろ。」

「あはははは! あなたが私を? 寝ぼけてるの? 前あんなにぼこぼこにしてあげたのに?」

レイナーレは嘲笑うかのように言った。

「理屈じゃねんだよ!! 神器それはアーシアのだ! てめえが持っているもんじゃねえ! 返しやがれ! レイナーレえええ!!」

俺はレイナーレに拳を突き出す。

レイナーレは翼を広げ、それを華麗によけ、宙に浮かぶ。

「単純な戦力差があなたと私にはあるの。この差は埋められるわけがない。わかる? だから、あなたに私を倒すことなんて、できないのよっ!!」

レイナーレはそう言っつて光の槍をおれに飛ばす。

ドスッ!

光の槍が俺の太ももを貫いた。

「ぐあつあああああ!!」

あまりの痛みに俺は叫んだ。

クソ!! やべえ!

全身に力が入らねえ。

とにかく、こいつを抜く!!

「うがあああああつあああ!!」

「へえ、本当に大したものね。私の槍を抜くなんて。ホントに頑丈ね。」

槍は抜いた!

しかし、状況がやばいことには変わりねえ！
どうする？

このままじゃあ、死ぬ！
此処で終わりなのかよ？

ふいに眠るアシアへ視線が映る。

いや、ここで終わるわけには、いかねえ！

俺は、敵をとる！

「ここは、神様にでもお祈りするか？いや、神様は助けてくれなかつたからな。俺悪魔だし。じゃあ、悪魔の長の魔王様に頼んでみるか。」
「？何かしら？もしかして痛みでおかしくなったのかしら？」
レイナーレを無視して俺は続けた。

「魔王様。この目の前のむかつく墮天使を一発殴りたいんで、邪魔が入らないようにしてください・・・なんでもします・・・一発だけでいいんだ。こいつを、殴る力を・・・」

俺は必死に頼んだ。足の感覚はもうない。

だが、俺は立ち上がった。

「うそ？そんな・・・ありえない！立ち上がれるわけがない！私の光をもろにくらって!!」

「ああそうだ。チョー痛えさ。でもな、今はお前への怒りのほうが!!痛みなんかよりもつええんだよ!!」

「くっ!!」

「お前もだ！セイクリッド・ギア神器!!なあ!!ホントはすげえ力持ってるだろ！いまここでその力を俺にくれ!!ここでやらなきや、ダメなんだよ！わかったら、力を貸せ！セイクリッド・ギアあああああああ!!!」
カッ!!

俺が叫び終わると、俺の神セイクリッド・ギア器は眩い光を発した。

「何よ?!?何なのよ!これは!!」
あまりの光景に驚きを隠せないレイナーレ。

「もつとだ・・・もつと力を貸せ!!セイクリッド・ギア!!」
すると、更に強い光を発する。

しかし、それだけではなかった。

「熱っ?!?!」

光とともにとんでもない熱さが俺を襲った。
なんだ?!これは!?

俺の腕に装着された籠手は光と焰を出し続ける。

やべえ!

俺の腕が焼けるように熱い!!

俺の神セイクリッド・ギアの形が変化していく!!

しばらくすると光と熱さが収まっていく。

俺は自分の両腕を見てみた。その瞬間、俺は目を見開いた。

驚いたことに左手にも同じような形の籠手が装着されていた!!

「これは……」

両腕の籠手。

あきらかに変化していた。

オレンジと赤色が混じった色の籠手。

力もみなぎってきている。

先ほどから痛みを感じない。

「うそよ……なによこれ……?た、ただの龍トウワイズ・クリテイカルの手でしよ……

?それが、こんな……この波動、上級悪魔クラスじゃない……」

レイナーレの言動が見るからにおかしかった。怯えているよう
だった。

チャンスだ!

奴は今明らかに動揺している。

「くっ!」

レイナーレは苦し紛れに槍を放つ。

「はっ!」

俺はその槍を拳で薙ぎ払った。光の槍は簡単に消し飛んだ。さっ
きまでが何だったんだってくらい。

「い、いや……こないで!!」

レイナーレは見るからに怯え、翼を広げて逃げようとする。

ガッ!

「逃がさない。」

俺は奴を上回るスピードで追いつき、奴の腕を左手で掴んだ。

「あ、熱い、熱い、熱い、熱い!!!何なのよこれ!!離してえ!!!」

俺が掴んだ腕はジュウジュウと肉の焼ける音をたてている!見るからにとんでもない重傷だ!

すげえ!なんだよこの神セイクリッド・ギア器!!ただ掴んだだけでこの威力かよ

!!なんつー炎だ!!

「ぶっ飛んどけ!クソ女!!」

俺はこの熱さにやられているレイナーレにダメ押しの一撃を食らわせる。

そのとき、俺の右の拳には炎が現れ、炎を纏ったパンチをやつの顔面に叩き込んだ!!

レイナーレはきれいな放物線を描き、壁を突き破っていった。

「へっ、ざまーないぜ。クソ堕天使。」

俺は一矢報いたが、その場で意識を手放した。

誠一SIDE OUT

NO, XXI I く力を扱うには鍛錬く

誠一SIDE

「なんだ？ここは……どこなんだ？」

俺は気が付けば、真っ白な何も無い空間にポツリと立っていた。周りを見渡せば途方もない広さがずっと続いている。

確か、俺はあのクソ堕天使を殴り倒してやったはずだ。俺が自身の^{セイクリッド・ギア}神 器を覚醒させて。あの堕天使が言っていたようなただ力を倍にするようなものではなかった。

「そーいや、木場や小猫ちゃんと分かれたままだったけど大丈夫なのか……？」

俺は一緒に戦った木場と小猫ちゃんを心配しつつ、この得体の知れない真っ白な空間をキョロキョロとしていた。

そんな時だった。

「やあ、やつと神^{セイクリッド・ギア} 器を覚醒させたね。今代の宿主くん。」
不意に後ろから俺に向けて言われたであろう声が聞こえた。

全くもって聞き覚えのない声だった。しかし、不思議だ。知らないはずなのに何故か俺はこの声の主を知っているような気がした。

威厳がありつつも少し幼いような……そんな感じだ。

『あ、今キミ、僕のことを幼いって思ったね？』
なに!?!俺の考えてることが筒抜けなのか!?

『そうだよ。なぜなら、僕は今までのキミを、内側から見ていたからね。』

内側から見えていた？そりやどういうことなんだ!?!
訳が分からないことばかりだ。

「なあ……お前は一体誰なんだ？」

俺はその声の主に訊いた。

『僕かい？僕はね……』

俺のすぐ後ろからその声は聞こえた。

俺は咄嗟に後ろを振り向いた。

すると、俺の視界に映ったのは……

『ドラゴンだよ。布藤誠一。』

俺が懐いていた人間の姿形ではなかった。

そこには、巨大な怪物が俺のことを見ていた。

俺は声には出してないが、心中で驚いた。

当然だろ？

目の前にこんな巨大なものが居たらよ……

俺の顔よりでさえ目。燃えるように赤い色の瞳。大きく裂けた口。

鋭い牙。全身を覆うオレンジ色と赤色の鱗。このような特徴から見ると、完全にドラゴンだった。

余りの出来事に俺は何も言えないでいた。

『今までキミに語り掛けていたけど、キミの力が弱すぎるせいなのか全然届いてなかったみたいだね。だけど、やっとキミの前に表れることが出来たよ。はあ……こんなことじゃ、先が思いやられる。』
目の前にいるドラゴンは俺には理解できないことを言っている。
こいつは何を言ってるんだ？わけわかんねえ。

『キミも何となく察しているんじゃないの？君が想像していることだ。今は、それでいいよ。また、話すことがあるだろうからね。』

俺の腕はあのととき、堕天使をぶったおした時と同じようなことになっていた。両腕に装着された、オレンジと赤の双籠手だ。

『その神器のこと、よく覚えておいて。そして、もつと知るといいよ。』

目の前のドラゴンはそうやって俺の前から巨大な炎を出しながら消えていった。

おい！までよ！なんだってんだ！俺はおまえからまだ何も聞いてねえぞ!!おい!!

そしてそのまま、俺はこの世界から消えた――

「はっ!!」

あのへんな夢みたいなものからの目覚めはお世辞にもいいとは言えないものだった。

とにかく、俺は体を起こす。

「……………目覚めましたか……………」

と俺の寝ていたベッドの横に小猫ちゃんが椅子に座っていた。

「小猫ちゃん……」

もしかして、看病でもしてくれてたのか？

「待っていてください。今、部長たちを呼んでくるので。」

「あ、うん……」

小猫ちゃんはそう言つて、食べていたお菓子をペロリと平らげ、部屋から出ていった。

「セーイチ！起きたのね！」

小猫ちゃんが部屋から出て行つて間もなくして、部長、朱乃さん、木場、小猫ちゃんが部屋に入つてきた。

「やあ、セーイチくん。先日はお疲れ様。」

相変わらずのスマイルを崩さない木場。そういや、木場と小猫ちゃんにあの神父を任せちゃったが、どうやら無事だったようだ。安心した。

「部長、ここは……？」

俺が部長に尋ねると、部長はにっこりとしながら答えてくれた。

「ここは私の根城よ。人間界の家よ。一人暮らしにはちよつと広いけどね。とにかく、あなたはよくやったわ。」

「そ、そうだ！部長！墮天使はどうなったんですか？アーシアは！」
俺はパニックになって声を荒げる。

「待つて。一度落ち着いて。セーイチ。一から話すから。」

「は、はい。すみません……」

俺は部長にそう言われて取りあえず、冷静になって部長たちの話を聞いた。

「墮天使たちは全員で4人いたわ。セーイチが倒した者も含め、私
が仕上げに全員消し飛ばしたわ。安心して。」

「そうですか……」

良かった。どうやら俺たちは勝てたみたいだ。結局、部長たちのお
かげだけだ。

「それで部長、俺、神器のお話なのですが……その、土壇場で凄
いことになったんですけど、あれって……」

俺は一番聞きたい二つのことをのうち、一つを聞いた。

「ええ。そのことも話すわ。あなたの神セイクリッド・ギア器、ただのありふれた
龍トウワイス・クリテイカルの手なんてものじゃないわ。」

「や、やっぱりですか……」

「ええ。それどころか、とんでもないものだったの。あなたの

神セイクリッド・ギア器の名前は紅焰龍児の双籠手

。八大龍王の一体、紅焰龍児アグニルを封じた神セイクリッド・ギア器よ。」

「紅焰龍児の双籠手……」

俺はその名を復唱した。

「そう。持ち主によっては、神滅具ロンギヌスクラスの力も発揮する神器よ。」
うそだろ……

墮天使を倒すことが出来たけど、神滅具ロンギヌスクラスにもなりうるっての
かよ!? 神や魔王を倒せるんだろ!? とんでもない代物だ!?

まさか、俺なんかにそんなものが宿っているなんて……

「じゃあ、部長。俺が真つ白な空間で会ったあのドラゴンは……」

「ええ。間違いなく、セーイチの神器に宿る、アグニルだと思うわ。
というか、もう会っていたのね。」

あのドラゴンが、俺の神器に……?

にわかに信じがたい。しかし、俺はそのドラゴンと会った。そして
部長もこう言っている。

マジか……しかも龍王ってそうとうじゃないか? よくわかんない
けど……

「ねえ、誠一。」

色々と考えている俺に部長が真剣なまなざしで俺を見つめている。

「あなたは、自分が、一番弱いつて思っているわね?」

「はい……」

痛いところを突かれた。

俺は弱かった。結局、みんなの力を借りなきや、あの墮天使を倒せ
なかった。

「だけど、それは違うわ。」

「え？」

俺が内心落ち込んでいると、部長はそれは違うという。

「セーイチ、あなたは兵士が一人しかいないことに疑問を持っていたわね？」

「はい。」

「実はあなたを悪魔に転生させるとき、私の8つある兵士の駒、すべて使わないと、貴方を転生させることは出来なかった。駒を8つも使わないとあなたは悪魔になれなかったの。つまり、貴方には駒8つ分の価値があるの。」

駒8つ!?初耳だ……これには驚きを隠しきれない。

「あなたにはそれほどの素質を秘めているの。確かに今は弱くても、この先、修行次第では強くなる事が出来るわ。」

「部長……」

強くなれる……

この一言がおれは嬉しかった。

そうか……俺、自分のことは何の価値もないと思っていた……なんで、部長は俺を助けてくれたのかわからなかった。けど、これで納得できた。だったら目指すは一つだ!

「部長!俺、最強の兵士になります!!」

俺は部長に高々と宣言した。

それを聞いた部長は嬉しそうに苦笑した。部長だけじゃない。朱乃さんも、木場も小猫ちゃんも笑っていたのだった。

「そう。うれしいわ。セーイチ。私の下僕が強くなるのは。」

「あらあら、頼もしいですわ。セーイチくんは。」

「そうだね。僕も、あの神父には苦戦したんだ。」

「私もです。裕斗先輩と二人がかりで互角つてところでした。悔しいです……」

小猫ちゃんと木場で互角!?

あいつ、そんなに強かったのか……

「セーイチ。なら、明日から早朝練習を開始するわ。私もあなたに

付き合うわ。いいわね？」

「はい！、部長！」

やったぜ！

部長と朝から鍛錬！これはやる気が出るぜ！！

「ああ、それとね、セイイチに知ってほしいことがあるの。」

「え？なんですか？」

何だろうか？もしかして……まさか……あんなことか……

？

「入ってきていいわよー！」

部長が扉の方にそう言った。誰かが来るのか？

「あ、あの……失礼します……」

その声には、聞き覚えがあった。

まさか、あの子なのか……？

そう言って入ってきたのは、俺が良く知る金髪の少女。俺の目の前で死んでしまったはずなのに……

「あ、アシア……」

「え、えつと……セイイチさん……また、会えましたね。」

アシアはにこつと俺に笑顔を見せてくれたのだった。

それも、俺が通う駒王学園の制服を着ていた――

誠一SIDE OUT



イツセーSIDE

「はっ、はっ、はっ……」

よう、イツセーだ。

今日も俺はトレーニング中だ。

今日はいつもの筋力トレーニングとは違って、ランニングだ。

もちろん、ただのランニングじゃない。両腕に50キログラムの重り、両足に100キログラムの重り、さらに重力魔法で自身に1000倍の重力をかけて走っている。こんなこと、常人どころか普段鍛えている者でもほんの数秒でノックアウトするだろう。

まあ、当然だ。このトレーニングこそ、日ごろの積み重ねのその先

にあることだ。俺はこれを欠かさない。最近おれのライバルたちが力をつけていると聞く。ならば、こちらとて実力差をつけられるわけにはいかない。

歴代の先輩たちなら、これくらいやってはいるのだろう。例え力に溺れたとしても、そこそこの実力はあつたはずだからな。

へいやいやいや、イツセー。俺こんなにゴリゴリにトレーニングをしたことねえぞ？つか、なんだよ、50キロに100キロに100Gってよ……わけがわからないぞ……

ベルザードさんが呆れたように言った。なんだよ、これじゃあ俺が非常識みたいじゃないか。

へいやね、イツセー？これ私から見ても異常よ？

エルシャさんまで……

「フハハハハ。お前たちから見えていたらそれはそのように見えるだろう。イツセーはこれを5歳から少しずつコツコツと続け、レベルアップしてきたことだ。」

ニトラが俺のことをそのようにフォローしてくれた。

〈それでもだ。ジルニトラ。これ見てりやあ、生身で歴代達を秒で屠れるぞ……〉

「かもしれないな。」

〈そう考えると、恐ろしいって言うか、流石はイツセーね。〉

ジルニトラとベルザードさん、エルシャさんとの間で会話がはずんでいる。

「そうだ、ベルザードよ。一度、イツセーの体感している世界を感じてみるか？」

〈………〉

ベルザードさんから普段聞けない声が聞こえた。

おそらく、ベルザードさんにとってはとんでもなく笑えない冗談だろう。

ベルザードさんの顔が真っ青になっている姿が容易に想像できる。

「よし、ではいくぞ？歯を食いしばった方がいいぞ？舌噛むかも知れないからな。」

ベルザードさんの有無を聞かずにニトラは実行する気にいる。

〈待て待て待て!!そりやねえだろ!!あんな人外やることやったら俺死ぬぞ!!〉

〈あら、もうとつくに死んでるじゃない。〉

エルシャさんが正論をいう。てか、さりげなく俺を人外扱い……
〈そりやそうだが……そういう問題じゃねえ!!〉

「なに、大丈夫だ。お前も赤龍帝王と言われた身。少しはやれとみているぞ。ベルザードよ。では、ほいつ」

〈う……ん……ん……ん……ん……うぼおあえおあええ!!!〉

ベルザードさんからは悲痛な叫びが聞こえた。

〈あ、ベルザードがつぶれた。〉

エルシャさんからは冷静な状況報告。

何も心配する素振りなし……ニトラにいたってはケラケラと笑っているだけ。

ベルザードさん、南無………

俺は内心彼に同情しながらこの早朝の町を走るのだった。

42. 195キロメートル、一般人が行うフルマラソンの距離を1時間弱くらいで軽く走った後、近くにあった公園で休憩に入った。自販機で飲料水を購入し、ベンチに座って飲む。

「んくっ、んくっ、ぷはあー。これは中々……」

ランニング（ガチ）をやったあとのこの染みわたるような感覚は中々に気に入っている。

また、戦闘後の風呂も中々にいい。

〈あー、マジでやばかったぜ。〉

どうやらベルザードさんが復活できたようだ。

〈イツセー、お前スゲエよ。尊敬するぜ。俺、一秒でノックアウトだ。そりや、つええわけだ。あんなことを平気で出来るんだからよ。〉

「誉め言葉として受け取っておきますよ。」

かの赤龍帝王にこういわれるのは嬉しいものだ。

少しの休憩時間、ニトラ、エルシャさん、ベルザードさんと談話す

る。

「ゼーはーゼーはー」

「ほらゼーイチ!!もつとシャキツとしなさい!!」

休憩を終え、公園から出ようとすると、二人の男女が走っていた。

「は、はい!!」

「基礎鍛錬は大事よ。あなたの神セイクリッド・ギア器はね、あなた自身の力が強ければ強いほど力を発揮するのよ。どの神セイクリッド・ギア器にも言えることだけど、強いに越したことは無いわ。」

「は、はい!!」

赤い髪の少女と、見覚えのある男だった。

なんだ？最近のこの都市の住人は朝のトレーニングが流行っているのか？

俺は二人が見えなくなった後、家にまた先ほどと同じ状態で帰るのだった。

「さっきの女、思いつきり神セイクリッド・ギア器 って言ってたな。」

「イツセー、あの男。私は見覚えがあるぞ。」

ニトラからそう言われる。

「ああ。前にすれ違った時よりも、ドラゴンの力が大きくなっていくるな。」

それだけじゃない。あの男、前すれ違った時は人間だったが、悪魔になっていた。どうやらあの紅髪の女が主か……

へなあ、イツセー。今の奴……

へええ……多分みんな同じことを思ってるわね。〓

ベルザードさんもエルシャヤさんも当然のごとく気づいたようだ。

「まさか、こんなところにいたのか。紅エヴォリユシオン・ドラゴン焰龍児……」

俺はまた新たな遭遇に心を躍らせながら帰宅するのであった。

「ふう、さてはやくシャワー浴びて朝食作らないと。」

数十分かけて帰宅し、バスルームに向かいシャワーを速攻で浴びる。

そろそろ朝食の準備しないといつもの時間に間に合わなくなる。

シャワーを浴び、バスルームを出てダイニングに行くとき先客がいた。

「あ、イツセーさん。おはようございます。今日も鍛錬でしたか？」
そこには伽耶がもう朝食の準備を始めていた。

「おはよう、伽耶。悪いな。もう準備始めてくれていたのか。」

「いえ！これくらいはさせて下さい！」

伽耶はよく気が利く子だ。この子はいい奥さんになれる。

「そうか。じゃあ、いつものように手伝ってくれ。」

「はい！」

しばらく経つと、ティアとドライグ、妹たちがリビングに入ってくる。なにかと起きる時間が決まっていて規則正しい。

伽耶のナイスな助けがあつてどうにか間に合った。

「イツセー。今日、朝何かあつた？」

ドライグが不意にこのような質問をしてきた。

「何かあつたというほどのことではないが、面白い存在を見つけた。」

ドライグに隠すようなことは無いので俺はそのことをしゃべった。

「なるほど、あの炎の龍ねえ〜」

ドライグは少し懐かしそうに言った。

「顔見知りなのか？ エヴォリユシオン・ドラゴン 紅焰龍 兎と。」

「名を知っているだけね。とても若くして龍王の座に就いた。それだけその成長はすさまじいものだったの。だから、私の耳にもその名は入ってきていた。」

なるほど。八大龍王にねえ……それはさぞすさまじいものだったのだろうな。

「ちなみに強さは龍王で二番目。ティアの次に強かったの。」

ドライグは更に驚嘆する事実を言った。

まさか、龍王最強のティアの次席だったとはな……それはますます戦いたくなってきました。

ドライグはなぜか俺のことを見ながらクスリと笑う。

「イツセーは相変わらずね。」

どうやら、ドライグには俺のことは筒抜けのようだ。

「ねえねえ、おにいちゃん。今日もイズナたちのこと見てくれる？」
イズナから特訓のお誘いをもらってしまった。

こうなったらイズナたちのことを見なければ！

これは使命だ！

「(イツセーったら、完全にシスコンね……その感情をもっと私に向けてくれたら、いいのに……)」

「おい、ドライグ、ドライグ！」

「はっ！」

ようやく気づいたようだ。さつきからドライグのことを呼んでも全く反応する素振りすらなかった。何か考え事してたのだろうか？ それにしてもらしくない。

「ドライグも妹たちの特訓、行くだろ？」

「え、ええ。」

当然、ティアも妹たちの特訓へ行くことになった。

そして、今日一日、特訓と言うことになった。日に日に力を伸ばしていつている妹たち。俺も負けるわけにはいかないな。

同日。

特訓を終え、帰宅。

もう深夜に近い。

そんな時間、俺はとある場所に向かっている。

家からそう遠くない場所に悪魔の気配がした。

伽耶を救ったところとはまた別の場所だ。

「誰だ？ 貴様は人間か。」

廃屋に入ると声が聞こえた。女の声だった。

「ああ、そうだ。」

「そうか、ならとつと立ち去れ。ここは貴様が来るようなところではない。」

その女は人間と変わらない容姿だ。整った顔。凜とした声音。だが、それとは裏腹に何処か違和感を覚える。

「そう言うわけにもいかないんだ。特に、貴様のような悪魔はな。」
「・・・そう、か・・・貴様はこちらの世界を知るものか。」

何やら弱っているのだろうか。息切れを起こしている目の前の悪魔。フラフラとしている。経っているのもやっつと言った感じであった。

「ああ。そういうわけだ。はぐれ悪魔は消すことになっている。」
俺がストレートに伝えると、この悪魔は表情を変えなかった。

「そうか・・・ちようど、貴様のような者を待っていた。」

「何？どういうことだ？」

何だこいつは？一体何を考えている？

「いっそのこと、一瞬で消してくれ。」

「意外だな。今まではぐれ悪魔を消してきたが、そんなことを言うやつは初めてだ。」

今までであったはぐれは総じて戦闘になった。どいつも殺されるのは嫌がっていた。

しかし、こいつは違った。殺せと、そう言ってきた。

「ああ・・・私はもう疲れた・・・私を消そうとしてくる奴らから逃げるのも・・・こうして無理やり転生させられ、悪魔として生きるのも・・・」

目の前の女を魔法で解析する。

俺は衝撃を受けた。

体の中身はもうボロボロだ。

普通の人間であればとうの昔に死んでいるはずだ。悪魔だとしても生きてるのが不思議なくらいに。こりや、そうとうやられたな。ただはぐれ悪魔になって逃げてきただけではつかない傷だ。主と言う屑に色々無茶をさせられたのだろう。

初めてだ・・・悪魔に同情するのは。

「同情を・・・する必要は無い・・・私では貴様に勝てのなのは分かっている・・・私はもういやなのだ・・・どうせ、このまま逃げても殺されるだけだ。死ぬならば、人間の手で殺されたいのだ。貴様のような男にだ・・・私の・・・モロの・・・好みだったんだ・・・」

死にそのような状態で必死に声を振り絞る女。

厳密には人間ではないがな。俺は……

「そうか。お前がそういうならば、そうしよう。それと、あんたのよ
うな綺麗な女性にそう言ってもらえて光栄だよ。せめて、痛みを感じ
させないようにしよう。光力も使わない。そうすれば、無に帰ること
もないだろう。」

「そうか……それは……うれしい、ことだ……」

俺はあの時はなった魔法。広域殲滅魔道収束砲を発動させる。

周りに被害が出ないよう、結界を張り、範囲を絞る。

「じゃあな。」

強大な魔道収束砲は女を飲み込む。

魔法が終わった後、そこに女の姿はなかった。

「帰るか……」

何とも言えない気持ちになった。しかし、本人が望んだことだ。

踵を返して帰ろうとしたとき、複数の人物が入り口に立っていた。

「あなたかしら？このあたりではぐれ悪魔を始末していたのは。」

「どうやら、新手らしいな——」

イツセイSIDE OUT

NO, XXIII へ衝突へ

誠一SIDE

よう！誠一だ。

墮天使レイナーレをぶつ倒して3日経った。レイナーレにやられた傷はアジアが治療してくれた。その姿はまさに教会の聖女。なんで教会のヤツラはこんなけなげな子を追放した!? ぜってえ許せねえ。今は昼休み。内心教会に怒りを覚えながらもいつものメンバーと飯を食っている。ま、その教会がアジアを追放しなかったら、こうして出会うこともなかった。なんとも皮肉なことだよ……全く。そのアジアはクラスメイトの子と共に昼食をとっている。その中には駒王学園2年生のアイドルにして、うちのクラスのマドンナ、ユウキちゃん、アスカちゃん、リリカちゃんもいる。あそこのレベルがマジでヤベエ。部長たちオカ研メンバーと張り合えるじえねえか!!

「ねえねえく布藤くく」

「あ?なんだよ。」

飯を食っていると俺に話しかけてくる奴が一人。声からして男ではない。

「アジアとはぶつちやけどうなの? やけにあの子に優しいけど?」

こいつは桐生藍華。俺たちに話しかけてくる唯一の女子である。

まあ、性格はいろいろとぶつ飛んでいるわけだが。

「そーいや、誠一は真っ先にあの子のもとへ行って色々教えてあげてたよな。」

「言われてみればその通りだな。誠一よあの子と何かあるのか?」

松田も元浜も桐生の話題に便乗してきやがった。

「なんもねーよ。外国人だしよ、色々分からないことあるから助けられている。それに同じ部活だからよ。色々助けるように部長に言われているんだよ。」

「ふーん。」

今のは半分は本当に言われたことだが半分はテキトーに言っただけだ。ホントはアーシアと一緒に家に住んでいる。ホームステイって形でな。そんなことをこの場で公言すればあとで悲惨な目に合うのは間違いない。

「そう、今はそういうことにしといて上げる。」
「……どうやらダメっぽいかな……こいつは何かと鋭い面がありやがるからな。」

「セイイチさん!!」

放課後、授業が終わり、アーシアが俺の席のもとへ近づいてくる。ああ、なんとも麗しい……

「おう、アーシア。部活いこうぜ。」

「はい!」

俺たちは部室へと直行した。今日から、アーシアの悪魔としての仕事が始まるんだ。俺はそのサポート。

アーシアがここで契約を取れるように頑張ってもらいたい!!もちろん、俺も全力でサポートするぜ。変なやつだったらぶっ飛ばす!!

「来たわね。じゃあ、さっそく始めるわよ。」

「「「はい!!」」」

こうしてアーシアを加えた部活が始まった。

「みなさ〜くん行ってきました〜」

アーシアの初お仕事が終わって部室に帰還した。

「それで、どうだった?」

部長がアーシアを見ながら訊いた。

「はい!また呼んでもらえることになりました!!」

アーシアは眩しい光を放ちながら笑顔で言った。

「凄いいじゃない!!アーシア!!」

「あらあら、初めてで契約なんてすばらしいですわ。」

この知らせを聞き、全員がアーシアをほめる。スゲーゼアーシア。俺は自分のことのように喜んだ。

しかし、その喜びもつかの間だった。

「部長。はぐれ悪魔の討伐依頼が来ました。」
朱乃さんがみんなに聞こえるように言った。

「そう、わかったわ。みんな、行くわよ!!」

「「「はいー」」」

俺たちは気合十分ではぐれ悪魔の討伐へ行った。

俺も、今回こそはと意気込んでいた。

だが、その場所には正体不明の一人の男が佇んでいたんだ。

誠一SIDE OUT



イツセーSIDE

「あなたね?このあたりではぐれ悪魔を消しているのは。」

先ほどの誇りがあつた悪魔を滅したところ、新手が来てしまった。

このあたりで活動している悪魔たちだ。

腕を胸の前で組、仁王立ちをしている紅色の髪的女悪魔。こいつが

多分この集団の長と言ったところか。

そのすぐ横にいる黒髪の女。紅髪の悪魔の参謀と言ったところだろう。

金髪の剣を腰に携えたおとこと、はくはつ白髪のチビちゃん。おっと、何故かこのチビちゃん睨んできた。もしかして小さいことを気にしているのか?まだ小学生なんだから仕方ないのではないのだろうか。

そして……

俺をずっと睨んでいる茶髪の男。少し力が入っているな、この男。

間違いない。こいつだ。今代のイグニタス・クロスギア紅焰龍児の双籠手の所有者は。この男からドラゴンの気配がバンバンする。

おまけに、その男にずっと引っ付いている金髪の少女もいる。見たところ、この子が一番戦闘向きではないだろう雰囲気を出している。ただ、何かしらのサポート系の能力があると見た方が良さだろうな。悪魔は昔から、なんの力も持たない人間を眷属にはしない。これは非人道的な奴だろうとなかろうとだ。

「それで、あなたは一体何者かしら?」

リーダー格の女悪魔が俺に尋ねてくる。おそらく、俺のが人間だろ

うと踏んでの質問だろうな。

ふっ、なんだこのデジャヴは。前にもこんなことあったな……
同一人物ではないが。

「何ってそんなの見ての通り、人間だろ。」

俺はとりあえずあえて相手が意図してない方の答えを言う。因みにこちらの質問は俺の生活の中でよくこの手のことを聞かれる。俺はどの奴に訊かれた時でもこの決まった答えを言っている。

「それは見ればわかるわ。そうじゃなくて、あなたは何処の勢力の所属？この三大勢力のどこかしら？それとも、他かしら？」

三大勢力。この女悪魔が言っているのは聖書の三大勢力だ。悪魔、墮天使、天使と神という三すくみという関係。今も昔も、この3つは敵対しているが、もしこの三つが手を取り合い、一つになれば数、規模だけは世界最大だろうな。まあ、魔王も死に、この神話にとつての主神である聖書の神も死んでいる。そんなわけで今一番弱い神話と言っている。外から攻撃されるかもしれないのに、同じ神話内で内戦とは愚かなものだ。

「さあな。まあ一つ言うならば、お前ら三大勢力のどれかに着くなんていうことはしたくないな。」

俺はあえてあいまいに答えた。本当は形上属している神話勢力はあるがな。まあ、どうとるかはいいつら次第だ。

「そう。つまり、教える気もない。私たちの味方ではないってことね。」

へえ……この女悪魔。見事に言い当てたな。

この悪魔、ただのボンボンのおじよーさんではないらしい。
更にこの女悪魔は続けた。

「とにかく、私たちと一緒に来てもらえないかしら？この都市一帯は私の管轄地域。さっきのあなたの発言から私たちにとつてあなたは脅威になるかもしれない。おとなしく来てもらえれば手荒な真似はしないわ。」

と腕を組み、仁王立ちをしながら言う悪魔。周りにいる奴らの表情も徐々に陰しくなっていく。

プライドは高そうだな。この悪魔。悪魔の貴族は全員そうだな。いや、むしろ貴族であるからこそその誇りだろうな。今の悪魔は昔からかわらず貴族社会だ。かくいう俺の国の貴族もかつてはそうだった。今は俺の祖国に貴族という特権階級は存在しない。王族なるものは存在するが、その王族に強力な権限はなく、民主主義をやっている。いまだ悪魔は貴族主義だからあんなのかね……

しかし、プライドが高いのは悪いことではない。むしろ、プライドのない貴族など、それは貴族ではない。でなければ腑抜けと見られる。貴族とは、王族とはそんなものだ。態度で相手を威圧し、制して行くのだ。下手に出れば不利になるのは定石である。

「イツセー。なんなんだ？こいつは。腹立たしい。」

ニトラが怒りを孕ませた声をあげる。

相当いら立っているな。

ニトラもあの件以来、悪魔を嫌っている。いや、嫌悪している。

「(そう怒ってやるな。貴族はこういうものさ。ちよつと前の俺の祖国もこんな奴ばかりだったろ?)」

俺はニトラの怒りを抑えるよう、心の中で語り掛ける。

確かに無駄にプライドの高い奴、特に貴族悪魔は気にくわない。だが、同時にもう割り切った。ああ、そうか悪魔はこんなものだ、と。

「あれとこれとは別だろう。まだ人間の貴族の方がましだ。そんなように割り切れるイツセーは大人だな。いや、イツセーの強さのレベルに到達すれば当然か。」

「(まあ、こういうプライド高い奴がやられる様はいいもんだろ?)」

「ふっ、ますます見たことある光景になりそうだな。」

ニトラと俺で悪魔そっちのけで話し合う。

おっと。流石にあちらさんもいら立ってきたようだ。

取りあえず、ここは下手にでてあちらに先行を譲ろう。

「ついでいく？どこにだ？」

「私たちの根城までよ。」

まあ、はいじゃあ行きますってついていくわけがないんだけどな。

「断る。ついていったところで、こちらには何のメリットもない。時間の無駄でしかない。OK?」

俺はきつぱりとお断りさせていただいた。

さあ、どう出るか。こうなれば悪魔と言えば手段は一つしかないだろう。

「そう。なら仕方ないわね。私たちの勢力の関係上、脅威を何よりも優先に対処する必要があるの。悪いけど、実力行使させてもらうわ。みんな!!」

「「「はい!!部長!!」」」

全員の士気が高まる。全員が戦闘態勢に入った。

やはりな。

だが、面白い。一体魔王の身内とやらはどれぐらいなのか見させてもらうとしようか。

「裕斗、小猫!!先手をお願い!アシアは後ろに下がって!!」

紅髪の悪魔の指示で金髪の騎士とおチビちゃんが前に出てくる。やはり、あの金髪の悪魔を下がらせたな。やはりウィザード系、サポート系の能力で間違いない。

「悪いね!傷つけたくはないけど、部長の指示なんでね!はああっ!!」

金髪の騎士は剣を振ってくる。

騎士か・・・スピードが上がっている。

サツ

俺は騎士の剣を躲す。

「まだまだ!!」

騎士は間髪入れず、斬撃を入れてくる。

全くもって残念だ。遅すぎる。まだあの時の騎士の方がマシンだった。

俺はすべての斬撃を躲し続ける。

「くっ!!」

「嘘!!裕斗のスピードについてこられるの!!」

「こんな程度じゃあ、ついてくるに決まってるさ。」

ドゴツ!!

「グハアツ!」

斬撃を躲し続け、隙が出来たところで蹴りを一発鳩尾にぶち込む。速さは良いが、防御がなってない。今のはノーガードで入ったな。加減はしてあげたがまあ立つことは出来んだろう。

騎士は勢いよく壁に激突した。

「……えい」

バシツ!!

次は白いチビちゃんがパンチを入れてきた。

俺はそれを素手でガードする。

「……っ!」

チビちゃんが間髪入れずに攻撃してくる。体の中心線に近いところに攻撃がいつている。まあ、悪くない。基本は押させてあるって感じだな。

「甘い。」

バシツ!

攻撃が決まらないことで焦りが生じたのかだろうか、攻撃が単調になってきたところでパンチを直撃させる。

チビちゃんはぶっ飛ぶ。が、立ち上がった。なるほど、戦車か。

さっきの騎士より防御力はあるようだ。

「小猫、裕斗!!何てこと・朱乃、セイイチ!!」

「了解!!」

黒髪の女は悪魔こっもりの翼を生やし、宙に浮き、巫女の姿になる。

「行くぜ!!こい! 神器!!」

男の方は神器セイクリッド・ギアである紅焰龍児イグニタス・クロスギアの双籠手を発現させる。

あれが、八大龍王の一角、紅焰龍児エヴォリユシオン・ドラゴンアグニルを封じた神器セイクリッド・ギア

か。ドラゴン系の実物を見るのは初めてになるな。

だが、まだまだだな。所有者がこれではな……

「雷よ!!」

黒髪の女は魔力で雷を起こし、こちらに放ってくる。

その雷が俺に直撃する。

ん〜びりびりして気持ちいいな。肩こりとか治りそうだ。

「やったか!？」

紅焰龍児が期待する声を出した。

「いや〜気持ちよかったぜ。肩こりが少し治ったよ。」

「そんな!？」

「確かに当たったはず・・・」

早くもあちらの表情が曇り始める。

「うおおおおおおおおお!!!」

紅焰龍児がこちらに迫ってくる。あの騎士に劣る速度で。しかし、

あの神器、油断ならんな。炎が絶えず出ている。

「はあっ!!」

だが、正直この中で一番弱いな。

対処が一番簡単だ。こいつをぶっ飛ばすやり方が脳に数十通りも

浮かぶ。

「よっ!」

「うわあっ!!」

俺はここで初めてただの魔力を使い、吹っ飛ばす。魔法は使うまで

もない。

「セイイチ!!」

「今のは・・・」

「魔力、に見えましたが・・・」

俺が魔力を使ったのに対し、気づき始める。

「やってくれたわね!!!はあっ!!!」

ここでやっとな攻撃をしてきた紅髪の女悪魔。

両手に魔法陣を出現させ、悪魔特有の魔力攻撃をしてくる。

元ソロモンの悪魔は72柱存在した。今では半分が死んだらしい

が。それぞれは特有の力を持つていたという。

「消し飛びなさい!!」

女悪魔が打ち出した赤黒い魔力がこちらに飛んでくる。

「ぶん——」

バチッ!

赤黒い魔力はきれいさっぱり消えた。

勿論、今のは俺の魔法の一つ。分解魔法だ。これは難易度は超SS S級。最も難しい魔法の一つと魔法使いの間では言われている。さらに、分解する対象が悪魔の魔力ともなると、普通の物質を分解するのとはその難易度はさらに跳ね上がる。俺のもとに訪れている魔女も基礎の分解に苦戦している。

いうまでもないが、こいつらには何が起こったのか理解が追いつかないだろうな。

「……消えた……」

「そんなー！」

動揺する悪魔一向。

「もう一度っ!!」

悪魔はまた再度同じような攻撃をしてくる。何度やつても結果は変わらない。

俺の目の前で消失する。

「そんな……」

ここでいったん話と行こうか。

「お前、もしかしてバアルの者なのか？」

俺の質問にきよとんとする悪魔。俺はさらに続けた。

「今の攻撃。あの魔力はソロモンの72柱序列1位、バアルの消滅の魔力だろうか？」

「……よく知っているわね。」

悪魔は苦し紛れに言った。

俺が分解するとき、その対象を分析する。その魔力はバアルの消滅の魔力と酷似しているのだ。

「当然だ。これくらいは常識の範疇だろうか？」

俺は、あの時から必死こいて修行に励んだ。

これから敵となるだろう三大勢力の悪魔、墮天使、天使の名はもちろんのこと、冥界、天界の大まかなことは調べて頭に入れている。

敵を知るのも、戦いを制する要因にもなるのだ。

「そうね。確かに、あなたの言う通り、私はバアルの家系の血を引い

ているわ。でも、私はバアル家の人間ではないわ。私はリアス・グレモリー。上級悪魔グレモリー家の次期当主よ!!」

と、また消滅の魔力を放ちながらご丁寧に自己紹介までしてくれた。

なるほど。

元ソロモン72柱序列56位、グレモリー家の者だったか。だとすれば現魔王、ルシファーの身内か。なんとも奇妙な遭遇だ。こんなところで魔王の血筋と相まみえるとはな。思えばいまだにこの三大勢力のトップとは会ったことが無い。

言われてみれば、あの紅髪。グレモリーを象徴しているな。

滅びの魔力を扱うものだからてつきりバアル家にグレモリー家の者が嫁いだと思ったが、逆だったか。

バチツ!!

俺は向かってくる魔力攻撃を素手で叩き落として消滅させる。

「……っ素手で私の攻撃を!?!」

「ぶ、部長……」

あちらの表情がさらに暗くなる。

ここでまた新たなことがらに入る。

「それにしても、お前たち眷属?は色々と面白いな。」

「……どういふこと?」

俺は続けた。

「まずイグニタス・クロスギア紅焰龍児の双籠手の所有者に加え、そちらの黒髪の悪魔は、墮

天使だな。」

「っ?」

俺が指摘した瞬間、一部を除いた者の顔が険しくなる。

イグニタス・クロスギア紅焰龍児の双籠手の所有者は知らなかったらしいな。

「隠しているつもりだったのか?だとしたら甘すぎるな。そんなことよりも、何故その力を俺に使わなかった?まさか、使わなくても勝てるでも思っていたか?だとしたら少し自信過剰すぎるぞ。」

「……」

黒髪の女は俯き、よりいっそう表情を曇らせる。

「そつちの白髪のチビちゃんもだ。君は日本の妖怪だな。気配から察するには猫又・・・いや、それにしてもかなり力があるな。猫又でも上位の種族、猫?だな。」

俺がそういうと、今度はチビちゃんが表情を曇らせる。

確認を取るまでもなく、凶星だろうな。この程度で表情が変わるようではまだまだだ。

「何で? って表情かおをしているな。簡単なことだ。俺はこの日本の妖怪たちとは少し縁があったんだ。初見じゃ、猫?とは分からないだろうがあいにく、猫?に何度もあったことはあるんだよ。」

正体を看破されたことよってあちらの士気はズタボロだ。

ここで畳みかけるとしよう。

「そんな様子ではいつまでたっても」その口を、閉じなさい!!!」

俺がしゃべっているのを遮って、黒髪の悪魔が先ほどと同じ攻撃をこちらに放つ。だが、さつきとりも威力が高いものだった。

バチイ!!

しかし、当然のごとくその攻撃は全くとどくことは無い。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「朱乃・・・」

息を切らす悪魔。しかし、その鋭い眼光はこちらをとらえていた。

しかし、墮天使特有の光力は使わなかった。

「やっぱ使わないか・・・」

これ以上はもうダメだな。

この者たちはこれ以上は出来ないだろうと判断し、ここで終わりにする。

俺は宙に浮き、ここで初めて魔法陣を展開する。

「あなた・・・その魔法陣・・・魔法使いだというの!?!」

紅髪の悪魔が信じられないという表情で言う。

「そうだ。」

「なら、なぜここに?!魔法使いはどこかの魔術師組織に所属しているはずよ!悪魔と友好関係にある組織もいるのよ!」

「答える義理はない。」

俺はそう吐き捨て、低威力の魔弾を金髪の少女以外に発射させる。

「うあああああ」

「ぐあつ!!」

「「きやああ!!」」

両手両足、4か所に攻撃をし、行動を不能にする。

土煙が立ち、視界も悪くなる。

「うう……」

「みつ、みなさああん!!!」

砂煙がなくなると地にバラバラに倒れ伏せている5人のもとに金髪の少女が駆けつけていった。

ま、こんなもんか。上級悪魔なら。

少女は一人ひとりセイクリッド・ギアを神器なるもので傷を治していった。

中々の回復スピードだな。なら、魔法でその傷の回復速度を遅らせる。そうすれば、いくらそのセイクリッド・ギア神器でも時間はかかるだろう。

俺はそれを横目に見ながら去っていった。

—●—

ちよつとした運動、第二ラウンドを終え、帰宅する。

玄関から家に入ると、ちようどティアとぼったり会った。

「ああ、おかえりイッサー。何かあったのか?」

ティアはバスタオルでしつとりと濡れた綺麗な髪をわしやわしやと拭きながら言った。

格好はTシャツに短いパンツ。寝間着、なんだろうけど少し露出も高い気がしなくもない。

ティアの寝間着は色々な種類がある。大人っぽいものもあるが、こんな感じの可愛いものも似合っている。

「ただいまティア。いや、ちよつとした食後の運動だよ。」

俺は少しお茶を濁した言い方をする。まあ、あながち間違っではないはずだ。

「ふっそうか。しかしな、イッサー。お前、少し魔法を使っただろう?さしずめ戦いだな?」

ティアには見事に言い当てられる。

ホントに鋭い。

「ああ、まあな。」

「そうか。ほどほどにしておけど、昔はくぎを刺していたが、今のイツセーなら大丈夫だろうとは思うけど油断はするなよ。」

「わかってるよ、ティア。」

俺はにつこりと笑顔で言った。そのつもりである。

ティアは昔からよく俺を気にかけてくれる。

会った当初はそうでもなかったけども。

しかし、彼女のこの厚意は受け取っておこう。嬉しいからな。

「ならいいんだ。」

対するティアも微笑みながら言った。

少し俺の頬が赤くなる。

ティアの笑顔といい、ドライグの笑顔といい、魔法のようなものだ。毎日顔を合わせていても赤くなってしまおう。これぞ魔法と言うのではなからうか。

そして、その明るい笑顔はあの子を思い出させる……
いかんいかん。過去を受け入れ、前に進むと決めたんだ。

「ほら、イツセー。風呂に入ってこい。ちようど、ドライグ達が出たようだから。」

「ああ。そうだな。」

ティアにそう言われ、俺はわずかにかいた汗を流しに行く。
風呂場に行く途中、ドライグとも出会う。

「あ、イツセー♪おかえり。今からお風呂?」

ドライグもまた、しつとりと濡れた赤い髪をバスタオルで拭きながら言った。

「ただいま、ドライグ。そのつもりだよ。」

「そう。ゆつくり入ってもいいからね。たまには。」
ドライグが笑顔で言った。

確かに、俺は手っ取り早さを優先してシャワーと身体と頭を洗うだけで済ませてきた。長い間湯舟には浸かっていない。

たまには浸かって疲れを取ろう。

「ああ。そうするよ。」

俺はドライブの言う通り、湯舟につかることにした。

「ふう〜〜〜」

俺はザブツと湯船につかる。この湯船につかるというのは祖国にはなかったな。

俺は祖国のことを思いながら今日はゆっくりと入浴をするのであった。

イツセイSIDE OUT

No, XXIV へ 継続は力になるへ

誠一SIDE

「ん・・・？またここに来たか・・・」
よう！

誠一だ！

俺は気が付いたら前に俺の神 セイクリッド・ギア 器の中に封印されたドラゴンと遭遇した真つ白な世界に再び足を踏み入っていた。

此処は現実じゃない。俺の精神世界だという。ここに来たときは総じて現実世界で意識を失っているときか寝ているときだ。

！そ、そうだ!!俺たち、はぐれ悪魔を狩りに行ってなんか訳の分からない奴にやられたんだった!!

みんなは!?!無事なのか!?

みんなの安否が心配だ。

俺はいてもたってもいられず、どうにかしようともこの世界から出られないでいた。

『やあ、こっぴどくやられたね。君も。君の仲間もさ。』

俺が焦っていると、聞き覚えのある声がした。声音は威厳があふれているが、口調が幼い。

振り返ると、いつの間にか俺の背後には見覚えのあるドラゴンが居たのだ。

エヴォリユシオン・ドラゴン
紅 焰 龍 児、アグニルだっけか。こいつが俺の神 セイクリッド・ギア 器に封印されれているドラゴンだ。

前、一回ここで遭遇したのだ。この真つ白な精神世界で。

「アグニル・・・お前、俺たちのことを見ていたのか?」

こいつは、アグニルは俺たちの状況を知っているような口ぶりだった。

俺はそれを確認しようと聞いた。

『そうだよ。僕は君の内側から、君たちのことが見えるんだよ。もちろん、あの戦いのこともね。』

どうやら内側から俺を通してそこの世界を見ることが出来るらしい

い。

いったいどうなってるんだよ。セイクリッド・ギア 神器セイクリッド・ギア っていうのは不思議なものだ。神様が作ったんだっけな？ほんと、スゲエもんだぜ。

『無様に負けたね。手も足も出なかったようだけど。』

アグニルは少しバカにしたような感じもあったが、真剣な眼差しで言った。

「……………」

俺は黙るしかなかった。

俺は何一つ、あいつにやり返してやることは出来なかった。

悔しい……………悔しいぜ……………」

俺は手も足も出さず、ホイホイとやられちまった!!俺はポーンだ。俺が一番頑張らなきゃいけない!!この神セイクリッド・ギア 器があるってのに!そのせいでほかのみんなまで!!

そして、守ると決めたアーシアを、守り切れなかった!!

ふがない俺は自己嫌悪に浸る……………」

『悔しい?いや、その顔を見ればそうか。』

先ほどからすかした顔でいるこのドラゴン。

俺はそのドラゴンに思わず言ってしまった。

「なあ……………お前はここでこうしてみているだけだったのかよ。なにできたんじゃないのかよ!なあ!」

ここでこのドラゴンこう言っても仕方が無かった。

ただの八つ当たりだ。やり場の無い怒りをこうしてぶつけているだけだ……………」

自分でもわかっている……………わかっているはずなのに……………」

『そう言われてもね……………僕は聖書の神に封印されてここから出られないし、肉体もないからどうしようもない。どの神器も一緒だよ。それにいかに神滅具ロンギヌスに近い性能を持つ神器でも、その力を使いこなせなきゃ宝の持ち腐れと言うやつだよ。』

たんとんと正論を言うアグニル。

その通りだ……………何も言い返せない。

「……………すまん……………」

俺は八つ当たりをしたことをアグニルに謝った。

俺の謝罪を聞いたアグニルはしばらく沈黙してから口を開いた。

『ま、君が負けたのもある意味仕方のないことだよ。キミは悪魔になって、もつと言え、普通の一般人からこちらの世界のことを知って日が浅い。それでいていきなりの戦闘で勝てると思っっているのなら甘いよ。甘すぎる。それに君の主だっけ？あの子もまだまだだ。それにキミのお仲間全員にも言えるね。あの程度ではそこら辺のやつらには勝てても、実力がワンランク上がるだけで苦戦するだろうね。』

「……そうか……」

さらにアグニルはたんたんと言いつづけた。言うべきことが全てそろっているかのように。

『そして、君もわかっていているとは思うけどね。一応言っておくよ。君が、負けた一番の原因だよ。あの場面、たとえ僕が無理やり神器をバーストさせて力を引き出したとしても、君自身の肉体が耐えられない。君自身の力が、セイクリッド・ギア 神器に全く追いついていない。セイクリッド・ギア 神器はね、自信の素の力が大きければ大きいほど強力になるんだよ。特にこの神セイクリッド・ギア 器を含めた神滅具ロンギヌスはね。せいぜい君の力じゃ、力も4倍くらいにしかない。そして、この神器のメインである炎も弱いままさ。その炎に君の肉体がついていけないからね。』

アグニルからの酷評。

俺はそれを聞き入れる他なかった。

驚いたのは俺より強い朱乃さんや部長までもアグニルは弱いと言った。言い切った。

木場や小猫ちゃんまでも……

それほど、このドラゴンセイクリッド・ギアは強かったってことなのだろうか。

『キミは怒りでこの神セイクリッド・ギア 器を覚醒させ、運よくあの墮天使を倒したけど、次はそうはいかないよ。絶対ね。』

俺はレイナレを倒した。

それで、少しは自身がついたって思っていたのに、これかよ……やっぱ全然だったのかよ……あの墮天使は弱い方だっけ言う

のか。

確かに、あの訳の分からない男はレイナーレなんかより強かった……だけど、なんか違和感を感じた。あれは、一体なんだ？

アグニルに言われて、沈黙がしばらくはしる。

「なあ……アグニル……」

俺の一言を皮切りに、その沈黙が晴れた。

『なに？』

俺はとある決意をもとに、アグニルに言った。

「どうすりゃあ、強くなれるんだ？あいつに、どうやったら勝てるんだ？」

俺は、いままで一番真剣になった。

自分でも不思議だ。こんな気持ちになるなんてな。

だが、悔しかった。ただ悔しかった。それだけだ。

それが俺の原動力となった。

俺の言葉を聞いた瞬間、アグニルは待ってましたと、いったような笑みを浮かべ、言った。

『その言葉、待ってたよ。意外と性根はあるじゃないか。君は歴代の中でも弱い方だけど、その心意気を行動に移せるなら何とかなるかもね。才能も決してゼロってわけじゃなさそうだし。』

さつきまで厳しいことを言っていたけど、急に甘くなったな。このドラゴン。

まあ、兎って言葉がついているくらいだしな。

部長からはとても若いドラゴンって聞いてたけど、ほんとだな。なんか話し方とかが子供っぽいし。

「それで、何をすりゃあいいんだよ？アグニル。」

『キミ、確か早朝にトレーニングしてたよね？あの主って子とさ。しばらくはあれをやった方がいいんじゃない？』

アグニルはなんかとんでもなくヤバい修行を俺にやらせると思っていたのだが、拍子抜けした。

「確かに俺は部長とトレーニングを始めたけどよ、それでいいの？」

部長とやってたトレーニングは主にランニングと筋トレだ。でももつと特別なことをやらなきゃ、強くはなれないはずだ。

俺が疑問を抱いていると、さらにアグニルは続けた。

『安心しなよ。君がレベルアップすれば、僕から新しく何をやるかを指示を出すよ。でも今はダメだ。君はまだ戦いに足を踏み入れたばかり。いや、僕から言わせれば、まだ足を踏み入れてすらない。そんな君にいきなりオーバーなことをやらせても意味がない。身体がついていかないだろうしね。とにかく、しばらくは基礎的なことをやりなよ。君の主とやらはその辺のことは分かっているようだからね。話はそっからだよ。』

『そうか・・・わかったよ。』

アグニルは念を押すように言った。

百戦練磨のドラゴンがこう言うんだ。

まだ少し心には引つかかるものがあるが、取りあえずアグニルの言う通りにやってみよう。あっちも真剣なまなざしで言っているんだ。必ず効果があるのだろう。

よっしゃあ！やってやるぜ。

俺はまたここで決意をした。

『それがいいよ。よろしくね。僕の相棒くん。』

アグニルは笑みを浮かべながら言った。相棒と。

そうだな。これから長い付き合いになるんだからな。なんせ俺は悪魔だしな。

『ああ。よろしく頼むぜ、アグニル。俺は布藤誠一だ。』

ここで初めての自己紹介となった。

ま、神器に封印されし伝説のドラゴンの一体と神器の宿主って関係になったんだ。

これくらいはしらないとな。神器に宿るドラゴンといい関係を築くのも大切だろう。

『なあ、アグニル。』

『ん？なに？』

俺は気になっていたことをちよつとした興味本位でアグニルに訊

いた。

「アグニルはあの時の戦いも見てたんだよな？あの男は、ぶつちやけどれくらいの強さなんだ？」

あの時戦った訳の分からない正体不明の男。俺はずっと気になっていた。あいつの強さは一体どれくらいなのか？

俺には全く見当もつかない。

が、ここには百戦錬磨のドラゴン、アグニルがいる。部長が言うには相当な強さだったらしい。たしか龍王だっけか。そのアグニルならわかるんじゃないだろうか。

「・・・キミはなかなか答えにくいことを聞くねえ・・・ホントに・・・」
と思っただけでそうでもないらしい。

アグニルはうくくんとうなり声をあげ、少しの時間考えたあと俺の質問に答えた。

「正直、僕には明確な答えは出せないな。さっきも言ったけど、僕はキミの内側から外の様子を見れるだけだ。見ただけじゃ予測は出来ないよ。実際に僕が正面からたたかっていたわけじゃないからね。でも、確かあの金髪の男は強かったよ。そして全く本気のほの字も出さなかったよ。余裕そうだったね。たぶん僕が思うには君たちを倒す手段を向こうはたくさんあったはずだよ。君たちとあの男との差はそれくらい離れている。」

「お前ほどの存在がそこまで強いって評価するのかよ。」

「ああ。そうだよ。あくまでも見た限りの話だけだね。」

アグニルは冷静にそう分析し、答えを出した。

あの龍王アグニルでさえも強いと言い切った。どれだけ強いんだよ・・・あの金髪やろうは・・・

まあ、龍王つてのがどんなもんなのかさっぱりわかんないがな。

とにかく龍王はとんでもなく強えってことは聞いた。おもに部長から。その攻撃は魔王様に匹敵するって言ってたな。そういや。

魔王様クラスのこのドラゴンがそんなに言うんだ。

「まあ、今の君では同じ結果にしかならないよ。精々精進するんだね。強くなりたかったらさ。君のお仲間ともども。」

アグニルは嫌みつたらしく言う。

まあ、その実際通りなんだから反論できないんだけどな。ぐうの音も出ないってのはこのことだ。

「なあ、お前なら、あいつに勝てるのか？」

俺は最後になるだろう質問をこのドラゴンに投げかけた。

これもただの興味本位だ。俺は強さってものには興味が出始めていた。この世界には強い奴がたくさんいる、と思う。ドラゴンなんてのがいるからな。

「……さあ、どうだろうね。わかんないよ。僕は神器の中にしかいられないしね。僕なんかのことよりも、まず君は自分の心配をしなよ。それじゃ。」

アグニルはそう言って、俺の目の前から消えた。

肝心な答えはアグニルには答えてもらえず、テキトーに返されてしまった。

それになにか様子がおかしかった。不機嫌だったようにも見えた。一体何だったんだ？

それにさっきの間はなんだよ。あの金髪野郎、まさかアグニルより強いつてわけじゃ……ないよな。たぶん。そうだそうに違いない！

俺はそう勝手に思い込んだ。

「はっ!!」

目を開けると、視界には天井が映った。

見たことのない天井だ。俺の家でもない。部長の根城でもない。

「ここは……」

「あーセイイチさん!!」

体を起こすと、アーシアが俺のすぐそばにいた。若干涙目だった。

「よかった!!セイイチさん!!無事に目を覚まして!!」

「アーシア……良かった。アーシアも無事だったんだな。」

俺たちは互いの無事を確認し合い、喜んだ。

あの金髪野郎・・・アーシアに攻撃はしてないの・・・か・・・？アーシアには傷は見当たらなかった。

「セイイチ！目を覚ませたのね。」

と、ドアからは部長、小猫ちゃん、朱乃さん、木場がぞろぞろと入ってきた。

よかった、みんな大丈夫だったみたいだ。怪我もなかった。

「はい。部長たちも大丈夫そうですね。」

「ええ。とはいっても、みんな目を覚ましたのはほんのちよつと前だけだね。」

部長は苦笑しながら言った。

木場、小猫ちゃん、朱乃さんも笑顔を浮かべた。

「それで、部長、ここは何処ですか？」

「ええ、そのことなんだけど」

部長が俺の質問に答えようとした瞬間、部屋に光が走った。

青色の魔方陣が床に現れた！グレモリーの魔方陣じゃない！一体誰だ！

「リアス、眷属は全員意識を取り戻したようですね。」

その青い魔方陣からはメガネをかけた二人組の少女が現れた！！

え・・・うそだろ・・・この人。俺何度も見たことあるぞ・・・だつてこの人は・・・

「ええ。今ちようどね。セイイチ。紹介するわ。彼女はソーナ・シトリー。上級悪魔、シトリー家の次期当主よ。」

リアス部長から紹介されたのは、うちの学園の生徒会長だった。

「ソウナ・シトリーです。以後、お見知りおきを。こちらは私の女王の真羅椿姫です。」

「真羅椿姫でよろしくお願ひいたします。」

と軽く礼をする会長の女王。

おどろいたぜ・・・まさかこの学園の生徒会長までもが悪魔だったとはな・・・全く知らなかった・・・

この学園、はなっから悪魔に支配されてんだな。

「リアス、取りあえず何があったか話してもらおうわ。あなたが向

かった場所の様子がおかしいと思つたら、アルジエントさん以外全員倒れていたのを発見したわ。」

「ええ。わかつたわ。」

それからしばらく、俺たちの身に起こったことを会長と話すことになつた。



「そうですね。大体のことはわかりました。この件は少々厄介なことです。取りあえず、これは上に、魔王様にも報告するべき案件です。それはこちらからしておきます。リアス、今日のところは私たちに任せて。あなたたちは休んだ方がいいわ。」

「ええ。わかつているわ。お願いね。」

「ええ。では皆さん。また。」

会長はそうあいさつしながら女王の真羅副会長と共に魔方阵で去つていった。

こうなると生徒会全員が悪魔な気がしてきたな。

にしても、これほどのことになるとはな。魔王様にも報告つて……それほどのことなんだな。

部長は会長を見送ると、こちらの方を向いて言った。

「みんな、思うところはあると思うけど、今日は家に帰りなさい。ゆつくり休んで。いいわね。」

今日はこうして解散となつた。

この出来事が後々のことに繋がっていくことになろうとは思ひもしなかつた。



イツセーSIDE

朝日がカーテンを突き抜けて部屋に入つて来る。

俺はそれに加え、普通の目覚まし時計を起点に目を覚ます。

「ふう、朝か。」

俺は独り言をつぶやきながら体を起こす。

それにしても今日は体が軽いな。

昨日はゆっくりと入浴して、早めに寝ることが出来たからか。たまにはこんな朝もこちよくていいな。

寝室からでて廊下を歩き、外へ出る。いつもの修行だ。

「今日は軽めにやっておくか。」

ランニングと筋トレをいつもより軽くやって帰宅する。

「イツセー、今日はいつになく少ないようだな。」

途中、ニトラが俺に話しかけてくる。

「ああ。まあな。」

俺は簡潔に返した。

「たまにはそんな日もあっていいさ。イツセー。お前は頑張り過ぎなのだ。お前の強さはこの世界でならばもう天を突破している。言い換えるとすればある程度は完成された強さまで達している。お前は休むってことを覚えた方がいい。」

ニトラは念を押すように言った。

ニトラは俺の強さは完成されていると言ったが、まだまだだ。ニトラには全く持って及ばないからな。まだまだ頑張らなきゃいけないのは確かだ。

「そんなに俺は休んでいないのか？」

俺はニトラに訊いた。俺としては結構休んでいるつもりだったんだがな。

母さんと父さんの手紙で散々怒られたからな。気を付けているつもりだったんだが。

「何を言っているイツセー。お前は私から見ても全く休んでいない。特に、あいつら馬鹿どもとこたま戦闘をするようになってからな。全く・・・母親と父親に散々叱られたのを忘れたのか？まあ、今は妹たちがいるからおさまってはいるがそれでもだ。」

と、ニトラに怒られてしまった。

母さんと父さんが居なくなつてからというものの、ニトラが俺の母親代わり、みたいなこともあった。

叱ってくれるときもあった。褒めてくれる時もあった。

俺を心配してくれているのは本当にあるがたい。

「ああ。わかったよ。もう少し休むようにするよ。」
ニトラが言うんだ。

俺は素直に従う。なんだかんだ言っただけでニトラには頭が上がらない。
「ああ。それがいい。イツセーのそういうところが私は大好きだぞ
♪」

俺が素直に言うことを聞くと、ニトラはとたんに甘くなる。

まあ、俺もニトラのことは言わずもがな好きだけだな。

そんな軽いトレーニングはすぐに終わりとなり、帰宅する。

「あ、イツセーさん。おはようございます。今日もトレーニングお疲れ様です！」

帰宅してシャワーを浴び、キッチンに向かうと伽耶と出会う。

伽耶はいつもオレがトレーニングを終えてここに来るときに決まった時間に起きている。そして、朝食の準備を一緒にしてくれている。

今まで一人でやってきていたので大助かりだ。他の家事も手伝ってくれている。

「おはよう、伽耶。じゃ、いつもどうり頼むぞ。」

「はいー。」

さっそく朝食づくりをスタートさせる。

このあと、ドライグとティア、妹たちが起きてきて朝食をとる。いつもと変わらない日常が続くのだ。

「ああ、今日は買い出しに行かないとな……」

冷蔵庫にはほとんど何も残っていない。

まあ、この人数を考えれば消費も多くなるわな。

今日は休みがてら、街に出て買い出しに行くことになった。

「にいたーん。どこ行くの?」

玄関で靴を履いて家を出ようとするルルとイズナ、ヒカリ、スイがいた。俺のすぐ後ろに。

みんなきよんとした可愛らしい疑問を投げかけているような顔をしている。

「ん? お買い物だよ。一緒に来るか?」

俺は膝を曲げ、ルルたちの目線に腰を落としながら言った。

「お買い物！」

「ルルも行く!!」

「スイも！」

「イズナも！」

「わたしも。」

4人とも、目をキラキラと輝かせながら嬉しそうに言った。買い物でこんな嬉しがるなんて、本当にかわいいな。妹たちは。純粹でいい。

「このシスコンが。」

うるさいぞ。

ニトラがなにか言っているがそれはスルーしていく。

「そっか。じゃあ、靴を履いて準備しような。」

「「「はく〜い!」」」

4人は元気のいい返事をしておのおの靴を履いて準備をする。

「あら、イツセー。どっかいくの?」

その途中、ドライブグが俺が出かけようとする姿に気づき、声をかけてくる。

「ああ。ちよつと食材の買い出しにな。ルル、イズナ、スイ、ヒカリも一緒に行くから家のことはよろしく頼むぞ。」

「ええ。わかったわ。いってらっしゃい。」

「「「いってつきまーす!」」」

ルルたちも元気よく言った。

ドライブグに見送りしてもらったところで俺たちは家を出発した。

玄関を出て庭を通り、門を潜る。そこには俺お手製の強力な結界がある。しかし、俺と一緒に潜るとき、または俺が通行許可している人は高位の神々でさえも通ることのできない結界など普通に通れてしまうのだ。妹たちはもちろん、ティア、ドライブグ、伽耶が通れる。あと数十人かはこの結界に弾かれない者はいるがその者はたまに来るだけである。そいつらはみんなアポなしで急に来るものだから困っているけど。

左右を森に囲まれた小道をまっすぐ歩いていくと住宅街の端っこの公道にでる。

そこからスーパームまで歩いていく。

街の中心に近づくにつれ住宅から商業施設へと風景が様変わりしていく。

「にいたん、今日はどこ行くの？」

今までキャツキヤと妹たち4人でしゃべりながら歩いていたルルに訊かれた。

「あそこに大きな建物があるだろ？そこに行くんだよ。」

俺はこの道から正面に見える巨大な建物を指をさしながら言う。

1年前にこの地にオープンした新しい大型の総合商業施設だ。何でもあるって評判だ。と言う俺もここに来るのは初めてだ。今まではもっと小さいところで買っていたが、ルルたち妹も一緒に来ているから急遽目的地を変更した。

「おつきいね！」

「スイ初めていく〜」

「私もだ〜」

4人とも始めていく大きな建物に興味を向ける。

子供の真っ白な心にとっては新しいものというのは興味がわくのが大半だ。それまで経験したことのないことがそこにはあるのだからな。

デパートに到着する。

妹たちと俺はは自動扉からその店内に入る。

「「わあ〜」」

「広いね〜」

店内はとてつもなく広い。

向こう側が見えない。階数もこの分だと8・9階はあるだろう。

とりあえず、メインである食材の買い出しへ行く。妹たちと一緒にさまざまな食材をまんべんなく選んでいく。

妹たちも手伝ってくれたので意外と早く終わった。

「みんな、お手伝いしてくれたからおかし選んできていいよ。」
まあ、可愛いからいつも多く買っちゃうんだけどな。

今日は更に多く買ってしまいそうだ。それとアウローラとユキ、クロア、フロラーの分も買っておかないとな。

「えー！ホント!?!」

「わーい!」

「あつ!走ったら危ないよ!」

スイとイズナが喜びながらおかし売りコーナーに走っていく。
それをルルとヒカリが止めるためについていく。

おっと、見失ってしまう。

俺は4人の後を急いで追った。

「スイとイズナ!今日は混んでるから走っちゃ・・・」

「わあつ!」

人と人がぶつかる音がした。

それとほぼ同時に直ぐ近くでイズナの声がした。

近くに行くイズナと可愛いらしい私服を着た少女がぶつかったあとだった。

やっぱこうなったか・・・今日は祝日で人も多いからな。ルルは小さいから尻もちをつけていて少女は立ったままだった。

「うう~~~~いたたたたあ〜」

「あつ!ごめんね。大丈夫?」

紫がかった黒髪の女の子がイズナを心配し、介抱する。

「イズナ。大丈夫か?」

「うん。大丈夫〜」

良かった。取りあえずイズナにケガはなかったようだ。

「大丈夫?」

「走るからだよ、もう。」

ルルとヒカリとスイがイズナのもとに駆け寄って姉妹同士でイズナの無事を確認している。

「すみません。うちの妹が。あの大丈夫でしたか?」

保護者としてイズナがぶつかった相手に対応をする。

「うん。僕は大丈夫だよ。ケガとかはしていないから。」

紫がかつた黒髪の美少女はにっこりと笑顔を浮かべながら言った。

「こら、イズナ。このおねーちゃん言うことがあるだろ?」

「うん。あの、ごめんなさい。」

イズナはすぐにこのぶつかつた少女に誤つた。

「ううん! 気にしてないよ。君にケガが無くて良かったよ。」

少女は快く許してくれた。なんといい子なんだろうか。

ん? この子。どこかで見たことあるような・・・

「あ! よく見たらイツセー! また会えたね! ボク嬉しいよ!」

と言ってこの少女は俺に近寄つてハグをしてくる。

どうやら気のせいでも見間違えでもなかったらしい。

この少女は俺のことを覚えていた。

前に道端で出会つたあのメガ学園の子だ。その時は3人組だった
がな。

てか、妹たちの視線が少しキツクなってるのは気のせいかな?

「ひ、久しぶりだね。ユウキ。取りあえずここでは離れてもらつて

いいかな。」

別にこの子は親愛の意味でこういうことをしたのだろう。だが、こ
の子はいろんな人にこうもオープンなのか? 少し無防備すぎる気が

するが。心配だな。

まあそれは置いておいて取りあえず離れてもらった。

「うん! 久しぶり!」

屈託のない笑顔を浮かべる。眩しいなあ・・・輝いてるぞ。

「ユウキー! 何してるの! つてイツセーくん!」

「あ、ホントだ。」

とおかし売り場でこのような再会が繰り返される中、同じく前に
道端で出会つた2人もここに來ていたのだ。



「へえー妹さんなんだー! かわいいー!!」

「ホントね。お持ち帰りしたいわあ〜」

と、妹たちと愛おしそうにスキンシップをとる3人。妹たち4人を

それぞれ一人ずつ膝の上のせているという状態だ。

お菓子売り場で出会ったあと、取りあえず妹たちのお菓子を8人分以上買ってフードコートでティータイムと言うことになった。

やはり3人は一緒に遊びに来てたんだとか。仲いいなこの3人。

「イツセーくんは妹さんとお買い物してたの？」

栗色の髪を腰まで伸ばしているアスカがイズナの頭を撫でながら尋ねてくる。

「ああ。うちの家事は主に俺がやってるんだよ。今日は買い出しだったんだ。」

俺はありのままのことを言った。

「うん！にいたんのご飯とつても美味しいの！」

「いっつも頬つぺた落ちちやいそうなの。」

妹たちが絶賛してくれている。これはいいものだ。このためにやっているとも言えなくもない。

「料理まで出来るの……」

「凄い……完璧だ……」

「食べてみたいなあ〜イツセーのお嫁さんになる人が羨ましいよ。」

3人とも若干引いている面はあるが、驚いていた。料理上手い奴なんてこの世界いくらでもいるだろうに。

主婦の皆さんとかな。あと料理人。

俺は母さんに生活を正せと言われたから仕方なく自炊というものを始めた。いや、始めざるを得なかったな。でなければ怒られちゃうから。それを続けていたらこうなった。まあ、継続は力なりってやつだな。

「長いことやってるからな。慣れって言うやつもあるだろうさ。」

「そうなんだ〜凄いね。家族に料理を毎日ふるまうのって大変だからね。」

「ねえ、イツセー料理が出来る女の子ってどう？」

ユウキが少し答えにくい？質問をしてくる。

「どうっていうのは……まあ、素敵じゃないかな？料理できる女

の子にごはん作ってもらえるのは嬉しいものだからかな?」

俺はそれとなく答えた。まあ、一般的に言われていることだろう。

「・・・ボク、今日からはじめよう。」

「私も本気出そうかな。」

「私も。」

何故か3人ともやる気がマックス状態になっていた。

ともあれこのあと、少しお話をしてからお開きになった。連絡先も

3人全員と交換したのであった。

「イツセー。あの黒髪の少女と愛し合うかのように抱き合ったこと、忘れてはいまいな?」

帰り際、ニトラからそれはそれは恐ろしいほど低い声であの出来事を掘り返された。

やはり見ていたか・・・てか一部捏造させられてるんだが!?

おかしくない!?

「知らん。」

「(ちなみにドライグ達には黙っておいてくれるのは・・・)」

俺はわずかな希望に期待してすがるように言った。

「あるわけないだろう。」

ですよねー。てか、こうなったニトラはもう抑えられない。

こうしてまたドライグに絞られたのであった。



NO, XXV く動き出すく

冥界SIDE

ここは冥界。

人間界とは似て非なる世界である。

紫色という異彩を放っている空。

本来人間界にあるような青く美しい大海原もない。広大な陸地と広大な森林があるのみ。そんな場所に、聖書にしろされし悪魔と、墮天使がほぼ領土を半分に分けて存在していた。

ここは冥界の墮天使領。その領土の中心にあるこの巨大な建造物、このなかに、この裏の世界を動かさうる存在である、とある人物と墮天使がいた――

「ふう〜、やつと半分だぜ。」

とため息をつきながら高そうな椅子の背もたれに背中を預ける男が一人。

前髪だけ金髪、年齢は中年といったところ。チョイ悪風なおっさんである。そしてその男の前にあるデスクには大量の山積みされた書類が高々と聳え立っている。そして、そのわきには正体不明の機械ともガラクタともとれるものがいくつかゴロゴロと雑に置かれている。そのおかげでデスクは汚い。

「たくよお〜シエムハザの野郎。こんなに仕事押し付けやがって。これだけやったのにまだ半分も終わってねえ。」

とつぶやきながらものが置かれていてスペースのないデスクのわずかな隙間に足を上げながら行儀の悪い格好をする。

よお、俺はアザゼルだ。

墮天使の中核組織である神の子を見張る者の頭をやっている。

ここは神の子を見張る者本部の俺の事務室だ。

ここで俺は今大量の仕事をさせられている。なんてことだ……

俺は神セイクリッド・ギア 器の研究にハマっていてな。四六時中神セイクリッド・ギア 器を構って
いたいんだ。

なのにあの野郎とききたらやれ仕事だのなんだのいつもうるせえ。

つかそれしか言ってるねえ。んなもん俺らの部下にやらせときやいだろうがまつたくよお。

ハツキリ言う。俺はこんなくだらねえことはやりたくねえ。

眉間にしわを寄せ、疲れた表情を浮かべながら背もたれに持たれる。

「アザゼル、仕事は進みましたか？」

そんななか、この部屋のドアが開き、一人のいかにも真面目で研究者らしい男が入ってきた。

眼鏡をかけ、片手にはファイルなどの資料が抱えられていた。

そしてもう片方の手にはお盆とそのうえに湯飲みを持っていた。

「ああ、やってるっての。今は休憩中だ。はあく」

俺は不貞腐れたように言った。

「何を言ってるのですか。もともとはアザゼルがサボってたまりにたまった仕事に後に回ってきただけの話じゃないですか。あ、これお茶です。」

と言いながら俺の物が多すぎてスペースのない場所に湯飲みを置く。

こいつはシエムハザだ。神の子を見張る者の副総督だ。

ちなみに昔っからの付き合いだ。三大勢力間の戦争以前、俺たちが天使から落ちる前からのな。

「わあーっつたよ!!! やりやいんだろやりやあ。」

俺はヤケになって言った。

「ええ。では頑張ってください。私は持ち場に戻りますので。」

シエムハザはそう言ってこの部屋から退出した。

シエムハザの奴、俺のところへ茶を持ってきただけでとつとと帰りやがった。どうやら俺がサボってないか監視がてらきやがったな。

あいつの気配をまだこの部屋の近く、ドア付近から感じる。

ちっ! しゃあねえ。仕事をする以外選択肢がねえな。監視されるからな。

ちくしょう。

「はあ、やるかあ・・・」
俺は姿勢を戻して仕事を再開した――

・・・でも思ったかバーカめ。

シエムハザの野郎油断したな。俺が真面目に仕事に入ったのを30分間確認した後とうとう自分の持ち場に戻った。

俺が真面目にやっているのが珍しくて警戒を解くのを早めたな。ふっ、あまいなシエムハザ。

俺はコツソリと部屋を抜け出して俺はとにかく自分の事務室から離れた。

俺は広い廊下をとにかく歩いた。

シエムハザに見つからないように気配を消しながら歩く。

仕事はまだかなり残っているがまあ今日はもういいだろう。

「さ〜と、神器神器〜と」

俺は神器セイクリッド・ギアの研究のため、神器研究室へと向かった。

ズドドドン!!!

その途中、通りかかった部屋から凄まじい音におれはビクツとする。

巨大な建造物の中にあるこれまた巨大な部屋のなかに鳴り響くさまざまなほどの騒音。その凄まじいほどの騒音を起こしているのはこの部屋にいる人物によって生じている。中には見知った気配を感じさせる者がいた。俺はその部屋に入る。

その人物はかなり大きく、その質も高い魔力弾を魔方陣から発生させ、部屋の奥の壁にある的へと放っていた。

「はあっ!!!」

放たれた魔力弾は美しい直線を描き、全体的に命中している。魔力弾を操るものは相当な手練れだ。この数と威力のものを全て完璧に

制御している。

その人物は背に白と透き通ったマリンプルーの翼を生やし、宙に浮きながら空中から魔力弾を放っている。

「よお、ヴァーリ。今日もやってんな。精が出るな。」

俺が声を掛けると、あちらもこっちに気が付いてその場で宙に浮きながらこちらに振り返った。

「アザゼルか。」

このダークカラーが強い銀髪の青少年はヴァーリ。結構前に俺が拾ってきた。その時は体中ボロボロだった。

こいつは何かと強さを求めたがる。今日もこうして鍛錬に励んでいる。

しかしこいつ、ヴァーリはそれだけじゃねえ。

「よお、アルビオン。どうだ？ヴァーリの調子はよ。」

俺はヴァーリではなく、ヴァーリの背に出現している翼に向かって話しかけた。

『ふん、アザゼルか。ヴァーリの強さは言うまでもない。十分すぎるほどにまで成長している。完全に、歴代の白龍皇では最強と断言できる。それだけではない。バランス・ブレイカー 禁 手の格も歴代とは一線を画くだろうな。』

ヴァーリの背に出現している翼が点滅しながら俺の質問に答えた。

こいつはアルビオン。パニシング・ドラゴン 白い龍 白龍皇アルビオン。二天龍の片

割れだ。ヴァーリは今代の白龍皇だ。それも歴代達とは比較にならない強さだ。

はつきり言ってこいつの強さは俺から見ても異常なほどだ。推測ではあるがああ赤龍帝王と呼ばれ、3代の白龍皇を瞬殺したベルザードよりも強い。俺でさえベルザードとは相対したくない奴だったが、ヴァーリもだ。恐らく俺と同レベルかそれ以上だ。

ただ、それも今となっては話が違うがな。

「アザゼル。ここに来るのは久しぶりだな。何の用だ？もしかして、見つかったのか？」

ヴァーリは地に降りて俺の近くまで来た。

実はヴァーリからちよつとした依頼を受けている。ヴァーリは戦闘狂だから戦闘相手を探してやまない。特に二天龍との戦いに興味を持っている。

そう、他でもないもう片方の二天龍、赤龍帝のことだ。

「いや違う。今日はただ久しぶりに顔をここに出しただけだ。」

「そうか・・・」

ヴァーリはわずかに残念そうな顔をする。

実は赤龍帝の行方が全く分かってない。赤龍帝王ベルザードの死後、神器は新たな者に継承されたはずなんだがそこからさっぱり消え去った。

俺としてもこんなことになるとは思っていなかった。

赤龍帝と白龍皇はかならず出会い、戦いの運命に導かれる。しかし、ここのところそれが起きていない。

比較的友好的なくつかの他の勢力にも赤龍帝の情報を集めるよう依頼を出したが今のところそれ関係の報告は一切ない。

白龍皇に出会う前に何か強大な相手にやられたか？いや、それでやられたとしても次の人間に継承されるはずだ。それにこんなことが何百年も続くわけがない。ほかの勢力に属したとしても人間の寿命をはるかに超える年月が経っている。他にもいくつか考えられる選択肢はあるにしてもいまい説得力に欠ける。

赤龍帝と白龍皇の戦いが中断されてからすでに300年。これは俺たちだけじゃなく、裏の世界の様々な組織でたびたび語り継がれているだそう。『空白の300年』とか。まあ、どこの勢力も戦いが起こらなくて安心してそうだが。

しかし、ヴァーリはそんなことを納得するわけがないだろう。今か今かと赤龍帝が現れるのを待っているんだからな。今まで数々の歴代達を見てきた俺としても気になっていることではある。赤龍帝の神器、ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手も研究してえしな。

『ふん。全く、赤いのとその宿主はいったい何をしているのだ。おかげでこっちは退屈だ。歴代の所有者たちも嘆いていたぞ。』

アルビオンもこの仕打ちにご立腹だ。

「アザゼル。一刻も早く見つけてくれ。」

ヴァーリも念を押すように言った。

「わかーってるよ。ま、お前に勝てるレベルの赤龍帝なんて居ねえと思うけどな。」

『そうだな。過去、現在、未来においてはこれ以上の存在は生まれはしないだろう。なにせ、私から見てもとんでもない存在であった赤龍帝王ベルザードを超えたのだからな。本当に冗談みたいな存在だ、お前は。』

俺の言ったことにアルビオンも同意する。ヴァーリはただの人間じゃねえ。悪魔とのハーフだ。しかもただの悪魔じゃない。なのに白龍皇を宿してんだ。そりやつええに決まってるあ。

「頼むぞ。」

「ああ、分かってるって。」

とにかくこのまま赤龍帝をしらみつぶしに探していくしかないな。まあ、ヴァーリは人間よりもはるかに長く生きることが出来るから見つかるだろう。あとは時間の問題だ。

「アザゼル、ここにせっつかく来たのなら修行相手になってくれるのだろうか?」

ヴァーリは早くも戦闘態勢になりながら愉快そうに言う。

「いやいやいや、ちげえよ。お前と戦ったらこの部屋が吹き飛ばすまうじゃねえーか。前一回壊していくら再建にかかったと思ってるだ。それに、俺はこれから神セイクリッド・ギア器の研究があるんだよ。」

俺はなるべく戦いたくねえ。特にお前のような冗談みたいなやつとはな。

「ふっ、また神セイクリッド・ギア器か。」

とヴァーリの呆れられる。

ま、自分でもこの神セイクリッド・ギア器への執着心はおかしいと自覚してるけどな。けどやめらんねえんだよ。

俺たち墮天使勢力は神セイクリッド・ギア器の研究に力を入れている。墮天使は研究者も多い。武闘派も多いけどな。

おかげで神セイクリッド・ギア器の研究は俺たちが一番進んでいる。

セインクリッド・ギアホルダー
神器所有者をいち早く見つけて保護、または処理をしている。

「じゃ、俺はそろそろラボへ向かう。」

「そうか。」

俺はヴァーリにそう告げてこのトレーニング部屋を後にしようとしたその時だった。

「見つけましたよっ!!!アザゼル!!!」

雷が地面を穿つかのような怒号が部屋に鳴り響いた。

これにはヴァーリもドアに入ってきた人物に注目した。

その人物を見た瞬間、俺の本能が危険だと叫んでいる!

「げえっ!!シエムハザ!!」

俺の仕事においての天敵、シエムハザがここを嗅ぎ付けていやがった。

なんてことだ。どこでバレた?!

「何が、「げえっ!!」ですか!!全く!部屋で仕事をしてると思っただけじゃない、それにまだ仕事が終わっていないじゃないですか!!さあ、もどりますよ!」

普段穏やかな性格のシエムハザだが、今となっては鬼をも泣かすほどの凄まじい形相でこちらにつかつかと歩いてきていた。

「待て待て待て!半分は終わらせたじゃねーか!今日はもういいだろ!」

俺はシエムハザに仕事を一応したことを伝える。

こんな俺でも、一応半分はやったんだぜ?頑張ったろう?

「たったの半分じゃありませんか!!今日は最低でも9割は終わらせてもらわないと。明日もまだあるんですよ!」

しかし、シエムハザは良しとはしなかった。

しかも、俺の頑張りをたったの3文字で否定しやがった!許せん。

「はあ!?!ふざけんな!あと4割もやれって言うのかよ!冗談じゃねえ!」

俺はやってられなくなってひとまずズラかることにした。

「あつ!待ちなさい!逃がしませんよ!今日と言う今日は絶対にやっってもらいます!」

シエムハザも鬼の形相でこちらに迫ってきた。もちろん捕まるわけにはいけないので部屋を速攻出て翼を展開して逃げる。

「くっ！逃げ足は速い……」

シエムハザは俺のスピードにはついてこれないらしい。勝ったな……今日も。俺はシエムハザから逃げることに関しては勝率100パーセントを保ってきたんだ。負けるはずがねえ。

俺は勝利を確信してそのまま逃げた。しかし、思いもしない存在に足止めをされた。

「さっきぶりだなアザゼル。」

「な、ヴァーリ！」

なんと、鍛錬を積んでいるはずのヴァーリが俺の行く手を阻んだ。

「どういうことだ！ヴァーリ！」

「ああ、実はな……」

『くっ！なんとという逃げ足の速さ……このままでは……ヴァーリ。』

『なんだ？』

『アザゼルを捕獲するのを手伝ってもらえませんか？』

『悪いな。俺は鍛錬の途中なんだ。』

『タダでは言いません。そうですね……あとでラーメン10日分譲りましょう。』

『了解した。契約成立だ。』

「……と言うわけだ。」

クソ！あのやろう、ヴァーリを買収してやがったな！

そこまでして俺を追い詰めたか！

「ふふふ、アザゼル。今日は今までのようにはいきませんよ。」

と、ヴァーリにこれまでの話を聞いていると後ろにシエムハザが追いついてきた。

「シエムハザ!!おめえ!!買取とは卑怯だぞ!!」

「何とでも言いなさい。今日こそは仕事をやってもらいます!

ヴァーリ!!」

「分かっている。禁手化!!」

『Vanishing Dragon Balance Brae
ker!!!』

ヴァーリはここで禁手フランス・ブレイカーを発動させる。

「なっ!おい!禁手フランス・ブレイカーは反則だろうが!!」

あまりの仕打ちに思わず嘆く。

「すまん、アザゼル。ラーメンがかかっているんだ。」

そう言つてヴァーリは容赦なく攻撃をしてくる。

俺はなんとかそれを躲す。

ヴァーリの放った攻撃が廊下、部屋をことごとく木端微塵にしている。凄まじい音を立てながら崩れていった。

あつぶねえ。こんなの食らったらケガじやすまねえぞ。

つか、これでまた再建する費用がかさむぜ……

「ちいっ……これじゃ勝てねえ。逃げる!!」

この戦力差では勝てないと判断し、咄嗟に逃げる。

しかし、禁手状態のヴァーリは難なくついてくる。

クソ!ダメだ。逃げてても逃げててもあいつを突き放せない!やはり

戦うしかねえか!

俺は空中で止まり、ヴァーリの方を向いた。

「ふっ、アザゼル。諦めたか?」

「いや。ここは逃げてても追いつかれるからな。ここはお前を倒して逃げる!」

俺がそう言うと、ヴァーリはニヤツと笑みを浮かべた。

「ほう、面白い!!」

ここでヴァーリと戦闘に入った。

しかし、流石に2対1ということもあり、最終的にはシエムハザに

捕まったのであった。

「さあ、捕まえましたよ。アザゼル。今日は私の勝ちでしたね。」

「クソッ！」

シエムハザは勝ち誇ったような表情をし、俺をロープでグルグル巻きにして逃げられないようにしていた。

やはりヴァーリの野郎の加担が敗因だ。

「今日と言う今日は仕事をやってもらいます。ヴァーリ、今日はありがとうございました。あとで私の部屋に来てください。ラーメン屋の無料券がありますので。」

「ああ、分かった。」

ヴァーリはそう言って立ち去った。

「さてと。行きますよ、アザゼル。」

シエムハザは俺をズルズルと引きずりながら俺の部屋へ向かった。

シエムハザは俺の部屋に着いた後、部下たちを3人を呼び、話し合いをしていた。

「では、ここでアザゼルを見守っててください。万が一、逃げた場合はこれで知らせて下さい。」

「「はっ」「」

シエムハザは部下3人に対して見張るよう言う。

んだよ、それ・・・シエムハザ含めて4人態勢かよ・・・どうにも逃げれんな・・・

「では、アザゼル様。仕事をお始め下さい。」

部下の一人が俺に言う。

そんなこんなで俺は強制的に終わるまで仕事をさせられた。

「くっそおー！ー！！仕事したくねえー！！！！」

この日、神の子を見張る者で俺の発狂が鳴り響いた。

◆◆◆
イツセーSIDE

よう！イツセーだ。

今日も朝早くに早く起きて朝の特訓をした。

今はその特訓を終え、家に帰宅し、シャワーを浴び終えたところだ。

俺はいつものようにリビングへ移動する。

「あ、イツセーさん。おはようございます。」

俺が朝のトレーニングから帰って朝食の準備をする時間ピッタリにここへ来る伽耶。

いつもながらナイスタイミングなことだ。

「ああ、おはよう伽耶。今日も頼むぞ。」

「はいー」

こうしていつも通りの朝を迎え、みんなと朝食を取る。

しかし、そのさなか、今日はいつもとは少しばかり違ったのだ。

カツ！ぶううん！

「ん？なんだ？」

「魔法陣？」

俺たちが朝食を取っているところ、リビングルームとダイニングが一体となっているこの部屋のリビングの方の机から黄色の光が放たれた。

机の中心には魔法陣が現れた。

魔法陣とはその名の通り、魔法を行使すると現れる模様のようなもの。

もちろん、その魔法の種類、流派によって形は無尽大にあるものだ。

しかし、この魔法陣は俺のよく知る形のものだった。俺たちの流派のものだ。

ティア、ドライグ、妹たちもこの唐突に現れた魔法陣を見ていた。

そして、その魔法陣からは一通の手紙が出現した。その手紙が出現すると、魔法陣は消え去った。

「みんな、気にせず食べてて。」

俺は皆にそう言って、席を立てて出現した手紙を手を取った。

表には俺宛の文字が書かれている。

裏には送り主の名前。

その名前は、俺のよく知る者だった。

俺の家に、しかも表の世界の人間たちがやっている運送業者ではなく、魔法陣を介して送ってくる奴は数えるほどしかない。

「どれどれ……」

俺はその送り主の名前を確認してその中の手紙を見た。
イツセー先生へ

イツセーせんせー！ご無沙汰していまーす。手紙を送るのはなんだかんだ初めてですな！

手紙には似合わない文体で書かれている。親しい仲にはこれだと思われる文体である。まあ、送り主の性格などはよく知っているから気にはしないが。

そう言われてみれば、手紙をもらうのは初めてだな。他の奴とは何度か文通はしたが。

そう思いながら読み進めた。

それはそうとして、せんせー。せんせーから出された課題難しすぎるよー！これどうやってやればいいのー？この分解魔法ホントに私にできるのかなあ？

と弱音を吐いていた。手紙で。

課題とは俺がこの子に出した魔法についての宿題みたいなもんだ。

俺は昔から魔法使い限定の家庭教師なるものを趣味でやっている。しかし、すべての魔法使いたちに教えているわけではない。先ほども言ったように魔法使い、魔術師にも流派がある。また、強大な魔術師組織もこの世には存在する。それらには俺は属していない。そのため、基本的に俺の名が世に出ることは無い。敵対勢力も存在する。敵対する勢力に属している魔法使いに俺は教えはしない。敵に塩を送ることなんざ、したくないからな。あちらは俺のようにどの魔術組織にも属していないフリーの魔法使いをはぐれ魔法つかいとかいうような扱いをして、排除もしくは拘束するような暗黙の了解があるらしい。俺の存在を知る魔法使いなど、数えるほどもないがな。一般的に魔法協会と呼ばれている有名な組織の長であるあの野郎は俺のことを知っている。まあ、俺の存在を口外してるのか知らないが。しかし、あちらの決めたことなど知ったことではないがな。

というか、こんな弱音を伝えるためにわざわざ手紙をよこしたのか

? そう思ったが、まだ続きがあったのだ。

あ、そうそう。ここからが本題なんだけどね、せんせー。こつちじゃ、すっごい面白いことがあったよ! 私の住んでいるところからちよつと離れたところに三大勢力の中の一つ、天界勢力の傘下のすっごい大きなキリストの教会があるじゃない? あそこ、なんかめっちゃめちゃに壊れてたんだ。さらに私自力で調べてみたんだけど、どうやらね、教会ご自慢の贗作聖剣が何者かに盗まれたらしいよ! 笑えるよねー

その知らせを見て俺はその盗み出した奴に興味を持った。

聖剣。

それは、この地上では強い部類の武器に入る伝説級の物である。聖剣にも強いもの、弱いものはある。しかし、たとえ弱い聖剣だとしても魔物の類、悪魔、吸血鬼にとつてはとつともない脅威である。悪魔や吸血鬼は特に警戒をしている。

聖剣は英雄の子孫、またはその家系が所持している、もしくは行方不明になっている。しかし、教会側は聖書の神が作ったものを聖剣と謳っている。質の悪いことに真のエクスカリバーとな。しかし、流石は聖書の神と言ったところ。贗作とは言えかなりの強さだったらしい。今は戦争によつて折れて7本となっているらしいが。

しかし、教会は聖剣に執着するものも多い。赤子のように大事に扱っているほど。おいそれと盗まれるようなマネはされなれないと思うが・・・誰だろうか。そんな大それたことをした者は・・・

と、色々考えたがまだ続きがあった。

教会は全部7本の聖剣を所持している。だけど、そのうち1本は行方不明。それで、今回はそのうち3本が盗まれたんだって。盗んだ奴は相当の実力者だよ。せんせーほどじゃないけど、教会にもとんでもないほど強い人はいるからその人たちの目をかいくぐつて盗めるほどだし。十中八九、墮天使。しかも幹部クラスだよ。墮天使の気配と光力を使った跡があったから間違いないと思う。せんせーも気を付けてね。せんせーは真なる本物を持つてるんだから。それと、昔せんせー教会といざこざ起こしてるよね。まあ、せんせーなら大丈夫だと

は思うけどね。じゃ、またねーまた何かあったら知らせるよ。

愛しのせんせーの生徒より♡

と、手紙はここまでだった。

全く。余計な心配を。生徒に心配されるほどでもないさ。まあ、心配してくれるのはありがたいけどな。

俺は手紙を全て読み終え、それをしまった。

「イツセー、何だったの？さっきの手紙。」

手紙を読み終えると、ちようどドライブ達が朝食を食べ終えてた。

ドライブが俺に先ほどの手紙の内容を尋ねる。

「ああ、俺の生徒からだ。内容としては、教会にある聖剣が奪われたらしい。なにか面白くなってきそうだ。」

俺はぎつくりとした大まかな内容を苦笑しながら言った

「へえ、聖剣がねくでも私も見たことあるわ。その時は1本の物だったらしいけどね。」

今のドライブの言葉からドライブも聖剣の知識はあったようだ。

意外だな。

ドラゴンは聖剣なんぞに興味のきの字も無かったように思ったが。

「ああ。それが今7本に分かれて、そのうち3本が盗まれたってさ。」

「そうなの。それでイツセーはどうするの？」

「どうもしないさ。ただの興味本位で調べただけらしいな。ここから遠く離れた場所だ。今更贗作の聖剣がどうにかなったところで影響はない。」

俺はドライブの質問にそう答えた。

今のところ、大したことは起きてはいないだろうが、万が一俺たちに影響があるとすれば俺も動かざるを得ない。

例えば、昔の教会とのいざこざみたいなきっかけがあればな。

「そう。でもイツセー過去にそんなことあったよね。また同じようなことが起きそうなんだけど。」

ドライブは俺と同じようなことを考えていたようだ。

言われてみればそうかもな。

二度あることは三度あるって言うしな。

「ああ、何故かそんな予感がしなくもないな。」

俺たちは互いに苦笑し合った。

俺たちはこのあと、チビたちの修行を見て、そしてとある勢力に連絡を取ったのであった。



NO, XXVI 　　く聖剣く

誠一SIDE

よう！誠一だ！みんな元気しているか？

因みに俺はな、今、物凄く興奮している!!

「ううん・・・セーイチいい・・・」

「セーイチさん・・・」

俺の横には全裸のリアス部長、そしてアーシアがいるんだ。二人とも魅惑的な声を出しながら体をよじらせる。ああ、何とも素晴らしい光景・・・

いやいやいや、おかしいでしょこれ!!!

あの学園のお姉さまであり、憧れのリアス部長、そして純粹無垢なアーシアとこうして添い寝を！添い寝をしているんだああああ!!!

しかも全裸で!! 大事なことからもう一度言う。全裸で!

まず、リアス部長が俺の家でこうしてスヤスヤと気持ちよさそうに寝ていること自体がまず事案なのだ。

何故こんなことになったかと言うとだな、まずリアス部長が俺の家に住むことになった!

あの訳の分からない金髪男に負けた翌々日、いつも通り部活をやっていたら急に部屋に炎が立ち上がり、上級悪魔のフェニックス家の三男、ライザーが現れたのだ。加えて銀髪の美女、魔王ルシファア様の女王で冥界最強の女王、グレイフィアさんがいらっしやった。そればかりではなかった。ライザーは眷属を全員揃揃えていてなおかつ全員魅力的な女の子ばかり。小さいロリっ子やボインなお姉さままで様々な女の子、極めつけは実妹まで眷属化している。急に女の子と思いつきりイチヤつきやがつて！羨ましい!!さらには、ライザーはこともあるうにリアス部長の婚約者だったんだ！ライザーはそれをいいことに部長の体に気安く触るなどの行為を繰り返す始末だ。もちろん部長も納得していなかった。反発し合う両者は悪魔特有のゲーム、その名もレーティングゲームの勝敗で決めることになったんだ!

しかし、ライザーはもうすでにレーティングゲームのプロであり、

対する部長はまだ未経験者。それを考慮して、俺たち眷属は山で特訓をすることとなった。かなりの特訓を積み、俺たちはいい勝負が出来る、そう思ってた。本番に臨んだ。

だが、現実はどういうまくは行かなかった。結果は負けちまった……

まあ、仕方ないのかもしれない。経験が足りなさ過ぎたんだ。アグニルにもまだ勝てないだろうと言われてた。

確かにライザーの眷属たちはあのわけのわからない男よりかは弱かった。それは体感的には分かった。それに戦いやすかった。

問題は敵の王であるライザーだった。聞いてはいたが、やはり奴の不死属性は強かった。俺たちの攻撃は奴には届くことはなく、そのまま俺たちは負けたんだ。そうしてそのままリアス部長がライザーと結婚……なんてことにはならなかった。

俺は魔王様公認で会場に殴りこんでライザーとの一騎打ちと言うエキシビジョンマッチで勝ってリアス部長を取り返すことが出来たんだ！

その代償として俺はアグニルと契約を結び、俺の両腕を対価に差し出した。俺の両腕はもはや人間でも悪魔でもなく、ドラゴンと化した。それと引き換えに、俺は一時的に力を得たんだ。神セイクリッド・ギア器の究極形態である禁バランスブレイカー手をな。だが、弱い俺が部長を取り戻すのには安い対価だった。次は足を差し出すさ。また同じようなことになったらな。

そんなこんなで部長をライザーから取り返して、このような生活を送っている。

しかし、良いことばかりではない。

ここんところ、木場の様子がおかしかった。正確に言えば、おそらく俺の家で部活をやっていたときだった。昔一緒に遊んだやつと一緒に映った写真をみたたん、木場の様子が豹変した。聖剣……？とか言ってたな。そこからだ。木場が一人でブツブツとつぶやいていたりどこか上の空って感じだ。

部長は木場の過去を知っているらしく、そのことをさわりだけ話し

てくれた。やはり、聖剣が関係してるとか。部長にも木場が変わるきつかけとなった写真を見せた。やはり、マイナーなモノらしいがいわゆる教会の聖剣だった。なんであるものが映っていたのか甚だ疑問だがそれは置いておこう。今は木場が心配だ。部長も朱乃さんも小猫ちゃんもアーシアも心配してるしな。

加えてだ。先日、俺の家に突然とある人物が来たんだ。紫藤イリナ。昔俺の家の隣に住んでいた幼馴染だ。そして、木場の様子がおかしくなった原因の写真に映ってた子だ。てつきり俺は男だと思いついでいたが、女だった。今ではすっかり成長して女らしくなっていた。それともう一人の青い髪の女。ゼノヴィアと言ったか。二人して日本に来ていた。ただ、そこは大した問題じゃない。二人からはとてつもない悪寒が感じられた。あれは・・・何だったんだろうか？体感的にだが、教会や聖水、光の矢と同じような感じだった。

「んん・・・あら、セーイチ、起きてたの。おはよう。」

と、部長とアーシアの寝顔を見ていたら部長が目を覚ました。部長は体を起こす。うん、見事に赤い髪が部長のおっぱいを隠している。俗に言う髪ブラと言うやつだな。

「おはようございます、部長。」

俺は部長にあいさつを返す。部長はいつものような顔ではなく、少しだけ元気がなさそうだった。多分、木場のことが心配なんだろうな。眷属だから。このままではいけないとわかっているのだろう。

「アーシアはまだ寝ているのね。起こすわね。」

まだスースーと寝息を立てながら気持ちよさそうに寝ているアーシアを起こす。もういい時間だからな。今日は平日。学校もまだある。

「んんんん部長さん、セーイチさんおはようございますうんお早いですね〜」

部長に起こされたアーシアはまだ眠たそうだ。目をこすりながら体を起こす。

「おはようアーシア。」

「おやよう。学校の支度をするわよ。二人とも。」

部長はすでに着替え始めている。

「はい。」

俺たちは部長に返事をして、制服に着替えて1階のリビングに行った。

「おはようございます。お父様、お母様。」

「おはようございます。」

アーシアと部長は父さんと母さんにあいさつをする。呼び方もはや娘だな。

「おはよう！リアスちゃん！アーシアちゃん！」

「おはよう。」

母さんも父さんもまんざらじゃない。むしろ娘のような存在ができてうれしそうだ。

部長とアーシアは母さんの手伝いにすぐに向かった。ここに住むようになってから二人とも母さんと料理を作っている。時々、母さんに代わって作ることもある。二人とも上達が速い。もともとの才能もあるのか、母さんの技術をすぐにものにしていった。流石だ。

「行ってきます。」

「行ってきます。」

朝食を部長、俺、アーシア、父さん、母さんと食べ、学園に行く。俺の左隣には部長、右隣にはアーシアがいる。三人ともに学園への道を歩いていく。

学園に近づくにつれ、人が多くなる。

学園の二大お姉さまであるリアス部長が居れば尚のこと。道行く女子生徒たちはキャーキャー言いながら部長をみる。男子共は嫉妬の眼で俺を睨んできやがる。

はっはっは、いい気味だぜ。

玄関に着き、ここで学年の違う部長とは分かれる。

「じゃあ、セイイチ、アーシア、また部活だね。」

「はい、部長。」

「またですう。」

俺たちは二年生の教室へ、部長は三年の教室へ向かった。

教室へ入るなり、いきなりいつもの二人が駆け寄ってきた。

「セーイチイイイイイイイイ!!」

「貴様あ!!今日もまたアーシアちゃんどリアス先輩と一緒に登校してきたなああああ!!何とも妬ましい!!!」

松田と元浜がまくたいちやもんをつけてきやがる。

ホント毎日毎日ご苦労なことだ。

「ああ、そうだな。お前たちも早く仲のいい子を作ったらどうだ？」

そうすれば一緒に登下校くらいはできるかもしれないぞ?」

俺はこいつらに勝ち誇ったように言った。

「おのれえええ!!」

「今に見てやがれえええ!!」

俺の言ったことがカチンと来たのか、松田と元浜は更にキレた。

俺はその二人をすぐにスルーして席に着く。

すると、アーシアが俺のもとに来てこう言った。

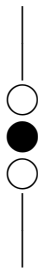
「セーイチさん!!今日も、頑張りましょうね!!」

それはそれは素晴らしい笑顔だった。

ああ・・・アーシアはなんとも癒されるのだろうか・・・

「ああ!もちろんだ!」

俺もアーシアの元気の良さに負けまいと、俺も元気を込めて言った。



放課後。

すべての授業も終わり、これから部活の時間となった。

俺はアーシアに声を掛ける。

「アーシア、部活行こうぜ。」

「はい!」

アーシアは俺の呼びかけにすぐに答えてくれた。

アーシアはせっせと許可書を鞆につめて俺と一緒に教室を出た。

新校舎から離れたところにある旧校舎へたどり着く。

「こんちは!」

「セイイチ、アジア、来たわね。」

部室の扉を開けると、部長、朱乃さん、小猫ちゃん、そして木場もいた。だが、いつもの部室って感じではなく、すげえ張り詰めた雰囲気だった。

その原因は、椅子に座っているとある人物たちがいたからだだった。

「あ、セイイチくん！やっほー！」

「……………」

なんと、思いもよらぬ客がここに来訪していたのだ。



「私は、カトリック教会所属、ゼノヴィア。」

「私はプロテスタント所属の紫藤イリナよ。」

部長の目の前に堂々とすわって真剣なまなざしで部長に向き合う二人。

まさか、教会の関係者が来ているなんて思わなかった。白を基調としたローブに首には教会、聖なるものを象徴する十字架を掛けている。俺の幼馴染のイリナも教会に属しているとは…………俺たちは対立関係にあるわけか…………

それはそうとして、先ほどから木場が危なっかしい。二人を尋常じゃないほどの怨恨の眼差しで睨んでいた。もはやこの時点で彼女等二人に切りかかっていっても不思議ではない。むしろ、今のいまあとして部屋の隅で傍観していることが凄いいことだ。

「自己紹介どうもありがとう。知っていると思うけど、こちらもね一応ね。私はリアス・グレモリー。この管理者よ。それで、我々悪魔側にあなたがた教会側が接触した理由を聞かせてもらえるかしら？」

部長も自己紹介とここにきた理由を聞いた。

部長も動じない姿勢だ。

その部長の問いに答えたのは俺の幼馴染、イリナだった。

「そのことは私から。先日、カトリック教会本部ヴァチカン及び、プロテスタント側、東方正教会側が管理、保持されていた聖剣エクスカリバーがそれぞれ一本ずつ、計三本が奪われました。」

それを聞いて俺たちは表情を変えた。

聖剣が？

というか、分からないというのが率直な意見だ。

俺は聖剣がどんなものかもわからないからだ。

「ごめんなさいね。まず、聖剣について一から簡単に話してもらえないかしら？ 悪魔になりたての子もいるの。」

部長が俺の疑問をこのような形で伝えてくれた。

「わかったわ。」

イリナは頷いて、部長の申し出に応えた。

それからイリナとゼノヴィアは聖剣の成り立ちについて語った。

二人の話をまとめるとこうだ。

聖剣エクスカリバーはもともと一本の剣であった。しかし、それは三大勢力の大戦によって折れてしまったとのこと。そして、教会側は砕け散った聖剣のかけらを集め、錬金術で七本の聖剣にして今はそれを聖剣エクスカリバーと謳っているらしい。

「そして、これがそのうちの一つだ。」

説明が終わったあと、ゼノヴィアは立ち上がって布に包まれた長い物体をここで解き放った。

「私が所持する聖剣は、破壊エクスカリバー・テストラクションの聖剣。カトリック側が管理している。」

「私のは擬態エクスカリバー・ミミックの聖剣。こっちはプロテスタントね。聖剣は様々な能力があるのよ。」

二人が持っていた物は聖剣だった！

どおりで会った時に嫌な悪寒がしたんだ。

今、ここで目の当たりにして恐怖さえ感じる。ヤバイやつだということは何も身を持って体験した。

にしても形が全く違うんだな。イリナのなんてひも状になってるし。

「それで、その教会（ゴ）自慢の聖剣とこの遠く離れた極東の島国のこの都市に、一体何の関係があるというの？」

悪魔にとって脅威であるはずの聖剣を目の当たりにしたというのにこの相手への姿勢を崩さない部長。流石です!! 尊敬します!!

「そこからは本題だ。教会が所持する聖剣はカトリック、プロテスタント、東方正教がそれぞれ二本ずつ、残りの一本は行方不明。各陣営それぞれ一本ずつ奪われ、この都市に奪った連中がいるというのがこちらが調査した結果だ。」

ええ！

そんな奴が今この近くにいるって?! 冗談じゃない!

「奪った連中のリーダーは神の子（グ）を見張る者（リ）の幹部、コカビエルね。」

そのワードを聞き、初めて部長の表情が変わった。

「まさか、そんなビックネームが出てくるとはね……古の戦いから生き残ったコカビエル……」

墮天使の幹部……コカビエル。聞き覚えがある……しかし、相当強いはずじゃ……

「それを鑑みて、私たち教会からの要求は悪魔側がこの件に手を出すな、それだけだ。」

ゼノヴィアの後にイリナも続けていった。

「私たち教会は悪魔と墮天使を信用していないわ。悪魔にとっては聖剣は邪魔でしょ? —— 墮天使と手を組んだ場合、我々教会は敵と判断し、消滅させる。たとえば、魔王の妹であろうと —— つてお偉い様方からの伝言よ♪」

二人の物言いに部長の眉が吊り上がる。

「ずいぶん言い方ね……私たちが、墮天使と手を組んで聖剣をどうにかすると、本気で思っているの? だとしたらそれはないわ。グレモリーの名に懸けて、そのような愚行はしないし、するつもりもないわ。もちろん、魔王様の顔に泥を塗るようなこともしないわ。決してね。」

部長は力強く断言した。

部長は冷静に言葉を述べたが、内心では怒っているのだろう。悪魔を愚弄されたからな。

「それが聞ければ今回ここに出向いた収穫はあったものだ。」

ゼノヴィアは笑みを浮かべながら言った。

部長も険しい表情から緩和させ、息を吐いた。

「あなたがた、たった二人で相手にするの？はつきり言っておくけど無謀よ。殺されるわ。」

呆れている部長だが、二人は決意をもって答えた。

「簡単に死ぬつもりはない。」

「ええ。」

二人はそう短く答えて椅子から立ち、ここから退出しようとする。俺たちの横を通ろうとしたその時だった。

「君は・・・どこかで見たことあると思ったら、元聖女のアーシア・アルジエントじゃないか。」

ゼノヴィアはアーシアの素性を知っているようだった。

突然名を呼ばれたアーシアは体を震わせた。それに気づいたイリナもアーシアによる。

「ああ、あなたが一時期噂になっていた魔女の。悪魔になっていたなんてね。ああ、心配しないで。私たちはあなたの存在を上を報告しろなんていわれてないから。」

「え、えつと・・・あの・・・」

二人に言い寄られて動揺し、対応に困ってあたふたしているアーシア。

そんなアーシアを気に掛けることは無い二人はさらにアーシアにとっては耳が痛い言葉が並べられた。

「聖女が悪魔にか・・・落ちるところまで落ちたものだ。まだ、我らが神を信じているのか？」

「ちよつと、ゼノヴィア。悪魔になった彼女が神を信仰しているはずがないでしょう?」

ゼノヴィアに呆れながらイリナは言った。

しかし、ゼノヴィアは首を横に振って否定した。

「いや、その子からは信仰の匂いがする。私はそう言うのには敏感でね。背信行為をし、罪の意識を感じながらも神への信仰を忘れられない者もいる。私のはそういう輩を見たこともある。この子はその者と似ているのさ。雰囲気や気配がな。」

ゼノヴィアは目を細めながら言う。

イリナはそれを聞くとアーシアを興味深そうに見て言った。

「ねえ、アーシアさん。悪魔になった今でも主を信じているの?」

イリナの問いかけにアーシアは悲しそうに答えた。

「・・・完全に捨てることが出来ないだけです。ずっと、今まで信じてきましたから・・・」

アーシアの言葉を聞き、ゼノヴィアは突然布に包まれた聖剣を取り出した。

「そうか。ならば、ここで私たちに断罪されるといい。神の名のもとにな。それならばキミも救われるだろう。」

さつきからアーシアのことを何一つ知らない、アーシアの苦しみを何一つ知らない奴が勝手なことばかりをほざいていやがる。俺は内側からこみあげてくるこの怒りを原動力に、アーシアの前に出た。

「おい、待てよ。アーシアに触れるんじゃねえ。」

自分でもこんな低い声が出るのかとびっくりしたが、今はそれよりも眼の前の敵だ。

「それ以上アーシアに近づくな。」

俺は剣を構えている目の前の少女を睨みつける。

「なんだ? 君は? 私は神の名の下に彼女を断罪し、救ってあげようとしているんだ。関係ないものは引っ込んでもらいたい。」

「関係無いことはねえんだよ! 俺はアーシアの友達だ。家族だ。友人だ。だから、この子を守る!!! アーシアに危害を加えるってんなら、俺はお前らを全員敵に回しても戦ってやるぜ!!!」

俺はこの女に負けじと、言い放った。

俺の挑戦的な言葉にゼノヴィアはうすら笑いをうかべ、目を細めた。

「ずいぶんな啖呵切ったな。今の言葉、我ら教会への挑戦か? 一介

の悪魔のお前が、そのようなことを口走ってもいいのか？」

「セーイチー！やめなさい——」

この事態に今まで静観を決めていた部長も止めようと口を突っ込んできた。

「ちようどいいね。僕が相手になろう。」

しかし、部長の制止を遮ってきたのは今までずっと黙って部屋の隅にいた木場だった。

木場は黒い笑みを浮かべながらこちらに近づいてきた。

「誰だ？キミは？」

ゼノヴィアの問いに木場は不敵に笑いながら言った。

「僕は——キミたちにとって先輩ってところさ。」

その瞬間、この部屋に無数の様々な魔剣が出現した。



イツセーSIDE

「あ、はい。それとこちらの鶏肉を500グラムで。」

「はい。いつもありがとうございます。」

よう、イツセーだ。

いま、家からかなり離れた商店街で買い物をしている。

ここはこの都市の中心にあるそこそこの規模を持つターミナル駅へと続く道沿いだ。それもあって人通りは多い。

この精肉店は結構の頻度で通っている。ここは安くて質がいいからだ。

「はい、お待ちどうぞさま。」

と、注文の品が準備できたのか、いつものお姉さんが商品をこちらに渡す。

「ありがとうございます。」

俺は商品を受け取ってお金を払う。

「はい、ちようどのおあずかりですね〜ありがとうございます〜また来てくださいね〜!!」

とても眩しい笑顔でいつもの店番のお姉さんは俺に言った。あれ

だけの笑顔が出来るのなら、店番にはびったりだろう。

俺はそのお姉さんにはい、とだけ答えてその店を後にして帰路についた。

俺は今のところ金を稼ぐようなそれらしいことはしていない。しいて言えば株でうまくやりくりして利益を増やしているってところ。家でできることでお金を稼いでいる傾向にある。こちらのほうが効率がいいのは間違いない。というか、今までお金に困ったことはありはしない。父さんと母さん、どうやってあそこまでの財産を築いてきたのだろうか。とんでもないな。是非その方法を知りたいものだ。

それだけじゃない。とある勢力からは昔の案件でお礼をもらっている。よって今はこの経済大国日本では不自由はない。

そう言えば最近この都市全体の様子がなんとなくオカシイ。騒がしいのだ。

どうにも、この街の人間ではないよそ者たちがこの日本に、この都市に來ているようだ。

俺の記憶をたどってみれば、この街の人間がしないような恰好をした連中がうろろとしていた。俺のよく知る奴らだ。白いローブに身を包んだ連中だ。そして、奴らはローブで身を隠しているが、その中には剣やら銃やらを隠し持っているだろうな。そのような光の力を使う武器が使われた形跡がこの街のいたるところにあった。おそらく教会、果ては聖書神話の天界勢力だろう。

先日、俺の生徒の報告で聖剣を盗まれて奴らは慌てているのだろう。ここまで調査に來ているとはよほど聖剣が大事なのだな。もつとも、その聖剣は贋作だつてことを知らない奴らは哀れだが。いつまで教会は隠しておくつもりなのか……

俺はそんなことを思いながら歩いていると、おかしな奴らに遭遇した。

「おい、その金髪の日本人。」

金髪の男はこの都市にはそうはいない。それに近くで声がしたから十中八九俺のことだろうな。

俺はそいつの方を向いた。

そこにいたのは二人組の少女だ。

一人は青い髪に緑色のメッシュを入れた短髪の少女。もう一人は茶髪のツインテールの少女だった。

普通にどこにでもいる少女たちだ。

が、この二人には共通した普通ではない点があった。まず一つ。この二人が身を包んでいるこの白いローブと首から下げている十字架。教会に属するものが身に着けているものだ。

そしてもう一つ。

聖剣だ。

この二人からは、計三本の聖剣の気配がしたのだ。

「なんだ？」

俺は用件を聞いた。

俺の問いには俺に声を掛けたであろうメッシュの少女が答えた。

「私たちに金を恵んでもらえないか？」

「は？金だと？」

いきなりなにを言い出すかと思えば、金か。

俺は不審者を見る目で相手を見た。

「何とも言えない空気になったが、ツインテールの少女が話を切り出した。」

「え、えつとね、私たちお金に困ってるの。私たちがこれからパフォーマンスをするから、良かったら恵んでもらえないかなあくて。」

と、少女は付け加えるように言った。なるほどな。

まあ、この二人が一般人だったら考える余地はあっただろう。

しかし、こいつらは間違いなく教会の者ども。聖剣がそれを証明している。

何か良からぬことを考えているのだろうと疑った。教会の奴らは神の名の下であれば何しても良いという思想だからな。よって俺はカマかけてみることにした。

「パフォーマンスか。なるほどな。そのパフォーマンスとやらは、お前たちが今持っている聖剣でなにか切るのか？」

「!!!」

俺が聖剣というワードを出した途端、二人は顔色を変え、俺から二、三步離れた。

「おまえ、何故聖剣のことを知っている？ふつうの一般人ではないな。こちらの世界にかかわるものだな？」

メツシユの少女は早くも臨戦態勢となっている。聖剣は抜いていないが、動ける状態に入っている。

「ああ、そうだ。」

先ほどの言葉でもう俺が一般人ではないことは知れたので偽ることなく応える。

「答えろ。貴様、何故聖剣に気が付いた？」

「あなた、まさか聖剣を奪った関係者？」

おっと、まさか聖剣を奪ったやつのおとをいられるとはな。余程必死なのだろうか。

「さあ、どうだかな。」

俺は答える気はないので適当に言っただけ。

二人は俺の言葉をきき、より一層表情を険しくさせる。

「答えろ。さっさと答えないのなら、痛い目を見るぞ。」

二人は聖剣を取り出し、俺に見せつけた。

脅しのつもりなのだろうが、全く持って脅威ではない。

「やってみなよ。聖剣使い。」

「後悔するなよ!!」

俺の挑発に乗ったメツシユの少女は人払いの结界を張り、聖剣でこちらに切りかかってきた。

「はああっ!!」

ドゴオン！俺はその聖剣の刃を避ける。

空を切った聖剣はそのまま地面に振り下ろされた。

地面は抉れ、小さなクレーターが出来ていた。

「ほお、随分とパワーがあるんだな。」

これが七つに分かれた聖剣の一本か。どうやら破壊力を重視したものか。

俺は教会が謳っている贗作聖剣がどんなものかと見てみたが、案外まだまだ強いことに少し感心した。

「そうだ。その名も破エクスカリバー・デストラクション壊の聖剣だ。」

「こつちも忘れないでよねっ!!」

背後から今度は日本刀のような形をした剣で切りかかってくる。

前と後ろの挟み撃ちをされるが、俺はその剣戟を躲していく。聖剣なんてそこそこ大層なものを持ってはいるがその使い手が残念極まりない。先ほどからこの二人から繰り出される剣撃は全て空を切っている。俺の知っている本物の騎士王はそれはそれは凄まじかった。比べる事すら失礼なほどに。

「どうした？さっきから攻撃がまるで手に取るようにわかるぞ？教会の聖剣使いがこれとは正直笑えないぞ？こんな基礎も成っていない奴がわざわざこんなところに来たのはご苦労なことだ。それとも、教会はこの程度の人材しかいないのか？」

俺が挑発すると、二人は怒りをあらわにする。まあ、教会にはそこそこ強い奴もいるが、この二人はあいつらの足元にすら立っていない状態だ。

「貴様、我らが教会を愚弄するか!!」

「調子に乗らないでよね!!」

頭に血が上がった二人はほぼ同時に攻撃を仕掛けてきた。

なるほど、波長は合っているのだろうか。チームワークはそこそこあるのか。

ならばこちらも見せてやるとするか。

俺は魔法陣を出現させ、異空間に保管してある俺の切り札その0を取り出す。

「はあっ!!」

「やあっ!!」

振り下ろされた聖剣は俺に届くことは無かった。

ガキーン!!!

刃と刃がぶつかる音がすると同時に俺の目の前で阻まれた。

「なっ!」

「どうなっているの!?!?なんで何も無い空中で止まっているのよ!?!」
二人の聖剣は空中で止まっている。

それは俺が取り出した見えない透明化している剣で防いでいるからだ。ただ、目に頼っているこいつらは今どのような状況なのかわかってないだろうな。

「ぐうっ!!」

「くっ!」

俺は剣を振りぬき、こいつらを吹き飛ばした。

「はあ、はあ、はあ……こいつ、一体……?」

肩で息をしている二人。

まだまだこれからだというのに、もうばてているのか。

それはまあいい。分かり切っていたことだからな。こちらは聖剣を取り出した。さて、そちらも本命を出してもらおうかな。

「なんだ?この程度か?聖剣使いが訊いてあきれれる。それと、そちらの聖剣使い。もう一本あるのだろうか?出し惜しみしているのか?」
俺が指摘すると、メツシユの少女は何故分かった?とでも言っているような顔をした。

気づかれてないとも思っていたのか。

「……ゼノヴィア……」

ツインテールの少女はメツシユの少女の方を見る。

「仕方ない。ここでやらなければ、チャンスがない。」

メツシユの少女は持っていた聖剣をしまい、言霊を唱えだした。

「ペトロ、バシレイオス、ディオニュシウス、そして聖母マリアよ。

我が声に耳を傾けてくれ。」

空間が歪み、歪みの中から一本の剣の持ちての部分が現れる。メツシユの少女はそれを手に持ち、狭間から一気に引き抜く。

「その刃に宿りしセイントの御名において、我は解放する。――

―デユランダル!!!」

完全に姿を現した新たな聖剣。それは青く輝く聖剣であった。

なるほど、デユランダルだったか。たしか、シャルルマーニユ十二勇士の一人、ローランの剣だったか。ローランとはあつてみたかった

ものだ。

破壊力に優れる聖剣ではあるが、果たしてどのくらいなのか。

「こいつは触れた物はなんでも切り刻む暴君だね。これに触れれば無事じゃすまないぞ。はあっ！」

新たに表れた聖剣、デュランダルを武器に突進してくる少女。

だが……

ガッ!!

「何っ!?!」

俺はその渾身の突きを素手、指二本で止める。

「バカな……デユランダルを……素手で止めるなど……あり得ない……」

切り札を完全に防がれた少女は動揺し、動きを完全に止めていた。

おれはすかさず少女に攻撃を与えた。

「ゴホッ!!」

俺は少女の懐に潜り込み、剣の柄でみねうちを決める。

少女は攻撃をくらって崩れ落ちた。

「ゼノヴィア!! 良くもやって——うっ!!」

もう一人の驚きで動きを止めていた少女にもみねうちを決めて昏倒させる。

俺は倒したのを確認して剣を再び異空間にしまった。

やれやれ。聖剣使いと知ってついつい遊んでしまった。しかも、これを出してしまうことになるとは。まあ、透明化させているからこれの正体は知られてはならないはずだ。

そう——俺の大切な幼馴染、アルトリアの愛剣を——



NO, XXVII 戦闘準備開始

誠一SIDE

駒王町、とあるレストラン。

「うまいーうまいぞー！この遠く離れた極東の島国の食事は何でこんなにうまいんだ!!」

「うんうん!!これこれ、これよー！これこそが故郷の味なのよー!」

駒王学園から徒歩15分くらいのところに位置するファミレスで注文した数々の料理を平らげていく目の前の二人組、ゼノヴィアとイリナ。

「……なあ……お前らもつとゆつくりと食ったらどうだ？そんなにいそいでかきこまなくても食事は逃げないぞ?」

俺がゆつくり食べるように催促すると、ゼノヴィアは口に食べ物を含ませながら言った。

「何を、言っている。ゴクン。死ぬほど腹が減っていたんだ。それに、この食事がうますぎるのがいけない!」

ゼノヴィアはそう言ってまた新たなさらに手を付け始める。イリナはイリナでうんうん、とうなずきながら食べている。

この食べっぷりに大食いである小猫ちゃんもこの表情だ。いやいや、小猫ちゃん。あなたもこれくらい食べてるよね?

おっす、俺は誠一だ。

今、このとおり、ファミレスでこの二人に食事を奢っているとろだ。

部室の外にある空き地で少し、手合わせしてそのあとの話だ。

俺と木場はこの二人にあっさり負け、木場は俺たちの目の前から去っていった。このままの状態がおれはいいとは思わない。あいつはこのまま放っておいたら危険だし、はぐれ悪魔に認定されるかもしれない。それなら。

そこで俺はすぐ行動を起こした。

簡単に言えば、木場がおかしく成っている原因、この聖剣事件の案件に首を突っ込んだ。ただ、俺一人じゃない。俺の学園の会長、シト

リー眷属の同じく兵士^{ポーン}である同級生の匙に来てもらっている。最初は「嫌だー!!会長に怒られるー!!」って嫌がられたけど、小猫ちゃんもその現場に居合わせていて小猫ちゃんが無理やり連れてきた。そんなこんなで俺、匙、小猫ちゃんの三人でこの件に挑んだ。

メンバーが決まったので、さつそくイリナとゼノヴィアに接触したわけだ。

で、こうしていま目の前でガツガツ食っている二人だが……金がなあ……まさかこんなに食べるとは思わなかった。テーブル目一杯さらに埋め尽くされている。いや、積み重ねられた皿も含めればそれ以上だ。

と、ゼノヴィアがさらにとんでもないことをしました。

「あ、すみません。これとこれと、これをお願いします。」

「はい、……と、……と、……と……ですね。」

「あ、私はこつちとこつちで。あと食後のデザートとして、これとこれをお願いします。」

「はい、畏まりました。」

あろうことか、まだ注文を追加してるし……しかもデザートまで……さつスキの店員さん若干引いてたぞ……

はあ、これは足りないぞ……まあ、小猫ちゃんもお金出してくれるっていうことだからきつと大丈夫なだけどき。

後輩に金を出させるつもりはなかったが、足りないものは仕方ない。ある程度予想はしてたけど。

ああ、これで今月の小遣いがパアだ。

だが、これも部活のため、仲間のためだ。

木場のあの変わりようにはびっくりだが、これでもともに行動してきた仲間だ。さすがにあれを見過ごせない。小猫ちゃんは俺より付き合いが長いはずだから当然同じ気持ちだろう。

まったく、木場のやつ。心配かけさせやがって。俺の小遣いもお前のために投資してんだ!まったく!これは貸し二つだからな!!!後で絶対契約のお得意様のお姉さま方を紹介してもらう。絶対だ。

「ふう、落ち着いた。まさか、君たち悪魔に手を差し伸べられるとは、世も末だな。」

と、口元を綺麗に拭きながら言う、デザートまで綺麗さっぱり平らげたゼノヴィア。

「はふう、ごちそうさまでしたつと。生き返ったわあくあくああ、主よ、この心優しい悪魔の方たちにどうかご慈悲を・・・」

と、同じくデザートも平らげたイリナはあろうことか、胸の前で十字を切り始めた。

「うあつ!!」

「い、いてえつ!」

当然のことながら、俺たち悪魔には激しい頭痛が襲ってくる。俺、匙、小猫ちゃんは頭に手を当てた。これでも相当のダメージが入ったな。

「ああつーごめんなさい!つい切ってしまったわ。」

テヘツと可愛らしく笑うイリナ。

まったく頼むぜ。俺たち悪魔には辛い頭痛になるんだからよ。

と、水を一杯グビツと飲んだゼノヴィアは先ほどとは打って変わって真剣な表情をしながら口を開いた。

「で、私たちに接触したのは何故だ?先ほどのことがあったのだ。何か理由があるのだろうか?」

いきなり切り出されるか・・・まあ、向こうも偶然会ったなんて考えていなかったか。

俺たちも緊張が走る。ここで失敗してこのプランが台無しになるのはさすがに笑えないからな。

「お前たちは聖剣を奪還しに来たのだろうか?単刀直入に言う。俺たちはお前たちに協力したい。」

俺が目的を言うと、二人は目を丸くしていた。そりやそうだ。俺たち悪魔が教会の使徒に協力するなんてまずありえないからな。しかも一介の下級悪魔がだ。下手したら最悪の事態になりかねない。俺たちは極限の緊張状態の中、彼女らの回答を待つ。

「・・・言ったはずだ。悪魔側は手を出すなど。」

あろうことか、拒否をされてしまった。

この回答に匙、小猫ちゃんは何とも言えない顔をしている。

しかし、先ほどのような威勢は見られなかった。さらに答えるまでに間があった。彼女らはそこまで拒否をするようには見えなかった。

俺はそこに付け込んで説得を続ける。ここで断られてまんまと変えるわけにはいかない！俺の小遣いのこともあるからな!!

「さっきも言っただろう？関係なくはないってな。大体、こちとらこの街に住んでんだよ。勝手に巻き込んでおいて手を出すなはないだろ？この町がボロボロになったら、教会は責任を取ってくれるのか？それに、コカビエルって墮天使の幹部なんだろ？部長も言っていたけど、勝てないだろ？俺たちが言うのもなんだけどさ。だったら数が多いほうがまだましだろ？」

「……」

俺の反論にゼノヴィアとイリナは黙りこくった。

迷っているな。だが、先ほどのように速攻拒否はされなかった。

これはもう一歩か。

「……わかった。君の言うことも分からなくはない。協力を認める。ただし、君たちの正体がわからないようにしてくれ。」

ゼノヴィアが折れてくれた。

「ちよつと！ゼノヴィア！いいの!?!そうはいつでも悪魔よ!!」

イリナがゼノヴィアの判断に異を唱える。まあ、普通はそうおもうだろうな。

「イリナ。冷静に考えろ。まず、私たち二人だけでコカビエルを相手にしてかつ、エクスカリバー三本全てを奪還するのは修羅の道と言えるのではないか？仮に私が奥の手を使ったとしても無事生還できる確率は確実に半分を切る。」

「分からなくもないわ。でも、それでも私たちはそれを覚悟できたのではなくて？」

俺たちを抜きにして繰り広げられる討論。

彼女たちもまた一枚岩でなないのだろうか？たしか、教会にも宗派があったからな。

「確かに覚悟はしたさ。しかし、私たちの信仰は柔軟でな。気が変わったのさ。任務を完遂し、無事帰還することこそ、真の信仰ではないのか？」

「それは・・・そうだけだよ・・・けど上への報告はどうするの？何度も言うけど、セーイチ君たちは悪魔なのよ？上はそんなことを絶対に認めないわ。」

「それについては心配ない。もちろん私たちは悪魔の力は借りはしない。だが・・・」

ゼノヴィアの視線がこちらに向いた。

「この極東の島国にイグニタス・クロスギア紅炎龍児の双籠手の使い手がいた。偶然とはすごいものだ。上は確かに悪魔の力を信用するなどは言ったが、ドラゴンの力については触れていない。任務中、偶然にも今代のイグニタス・クロスギア紅炎龍児の双籠手の使い手に遭遇。協力を仰いでコカビエルたちと戦った、上にはそう報告しておけばいいだろう。それにイリナの幼馴染なのだろうか？信じてみようじゃないか。ドラゴンの力を。」

なんかえらく期待されてしまっている。

待つて!!すごいプレッシャーがのしかかってくるからそれ以上期待はしないで！

「わかったわよ・・・」

先ほどから最後まで反対をしていたイリナがようやく折れてくれた。少しヒヤツとしたが、上手くいった！

「よし、OK。商談は成立だ。契約通り、俺はドラゴンの力を貸す。ついでに、これからもう一人メンバーを呼ぶぞ。」

俺は懐から携帯電話を取り出して木場に連絡をしてここに呼びつけた。

俺が木場に連絡をしてから数十分後、俺たちのいるファミレスに顔を出した木場。俺が手を振って俺たちの座っているテーブルの位置を知らせて招いた。そして、俺の口からこうなった経緯を説明した。

「なるほどね。大体理解したよ。しかし、正直に言うとう聖剣使いに破壊を承認されるのはいささか不本意だけどね。」

俺たちのいきさつを聞いた木場はそうのように言った。

すると、ゼノヴィアはそれに突っかかってきた。

「ほう、こちらが最大限譲歩をしたというのにずいぶん物言いだな。おたくがはぐれだったら即切り飛ばしていたというのに。」

ゼノヴィアも言い返す。にらみ合う両者。おいおいおい、待て待て待て。これちよつとヤバい雰囲気じゃないか?!このままではまずいな。

「おいおい、これから一致団結してコカビエルを相手にしなきゃなんねえんだぞ?今から衝突はやめてくれって。今は利害が一致しているんだ。今ここで争う必要は無いだろ?」

俺が止めに入ると、木場とゼノヴィアはにらみ合うのをやめた。

「やっぱり、恨んでいるのよね?エクスカリバーと教会を。」

「当然だよ。」

イリナの問いかけに冷え切った声音で答える木場。

「でもね、木場くん。あの計画があったおかげで聖剣使いの研究は飛躍的に伸びたわ。だからこそ、私やゼノヴィアのような聖剣に適応できる使い手が誕生したのよ。」

「それとこれとは別だ。君のようにのほほんとただ聖剣をなんの犠牲もなく使えている奴にはわからないだろうけど、犠牲にされる身からすればたまったもんじゃやない。第一、キミの立場が僕らと同じだったら今と同じようなことを言えるのか?」

木場は憎悪の眼をイリナに向けた。これ以上なく冷徹な眼差しだった。確かにひでえもんだ。

これにはイリナも黙りこくって困っていた。そこにゼノヴィアが言った。

「その件は、私たちの中でも最大級の大罪とされ、嫌悪されたものだ。そいつは問題視されていな、結局は異端の烙印を押されて今は墮天使にしている——その者の名はバルパー・ガリレイ。皆殺しの大司教と揶揄された男だ。」

バルパー・ガリレイね。覚えたぜ。そいつが悪の元凶なんだな。木場も、この情報が入手できただけでも成果は大きいだろう。

「なるほどね。なら、僕も情報提供をした方がよさそうだね。僕は

ここに来る前、エクスカリバーを持った神父に襲撃された。フリード・セルゼン。この名に覚えは？」

「!?なに．．!?やつだと．．!?」

フリードの野郎!?あのクソ神父じゃねえーか！俺もはつきりと覚えてるぜ！あのイカれ野郎まだこの街にいたのかよ。

俺も驚かされたがイリナとゼノヴィアもかなり驚いていた。一体どうしたんだ？

「フリード・セルゼン。元ヴァチカン法王直属、それもかなり上の方のエクソシストだ。若干十二歳にしてエクソシストになった天才中の天才だ。悪魔や魔獣をことごとく消滅させていく功績は当時群を抜いていたと聞く。教会のお偉い様方も相当期待していたと聞いていたな。」

ゼノヴィアから語られるフリードの素性。あのやろう！以外にも上の方だったのかよ!?どおりで強かったわけだ！

イリナも続けざまに言った。

「でも、フリード・セルゼンは唐突に姿を消した．．．．彼のうわきは良いうわさも悪いうわさもそこまでは聞かなかった。ただ、異端とされたわけでもなかったはずよ。当時、お偉い様方も捜索隊を派遣するほど慌てていたようにも見えたけど、詳細は分からないわ。にしても、この地にいるとはね。」

なんか妙な話だな．．．追放されたわけでもないのか．．．まあ、それはいいか。

フリードのことは置いて俺たちは話を元に戻す。と、そこに匙がある疑問を投げかけた。

「なあ、あんたら二人とも、どうしてあの道のと真ん中で倒れてたんだ？しかも少しポロポロだっただろ？腹減っただけじゃああんなにはならないよな？」

確かに、俺もそれは疑問には思っていた。俺が匙、小猫ちゃんと作戦を執行して最初にゼノヴィアとイリナを探したがすぐに見つかったのだ。しかし、二人ともうつぶせで倒れていて、エクスカリバーもむき出しだったんだ。

「ああ、そのことも話そうかと思っていた。実は、君たちに起こされる前、とあるものと戦闘になっていたんだ。」

バトってたのかよ!?しかし、この二人が負けるなんて相当の手練れのはずだ。

「誰と戦ってたんだ?まさか、フリードか?」

俺は相当強くて心当たりのある奴の名を出した。

「いいえ、違うわ。その相手は教会の人間でも、墮天使でもなかったわ。人間だったのは確かよ。こちらの世界を知っている人間ね。」

人間か・・・しかも、教会の連中でもないらしい。誰だろうか・・・?この二人に勝てる人間なんてこの街にいるはずが・・・

俺が施行を巡らしていると、パフェを食べていた小猫ちゃんが言った。

「その人間。もしかして金髪の男ではありませんでしたか?」

「そうだ。金髪の男だった。」

それを聞いて、俺は思い出した。

「そいつ!俺たちとも戦ったことあるぞ!魔法を使うやつだ!」

そう、俺たちがはぐれ悪魔を退治しようと思っただけなのにそれがその現場においてそのまま戦うことになった。忘れはしない。木場もその男は記憶に新しいはずだ。

「魔法?私たちは魔法など一切使われずにやられたぞ。」

「ええ。しかもなにか妙だったんだよね。何か武器のような物でみね打ちされたのよ。」

魔法を使わなかった?だとしたら別人なのかもしれない・・・。「ともかく、その男にも気を付けたほうがいい。私がわずかに感じただけだが、奴からは何か神聖のようなものも感じた。しかし、強さは尋常ではなかった。私たちの聖剣がまるで効かなかった。」

なんだって!!?聖剣をもろともしねえっていうのかよ!!やばいやねえか。そんな相手かもしこの聖剣計画に関わってたならさらに事態はまずいな。俺たちはただでさえ腕に自信があるとは言えない。だから俺は提案をした。

「よし、取りあえず、エクスカリバーの奪還、もしくは破壊の共同前

戦だ。これは俺のケータイの電話番号とメールアドレスだ。何かあれば連絡してくれ。」

「ああ、分かった。」

俺たちはとりあえず大まかに話がまとまったところでお開きということにした。その際、お互いの連絡の為に番号を交換した。

「では、そういうことで行こう。紅炎龍児イグニタス・クロスギアの双籠手の使い手よ、今回の食事の件は素直に感謝する。いつかこの借りは返そう。」

ゼノヴィアはそういうと席を立つ。俺は面食らってしまった。

意外だったな。悪魔に対して良い感情を持ってないだろうゼノヴィアから礼を言われるとはな。

「セーイチくん！私からも礼を言うよ！今回はありがとね！とっても美味しかったよ。危うくコカビエルと戦う前に死んじやうところだったわ。セーイチくんの奢りなら主も許してくれると思うの！じゃあね。」

イリナもウインクしながら礼を言ってくる。おいおい、そんなんでいいのか？キミの主への信仰は。

二人がこの店から出ていくのを見て、俺たちはほっと一息ついた。

ああ、やっと緊張から解放されたぜ。小猫ちゃん、匙、木場もリラックスしている。

かなり危ない橋を渡ってしまったが、何とかうまくわたることができたな。我ながら大胆すぎる行動だったな。

すると、木場が俺たちにこの件の動機を聞いてきた。

俺は素直にしゃべった。さらには小猫ちゃんが木場に上目づかいと涙目で眷属でいるように懇願されていた！これには俺もときめいちやったぜ！小猫ちゃんもこんな表情するんだな。普段はこう．．．なんだ、ポーカーフェイスっていうか、表情が表に出ることがないかな。これには木場も断れなかつただろうな。いや、断ってたらぶん殴ってたが。

「なあ、木場。俺さつきから蚊帳の外なんだが、お前に何があったか教えてくれないか？お前がエクスカリバーとやらと一体何の関係があるんだ？」

と、先ほどから黙って話を聞いていた匙が木場に尋ねた。そういえばそうだった。匙はシトリー眷属だから知らないのも当然だ。匙からしてみれば、いきなり教会側とこんな話をして断片的にしかわからなかっただろうから。

「・・・そうだね、少し話をしようか。」

コーヒーに口を付けた木場はうつむきながら話をした。聖剣エクスカリバーのこと、使い手の非人道的な実験のこと。それを聞き終えると匙は号泣しながら言った。

「うおおおお!!木場あ!!お前、そんな悲惨な目にあつたのか!!!辛かっただろう!!俺は今お前にひじょーに同情している。わかる!わかるぞ!!お前が恨んでいるのは至極当然だろう!!OK!わかった。そういうことなら、俺もこの件に協力しよう!会長のしごきは覚悟のうえだな。俺もいつちよがんばるからよ!お前も、救いの手を差し伸べてくれたグレモリー先輩を裏切るんじゃないぞ。」

匙がとてもいい言葉を並べてくれた。これには木場もうなずいた。ともかくにも、こうして俺たちの共同前戦は無事発足され、行動にさつそく入ったのだった。

————◆◆————

イツセーSIDE

「またか・・・」

よう!!

俺はイツセーだ。

俺の目の前には、教会所属の神父とみられる男の遺体がある。白い神父服が見事なまでに真っ赤に染まっている。それも一人ではなかった。集団で殺されていた。なるほどな。どうやら、俺の生徒は優秀らしいな。聖剣を盗んだ人騒がせな連中はこの辺にみるとみて間違いないな。まあ、人騒がせな連中であることは間違いないが、面白いことをした連中でもあるけどな。教会にカチコミをかけて聖剣盗むなんざ、どの勢力でもフツ―はやろうとは思わないだろうからな。

俺は先日、俺の生徒からの手紙を受け取った。しかし、また後日に新たに手紙が届けられたんだ。

内容は件の聖剣の強奪事件の最新の情報だ。ちなみに、今ここにその手紙はある。

あ、センサー。元気してる？
相変わらずの始まり方だが、それは気にしないでおう。

聖剣を簡単に盗られた教会のマヌケさんたちの情報が更新されたよ。多分なんとなくセンサーも気づいていると思うけど、聖剣を盗った連中、リーダーのコカビエルだけど、潜伏場所がな、な、なんと、センサーがいる日本にいるってー！やったね！センサー。これでバトル相手ができたね！

なにがやったね！だ。全く。来てくれるのはありがたいわけではないが、ここは一般市民もいるんだぞ。それに、ここで戦うにはいろいろ問題も起きるってのに……にしても、なんでこんな日本の郊外の都市に……ああ、そういうことか。

センサーもわかったよね。コカビエルっていう墮天使は、墮天使組織のなかでも相当な戦闘狂なんだって。センサーと同じだね。まあ、センサーはその格と規模が違うけどね。センサーのいる町って悪魔の魔王の妹居るんでしょ？そこで人騒がせ起こしてまーたあの三大勢力の戦争を起こしたんじゃない？馬鹿だよー今時そんなことで戦争起こるわけないのにね。ましてや、そこは悪魔の土地でも天界の土地でもないのに。

なるほどな。要するに現魔王、サーゼクス・ルシファーか、セラフォル・レヴィアタンをどうやっても引きずり出したらしいな。そうならばここは恰好の場所ってわけか。なんせ、現魔王の血縁者が二人もいるからな。三大勢力のトップどもか。誰とも会ったことがないからな。もし、よそでやってくれるならそれはそれで面白そうだな。

そうそう。あともう一つなんだけど、教会が所有する贗作聖剣は全部で七本だけど、一本行方不明って言うってたじゃない？そのことだけど、行方不明になっているあともう一本の聖剣の在り処が絞れたんだよねー大体十か所くらいにね。興味本位で探してみたけど、運よく反応が見られたよ。

その知らせを聞いて俺は感心した。凄いな。まさか、そんなことま

でやっていたとは知りもしなかった。この子は昔から探索、隠密に優れていた。それ関係の魔法ならば、かなりの手練れだ。

ねえ、センサー凄いい？褒めて褒めて？

いわなきや褒めてあげたのに……まあ、次来たときは何かしらねぎらいの言葉をかけよう。

見つけたら私、どうしよう？私がもらっちゃっていいのかな？

もらったはもらったで教会のやつらがこぞってそれを取り返しにくるぞ？というか、魔法使いだろ？今さら聖剣なんて持ってどうするんだ。まだ見つけてないから何とも言えないが。まあ、今は手紙でしかこの子のことはわからないから彼女の判断に任せるとしよう。

とまあ、手紙を読み進めていき、最後にはこんなことが書いてあった。

て、そんな感じで報告終わりま〜す♪ P. S ペンドラゴン家の長男が動いたようだよ♪どうやらあっちも聖剣に気が付いてるかも。

と軽い雰囲気の手紙は終わった。

なるほど、ペンドラゴン家の長男がな〜々今までおとなしいやつばっかだったからな。ついに殻を破るものが生まれたか。

兄さん。どうやら、今代はすごいかもしれないぞ？

—————◆◆—————

No, XXVIIII　　く明かされる真相く

セイイチSIDE

おっす、おっす！

誠一だ。先日、俺は小猫ちゃん、シトリー眷属の同じく兵士^{ポーン}である匙とともに教会の使徒であるゼノヴィアとイリナにこの聖剣強奪事件の協力を申し出て、悪魔、教会の共同戦線を設けることになった。まあ、危ない橋を渡ったがな。そこから数日、俺たちは悪魔なのに神父の恰好をしてこの町の捜索に出た。その間、フリードや木場が聖剣を恨む理由ともなった皆殺しの大司教、バルパー・ガリレイとの戦闘になった。そいつらはこちらが人数的に有利だと判断し、逃げられたがな。しかし、そこは問題じゃなかった。いま、木場との連絡が取れない。もちろんイリナとゼノヴィアともだ。バルパーとフリードを追ってあいつらは姿を消してしまった。深追いは危険なのだが、今の木場には何を言っても通じないだろう。とにかく、三人の無事を祈るしかなかった。そして、俺たちは部長に見つかってしまった。まあ、わかってたことだ。部長にばれるのは時間の問題だったしな。匙は匙で気の毒だったな。会長に魔力込みの尻たたきを千回もやられていたからな。対して部長は俺たちのことを抱きしめてくれた。ああ、見たか？俺、部長の眷属でよかったよ…….と思っていたら俺も尻たたきをされてしまった…….あの日、俺の尻は半壊した――

おっと。今は悠長に話をしている場合じゃなかった。突然だが俺たち、今、大変やばい状況です。

どうしてか、だって？

それはだな…….今俺たちの目の前にいる相手が相手だからだ。

「ククク…….ずいぶん手を焼いているようだな…….フリードよ…….」

「旦那じゃないっすか!!来てたんすね!!」

俺たちは再度、フリードとバルパー・ガリレイに遭遇した。俺たち

は戦闘に入った。その時、部長、朱乃さんが救援に来てくれたのだ。これで有利な状況になったと思いきや、俺たちの目の前にとんでもない人物が現れたのだ！

俺たちの目の前には、一人の墮天使が空中に浮かんでいたのだ！

さつきからこの墮天使から感じるオーラ、プレッシャーが尋常ではなかった。この重圧は並みの上級悪魔と比にならないんじゃない？

「!?」

部長が驚いた表情で奴を見た。俺もそれにつられて奴を再度視認する。

月を背景にして宙に浮かんでいる墮天使。墮天使を象徴する漆黒の翼。しかし、問題はその翼の枚数だった。

墮天使、天使は翼の枚数が二枚、四枚、と順に数が増えるにつれて実力も上がっていくという特徴がある。今、俺たちの視界に映る墮天使の翼はなんと六対、十二枚の翼だった!!

「熾^{セラフ}天使と同じ十二枚……」

この事実には部長もそれが表情に出ていた。

部長が言っていたセラフってあれか？天界の一番強い天使たちの総称だったような気がする。まえその名前を覚えさせられたからな。ミカエルとかガブリエルだっけな？何人かいたような気がする。ガブリエルさんか……。確か、天界で一番美しい天使だって聞いたな。会ってみたい……

それはさておいて俺は墮天使のほうに思考を戻す。装飾の凝った黒いローブに身を包んだ若い男の墮天使……。俺たちを捉えると苦笑していた。

「相まみえるのはこれが初めてだったな。はじめましてだな、グレモリー家の娘よ。その兄同様の紅髪が美しいものだ。貴様の兄君を思い出しそうで反吐が出そうだな。」

こちらを侮蔑するような目で言う墮天使。

それに対して部長も冷徹な目で墮天使を見ていた。

「ごきげんよう、落ちた天使、神の子を見張るものの幹部

コカビエル。私はリアス・グレモリー、お見知りおきを。忠告をして

おくけれど、グレモリー家と我らが魔王は近くして遠い存在。この場で、政治的なやり取りをするというのなら、お引き取り願おうかしら。私に接触したところで無駄だわ。」

コカビエル。部長は確かにそう言ったのだ。じゃあ、やはりこいつが今回の聖剣騒動の首謀者というわけか！

聖書にするされし墮天使。昔の大戦争を生き残ったあのコカビエル。やはり、強者だけあつて尋常じゃない雰囲気醸し出している。

と、目を凝らしてよく見るとコカビエルは右手に何かを抱えている。あれは・・・人・・・？

「ふんっ。こいつは貴様らへの土産だ。」

と、コカビエルはひよいとこちらに抱えているものを投げた。

「うおっと!!」

ガシッ!

俺は咄嗟に身体が動いてコカビエルがこちらに放り投げたものをギリギリのところでキャッチした。

俺は地面に落ちる前に抱き留めた子を見た。

「なっ!お、おいっ!イリナ!!すっかりしろ!!」

なんと、コカビエルが放り投げたのは俺の幼馴染のイリナだった。俺の手は血が滲んでいた。全身は傷だらけ。呼吸も荒かった。確か、先日の戦闘で木場、ゼノヴィアとともにフリードたちを追っていたはずだ。イリナは俺の呼びかけにも応答しない。生きてはいるがただ苦しそうに呻くだけだった。

さらにはイリナの持つていた聖剣がない。奪われたのか？

「俺たちの根城に三人そろってきていたぞ。折角来たのだからそれなりの歓迎はしてやった。金髪の男と青髪の女は逃げ足は速かったからな。取り逃してしまったがな。」

コカビエルは弱すぎて話ならなかったと言うかのように嘲笑しながら言った。良かった。ひとまず、あいつらはあいつで逃げ延びたよ。うだ。

「アジア!!来てくれ!!イリナを頼む!」

「は、はい!!」

俺はイリナをゆつくりと地面に寝かせながらアーシアを呼び、アーシアの神セイクリッド・ギア トワイライト・ヒーリング器、聖母の微笑で治療してもらおう。アーシアはイリナの近くで地面に膝を付けて神器を発動させる。アーシアの手からは緑色の光が発せられ、その光はイリナの傷ついた体を包み込む。イリナの体に見られる傷はみるみるうちに消えていく。

イリナの表情は徐々に緩和していき、呼吸も落ち着いてきた。

イリナの治療が終わったところで俺は奴らのほうを向いた。コカビエルは聖剣を持ってはいない。一体どうしたんだ？

コカビエルは俺の疑問などお構いなしに可笑しそうに言った。

「フハハハッ!!笑わせてくれる——たとえば気が狂ったとしても魔王と会談などというバカげたことだけはしない。俺の目的はそんなことではないからな。まあ、魔王の妹である貴様を犯し、殺せばサーゼクスの怒りと憎しみがこの俺に向けられることもあるかもしれないな。まあ、それも悪くない。」

コカビエルの言葉に部長は侮蔑の視線をやつに向けながら言った。「……………それで？私との接触に何の目的があるのかしら？」部長の問いにコカビエルは嬉々として答えた。

「魔王の妹の根城、いわば悪魔の領地なる場所であるこの都市、特に駒王学園でひと暴れさせてもらうぞ。あのシスコンの魔王のことだ。妹の根城に墮天使の幹部が現れ、暴れていると知ればさすがに出てこざるを得まい。」

それを聞いて俺は驚いた。なんてこった……………あいつ……………魔王様と戦う気なのか……………？

「いいのかしら？そんなことをしても。あなた、自分が何をしようとしているのかわかってるのかしら？そんなことをすれば————また繰り返されるわよ？あの戦争が。」

「ああ、わかっているともさ。再び戦争が起こるのは願ったりかなかったりだ。教会が信仰の次に大事にしているエクスカリバーを盗めばミカエルたちは戦争を仕掛けてくるかと思えば……………こちらによこしたのは雑魚の神父と聖剣使い二人だけだ。つまり。あまりにもつまらん。とてつもない肩すかしをくらった。エクスカリ

バーでも戦争にはならなかった。だから保険として貴様ら魔王の妹の根城で暴れるのさ！」

コカビエルはイライラを募らせながら言った。

これには部長も舌打ちをする始末。そうとうキレていらっしやる。なんて計画だ！ここで暴れるのも、もともとそのつもりだったってことかよ！

聖書に疎い俺でも名を知っているミカエルのような大物にも嬉々として喧嘩売っていやがる。なんてやつだ！

「……戦争狂め」

部長は忌々し気にそうつぶやくが、コカビエルは嬉々として語った。

「そうさ、そうだともし俺は大戦が終わってからというものの、退屈で死にそうだったのさ！ほかのやつらは戦争に消極的。アザゼルの野郎も次の戦争はないという始末だ!!耐え難い!耐え難いんだよ!!!だから————貴様の根城で暴れさせてもらおう。戦争をするためにな!!エクスカリバーを試すのにもちようどいい。戦争を始めよう!魔王サーゼクス・ルシファアの妹!」

滅茶苦茶だ!あいつ!マジで戦争を始めるともりだ!

コカビエルは高笑いしながら十二枚の翼を広げて学園の方向へ向かった。フリードたちも魔方阵で転移していった。

これを見た部長はすぐさま指示を出した。

「みんな!急いで学園へ向かうわよ!」

「!!はい!!」

学園につくと会長とその眷属たちがいた。

会長たちはこの学園に決壊を張ると言う。しかし、それは気休めではなくコカビエルが本気を出さずしても決壊を破壊できるんだとか。俺たちはサーゼクス様、魔王様御一行が到着するまでの一時間、何とかしてコカビエルたちを相手どらなければならぬ。

行けるのか?相手はあの聖書に記されしコカビエルだ。俺たちでは敵わない相手だ。先ほどのあのプレッシャー。思い出すだけでも体が震えてくる。

これは、覚悟するしかねえ。行くか!!

俺は、俺たちは全員腹をくくってコカビエルがいる学園の運動場へ向かった――



「フーン! やつとききたか。待ちくたびれたぞ。バルパー、聖剣の統合まであとどれくらいだ?」

「あと五分くらいで完成する。」

「フツ、そうか・・・」

俺たちが校庭につくと、すでにコカビエルとバルパーがいた。

何やら怪しげな魔方陣を発現させていた。そして、その魔方陣の四隅には四本の聖剣が浮いている。

「それで? ここに来るのはセラフオルーか? それともサーゼクスか? いい加減来ないなんてつまらないことは止してくれよ?」

コカビエルは宙に浮きながら言う。

「お兄様とセラフオルー様に代わってこの私が――」

「チツ」

カツ!! ドオオオオオオオオン!!

部長の言葉をさえぎってコカビエルは舌打ちをした。

その瞬間、とてつもない爆音と爆風が俺たちを襲う。爆発が起こった方向を見ると、そこにはあったはずの体育館が綺麗さっぱりなくなっていてそこんみは超巨大な槍みたいなのが突き刺さっていた。マジか・・・あれがコカビエルの光の槍なのか・・・? う、嘘だろ・・・

『ビビってるの?』

コカビエルのあまりにもデカイ光の槍に恐怖している俺に相棒であるアグニルが俺に意思疎通してきた。

「(当然だ!! あれは普通じゃない! 規格外だ! 俺を殺したレイナーレとは比較にならねえじゃねーか!!)」

『そりゃそうだよ。コカビエルは聖書に記されるほどの古からの強者。過去の魔王に加えて聖書の神を相手にして生き延びてきた正真正銘の強者だよ。』

分かってはいたさ。コカビエルは大戦を生き残るような本物の強者だということ。

でも、でもだ……

あんなのを見せつけられたらそう思ってしまうに決まってる！

『まあ、そうだねえ。あの槍、君たちなんでもちろん。最上級悪魔だつて一瞬だよ。蒸発するね。それくらいの威力だよ。しかも、あれでまだ全力ではないね。にしても、コカビエルもあの大戦の時よりもさらに強くなってるね。相当鍛錬を積んだようだね。』

「(マジかよ……あれで本気じゃねえのか……俺は……俺たちはあいつを相手にして勝てるのかよ……)」

『まあ、いざとなったら僕が何とかしてあげるよ。倒せないとしても魔王がここに来るまで時間は稼げるさ。』

そんなレベルかよ……

しかも大戦の時より強くなってって冗談でも笑えねえ。

「フツ——つまらん。またこれか……まあいい。余興にはなるだろう。出てこい、ケルベロスたちよ。」

コカビエルはパチンと指を鳴らす。

すると、闇夜の中から地響きを鳴らしながら出現する物体。それは見上げなければならぬほど巨大な存在。デカイ犬。それならばどれだけよかったか。出てきた魔物は三つの首と顔を持ったオオカミのようだった。

「——ケルベロスですって!!?!」

部長も顔を歪ませる。

「地獄の番犬をここに持つてくるなんて!!皆!今すぐ消し飛ばすわよ!!アーシアは下がって皆を回復させて!」

「「はい!!」」

部長は指示を出し、アーシアを後ろに下げる。そして自らも前に出て攻撃を行う。

「朱乃!!」

部長と朱乃さんは翼を展開させて宙へ飛び出す。

「雷よ!!」

「喰らいなさい!!」

朱乃さんは得意の雷の攻撃、部長はおなじみの滅びの魔力がケルベロスに炸裂する!

しかし、その攻撃を喰らってもなお立ち上がるケルベロス。タフな奴だぜ。

「隙あり」

しかし、その立ち上がるスキを小猫ちゃんは見逃さない。戦車ルックのパワーで圧倒する。

俺も負けてられねえ!!

「紅炎龍児の双籠手!!こいやワン公!!」

俺は神セイクリッド・ギア器を出現させて二匹目のケルベロスを挑発する。案の

定、そのケルベロスは俺の方へ意識を向ける。

ゴウツ!!

ケルベロスは口から火炎の球を打ち出した。それも三匹の口から同時にだ。

「はっ!!」

俺はそれを躲し、攻撃を仕掛ける。

「炎だったら、こっちも負けてねえぜ!!」

俺は自分の周囲に炎の球を出現させ、それをケルベロスに向かって撃った。この技はライザー戦の時にも使ったものだ。修行の末、何とか者にすることができた。

俺の狙いは目だ。たとえ地獄の番犬であろうとも、生物である以上目というのは急所の一つだ!!

「ギャウツツ!!?」

俺の撃った火炎の球が見事に命中。これでこいつの視界を奪った。これで事を有利に進められる。

次の攻撃に移ろうとしたとき、後ろで耳に響くうなり声。後ろにはまだいたのだ。

三体もいるのかよ!!やばい、アジアが危ない!!

「アジア!!」

ケルベロスはアジアに襲い掛かる。しかし、それには及ばなかつ

た。ケルベロスの首が飛んだのだ。

まさか・・・これは・・・

「やあ、待たせたね。」

「加勢に来た。」

木場とゼノヴィアだ。つたく。来るのが遅いんだよ！

ゼノヴィアと木場が来てから俺たちの状況はたちまちよくなった。

ゼノヴィアの聖剣が火を噴いた！ケルベロスを容赦なく切り、消滅させていく！

やっぱ聖剣は強えぜ。魔物に対してはあの威力だ！

「はあっ!!」

部長の滅びの魔力がケルベロスに炸裂!!ついに三体を全滅させる。

「まあ、これぐらいはやってもらわんなあ。」

俺たちの様子をずっと高みの見物を決め込んでいたコカビエルがついに動き始めた。

「————完成だ。」

バルパーがいきなり声を発した。

その刹那、校庭にある四本のエクスカリバーがすさまじい光を発生し始め、それが一本に統合されたのだ!!

「四本のエクスカリバーが一つになった。まあ、あと三本足りないがな。」

「まあいいさ。フリード!!最後の余興だ。そのエクスカリバーをもって戦って見せろ。」

コカビエルがあのかく神父の名を呼ぶと、そいつが暗闇の中から出現する。

「はいな!!ボス!!ふう、まったくボスは人使いが荒いんだから。ま、いつか。これで悪魔をぶった切ることが出来るからな。」

フリードはイカれた笑みをしながらエクスカリバーを手に取った。しかしなぜだ?あいつは手に取った瞬間、あいつの普段からは想像もつかないような真剣な表情を見て取れた。しかし、その表情はすぐにイカれたいつもの顔に戻る。

フリードが俺たちの前に立つと、ゼノヴィアと木場が前が出る。部

長たちも察したのか、この戦いを傍観するようだ。

「バルパー・ガリレイ……僕は聖剣計画の生き残りだ。正確にはあなたの手によって殺された。今は悪魔として生きながらえている。」

木場は冷静言っているがその声には憎悪が含まれている。

「被験者の一人が逃走したとは聞いていた。しかし極東の国で会うとは数奇なものだ。縁を感じるな。ハハハ。」

バルパーが木場に近づき、語りかける。

「だが、君達には礼を言う。おかげで聖剣計画は完成したのだから」
「……………完成だと？」

「君達、被験者にはエクスカリバーを十全に操るほどの因子はなかった。誰一人とな。そこで、私は一つの結論に至った。被験者から因子だけを抜き出せば良い——とな」

「っ!？」

「なるほどな……私たちが聖剣使いとして祝福を受ける際、体に入れられるのがあれというわけか。」

ゼノヴィアだけが理解しているようだった。どういうことだ？

バルパーは自慢げに懐から輝くクリスタルのようなものを取り出しながら語った。

眩しい。聖なるオーラに満ち溢れている。あれが聖剣の因子なのか？

「その通りだ、聖剣使いの少女よ。そして私は因子を結晶化することになった。その一つがこれというわけだ。最後の一つになってしまったがね。このおかげで聖剣使いの研究は飛躍的に向上した。だと言うのに私を異端として追放しておきながら、私の研究だけは利用しおって。あのミカエルのことだ。被験者から因子を取り出して殺してはいないだろうか。」

「……………だったら、僕達も殺す必要は無かったはずだ。それなのにどうして……………」

木場がさらに憎悪を募らせる。

「おまえ達は極秘計画の実験材料にすぎん。用済みとなれば廃棄す

るのは当然だろう?」

「僕達は役に立てると信じてずっと耐えてきた……だというのに……」

木場は手を怒りで震わせ、その怒りから生まれる魔力を全身から放つ。すさまじい迫力だ。

バルパーが木場の足元に結晶を投げる。

「欲しければくれてやる。今ではより精度の高い物を量産する段階まで来ているからな。それはもう必要ない。」

木場は結晶を手にとって呆然と見つめた。

結晶を握り締めて、体を震わせる。

涙を流しながら。

その時だった。

結晶が淡い光を放ち、校庭を包み込むように広がった。

木場の周りにポツポツと光が湧き、人の形をとる。それが木場を

囲ったのだ。

なんだ? いったい何なんだ?

『あの少年は至ったんだよ。』

俺が疑問に思っていると、アグニルが俺に語り掛けたのだ。

至ったって、どういうことだ?

『セイクリッド・ギア神 器は所有者の想いを糧にする。それを糧にして進化し、変化

し続けるもの。それとは別に、世界に漂う流れに逆らうほどのものに

なったとき、それに至る———バランス・ブレイカー禁 手 化にね。』

バランス・ブレイカー禁 手 化か……俺にもできるんだろうか?

『それはキミ次第さ。』

木場は新たに魔剣を創造する。

新たに想像した魔剣はそれまでのものとは別格のものだった。な
んせ、本家本元の聖剣を凌駕してるのだから。

さらに、ゼノヴィアはなんと、伝説の聖剣であるデュランダルをこ
こで出してきた!

!!
なんと、ゼノヴィアは天然の聖剣使いだった!!これはおどろいたぜ

木場の聖魔剣に加えて、デュランダルを相手にしてフリードはたちまち劣勢となり、最後はその聖剣ごとフリードを切り倒したのだ。

「ありえない……こんなことは……聖魔剣だと……? 反発しあうこの二つの力が交じり合うなど……そうか! わかったぞ! これを見るに、神と魔王は過去にもうs——ゴフツ!」

バルパーが何か答えにたどり着きそうだった瞬間だった。コカビエルが放った光の槍がバルパーを貫いた。

「バルパー……その答えにたどり着いたということはお前は優秀だった。さぞ、追放したことを教会は後悔するだろうさ。まあ、しかしお前もここまでだ。」

嘲笑いながら宙に浮かぶコカビエル。

「ハアーハツハツハツハツハツハツハツハツ!!!」

哄笑を挙げながらコカビエルは初めて地面に足を付けた。

———圧倒的だ。やはりケルベロスなんかとはわけが違う……

「おい? どうした? かかってこないのか? せっかくそちらに先行を譲ってやろうというのにな。」

自身に満ち溢れたコカビエルの言葉に部長は激高する。

「ふざけないで!! 私たちにチャンスを与えるというの?!!」

「おれは至って大まじめだ。それに、ふざけているのは貴様の方だ。俺を、倒せるとでも思っていたのか?」

眼光だけでもこの圧力。全身に突き刺さる恐怖。

しかし、部長はここでひるまず、コカビエルに攻撃を与える。

「朱乃、セイイチ!!」

「雷よ!!」

「消し飛びなさい!!!」

「ドラゴン・ファイア!!」

朱乃さんと部長、さらには俺の三人同時攻撃だ!! しかも、部長の滅びの魔力は今までで一番デカイものだった。

俺たちの攻撃はまっすぐコカビエルへ向かった。

どおおん!!!

コカビエルは避けることもなく、攻撃に当たった。

「くくく……その程度か？」

立ち込める煙が晴れ、その中から出現したコカビエルは無傷だった。そんなばかな！倒せないのは分かっているが無傷なんて!!しかも三人の攻撃だぞ！

「まだよ!!!」

俺たちは再度攻撃をする。しかし、今度はその攻撃を向けとめられる。

「むん!!!」

「きゃああああ!!!」

「グアツ!!!」

なんと、コカビエルは俺たちの攻撃を受け止めてそれをこちらに投げ返してきた。

俺たちは自分たちの放った攻撃をもろに受け吹き飛ばされる。

「はあっ!!!」

「フツ!!!」

木場とゼノヴィアの聖剣と魔剣のコンビがコカビエルに接近し、剣戟を仕掛ける。

「はっ!!聖魔剣とデユランダルの同時攻撃か!!こい!そうでもしなければこの俺は倒せない!」

キーン!!!

コカビエルは両手に光力で剣を出現させ、聖魔剣とデユランダるを受け止めた。二人がかりの剣戟をあざ笑うかのようにすんなりと裁き、それと同時に攻撃まで加えていた。なんてやつだ!剣の腕もコカビエルはあるっていうのか!

「エイッ」

其の隙について小猫ちゃんが背後から脳天めがけて踵落としを仕掛ける。しかし、コカビエルはその背後からの攻撃を翼で反撃した。翼が鋭利な刃物と化し、小猫ちゃんの体を切り刻む。

「小猫ちゃん!!」

「他人を心配している余裕が貴様にはあるのか？」

小猫ちゃんに気を盗られた木場は聖魔剣にひびを入れられる。
ドンッ!!

コカビエルの衝撃派が二人を襲う。木場とゼノヴィアはなすすべもなく、吹き飛ばされる。体制をただが、肩で息をしていた。

「しかし、仕えるべく主をなくしてまでよく戦う。」

と、戦いのさなかコカビエルは謎の言動を始める。

「どういうこと!?!」

部長が怪訝そうな口調できいた。

すると、コカビエルは可笑しそうに言った。

「フハハハハ!! そうだったな! お前たち下級なものたちには真相は知らされなかったんだな! 戦争を起こすのだ。まあ教えてやろう。先の三大勢力の大戦で、四大魔王に加えて、神も死んだのさ!!」

それを聞いた瞬間、俺たち全員は固まった。

「普通、神が死んだなどということは簡単に口にするのではない事実だ。当然人間は知るべきではない。我ら墮天使、悪魔でさえおいそれと教えるわけにもいかなかった。どこから神が死んだと漏れるかわかったもんじやない。この真相を知るのは各勢力のトップのみだ。他の神話勢力にこれが知れ渡れば、あちらが攻め込んでくることもありえるからな。」

「.....」

俺たちは何も言えなかった。ただ、この真相を受け入れるのに必死だからだ。

「そんな.....嘘だ.....嘘だ.....」

「主が.....死んでいる.....? 私たちに向けられる愛は.....」

「お、おい! アーシア!!」

倒れ込むアーシアを抱き留める。アーシアも信仰していただけあってそのダメージは大きい。教会所属のゼノヴィアはうなだれて先ほどからうわごとををぶつぶつとつぶやいているだけだった。

「ひやははーなんだ、神様は死んでたのかよ!!」

「フリード、意識が戻っていたか。」

と、気が付けばさつきまで仰向けで倒れていたフリードが肩を抑え

ながら校庭の階段を背もたれにして起きていた。

「ええ、旦那。それと、神の死というすんばらしいサプライズな知らせに加えて、おれっちが知ってる教会のもう一つの秘密を教えちゃうよん！」

「ほう、なんだ、言ってみろ。」

コカビエルが愉快そうに言った。

「この碎け散った聖剣は、ニセもんだ!!贋作だったんだよ!!本物のエクスカリバーは他にあったのさ!ひゃーははははははは!!」

何?!エクスカリバーが偽物……?」

それはそうだ、このエクスカリバーは大戦で折れたものを七本になっただけで言ってたが……

「正確には、大戦で折れる前のエクスカリバーも贋作なんだよ!!俺は見たのさ!!本物をよ!!それはそれはとんでもない代物だったぜ!こんな聖剣とは比べ物にならないものだ。そして、教会を去った!!教会の聖剣が偽りと知ったときな!!」

「ほう……ククク……まさか、教会が所持する聖剣が偽物とはな……やれやれ、今日は愉快だ。非常に面白い日だ……しかし、バルパーにとっては知らない方が良かったことだが……」
う、嘘だろ……?大戦で折れる前のエクスカリバーさえも偽もんだというのかよ!!

「……」

俺たちは理解が追いついていない。

神の死に加えて、俺たちが関わってきた聖剣騒動の大元、エクスカリバーが偽物だなんて到底直ぐに受け入れられるはずがない……部長も朱乃さんも、小猫ちゃんも、聖剣をぶった切った木場も困惑していた。

困惑している中、部長の耳元に魔方陣が出現した。

『リアス!聞こえますか!そちらに、正体不明の男が!!』

「何ですって!」

なんだ!?!部長が驚いているけど……何が……

と、その時、俺たちは聞き覚えのある声を聴いた。

「ほう．．．．やはり、聖書の神は死んでいたか。」
「誰っ!？」

俺たちは声の聞こえた方向を向く。そこにはあの金髪の野郎が立っていた。



NO, XXIX 戦闘！そして――

アザゼルSIDE

「はぁー……」

冥界、墮天使領。墮天使の中枢組織、神の子を見張る者の中にある一室には盛大な溜息をつく者が一人いた。

よお、俺はアザゼル。

墮天使どもの頭をやっている。

ところで今、俺は非常に悩んでいる。それこそ、俺の生きがいといえる神器の研究すら手につかないほどにな。

「つたくよお……あの野郎、ほんとにやらかしてくれたもんだ……」
何が起きているかというと、実は俺たちの仲間の一人、コカビエルが人間界のとある場所で暴れてるんだ。しかも、質の悪いことにサーゼクスやセラフォルの妹がいる学び舎で、だ。

コカビエルは神の子を見張る者の中でも生粋の武闘派で大戦が終わった後も何かとヴァーリのように修行を積んでいたやつだ。それに、いつも天界や悪魔との戦争を再開する案を唱えていた。幸い、うちの幹部はほぼ全員戦争で泣きを見ることになったので、コカビエルに賛同する者がいなかったのが幸いだった。

いつかやらかすと思っていなかったわけではなかったが、とうとうその懸念が現実のものとなってしまった。正直、サーゼクスの妹やセラフォルの妹たちだけで到底勝てるとは思っていない。しかし、俺がそこに赴いてあの野郎を止めるのも何かと都合が悪いし、現実的じゃあない。そこで俺はとある作戦を立てた。

「アザゼル、呼んだか？」

しばらくしておれの部屋にヴァーリが入ってきた。実はヴァーリこそが今回の作戦のガキだ。

「ああ。お前に頼みたいことがある。コカビエルの馬鹿野郎をここに連れ戻してきてくれ。それにはシエムハザが対応してくれる。」

「コカビエルをか？なぜだ？普通に呼べばいいじゃないか。」

ヴァーリは疑問を投げかける。そうか、そういえばヴァーリはまだ

この状況を知らなかったな。

「実は、コカビエルが魔王の妹たちのいる学び舎で暴れているそうだ。魔王の妹たちでは勝てそうもない。お前に処理を頼みたい。それに、赤龍帝ではなかったが、ドラゴンの気配を察知した。おそらくは紅炎龍児イグニタス・クロスギアの双籠手の使い手とみて間違いない。」

俺は少しでもヴァーリが乗り気になるような情報を含めて簡潔に伝える。

『ほう、奴がいるのか。』

アルビオンが紅炎龍児イグニタス・クロスギアの双籠手に反応を示した。本来ならばそれほど関心がないはずだ。しかし、赤龍帝が突如として消えたのもあってその紅炎龍児イグニタス・クロスギアの双籠手の使い手と歴代たちは何度も対戦しているらしい。まあ、当然のごとく白龍皇がほとんどすべて勝っていると言っているが。

「アルビオン、そいつのことは知っているのか？どんなやつだ？」

ドラゴンとあってか、ヴァーリもそれなりの関心を見せる。

『ああ。やつは赤龍帝が消えてから何かと因縁がある。歴代たちも何度も戦っている。名は紅炎龍児エヴォリユシオン・ドラゴンアグニル。奴は八大龍王の二番手だった最も若いドラゴンだ。アザゼルが言った通り、奴は俺たちと同じ神器となつて宿主を転々としているわけだ。』

アルビオンがヴァーリに概要を教える。

ヴァーリは少し考えているようなそぶりを見せ、口をひらいた。

「……まあ、赤龍帝ではないのが少々残念だが引き受けよう。」

どうにかヴァーリは引き受けてくれるようだ。

「それで、本命の赤龍帝の情報は？」

ヴァーリはすぐに話を変えて赤龍帝のことを訪ねてくる。

「これっぽちも無い。それこそ赤龍帝の情報が手にはいりや、真っ先にお前に伝えてるさ。俺だつて赤龍帝をさがしてんだからな。」

「そうか……絶対に見つけ出してやるさ。逃がしはしない。」

ヴァーリは全くあきらめていない。むしろそれまで以上に闘志を燃やしていた。

『ふっ、これで今代の赤龍帝が見つければ、そいつは哀れだな。赤龍

帝にとって過去最大級に難儀な相手となりそうだ。手も足も出ることなく敗北するだろう。』

アルビオンは確信したように言った。

まあ、同感だな。本当に今代の白龍皇は規格外にもほどがある。

「つーわけで頼んだぜ。」

「ああ。」

ヴァーリは短い返事を返し、この部屋から去っていった。

さてと。俺は俺で動くとするか。



イツセーSIDE

よう、イツセーだ。

今日は普段通りの生活を送ると思っていたが、突如とてつもない力の波動を俺は感じた。

「っ?!」

「イツセー……」

「ああ。ドライグもティアも気づいたか?」

俺が訊くと、ティアとドライグはうなずく。

「この気配、どうやら現れたな。墮天使か……」

「それだけじゃないわね。この町全体に仕掛けられているのは崩壊の術式……発動するまであと一時間もないわね。」

俺もドライグとティアの見解と同じだ。

これはどうやら俺たちも行動せざるを得ないな。この街を崩壊させるわけにはいかないからな。

「俺が行く。ドライグとティアはここにいてくれ。」

「わかった。」

「イツセー一人で十分だものね。」

俺はドライグとティアに妹のことを任せ、俺はさっそく行動に移す。

今は夜の十一時。本来ならば妹たちを寝かせて自分も寝る準備に入る時間だ。

しかし、今日だけは特別だ。俺は外出する準備をして玄関へ向かっ

た。

「おにーさん？どこ行くの？こんな時間に。」

すると、ユキが目をこすりながらとてと俺のもとへ寄ってきたのだ。

「ユキ？もうそろそろ寝る時間だぞ？」

「えっとね・・・すごく強い力の波動を感じたの・・・それと、この町全体に広がっている魔力のようなものが気になって・・・」

俺はユキに注意をしようと思ったが、ユキの予想もしない答えに正直驚いた。

まさか、ユキがこのことに気づくとは・・・

そう。ユキが言った通り、この街にはとある強大な力を持った奴がいる。さらにはこの街を崩壊させる術式。

俺が思った以上に成長しているってことなのか。

「凄いなユキ。もう気配まで察知できるようになるなんてな。凄いぞ。」

俺はユキの頬に手を当て、もう片方のでて頭を撫でながら言う。

ユキは嬉しそうに笑みを浮かべる。

「私は、一番おねえちゃんだから・・・みんなを守らなきゃ・・・なんと健気なんだろうか・・・」

この幼さでそこまでのことを考えているのか・・・
いい子過ぎる。

「ユキ・・・凄いけど、あまり根を詰めないようにな。お前はまだ幼い。頼りたいときは頼っていいし、甘えたいときは甘えて良いんだ。それにもう一人、上にお姉ちゃんがいるだろ？」

俺は頑張っている健気にユキを抱きしめながら言った。

「うん・・・」

ユキはうん、とだけ言っただけ俺の腕に大人しく抱かれる。

少しして俺はユキを開放して俺は立ち上がる。

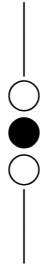
「さあ、ユキ。俺が何とかしてくるから、もう寝るんだ。いいね？」

「うん、おやすみなさい。おにーさん。」

「いい子だ。おやすみ。」

ユキはとてとてと寝室の方へ向かっていった。ユキの姿が見えなくなるまでそちらの方を見ていた。

ユキの姿が見えなくなったところで俺は家を出た。



家を出て俺はその問題の場所へと向かっている。場所は駒王学園。悪魔が何故か通う普通のエスカレーター式私立学園。その場所に行くのはなんだかんだ今回が初めてとなる。

近づくにつれ、だんだんと気配が強くなってくる。この最も強い気配を放つ奴がコカビエルだな。学園がそろそろ見えてくる。すると、門の辺りには十人弱の人、否悪魔たちがいた。なるほどな、結界を張っているのか。

しかしまあ……なんと拙い結界なんだろうか。こんなのではあつたところでさほど意味なんて無いだろうに。これで上級悪魔なんて冗談は言わないよな？まあいいか。取りあえず、ここを通ってお目当ての奴の顔を拝むとしよう。

「ちよつと待ってください。そこの方。あなたは人間ですね？今中に入ろうとしていましたね？」

フツ―に通ろうとしたのでもちろんこの結界を張っている者たちに見つかる。まあ、あえて分かるようにしてわけだが。

俺に全員の視線が集中する。

「ああ。そうだが？何か問題があるのか？」

「人払いの結界も貼ってあつたはずですが、何故ここに來れたのです？もしかしてこちらの世界を知るものですね？」

眼鏡をかけた黒髪の悪魔、おそらくはこの中で最も力の強い悪魔が俺に質問をする。

「ああ。そうだ。そういうわけでここを通してもらおう。」

「そういうわけにはいきません。こちらの世界を知るモノなら分かるはずです。この中には格の違う敵がいます。あなたが行ったところで何もできません。」

黒髪の悪魔が俺のことをために入る。

しかし、そんなことを素直に聞く俺ではない。

「ここで、こんな拙い結界を張ることではいかやれることがないお前たちより断然マシさ。まあ、この結界から見てもお前たちのレベルなご高が知れるがな。」

俺は全員に挑発をする。

「何だ?! お前!」

俺の挑発にこの悪魔のメンバーで唯一の男が激昂して声を荒げた。

「おいおい、ダメじゃないか。俺のことを相手にするよりも結界に集中しろよ。お前たちのようなやつらが他のことに気をまわす余裕があるのか?」

「ぐっ! ぐっ!」

「あなたに言われなくてもわかっています。しかし、貴方を通すために結界を解除するわけにはいきません。」

黒髪の女はおれの忠告をすんなりと受け止める。こいつは分かっているな。

まあ、別にわざわざ解除しなくても入る方法などいくらでもある。

俺は結界の方へ歩き出す。

「別に、解除しなくてもいいぞ。」
すうっ

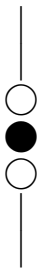
俺は結界に物理的に阻まれることは無く、魔法を用いてこの紙切れのような強度しかない結界を歩いてすり抜ける。

「なっ! 嘘だろ!!」

「どうやって?!」

結界を張っている面々は困惑している。まあ、お前たちには一生できかないことだからそうしていればいいさ。

俺は結界を張り続けている悪魔たちを後にして現場へ向かった。



「ふうん。まあ、大体予想通りか・・・」

俺が現場に着くと、目にしたのは倒れ伏している悪魔たちと同じく前俺に金をせがんだ拳闘戦った聖剣使い、対してそれらを見下ろしている空中に浮かんだ墮天使が一人と、流血している白髪の少年が地に腰を下ろしていた。

そして、ちゆううに浮かぶ墮天使は高笑いしながら言った。

「先の大戦で、四大魔王と共に、神も死んだのさー！」

なんとも凄いことを聞いてしまった。

俺の仮説であった聖書の神の死はどうやら真実らしい。しかし、それを口にしてしまったっていいのだろうか？こんなこと、どこで誰が訊いているかわからんぞ？

そして、それに続いて白髪の少年がエクスカリバーの真相を暴露した。

なんてことだ。何故、あの少年がそのことを知っているんだ？このことは教会でも知るやつは現在ほぼゼロのはずだ。

とにかく、俺は墮天使の前に姿を現した。優先順位があるからな。

「へえ、やはり聖書の神は死んだのか。」

「誰っ!？」

俺が声を発すると、まず赤髪の悪魔がいち早く反応する。

まあ、こいつは俺のことを知っているからな。無視しておいていいだろう。

「ん？何者だ貴様は？」

赤髪の悪魔一行を無視して墮天使の意識が俺の方へと向いた。

「ああ、俺はただの通りすがりの人間だ。」

俺は盛大なる戯言をほざく。あれだ。一度は行ってみたい台詞にあるだろ？あれ？違ったか？まあいいや。

「ほう、こちらの世界の人間か。それでその人間である貴様がここへ何をしに来たというのだ？まさか、何の考えもなしに来たのではあるまい？」

俺の目の前にいる墮天使がこちらを見下している眼で言った。

明らかにこちらを見くびっているな。

「ふふふ、それも時間の問題だな。すぐにその薄汚い顔が恐怖に染

まるのではないか?」

俺の内側にいるニトラがおかしそうに言った。

まあ、そうさせてもいいがな。

それは置いておいて俺は墮天使の質問に指を使って答えた。

「俺はここに二つの用事があつてきたのさ。一つはここを中心にして発動しているこの街を崩壊させる術式を破壊すること。二つ目はあんたと戦いに来た。」

俺の言葉を聞くと、墮天使はさらに声をあげて笑った。

「クツクツク・・・ハーハツハツハツハツハツハツハツハツ!!!」戦いに来ただど?笑わせるなよ?人間。貴様のような雑魚がここに来たところでもできないさ。当然、生きて帰れると思うなよ?」

先ほどからこちらを見下ろして高笑いをしている墮天使。流石に腹が立つな。

「イツセー。」

ニトラもニトラであの墮天使にムカついている。

さて、じゃあ少し見せてやるか。

「この辺だな。よつと――」

俺はこの街を崩壊させる術式の中心へと行き、俺の魔法で術式を分解させ、意味のないものとする。

俺の発動させた魔法が機能し、術式は壊れる音をたて、霧散した。

「なんだと!?!」

先ほどまですかした顔をしていた墮天使が突然のことに表情を変えろ。

そこら辺にいる悪魔は何が起こつたのかわかっていないようだが。

俺は術式の消去を終えると再び先ほどの墮天使の方へ歩く。

「どうした?面白い顔をしているぞ?」

俺は墮天使の顔を指摘してやる。まさか、こんなことで驚いているのか?長く生きてきた奴ならこんなことできる奴はいくらでもいよう。

「クツクツク・・・なるほどな。確かに、何の考えもなしにここに来たのではなさそうだ。先ほどの術式はこの俺を倒さない限り解

除されないものだったのだが……それを容易に直接壊すとは……
どうやら俺は見てくびっていたようだ。先程の非は詫びよう。その代
わりと言っては何だが、俺の名はコカビエルだ。」

俺の目の前の墮天使は自身の名を口にする。

こいつがコカビエルか……大昔、三大勢力の大戦を生き残った
強者。

翼の数は……十二枚。熾^{セラフ}天使と同じ。

三大勢力の中では最強クラスといったところか。

「ではコカビエル。速く本題へ入ろうぜ。」

「戦うということか?」

「ああ。その通りだ。そこに転がっている悪魔たちではつまらない
にもほどがあるだろう?」

俺はコカビエルの問いに肯定した。

「ククク……ハーハツハツハツハツハツハツハツ!!! いいぞ! 面白い!!

先ほどの技量を見ればはるかに面白そうだ!!」

コカビエルは哄笑を挙げる。

なるほど。こいつは根っからの戦闘狂らしい。それならばこちら
としても話が速くて助かる。三大勢力は大戦でただ自分たちが損を
して全員他の勢力にビビっている奴が多いと思っていたがこんな奴
がいるとはな。

何かと因縁のある三大勢力だが久しぶりの相手だ。

「では、行くぞ——」

俺は相手に一応忠告して攻撃体制に入る。

「いいぞ!! かかってこい!!」

コカビエルの了承はもらったので遠慮なく行く。

「じゃあ——」

ヒュッ——

俺は一瞬でコカビエルの背後をとり、拳でやつにあいさつ代わりの
一撃をくらわす。

「何っ?!?」

バシイ!!!

しかし、さすがは大戦を生き残ったものだ。

俺を察知して俺の拳をぎりぎりのところで受け止める。

「フッ」

俺は間髪入れずに次の攻撃を奴に仕掛ける。

「グッ!!」

コカビエルは次々繰り出される俺の攻撃に対処をする。しかし、完全に意表を突いたため、どんどん俺の攻撃についていけなくなっている。

そして――

ゴッ!!!

「グウッ!!」

俺の拳が奴の顔に突き刺さる。

コカビエルは俺の攻撃に怯み、すかさず距離をとる。

「く……」

コカビエルは口から滴る血を手で拭ってその自身の手についている血を見つめて言った。

「いいぞ！俺の予想をはるかに超えている力だ！最初、一瞬でこの俺の後ろを取るとはもつてのほかだ！そんな芸当を俺にすることができる奴は過去の大战にもいなかった！面白い！最高に面白いぞ！人間！」

「そりゃどーも。」

コカビエルは興奮しながら語った。

「フンッ！」

コカビエルは十二枚の翼を展開させて宙に飛びあがり、墮天使の代名詞ともいえる光の槍を作り出す。

その槍の大きさは余裕で20メートルを超え、太さは大木並みだ。俺を襲ってきたあの雑魚墮天使とは次元が違うレベルだ。

「喰らえー！」

コカビエルは地にいる俺にそれを投げつける。槍の速さもあの雑魚墮天使とは段違いに早い。

しかし、俺からしたら遅い。俺は魔法を発動して俺も同じく空へと

飛んだ。

カッ!!

ドゴオオオンン!!

俺の元居たところに槍が突き刺さり、大爆発を起こす。

「やるな!!だがまだまだ行くぞ!!」

コカビエルは先ほどよりも大きな光の槍をつぎつぎに創り出し、俺にそれを飛ばして攻撃を繰り返す。

俺はそれを作業のように躲し続ける。

「グアッ!!」

「ウワアッ!!」

俺が避けた光の槍は地上にいる悪魔たちを襲った。

俺はそんなことをお構いなしに奴に集中する。

「ハアッ!」

コカビエルはさらに槍の量を増やす。

俺は防御魔法陣を展開してそのやり返しを受け止める。防御魔法陣に槍がぶち当たり、その槍は霧散していく。

「固いな!!これはどうだ!」

コカビエルは更に研ぎ澄まされ、凝縮された槍を放つ。もちろんガードできるが俺はあえて防御魔法陣を解除した。

ガッ!!

「何っ!?!」

俺は奴の渾身の槍を素手で掴み、それを投げ返した。

「クッ!」

コカビエルはその槍を相殺させる。

しかし、俺にとってはそれはおとりだ。その一瞬のスキをついて、一気に詰め寄る。

ドゴオッ!!

「ぬうっ!?!」

俺の拳がコカビエルに炸裂する。

ズガアンンンン!!!!

そして俺はさらに連続攻撃を与え、コカビエルを地に叩き落とす。

コカビエルは地に真つ逆さまに落ちる。土煙を上げ、地にはちよつとしたクレーターが出来ていた。

コカビエルは体を起こす。

服はボロボロ、呼吸を少し乱していた。

しかし、表情はというと喜々としていた。

「やるな．．．まさか、俺の渾身の槍を投げ返されるとは思ってもみなかったぞ。」

「そうか。それはそうと、そつちも飛び道具を使ったんだ。こつちもやらせてもらおう。」

俺は魔法を宙から発動させる。

俺の周りには計40もの魔方阵が現れる。

その魔法陣からまずは魔力弾を打ち出す。しかし、魔力弾は40の魔方阵から同時に放つ。その数は言わずもがなだ。

「やらせん!!」

コカビエルは光力で相殺させる。コカビエルは動くことなく、こちらの攻撃をことごとく撃ち落とす。かなりの威力にしているつもりだが、流石はコカビエルだ。

「フツハハハ!!どうした!この程度か!」

コカビエルはもつと威力のあるものをご所望のようだ。

なら、少しだけ上げるとしようかな。

俺は魔法陣の命令式を変更する。

「レイ・ヴァレルグ光を制する魔槍」

魔方阵からはどす黒い槍が放たれ、コカビエルに向かっていく。

コカビエルは威力が上がったのを悟ったのか、光力を槍の形に形成させて迎撃を試みた。

普通ならば、それで十分撃ち落とせる。

だが――

「何っ!?クッ!」

コカビエルが放った槍は俺の攻撃に当たったが、相殺されることなく、俺の槍に吸収され、そのままコカビエルに直進したのだ。

コカビエルは飛び上がって回避した。

「何だ!?今は・・・?」

コカビエルも動揺が見られる。

まあ、教えてやるか・・・

「さっきのは、俺が開発した魔法、光を制する魔槍レイ・サアルグ。そいつは光の力を扱うやつには有効でな。当たればその光を蝕む。お前たちが扱う光力は悪魔にとっては猛毒だろう?その天使、墮天使版つてここさ。」

「く・・・そういうことか・・・なんと厄介な魔法だ・・・まさか悪魔にしかない大きな弱点が、我々にも生まれることになるうとは夢にも思わなかったぞ。貴様、魔法使いだっただのか。よもや貴様のような魔法使いがいるとはな。世界はまだまだ広いということか・・・貴様、どこの所属の魔法使いだ?名は何という?」

「何処にも所属しないフリーき。俺の名はイツセー。イツセー・ヴァーミリオン。さあ・・・まだまだいくぞ!」

俺は先ほどの魔法を繰り返す。

コカビエルは光力を扱うのでは無駄だと判断したのか、生身で避け続ける。

後ろがから空きだぞ?

「ぬうっ!」

俺はコカビエルの死角から槍を放つ。

コカビエルはその槍に気づく。しかし、その槍の察知をしたのが遅かった。その槍がコカビエルの脇腹を掠める。

「くっ・・・」

苦しそうな表情を見せる。

それは当然だ。

掠っただけとはいえ、天使、墮天使には効果絶大の魔法。

しかし、奴ほどの光力なら完全に抑え込むことはできるだろう。

「クッククク・・・はーっはっはっはっはっはっは!!ここまですは!!面白い今日は非常に愉快だ!!とことん楽しませてもらうぞ!魔法使いよ!!」

「俺もだ。流石は歴戦の強者だ。」

俺たちの戦いは加速する。

しかし、どうやらそんなことにはならなかった。ここに、近づいてくる一つの強い気配を察知したのだ。これは……

「イツセーよーこれはー!」

ニトラもこの気配に気づく。

そう——これは……ドラゴンだ。

「フツ……何やら面白いことになっているな。」

と、突然聞こえたこの場にいる誰でもない声。

俺はその声ではなく、気配のする空を見る。

バキーン!!!

先ほどまでであった結界が紙切れのように霧散していく。

そして、夜の空を美しく照らしている月を背景にして一人の人物が宙に浮いていた。

あくくあ。折角俺が結界を壊さないように戦ってたって言うのに、ぶち壊しちまったなあ。

そいつは銀髪の少年だった。見た目からして俺の見た目と同じくらしい歳と言ったところか。

そして、最も注目すべきはその少年の背にある白とマリンブルーの翼……その意味するものは……

パニシング・ドラゴン
「白い龍!」

コカビエルがその名を最初に口にした。

やはり、白龍皇……

〈間違いねえな。あの翼にあの気配。〉

〈久しぶりに見るわね。あの姿は。〉

俺の神セイクリッド・ギア器に宿るベルザードさんとエルシャさんが言う。歴代の

先輩、特に3人の白龍皇を瞬殺したベルザードさんが言うなら間違いない。

しかし、この異常な強さはなんだ?あの銀髪の男、あきらかに人間のレベルじゃないな。

「その背にあるのは神滅具ロンギヌスの一つ、白龍皇デイバイン・デイバイディングの光翼か……何とも忌々しい。」

背に生える八枚の光輝く翼は神々しいまでの輝きを放つ。

関係無いけどかつこいいな。

〈あ、それは俺も思ったことある。〉

ベルザードさんもかよ。

「二人とも。今のこと、ドライグに言ってもいいののか？」

ブーステッド・ギア

デイバイン・デイバイディング

『赤龍帝の籠手よりも白龍皇の光翼の方がかつこよかったと』

〈あくあ、ドライグ泣いちゃうかな〜これは〉

「(まっつてくれ、二人とも。別にそういうわけじゃないだろ。捏造は

辞めてくれ。)」

俺がふと思つてた言葉にニトラとエルシャさんに捏造されかける。

それは置いておいて俺は今代の白龍皇に視線を戻した。

「そこにいる紅焰龍児にでも惹かれたか!?!とにかく邪魔だては

エヴォリユシオン・ドラゴン

グアアツ!!!」

銀髪の少年は圧倒的な速さでコカビエルに接近し、そのスピードを上乗せした拳をコカビエルに繰り出した。

その攻撃をもろに受けてコカビエルは地に激突した。

そして間髪入れず、白龍皇はコカビエルを猛追し、その翼をブチブチと引きちぎった。

〈あ、今のシーン。見たことある。〉

〈デジャブだな。〉

いやいや、二人ともそれ俺に言ってるの?てか実況はいらないから。

ともあれ、十二枚あった翼はたったいまもがれて十枚になってしまった。あれつて弱くなるのか?わかんないが。

「アザゼルの常闇のような翼とはまた違っているな。」

パニシング・ドラゴン

「貴様!! 白い龍!!俺に逆らう気か!!」

コカビエルは激昂して宙に飛び上がる。そして、光の槍を出現させる。しかし、白龍皇は動じない。

『Divid!!』

機械音が聞こえた。すると、コカビエルの強さがガクツと落ちる。

光の槍もすでに半数以上が消失し、なおも減り続ける。

「我が神セイクリッド・ギア、白龍皇の光翼の能力の一つ。触れたものの力を十秒ごとに半減させていく。急がなければ人間にすら勝てなくなるぞ？」

なるほど。

白龍皇の能力か。実際に本物を見ることが出来るとはな。

「おのれえ!!!」

コカビエルは巨大な槍を出現させる。

しかし、それをも白龍皇は半減をさせ、その攻撃をくらうことは無かった。

「なにいつ?!?!」

「その程度か? つまらないな。」

白龍皇はため息をつき、先ほどの圧倒的スピードでコカビエルに迫り、拳を振りかざす。その拳はコカビエルの腹に突き刺さり、コカビエルは区の字型に身体がまがる。

「ばっ……馬鹿なあっ?!?!」

「ふっ、ありきたりなセリフだな。あんたは無理やりでも連れ帰るようにアザゼルに言われてるんだ。あんたは少しばかり強引過ぎたんだ。」

「クソッ! クソクソクソ!! アザゼルウウウウウウー!!!」

どこまでも俺の邪魔をおおおおお!!!」

コカビエルは地に倒れ伏し、完全に気絶した。

やれやれ、結局あいつが片付けちゃったか。

白龍皇は地に倒れ伏したコカビエルを担ぐ。

その時、俺は声が聞こえた。

『無視かい? アルビオン。』

『ふん……またお前か。炎の。』

アルビオンとアグニルが意思疎通をしていた。

『そっちはとんでもない奴を宿主にしたね。』

『まあな。そっちは……言うまでもないか。』

『そうさ。こんな状態でなんて戦いにならない。力量差がありすぎ

る。』

『それはそうと、炎の。お前は赤いのを見たことあるか?』

『全然。僕がドライグさんと出会ったのはドライグさんの宿主がエルシャ・エスタロツサの前の代さ。それからぼつきり会ってないね。そのことを聞くってことは、そつちもあえてないようだね。』

『そういうことだ。にしても、敵意が以前とはちがうな。炎の。』

『お互い様じゃないか。そういうのもあっていいじゃないの?』

『まあ、こちらとしても面白そうだからな。今代は。また会おう、アグニル。』

『またね、アルビオン。』

アグニルとアルビオンの会話が終わる。

「ん?あと一人、フリードとかいう神父がいないな。まあいいか。」
そう言えば俺が来たときエクスカリバーの真実を暴露した白髪の少年がいない。逃げたか?白龍皇、もとい銀髪の少年はコカビエルだけを担いで宙に浮き、ここから立ち去ろうとしていた。

しかし、俺はそいつを呼び止めた。

「おい、ちよつと待てよ。」

俺がそういうと、少年は俺の目の前を通り過ぎる前に止まって俺の方を見た。

「何かな?」

「人の獲物を横から奪っておいでそれはないんじゃないのか?」

「それは失礼した。しかし、こちらとしても色々と事情があつてね。今回は見逃してくれないか?この借りは返そう。」

銀髪の少年は素直に非をわびた。なんだ?白龍皇の癖にいいやつだな。

「借りというのは、お前が俺と戦ってくれるのか?」

確信があつたわけじゃない。こいつは何となく俺と似ているような気がした。

すると、少年は笑みを浮かべた。

「それは是非とも戦いたいね。キミにも興味があつたんだよ。俺が来る前にコカビエルと戦つてたキミにね。本音を言えばいまここで

戦ってみたいよ。」

やはりな。この答えを聞いてわかった。こいつは俺と同じ――

――戦鬪狂だ。

「それはいい。俺としても、白龍皇と戦えるのは滅多にないからな。」

「ハハハ、ますます楽しみになってきたよ。ではまた会おう、魔法使い。」

銀髪の少年はそう言って去っていった。

あいつとは気が合いそうだ――



No, XXX 〱戦闘後・・・〱

誠一 side

何だよ・・・何だっつてんだ・・・

俺は、目の前で繰り広げられている戦闘をただ見ていることしかできなかつた。

金髪の男は俺たちが手も足も出なかつたコカビエル相手に優位に立ち、圧倒していた。

そして、一番気になるのは二人目の途中乱入者であるあの銀髪の男だ。銀髪の男は背から白とマリンブルーに輝く翼が生えていて、コカビエルを一瞬で倒しやがった。そいつはコカビエルを抱えると即座にここから立ち去って行つた。金髪の男もそいつと少し会話を交わしたらすぐにどこかに行きやがった。

それはおいておいてだ。あの銀髪の男がここに来てから俺の体の調子がおかしかつた。

俺の体を突き刺す圧倒的なプレッシャー。全身を駆け巡る言い知れない緊張感と恐怖——。圧倒的な存在感と絶望的なまでに感じる力量差だつた。

そいつは俺たちでは歯が立たなかつたコカビエルを瞬殺した。

「なあ、アグニル。」

「なんだい?」

「さっきのとんでもねえオーラを放っていたあの銀髪の男は何者なんだ? コカビエルをあつさり倒しやがったが・・・」

俺は先ほど何かと会話していたアグニルに聞いた。

「ああ・・・あれは白い龍、白龍皇だよ。」

白龍皇!? 白龍皇ってあれか!? 二天龍って言われた最強のドラゴンの片割れの?!?

「そうだよ。あれが白龍皇アルビオン。そして、やつの神器が白龍皇の光翼。相手の力を半減させて、その半減させた力を自身の糧とする。」

伝説通りだな・・・なら、赤龍帝は倍増させ、何かに譲渡するつ

て感じなのか。

「そうだよ。二天龍の力は真逆。にしても、今回も遭遇することになるとはね……」

アグニルは憂鬱そうに言った。

「今回も？じやあ、前にもそんなようなことがあったって言うのか？」

「ああ。やつとは何かと因縁があつてね。本来、やつは赤龍帝と戦う運命にあった。しかし、赤龍帝はこつぜんと姿を消した……そのおかげで、僕を宿す者たちは白龍皇と遭遇することが格段に増えてね。以来戦いを繰り返しているってわけさ。君の先輩たちは戦つたよ。格上にも限らずね。まあ、一人を除いて全員負けたけど……そんなにつええって言うのかよ……でも、一人は勝つたんだよな？」

「君の二代前の所有者は辛勝したよ。それこそ、そいつがとてつもない強さだったから実現したんだ。心も体もね。」

「すげえ……あの二天龍を宿した片方に勝ちまうなんてよ!! 尊敬するぜ!! 先輩さんよ!!」

「にしても、今代は異常だ。あの銀髪の男……あのコカビエルが禁手バランス・ブレイカー化なしであのぎまだ。コカビエルだって、あの大战から大きく力をつけていたのにも関わらずだ。とにかく、今代の白龍皇とは戦わないほうが身のためだよ。死にたくなかったらね。強くなることだ。」

「ああ、その通り過ぎて言うことがねえ。あれは普通じゃない……見ればわかる。俺とは次元が違う……こりや、俺がああのレベルになるまでどれだけかかるか……」

俺はアグニルの忠告ともいえる言葉に従うしかなかった。

「なんとか……なつたって感じかな……」

と、そこに木場がへタツと座り込んできた。

「ああ……ほんと、どうにかって感じだがな。白龍皇の突然の乱入にはかなり動揺したけどな。」

「そうだね。まさか、こんなところで伝説のドラゴンにあうなんて思わなかったよ。セーイチ君が引き寄せたんじゃないかな？」

木場は苦笑しながら言った。

「よせやい。これ以上ヤバいやつが来たら身が持たねえつて。」

俺はうんざりしながら言った。

「そうだね。だったら、僕たちも強くないとね。」

「ああ、だな。」

俺と木場はそう言いながら立ち上がる。

ドラゴン……か。俺も、その伝説のドラゴンを宿している。このままじゃ、敵を無自覚にひきつけちまう。俺が、強くならなきゃな。これ以上、皆を危険にさせられねえ!!!

「にしても、やったな木場。聖魔剣、すっげえじゃねえか。」

俺は話題を変えて、木場の聖魔剣の話を振った。

「セイイチ君……でも僕は……」

「細けえことは今は言いっこなしだ！とりあえず、これに関してはもう決着がついたんだ。お前も、お前の仲間のこともさ。」

「うん……」

俺が言うと、木場は素直に受け入れた。

「裕斗……」

そこに、部長は笑顔で木場を迎え入れる。

「良く帰ってきてくれたわ……さらに、バランス・ブレイカー禁手化まで……

あなたは最高の騎士よ……」

「部長……ぼくは……みんなを、あなたを、一度裏切ってしまった……」

懺悔をする木場のほほを、部長は構わずなでる。

「それでも、あなたは帰ってきてくれたわ。それだけで十分よ。私から言うことは一つ。もう彼らの想いを無駄にしちゃだめよ……」

「はいっ……」

木場は部長に再度、一生守ると誓った。

俺はその木場と部長のやり取りに嫉妬の眼差しを向ける。

木場あ……俺だってよお……騎士として部長をお守りしたかったんだからなあ!!!でもお前以外に適任がないんだ!!!任務を全うしろよな!!!

このあと、このハッピーエンドで終わると思いきや、まさかの部長のお尻たたき一万回を喰らった木場。木場は終始涙を流しながらこのとてつもないお仕置きをもちに受けるしかなかった。

さすがは部長……これはこれ、それはそれってことですか……



イツセーSIDE

まさか、今代の白龍皇に遭遇するとはな……

俺はコカビエルとの戦いを終えて、帰宅している途中、突然現れた白龍皇のことを思い出していた。

そういえば、なんだかんだ言って初めてなんだよな。白龍皇を目の当たりにするのは。今まで不思議と出会わなかったんだがな。

「なあ、ベルザードさん。今代の白龍皇はどう感じた？」

俺は一番赤龍帝としての経験を積み、三人もの白龍皇と対決し、全て圧勝しているベルザードさんに訊いた。ベルザードさんは歴代赤龍帝の中でも白龍皇と出会った数は最多。白龍皇のこともこの中で誰よりも知っているはずだ。

「ああ、ちゃんとこの目で見てたぜ。実際に戦ったわけじゃないかな。正確なことは言えないが、今代の白龍皇は俺からしても異常だぜ。俺が倒した三人は何だったんだってくらいバランス・ブレイカーの力を秘めていやがるな、あの銀髪は。しかも、禁手バラン化無しであれだ。間違いないやが代最強の名にふさわしいだろうな。過去、未来、そして現在において最強の白龍皇だ。」

あの赤龍帝王ベルザードさんでさえこの言いようだ。

「ベルザードがそこまで言うなんてね。」

「ああ。おそろく、俺より強えぜ。あいつは。」

なるほど、今代の白龍皇はどうやらさうとう強いらしい……だが、そうではくは面白くないからな。これはなかなか面白くなってきたな。

俺は、次に会う状況を想像しながら歩く。

「ふふふ……嬉しそうだな、イツセーよ。」

「まあな。最初の遭遇にして、最強の白龍皇だ。こんなに心が躍る

ことはないさ。」

なんてつたつて、俺は元が付くが、赤龍帝だからな。因縁のライバルが現れたのは偶然か、必然か、それとも運命の導きか。どちらにせよ、次に会う時が楽しみだ。

「イツセーよ。手加減はしてあげろよ?」

「(それは、相手次第だな。)」

俺はニトラとベルザードさん、エルシャさんと会話しながら帰路を行く。

———ところでだ。

さつきから、俺の後ろをつけてきている奴がいるな……正確には後ろじゃなくて俺の背後の上空にいるが。

何のつもりだ?俺がコカビエルと戦っていた時にも感じた気配だ。それにこれは……似ているな。コカビエルの気配に。この気配から察するに十中八九、墮天使か。何やら墮天使と遭遇することが多いな。

「どうする?イツセーよ。このままにしておいては、イツセーの家が悟られる可能性もなくはないぞ?」

「(そうだな……やつの顔を拝むとしようか。せっかくだからな。)」俺は逃げも隠れもせず、堂々とすることに決めた。

「イツセーらしいな。」

いつものことだろ?

さてと、じゃあ高みの見物を決め込んでいた奴のもとへ、いつちよ出向きますか。

俺は先ほどから空中から俺のことを監視、尾行している墮天使のもとへ空間移動魔法を用いて奴の目の前に移動した———

◆◆◆

アザゼルSIDE

よう、アザゼルだ。

俺はヴァーリがコカビエルを叩きのめして任務を完遂するところを見届けた。

本来なら、俺の目的は達成したはずだった。しかし、ヴァーリがこ

こへ来る前に現れたあの金髪の男が俺の目に入った。さっそうとコカビエルの前に現れたときはただの馬鹿と思っただが、その考えはしよっぱなから覆ることになった。

コカビエルとの戦闘に入るや否や、あの金髪はコカビエルを圧倒し続けた。倒しきることはできず、止めはヴァーリがやったとはいえ、あの実力だ。見たところ、正体は魔法使いってことしかわからねえ。が、あのコカビエルを圧倒するような実力を持つ魔法使いなんざ見たことも聞いたこともねえし、魔法教会にそんなような奴が入ったなんてことも聞いちゃいねえ。

俺は奴のはるか上空から少しでも正体を探ろうと尾行を開始した。俺はやつに悟られることのないように行動したつもりだったんだが………

「よお、墮天使。さつきからこそそと後をつけているようだが、いったい何の用だ？」

俺とターゲットの距離は十分離れているはずだったが、やつは一瞬で俺の背後に移動していた。

「つたく………どんなからくり使えばそんな芸当ができるんだ。」

「コカビエルとの戦闘のときも、お前は遠くからこちらを見ていたようだが？」

「なに!? そんなときから俺のことを気づいてたのかよ………」

「ああ。むしろ、あれで気づかれないとでも思っていたのか？」

最初から気づかれていたことに俺は驚いた………どうやらこいつ、そうとうやるようだ。気づかれないと高をくくっていたが、まさか筒抜けだったとはな。こりゃ、油断できねえ相手だ。

俺は観念して自分の正体を明かした。

「取りあえず、初めましてだな。俺はアザゼル。墮天使どもの頭をやってる。」

「ほう、あんたがかの有名なアザゼルか。」

やつは俺の正体を知ると、興味深そうに言った。

「なんだ、俺のことを知っているのか。」

「まあな。アザゼルとは神の如き強さ。その名の通りなのならば、

強いのだろうか？それくらいの相手なら、一度顔を拝もうと思つていたところだ。なんなら、今ここで第二ラウンドと行こうか？もつとも、あんたにとつては第一ラウンドだが。」

「よせやい。俺は、戦いはあまり得意じゃねえんだ。」

こいつ、ヴァーリと同じだ。間違いないな。戦闘狂だぜ、戦闘狂。言つていることがまるつきりヴァーリと同じだ。しかし、それはそれでいい。もしかすれば、俺の計画がうまくいくかもしれない。

そんな茶番は置いておいて、俺はさつそく本題に入った。

「んでだ。単刀直入に言わせてもらう。お前さん、一体何者だ？」

「あんた程の者ならわかるだろう？それに、コカビエルとの戦闘を見ていただろ？」

やつは鼻でフツツと笑いながら言った。

「お前さんが魔法使いなのはわかった。俺が訊きたいのはお前さんの所属等ほかもろろだ。」

俺が何よりも気になったのはやつの実力だ。コカビエルと軽く打ち合えるほどの力だ。そんな力、一体どこでどうすりゃあ身につくんだ？

だが、それだけじゃなかった。俺には違和感があった。こいつは……果たして本気でコカビエルと戦つていたのだろうか。

「……まあ、そつちが名乗つたなら、俺も名乗るのは通りだな。俺の名はイツセー。イツセー・ヴァーミリオン。魔法使いをやつてる。」

やはり、魔法使いか。しかし、イツセー・ヴァーミリオン……聞いたことの無い名だ。それこそ、コカビエルと渡り合える実力なら、すぐにでもその名は出回るはずだが……。いや、そもそも魔法使いであのレベルはまずありえないんだが……。まあ、それはおいてこう。

「それで、お前さんは一体どこの魔法・魔術組織所属だ？」

「そのような類の組織には入っていない。そもそも、そんなところに入る意味はないからな。」

奴の答えはまさかの無所属だった。

本来、魔法使いはどこかしらの組織に所属するのが普通だ。すなわち、やつが本当に無所属だとしたら、はぐれとみなされる場合が多い。「何故所属していない？魔法教会から何かしらの接触があったのではないか？何にせよ、入ったほうが身のためでもあるぞ？」

俺はさらに深く掘り下げていくと同時に忠告をした。

「所属しなければならぬ理由でもあるのか？それとも、ルールなのか？だとしたら、そのルールはだれが決めた？俺は知らんやつが勝手に決めたルールには従わない主義だ。」

やつはもうはつきりと入らないと言っているようなものだった。まあ、やつも分かかっていてあえてそうしている可能性も否定はできないか……

このまま議論を続けるのは不毛だな。

俺はそう感じて話題を切り替えた。

「まあ、それはいいさ。こっからが真の本題だ。実は、この事件が起きてから俺たち三大勢力の天使、悪魔、墮天使勢力で会談を行うことになったんだ。」

「ほう、それはまた興味深いな。今更、と言えなくもないが。」

さっそくやつが食いついたな。俺はさらに続けた。

「それでだ。おまえさんにもこの会談に参加してほしい。」

「何故だ？俺は人間。あんたら超常の存在、ましてや聖書神話になんら関係のない俺が参加する意味はあるのか？それも敵だらけの場所。」

俺が意を伝えると、やつは警戒した。まあ、そうだろうな。普通はだれだって警戒はする。だが、俺は引き下がらず、続けた。

「確かに、お前さんの言うことはわかる。しかし、この会談はコカビエルが三大勢力すべてに関わる問題を起こしたのがきっかけなんだ。そのコカビエルと戦ったお前さんも、もはや無関係とはいえないだろう？それに、お前さんのような力を持つ存在が魔王の妹と同じ地になったとなつては、悪魔側も黙っちゃいけないと思うぜ？」

「……………」

やつは無言になつて考える動作をする。

お、こりや、もう少しだな。

「それに、会談にはヴァーリも来させるさ。」

「そのヴァーリとは誰だ？」

「先ほど会っただろう？ 今代の白龍皇さ。」

俺が白龍皇の名をだすと、顔色が変わった。

「……いいだろう。面白そうだ。」

なるほどな。やはり奴は戦闘狂だ。これなら、ヴァーリも乗ってくる可能性も大きい。会談には力のあるやつも参加させなけりや、意味がないからな。

「よし……日にちは一週間後だ。場所はおそらくあの学園になるだろう。」

「……わかった。」

「んじや、そこんところ、よろしく頼むぜ。」

その返事を聞き、俺は奴の目の前から立ち去った。



イツセーSIDE

「んじやあな。そこんところ、よろしく頼むぜ。魔法使い。」

俺に会談の日付と場所を伝えた堕天使総督、アザゼルは俺の目の前から魔方阵で消えていった。

それにしてもまさか、堕天使の総督とも遭遇するはな。今日は中々刺激的な日だった。

会談か。三大勢力の対立が、終わるときが来るか。これも時代の変化か。まあ、そうせざるを得ない状況だということはあつちも十分に分かっていようだろう。そうでもしなければ、他の神話体系に宣戦布告される可能性もあるからな。ま、あいつらが滅ぶならそれはそれでいいけどな。なんなら他の神話体系が攻撃を仕掛けるならよろこんで前線に参加しよう。あいつらも喜々としてやるだろうな。

「にしてもイツセーよ。まさか、あの堕天使の話に乗るとは思わなかったぞ？ なにか考えでもあるのか？」

俺の行動に疑問を抱くニトラ。

俺はわけを話した。

「別に、単なる余興というか、気まぐれさ。一番のメインは白龍皇さ。あいつのちからが見えるかも知んねえからな。あと、俺の敵のボスとやらの顔を一度知っておいても損は無いだろう?」

悪魔。忘れもしない。俺の母さんと父さんを苦しませ、最後は殺した俺の敵だ。考えてもみれば、俺は悪魔のトップの名は知っていても顔は知らない。ここで奴らの顔をしかと見届けよう。本当の敵を知る必要がある。まあ、悪魔も一枚岩ではないとは聞いているが。しかし、あくまで今回の会談の主な目的は白龍皇だけだな。

「まあ、それも一興ではあるな。長らくあのこうもりどもとは縁が無かったが、ここで一つ牽制の一つは入れてもいいだろうさ。」

「ああ。そのつもりだ。」

俺たちは会談についての話をしながら帰路につく。

「おかえり、イツセー。」

ガチャッと家のドアを開け、帰宅するとそこにはドライグがいた。

「ドライグ。寝てなかったのか。」

「ええ。イツセーの帰りを待っててもいいじゃない?」

と、首を可愛らしく傾げるドライグ。いつもと同じの寝間着の服装でいらっしやる。ピンクを基調とした可愛いものだ。

何だろうか?ここ最近、ドライグの服装が綺麗というよりもかわいい系が多くなっているような気がする。

ま、ドライグは綺麗だからかわいい系の服だろうと何だろうと似合うけどな。

「それで、どうだった?」

ドライグは俺と一緒にリビングへ移動しながらドライグは今日のことについて聞いてくる。

「ああ、中々の奴だったんじゃないか?それに、思いもしない相手に出会ったぞ。それも二人。」

俺はコカビエル、墮天使総督アザゼル、そして白龍皇のことを思い浮かべながら言った。

「そのようね。それに、私のよく知った気配がしたわ。」

それを聞くに、ドライグも感知したらしいな。まあ、当然か。長い間戦ってきた相手だもんな。

「ああ。まさかまさかの白龍皇に出会ったよ。」

「……三百年経って、こうして私たちの前に現れるのね——

——アルビオン……」

ドライグは何とも言えない表情で二天龍の片割れ、ライバルの名を口にする。

ドライグとアルビオンはその昔から戦いを繰り広げて来た同士だ。何か思うところもあつて不思議じゃない。

「今代は間違いなく歴代最強だ。ベルザードさんもそう言っている。そして、何としても赤龍帝を見つける気にいるらしい。良かったなドライグ。今代の所有者はライバルである赤龍帝に夢中だ。」

俺はケラケラと笑いながら冗談交じりに言った。

「ちよ、ちよっと、やめてよねイツセー。その探している相手はイツセーのことでしょう？赤龍帝はあなたなんだから。」

俺の軽い冗談に少し本気で困った表情をするドライグ。そんなドライグの顔も魅力的である。

「何言ってるんだ。確かに神器所有者という意味での赤龍帝は俺かもしれないが、それはもう過去の話。今の赤龍帝は間違いなくドライグ、キミ本人だ。」

そう。俺はその昔、赤龍帝だった。その証に、セイクリッド・ギア 神器である

ブーステッド・ギア 赤龍帝の籠手を受け継いだ。しかし、先ほども言ったように過去の話

だ。赤龍帝の名は、ドライグ本人に返した。ブーステッド・ギア ドライグがセイクリッド・ギア 神器から

解放されたことよって、もう赤龍帝の籠手に何の力も残ってない。ただの籠手と化したのだ。よって、白龍皇の探す運命の相手はドライグということになってしまう。

「もう……じゃあ、私が戦わなきゃダメなの……」

ドライグが何故かシユンとしている。ドラゴンだから戦いを求めるかと思っただけかな。

おっとと……少し冗談が過ぎてしまったな。俺はドライグを白龍皇と戦わせる気が無い。それにあの白龍皇は俺の見つけた相手だ。

まあ、ドライグが戦うと言うのなら、俺は止めはしないが。

「冗談だよ。万が一、白龍皇が俺たちの元へたどり着いたなら、俺が相手をするさ。もし相手が要求をするのなら、ドライグ、一時的に神器に戻ってくれるか？」

俺はこの先の可能性として、赤龍帝と白龍皇の戦いに備えてドライグをお願いを言う。

「へえ……面白いわ。久しぶりにイツセーの相棒として戦うのね。いいわ。私もその方が面白そうだしね。」

俺の申し出にドライグは快く快諾してくれた。久しぶりに神器にもどるかもしれないドライグは以外にも乗り気だ。

「にしても、アルビオンがこの事実を知ったら何というだろうか……ドライグはもう既に神器から解放され、聖書の神の封印も解けている、なんて知ったら……」

「そうね……もう同じ状態ではないからね……まあ、あいつの驚いた表情でも拝んであげましょ。」

ドライグはそうにつこりと笑いながら言った。こりや、アルビオンは中々の精神的ダメージを受けるのではないだろうか？それだけじゃないな。その白龍皇をやどすあの銀髪の男も気の毒にな。もう本当のライバルはいやしないのに。だが、やつは初めて邂逅した白龍皇だ。それに、あいつと戦ってみたいしな。何か、面白いことが起きそうだ。

「イツセー、そろそろもう寝よう。良い時間だから。」

ここでドライグは就寝を提案する。

「悪い。俺は少しやる必要があるから、先に眠つてて。」

「そ、そうなの……わかった、おやすみ、イツセー。余り無理しないだね。」

少し残念そうな表情をしたドライグ。

「ああ。すぐ終わるよ。おやすみ。」

ドライグがリビングから出て、寝室へ向かう。

俺はすぐさま用事を終わらせるため、すぐに始めた。

俺はとあるものと連絡を取るために魔法陣を出現させた。

『あら、イツセー。珍しいね。あなたから連絡をくれるなんて滅多にないことだからおどろいちゃった♪それで、一体何の用?』

俺が連絡をつなげると、少女の声が聞こえてくる。

この子こそ、俺が連絡を取っておきたかった相手だ。おれは早速用件を伝える。

「久しぶりだな。用件は簡単だ。そっちもしってるだろ? コカビエルがここに現れたってこと。」

『ああ、そのことね。それがどうしたの?』

いやいやいや、それがどうしたのって、軽いな……

まあいいか。

『相変わらずだな。それでだ。俺もその場に居合わせてな。中々の重要機密を知ったんだ。』

『へえ〜それってなあに?』

興味深そうにしている連絡相手。つか、連絡用魔法陣越しに聞こえてくる向こうの音が凄いんだが……宴でもやってんのか?

「聖書神話の主神ともいえる、聖書の神は死んだそうさ。これは間違いない確定情報だ。コカビエル自身がそう言ってたからな。」

『つ!?!……へえ、それは、中々のビックニュースだね。』

珍しく声が真面目になる。まあ、そうだよな。神話の主神が死ぬつてのは相当なことだからな。ましてや、そんな情報が流れ出でいいわけがない。

『ありがとう、イツセーその情報は今後使えそうだよ。またね。』

嬉しそうに相手は連絡魔法陣を切った。

さてと、もう一人に伝えておくか。

俺はもう一人にこの事実を伝えたあと、眠りにつくのだった。



NO, XXXI 邂逅

セーイチSIED

「こんちやうつす。」

「おお、来たな悪魔くん。さ、あがってくれ。」

家のチャイムを鳴らすとドアが開き、中から一人の男が出てくる。

この人は、俺のお得意様だ。金髪と黒髪の悪そうな風貌の若い男。

外国人らしい。

この人は何かと俺を指名してくれるが、しょーもない願いを毎日毎日言ってくるからたまつたもんじゃない。

「んじゃ、悪魔くん。今日はこの新しいゲームでもやろうぜ。」

と、ゲームソフトを見せながら言う俺の契約相手。てか、ゲームの相手ならオンラインでもいくらでもいるのにな。

それはさておいて、このゲーム。俺も知っている。超有名な海外のゲーム会社がリリースした新しいレースゲームだ。

「んじゃ、始めようや。」

俺はコントローラを持ってゲームを始めた。

『YOU WIN!!』

「よっしゃ、俺の勝ちだな。悪魔くん。」

す、すげえ。この人。レースゲーム初めてだつて言ってたのにもうこんなにもうまくなっている……センスの塊か……

「いや、まだまだ！勝負はこれからだ！」

しかし、レースゲームじゃ負けてられない！

「おお、気合入ってんなーじゃあ、もうひとレースするか？なあ、悪

魔くん——いや、エヴォリユンオン・ドラゴン紅炎龍児。」

!?

それは唐突だった。この男はいま、確かに言った。俺の……俺の神器に封印されしドラゴンの名前を。

どういうことだ……？まさか、この人……人間じゃない……？

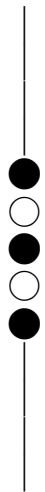
俺は恐る恐る目の前の男に訊いた。

「あんた……何もんだ？」

「俺はアザゼル。墮天使組織、神の子を見張る者の総督をやつてんだ。よろしくな、今代の紅炎龍児イグニタス・クロスギアの双籠手の所有者の布藤誠一。」

ドラゴンの名前を言われてからコントローラから手を放していた俺に対し、男の車が俺の車に二週差つけてゴールを決める。

その時、男の背中から十二枚、コカビエルと同じ数の漆黒の翼が展開した――



「いつてきまーす。」

俺、アーシア、部長は休日なのにもかかわらず、学園の制服着て学園へ向かう。今日は俺たちオカ研の活動日なんだ。

にしても、まさかあの墮天使のアザゼルと開講することになるうとは……てか、俺って結構ヤバかったよな。敵と普通にあつていたなんてな。部長もキレてたぜ。部長のテリトリーにいつのまにか侵入していたからな。

おっと、それだけじゃないぜ！なんと、部長のお兄様で魔王様が俺たちの前にいらつしやんだ！部長に似て優しそうなイケメンだった！そんな人が俺の家に泊って行った。今思えば立て続けにすげえ経験だったぜ。

「おはよう。」

と、俺たち三人に合流してきたのはなんとなんと、ゼノヴィアだ。彼女は俺の家の近くにあるマンションに一人暮らしている。それだけじゃない。彼女はなんと悪魔に転生して今じゃ部長の眷属。もう一人の騎士ナイトだ。ゼノヴィアは神の死を知ってしまい、教会を破門された。そんなこんなで悪魔となったんだ。

「アーシア、宿題は終わったか？」

「はい。ゼノヴィアさんは？」

と、仲良く学校の課題について相談しあっている二人。

最初はどうなることかと思っただが、今ではこんなに仲良くやっている。この二人はよく桐生のやつと一緒にいる。

「ああ、アーメン……」

「うううっ!!」

「何やってんのさ……君たち……」

と、いつまでも教会のころの癖が抜けず、お祈りをしてしまった二人が頭痛で苦しんでいる。悪魔がお祈りしたらそうなるでしょうに。

俺のこのツツコミ、累計何回になっているだろうか。

と、ここで俺たちの通う学園についた。

「みんな、今日はプール掃除が終われば、一足早くプール開きよ。」
そうなんです。今日はプールの日！生徒会からその仕事を任されているんです!!

いやあくくなんと素晴らしい日なんだろうか!!

季節は夏。これで、十七回目の夏。しかし、今年は一味も二味も違う夏になりそうだ。

女の子に囲まれた夏休みになる！正直たまらん!!

「……むう、セーイチさん。エッチなことを考えてますよね?」

アーシアが涙目になりながら、俺のほほを引つ張る。しかし、俺はにやけ顔を止めることはできなかった。



ほおおおおおおおお

天国だ。天国が広がっているぞおくくくく

「ほら、セーイチ。どうかしら?私の水着は?」

「あらあら、部長ったら、張り切ってますわねえ。ところでセーイチ君?私の方はどうなのかしら?」

「セーイチさん!わたしも着替えてきました!!」

ゴホオツ!!

俺は、あまりのすばらしさに吐血した。

まずは部長の水着だ。布面積がこれでもかと少ない!!ああ……部長が動きたびにゆれている!!!てか、今にもおっぱいが零れ落ちそうだ

!!

朱乃さんは真っ白の水着だ!!同じく部長と布面積があ!!!あかん。これはあかん。いろんな意味で!!

そして、アーシアと小猫ちゃんは定番のスク水う!!胸にひらがなで書かれている名前も素晴らしい!!

「最っ高つすよ!!皆似合ってます!!!」

「そう。そういつてもらえてうれしいわ。」

「うふふふ。選んだ甲斐がありましたわ。」

「セーイチさんにそう言ってもらえてうれしいですう。」

「いつもは卑猥な目を向けてくるのに……」

本当に素晴らしいものを見せてもらったぜ!!

「セーイチ、それでお願いがあただけど。」

「お願い?何だろうか。」

俺は部長からのお願いを聞いた。

「いっちに、いっちに。小猫ちゃん、いいよその調子だ。」

部長から頼まれたのは意外なことにも小猫ちゃんとアーシアの泳ぎの練習だ。アーシアは普段からなんとなく予想はできたが、小猫ちゃんも泳ぎが苦手だったなんて思わなかった。小猫ちゃんのことだ。運動神経がとんでもないからな。はぐれを倒す時だってあんなに体が動くんだ。てつきり泳げると思ってた。

「ごめんなさい。先輩。貴重な時間を私のために使わせてしまつて。」

小猫ちゃんは申し訳なさそうに謝る。

「いいよいいよ。女の子の泳ぎの練習に付き合うことこそ貴重だよ。特に小猫ちゃんみたいな美少女の泳ぎの練習にね。」

「……セーイチ先輩は優しいですね……」

俺がこういうと、小猫ちゃんはここから見てもぼっちりわかるくらい顔を赤くさせていた。

「よし、次はアーシアだな。」

「はい、よろしくお願いします。」

「オツケー。」

俺は小猫ちゃんにやっていた方法と同じく、アーシアの手を握ってバタ足から始める。

「朱乃!!裕斗!!勝負よ!!」

「受けて立ちますよ、部長。」

「私もですわ。」

横から部長たちの声が聞こえたので部長たちの方を見る。

すると、部長と木場と朱乃さんはガチの競泳対決をしていた。飛び込みも完璧かつてくらい綺麗なフォームだった。はええ……これ、水泳部より速いぞ……

部長たちの超人ぶりを目の当たりにして、俺はアーシアの練習を続けるのだった。



「朱乃……あなた……ちよつと調子に乗りすぎてないかしら？あなた、私の下僕だということを理解しているのかしら？」

「あらあら、そんな風にされてしまうと私も困ってしまいますわ。」

——リアス、私は引かないわよ。」

布藤誠一。ただいまピンチです。

目の前にいる二人のお姉さま方がブチ切れ寸前でいらっしやいます……

俺も冷や汗が止まりません……どうしてこうなった？

「セーイチは上げないわよ、朱乃。というか、あなたそもそも男が嫌いって自分でいってたわよね？」

「あらあら、リアスだって男なんてこれっぽちも興味ない。みんな一緒に見えるって言ったのをもう忘れたの？」

ヤバイ……目が笑ってない……部長からはどす黒いオーラが……朱乃さんからは雷がバチバチとほとしばる。

「セーイチは特別なんだから!!」

「私だっけそう思うわ!!少しくらい分けなさいよ!!」
バゴン!!!

ひいひいひいひい!!!部長と朱乃さんが魔力合戦をおっばじめた!!
あれにぶち当たれば多々じやすまない!!

俺は一目散に退散した。

——●○——

「ゼノヴィア。私と子供を作らないか?」

今度は何—————?!?!?!

子作り—————?!?!?!

部長と朱乃さんの恐ろしい戦いから逃れたと思ったらこれえ—————!?

「ゼノヴィア．．．なんだ、藪から棒に．．．」

「ああ、私は一度この身を神にささげた。しかし、今となってはその神はいない。そして私は悪魔となった。最初は分からなかった。私は子供のころから神や信仰のことだけを考えてきたからね。しかし、それから解き放たれた今、自分の夢がなくなった。私は部長に聞いてみた。そしてたら———」

「そしたら?」

「好きに生きてみなさいって言われたんだ。」

だからって、そっちに行くか普通．．．．飛躍するにもほどがあるんじゃないか。

「子供を産む。女の幸せの花形だろう?」

確かに．．．．子供か．．．．俺もいつかものだろうか．．．

俺はゼノヴィアの勢いに押され、子供を持った時のことを思い浮かべる。確かに、将来は持つかもしれないが．．．

と、想像していたらゼノヴィアが水着をせつせと脱ぎ始める。

「はうあ!!ゼノヴィア!何脱いでんだ!!」

「?これから交わるのではないか。ならば脱ぐしかあるまい?それともつけたままのほうがいいのか?」

いやいやいや、そんなきよとんとした顔で申されました!!

どうする!?!ここは密室だ。このままならバレないかもしれない!!

ない!

いくか? いくしかないな!!

ガチャ!

え? ガチャ?

ドアの方向を見ると……………

「セーイチ……………」

OH……………ヤバイ……………紅髪の女王様がご立腹だ……………

「油断の隙も無い……………」

あわわわわわ……………すさまじいオーラだ……………迫力がコカビ

エルと同じくらいだ……………

部長たち、今ならコカビエルといい勝負が出来たんじゃ……………

「連行です……………」

俺は小猫ちゃんに持ち上げられて皆のもとへと連行される。

おいしいいい!!ゼノヴィア!!! 見てないで助けろおおお!!

「さあ、セーイチ覚悟はいい?」

「うふふふふふ……………」

「あああ—————!!!」

俺はこうしてお仕置きを四人からきつちりともらった。



ああ、刺激的すぎる日だったぜ。

俺は今日のことを思い浮かべながら校門へ歩いて行った。しかし、

そのとき俺の視界にはとある銀色が映った。

「……………」

とんでもない美少年が駒王学園の校舎を見つめていた。銀髪だ。

魔王様の女王^{クイーン}であるグレイフィアさんも同じ銀髪だったが、この少年

はダークカラーが強いって感じた。

見た目の年齢は俺と同じくらいか。

と、あちらもこちらに気づいたのか、視線を校舎からこちらに向け

た。そしてゆつくりと歩いてこちらに近づいてきた。

「やあ、いい学校だね。校舎もきれいで。」

「えっと、まあね。」

俺は無理やり笑顔を作って答えた。留学生か？うちの学園、実は外国人も多数いる。留学生が多いのだ。もしかしたら、今年から入る留学生？にしても、なくんかどっかで見たことあるような気がするんだよな。この人。

『!?今すぐそいつと距離をとって!!』

突然、アグニルからそういわれた。

何のことかわからなかったが、この少年の言ったことですぐに理解する。

「俺は、ヴァーリ。——白龍皇、パニシング・ドラゴン『白い龍』だ。」

なっ!?

じゃあ、あの時の!!

俺は危険だと察知してこいつと距離をとった。

「ここで会うのは二度目だな。エヴォリユシオン・ドラゴン紅炎龍児、布藤誠一。」

……俺の両腕が燃えるように熱い。あの時の……コカビエル戦の時と同じ感覚だ。

あの時、俺たちは遠くから見ていたから顔までははっきりとわからなかった。しかし、銀髪、そしてこの格好からそうだ。こいつは紛れもない。あの時のやつだ。

何しに来たんだ？まさか、戦いに来たのか？だとしたらどうするんだ!!俺は、アグニルにこいつとは戦うな。戦ったら即あの世行きだっ
ていわれたばかりなんだぞ!!

ザッ!

俺が判断に困っていると、二本の剣が白龍皇の首元へと突き付けられていた。木場の聖魔剣とゼノヴィアの聖剣デュランダルだ。

「冗談が過ぎるんじゃないかな？白龍皇。」

「ここで戦いをさせるわけにはいかないな。」

木場とゼノヴィアは驚くほどドスのきいた声音で言った。しかし、白龍皇は涼しい顔をしながら言った。

「やめておいたほうがいい。手が震えているぞ。」

奴の言う通り、木場とゼノヴィアは手元を震わせていた。

「誇つていい。相手との実力差がわかるのは強い証拠だ。君たちと俺では決定的なまでの実力差がある。コカビエルごときに勝つどころか、手も足も出なかった君たちでは逆立ちしたって俺には勝てない。」

コカビエルごとき——

俺たちが一丸となっても手も足も出なかった相手を「ごとき」という三文字で言いくくった。俺はこいつの、底が知れない……. いたい、俺たちと白龍皇はどれだけの差があるというのだ……. 「布藤誠」。君は、この世界で自分が上から数えて何番目に強いと思う?」

突然の問いかけに俺は言葉を失う。俺の強さ……. わからない。だが、相当下の方だと思う。アグニルにあれだけ言われたからな。

「未完成のバランスブレイカーの君では、上から数えたら、そうだな……. 四桁は確実だな。軽く見積もって三千あたりか? いや、宿主のスペック上もつと下……. まあ、大体三千後半から四千前半の間かな。」

「…….」

俺は終始無言だ。俺は怪訝に思うばかりだ。そんなことに何の意味があるのか。

「この世界は強いものが多い。悪魔最強と言われる『クリムゾン・サタン紅髪の魔王』でさえ、トップ10には入らない。」

サーゼクス様よりも強いやつがいるのか……. 俺には想像もできない。

と、白龍皇は人差し指をたてた。

「だが、一位は決まっている。不動の存在がな。この者の順位は何があっても変わらない。もちろん、言うまでもないが俺ではない。俺はまだまだ。」

「じゃあ、そいつはなんだ?」

俺はそいつの正体を聞いた。

「いざれわかるぞ。……. 布藤誠一は、この世界では貴重な存在だ。十分に正しい方向へ育てたほうがいい。リアス・グレモリー。」

白龍皇は俺の後ろへと視線を向ける。そこには部長と小猫ちゃん、朱乃さんがいた。

朱乃さんと小猫ちゃんは早くも臨戦態勢だ。

『白龍皇』……何のつもりかしら？ 墮天使とかかわりのあるあなたが必要以上の接触は——」

部長の言葉を遮って、白龍皇は言った。

『『二天龍』と称されたドラゴン。『赤い龍』と『白い龍』、そして龍王の『紅炎龍児』。過去関わったものはほんの一握りの例外を除いて全員ろくな生き方をしていない。あなたはどうなるんだろうな？』

奴の言葉に言葉を詰まらせる。

『今日は戦いに来たわけじゃない。先日訪れた学び舎を見たかっただけさ。俺はもう少し見学をしていくよ。』

と、言って奴は校舎見学に行ったのであった。



イツセーSIDE

よつす、イツセーだ。

墮天使アザゼルに会った後、俺は会議への準備など、もろもろのやることがあった。俺は今それをしている。

にしても……

「あつゝゝゝゝ」

と、ぐったりとしている妹たちとドライグとティア。

まあ、夏だからな。それは仕方がない。日本はブリテンなんかより夏は暑い。これははっきり言える。これはつらい。

「ねえゝゝゝイツセー、いつものやつやってゝゝゝ」

アイスをかじりながらだらしなくしているドライグ。

あれとはいつもこの季節にやることだ。妹たちもやってほしそうにしている。

「はいはい。わかったよ。」

俺は立ち上がって魔法を発動させる。

俺が魔法を発動させると、部屋の温度が一気に下がる。

「はあくあく涼しい。」

俺は魔法を使ってちよつとした冷たい風を発生させた。こうすれば、冷房のいらぬ人力冷房ができるのだ。さらに……ピタッ

「んく気持ちいいよくにいたん。」

おれは冷たい風が発生したところで部屋が快適になって涼んでいるところにさらに暑さに追い打ちをかける。

ルルのおでこに魔法を使って手のひらを保冷剤のように冷やして当てた。こうすることでより涼しく感じるができるわけだ。

「あ、ずるい。おにいちゃん、イズナにもやって。」

「おにーさん、わたしも。」

「おにいさま、わたくしもよろしくお願いします。」

「にいに、スイも。」

「クロアも。」

「にいちゃん、わたしも。」

「いちにい、わたしも。」

「わかった。けど、順番な。」

妹たちがみんなやってと懇願する。とりあえず、俺の腕は二本しかない。とにかく、順番に八人の妹たちに冷えピタをする。

「ティア、ドライグ。二人もこれ、やろうか？」

俺はそこで冷たい風だけで涼んでいる二人にも聞いた。

「あ、ああよろしく頼む。」

「うん、お願い。」

二人ともやってほしいという。しかし、なぜだろう？涼しいはずなのに顔が赤い。

あのあと、俺は妹たち八人全員のおでこを冷やした後、ティアとドライグの番になった。

「じゃあ、いくぞ。」

「う、うん。」

「よろしく……」

俺はティアとドライグのおでこに手をあてる。おかしいな。手は魔法で冷やしてあるはずなのにドライグとティアの頬は赤い。俺はおでこから二人の頬へと手を当てた。

「ひうつ!?!」

「ひゃんっ!」

ドライグは声を上げた。

「あ、冷たかったか?」

「ううん……大丈夫。」

ドライグとティアは大丈夫な様子だったのでこのまま俺は二人を冷やし続けた。

そして数十分後。

「ありがとう……イツセー、もういいわ。」

「そうか。」

俺はドライグとティアから手を離れた。

ティアとドライグの番も終わったことなので、俺は会談に向けての用意もろもろを再開する。

「じゃあ、俺は会談場所の下見いってくるから、留守番よろしく。」

「あ、うん。いってらっしゃい。」

ほそぼそとしたドライグの声が聞こえる。俺はドライグのその声が聞こえた後、家を出た。



家をでてまもなくしたあと、学園に到着する。

しかし、校門付近には先客がいた。あれは……悪魔と……白龍皇だった。なにやら、会話しているようだ。

しばらくして白龍皇は立ち去らず、校門から学校の敷地内へと入っていった。それに対して悪魔たちは学園から去っていった。

こりや、俺がいるってことがわかっての行動か?

とにかく、俺も見学に来たからな。俺も学園の校門から中に入ってみる。

そんなときだった。

「やあ、魔法使い。キミも来ていたんだ。」

と、入ってすぐのところにいる。白龍皇が。やはり、俺の存在に気づいていたか。

「奇遇だな。白龍皇。お前もこの学園の見学か？」

「まあね。ちゃんとこうして面と向かって会うのは初めてだな。俺はヴァーリ。白龍皇だ。」

白龍皇は自分の名を名乗る。俺は墮天使総督アザゼルから名を聞かされていたが、あえ手今初めて聞いたことにした。

向こうが名乗ったのでこちらも名を名乗る。

「俺はイツセー。イツセー・ヴァーミリオンだ。一応、フリーの魔法使いつてところだ。」

「では、イツセー・ヴァーミリオン。キミは、この世界で上から数えて何番目に強いと思う？」

いきなりこんな質問をされた。

しかし、こんな質問をするということはよほど、強さに貪欲なんだろうな。

「・・・さあな。お前は俺が何位だと思う？」

俺は分からないふりをして奴に逆に質問をする。

「君に会ったのはコカビエルの時の一回だけだ。それをみて推測するしかないが、おそらく上の方だと俺は見る。三桁・・・いや、もしかすれば二桁もあるかもしれないな・・・」

奴は笑いながら楽しそうにそう言った。

「ただ、この順位には不動の存在がいるのは知ってるか？」

「ああ。黙示録に記されしドラゴン、だろ？」

俺が答えると、白龍皇はうなずいた。

「そうさ。真なる赤龍神帝アホカリユプス・ドラゴングレートレッド。」

「なんだ？もしかしてお前の目標なのか？」

俺がそのように訊くと、やつは嬉々として答えた。

「そうだ。グレートレッドを倒す。これが俺の夢だ。」

おどろいたな。まさか、俺と同じ目標だとはな・・・つくづく似

ているな。これも、赤龍帝と白龍皇の運命というやつか？

「そうか。しかし、バランスブレイカーなしでコカビエルを倒し切ったお前なら届かなくもないかもしれないな。」

俺は白龍皇を称賛する。あそこまで強いやつはそうはいない。
禁手バランスブレイカー化なしであそこまで高めたのは敬服者ものだ。

ゆえに、俺は一つ気になることを言った。

「その強さは——その身に流れている血からきているのか？なあ、悪魔よ。」

「っ!？」

白龍皇は今まで涼しい顔をしていたが急に表情を変えた。

俺は一つ気になっていた。この違和感。人間の気配のほかに、かすかに気配がしたので。

そう——異形の気配だ。

「まさか、気づかれるとは思ってなかったよ。俺の本名は、ヴァーリ・ルシファー。君の言う通り、ルシファーと人間のハーフなのさ。」
へはははっ！なるほどな！ルシファーときたか！通りであの強さなわけだ。<

へなによそれ……魔王の血筋の者に白龍皇が宿るなんて……奇跡だわ……<

俺と白龍皇の会話を俺伝いで聞いていた歴代赤龍帝のベルザードさんもエルシヤさんも驚く。

俺も、だ。まさか、悪魔のなかでもルシファーとはな。ならば、あの強さは納得だ。最強の悪魔の一角であるルシファー。そんなルシファーの血を受け継いだ奴がセイクリッド・ギア神器、それもロンギヌス神滅具である白龍皇の光翼を宿すとは……一体どんな確率だろうか。おそらくこの地球ができる確率、十億円以上の賞金の宝くじと同等かそれ以上だ。

それにしても、悪魔か……俺の、もつとも憎むべき種族だ。それが白龍皇とは少し残念な気がしないでもない。

そう思っていると、思ってもみない言葉を奴は口にした。

「たしかに、俺には悪魔の血が流れている。ただ、それだけだ。俺

は、俺の半分は悪魔でも、半分は人間だ。俺は、悪魔という種族に俺はとらわれない。個人的にはいい印象は持っていないのでな。俺は、人間として、白龍皇として、強くなる。それだけだ。」

俺はその言葉を聞いて、先ほどの考えは撤回しなければならぬ、と思った。どうやら、こいつは俺の嫌っている悪魔とは少し、いや、まったく違うようだ。ただの、戦闘狂だ。

「はははーそうか。俺も悪魔という種族は好きじゃない。が、お前となら、仲良くなれそうだ。俺は強いやつは大歓迎だ。俺も、強いやつとは戦いたくてたまらない。」

俺は少しテンションが上がってそう言った。

「ふっ、奇遇だな。俺も君となら仲良くなれると思っていたんだ。俺は魔法使いを何人か知っているが、君みたいな戦闘狂の魔法使いは見たことがないよ。」

あちらもあちらで盛り上がっていた。

これは、戦う時がますます楽しみになってきたってもんだ。

「次会う時は、会談の時だな。」

「ああ。それまで、楽しみにしているよ。魔法使い、イツセー・

ヴァーミリオン。」

「ああ。またな。ヴァーリ・ルシファア。」

俺たちは互いの名を覚えたように、口にした。

奴は魔方陣でここから去っていった。

こうして、俺とヴァーリ・ルシファアの二回目の邂逅は幕を閉じた。

NO, XXXII 前夜

セイイチSIDE

学園で白龍皇と遭遇し、俺たちグレモリー眷属最後のメンバーにして、女装つ子ヴァンパイア、ギヤスパーと出会った。部長からとてつもない才能を秘めている子だと聞いていた。しかし、いざ出会ってみれば、引きこもり女装野郎だった。俺は悲しかった。見たときは金髪ベシヨックの美少女だと思ったんだ。アールシアと並んでダブル金髪僧侶ベシヨックの誕生したと!! 現実是非常なもんだぜ………てか、引きこもっているのに女装して意味ないだろ!!

しかし、ギヤスパーの神器、あれには驚いたなあ。時を止める。フォービトゥン・パロール・ビュ停止世界の邪眼だっけ? あれは凄すぎる! 反則だ! 時間を止めることが出来れば何でもし放題じゃないか!! しかし、そう思ったのもつかの間だった。ギヤスパーは対人恐怖症で、無意識に神セイクリッド・ギア器を発動してしまうんだ。そのギヤスパーを鍛えるべく、俺たち眷属はギヤスパーの対人恐怖症を治す訓練を昨日からスタートした。

そして、翌日。俺は朱乃さんに呼ばれ、この街にあるとある神社に來ていた。俺の視界に入る石段を登っていく。やがて石段を登り終えると、そこには見知った顔がいた。

「いらっしやい。待っていたわ、セイイチくん。」

「あ、朱乃さんー!」

そこには、巫女装束を纏った朱乃さんの姿があった。

俺たちは神社の立派な本殿の方へと歩き出す。

「ごめんなさいね、セイイチくん。どうしてもあなたに用があったから。」

「い、いえ、気にしないでください!」

俺に用とは何なのだろうか?

にしても、朱乃さんの巫女服姿はサイコーだ。とても似合っている。しかし、悪魔がこんな神聖なところにおいて大丈夫なのだろうか? 疑問は尽きないが、とにかく朱乃さんについていった。

本殿に入るやいなや、俺の目の前にはとても激しい閃光が放たれ

た。

「彼が、エヴォリユシオン・ドラゴン紅焰龍児、布藤誠一くんですか？」

その閃光の中心からは墮天使とは真反対の金色に輝く羽を生やし、端正な顔立ちの美青年が現れ、俺に視線を送っていた。白と金を基調とした豪華な白いローブに身を包み、頭部の上には金色の光輪が漂っている。まさか……この人は……!?

俺が驚いているにもかかわらず、目の前の青年は優し気な笑みを浮かべて握手を求めてきた。

おれは体が条件反射して握手をした。

「初めましてですね。エヴォリユシオン・ドラゴン紅焰龍児、布藤誠一くん。」

この人は俺の名前を知っていた。

俺の目の前でコカビエルと同じ、十二枚の翼が出現する。

「私はミカエル。天使の長をしております。なるほど、確かに懐かしいオーラですね。まさしく、アグニルですね。懐かしい限りですね。」

なんてことだ……チョー大物だった……



かなり広い本殿の中心。俺と朱乃さん、そしてミカエルさんと対面するという形で座る。

「実はですね、今日ここにお伺いしたのは、貴方にこれを授けるためです。」

と、ミカエルさんが手のひらから出現させたのは一本の剣だ。しかし、ただの剣じゃなかった。この俺の肌を突き刺すようににじみ出るオーラ。これは聖剣だ！無知な俺でもこれは分かる。俺の近くに聖剣ぶん回す奴がいるからな！

「これは、ゲオルギウス——聖ジョージとも言えば伝わるでしょう？彼の愛剣、聖剣アスカロンです。」

いや、なんて？ゲ、ゲオルなんたら？全く分からない。

『ふーん。ドラゴン・スレイヤー有名な龍殺し、ゲオルギウスね。まあ、少しは知識を

持つておいた方が良いよ、相棒くん。じゃないとまた負けをみることになるよ。』

うう……アグニルに言われると耳が痛い。

『にしても、ドラゴンの力を使う人間に龍^{ドラゴン}殺^{スレイヤー}しの武器を渡すとはね。ミカエル、これは嫌味かい?』

アグニルがミカエルさんへ嫌そうに言った。

「別にそういう意図はありませんよ、アグニル。ただ、三大勢力が手を結ぶということで、私たち天界から悪魔側へのプレゼントです。それと、あなたがたはこれから多くの敵と相まみえることになるでしょう。歴代でも弱いとされているあなたにとってはいい補助武器になるかと思ひまして。」

『だってさ、相棒くん。』

ごめんなさい!!

弱くてごめんね!!これでも一応努力してるんだよ!!

「先の戦争で創造主——神はお亡くなりになり、墮天使の幹部たちは沈黙、旧魔王は戦死。そして、勝者が決まることなくただ自身の勢力をお互いに削り合っただけの戦争でした。今でも些細な小競り合いなどが発生しています。しかし、今度の会談は我々天界勢力にとっても、悪魔にとっても墮天使にとっても好機なのです。このまま変わらなければ、滅びの道へ進むだけです。いえ、他の勢力に攻め込まれるかもしれません。しかし、手を取り合うのは初めてではないのですよ。過去に、三大勢力は互いに手を取り合いました。それは、白龍皇アルビオン、アグニル、そしてもう一体の黒いドラゴンが戦場を乱したからです。それと、後の一回は赤龍帝ドライブを討伐するときの計二回です。」

そんなことがあったんだ。てか、アグニルもその張本人だったのか。

どおりで先ほどのような会話をするはずだ。

にしても、他の勢力?どういうことだ?もしかして、三大勢力以外にもなんかあんのか?

『……そうさ。聖書神話以外にも神話体系は存在してるよ。

普通は自分たちの領域から出ることは無い。しかし、聖書神話の主神ともいえる聖書の神が消失しているのは大問題なのさ。この情報が万が一でも漏れることがあるなら、他の勢力がどう動くのか予想できたものじゃないのさ。世界の神話体系は信者をより多く欲しがっているのさ。人間の信仰が、その神話の力になる。自分たちの信仰を広げるために機会があれば他の神話を滅ぼしてやる、なんていう過激な奴も少なくない。』

俺の頭に？が大量に浮かんでいたところ、アグニルが解説してくれた。わかんないことが多いけど。しかし、なんか機嫌が悪いのは気のせいかな？まあいいや。

「アグニルの言う通りなのです。私たちは世界の神話体系の中でもそれなりの力がありました。まあ、中の上と言ったところでしょう。しかし、それは主神たる我らが創造主がいたからの話です。その主がいらない今、私たちは崖っぷちも同然です。なので、これはいわば願掛けです。再び、手を取り合うことを願っての。他にも、いくつかの贈り物を悪魔側、堕天使側に届ける予定です。」

ミカエルさんはアグニルに同調して力強く言った。
俺には皮肉にしか聞こえなかった。しかし、この天界の現トップ様
が言うんだ。信じてみよう。

「おっと、時間が押していますね。すみませんが、私はこれで。」
ミカエルさんはもう帰ろうとしていた。

俺はこの人達に訊きたいことがあるんだ。俺はミカエルさんと呼ば
び止める。

「あ、あの、待つてください。俺、貴方に訊きたいことが……」
「会談の時にそのことを聞きましょう。必ず約束します。」

ミカエルさんは満面の笑みを浮かべた後、そそくさとこの場から
去っていった。

◆◆◆
アザゼルSIDE

「ああ、そうだ。じゃ、よろしく頼むぞ。」

ミカエル率いる天界勢力とサーゼクス率いる悪魔勢力と連絡を取り終わり、ソファアーに体を預けて脱力する。

「ふいー、なんとか、うまくこぎつけたって感じだな。」
俺たちは長い間、いがみ合ってきた。

しかし、そのいがみ合いも、もうそろそろ幕を閉じることができるとチャンスが出来た。

ようやくやってきたのだ。この時代が。これで、俺も神器の研究に没頭できるってもんよ。

と、グラスに酒を注ぎながら回想する。

「……あとは、あいつらだな……」

「やあ、アザゼル。」

と、そこに問題の一人である白龍皇ヴァーリが現れる。

「何やってたんだよ、ヴァーリ。お前もそろそろ気を引き締めろ。明日は会談だぞ。」

俺はどこかで油を売っていたであろうヴァーリに軽く注意を促す。

「すまないな。ちよつと用事があつたのさ。」

しかし、ヴァーリは俺の注意を軽く受け流す。

「まったく。まあ、こいつは平常通りだな。俺はいつも通りのヴァーリに苦笑する。」

「……なあ、アザゼル。」

「ん？何だよ。」

ヴァーリがさつきとは打って変わって真剣なまなざしを向けてくる。

これには俺も面食らってしまった。

「もう……戦争は起こらないのかな？」

俺はそれを聞いてため息をついて応えた。

「ただ戦いのみを追い求めるか……お前は歴代の白龍皇たちと同じ、典型的なドラゴンに憑りつかれた者だな、ヴァーリ。そんなことじゃ、長生きできそうにないな、こりゃあ。」

俺はバトルマニアなヴァーリに呆れを抱きながらグラスにある酒をグイっと一気飲みする。

ああ、うまい。この酒、また買つとくか。

しかし、対するヴァーリは俺の言葉にまるで興味ないかのように鼻で笑った。

「いいき。特別俺は長生きをしようと思っているわけじゃない。ただ、俺はこの時代に生まれてきたのが少々残念に思うよ。この、神がない世界。おれは、——神を打倒してみたかった。」

ヴァーリの顔に憂いが見られる。

「そのセリフ、実に白龍皇らしくて結構だ。んでだ。もし仮にお前がこの世界の強者という強者を全員倒したらどうすんだ？」

「そうなった暁には、死ぬよ。俺より強い奴がない世界なんて生きる価値ないだろ？」

「.....」

俺は無言になりながら酒を飲む。

しかし、ヴァーリ。一つ言うぞ。

神々は世界にまだ無数に等しい数がいるぞ？



イツセーSIDE

『.....ん？ここは.....』

気が付けば、俺の目の前にはとても懐かしい光景があった。

自然豊かな土地。その豊かな土地の中心にたたずむ威厳に満ちた宮廷。

そう。俺の幼馴染、アルトリアとその兄アーサー兄さんのいた宮廷だった。

俺は、その宮廷を街から見上げていた。

『ふっ...懐かしいな...』

俺はふっ、と笑みをこぼす。

『イツセー!!』

感傷に浸っていると、後ろから俺の名を呼ぶ声があった。聞きなれた、懐かしい声だった。

俺はその声の聞こえた方向、後ろに振り向いた。

そこには——

ドシン!!

「んっ……いつてえー……」

衝撃が背中に走った。

目を開けると、いつもの俺の部屋の天井だった。

ただ、いつもみる天井とは少し位置が違っていた。

「夢だったか……」

あの時見た夢はなんだったんだろうか？なぜ、今になって、あんな夢を……

腑に落ちないまま、俺は体を起こす。

体を起こして俺はその状態を理解した。

「ああ……そうか、あのまま寝てしまったのか。」

俺のすぐ下には倒れた椅子があった。どうやら、椅子に座ったまま寝て後ろから転んでしまったのだろう。

まあ、最近はいろいろとまたちよつとした研究に凝ってしまっていた。だめだな。これでは。

俺は着替えて部屋を出る。

とちゅう、定時通り伽耶が起きてリビングで会う。彼女の生活規則の正しさはいつ見ても素晴らしいものだ。

しかし、伽耶のこれからのことも考えなくては。知り合いのつてをたどってみよう。伽耶の本当の居場所がわかるかもしれない。会談が終わったら、このことを話しておいたほうがいいかもしれん。

朝食を食べた後、俺はとある人物と連絡をしていた。

『とうとう、明日だね。イツセー。』

向こう側から聞こえてくる声は、コカビエルとの戦闘後に連絡していた人物と同一だ。

「ああ。まあな。こちらとしては、少々楽しみでもあるし、一種の牽制でもある。」

俺は苦笑しながら言った。

『にしても、三大勢力がついに、ね。三大勢力が互いに協力するのは勝手だけど、その会談をどうしてこの日本でやるのかなあ？』

俺の通信相手は少々不満そうに言った。

まあ、気持ちにはわからんでもない。しかし、俺はあえてそうなった原因を言及した。

「それは、あんたらがここに無関心すぎたツケが回ってきただけだろう？だから、あんたらからしたら雑魚同然のなんでもないやつらまでみすみす侵入を許すことになったんだろ？これを機に、少しは考えを改めたらどうだ？」

『……そういわれたらなんの反論もできないわ。まあ、肝に銘じておくわ。』

本当にその気があるのかね……こいつらは……
なんだかんだこれからも変わらん気がするがな。

「まあ、とにかくだ。会談が終わればまた有益な情報は流しておくよ。」

『それは感謝するわ、イツセー♪』

伝えることは伝えたので連絡を絶とうとすると、あちらはまだ話があつたらしく、切らずにこちらに続けて話をしてくる。

『そうそう、イツセー。実は近々私たち、とある勢力と会談をするこ
とになったの。』

それを聞いて俺は少し驚いた。まさか、のんきなこいつらが会談な
んて……

てか、いまだこの勢力も会談会談言っているけど、流行ってるのか
？

「そうなのか。」

「うん♪」

なるほど、勢力のトップとして役目を果たしてるのだな。

俺はこの連絡相手の人となりを知っているから少々驚いた。しか
し、この相手の性格からしたら、これだけで終わりそうもなかった。

「それでね、イツセー、あなたにもこの会談に参加してもらいたい
の。」

ほら。やっぱり。考えてみたら、会談をするっていうのただ言うわ
けないか。

「はあ。あのな、なぜあんたらと一応のつながりはあれど、部外者に分けられる俺がなぜ参加しなければならぬんだ？」

俺はめんどくさいから一応断れる方向に話を持っていく。会談なんて、今回だけにしたかつたんだがな。

『いいじゃない。あなたの力はあなたや私たちが思っている以上に、強力なのよ。そ・れ・に、ドライグちゃんの封印が解除されてがこの世界に復活したってことを口外しないで上げてるじゃない。』

・・・それを持つてくるか・・・

そう。ドライグが復活したということ俺はできるだけ口外しないようにしている。ただ、完全には無理だった。過去、少しトラブルがあつてドライグの復活という事実を知っているのは、今こうしてはなしている者、それからあと他の勢力に三人いるんだ。まあ、その三人は比較的友好的だから大丈夫なんだがな。いろんな意味でヤバイやーつだが。

「わかった。まあ、俺があつたことのないやつと対面できるからいいか。」

『ありがと♪イツセー。また詳しいことは決まったら連絡するから。じゃあねー★』

と機嫌よさそうに連絡を終了していった。

まったく。こんなことではあいつにいいようにされてしまうな。

「イツセー。いい？」

連絡を終えると、俺の部屋にはティアとドライグが来ていた。

「ティア、ドライグ。どうしたんだ？」

俺は彼女たちが来た理由を尋ねた。それは、彼女たちがあまりにも真剣なまなざしだったからだ。

「明日のことだ。」

俺はそう言われた納得した。

「ああ、会談のことか。」

「そうだ。イツセー。お前なら大丈夫だとは思っている。イツセーの力は、私も、ドライグもよく知っている。たとえ魔王やあの天使たちを前にしても何ら問題ないと思っっている。」

ティアは俺を見つめながらさういう。

「しかし、油断はするな。過去にドライグが手負いだったつていうこともあるが、圧倒的な力の差があったのにも関わらず、一度ドライグを滅ぼしたこともある奴らだ。」

ティアはドライグの方を一度みてもう一度こちらに視線を戻した。さうだったな。ドライグは、正面衝突したんだっけか。当時の三大勢力と。その時は、非常に苦しかったと言っていた。これでもかというほど傷つけられ、苦痛を与えられたという。

その本人のドライグはティアから当時の話を持ち出され、少し嫌そうな表情をしている。まだ、その時の恨みはあるのだろう。

「イツセー、気を付けてね。なんだったら、私も……」
ドライグがいつもより力のこもってない弱弱しい声で言った。心配をしてくれる二人に俺は近づいて言った。

「二人とも。俺は大丈夫だ。俺は奴らのことを子供のころから知っている。手段を選ばないやつらだと。何かあれば、俺は本気を出すさ。必ず無事で帰ってくるって約束する。」

俺は二人の目を見て力強く言った。

「絶対だぞ。」

「絶対だからね。」

「ああ。」

二人との誓約を交す。

こうして、会談前夜は終わりを迎えた――

NO, XXXIII 　　～会談開始～

セーイチSIDE

「全員、集まったわね。」

オカルト研究部の部室に全員が集結する。これから何があるかって言うのだな、階段が始まるんだ。俺たち、オカルト研究部ことグレモリー眷属も参加することになっている。

「じゃあ、行くわよ——」

部長の言葉に全員が頷いた。とうとうこの日が来た。悪魔、墮天使、天使のトップの方々が集結するんだ。一応、トップの方々全員と顔を合わせたことがあるが、その人たちが一挙に集まるというだけで緊張する。

此度の会談の会場は俺たちが通う駒王学園の新校舎、職員室の隣にある職員会議室で行われることになっている。今日は休日で、時間帯は夜。すでに各陣営のトップの方々は待機しているらしい。

そして、何よりも目を見張るのが、この学園全体を巨大な結界で囲み、誰も中へ入ることが出来なくなっていた。結界の外は天使、墮天使、悪魔の軍勢がぐるりと結界を囲み、万全な防衛体制を敷いている。まあ、当然か。一世一代の三大勢力の会談だもんな。そういや、木場が一触即発の空気だっと思ってたな。

俺たちは会談の行われる部屋に向かって先頭に行く部長の後を追う。

引きこもりヴァンパイアことギヤスパーは当然のごとく、この部室で待機だ。まあ、しかたない。まだ神器を制御できてないからな。なんとか、あいつを上手く制御できるようにしてやりたいな。

コンコン

「失礼します。」

「入りなさい。」

会談の行われる部屋のドアを部長がノックする。

ドアの先から入れとの声がかかり、部長がドアを開ける。

会議室はいつもとは違った内装になっていた。いつものここはふ

つうの長テーブルが部屋を囲うように配置され、椅子もそれにそってたくさん置かれているのだが、今日は部屋の中心に豪華絢爛な円形のテーブルが置かれていた。

そして、そのテーブルを囲むようにして、見知った人たちが座っていた。空気は静寂に包まれていて、全員が真剣な面持ちだった。

悪魔側、天使側、墮天使側。それぞれ各勢力二人ずつ座っている。墮天使側には白龍皇ヴァーリが壁を背もたれにしながら立っている。

そして、もう一人、あり得ない人物が座っていた。俺はその人物を見た瞬間、目を見張った。俺だけじゃない。俺も、木場も、部長も、朱乃さんも、ゼノヴィアもだ。なんと、俺たちと一度戦ったあの金髪の魔法使いの野郎がいたのだった。



イツセーSIDE

「んじゃ、ちよつくら行ってくるわ。」

「ああ。」

「気を付けてね。」

不安そうな表情をしたティアとドライグたちに一言言ってから家をでる。家を出てもいまだに後ろから二人の視線を感じるが、俺は振り返ることなく歩いていく。

今日は三大勢力の会談の日だ。アザゼルの言っていた通りの時間帯、場所で行われる。とはいっても時間は深夜だ。妹たちはもうすでに眠っている。ドライグとティアに妹たちのことは任せておいて俺は会談の行われる場所へと向かう。

しばらく歩き、会談の行われる場所である学園に到着した。見たところ、中々の規模の結界が張られている。まあ、三大勢力のトップ陣が集結するからな。並みの結界など張らないに決まっているか。にしても、護衛の数も多いな。俺はそんなことを思いながら結界を通り抜けて指定された場所へ向かった。その指定された場所のドアを開くと、中にはトップ陣がすでに椅子に座っていた。

「よお、待ってたぜ。」

墮天使総督アザゼルがこちらに手を振りながら言った。

「アザゼル、この人が前言っていた魔法使いか？」

俺とは初対面であろう紅髪の男がアザゼルに確認する。

「そうだけ。詳しいことは後でな。とりあえず、ミカエルの正面の椅子に座ってくれや。」

アザゼルは俺にそう指示する。ミカエルの正面の椅子・・・この光輪を頭に浮かばた金髪の男の前の椅子か・・・

「ああ。わかった。」

俺は言われた通りに席に着く。

椅子にすわると、目に入る光景がざつと変わる。ここに、三大勢力のトップ陣たちが顔を合わせ、視線を交す。なるほど、こりや中々の光景だな。そして、墮天使アザゼルの後ろに目をくれてやるとアザゼルの言った通り、白龍皇が腕を組んで壁にもたれかかっていた。あちらも俺の視線に気づいたのか、こちらに視線を向けた。相変わらず、さわやかな涼しい顔をしている。

と、ここでこの部屋の扉が開く音がした。その開かれた扉からこの部屋に入ってきたのはいつぞやの悪魔たちだった。これには驚いた。まさか、あの悪魔たちも一緒とは。あちらもあちらで驚いているようだった。そのうちの一人が口を開いた。

「あ、あの!!なぜこの男がいるのですか!?!」

口を開いたのは紅炎龍エヴォリユシオン・ドラゴン児であった。ほかの悪魔たちも口にはしていないが顔に同じようなことが書いてあった。

それには墮天使アザゼルが答えた。

「俺自身が呼んだのさ。俺も聞いた話ではあるが、この魔法使いもコカビエルと戦っただろ?ならば、この会談に参加する意味があることは否定できないだろう?」

墮天使アザゼルの言うことを聞いて悪魔たちは黙った。

「思うところはそれぞれあるとは思いますが、みんなひとまずその席に座ってくれ。」

紅髪でたいそうな恰好をしている俺の左隣にすわっている悪魔が呆然としている悪魔たちに指示をだして悪魔たちをいさめる。悪魔たちはとりあえず言われた通りに席に着いた。

「定刻だ。」

墮天使総督アザゼルは腕時計の時間を見て、会議の開始を合図した。それと同時に、一部を除くここにいる全員の表情が変わった。

「では、定刻になったとのことなのでまず一つ、この会議の前提条件を述べる。ここにいる全員は最重要機密事項である神の死を認知していることとする。」

改めて言われてことだが、ここにいる全員はそのことを聞いても同様はしない。全員、知ったような顔をしている。

「では、話を進める。」

墮天使側が進行を務めるという感じで会議はスタートした。

「では、この会議を計画したわれわれ墮天使側からまず、話をしよう。」

墮天使が企画したというこの会議。その最初の内容は墮天使側の情報を悪魔、墮天使側に伝えることであった。墮天使はその中枢組織である神の子を見張る者が主と言っていい。そのグリゴリの戦力、状況などを悪魔、墮天使側に伝えている。まあ、この会議の目的は十中八九、三大勢力の講和だろうから手の内をある程度明かすというのは当然のことだろう。俺は、三大勢力の各陣営のことはこいつらの下っ端のやつらなんかよりもはるかに知っている。俺が見聞いた三大勢力の中では墮天使が最も信用無いと訊いた。俺からしたら天使も悪魔も似たり寄ったりだ。

墮天使側でここにきているのは三人。まず、トップである神の子を見張る者総督アザゼル。そして、もう一人の名は知らないが、ある程度の力をもった墮天使。いわゆる上級墮天使ってやつだ。それと、後ろには白龍皇がいる。中々に戦力がそろっているな。流石は大戦で最終的に最も有利だった勢力だけのことはある。

と、ここで墮天使側の話が終わった。ある程度知っている話はずまらんかったな。どうせなら神器の話を聞きたかったが。

「では、次は私から。」

次は悪魔側の話が始まった。

悪魔側もおおむね墮天使勢力が言ったような内容に似た話だ。

悪魔側のやつらに俺は視線を向けた。後ろの席に座っている奴ははつきり言っただうでもいい。なんの脅威でもない。少し注意すべきなのはこの俺と同じ席についている奴らだ。紅髪の男は、悪魔の魔王。こいつが、あのサーゼクス・ルシファー。そして、黒髪の女の方はセラフオール・レヴィアタン。特にサーゼクス・ルシファーは超越者と言われているらしい。どんな者なのかは知らないが、弱いわけではなさそうだ。にしても、悪魔側は何やら複雑らしい。こいつら二人は魔王と名乗っているが、本当の血筋ではないらしい。その本来の血筋である奴らを差し置いて魔王をやっているとか。世襲制であるはずの魔王の王である存在が、こんなことになるとは……やれやれ。ここには本来の血筋がいるというのにな。ま、今そこで涼しい顔をしながら会議を聞き流している白龍皇は興味がないうだ。よかつたな。もし、こいつが魔王になる野望を秘めていたら、会議どころではなかつたな。ほかの子孫たちはどうなのだろうか。確か、俺の見聞では旧魔王派と呼ばれる派閥があつたはずだ。そいつらは今、何をしているのか。

と、ここで悪魔側の話が終わる。正直悪魔たちには何も有益な情報はないな。

「では、最後は私たちから。」

最後は残っていた天界側の話だ。

天使たちはまだ、こいつらよりかはまだ信用のおける存在だ。

天界側も堕天使側と同じく二人と教会の戦士一人の三人だ。熾天使と呼ばれる最高位の天使、ミカエル。聖書の四大天使と呼ばれている有名なやつだ。それと、それに力は劣るであろう女性の天使が同席している。おそらく智天使ケルビムといったところか。まあ、妥当なところだな。しかし、実力はいつら脳筋どもには及んでいないな。おそらく見た目もな。あいつらはこいつらを侵略するのだろうか？それだったら面白いことになりそうだが。まあ、それは置いておこう。

と、ここまで会議は順調に進んでいる。俺は特に何も口出しをすることはしない。所詮、こいつら神話勢力だけの話だからな。とはいえ、こいつらはあまりにも外界に手を出しすぎているところもある。こ

のことを指摘してやろうか、とこいつらの話声をBGMにしながら心の中で考える。

「というような、感じになります。私たちからは以上です。」
そんな感じで天界からの説明が終わる。

「そうだな。そうしたほうがいいかもしれない。このままでは、お互い破滅への道をたどることになるかもしれない。このような小競り合いはやがて大きな戦いへの火種になる。」

サーゼクス・ルシファアがミカエルに同調する。

やはり、小競り合いはちよくちよく起きているのか。何とも愚かな。そいつらに限ったことではないが、やはり見えていないのかもしれないな。だから破滅への道を進んでいるんだ。

こいつらの話している内容を理解しているからそう心の中で考える。そこにすわっている悪魔たちは内容が理解できてないらしい。

「まあ、その通りだな。こんなことじゃ、俺も趣味に没頭出来やしない。」

なんだ？アザゼルが発言するたびに変な空気になるぞ。どうにかしろよ。全く。アザゼルはアザゼルでこんな空気を楽しんでやがるしな。食えないやつだ。

「さてと。お互い概要は話し終わった。リアス、そろそろ先日の聖剣の強奪事件の説明を頼む。」

ここで魔王ルシファアは件の案件を持ち出した。あそこの悪魔たちに説明させるようだ。

「はい。魔王さま。」

魔王ルシファアに催促されてその悪魔は席を立って前に出た。同じ色の紅髪。おそらく兄妹か。

紅髪の悪魔は一部始終を話し始めた。俺も含めて、三大勢力のトップもそれを聞き入る。淡々と話してはいるが、その奥には不安が見られる。

「——です。そして、私たちはこの学園で決戦となりました。しかし、そこに乱入者が二人きました。まず、そこに座ってい

る魔法使いがこの学園の校庭を中心にして張られた結界を容易に破壊し、最終的には白龍皇がコカビエルを処理しました。以上が、私、リアス・グレモリーとその眷属が関与した事件の一連の報告です。」

俺のことが説明に出たとき、一瞬俺の方に視線が向き、またそちらに戻った。

「ご苦労。座ってくれて構わない。」

魔王ルシファアは悪魔を座らせる。

「ありがとう、リアスちゃん★」

魔王レヴィアタンはウィンクをその悪魔に送る。ほんとなんなんだ、こいつは？こんな奴が魔王なのか？ほんとに大丈夫なのか、悪魔は。

俺は心の中でそう毒づきながら会議の方に意識を戻した。

「さて、アザゼル。聞いての通りだ。これについて墮天使総督の意見を聞きたい。」

墮天使総督に全員の視線が向く。対して墮天使総督は不敵な笑みを浮かべながら話し始めた。

「先日起こった事件は我が墮天使中枢組織神の子を見張る者の幹部コカビエルが他の幹部、および総督である俺に無断で起こしたコカビエルの独断行動だ。奴の処理は、先ほども言った通り、白龍皇が行った。その後、やつは軍法会議で刑に処された。地獄の最下層で永久冷凍だ。もう二度と日の光は見えねえよ。そのあたりのことはこの前転送してあった資料に書いてある通りだ。それで全部だ。」

総督の説明を聞いてミカエルはやれやれと嘆息しながら言う。

「説明としては最低の部類ですがね——あなたとしては、我々と大きなことを起こしたくはないという話はしています。それに関しては、嘘偽りはないのでしょうか？」

「ああ、ほんとだよ。俺は戦争なんかに興味のカケラもない。コカビエルもそのことで俺をこき下ろしていたってことはそれらの報告にも書いてあったはずだぜ。」

なるほど。墮天使総督はコカビエルとは正反対だな。惜しい。あのような戦闘狂であったならば、またいろいろと面白かったのだが

な。神アザゼルの如き強さは戦いというものにはさほど関心はないのか。戦ってみたかったのだから。

「アザゼル。一つ聞いておきたい。なぜここ数十年セイクリッド・ギア神セイクリッド・ギア器の保有者をかき集めていた？我々は最初は人間たちを集めて戦力増強を図っているのかと思っていた。天界か我々悪魔に戦争を仕掛けるのではないかと予想もしていた。」

「それは私も聞いておきたいことです。いつまでたつてもあなたは戦争を仕掛けてこなかった。そして、バニング・ドラゴン白い龍を手に入れたと聞いたときは強い警戒心を抱いたものです。」

天界も悪魔も同じか。

そりやそうだ。墮天使はとにかく胡散臭い存在だ。それが戦力、主に人間をかき集めているとなると警戒心を抱かざるを得ない。

アザゼルは苦笑しながら答えた。

「戦争なんかのためじゃないさ。セイクリッド・ギア神セイクリッド・ギア器の研究のためさ。なんな

ら、その研究資料をお前たちのところに送ってやろうか？天界も、悪魔も神セイクリッド・ギア器のことは全然進んでいないだろう？先ほども言ったが、戦争なんざしかけねえ。戦なんて今更興味なんてない。俺は今の世界で十分満足している。俺んこの部下には『人間界の政治に手を出すな』と強くいつているほどだ。天界傘下の宗教にも、他の宗教にも介入するつもりもない。もちろん悪魔の世界にもな。———つた
くよお、三すくみの中でも俺たち墮天使の信用は最低かよ。」

アザゼルは不貞腐れたように言った。

「それはそうだ。」

「そうですね。」

「其の通りね★」

魔王ルシファー、レヴィアタン、ミカエルがそれに同調する。信用のなさが伺える。

あまりに愉快だったから、俺は初めて話に介入した。

「自覚がなかったのか？一度神に背いて墮ちた存在。そんな奴らは胡散臭いに決まっているだろう。」

「……ちつ、お前さんにまで言われるレベルかよ……やつ

てらんねえな。」

総督はさらに不貞腐れる。

「それは俺たち魔法使いの界限だけじゃないと思うがな。ちなみに言っておくと、あんたらの中で一番印象としてマシなのは天界勢力だぜ。よかつたな、天使長さんよ。」

「そうなのですか？」

俺の言ったことに興味を持っている様子の天使長ミカエル。俺はうなずいて肯定しながら言った。

「まあな。あくまで、俺の界限での話だ。」

それを聞くと、天使長ミカエルは何故か少し嬉しそうだ。まあ、それはいいか。ちなみに、俺の界限ってのは相当広いぞ。

「俺もここまで落ちぶれているのかよ。つたく……先代ルシファーや神よりもましかと思っていたんだが、思えらもお前らで面倒な奴らだ。ここそ研究するのもこれ以上は性に合わないな。わかつたわかつた。ならさっさと和平を結ぼうや。三大勢力の和平条約をよ。もともと、お前らもそのつもりだったんだろ？」

総督の口からイチ速く和平という言葉が出される。これには悪魔側も天界側も驚きを隠すことはできなかった。まあ、おれはこの総督の腹の内は知っていたから不思議でも何でもないけどな。この神器大好き墮天使はだれよりも和平を望んでいたんだ。だからわざわざ俺のこともつけてたし、こんな会議を開いた。

「ええ。あなたの言う通り、私も悪魔側とグリゴリに対して和平条約を持ちかける予定でした。これは、私だけでなく、熾^{セラフ}天使および天界の総意でもあります。このまま三すくみの関係が続けていても何のメリットもありません。世界の害悪としかありません。天使長という立場の私が言うのはあまり好ましくありませんが、先の大戦で戦争の大本である神と魔王は消滅したのです。こうなれば、我々に戦う意味はありません。」

天使長の言葉にアザゼルが嘖き出して笑う。

「ハッ!!あの堅物で有名なミカエルが言うようになったな。あれほど神っ!!神っ!!主様っ!!っていうやつだったのによ。」

「……失ったものは大きい。あまりにも大きすぎた。しかし、いつまでもいないものを求めても仕方ありません。まだ、主を信じてやまない人間たちがいるのです。その人間たちを私たちは導いていかなければなりません。神の子らを見守り、導いて聞くことが今の最善だということは私たち、熾天使^{セラフ}、および、智天使座天使^{ケルヴァイムスローンズ}とも意見は一致しています。」

「おいおいおい、いーのか？今の発言は堕ちるぜ？———」と思っただが、今のシステムはお前が継いだんだっけか？いい世界になったもんだ。俺たちが堕ちたころとはまるで違うな。」

墮天使そうとくは懐かしむように言った。

システム……か。それは俺の神器にもかかわってくるものだ。「我々悪魔側も同意見だ。魔の王がいなくとも、種は存続する。ならば悪魔も先へ進む必要がある。戦争は我々の望むものではない。戦争をすれば、間違いなく悪魔が先に滅ぶ。」

悪魔側も同調する。

「其の通りだ。戦争をすれば俺たちは自滅の道しかない。人間たち、とくに教会のやつらにも必ず影響が出てくる。俺たちは戦争を起こすわけにはいかないんだ。」

先ほどまでふざけていた総督だが、ここだけは真剣な面持ちとなった。

そして、アザゼルは腕を広げながら雄々しく言った。

「神がいない世界は間違っているのか？世界は衰退するのか？しかしそうじゃなかった。俺もお前たちもこうして今も生きている。世界はな、神がいなくても回っていくのさ。」

NO, XXXIV 会談その二

イツセイSIDE

「——神がいなくとも、世界は回るのさ。」

墮天使総督アザゼルがカツコつけながら言ったあと、三大勢力は今後の戦力のや兵力の話をしだした。

「では、そのような方向で調整して構わないかな。」

「こちらは異論はねえ。いつあいつらがこっちに刃を向けるかわかんねえからな。」

こいつらが言っているあいつらというのは、聖書神話と対をなす神話勢力のことだ。もちろんのことではあるが聖書のやつらとは友好的ではない。されに言えば、あちらのほうが実力、数ともに上手なのだ。

「——さて、こんなところだろうか？」

魔王ルシファアの一言で俺を除く会談の席に座っているやつら全員が大きく息を吐いた。一通りの重要な話は終わったみたいだな。会談は大体一時間といったところ。案外短いものだ。

会談が一息ついたとたん、銀髪の悪魔がこの部屋に入ってきて全員にお茶を給仕している。そのさなか、天使長ミカエルは視線を紅炎龍 児の方に向けた。

「さて、話し合いも良い方向へ向けることもできたことですし、約束してあった紅炎龍 児殿のお話を聞いてもよろしいかな。」

俺以外の全員の視線が紅炎龍 児方へ向く。というか、そんな約束をしてあったのか。天使と悪魔の約束なんざ聞いてこともない。こんなことは、昔ならあり得なかったが。

紅炎龍 児は金髪の悪魔に確認をとった後、口を開いた。

「はい。単刀直入に訊きます。なぜ、アジアを追放したのですか？あれだけ、神への信仰が厚くて、心優しい彼女をなぜ追放したのですか！」

やつのその目は、怒りと疑問で満ちていた。必死に天使長ミカエルに訴えかけていた。

「それに関しては、申し訳ないとしか言えません。神の死後、残されたものは奇跡などを起こす、および悪魔祓い、十字架などの聖具へもたらず効果などを司る『システム』です。これは神以外が扱うことはできません。私たちセラフ全員でシステムを動かしていますが、不完全な状態で動いているのです。こうなれば、神の加護や慈悲もすべての者に行き届かなくなっているのです。——大変不本意なことではありますが、救済できるものは限られます。さらに言うならば、システムに悪影響を及ぼすものはできる限り遠ざける必要があるのです。神の死によってシステムに一部不具合が出来、それが原因で本来の能力が変質してしまった神セイクリッド・ギア器です。アーシア・アルジェントの持つ聖母トワイライト・ヒリングの微笑、あなたの持つ紅炎龍児イグニタス・クロスギアの双籠手、赤龍帝ブリストテッド・ギアの籠手、白龍皇デイバイン・デヴァイデングの光翼もです。そして、一番影響が出るのが神の死を知る者です。上位天使以外で神の死を知るものが近づけば、さらに悪影響が出かねません。なので、アーシア・アルジェントとゼノヴィアを異端とするしかありませんでした。」

と、天使長は席を立つて頭を下げた。

こんな光景はそうみられるものじゃないな。天使長という立場であるミカエルが、ただの悪魔に頭を下げるなんてのはこの場限りの光景だ。俺はそれを心の中で楽しみながら見る。

「いえ、頭を上げてください、ミカエル様。私は、今の生活に不満は抱いておりません……こんなことを言ったら、他の信徒にはもうしわけないですがね。」

「私も、ゼノヴィアさんと同じです。私も今の生活が幸せです。大切な人も出来ました。憧れであったミカエル様ともお話が出来てうれいのです！」

この二人の悪魔の姿に天使長ミカエルは安堵した表情をする。

「お二人の寛大な心に感謝します。デュランダルはゼノヴィアに任せます。サーゼクスの妹君の眷属ならば、安心でしょう。」

ここでアザゼルが思い出したように言った。

「そーいえば、これに関係したことなんだがよ。俺んところの部下がそのおじょーちゃんを騙して殺したらしいな。その報告も受け

ていた。」

この発言が火に油を注いだのか、エヴォリユシオン・ドラゴン紅炎龍 児はアザゼルに対してドスのきいた声で言った。

「そうだ！あんたの知らないところで、あんたに憧れを抱いていた女性が、あんたのためにアーシアを！殺したんだ！」

「俺たち墮天使は、害悪になるかもしれない神セイクリッド・ギア器 所有者を始末しているのは事実だ。しかし、組織としては当然だろ？近い将来外敵になるかもしれないものを大きな脅威になる前に始末しなければ、後々になって大切なものを失いかねない。それでお前は死んだ。理由は才能が圧倒的に欠如している人間が、エヴォリユシオン・ドラゴン紅炎龍 児の力を使いこなすことができるとは到底思えない。暴走させれば、町一つを火の海にすることくらいはできるんだ。その神器は。」

「おかげで、俺は人間をやめた。」

「嫌じゃないだろ？現に、お前が悪魔になったことを喜んでいる奴もいると思うぜ？」

その言葉に、やつは黙る。

俺も同じ境遇者として奴に少し助言してやる。

「もともと、セイクリッド・ギア神 器は教会の信徒にのみ受け継がれるものだったんだ。聖書の神が作ったシステム上はな。しかし、神が死んだことによつてその制約もおそらくなくなった。それによつて世界中の人間に宿るようになったんだ。そこで問題なのは、自分には力があると勘違いした人間が悪事に神器を利用する可能性があるってことだ。そんな奴らは人間の治安維持部隊ではおそらく淘汰することはできない。だから無作為に散らばった神器を管理しようとしている。そうだな？天使長に墮天使総督？」

俺の言っていることはおそらくあつて入るだろうが、念のためにこの二人に確認をとる。

「え、ええ。おつしやる通りです。」

天使長ミカエルは驚いた顔をしながらも、俺の言ったことに肯定を示した。

「お前、セイクリッド・ギア中々神 器の知識あるじゃねえか。セイクリッド・ギア神 器に興味でもあ

るのか？なんなら、俺んところの研究室に来るか？」

アザゼルは嬉々として俺を勧誘してくる。なぜそんなにうれしうなのだろうか？

「アザゼル。さりげなく自身の陣営に勧誘をしないでください。」

「そうだよ★アザゼルちゃん。」

こんどは天使長や魔王レヴィアタンも首を突っ込んできた。

「にしても、聖書の神も中々に腹黒いな。神滅具ロンギヌスに加えて、無数に存在する神セイクリッド・ギアの器の数々。それを自身の陣営のほぼすべての人間に持たせようとしていたんだろ？それだけでも恐ろしい戦闘軍団だ。よほど、あんたら悪魔や堕天使を消したかったんだな。」

俺は冗談半分に言ってる。

そうすると、先ほどの空気と打って変わってシーンとなる。天使長は苦笑いをし、堕天使総督や魔王たちは冷や汗を流している。あれ？これは触れてはならないことだったか？まあいいや。

「ま、まあさっきの重いジョークは置いておいてだな。そろそろ、俺たち以外にも世界に影響を及ぼしそうなやつらに意見を聞いていこうか。完全無敵のドラゴン様によ。まずはヴァーリ。お前は这个世界をどうしたい？」

堕天使総督の問いに白龍皇は不敵な笑みを見せる。

「世界をどうしたい、か。俺はただ強い奴と戦えればそれでいい。俺からも訊いていいか？」

強い奴と戦えればいい、か。全く。奴らしい限りだ。流石は最強の白龍皇だな。世界のこれからの行く末なんてまるで興味が無いと言っているようなもんだ。

「ん？なんだ？」

今度は白龍皇が言いたいことがあるらしい。

「まず一つ目だ。この場にいる全員に聞く。赤龍帝、その存在を知っている奴はいるか？」

その名を聞いたとき、ここにいる奴らは全員だまる。

「こつちとしても、探してはいるんだがな。全く見つからないんだ。俺も気になってお前らに聞こうと思ってたんだ。まあ、ヴァーリ

が訊くとは思ってなかったがな。」

と、墮天使総督がそう補足をした。墮天使勢力は神セイクリッド・ギア器に熱心なことだ。まあ、こいつら墮天使が探したところで一生見つからないがな。

「いいえ。私は全く知りません。私たち天界のものも赤龍帝に関しての報告は一切ありません。」

「我々悪魔たちもだ。ここ三百年のあいだ、白龍皇や紅エヴォリユシオン・ドラゴン焰龍児に関しての報告はあれど、赤龍帝の情報は全くない。こちらとしても、それをあなた方に聞きたかったところだ。それならば、一体どうしているのだろうか？赤龍帝は。」

「さあな。だが、どっかにいるんだろうよ。」

三大勢力のトップ共はみんなして知らないの一点張りである。ま、当然だ。ドライグの本当の真実を知っているのは俺を含めて十人もいないのだから。

白龍皇はやっぱりな、という顔をしながら口を開いた。

「二つ目だ。アザゼル。先ほど言っていたあいつらっていうのはどういうやつらだ？」

「ん？ああ、攻めてくるかもしれないっていったやつか？それはな、俺たちと対をなす神話勢力だよ。」

「ほう？」

白龍皇は神話勢力と言った瞬間に興味を持つ。もしや、こいつらにちよつかいを出す気なのか？

墮天使総督は白龍皇の性格が分かっているのか、慌てた様子だ。

「おい、ヴァーリ？こいつらと戦う気にいるんじゃないやなるまいな？こいつらだけはやめておけ。あいつらは俺たちのいわば天敵みたいなもんだ。そんなことになったらヤバいぞマジで。」

「それはますます面白い。」

それを聞いてもなお、戦う気にいる白龍皇。怖いもの知らずだな。

「あ、あの〜？その神話勢力って何ですか？めっちゃやくちや強いんですか？」

全く無知であろう紅焰龍エヴォリユシオン・ドラゴン児が不思議そうにその存在を聞いて

くる。こいつは聖典のことも知らんのか。

その質問に墮天使総督が分かりやすく簡潔に答える。

「あいつらは強いってもんじゃないぞ。そいつらの神話勢力の名は、聖典神話。とくに、聖典の七天使は半端じゃない奴らだ。いいか？そいつらとは絶対に関わるなよ。そうでなければ、速攻やられるぞ。いいな？」

「ええ。これに関してはアザゼルと同意見です。」

墮天使総督は普通じゃない形相でくぎを刺した。天使長も珍しいことに墮天使総督に同調した。よほど、相手にはしたくないらしい。まあ、当然だわな。

「は、はあ……」

これだけこのトップ陣が言っているのにまだ何もわかってなさそうな紅焰龍児エヴォリユシオン・ドラゴン。こいつ、よく今まで生き残ってこれたものだな。称賛したくなるほどの運の良さだ。

それに対して白龍皇はさらに笑みを浮かべた。楽しそうだな、こいつは。相変わらずだ。しかし、紅焰龍児エヴォリユシオン・ドラゴンとは比べ物にならないほどこいつは強いと思うが、まだあの七天使を相手にするには足りないだろう。このままいけば後悔することになるな。必ず。

「つたく。んじゃ、次は紅焰龍児エヴォリユシオン・ドラゴンだな。お前は、世界をどうしたいんだ？」

墮天使総督に問われた紅焰龍児エヴォリユシオン・ドラゴンは困った顔をしながら答える。

「正直、世界がどうかよくわからないです。自分にそんな世界を動かす力があるとは思えなくなりました。ただでさえ、後輩の面倒を見ることもままならないというのに。実感がわかりません。」

「今は、な。しかし、お前とて紅焰龍児エヴォリユシオン・ドラゴンの力を宿すものだ。それだけ力は秘めている。選択しないと、各勢力の上の奴らが動きにくいんだ。」

未だにはつきりしないやつに対して墮天使総督はハア、とため息を吐いていった。

「では、布藤誠一。お前さんによくわかるように恐ろしくかみ砕いて説明してやろう。俺たち三大勢力が戦争を再開すれば、お前も悪魔

側の戦闘兵として前線に出されるだろう。お前は紅焰龍児エヴォリユシオン・ドラゴンだからな。そうなれば、リアス・グレモリーとセ○クスできないぞ?」

「な、なん、だどっ」

またしてもこの場の空気がおかしくなった。周りは呆れた顔をしている。唯一違うのは紅焰龍児エヴォリユシオン・ドラゴン。何かを悟ったような顔だ。

「和平を結べば、戦争の戦力として駆り出されることもなくなる。そうなれば、あとに必要なになってくることは種族の存続と繁栄。毎日、リアス・グレモリーやお前の周りにいる女と子作りに励むことも出来るぞ。どうだ? さっきの小難しい話よりお前にとつては格段にわかりやすいだろ? どっちを選ぶ?」

ここまで言えば、流石に答えは出るはずだ。にしても、ここまで言わないと分からない残念な頭だ。同情せざるを得ない。

エヴォリユシオン・ドラゴン
紅焰龍児は興奮しながら言う。

「わ、和平でお願いします!! 和平が一番ですっ!! 俺も、部長たちとエツチしたいです!!!」

エヴォリユシオン・ドラゴン
声高らかにそう言った紅焰龍児。なんともまあ、恥ずかしい。ここには身内がいるんじゃないのかよ。

と、やはりそのことを指摘されると紅焰龍児エヴォリユシオン・ドラゴンはハッと気づいて言葉を見繕う。

「えっと……俺は、この身に宿る力は、皆の為に使います! 部長、朱乃さん、小猫ちゃん、アーシア、木場、ギヤスパアの為に、危険にさらされたら、迷いなく俺が駆けつけます。俺にできることはこれくらいしかありませんから。」

「そうか。」

今度は何となくそれっぽい答えを出した紅焰龍児エヴォリユシオン・ドラゴン。その答えに、天使長、墮天使総督、二人の魔王は頷いた。

「さてと。じゃあ、最後の議題だ。ここにいる奴らのほとんどが疑問に思っているはずだ。まあ、魔法使い。」

墮天使総督が俺を指す呼称を言うのと、ほぼ全員が俺の方へと視線を向けた。

「改めて聞かせてもらう。お前さんは一体何者だ?」

俺は前に聞かれたことと同じことを質問される。まあ、ここには墮天使総督だけじゃないからな。聞きたがっているやつもいるだろう。特に、この魔王レヴィアタンは興味津々だ。

「俺はただのしがない魔法使いの一人。名前は、イツセーだ。魔法使いなんてこの世界にたくさんいるからそれほど珍しい存在でもないだろう?」

「そりゃ、そうだがな。しかし、お前みたいなコカビエルと余裕で打ちあえる魔法使いなんざいねえよ。俺んところの髪の子を見張る者は魔法協会とつながりがあるが、過去そんな奴は見たことねえ。お前さん、一体どこの組織のやつだ?」

「それは私も興味がありません。」

墮天使総督が言った、魔法協会はいわゆる通称だ。本来の名はグラウ、ツァオベラー灰色の魔術師。もっとも規模がでかい魔法組織だ。過去に何度も組織に奴らに勧誘されている。しかし、こいつらは悪魔と深いかわりを持っていて。更には会長が悪魔と来た。そんな組織には入るわけにはいかないし、入りたくもない。一度しびれを切らした奴らは俺に攻撃してきたが、振り返ちにしてやった。まあ、その子とは徹底的に証拠を隠滅しておいた。しかし、それとて、あのメフィスト・フェレスのことだ。異変には気が付いているはずだ。しかしこいつらの様子から見れば、俺のことはまだ出回ってはいないな。

とにもかくにも、それは置いておいてだ。正直悪魔たちには語る必要が無いと思うが、こんな愉快な会に招いてくれた墮天使総督が言うならまあ、言ってみてもいいか。

「もう一度言うが、俺が属している組織はない。俺の魔法は、超少数派の流派だ。俺を含めて、俺と同じ魔法の流派を受け継ぐものは十人もない。」

まあ、あえて名をつけるとすれば、マーリン・アンブロジウス直系の魔法流派と言ったところだ。しかし、その名は伏せさせてもらうがな。

この魔法は他の奴らとは比べ物にならないほどの価値と威力を持つ。よって、これを知る者は少ない。俺の母さん、マーリン・アンブ

ロジウスが世に広めた魔法とは別なのだ。これを知った魔法使いが血眼になって探している。この魔法の存在を。なので、魔法使いの界限では知る人ぞ知るお尋ね者なのだ。俺と、俺とおなじ流派の者は。

「では、何故この地にいるのかな？魔法使いならば、ここの管理者であるリアスの元へ訪れなかったのは？」

今度は魔王ルシファーに問われる。

この質問はナンセンスだ。俺が日々悪魔のところへ行くことは無い。ましてや俺たち一族の敵であるのだから。

「その質問はそっくり返すよ、魔王ルシファー。キミの妹、悪魔の癖に何故この日本にいるのだ？お前たちは冥界という領土があるだろう？それとも、領土を冥界以外にも拡大させようと言うのではあるまいな？その質問に答えてくれないのなら、俺にその質問はするべきではないと思うな。」

「……わかった。先ほどのことは忘れてくれ。」

魔王はその返しが来るとは思っていなかったのか、あっさり撤回する。

「ねえねえ☆魔法使いくん!!だったらさ、私の妹と契約しない☆？」

とそこに首を突っ込んできたのは魔王レヴィアタンだった。

「契約だと？」

「そうそう。魔法使いは研究をするんでしょ？だったらさ、こちらの技術を取り入れたりとかしたら、なにか進展するかもしれないよ？それに、上級悪魔と契約を結ぶことは、あなたのステータスにもなると思うよ☆はぐれの魔法使いはどこもいい印象を持っていないしさ。」

と魔王レヴィアタンから契約話を持ち掛けられる。

「お姉さま!!それは！」

「ソーナちゃん、大丈夫よ。この魔法使いくん、実力はたしかだし、それに一人でも多くの仲間にしたいじゃない？」

危険だと言うばかりに止めようとするメガネをかけた悪魔。この

二人、姉妹だったか。にしても、この場においても公私混同か。

俺は呆れた様子でこのやり取りを見る。

「おいおい、セラフオルー。俺と同じことをしてんじやねえよ。何さり気なく契約もちかけてんだ。」

「何よ、アザゼルちゃん。私の魔法少女レヴィアたん共演できると思っただのに〜」

と、俺の意思を無視して繰り広げられる論争。勝手に話を進めないで貰いたい。

実は、俺はセラフオルー・レヴィアタンを知っている。俺の生徒がこの前愚痴っていたのだ。なんでも、このセラフオルー・レヴィアタンは魔法少女と自分で言っていて、おかしな服を着ているらしい。だいたい、魔法少女が着るようなあんな可愛いを着ている魔法使いなんていない。無駄に影響力のある魔王だ。こんなやつが魔法少女の服なんて着て、魔法使いを名乗っていると世間の魔法使いのイメージが悪くなると、おれの生徒も愚痴っていたがその通りだ。大体、この歳m、じゃなかった、いい年こいた奴があんな服装をして恥ずかしくないのか。俺は認めたくない。このような頭のネジが消し飛んでいるような奴が魔法使いを語るのは。俺が憧れた、母さんや父さん、モーガン姉さんのような人たちが本当の魔法使いだ。

とにもかくにも、俺の出す答えは決まっている。このメガネをかけた悪魔が妹らしいが、よく見れば、コカビエルとの戦闘で弱い結界しか張ることのできなかつた悪魔と契約したところで、何も得るものもない。

「勝手に話を進めないで貰えるか？魔王レヴィアタン。契約はしない。あんたの妹とやらと契約したところで何にも得るものもない。悪魔の技術など、俺にとつては必要のないものだ。それに、上級悪魔と契約したというステータスなんぞ、俺からしたら何の役にも立たない代物だ。」

「そ、そんなことないと思うよ？現に、私たち悪魔の魔力だって、魔法では出来ないことばかりよ？」

「それは逆も然りだろ。俺は悪魔の使う力に興味はない。使おうとも思わない。ともかく、俺は悪魔だけとは契約するつもりはない。」

俺が断言すると、魔王レヴィアタンは無言になる。

悪魔は信用できない。それだけだ。

「では、キミはこれからどうするつもりなんだい？」

魔王レヴィアタンとのやり取りを見かねた魔王ルシファーが口をはさんできた。

「どうする、とは？」

「キミは、私たちの味方なのか？それとも敵なのか？」

その問いに、ここにいる全員、とくにトップ陣たちの顔色が変わった。結局、敵なのか、味方なのか。それが一番の知りたかった情報だろうな。これは。

「もし、キミがこちらの味方とは言わないまでも、協力者になってくれるのならばこちらとしては助かる。キミのような強力な魔法使いは貴重だ。」

他のヤツラ、魔王レヴィアタン、ケルヴィム智天使や上級墮天使たちも同じような思考なのだろう。こちらに視線を向けてくる。しかし、天使長と墮天使総督は少し違った視線だが。

「しかし、我々の敵となるならば、こちらとしても手段を考えねばならなくなるのだ。」

つまり、味方もしくは協力者になるならそれでよし。敵となるならば、こちららも容赦しない。そう言いたいのだろう。

「イツセーもちろん、決まってるな？」

俺の中でこの会話の一部始終を聞いていたであろうニトラ。当然だな。

「(ああ。勿論、敵対してやるさ。)」

天使長や墮天使総督は悪い奴ではなかった。天界や墮天使はこちらとしては悪魔ほど個人的な恨みはない思ったが、悪魔と和平を結ぶ時点で敵となる。それに、ドライグを………少し残念だが、仕方あるまい。こつちも容赦はしない。

と、俺がその問いに応えようとした瞬間だった。

ヴウン!!

普段は感じられるはずのない波動を、こここの全員が感じたのだった。

b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

No, XXXV 会談その三

イツセーSIDE

俺が敵対する意思を言う瞬間だった。普段感じたことのない波動が俺のところまで届く。

三大勢力のトップ陣たちもこれに意識が向いていた。

周りを見ると、この波動が起きたときから、停止している奴がちらほらいる。主に悪魔たちだ。魔王レヴィアタンの妹とやらも停止している。しかし、その悪魔たちの中でも停止せず、ピンピンしている奴もいた。もちろん、三大勢力のトップ陣たちはもちろんのこと、そこに涼しい顔を崩さない白龍皇も停止していない。そして、その三大勢力の護衛隊の軍勢も全て止まっているな。発生源は……ここから離れたところだ。

「……あら？」

「おつ、エヴォリユシオン・ドラゴン紅焰龍 児が復活したようだぜ。」

ここで、ドラゴンの力を宿しているエヴォリユシオン・ドラゴン紅焰龍 児が停止から復活した。なるほど、自力は低いとはいえ、ドラゴンの力を宿しているから停止されてもその影響がほかの停止している連中よりも少なく済んだのだろう。

「何かあつたんすか？」

状況が理解できていないようだ。いまだにきよとんとしている。

その問いに、エヴォリユシオン・ドラゴン墮天使総督が答えた。

「周りを見てみな、エヴォリユシオン・ドラゴン紅焰龍 児。」

「周り？ えっ?! 朱乃さんに、アーシア、小猫ちゃん?! みんな、止まっているのか……?」

微動だにしない仲間を見て驚くエヴォリユシオン・ドラゴン紅焰龍 児。

「私たち眷属で動けるのは、セイイチと裕斗、ゼノヴィアだけのようね。」

「……俺たちは、ドラゴンの力。そっちの連中は、おそらく聖剣の力で停止を防いだんだろう。」

白龍皇が停止を免れた説明をする。聖剣というものはある意味、理

を外れた武具だ。そして、様々に強力な能力が付加されているのだ。俺のもつ剣もそうだ。それを持っているのなら、並大抵の力ならば無効化することが出来るだろう。

「そして……」

白龍皇がこちらに目を向けた。

「魔法使い。あんたは、どうやら停止させられることはなかったようだな。」

「まあな。」

そう白龍皇が言うと、全員がこちらに目を向けた。

まあ、あの程度の波動では俺を停止させることはできない。俺や、白龍皇を停止させるには力不足だったわけだ。それに、俺には二つあるうちの片割れ、地上最強の聖剣の力もあるからな。

「ますます、キミの力が面白くなってきたよ。」

白龍皇はまた笑みを浮かべる。

「特別な力があるってわけじゃねえのに防いだのかよ。つくづく規格外な魔法使いだ。さてと、それはそうとしてテロが起こされたか。おい、外を見てみる。」

墮天使総督がやれやれと言った口調でそう言った。墮天使総督はあごで窓の方を示す。悪魔の奴らは会議室のガラス窓に近づく。

俺も改めて窓の方へ視線を向け、外の景色を見る。

カツ!! 閃光が絶え間なく広がっている。この建物も揺れている。恐らく外にいる奴らが攻撃をしているのか。

「もうすでに攻撃されているようだな。いつの時代も全くかわりやしねえ。勢力と勢力が和平を結ぼうって時に、それをどこぞの集団がそれを嫌悪して邪魔をしようとするもんさ。」

墮天使総督は知ったかのような口ぶりで言う。まあ、長い時を生きてきているこいつは、長い歴史をその眼で見ているのだろう。

外には、空中に浮いている無数の人。人間だ。それに、見たことのある黒いローブを着込んでいる。魔術師か。その魔術師が、そとで停止させられている三大勢力の軍勢、そしてこちらの校舎に攻撃している。攻撃手段は魔法とはいいいがたい魔力弾みたいなものだ。し

かし、そんなちやちな攻撃でも、停止させられ、防御も回避もすることもできないやつらには十分な攻撃だ。魔術師たちの攻撃は確実に軍勢を仕留めていった。防御魔方阵も機能しているようだが、流石に何回も攻撃をくらうと壊れる。しかし、この校舎にはダメージはないようだ。流石は三大勢力のトップ陣と言ったところか。

墮天使総督は窓の方へ歩いていき、不敵な笑みを浮かべながら言う。

「そとで攻撃してきているやつらも、いわゆる魔法使いだな。悪魔の魔力体系を伝説の魔術師、「マーリン・アンブロジウス」が独自に解釈して再構築したものが魔術、魔法の類だ。……放たれている魔術の魔力から察するに、一人一人が中級悪魔クラスの魔力を持ってやがるな、こりやあ。」

墮天使総督が魔術について語る。たしかに母さんは魔術、魔法を生み出した。しかし、それは表、知られている話だ。裏の顔は、そんなものじゃない。悪魔に対抗する力を編み出したり、最高の魔法を編み出した、研究者。俺が受け継いだ魔法をカモフラージュするために、世に伝えたのだろう。

「セイクリッド・ギア神 器 所有者が魔術を覚えていたりしていると、非常に厄介なものとなる。まあ、ここは俺たちで強力な結界を張ってあるから安心できるさ。だが、もう一つ厄介なのがハーフヴァンパイアの小僧だ。」

「ギヤスパークが!?!」

「ああ。おそらく魔術、もしくは力を譲渡する系のセイクリッド・ギア神 器でハーフヴァンパイアの小僧の神器を強制的に力を引き上げて禁 手 状態フォービトウン・パロール・ビュイにしているんだ。停止世界の邪眼。それだけでも恐ろしいが、視界に移したものの内部、それに外にいる軍隊すべてを停止か。恐ろしいほどの潜在能力だ。ともかく、その小僧をまずどうにかしないとこちらが動くことはできん。」

停止能力。これについては、魔法でも一応そのようなことはできる。しかし、それは中々の困難を強いられる。そもそも時間を操る魔法は少ない。他の生物に干渉してその者の時間を止めることもそうだが、時間を止めること自体に難がある。俺も、時間を操る魔法には

苦労した。まあ、分解魔法よりは楽だったが。

セイクリッド・ギア
神器。なるほど、堕天使総督が没頭する理由がわかる気がする。

フォービトウン・パロール・レユイ
停止世界の邪眼といったか？それは、訓練が必要だが停止させることができるのか。いやはや、凄いな。聖書の神は。そんなものを無数に作ることでできる力か。

俺の魔法、クロノ・アルター時間操作に匹敵する力を持つものがポンポンいるってことだ。まあ、俺の時間操作は停止だけではないが。

にしても、相手の術者も相当な実力者だ。このトップ陣たちが共同で構築した結界はもちろん相当な強度を持つ。それを掻い潜ってその中に転送魔法陣を展開させている。おーおー、まだまだ出てきやがるな。こいつら、あの魔法装束から見るにたしか魔法組織の一つ、ヘクセン・ナハト魔女の夜だ。この魔法組織で有名なのは、高名な魔女、アウグスタといったところだ。にしても、三大勢力に何ら関係していないこいつらが何故この三大勢力を攻撃するかは知らんが、うまくすれば俺との利害が一致して、共闘関係になるかもしれないな。まあ、そのことは置いておこう。まだ出てくるな。あちらには、よほど腕のいい魔法使いがいるのだろうか。今すぐそれを破壊してもいいが、面白くなってきたのでこのまま様子を見よう。

俺が外の方を見ている横で、紅い髪の悪魔が名乗り出た。

「お兄様、私が、ギヤスパーのところへ行きます。」

「しかしリアス。こちらの魔方阵は封じられている。外は魔術師だらけだ。」

「旧校舎——部室に未使用の戦車の駒が残っています。」

「なるほど、キヤスリングか。」

悪魔たちが何やら話している。どうやら、ここから悪魔特有の力を用いてこの停止世界を生み出しているヴァンパイアを助け出すとか。キヤスリング。たしか、チエスのルールの一つだ。悪魔の駒は、そんなことも実際にできるのか。しかし、あの駒はあってはならないものである。絶対にだ。来たるべき時、あいつらと協力して悪魔の駒を排除すべきか。

「わざわざそんなことをしなくても、旧校舎にいるテロリストとも

ども問題になっている吸血鬼を吹き飛ばせば済む話じゃないか？」

と、せこせこ準備している悪魔たちに白龍皇が笑みを浮かべながら言った。

同感だな。

白龍皇の考えに同調して俺も口を開いた。

「いいんじゃないか？ なんなら、俺がここから遠隔魔法陣使つてぶっ放してもいいぜ？」

俺が笑いながら言うと、アザゼルは少し焦って言う。

「おいおい、お前ら少しは空気読めよ。それは最悪の手段だろ。助けられるのならば、助けたほうがいいだろ。」

「じつとしているのは苦手なのさ。」

先ほどからこの状況を楽しんでいるように見える白龍皇からしたら、退屈なのだろうな。まあ、俺もだ。

「なら、ヴァーリ。お前が外に出て敵をかく乱しろ。白龍皇であるお前が出れば、少しは敵の作戦も乱れるはずだ。」

「ふっ、了解。」

大役を任された白龍皇はニヤツと笑みを浮かべた後、

セイクリッド・ギア
神器、

白龍皇の光翼を展開させ、この部屋を飛び出していった。

白龍皇は超速度で空を駆け抜け、一瞬であの魔法陣のすぐそばへ移動した。中々の速さだ。しかも、あれでまだ本気ではない。流石、その昔名をとどろかせた最強にして魔の王、ルシファーの末裔だ。末裔だというのにここまで力があるというのならば、他のベルゼブブ、レヴィアタン、アスモデウスの子孫たちもここまでの強さなのだろうか。

白龍皇はこちらに一瞬目を向ける。

「ふっ……見せてやろう。禁手化!!!」

バランス・ブレイク

『Vanishing Dragon Balance Breaker!!!』

やつぬ!体の表面に、とてつもないエネルギー、パワー、オーラが集まっていく。そして、それは白き美しい鎧の形となって顕現する。全身を覆いつくしていくその鎧。最後に頭部を覆い、やつのバランス・

ブレイカーが完成した。

「あれが……」

思わず、俺も息をのんだ。

何故ならば、久しぶりにこの目に映った禁手フランス・ブレイカーだからだ。しかも、白龍皇の禁手フランス・ブレイカーは初めて見るのだ。これは心が躍るつてもんだ。おれとて、赤龍帝として、何度も禁手フランス・ブレイカーを発動させたものだ。しかし、それはドライグの復活とともに長らく禁手フランス・ブレイカーを使っていない。今、もしドライグが神器として戻ったとしても禁手フランス・ブレイカーを発動でき自信がない。

〈久しぶりに見るじゃねーか。あの白い鎧はよ。〉

俺が白龍皇の禁手フランス・ブレイカー手に目を奪われていると、歴代赤龍帝、ベルザードさんが懐かしむように言った。

「(ベルザードさん。あなたがこれを見るのは四度目だね。)」

〈ああ。だが、俺が戦った三人の白龍皇の禁手フランス・ブレイカーとは比べ物にならないねえぞ。自力の時点で分かっていたが、あそこまでのものか。すげえな。流星はルシファーってことか。〉

ベルザードさんがここまで言うのか。なんて野郎だ。もし、あいつがもつと昔に誕生していたら、ベルザードさんもやられていたかもしれない。

〈ええ。ベルザードの言う通りね。私が戦った白龍皇とも別格だわ。恐ろしい限りね。〉

エルシャさんも恐ろしいものを見るように言った。

俺もだ。今の俺ではおそらく勝つことはそう容易くはなさそうだ。白龍皇が出てくると、案の定魔法使いたちの気が奴に集中した。四方八方、全方位から魔法使いたちは攻撃した。ざっと、五百は超えている。ちやちな魔法でも、五百人以上の同時攻撃なら、威力もその分増大する。しかし、やつにその攻撃など全く聞いていない。奴には届いていない。

カツ!!

白龍皇は反撃とばかりに手のひらに魔力を発現させ、魔法使いたちに攻撃をした。

おいおい、何だあれは？魔法使いたちが血の一滴も残さず消滅していく。あんな攻撃、体も鍛えていないひ弱な魔法使いたちにする攻撃じゃねえ。過剰攻撃もいとところだ。手加減してもあれか。なるほど。先ほどの魔力もおそらくルシファー由来の魔力。やるじゃねえか、あいつ!!

「あんな簡単に禁 バランス・ブレイカー 手に!?!しかもあの攻撃……強え……滅茶苦茶強えじゃねえか……」

あの圧倒的なさまを見ていた紅 エヴォリユシオン・ドラゴン 炎 龍 児は奴の強さを目の当たりにしてそう言った。あの強さへの恐怖と、驚きの目で白龍皇を見ている。

当然だ。至極当然の話だ。人間とほぼ変わらないやつと、白龍皇はもうスタート地点も何もかもが違うんだ。俺の見解としては、もし エヴォリユシオン・ドラゴン 紅 炎 龍 児が禁 バランス・ブレイカー 手に至ったとしてもおそらく白龍皇には届かない。それどころか、禁 バランス・ブレイカー 手なしでも白龍皇は勝てるだろう。それほどの実力差がある。それを埋めるには、紅 エヴォリユシオン・ドラゴン 炎 龍 児は白龍皇の百倍は鍛錬しないとな。

「アザゼル。一つ、聞いておきたいことがある。」

「ん？なんだ、サーゼクス？」

魔王ルシファーが思い出したように言った。

「何故、神器所有者を集めているのかは理解した。それで、その先に何をしようとしていた？聞けば、ロンギヌス 神滅具所有者も数人集めたそうだな。神もいないのに、神殺しでもするつもりでいたのか？」

「それは私も聞きたかったことです。」

天使長と魔王はアザゼルを警戒する。

「備えていたのさ。」

「備えていた？」

「どういうことですか？戦争を否定したあなたがさっそくそれでは不安ですね。」

天使長は怪訝な眼差しを堕天使総督に向ける。

「違う違う。言ったら？お前らとは戦争をしない。無論お前たちに戦争を仕掛けない。しかし、かといってこの世の中だ。自衛手段は必

要だとは思わないか？」

「では？」

「それはな——」

ん？なんだ？

墮天使総督が言う瞬間だった。

この部屋に魔力が発生する痕跡を俺は察知した。

そして、案の定この部屋の床に見慣れない魔方陣が浮かんだ。

「これは、レヴィアタンの魔方陣!!」

「しかも、これは旧魔王レヴィアタンのものだ！」

その言葉に俺は反応した。

なるほど、これが魔王の末裔か。

「ごきげんよう、現魔王サーゼクス殿、セラフオール殿。」

「これは、なぜ彼女が!？」

魔方陣が展開されて間もなく姿を現したのは、これまた奇抜な格好をした悪魔だった。こいつが、真の魔王の末裔、か。

「なんだなんだ。旧魔王が介入するか。全く。お前たちは様々に敵を作っているなあ。」

俺は皮肉を込めて三大勢力のトップ陣たちに言ってやった。

「ん？なぜここに人間などがいるのです？」

俺に気づいた旧魔王はこちらに視線を向ける。しかし、すぐに視線を魔王たちの方へと向けた。

「まあ、いいでしょう。三大勢力のトップ陣ともども消し飛びなさい!!!」

旧魔王レヴィアタンは杖のようなものの先端に魔力を出現させた。俺はすぐさまその正体を探る。魔力を大爆発させる気だな。

それに気づいたトップ陣たちも防御結界を張る魂胆らしい。

しかし、俺はこいつらに守られる気はない。それに好機だ。俺はこの教室にかけられた転移を無効化する術式を速攻で破壊して転移する。

カツ!!!ドオオオンンン!!!

部屋を出ると外に出て、宙に浮いた状態になる。

そして、爆音のした方向を見てみると、先ほどまでいた教室が木っ端みじんだ。しかし、あれであのトップ陣たちをやれたとは思われないがな。

「なんだ、貴様は!？」

すると、またしても俺の背後で声が聞こえた。

振り返ると、先ほどの魔法使いたちが俺を囲んでいた。

「こいつ、悪魔じゃない。天使でも墮天使でもない!!そしてその魔法陣、人間だ!!」

俺を取り囲んでいる多くの魔法使いの一人が叫んだ。

おそらく、俺が今宙に浮かんでいるために展開している魔法陣を見て気づいたのだろう。

「ああ、そうだ。俺はお前たちと同じ魔法使いだ。」

「なんだと!？」

「私たちと、同じ……」

にわかには信じられないようだ。

しかし、俺が魔法陣を展開し、操っている以上そう見るしかあるまい。

「お前、あの悪魔や墮天使どもに協力するということのか!？」

「心外だな。俺が、あいつらと手を組むだと?冗談じゃないな。俺があいつらと手を組むなど。」

俺はとんでもない言いがかりに心底呆れる。溜まったものじゃない。あの三大勢力の仲間ととらえられては。

「だが、お前らが俺と戦いたいというのなら、相手になるぜ。魔法使いの夜の魔法使いたち。」

「こいつ!?! 私たちのことを!？」

俺を取り囲んでいる奴らは、正体を知られていることに驚く。

「別に、不思議でも何でもないだろ?俺も、お前たちと同じ魔法使いに定義される人間だ。故に、魔法組織を知っていてもなんら不思議ではない。まあ、先ほどの魔法を見る限り、お前らは全く大したことないな。」

「なんだと、貴様!!」

俺の挑発に対して、声を荒げる魔女の夜の魔法使いたち。

「やれ!!!」

激昂する魔法使いたちは俺に向けて一齐に攻撃する。

俺はため息をついた。さつきから同じ魔法しか撃ってこない。一辺倒の攻撃だ。

もちろんそんな攻撃は俺には届かない。防御魔法陣など必要ないな。

カツ!!!ドオオン!!

攻撃が俺に当たって爆発を起こし、煙が立つ。

「やったか!？」

「残念、全く効いていないな。」

「なにいつ?!?!」

「バカなつ!!!」

「私たちの攻撃は、確実にやつをとらえたはずだ!」

俺の声を聴いて自分たちの攻撃が通じていないとわかって焦る魔法使いたち。これが、魔女の夜か。ヘクセン・ナハト大したことない。なさすぎる。

「ひるむな!やれ!!数ではこつちが勝っているんだ!!」

強気な魔法使いが檄を飛ばした。

確かに、戦争の法則の一つ。数で勝ることすなわち勝ちに繋がる。

しかし、それは一人一人の戦力価値が同じ場合のみ。

俺は先ほどと違って奴らの攻撃をよけながら、反撃していった。

「グアアッ!」

俺の格闘が魔法使いたちに炸裂する。

「教えてやろうか?お前たちが弱い理由を。」

「何だと!!!」

俺は相手の攻撃を避け、反撃を加えながら言う。

「お前らのことだ。自分自身を鍛えていないだろ?そんなんだから弱いのだ。お前たちの体が、魔力に耐えきれないから結果的に使える魔力量も魔法もその程度だ。それか、ただ単にお前たちの勉強不足だ。どちらにせよ、お前らは戦闘に立つのが速すぎたんだ。そんなことなら、はなっから出てくるな。一生研究してろ。」

「クッ!!」

俺の言葉を聞いてもなりふり構わず攻撃してくるやつら。

「ハッ!!」

俺は攻撃方法を変更し、魔力を用いて奴らを攻撃した。

こいつらに魔法なんぞ必要ない。ただ魔力を当てれば終わりだ。

「グッ!!」

「なんだ!?この威力は!?!」

俺の攻撃が命中した魔法使いたちはなすすべなく地に落ちていった。

「言つたろ?身体を鍛える事をすれば、ただの魔力でもここまでの威力になる。」

「クソッ!!舐めるなあ!!!」

頭に血が上っている魔法使いたちはそれでもなお、攻撃をしてくる。その執念だけは買ってやろう。

俺は、この世界におそらく一つしかない魔法を使う。

「何だどつ?!?!」

「バカなッ?!?!」

「私たちの魔術が!?!」

俺が放った魔法は、奴らの術式を破壊した。これで、やつらの術式が意味のない文字の羅列と化した。奴らの魔術はあの不思議な魔法装束に刻印されている形態だ。それならば、それを破壊すれば使えなくなる。

これが、俺が完成に至らしめた対魔法、魔術用の魔法。術式破壊。グラム・レイザー魔法や魔術に対しての最強の対抗魔法。

魔術が破壊されて動揺する魔法使いたち。

「そうそう。そういえば、アウグスタのやろうは元気してるのか?今日はお前たちと一緒にここには来ていないのか?」

俺は魔女ヘクセン・ナハトの夜で最も腕の立つ魔法使いのことを聞いた。

「アウグスタ様だと!?!」

「あの方はもういない!」

何だ。あいつ、もしかして死んだのか?まあいいや。

「んで、どうする？魔法も使えない、近接攻撃も出来ない。今のお前は一般人と同レベルだ。今なら、見逃してやってもいいぜ？」

俺は相手に情けをかける。

勿論、あいてが悪魔だったら皆殺しだが、奴らは俺と同じ魔法使い。別に逃がしてもよいと俺は判断した。

「情けをかけるというのか！」

「そうだ。」

プライドが許さないのか。俺に対して激昂する魔法使い。しかし、それとは逆に冷静な奴もいた。そして……

「……私はこちらで失礼させていただきます。」

たくさんいるうちの一人が、俺にも、そして他の魔法使いたちにも聞こえる声で言った。それは、若い女性だった。

「なんだと？お前、ここで逃げる気か！」

プライドの高い魔法使いがそれを咎める。

だが、先ほどの女性は堂々と言った。

「ええ。その通りです。私は、そこにいる素敵な方には遠く及ばない。ここで、無暗に命を散らす事こそ、無駄でしょう？それに、私は力不足だと思い知らされました。ここで、死にたくはないのです。」

その子は確固たる信念を持って言っているようだった。なるほど、俺が言ったこと、理解してくれているようだ。

「確かに……」

「あのかっこいい人の言う通りだよね……」

その一人の女性の言葉に、ゆらいでいる魔法使いたち。どうやら、一枚岩ではなかったな。

「お、お前たち！」

先ほどから徹底抗戦をしようとしていたリーダー気質の女性だが、ここから撤退しようとする動きが広まって焦っていた。

「私は、^{ヘクセン・ナハト}魔女の夜を抜けます。今まで、ありがとうございました。」

一番にここから撤退することを宣言した彼女はそう言った。まさか、魔法組織を自身から抜けるのか。凄いな。

そして、驚いたことに、その子は俺の元へ近づいてきた。

そして、顔を隠していた魔法装束のフードみたいなものを脱いだのだ。茶髪の綺麗な子だった。しかも、俺と同じ年かその下だ。

「あ、あのっ！わたし、リリーナって言います！また、会えるでしょうか!?あなたに是非！魔法を教えてくださいたいですっ！」

その子は顔を少し赤くしていった。

しかも、魔法を学びたいと言った。この状況。恐らくニトラがブチキれるし、ドライグにもこのことが伝わったら怒られるだろう。しかし、魔法を教えるというのなら許してくれるだろう。

「ああ、いいぞ。アポ取ってくれるのなら構わない。」

「ありがとうございますっ！」

俺はそう言って、連絡先を渡す。パアツつとほっこりするような笑顔をする魔法使いの女の子。

「必ず伺いますねっ！イツセー・ヴァーミリオンさま♡」

「っ!?!」

彼女は、そういつて転移魔法で去っていった。しかし、なぜ、俺の名前を知っていたんだ………?

それだけが、謎であった。

彼女の転移を皮切りに、どんどんここから去っていく魔法使いたち。

「それで、あんたはどうすんだ？」

最後に残ったのは、さっきのリーダー気質の魔法使いだ。

「……………覚えていろ」

なんだかんだ言って、彼女もそう吐き捨てて去っていった。

そして、これ以上もう魔法使いたちが出てこないようにおれは発動され続けている相手の転移魔法陣を術式破壊で破壊した。

No, XXXVI 会談其の四

木場SIDE

「三大勢力のトップ陣が協力して結界で防ぐ。なんとも見苦しい！」
僕たちは、三大勢力のトップ陣の方々の結界で事なきを得た。
僕たちの目の前には、カテレア・レヴィアタン。旧魔王の末裔が立ちほだかった。こちらを嘲笑している。

「先代レヴィアタンの血を引くもの、カテレア・レヴィアタン。この唐突な攻撃といい、これはどういうことか説明願いたい」

サーゼクスさまは結界を張りながら、カテレア・レヴィアタンに問う。

「先の大戦で神が消失。加えて先代の魔王もお亡くなりになられた。神の死を取り繕うとして生き続けようとするこの世界の根本を変えろ。あなた方のこの会談の逆の考えに至っただけのことです。神と先代魔王様がいなくなったのなら、この世界を変革すべきなのですよ。ハアツ!!!」

カテレア・レヴィアタンはそう言って空中から魔力攻撃をこちらに向かって放つ。なんて魔力量なんだ！ぼくたちとは比べ物にならない！
ドオン!!

しかし、その攻撃はサーゼクス様たちが構築した結界に阻まれる。
「ちっ、流石に硬いですね」

「カテレアちゃん!!!やめて!!!どうして?!?!どうしてこんなことを!!!」
セラフオール様が彼女へ向けて悲痛な声で訴えかける。

同じ、レヴィアタンとして心を痛めてるのだろうか。

しかし、当の彼女、カテレア・レヴィアタンはセラフオール様を侮蔑と憎しみを孕んだ視線を向けた。

「セラフオール………。私から、レヴィアタンの座を奪って
おいて、よくもそんなことを………。正当なるレヴィアタンの血を引いているのは、この私だというのに……。許しはしない……。私こそが!!!レヴィアタンの名を!!名乗るのに相応

しかった!!」

カテレア・レヴィアタンは怒りの声をあげる。

「カ、カテレアちゃん………。私は!!」

「安心なさい。セラフオール。あなたが、レヴィアタンを名乗るのは今日までです。今日、この場であなたを抹殺し、この私がレヴィアタンの名を名乗ることにします。あなたのような悪魔が、レヴィアタンの名を名乗るのは我慢ならないのです。聞けば、魔女っ娘などという愚かな行いをしているというではありませんか。そのような、レヴィアタンの名を墮とす行為。万死に値します!!!」

セラフオール様は悲しい表情をしていた。死の宣告をされて、心を痛めていらつしやる。

「あなた方もですよ。ミカエル、サーゼクス、アザゼル。あなたたちの時代もここで終わるのです。あなた方のような力のある存在をなくすのは、こちらとしても惜しいですがね。私たちが構築する『新世界』においても人材としては申し分ないですが、敵対するならば、ここで消す———」

サーゼクスさまも、ミカエルさまも、セラフオール様も全員表情を曇らせた。

しかし、一人だけ愉快そうに笑う者がいた。心底おかしそうに。

「くつくつく……。又アツハツハツハツ……」

「アザゼル、何が可笑しいのです?」

カテレア・レヴィアタンは愚弄されたことに怒りを見せていた。

「変革? 愚か? 陳腐だなおい。悪魔たちのとんだクーデターに巻き込まれたかと思っただが、そんなもの今時流行らねえぜ、カテレア・レヴィアタン」

「アザゼル。あなたもあなたですよ。それだけの世界を動かす力を持つていながら、今の世界に満足しているような口ぶりですね?」

「ああ。満足しているさ。お前の目的はあまりに陳腐だ。まあ、そう言うやつらに限って強いから厄介なことこの上ない。全く。レヴィアタンの末裔、お前の台詞は、一番最初に死ぬ敵役のそれだぜ?」

「アザゼル!!! 貴様は、どこまで私たちを愚弄する!!!」

カテレア・レヴィアタンは激怒し、全身からあふれんばかりの魔力を迸らせる。

「いいな？サーゼクス、ミカエル。俺が相手をする」

アザゼルが前に出て戦闘の意思をお二人に告げる。お二人はそれを止めるそぶりを見せない。墮天使総督は戦闘高揚でもしているかのように薄暗い墮天使特有の雰囲気が出ていた。

「……………カテレアよ、降るつもりはないのか？」

サーゼクスさまが最後の通告をカテレア・レヴィアタンに告げる。しかし、依然として彼女はそれを受け入れはしなかった。

「当然です、サーゼクス。あなたは確かに良き魔王として君臨していました。しかし、私が求めている最高の魔王ではない。それに、あなたに言われたくらいで降るといふのなら、最初からこんなことはしません」

「そうか、残念だ。」

サーゼクスさまはそう一言つぶやくと、再度結界を張り直した。

墮天使総督は十二もの黒き翼を展開させ、カテレアの方へと飛んでいく。その翼は、常闇のように暗いものだ。

「旧魔王レヴィアタンの末裔。『終末の怪物』の一匹。相手としては悪くない。カテレア・レヴィアタン。俺といっちょハルマゲドンとシヤレこもうや」

「ふん。墮天使の総督ごときが」

カツ!!!

ドオオオオオオン!!!

カテレア・レヴィアタンと墮天使総督がぶつかり合う。カテレア・レヴィアタンはその強大なる魔力で攻撃している。カテレア・レヴィアタンの操る魔方阵も僕じゃ見たこともないものだ。しかし、墮天使総督はその攻撃をことごとく躲している。僕らとは、次元が違う。何もかもが。これが、戦いなのか……………

「お兄様っ!!」

と、ここでギヤスパ―君の救援に向かっていた部長とセイイチくんが戻ってきた。ギヤスパ―君を連れて。良かった。どうやら奪還は

成功したようだ。

「リアス、ギヤスパ―君は無事か？」

「はい、問題ありません。状況は？」

「あれを見ての通りだ」

リアス部長の問いにサーゼクスさまは今ここで戦っている墮天使総督とカテレア・レヴィアタンの方へと視線を巡らせ、その質問に答えた。

「・・・そうですか。カテレア・レヴィアタン、彼女が・・・」

「ああ。それと、今グレイフィアが魔術師たちが出現している魔方陣の解析と同時にこちらのゲートを使えるようにしている」

見ると、グレイフィアさんが手のひらに魔方陣を出現させてそれとにらめっこしている様子を伺えた。

ドツ!!

こうしている間にも、僕たちを囲んでいる魔術師たちの攻撃がこちらへ向かってくる。その攻撃はことごとく結界に阻まれている。

「流石に、多勢に無勢ですね。消耗戦に持ち込まれば・・・少々まずいかもかもしれませんね。」

ミカエルさまがこちらを攻撃してくる魔術師たちに視線を向けながら憎々しげに言った。確かに、この結界が永久に持つとも限らない。相当な数の攻撃を受ければやがて・・・

「部長！魔王様!!あれを見て下さい!!」

この苦しい状況の中、セーイくんがいきなり声をあげた。セーイチくんは空、魔術師たちが転移している魔法陣を指さしていた。

「あれは?」

ここにいる全員が目を向ける。なんと、そこには先ほどまであったはずの魔方陣がきれいさっぱり消えていた!!

一体誰が!?

「あの、魔法使いがやったのか・・・」

サーゼクスさまが真つ先にその魔法陣を破壊した人物を見抜いた。僕もただ一人空中に制止していた一人の魔法使いが目に入った。あの魔法使い、僕たちと一度戦った魔法使いだ。強いとは思っていた

が、まさかここまでとは思っていなかった。魔王様クラスであるグレイフィアさんがあれだけ解析に苦戦していらつしやったものをあんなに簡単に破壊したのだ。これにはグレイフィアさんもただならぬ視線をあ魔法使いに向けていた。

「……………とにかく、これは好機だ。リアスの動ける眷属の諸君。キミたちはここに残っている魔術師たちを制圧してくれ。」

「はいつ!!!」

僕たちは魔王様方が張っている結界から外に出て、セイイチくん、部長、ゼノヴィアと共に残っている魔術師たちの迎撃に出た。

イツセーSIDE

「ん？何やら面白そうな戦いが始まっているな」

俺は転移魔法陣を破壊した後、後ろに目を向けた。

ヘクセン・ナイト
魔法使いの夜の魔法使いたちの思わぬ離反もあってか、ここ残っている魔法使いたちのうち、こちらに気が向いている奴らは少し困惑していた。それに、転移魔法陣は破壊した。もうこれ以上増えることは無い。にしても、あの転移魔法陣……………解析を試みたが、中々に強度も高いものだった。これを見るに、中々に強力な魔術師か、魔法使いがこいつらのバックにいるのだろう。

そして、いつの間にか始まっていた墮天使総督とこちらに単騎で現れた旧魔王のレヴィアタンの戦いが始まっていた。

俺はそいつらの方へ行き、見物を試みた。

「高見の、見物か？魔法使い」

「ふん……………人間ごときが高みの見物など……………おこがましい」

俺の気配に気づいたやつらは互いに攻撃し合い、それを躲しつつも俺にそう言ってきた。お互いにまだ余力があるのだろう。

アザゼルと旧魔王レヴィアタンはこちらをにらむ。

「まあいいさ。手出しは無用だぞ、魔法使い。お前はそこでじっとし

ている」

アザゼルはこちらを一瞥してくぎを刺してきた。手出ししたら先にお前を攻撃すると言わんばかりに。

コカビエルの時は白龍皇をよこして横やりを入れておいてそれかよ……まあいよいよ。

俺は少し距離をとって中々見られない好カードである墮天使総督アザゼルと旧魔王の末裔の戦いを見物する。墮天使総督は代名詞である光力を主な武器として振るう。身の丈をはるかに超える超極太な光の槍を郁恵にも出現させ、それを旧魔王の末裔に向けて放つ。流石、といったところだ。俺が戦ったコカビエルと同程度の光の槍をポンポン顕現させている。コカビエルも総督と同等クラスの力のはずだ。しかし、総督はまだ余裕を持っているようではない。まず、墮天使総督といい、コカビエルといい、あの大战を生き抜いてきた強者。聖書の神や魔王たちを相手にしてきた奴らだ。それを魔王の末裔が相手取るのはかなり無茶なはずだ。しかし、案外そうでもなかった。魔王の末裔は総督の光の槍を何重もの防御魔方阵でことごとく防いでいる。総督の攻撃はいまだ一度たりとも届いていない。かなり総督に食い下がってきている。これは、ひよっとすることもあるかもしれないな。

その両者の攻防による余波が回りに影響を及ぼしている。校庭には深刻なダメージが及んでいる。また、おそらく共闘関係であるはずの魔法使いたちにもその余波が及び、その余波でケガ、気絶するものも多い。

他の場所では悪魔たちが残っている魔法使いたちを掃討にかかっていた。

「あーらよっと」

「ふっ」

墮天使総督と旧魔王の末裔の戦いは膠着状態に入っている。

お互い、腹の探り合いが続いている。どちらも有効打を打てていない。

と、ここで旧魔王の末裔が見たことのないような魔方阵を発現させ

た。

「うふふふ……はーっはっはっはっは!!」

「蛇だと……?」

その魔方陣からは黒い蛇が現れ、旧魔王の体を巻き付けたと思いきやそれが体の中に入っていた。その瞬間だった。

「……これは——」

旧魔王の魔力、オーラが先ほどの比ではないほどに膨れ上がった。おかしい。あの蛇。これほどまでに力を増大させると……。「その前に、一つ確認したいことがある」

墮天使総督は先ほどとは比にならない攻撃を受け止めるのではなく、旧魔王の背後を取ることとで躲した。

「先ほどの魔力といい、攻撃といい、たかだか末裔の力じゃねえ。背後に何かがある?」

「応える義務はない」

「つち。また厄介な奴らが敵に回りそうだなあ。こりやあ。ま、とにかく遊びはここまでだな」

墮天使総督はかつたるそうにし、ふところから小さな槍を取り出した。

ドラゴンのオーラをあの槍から感じる。

「それは!!」

「くだらねえ戦争なんぞよりよっぽどマシな俺の趣味だ。
バランス・ブレイカー 禁手化……ッ!!」

総督が神器をバーストさせて禁手状態へと変化する。金色に輝く鎧である。

それに加えて、常闇のような翼も展開させている。

「俺の傑作人工セイクリッド・ギア 神器、墮天龍の閃光槍。そして、その疑似的バランス・ブレイカー な禁手、一墮天龍の鎧《ダウン・フォール・ドラゴン・アナザー・アーマー》」

「くっ……!! 神器など!!」

「ほら、はいよ」

墮天使総督は旧魔王を挑発する。

「舐めるな!!!」

その挑発に乗った旧魔王は真正面から特攻する。それに続いて墮天使総督も突貫する。

すれ違いざまに攻撃を加えた。

しかし、やはり墮天使総督の一枚も二枚も上手だった。

旧魔王をその槍でぶった切った。肩に大きな傷が出来ていた。

「くっ!!やはりここまででしたか・・・しかし、ただでは死にません!!」

敵わないことを悟った旧魔王の末裔はおかしな呪術を発動させ、触手のように変化した腕を総督の左腕に巻き付けた。

自爆。総督を道連れにするつもりらしい。

しかし、その思惑はすぐに崩れ去る。

—— ザシユツ

総督は躊躇せず、自身の肩をざっくり切り落とした。

「お前なんざ・・・ッ!」

「ッ——」

総督はすかさず槍を旧魔王へ投擲する。

その超速の槍は旧魔王の眉間を貫いた。光力が凝縮されているあの槍は旧魔王を血一滴残さず消滅させた。その攻撃に、旧魔王は声にならない悲鳴を上げながら消えていった。

「せいぜい、腕一本つてところだ」

バランス・ブレイカー 禁 手が解除され、セイクリッド・ギア 神 器もバラバラに崩れていった。残った

のは紫色の宝玉だけだった。なるほどね。あれが、セイクリッド・ギア 神 器の核であり、龍王ファープニルを封じてあるものか。どおりで、見つからないわけだ。ともかく、旧魔王が倒され、残っているのは雑魚だけ。おそらくあそこにいる悪魔どもでも倒せるだろう。

と、思いきや。墮天使総督が地面に叩き落される。総督にこんなことが出来るのは奴だけだ。

「やれやれ・・・俺も焼きが回ったもんだな。ヴァーリ」

「フツ・・・悪いなアザゼル。俺はそちらに着く気はない。こちらの方が面白そうなのでな。」

白龍皇^{パランス・ブレイカー}が禁手状態で総督に攻撃を加え、見下ろしていた。

「なあ、ヴァーリ。一つだけ聞きたいんだが」

「ん？」

「うちの副総督のシエムハザが、三大勢力の危険分子を集めているという組織を発見した。禍^{カオス・ブリゲード}の団とか言ってたな。」

危険分子……いわゆる離反者たちが、こうして三大勢力の敵になっている。ただ……気になるのは……

「三大勢力の危険分子を束ねるなんて!! そうとうな実力者じゃなきや無理よ……」

魔王レヴィアタンが言った通りだ。そして、あの蛇といい……あの力の上がりよう。それらから考えられる人物は一人に絞られる。

「それで、禍^{カオス・ブリゲード}の団の首魁^{ウロボロス・ドラゴン}が、無限の龍神、オーフィス。ヴァーリ、『白い龍』が奴に降るのか？」

やはりか……

あいつの名は、久々に訊いたもんだ。しかし、おかしな奴らを束ねているか。何をやっているんだ、あいつは……

そんなに、グレートレッドのことを倒したいのかよ、オーフィス。

オーフィス、そんな奴らを束ねたところで、グレートレッドは倒せるわけない。

オーフィスには届きはしないだろうが、俺はそう思った。

「いいや。降るのではない。あくまで協力するだけだ。確かにオーフィスと俺は手を組んだが、生憎俺もあいつも世界の覇権だの何だのに興味が無くてね。ただオーフィスの力を私利私欲に利用しようと連中が勝手にくっついてきてそれがいつしか巨大な組織になっただけだ。」

「なるほどな。てつきり、カテレアと仲良くつるんだのかと思ったぜ。同じ魔王の座を奪われた者同士でな。」

それはないだろうな。

俺はいち早く奴の正体を知ったが、そんな魔王の座に固執しているようには見えなかったが。

「魔王の座ですって？」

「どういうこと!?!」

しかし、俺以外の奴らはアザゼルの話を聞いて動揺するものが大半だった。

「俺の名は、ヴァーリ・ルシファー。俺は死んだ先代魔王の血を引く者でね。先代魔王の孫と人間との間に生まれたハーフなんだ。」

この事実には、地上にいる奴らは驚愕する。

無理もない。俺も、最初に聞いたときには驚くしかなかった。ハーフであるがゆえに悪魔の血を引いてもセイクリッド・ギア神器を宿した。しかもそれが、ロンギヌス神滅具ときた。俺が知る限り、こんなことは史上初のはずだ。

〈恐ろくな。俺も、人外とのハーフの子供が神器を宿したなんて話は聞いていないぜ。〉

ベルザードさんもこういうのなら、今代の白龍皇が初めてで間違いないな。

「全く、冗談みたいな存在だよ。お前は。ま、それは置いておいてだ。さて、ヴァーリ。お前がやる気なら、俺が相手をするぜ。片腕が無くても、お前と戦えるさ。」

総督は光の槍を手に持ち、白龍皇に向ける。

しかし、俺はここで、チャンスとばかりに超速で奴らに接近する。

ドゴオツ!!!

「グハツ!!」

俺は総督に一撃を喰らわせて総督をお仲間さんの元へ叩き落した。

「アザゼル!!」

叩き落された総督をお仲間さん達が心配する。

「てめえ……ここでお前もこちらに牙をむくか?魔法使い?」

かなり力を入れて叩き落してあげたが、総督はピンピンしていた。クレーターから立ち上がり、こちらを睨みつけていた。

反撃されかねないので、俺は奴らにくぎを刺すために魔法を発動させた。

「悪いな。お前らはそこで大人しくしててくれ」

俺が出現させた魔法陣からどす黒い槍が現れ、やつらの周りを囲むように地面に刺さった。

「つぐ……なんだ……?力が……」

そのどす黒い槍が地面に刺さると、天使と墮天使たちがこぞつて地に膝をついた。

「何なのですか……これは……?」

「おそろく……その槍が原因だ……」

総督は気づいているだろうな。あの槍が弱っている原因であると。とにかく、これで邪魔は入らないだろう。

「ほう、キミが相手か?願ったりかなったりだ。一つ、聞いてもいいかな?」

白龍皇は愉快そうに質問をした。

「なんだ?」

「あの槍はなんだ?アザゼルたちが弱っているように見えるが」

「ああ、あれか?あれは俺のオリジナルの魔法、光を制する魔槍^{レイヴァーグ}。天使や墮天使とは相反する力。あれは天使や墮天使にとって猛毒となる効果がある。悪魔が天使や墮天使たちが使う光力が弱点なようにな」

俺が手の内を明かすと、白龍皇は高らかに笑う。

「ハッハッハッハ!聞いたか?アルビオン。今まで無かった墮天使や天使の弱点を作った人物が俺たちの相手だ。これは、相当面白いぞ!!」

『そうだな。魔法使いと聞いて物足りないと思っていたが、その考えは撤回するべきだな』

白龍皇だけでなく、アルビオンも愉快そうに笑った。これで、勝負に集中できそうだ。

「では、始めようか。白龍皇」

「そうだな、魔法使い!!」

カッ!!!

ドオン!!!

いきなりフルスピードでぶつかり合う。

その両者のスピードはほぼ互角。しかし、奴はまだ余力を残しているようにも見受けられる。まだまだ、力を出さない気か?

ドッ!!ドカッ!!

超スピードでぶつかり合うたびに拳を互いに浴びせ、蹴りを互いに入れる。しかし、それらはうまく相殺され合う。しかし、その一撃一撃の波動が周りに伝わっている。この影響で、校舎なども崩れて言っている。

「フハハハハ!!! いい!!! いいぞ、魔法使い!! こんなに愉快的な戦いが出来るとは!!」

ドゴオ!!

俺は奴の鋭いパンチを左腕で受け止め、カウンターを食らわす。しかし、それさえも奴は受け止める。やはり、本職ではない体術では奴を上回ることはいかないか。

「魔法使いだというのに、ここまで体術が秀でているとは!! ますます面白くなってきたぞ!! 魔法使い!!」

「そりや、どーも!」

カツ!!!

ドオオオン!!!!

互いのパワーが込められた攻撃同士がぶつかり合い、大爆発を起す。

『Divide!!』

「——ッ!!」

機械音が聞こえたと同時に俺の力がガクツと落ちる感覚に見舞われた。そのおかげで、先ほどから出ていたスピードも半減した。

「ゴハッ!!!」

力を半減されたことでスキが生まれ、白龍皇の攻撃をモロに受ける。

「グハア!!」

ズガアアアアン!!!!!!

さらに半減され続け、俺は先ほどの墮天使総督のごとく地に叩き落される。

相当なスピードで地に叩き落されたために小規模なクレーターが形成され、砂煙が舞い上がる。

「チツ、白龍皇の『半減』の力か……」

奴も『半減』の能力を俺に浴びせてくる。しかし、俺もそれに合わせて魔法を発動させる。半減されても、倍加、半減されても、倍加され、俺の力は減ることは無い。むしろ奴の半減を俺の魔法が上回っている。

『バカな!!奴は半減で確実に力を低下させているはずだ!!だというのに、奴の力が変わっていない!?!いや、それどころか膨れ上がっている!!』

「どういうことだ!?!」

『わからん。とにかくヴァーリ、一度体勢を立て直せ!!』

アルビオンが信じられないというばかりに声をあげた。

「させねーよ!!」

俺は距離を取って体勢を立て直そうとする白龍皇の懐へ詰め寄り、拳に分解魔法を纏わせ、一気にラツシユを浴びせる。

そして――

バツキイイイイン!!!!

俺の連打を浴びて奴の禁バランス・ブレイカー 手である鎧が粉碎した。

「ゴホオツ、ゴホオ、ガアツ……!!」

奴は血反吐を吐いて地に膝をつけた。

「クツ、やるな……俺の禁バランス・ブレイカー 手を吹っ飛ばした」

腹を抑え、口の端から血を流しながらも笑みを浮かべている。

しかし、奴は喜々として立ち上がり、再度禁バランス・ブレイカー 手 状態に変化する。

「しかし、俺の『半減』をくらってもあれとはな……アルビオン、あの正体がなんだかわかるか?」

『現状では不明としか言いようがない。確かに私の能力は神格にはあまり効果がないことは分かっていると思うが、あれは人間だ。にもかかわらず、奴の力は減ることは無かった。こんなことは初めてだ。しかし、奴の様子から赤龍帝の『倍加』に似ているようではない』

「やつが赤龍帝とでも?」

『いや、わからない。ただ、奴はお前に不足ない相手だな』

「ああ、違くない!!」

奴らの会話が終わったあと、白龍皇は勢いよく飛びあがり、再度俺と同じ高さまで昇ってきた。何かをするような気配を醸し出している。

「素晴らしい!!素晴らしいぞ!魔法使い!否、イツセー・ヴァーミリオン!!ならば、俺も少し本気を出させてもらおう!キミもろとも、すべてを半分にしてやる!!」

チツ!奴め、ここで何か技を出すつもりか?

しかし、妙だ。半分にするとは……?一体何の比喩だ?

俺は奴の言葉に引つ掛かりを覚えたが、直ぐに奴へ意識を向けた。なんだ?奴の光の翼もどんどん増大している。

『Half Dimension!!』

その音声と同時に、周りの状況が一変する。

周りにある木々が半分の大きさになっている。なるほど、時空を歪ませているわけだ。あの白龍皇、時空改変まで出来るレベルか……

「さあ、次に半分になるのはお前だ」

時空のゆがみが俺がいるところまで押し寄せる。何もしなければ、おれとて無事でいられる保証はない。

「へっ、させるかよ!!」

俺は、とある魔法陣を出現させ、亜空間に眠らせてある透明な武器を取り出した。

「ん?なんだ?」

白龍皇は何やら感じ取ったみたいだ。流石、勘が鋭いというべきか。俺が、隠している切り札ジョーカーの一つを出したことでその違和感を感じているようだ。確かに間違っていない。俺のこれは、現実世界に出すだけで分かるやつにはわかる。どんなものなのかが。

とはいえ、これは俺が持ち合わせている数ある切り札ジョーカーの中でも最も弱いものだ。しかし、この武器が弱いわけではない。弱いのは、この俺。使いこなせないのだ。だから、この剣の出せる力など、本来の物とは程遠い。しかし、俺の魔法とこれを合わせれば、この空間の歪みを断ち切るには十分だ。それに、他の切り札ジョーカーでは力がありすぎる。

さあ、行こうか。アルトリア、真聖剣よ。初陣だ!!

「ハア!!!」

俺は剣に魔法をかけて強化し、一気に振りぬいた。

カッ!!!

その剣の斬撃は空間の歪みを吹き飛ばし、奴の技を相殺する。

技を相殺され、白龍皇はこちらを面白そうに笑う。

「俺の『Half Dimension』を相殺か……なるほど、ますます面白い。そして、奴が持っているのは……おそろく……」

ん？俺の右手を凝視している。気づかれたか？

にしても……凄いな、この剣は。テキストに振っただけで空間のゆがみを正すほどだ。俺のような剣を扱えない雑魚が振るってこれだ。俺の幼馴染は、最強の剣士だぜ。

「アルビオン……イツセーヴァーミリオンならば、俺のジャガーノート・ドライブ覇龍を見せる価値がある。」

!?

俺は白龍皇が言った言葉に反応した。ジャガーノート・ドライブ覇龍……だ

と？こいつは確かにそう言った。

『……ヴァーリ。本来ならば、ここはやめておけというべきなんだろうがな。お前だけは特別だ。ただし、十分だけだぞ。いいな？』

「感謝する。アルビオン——『我、目覚めるは、覇の理に——』」

奴め、呪文を……

ここでジャガーノート・ドライブ覇龍をやる気か？しかし、アルビオンの口ぶりからするには奴は、ベルザードさんと同じく、覇龍を完全に制御しているとみて間違いないな。

どうする？こいつならば、更にもっと激しい戦いを楽しめるだろう。

へくうくくくくジャガーノート・ドライブ覇龍を完全に制御できる白龍皇かあ！俺も

戦ってみたいぜ!!

ベルザードさんはベルザードさんで興奮している。最初遭った時

はこんな人じゃなかったんだがな。

「ハツハツハ。恐らくイツセーに似たんだろうな」

ニトラが茶化して来る。てか、俺に似るって何だよ。普通逆じゃね？

ニトラにツツコミを入れて俺は白龍皇に目を向ける。

——しかし、その時だった。

空間が割れ、何者かがこちらに乱入してきた。全く、またも横やりか。

その者は三国志の武将が身に着けているような軽装の鎧を纏っている男。

「ヴァーリ、迎えに来てやったぜい」

「なんだ、美猴。何しに来た？」

美猴、それがこの男の名前か。

「おいおいおい、迎えに来てやったってのにその言い方はないぜえ……本部からのお達しだ。北のアース神族と一戦交えるから戻って来いってさ。カテレアは任務に失敗したんだろ？なら、監査役のお前の任務もここで終わりだ。」

「ハア、時間か」

白龍皇は戦闘態勢を解いた。

俺は現れた奴に向かって聞いた。

「お前、その気配から察するに妖怪だな？何もんだ？」

「おっ、お前さんが、ヴァーリの言っていた面白い魔法使いだな？お前さんの言う通りだ。俺たちは美猴。闘戦勝仏の末裔さ。」

なんと、まさかのあの孫悟空の末裔と来た。

なんとも凄いビックネームだ。

闘戦勝仏。西遊記に出てくる猿の妖怪。その強さは化物と恐れられたほどの存在。確か、初代は死後、仏様になつていて聞いた。

「なるほどな。おまえがああ孫悟空の……白龍皇とつるむのか？」

「おうよ。俺たちは初代とは違って自由気ままに生きるのさ。そうそう。うちのメンバーがお前さんに興味を持ってたぜ。アースーのやつがな。ま、これからよろしく」

「イツセー・ヴァーミリオン。今度はもつと激しくやろう。もつと強くなるう、互いにな」

美猴は棒を出現させるとクルクルと回し、地面へと突き立てた。あの棒、恐らくは有名な如意棒だ。その刹那、その地面から闇が広がった。そして、二人はその闇の中に飲まれていった。おそらく、転移したか。まあ、相手が居なくなつてはもうここには用はないな。

俺も転移魔法陣で帰る準備をする。

「おい！ちよつと待て！魔法使い!!」

後ろから俺を呼び止める声が聞こえるが、俺は無視して我が家に帰った。

第肆章 動乱の序章編

NO, XXXVII I へ 帰還へ

セーイチSIDE

先日、とんでもない三大勢力の会談が終わった。

俺としては、三大勢力が交渉決裂して千年前の戦争が再開される、なんていう最悪の事態を心配してたけど、なんとか話はまとまったし、和平も結ばれたので戦争が今後再開されることはない。ついでになぜか墮天使総督のアザゼルが俺たちの学園の教師になった。加えてオカ研の顧問にもなっていた。

ま、とにもかくにも。いや〜、良かった良かった。ほんとにな。

「あの二人、とんでもなかったなあ」

俺は会談の終わり際、アザゼルせんせーを叩き落して離反した白龍皇ヴァーリと同じくしてアザゼルせんせーを攻撃してかつあの訳の分からないどす黒い槍でせんせーやミカエルさんたちをほぼ行動不能にしたあの魔法使いの戦いを思い出す。そうしていたら自然と声が出た。

まず、ヴァーリ。あいつは、コカビエルを一方的に倒しやがった。

しかもバランス・ブレイカー禁手バランス・ブレイカー無しでだ。故にあいつのバランス・ブレイカー禁手バランス・ブレイカーを見たときは余計にその強さをその身に感じた・・・

そして、あの魔法使い。バランス・ブレイカー禁手バランス・ブレイカー状態になったヴァーリと難なく戦っていた。ほんとに恐ろしいぜ。あれホントに人間なのかよ・・・ルシファーであり白龍皇のヴァーリを相手取って涼しい顔をしてやがった。

しかも、あの魔法使いが放ったあの槍・・・あいつが去っていったら勝手に消えていったが、ミカエルさんやアザゼルせんせーはしばらく動けなかったほどだ。そうとう苦しそうだった。あんな化け物クラスに強いせんせーやミカエルさんたちをあんな簡単に封じるなんて普通じゃないぜ。どちらにせよ、白龍皇ヴァーリとあの魔法使い、たしかイツセー・ヴァーミリオンだったか。あの二人が俺たちの

敵になるんだ。俺は、あの時戦いをただ傍観するしかできなかった。悔しかったぜ。白龍皇は俺に何一つ興味を示していなかった。俺が弱いからだ。圧倒的に……俺は、あの戦いを見てさらに強く決意した。強くなつて見せる。そして、部長、朱乃さん、小猫ちゃん、アーシア、ゼノヴィア、木場、ギャスパーを守るんだ。みんなを。「少しは成長をしたじゃないか。相棒君」

夜、ベツトの上で会談のことを回想していると、俺の神セイクリッド・ギア 器に封印されているアグニルが俺にそう言ってきた。

「まあな。あんな戦いを見せられたらな……」

「ふうん……まあ、僕としてはあの戦いを見せられ、力量差を感じて絶望したんじゃないかと思ったよ」

アグニルが冗談交じりに軽口をたたく。

まあ、アグニルにはいつもからかわれているから別に今に始まったことじゃないが。

「そりゃあ、確かにあの力量差は敵わないと思ったさ。だが、ここでへこたれては、いられないんだよ。あんなレベルのやつらが、世界にごろごろいんだろ？ そうなりや、部長たちをいつたい誰が守るんだよ」
「アツハハ!! いいねえ、少なくとも精神面では成長したよ。あの悪魔になりたてのころと比べたらね。正直、僕は君じゃあ良くて上級悪魔レベルになれるか不安だったけど、案外面白いところまで行けそうかもしれないね」

アグニルが俺をこう評価してくれたんだ。なんだかんだ初めてじゃないか？

「それに、君が言った通り世界にはあんなレベルのやつがごまんといるし、あれより強いやつらもいる。そいつら全員が全員味方になるとも限らない」

「ああ。だから、そいつらを追い返せるようになる。だから、頼む。アグニル。俺に力を貸してくれ」

俺は自分の力のなさを思い知った。一人であんなレベルまで行けるとは思えない。

だから、俺はアグニルに頼み込む。

「いいよ。キミは僕の相棒君だからね」

アグニルはすぐにそう言ってくれた。ありがたいぜ。

「にしても、力を貸してくれ、なんて言われたのはこれで二回目だよ」
アグニルが嬉しそうに言った。

「ん？どういことだ？」

「僕が人間に宿り、その人間が死ぬとまた別の宿主へといった感じで宿主を転々としているのは知っているだろう？もちろん、君のほかにも僕は百人以上の人間と知り合ってきた。しかし、そのうちのほとんどがみんな僕をただの道具としか見ていなかった。この神セイクリッド・ギア器は準神滅具ロンギヌスクラスの力がある。それゆえ、力におぼれて破滅していった人間が多数だったよ」

アグニルが懐かしそうに語る。

そんなことが……あつたのか。ひどいもんだ。アグニルをただの道具だなんてな。

「ありがとね。そんな風に言ってくれるのはうれしいものがあるよ。まあ、二人だけ、君のように接してくれた人がいたんだ。前言った、歴代最強の所有者と二番目まで上り詰めた者だよ」

「ああ、前言った白龍皇に勝ったっていうのと、最弱だったのが強くなったっていうやつ？」

「ああ。そいつら二人はとても仲間思いなやつだったよ。強い信念を持っていた。だから、歴代最強組に至った。キミも、確かに今は破滅して死んでいった人間たちには劣るよ。でも、将来的に見れば、必ずそいつらを超えられるさ。僕ならわかるさ。キミは、あの最強二人と同じ目をしているから。がんばってよ、相棒君」

「おうよ」

俺は新たな決意を胸に、俺の意識は闇へと落ちていった。



そして翌日。

俺はとんでもない光景を目の当たりにした。見慣れたはずのお隣

の田村さんと鈴木さんの家がなく、俺の家の庭になっていた！

それだけじゃない！前の五倍の広さはあるであろうリビング、豪華
そうなシャンデリア、さらにはエレベーター!?六階まである
し……しかも地下まで……気づかない間に家がとんでもな
いことになっていた！

「ぶ、ぶ、部長……これは一体……?」

声を震わせて俺はニコニコしてる部長に聞く。

「ウフフフ、この家に住む人数も増えてきたからリフォームしたのよ
り、リフォーム!?いつの間に!」

「何でも、リアスさんのお父様が建築関係の仕事をしていらしてね?
モデルハウスの一環として無料でリフォームしてくれたの」

と、上機嫌に話す母。

「いやいやいや、これももうリフォームのレベルじゃねえよ！敷地面積
まで広がってるよ！」

「そうそう。お隣さんの田村さんと鈴木さんは急に好条件の土地が見
つかったから引越したらしいぞ。しかもその土地の価値がとん
でもないとか」

父さんはお隣さんの話をおかずに箸を伸ばしながら言う。

「いや、もうそれ絶対グレモリー家絡んでるよ！間違いない！」

「大丈夫。心配には及ばないわ。お隣さんとは平和的解決をしたわ。
みんな幸せになったからそれでいいの」

隣でニツコリとほほ笑む部長……これが悪魔の交渉術か!?恐
るべし、グレモリー家！

そのあと、母さん之間取り図を見せてもらったけど、とんでもな
かった。屋上にある庭園、トレーニングルーム、シアター、大浴場、室
内プール……いや、これホントにお家ですか？これが、悪魔
の技術力なのか……いやはやお見それ致しました。

とにもかくにも、こうして俺の夏休みがスタートしたわけだった。



「いつてきまーす」

今日は冥界へ行く日だ。

なんでも、部長が夏休みの間は実家に帰省するんだ。これは毎年そうだったらしい。俺、アジア、ゼノヴィアを除く古参の眷属のみならずは何度も行ったことがあるらしい。ちなみに、今回は俺たちに加えてアザゼルせんせーまで来るって言ってたな。

みんな、駒王学園の制服に身を包み、家を出た。

向かった場所は、駒王学園の最寄りの駅で会った。ここが集合場所だったらしく、木場、小猫ちゃん、ギヤスパーが既にいた。

にしても、なぜここなのだろうか？疑問が尽きない。

部長が先導してツカツカと駅の構内へ入っていく。向かったのは駅のエレベーター。定員が五、六人の貧弱なエレベーターだったはず。

「アジア、セイイチ、ゼノヴィアは先に載って頂戴。裕斗たちはあとからアザゼルと一緒に来て」

「はい」

「ほら、乗って」

俺たちはとにかく部長の言う通り、アジアとゼノヴィアと俺はエレベーターに乗り込んだ。部長はボタンを押して、エレベーターを動かした。エレベーターの改装表示は一階と二階しかない。すると、部長は見慣れないカードを取り出し、それを電子パネルにタッチした。すると、電子音が鳴る。

「実はね、この駅には秘密の階層があるの」

ここで部長が俺たちが疑問を抱いていたことについて話し始めた。「俺、この街にずっと住んでましたけど、知りませんでした」

「当然よ。これは、悪魔専用ルートなもの。一般人は一生たどり着けないわ。このほかに、この街には悪魔専用の領域が存在するの」

知らなかったこの事実。俺たちは知らないまま、普通に暮らしてたのか。悪魔業界、果たしてどれだけ深くこの人間界に入りこんでいるのだろうか？

「……あら？おかしいわね？」

部長がさつきまでとは打って変わって少し表情が真剣になった。

「もうそろそろつくはずなのに……」

その違和感は俺たちも感じつつあった。先ほどから、エレベーターが動いていなかったのだ。正確には、部長がカードを電子機器にタッチしてからだ。

ゴウン

ようやくエレベーターが動き出した。

チーン！

ようやくついて、扉があいたと思ったら、そこは俺たちがさつきまでいた場所だった。

「部長？地下ホームへ行ったのではなかったのですか？」

木場たちがキョトンとした顔でこちらを見ていた。

「そのつもりだったのだけど、何故かここに戻ってきてしまったのよ」

「故障でしょうか？」

「いいえ、そんなはずはないと思うけれど。とにかく、もう一度行ってみるわ」

俺たちは再度、エレベーターに乗って秘密の地下へ向かった。

しかし、結果は何度やっても同じだった。いっこうに目的の場所へはつくことは無かった。何度やっても元の地上へと戻されてしまうのだった。

「おかしいわね……。仕方ないわ。緊急事態よ。実家へ連絡して。魔方陣での移動を許可してもらえるかを」

「はい、部長」

部長はただならぬ事態なのか、急いで冥界との連絡を指示した。

結局、俺たちは魔方陣での移動という特別措置で冥界へと向かったのであった。



イツセイSIDE

「イツセイ？早くいくよー？」

「ああ、ちよっと待っててー！」

ドライブが下のリビングの部屋から聞こえる。

どこに行くかというところ、ブリテン。現イギリスである。実家に帰ると同時に、大事な大事な恒例行事があるのだ。

そんなわけで今朝起きて身なりを整えているわけだ。実家に行くわけだが、特別準備しなければならぬものは無く、持っていくものも不要だ。向こうには生活できるだけのものがしつかりとそろっているからだ。

俺は着替えて二階の自分の部屋から出る。リビングに行くところ、もうすでにメンバーは揃っていた。伽耶も新しい新居が見つかるまでの間はここにいることになるので、特別に俺たちについていくことになっている。

「みんな揃ったわね」

「んじゃ、行くとするか」

全員がそろったところでぞろぞろとリビングから移動する。そして、この家のある扉の前に行く。

ガチャツ

扉を開けると、そこは西洋風の家の中に続いていた。

そう。この扉はブリテンにある俺の実家と、日本の別荘をつないでいるのだ。空間歪曲魔法を使用して、空間と空間を千切ってつないでいる。こうすると、異なる二点間をつなぐことができる。ホンと、便利なものだ。いわゆるどこぞの青いタヌキさんの秘密道具みたいな効果だ。

「わ〜〜い!!」

久々にこちらに来た妹たちははしゃいでいる。

俺はその元気なほほえましい姿を横に、背伸びをする。昨日はちよつと疲れたからな。

「イツセー、疲れているの？」

俺の様子を見たドライブが俺の心配をしてくる。

「まあな。昨日は少し作業をしたから。その疲れがまだあるのだろうさ。あんまり寝てないしな」

ここに来る前、つまり機能のことだが、お仕事をしていたのだ。と

ある勢力から出向してきたエーゼントたちとの共同作業である。そのエーゼントたちも俺の顔見知りだったが。この街の至る所にある異形の施設たちの完全封鎖と破壊処理である。その作業は一般人が寝静まったであろう深夜に決行した。なんせ、その施設は厄介なことに一般の施設に融合されて作られている。よって、その施設は一般人も利用するため、深夜にすることになった。とはいえ、この都市は人口が五十万人を超えるくらいの都市だ。いくら深夜でもほつき歩いていて人間は少なからず存在する。まあ、見られることはなく作業は終了し、エーゼントたちとも解散となった。にしても……やっとないつらが動き出したか……。遅いんだよ。全く。昔はこの程度の疲れなんて感じなかったのになあ……。寝るようになってから徹夜は中々身体に堪える。

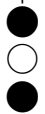
「イツセー、取り合えず来たばかりだから少し休んだら？ 大事な日は明日なんだから」

「ああ、そうだな」

俺はそう言つてリビングにあるソファーに横になった。

そう。明日は、俺にとっては絶対に忘れられない日だ。俺はゴロンと寝返りを打ちながら大切な人のことを思い浮かべる。

明日は、俺の大事な幼馴染であるアルトリア・ペンドラゴンの命日なのだ



ほんの少し体を休めた後、俺は家を出て街に出ていた。俺の家はグレートブリテン島、イギリスという国に存在する。正確には首都のロンドンからは遠く離れている小さな町の近くの森の入り口付近にある。よって、周りに家など一軒もありはしない。本当に隔絶された場所にある。よって、町に出るにも徒歩では時間がかかる。よって町のすぐ近くまで転移魔法陣で転移して、ばれないようにしれっと一般人に紛れて行動する。聞いた話ではあるが魔法使い専用の施設、町があるときいている。そこでは魔法は使っても問題ないらしいが、生憎そ

の場所は知らないので行くことはない。

この町は俺の家から最も近い町である。規模はそんなに大きくはない。ただ、首都へ伸びる鉄道が通っているだけあってそこそこ賑わっている。

街をひたすら歩いていき、目当ての店にたどり着いた。街にある大きなスーパーである。とりあえず、食料を過ごす分だけ購入する。流石に食べ物の保存は保存食以外は効かないからな。食料を購入した後、次の向かう店は花屋である。その花屋に行くと、見知った人が出てきた。

「あ、イツセー君!!久しぶり!」

「ウインリイ、久しぶりだな。」

この子はウインリイ・マーベル。この花屋を営んでいるマーベル夫妻の長女である。

この花屋にはいつもお世話になっているものである。墓参りに行くときは、たいていここで花を買うことが多い。それなりの回数ここにきているので顔見知りになったのだ。

と、店の奥からウインリイが笑顔でこちらに寄ってきた。

「イツセー、こっちに帰ってたんだ。連絡くらいしてくれてもいいのに。いつものやつでいい?」

「ああ、頼んだ」

このように、わざわざ言わなくても揃えてくれる。それほどの関係だ。

「明日だよね?イツセーの大事な人の命日」

「ああ、そうだ」

唐突にウインリイは少し悲しい顔をしながらアルトリアの命日を聞いてくる。

「その人って、その・・・イツセーにとってどんな人だったの?」

「そうだな・・・いつも一緒にいて、いつも一緒に笑いあった、大事な幼馴染さ」

「そう・・・」

ウインリイは顔をうつむかせながら、パツパと作業を進めている。

何とも言えない空気がこの場を支配する。ウィンリイは氣にしているのか？

「はい、いつものね。四十三ポンドね」

花束が四つ出来たところで俺は代金を渡す。

え？ちよつと高いんじゃないかって？そんなことはない。いつもこれくらいは買っている。

「はい、丁度ね。いつもありがと、イッサー」

「いいや、それはこつちもだよ」

俺は花束を受け取って、この店から退店していく。

「まって！イッサー!!」

この店を出ていこうとすると、ウィンリイに呼び止められる。俺は後ろを向いた。

「あのね、イッサー。私、その……結婚することになったの」

ウィンリイは頬を赤く染めながらそう言ってきた。

「結婚？ああ、ようやエドのやつとくつついたのか。なんだか長かったな〜」

「う、うるさいわよ!!プロポーズするの、恥ずかしかったんだから!」

エドというのは、エドワード・レーヴェンシュタイン。超いいところの坊ちゃんである。昔の貴族という位を持っていた家の名で、いまでもその名は有名である。俺も何度も会ったこともある。この店にたまたま居て、そこで知り合ってたって感じた。今にして思えば、こいつら速くくつつけよってくらい仲良かったもんなあ。

ウィンリイはさらに頬を赤くした。おお、真つ赤なトマトみたいだ。

ん？ちよつとまって。いまプロポーズするって言った？俺はウィンリイの言葉に疑問を持ち、彼女に確認した。

「なあ、ウィンリイ、まさかお前からプロポーズしたのか？」

「そ、そうよ。あいつ、いつまでたっても……その……襲つてもくれなかったし、言ってもくれなかったのよ？全く……私を無理矢理押し倒して中○しの一発でもカマしなさいつてのよ……」

OH……そんな生々しい話までは言わなくていいですよ、ウインリイさあん。それと、エド……。お前どこまでヘタレなんだ……。流石にウインリイが可哀そうじゃないか。いわゆる逆プロポーズってやつじゃあないですか。

俺は友人のそちらの事情を聴いて少しばかりいたたまれない気持ちになる。

「そ、それでね、結婚式に来てほしいの」

結婚式に友人としての招待であった。答えはもちろん決まっている。

「ああ。是非行かせてもらうよ。友人の華々しい舞台だからな」

「ありがとう。後で正式に招待状送るからね」

「わかった、じゃあな、ウインリイ。エドとうまくやれよ」

「ええ」

俺は友人の結婚式の話聞いて、少しうれしい気持ちになった。

その気持ちのまま、俺はウインリイの花屋を後にした。

転送魔法陣で人に知られることなく家に帰宅すると、ドライグが出迎えてくれた。

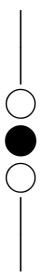
「イツセー、おかえり」

「ただいま、ドライグ」

ドライグは俺が抱えている花を見ると見るからに暗い顔をしている。

ドライグは神器の中にいて、アルトリアとは神器を介してしか会話していないとはいえ、仲が良かった。彼女の死は、ドライグにも相当深く突き刺さっているのだろう。

ともあれ、俺たちは明日のことに備えて早くに就寝に着くのだった



そして翌日

俺とドライグはアルトリア・ペンドラゴンの墓に向かう。ティアや妹たち、伽耶は俺の家でお留守番している。

アルトリアの墓は特別な場所に存在する。神聖なところだ。ゆえに邪悪なものは一切近づくと許されず、さらには一般人もこの地域にいることはできない。俺、そしてドライグがここに來ることができる数少ない人物だ。

そして、アルトリアの隣には、その兄であるアーサー・ペンドラゴンの墓がある。二人が亡くなった日にちは違えども、俺はここに來るたびに二人の冥福を祈る。

つかつかと歩いていき、二人の墓の前に立つ。立派なその風貌は騎士王の墓にふさわしい。“アーサー・ペンドラゴン”、“アルトリア・ペンドラゴン”と深々と力強くその名が石に刻まれている。

「よっ、アーサー兄さん。そしてアルトリア、また來たぜ」

俺はアーサー兄さんとアルトリアに語り掛けるように言った。当然、二人には届かないだろうがな。

「今年はさ、何か起きそうな気がするんだ。白龍皇と遭遇したり、三大勢力が変わったりしてさ」

俺がこうして二人の墓に來ては起こった出來事を二人に話すのはよくやることだ。

そのことをドライグも分かっているのだろう。俺の言葉にじっと耳を傾けていた。ドライグとて、二人と深い仲だった。こうしてドライグがいつも俺についてくるのもそれがあるからだ。

ここで、昨日花屋で買ってきた花を供える。アルトリアが好きだったピンク色の花だ。

すると、この地に少し強めの突風が吹いてきた。その突風で花卉が舞う。おかしい。ここは風が吹くことがほとんどないというのに……

この時、俺は知る由もなかった。これが、のちに起こる信じがたい現象の幕開けだったことを。

NO, XXXVIIII　　くもう一つの世界のヌシさん
)

イツセーSIDE

「じゃあな、アーサー兄さん、アルトリア。また来るからな」

あの突然の突風をあとに、俺は兄さんとアルトリアに一言別れの挨拶をする。

《——ええ、また》

《うん、またねー！！》

「ッ!!」

二人の墓を後にしようとしたとき、突然声が聞こえたような気がして、直ぐに後ろを振り返る。しかし、後ろには誰も、何事もなかった。さつきと変わらない風景が俺の眼に映っているだけであった。おかしいな………確かに、兄さんとアルトリアの声が聞こえたような気がしたんだがな

「イツセー?どうかしたの?」

一緒にいるドライブグが俺の様子に気づいた。ドライブグはきよとんとした顔をしている。

「………いや、なんでもないよ」

俺は何事もなかったのように振舞った。俺の、勘違いだったのだから。

俺は二人の墓に背を向けて今度こそここを後にした。



二人の墓から自分の家に着いた。

「おつかえりー!」

家に着くと、妹たちとティア、伽耶が出迎えてくれていた。

「おかえり」

「ああ、ただいま」

「二人にあいさつは出来たか？」

ティアが今回の墓参りについて聞いてきた。ティアはアーサー兄さんとアルトリアのことはもちろん知らない。俺が、ティアと出会ったのはアルトリアと兄さんが死んでから随分後の話だ。ただ、俺が幾度となくこうして墓参りに行っている、ティアはこのことを聞いてきたのだ。俺が自分の身に起こったこと、そして、二人のことを話した。すると、ティアはまるで自分のことのように悲しんだ。一度たりともあつたことのない人物のはずなのにだ。ホント、どれだけいい人なのだろうか。ああ、いや、人じゃなくてドラゴンだった。

「ああ。もちろんできたよ」

俺はティアにそう返した。

するとティアは「そうか・・・」と笑顔でそう言った

「んじや、俺はこの重要な用事も済んだことだし、あいつらのところへ行ってくるよ」

「わたしもー！」

「ルルもールルも!!」

「わたくしもです」

「イズナも」

俺がティアたちにそう言うと、妹たち全員がはしゃぐ。妹たちがこうはしゃぐのも分かる。これから行く場所にはこの子たちの親がいるのだから。当然だと言えるだろう。この子たちはまだ幼い子たちだから。

「おーし分かった。じゃあみんな、俺についてきて」

「「「「はい！」」」」「わかりました」「うん・・・」

八人の元気な声が聞こえた。ほんと、元気がいいなあ。これが若さだというのだろうか。

「ねえ、ティア。どうせなら私たちも行かない？」

「そうだな。たまには顔を出すのもいいだろう」

どうやら、ドライグとティアも行くようだ。まあ、たまにはこうして全員で行くのもいいものだ。

こうして、俺たち全員でとある場所に向かうのだった。

俺たちは家を出て、裏にある森の中に入ってしまった。今から向かう場所はこの森を通っていく。しかし、かといってこの森の抜けた先に目的の場所があるわけではない。森の中に入って少し歩いていき、俺はここで魔法を発動する。

ブウン！

俺が魔法を発動させると、空間が歪み、ワームホールのようなものが現れる。実は、この森の特定の場所は次元の扉。俺が向かう先はこの場所を入り口とした異世界みたいなものだ。俺の超傑作結界魔法のひとつ、アブソリュート・ヴェルザ隔絶領域を用いて、この世界の他の疑似的な世界を作り出したのだ。こうすることで、この世界とはまた違った世界を作り出すことが出来る。

俺が開けたワームホールの中に入っていく。妹たちは何も驚くこととは無く、ワイワイとおしゃべりをしながら歩いていく。

「いつみても凄いわね〜」

「全くだな。私たちがフルパワーで攻撃しても全くびくともしない世界を応用して一つの世界を構築してしまうとは。全くとんでもない魔法使いだ」

逆にこの世界でも強者の中の強者であるドライグとティアのほうが驚いている。

「ははは、龍王最強と赤龍帝にそう言われるのはうれしいな」

ティアとドライグからの称賛は素直に嬉しい。世界中の中でも強者に入る二人にこういわれるのは魔法使いとしては嬉しいものだ。

確かに、龍王であり、カオス・カルマ・ドラゴン天魔の業龍という立派な二つ名をもつティア、赤龍帝、もしくは赤いウエルシユ・ドラゴン龍のドライグが攻撃してもめつたに壊れることが無いような構造にしてある。しかし、それでも耐久力が無限大ということは決してない。

「ま、流石にオーフィスやグレートレッドの攻撃には耐えられないと思うがな。奴らが本気を出したとすれば、精々三回の攻撃に耐えるのがやっとだろう。おそらく四回目になれば……崩壊は免れない」「なーに言ってるのよ。あんな化物みたいな奴らの攻撃を対象に入れちゃダメでしょ」

「大体、あいつらの本気の攻撃に三回も耐えられる結界なんて、この世界に存在しない。冗談にしては笑えないな」

「いやー、別に冗談のつもりで言ったわけじゃないんだけどなー」

こんな会話をしているうちにもう目的の場所に到着していた。

俺の目の前に広がる景色、それは――この地

球、人間界にそっくり似せて合っただけかしら乖離している世界だ。俺は幾度となくこの地に足を踏み入れている。しかし、ここは我ながら何度見てもワクワクするような場所である。

そう、まるで、異形の者たちが今にも出てきそうなところだからだ。ズシンツ!!ズシンツ!!ズシンツ!!ズシンツ!!

この世界に入った少しあと、凄まじい地響きが聞こえてきた。その爆音が鳴るたびに、地面が揺れる。ちょうどいいタイミングに来てくれたな。

「おじさんだ!!」

「ホントだ!!」

妹たちもこの気配と地響きで何者かわかったようだ。

「気配を感じてきてみたが、やはりお前たちだったな。こちらに来るのはいささか久しぶりではないか? イッセー、それにドライグ、ティアマットにイッセーの妹たちよ」

俺たちの目の前に立ち誇っているものから声を掛けられる。ただ、その者の大きさは凄まじい。とてつもなく太い足に腕。強大な体躯。龍を象徴する角に巨大な翼。ギラギラとして鋭い眼。

「ああ。久しぶりだな。とは言っても俺に限っては半年ぶりってところか? タンニーン」

「久しぶり、タンニーン」

「久しいな、タンニーン。お前、前に会った時よりも力をつけたな」
「流石に分かるか・・・まあ、俺とてここでただ農業をやっているわけではないからな」

俺たちの前にいるドラゴンはタンニーン。八大龍王の一角、
ブレイズ・ミーティア・ドラゴン

魔龍 聖の名を持つ伝説に名を遺すドラゴンである。龍王の中で三番目の強さを誇る。そして、タンニーンの代名詞と言えば、

ドラゴンの代名詞でもある火の息^{ブレス}である。それは隕石の衝突に匹敵すると言われている威力を誇る。隕石はこの地球に幾度となく衝突し、そのたびにありとあらゆる生命を消滅させてきた。この天災レベルの火の息^{ブレス}を喰らえば間違いなく並みの奴らでは肉体など消し飛んで何も残らないだろう。しかし、以前より力を上げたタンニーンの火の息^{ブレス}は更にその威力は増しているだろう。

「そうそう、今年はどうなんだ？ドラゴンアップルの出来具合は」

「今年も例年通りと言った感じで豊作だ」

「そうか」

俺がタンニンに訊いたドラゴンアップルというのは、ドラゴンが主に食すリングである。文字通りと言えば文字通りだ。これはドラゴンアップルを主食にするような種のドラゴンの為に栽培している。これが無いと絶滅してしまうというのだ。もともと、俺自身もドラゴンアップルは興味を持っていたし、その木を所有していた。そして、それはこの龍王タンニンがこの世界のヌシになっている理由にもなっている。そのことは話すとき長くなるが、簡単に言えばドラゴンアップルを主食とするドラゴンの種の長がタンニンにドラゴンアップルの数が減少していたことを伝えたとて助けを龍王に求めた。そして、そのことが広まって俺の元へタンニンが自ら来たというわけだ。当時、俺も驚いたものだ。

「イツセーよ。来てさっそくで済まぬが、俺の仲間たちの相手をしてやってくれ。お前が来ていることを知れば、あいつらも喜ぶだろう」
「ああ。わかった。いつものところだろう？じゃあ、さっそく行ってくる」

俺は魔法で空に浮き、とんでその場所へ向かった。

タンニンはドラゴンアップルを主食とするドラゴンたちのほかにもタンニンについてきた別種のドラゴンもいる。妹たちと同じ上級種のドラゴンもいる。タンニンは龍王であり、王に向いているようなドラゴン。その証拠にドラゴンたちを保護しているのだ。そして、ドラゴン界でその噂はどんどん広がって自らタンニンの元へ来るドラゴンもいたりするほど。おかげで今ではかなりの数のドラ

ゴンがタンニーンのもとに居る。これは凄いことだ。いや、ほんとうに。ドラゴンはその力故、力のあるものを引き付ける。しかし、これはそんな言い伝えによるものじゃない。タンニーンのこの勇猛さとやさしさがあつてこそだ。

タンニーンと会った場所から少々飛び、いつもの場所にやつてくる。

しかし、その場所には、ドラゴン一体たりともいない……いや、これは……

バババババツ!!

突然、俺の周りから数十体のドラゴンたちが一斉に現れた！姿を隠していたようだった。

一斉に俺にとびかかってくるドラゴンたち。

一体一体の攻撃が俺に届きそうになる。しかし、俺はギリギリまで引き付けて一気に上方へ回避する。

俺の姿を見失ったドラゴンたちはキョロキョロと索敵をするが、一体のドラゴンがすぐに俺に気づいた。

「上だつ!!」

一体のドラゴンが声をあげたことで全員が俺に気づく。

と、直ぐに俺を追つて翼をはばたかせ、俺のもとに猛スピードで猛追する。中々の速さだ。

「良いスピードだ……しかし、俺にそのスピードは逆に格好の的だ」俺はスピードを見極め、逆に相手の懐に潜り込む。

ドラゴンの体は総じて巨大である。このドラゴンたちもタンニーン程とはいかないがかなりの大きさだ。だが、大きい故、ふところは弱点となる。

ドゴツ!!!

俺は鋭い一発を浴びせる。

「グヌツ!!」

俺の攻撃を受けたドラゴンのくぐもった声が聞こえた。攻撃を受けたドラゴンは真下に落ちていく。

ドがツ!!!バキツ!!!

俺は立て続けに来るドラゴンたちを蹴りと拳で落としていく。

「おまえら、スピードはかなりいい。が、懐に潜られたときに対処がなっていないぞ」

俺が奴らに指摘してやる。

奴らはめげず、俺に立ち向かってくる。

流星はドラゴン。いや、この程度で参るわけがない。

「ヌウン!!!」

ドッ!!

と、俺に巨大な拳が振り下ろされる。俺はそれを素手で受け止めるが、とても重い一撃だ。魂の乗ったいい一撃だ。

俺はカウンターとばかりに突きを浴びせる。しかし、それをガードされ、有効打にはできない。俺の一撃をガードしたことで俺たちは互いに距離が出来た。こいつが、この中では一番の有望株である。そして、また互いに距離を詰める。ほかのドラゴンたちも俺に向かってくるのであった。俺とタンニーンの前にいるドラゴンたちの戦いは始まったばかりであった――



ドライブグSIDE

「んじゃ、「先ず行ってくる」

イツセーはタンニーンに頼まれてすぐに行ってしまった。ほんとうに、戦い好きなのは相変わらずよね。イツセーらしくて何よりだけど。

「にーたん、いっちゃたあ」

「そうだね〜」

妹たちはだんだん小さくなってゆくイツセーの背中をじつと見つめていた。私はイツセーに代わって妹たちに伝えた。

「ほら、みんな。お母さんとお父さんのところに行っておいで。久しぶりに我が子の姿を見せてあげて」

「「うん!」「「は〜い」「行つてまいります」「・・・わかった」

妹たちは嬉しそうにそれぞれお母さんとお父さんのもとへ向かっていった。ドラゴンとはいえ、何も無から生まれる存在ではない。必ず、親というものは存在する。私たちを除けば……そもそも、私の生みの親なんて知らないけどね。自分がどうやって生まれて、どうやって育ったかなんて記憶にない。そうおもうと、ルルやユキたちが羨ましく思うこともある。妹たちは幼くして親元を離れていった。しかしまだまだ、子供だからね。親のもとに行きたいはずだ。

妹たち全員が親の元へ向かい、ここにいるのは私、ティア、そしてドラゴンの姿のままのタンニーンだけ。タンニーンは意外つて顔をしながら口を開いた。

「にしても……ドライグ。お前があのように子守をするようになるとは思ってなかったぞ。変わったものだな、ドライグよ。昔のお前からは想像できない姿だ」

「そうだな。なんというか、おしとやかになったと言えればいいだろうか。女らしさが極まったともいえるか」

「ちよつ、何よ、二人して……」

その話題には極力触れたくない……。昔の私はあれだ……。いわゆる若かった。

私は昔、つまり肉体があったころの自分を思い浮かべる。

「まあ、いいさ。こうしてまたこのメンバーでこのように落ち着いて話をするようになれるとは思ってなかった」

「タンニーンの言う通りだ。とくに、ドライグ。お前が滅ぼされて神器にされたと聞いてたときはもうこのようにして会うことはできないのか、と思ったものだ」

ティアとタンニーンが口をそろえて言った。

二人の言った通り、私たちは昔もこうしてよく会っていた。ティアは同じ雌のドラゴンとして仲が良かった。タンニーンは昔からなんというか、気が合う中で、ティアほどじゃないけど会う時もあった。タンニーンはほんとにいいドラゴン。ホントにドラゴンなの？っていうくらい紳士的な性格をしているの。イツセーみたいだね。私は赤龍帝だからアルビオンやほかの龍王たち、そして……。邪龍とも

面識あるけど、他のやつらとは一線を画くわね。あ、でもアルビオンはまつすぐな奴だったわ。一度は滅んだ身であるけれど、こうしてまた肉体を持ち、自身の目でこの二人を見ることが出来るようになった。

「ええ．．．これも、イツセーのおかげね」

一度滅んだ私を現世に復活させたのはほかの誰でもないイツセーだ。

しかし、イツセーは当然ノースクでそんなことを出来るわけではなかった．．．まあ、それ花がかくなる話だからまたの機会かな。「確かに。そのことといい、ドラゴンアップルのこといい、俺は龍王と称される身でありながらイツセーに借りを作っただけだ。いまだ、その借りを返せないでいるからな．．．」

と、タンニーンが珍しく弱気である。

とは言っても、イツセーの性格からすれば借りを返すなんて言っても気持ちだけ受け取っておく、と言いたいようなのよね。

「まあ、たまにイツセーの相手してあげたら？ 戦い好きだから」

「俺にはそれくらいしかできそうにないな」

私がタンニーンに出来そうなことで最も効果のあることを助言する。タンニーンは苦笑いしながらそういうのであった。

この後、私たちは少々このメンバーで会話をすることとなった。



イツセーSIDE

「ふう．．．．．」

タンニーンのところにいるドラゴンたちとの組み手を終え、この見た目麗しい景色を見ながら休んでいた。

その休んでいる俺のもとへやってくるドラゴンが一体。

「イツセー殿。お久しぶりです。先ほどはありがとうございます」

後ろを振り返ると、先ほどの組み手で最も最後まで続いていたドラゴン。もつとも将来が有望視されているドラゴン。

「ああ、いいってことよ。ボーヴァ」

このドラゴンの名はボーヴァ。タンニーンの実の子供であり、次男だ。タンニーンほどではないとはいえ、その逞しく、大きな体躯。父親譲りのその火の息は中々の威力だ。これから鍛えれば、もつとその威力は増すだろう

タンニーンは長男、次男、長女と次女の四人の子供がいるが、ボーヴァはタンニーンのを最も濃く受け継いでいるためなのだろうが、四体中最強だ。おそらくは次期龍王候補になれるだろう。今のボーヴァの強さは最上級悪魔クラス、熾天使クラスといったところか。流石はタンニーンの子息だ。今の時点での実力も申し分ない。さらには戦い好きだ。

「これまた誰に似たんだかな？」

俺の中にいるニトラがまたもや茶化してくる。

俺だと言いたいのか？まあいいか。

「ボーヴァ。さらに力を付けたな。このままいけば、龍王候補に名をあげられるだろう」

「ありがとうございますっ！イッサー殿が修行相手になってくれたおかげです」

ボーヴァはこんな感じで昔から慕ってくれている。いわゆる弟っで感じなのだろうか。タンニーンの子供四人の中で一番こういった付き合いが深い。まあ、俺に似て戦い好きだからだろうがな。

にしても、おそらく有名なドラゴンの中では家族を持っているドラゴンはタンニーンしかない。まあ、あのタンニーンの性格だ。それはそれは雌のドラゴンたちにはモテモテだろうさ。同族を助けるために奔走するような奴だ。まさしく、『ドラゴンの王様』だ。ちなみにタンニーンキング・オブ・ドラゴンの奥さんもそれは別嬪さんだ。龍王、ブレイズ・ミーティア・ドラゴン

魔 龍 聖、タンニーンが選んだ番だ。きれいなのは当然だ。ドラゴンは女好き。オスは必ずといっていいほど複数のメスを番にする。しかし、タンニーンは愛妻家。奥さんもただ一人だけだ。どこまでも紳士だ。俺も、見習うこともたくさんある。俺よりも長い時を生きているからな。

「そうか、これからもよろしくな。ボーヴァ。」

「ええ、こちらこそ」

ボーヴァといつものように話していると、こちらに三体の非常に強い気配が使づいてきていた。

「お前たち、手合わせは終わったか？」

「親父・・・」

とここでボーヴァの父親、タンニーンが来ていた。ドライグもティアも一緒だ。

「ああ。タンニーン。数十分前くらいにな」

「いつもすまないな。」

「いいさ。それに、タンニーンの子息の成長をみるのも面白いもんさ」
「それについても感謝している。あの荒くれ者だったボーヴァがここまでおとなしくなったのはイツセーのおかげでもあるからな」

タンニーンがそういうと、ボーヴァは照れたように顔をそむける。父にそう言われるのは何かと恥ずかしいのだろう。

「ボーヴァ。遅しくなったじゃない」

「ドライグ殿。赤龍帝のあなたにそう言われるのは光栄です」

ドライグの言葉にボーヴァは頭を下げる。赤龍帝はドラゴンの中でもトップ中のトップ。憧れの存在らしい。ボーヴァもドライグには嬉しそうな、羨望の眼差しを向けていた。

「ドライグ殿とティアマツト殿ではありませんか!!」

ドライグとティアがいることで回りからどんどんタンニーンのもとにいるドラゴンたちが集まってきた。ドライグやティアは雌のドラゴンで最強の存在。ドラゴンの世界では有名なだけではない。その美しさと強さゆえに憧れの的だとか。雌のドラゴンたちからは尊敬と羨望の眼差しを向けられ、雄たちはみんな狙っているらしい。これは全てドラゴンに詳しいタンニーンから聞いた話だ。なるほど。周りを圧倒するような存在には自然と群がる。人間もドラゴンも、それについては一緒だ。次々と集まってくるドラゴンたちにティアはそうでもないが、ドライグはあたふたしている。

「タンニーン、これからドラゴンアップルの状況確認と少し収穫をし

「たいのんだがいいか？」

「構わないぞ。ドライグ、ティア。しばらくそいつらの相手をしてやっつけてくれまいか？全員、お前たちには会いたがっていた者も多いのだ」

「ええ、いいわよ」

「やれやれ・・・」

ドライグはタジタジだったがタンニーンの旨に応えた。ティアは半分呆れた様子だった。

「では、イツセー。行くとしよう」

「ああ」

俺はタンニーンと並んでドラゴンアップルの育成地へと向かった。



セーイチSIDE

「すっげえー！ー！！」

「おつきいですう」

思いもしないトラブルがあつたが、俺たちは何とかリアス部長の実家に到着することができた。アザゼルせんせーはサーゼクス様たち、お偉いさんがたの会合があるとかで魔王領に行った。

にしても、このデカさよ！！部長の家デカすぎだつて！！もう城だよ、城！！豪邸すぎい！！

「おかえりなさいませ、お嬢様、眷属の皆様方」

バカでかい城門を開くと、グレイフィアさんが居た。

「ではどうぞ、お進みくださいませ」

そういわれて俺たちはレッドカーペットの上を歩いていく。その両脇にはメイドさんたちと執事さんたちがずらりと家の入口までずらつと並んでいた。いったい何人の使用人さんたちがいるんだ……多すぎでしょ。やっぱ、上級悪魔って凄いなあ。

歩いていくと、二人俺たちのことを迎えてくれている方がいた。一人は小さい少年。部長と同じ紅髪だ。もう一人は亜麻色の髪をもつきれいなお姉さんだ。

「リアスお姉さま！おかえりなさい！」

と、紅髪の少年が部長のことをお姉さまと言った。なんだ？部長にサーゼクスさんのほかにも兄妹がいたのか？

「ただいま、ミリキヤス。大きくなったわね」

部長はこちらに走ってきた少年を抱きとめて頭をなでながら笑顔で言った。

「部長、この子は？」

「この子はミリキヤス。お兄様の子供よ」

ええ!? 兄妹じゃなくて!? サーゼクス様の、魔王様のお子さんでいらつしやつた!!

「おかえりなさい。リアス」

「はい、ただいま戻りました。お母さま」

.....え? お母さまあああああああああ若すぎるっ!! 若すぎますよ、部長!!

「ええ!? お母さまって、ほとんど部長と変わらない女の子じゃないですかあ!? 部長のお姉さんではなく!?!」

「あらあら、うれしいことを言ってくれますわね。褒めても何も出ませんわよ?」

おっと、あまりの興奮につい口が滑ってしまった。そういう系のものを見すぎてしまった!

部長の母君は頬に手を当ててほほ笑む。うん、その姿も可愛い。「セーイチ。悪魔はね、魔力で見た目を自由に変えられるのよ。」

な、なるほど。理解いたしました。部長。

「ところでリアス。先ほどの報告について調査結果が出たわ。当事者のあなたにも話しておくよう、上層部から指令が出たわ。眷属全員を連れていらつしやい。まあ、こちらに来たばかりだから、後でいいわ」「わかりました」

部長のご家族とのあいさつはこれくらいにし、俺たちは一先ず荷物

を置いて休憩した後、大広間に集合となった。



「使えなくなった、ですか……?」

「ええ。壊されてはいないそうです。しかし、その中に入ることができなくなったり機能が停止しているとのこと。次元を超えるあの列車も事実上使用不可です」

部長のお母さま、ヴィレナラさんからそう伝えられた。俺たち全員困惑している。俺たち部長の古参眷属の皆はなおさらだ。

「復旧はできないのでしょうか?」

「それは不可能と言われたのよ。なんでも、悪魔が入ることのできないような神聖な結界までご丁寧に張ってあるとのことよ」

そんな……結界まで……

俺たち悪魔は弱点がある。それは神聖なもの。その神聖なものといえば光力が代表だ。でも、光を扱う人たちである天界勢力はもう和平を結んでいる。教会の戦士たちがするはずもない。つまり……
「三大勢力以外のどこかの勢力の仕業とみるべきね」

部長が俺と同じ見解を示した。その考えにヴィレナラさんも首を縦に振って肯定した。

「そう考えるのが妥当と言えるでしょう。とは言っても、場所が場所だから犯人は絞れるかどうかわからないわ。リアス、眷属の皆さん。あの地域に心当たりのある人物はいますか?」

ヴィレナラさんに問われて俺たちは考え込む。しかし、案外俺は早くにその人物が浮かんだ。

「たぶん、あの魔法使いが怪しいかもしれません」

「あの魔法使いとは?」

「アザゼルが会談に呼んだ魔法使いよ、お母さま。コカビエルが襲撃してきたとき、やつはコカビエルと戦ったの」

「なるほどね……確かにあるかもしれませんが」

この後俺たちは意見を交しあったが結局、俺たちの結論はその魔法

使いが怪しいと結論が出た。しかし、どこにいるか不明なため、引き続き調査と警戒をすることになった。

その後、俺たちはリアス部長のお父さんも含めたディナーとなった。

NO, XXXIX 収獲

アザゼルSIDE

俺は、この冥界に足を踏み入れた。初めてだ。悪魔のルートから正式に入るのは。俺は間もなくしてサーゼクスたち魔王たち、加えて上層部、ミカエル達天界勢力、そして俺たち墮天使勢力の会談を行っている。

「ふむ………禍カオス・ブリゲードの団か………」

「それだけでなく、今代の白龍皇にして、旧魔王の血を引く者、ヴァーリ・ルシファー。そしてその仲間である闘戦勝仏の末裔である美猴か。それに加えて、まだほかにも構成員がいるという話ではないか。いやはや、とんでもない脅威ですな。我々にとつては」

「その通りだ。厄介極まりない。あの時のように白い龍は敵になった」

現魔王政権の上層部の上級悪魔がこの現状をそう視る。

確かに言う通りだ。わかつてはいた。あいつは力と強敵を求めている。いつだってそうだった。いつか、俺のもとを離れていくことは。しかし、今となつては禍カオス・ブリゲードの団の一員にまでなっている。

「アザゼル殿。此度の件、あなたはどう視る？聞けば、ヴァーリ・ルシファーはあの会談までの間、あなたのもとにいたという話ではありませんか？」

上層部の上級悪魔の一人が俺に訊く。オブラートに包まれてはいるが、遠回しに身内の反乱をどう落とし前を付けるんだ？とでもいうような意図をこの質問には見られるな。ほかの上級悪魔の面々も同様の視線を俺や、墮天使勢力に向ける。まあ、昔から変わらん古き悪魔たちだ。

「それについては済まなかった。あいつが、ヴァーリが裏切ることを予想していなかった。まあ、ここで何を言っても仕方がない。だから、あいつに對抗できる者を育てる。」

「それが、紅炎龍児か」

「ああ。あいつはまだまだだが、鍛え方によっちゃ、化けるかもしれ

ん。あいつが、対白龍皇の切り札だ。」

俺は墮天使総督としての回答を言う。相手方は何も言っていない。まあ、少しは納得してもらえただろう。

「皆さん。白龍皇も十分脅威ですが、もう一人、脅威になろうとしている者がいます。それも、私の妹が管理している地に」

「それが、報告にあった魔法使いというものですかな？サーゼクス殿」「ええ。名前はイツセー・ヴァーミリオンと本人は名乗りました。魔法使いであり、無所属です」

サーゼクスは今後、新たな脅威になろうとしているあいつの説明を上層部の悪魔たちにしていく。上層部の悪魔たちはそれを聞き入っている。

「なんと、無所属……はぐれ魔法使いというやつですな」

「嘆かわしい。そもそも魔法使いとやらは協会に所属するものではないのか？」

「メフィスト殿との協力も仰ぐべきか……？」

「何にせよ、相手はただか魔法使い一匹。サーゼクス殿、ほんとにこの程度のやつが我々の脅威になるといえるのですか？」

悪魔の上層部のやつらはそれぞれにしゃべりだした。だが、こいつらは一つ勘違いしている。魔法使いごときなどと侮っている。俺がその認識をただすため、発言する。

「魔法使いは魔法使いでも、イツセー・ヴァーミリオンだけは甘く見ないほうがいい。奴は、俺たち墮天使や天使にとって猛毒となるような光を蝕む闇の魔法を編み出していた。あれは、おたくら悪魔にとって光が毒であるように、俺たちもその闇という弱点を生み出されることになった。」

「なんと!？」

「それは真ですか?!墮天使総督殿!？」

驚愕、信じられない、といった表情をする面々。俺だってこんな話信じたくはない。しかしだ……

「ああ。俺とミカエルとサーゼクス、セラフオールはその目で実際に見た。さらには、俺とミカエルはその槍の特性を実際に喰らった。」

「ええ。実際に直接あたってたわけではありません。魔法使いは私たちを囲むように地面に槍を打ち込みました。触れてすらいけないというのですが、近くにあるだけで力が抜け、しばらく身動きが出来なかつたほどこです。もし、掠りすらしていたと思うと……」

「それだけじゃねえ。もし、そんなような魔法が禍カオス・ブリゲードの団や他の勢力に伝わりでもすれば……」

「恐ろしい……考えたくもありませんな」

「なんとということだ……」

「皆さん、ひとまず落ち着いてください」

ざわざわとするこの会場。が、それを鶴の一声で沈めたのがサーゼクスだった。サーゼクスが一声上げると、全員が勝手なおしやべりをやめてサーゼクスの方へ視線を向けた。

「状況は変わることはありません。我々は、一刻も早く三大勢力で連携を図り、脅威であるものに立ち向かわなくてはなりません」

その言葉に、上層部の悪魔たちが賛同する。やはり、魔王というのはすげえよな。それだけで束ねることができたからよ。それに比べて、俺は情けねえな。仕事は出来ねえし、身内には離反されるわだよ。俺は神器しか知らねえからな。俺は、俺にできることをするか。

俺は、会談が終わってから明日から始まるグレモリー眷属の特訓のことを練りながら、あの魔法使いのことを回想する。あの凶悪で脅威なる魔法。それに加えてバランス・ブレイカー禁手状態のヴァーリと打ち合える体術。しかし、不気味だ。やつは、あれで本気だったとは思えねえ。確証はない。だが、俺の感がそう言っている。あいつがまだ一匹狼状態だからまだマシだ。だが、あいつのような存在が、もし他の勢力のエージェントだとしたら……相当ヤバイぜ。こりゃ……



セーイチSIDE

昨日は若手の上級悪魔六人と眷属たちが一堂に会しての挨拶があった。みんな、個性的だったなあ。一番驚いたのは、部長のいとこ

で、大王であるバル家の次期当主、サイラオーグさんだ。会場で暴れる寸前だったヤンキーの兄ちゃんを拳で一撃で沈めたのはすごかった。鳥肌が立ったぜ。

今日は初の冥界に降り立ってから三日目。俺たち部長とグレモリー眷属は全員、グレモリー家の広い庭に集合していた。みんなジャージ姿だ。昨日のあいさつではシトリー眷属とのレーティングゲームが決まったのだ。それに向けて、皆気合が入っている。もちろん俺もだ。ライザーのときは無様な醜態をさらしちまったからな。ここで、いっちょ挽回したい。

と、ここで何やら資料やデータをもったアザゼルセンサーが来た。「よし、全員揃ったな。お前たちにまず言っておくことがある。これは、将来を見据えてのトレーニングだ。効果が表れるには個人差がある。ただ、方向を見誤らなければ、お前たちは必ず成長する。まず、リアスからだ」

最初に呼ばれたのは部長だ。アザゼルセンサーが部長にアドバイスをしていく。部長はやっぱスペックが高い。基本が中心らしい。それだけでも十分なんだと。さらにはレーティングゲーム特有のルールだったり戦術を覚えるらしい。キングだからそういう要素もいるんだな。

「次は朱乃だ」

次に呼ばれたのは朱乃さん。しかし、朱乃さんはアザゼルセンサーの言葉に顔をしかめた。朱乃のそうなる理由は知っている。朱乃からその秘密を話してくれた。朱乃は、墮天使の血を引いている。ただ、色々な事情があるらしい。だから、今までその光の力を使わなかったんだとか。しかし、受け入れなければならぬと一番わかっているのは朱乃さん本人のほず。俺は朱乃さんを信じる。

この後、木場、ゼノヴィア、ギヤスパ、アーシア、小猫ちゃんの順に指示を出していった。流石、アザゼルセンサーだ。みんなに的確なアドバイスをしている。これが、長く生きてきた強者なのだろうか。

「最後に、セイイチだ。」

「は、はい」

待ちに待った俺の番だ。さあこい！どんな修行でもやってやるぜ！！

「お前はだな……ああ、もうちよつと待ってるもうすぐ来るはずだ」

ガクツ！

なんだよ！せっかくやってやろうと意気込んでいたのに、待ってるだなんて！

しかし、その時だった。

地面に魔方阵が出現した！な、なんだ!?この魔方阵!!なんかすっげえぞ!!見たことねえ!

「あ、アザゼル、この魔方阵はまさか……」

「ああ、そのまさかだ」

部長はだれだかわかったようだ、誰だろう？

すると、魔方阵から二人の人影が現れた。だ、誰だ？一人はたぶん男。もう一人は女だ！

「はあい、アザゼル。久しぶりね。元気してた？」

「ああ。お前こそ、変わんねえな、ソフィア」

アザゼルセンサーはソフィアっていった。女の人の名前がソフィアさんかな？

「アザゼル。よくもまあ、悪魔の領域に堂々と入れたもんだな。」

「へっ、魔王には許可とってあるぞ。ベオ」

男の名前はベオらしい。

にしても、美男美女だなあ。女の人はすっげえ綺麗だ!!ピンク色の綺麗な髪。さらにはウルふわウェーブがかかってとっても大人っぽい!そしておっぱい!服の上からでもその存在感が伺える!逆に男の人の方はイケメンだ!直観だけどたぶん木場よりもだ。女の人と同じピンクの髪。薄着だからわかる筋肉。でも細い。なんていうか、こう……余分な筋肉がないって感じ。くそう!!こんだけイケメンだったらさぞかしモテるんだろうなあ。

女の人のほうへ視線を戻す。すると、俺の視線に気が付いたのか、

「まあいい。今回はほかでもない魔王サーゼクス様の頼みだからな。そこんところ、わかってるよな？ 墮天使総督殿？」

「ああ、わかってるって」

「私は、そうでもないけどね」

「姉上、魔王様からの頼みは俺一人のはずでしたのに、なぜついてきたのです？」

「私は興味あったのよ。今代の紅エウオリユシオン・ドラゴン炎龍 兎君に。ほら、何かと伝説のドラゴンが悪魔側に来たのは初めてじゃない？」

「まあいいですけど」

俺が殺されないか心配しているのを尻目に会話が進んでいって

「お久しぶりです、ソフィア様、ベオグラード様。」

「久しぶり、リアスちゃん。大きくなったわね。それに綺麗になったわ」

「お褒めのお言葉、光栄ですわ。ソフィア様はお変わりなく」

ん？ 口調からして部長は顔見知りだったらしい。

「おい、リアス。あそこら辺の山、更地になるかもしれないか？」

「構いませんわ、ベオグラード様。セーイチのことをよろしくお願いします。存分にしごいてあげてください」

「ああ。そうさせてもらう。おい、クソガキ。行くぞ」

え？ もうですか！

「セーイチ。がんばって。私は、あなたが生きて帰ってくることを信じているわ」

「ぶちよおおおおおおお!!! それ、死亡フラグですうううう!!!」

俺はベオグラードさんに首根っこをつかまれ修行場所に連行されていったのであった。



イツセーSIDE

ボーヴァやタンニーンのところにいるドラゴンたちと手合わせした後、俺はタンニーンたちに譲渡したドラゴンアップルの栽培されて

いる場所へ向かった。きつき戦闘をしたところからは大体数十キロ離れているところにある。当然、ドラゴンたちが戦うようなところに生えていたら、一瞬で消滅してしまうからな。ドラゴンアップルの植生地では基本緊急事態でなければ戦闘行為は禁止である。タンニーンの後を追いながら空を飛んでいくと、だんだんとドラゴンアップルの木々が見えてくる。赤い大きな実を实らせている。この位置でもこれくらい赤いのがわかるってことは今年も豊作だな。

俺とタンニーンはドラゴンアップルの栽培地へと足を踏み入れた。ずらつと規則的に並べられたその木々。そしてその木々すべてに赤い実が実っている。そして、ドラゴンたちがせっせと農業を営んでいる様子がうかがえる。この作業をしているドラゴンたちはタンニーンのもとにいるドラゴンアップルを主食とするドラゴンたちだ。このドラゴンたちはあまり戦闘を得意としていない珍しい部類。たまたま突然変異体として強い個体が現れる時もあるが、基本はそこまで強いというわけではない。すぐに討たれてしまう。タンニーンはそれもあつてここで保護もしているわけだ。

俺とタンニーンがそのドラゴンアップルのなっている農地を歩いていると、作業しているドラゴンたちがこちらに気づいた。

「タンニーン様、おかえりなさいませ。イツセー殿、ご無沙汰しております」

「おう、今年も豊作だな」

「ええ。おかげ様です。それと、今年はイツセー殿にぜひ見せたいものが」

見せたいもの？なんだろうか。

「ああ、それについては俺が案内する」

タンニーンは意図をくみ取ったかのように言った。

「イツセー。まずは、収穫だろうか？こつちだ」

「ああ、分かった。」

俺はタンニーンについていく。少し歩いて、俺はこの広大な農地の中ほどのドラゴンアップルの木々の前に立った。

「こつちだ」

「ああ、ありがとうタンニーン。すまなかつたな、俺の頼みに答えてもらって。大変だったんじやないか？」

「なに、これくらい構わないさ。俺としても、ドラゴンアップルを品種改良してこれらを主食としないようなドラゴンたちも食べられるような品種にするのも一興だったさ」

俺はタンニーンに頼んで、フツターのドラゴンたちにも美味に感じられるようなものに一部を改良してもらったのだ。ただ、それは少し語弊がある。品種改良前のドラゴンアップルが普通のドラゴンたちの口に合わないというわけではない。そもそも飲食をしないドラゴンも多数いる。人間は、何かを口にすることでエネルギーを得ている。だが、ドラゴンは違う。力の塊である龍種は、自身の体内で勝手にエネルギーが生産される。よってかなり偏食な奴もいるわけだが。今回タンニーンに頼んだ品種改良は、ドラゴンアップルを主食とするドラゴン向けであるドラゴンアップルの原種を全てのドラゴン向けに、オールマイティーにしたわけだ。かといって、特別見た目は変わっているわけではない。

俺はドラゴンアップルを収穫していく。ドラゴンアップルの木々はもちろんドラゴンと名前に付くだけあって人間を遥かに見おろすほどの大きさをもつ大木である。その実も、人間界のリンゴとは比にならない大きさだ。しかし、今回はさらに品種改良してもらって、人間界のリンゴのサイズレベルまで小さくしている。家には人間の姿のドラゴンしかないからだ。それに、このサイズなら保存、加工も楽ちんだ。今までは少し苦労していたが、これで、お菓子やジュースに簡単にできるからうれしい。

「ドライグや妹たちに振舞うのか？」

収穫している俺の姿を見ながらタンニーンは俺に尋ねた。

「ああ、まあな。タンニーンもどうだ？いつも妹たちはおいしいって言ってくれて評判なんだぜ」

「おお、それは是非食べてみたいものだ。俺のもとにいる者たちにも」
「ああ。わかった」

俺はこのドラゴンアップルで作るものを考えていると、俺のところ

に近づいてくるものが一人。

「あ、イツセー。こつちに来てたんだ」

「ああ、アーシヤ。久しぶりだな。」

ゴスロリドレスを見にまとい、こちらにスタスタと歩いてくる美少女が一人。背は小中学生くらい。ユキやアウローラより上つてころだ。容姿端麗なのは言うまでもないが、それに加えて雰囲気も普通ではない。綺麗な紫色の髪で、サイドを後ろで結んだお嬢様結びの髪型。澄んだ鮮やかな赤い瞳。幼さの中にも気品がある。この子の名は、アカーシヤ。俺はアーシヤと呼んでいる。この子とはある人物の実の妹。これが公表されたら世界を大混乱させる。それくらいとんでもない存在である。

「あ、お兄ちゃんたち、こつちに来てるよ?」

「そうなのか。あいつら、今何してるんだ?」

「さあ? たぶん暴れてるんじゃない?」

あいつらとは、俺が昔に遭遇し、死闘を繰り広げた腐れ縁。以来戦つては互いに強くなっている。それなりに付き合いは長いほうである。

「ふん、全くあいつらは……あいつらレベルのやつらが暴れられたらこつちもたまつたものじゃない。一人はいいとして、もう二人はな……このドラゴンアップルがある地で暴れられなければいいが。」

「心配すんなよ、タンニーン。あいつらの手綱は、俺が握っておくさ。うまい具合にあいつらのガス抜きをしておく」

「ああ、頼むぞ、イツセー。もはや、あの存在を三人も手なずけているお前が全ての希望だ」

龍王であるタンニーンがここまで邪険に扱うほどだ。もちろん、三人ともとんでもない強者だ。それこそ、今のタンニーンでは太刀打ちできないほどに。

「ああ。これの収穫が終わったら、久しぶりに顔を見に行きさ。タンニーン、悪いが、見せたいものは後で頼む」

「承知した」

「それじゃあ、私はユキやアウローラたちのところに行ってくるからね」
アーシヤはユキやアウローラ、ルルたちをほんとの妹のように可愛がっている。俺としてもうれしいものだ。よくできた子であるユキやアウローラもアーシヤには甘える面もあるのだ。
「そうしてやってくれ。みんな喜ぶよ」



ドラゴンアツプルを収穫したあと、俺はドラゴンアツプルがある農地から遠く離れた場所を飛んでいる。この世界は人間界にあるような環境をベースとしている。だから、危険地帯もある。見えてきた。目には火山地帯が見られる。その地帯に近づくにつれ、とてつもなく強大な邪悪なる気配が三体。俺は空中に停止した。噴火を続けている。そんな時だった。

カッ!!

俺の足元に十数個の突然魔法陣が出現する。その魔法陣からは手のようなものがわんさか現れ、俺の体をガツチリと掴み、動けないように拘束される。

「チッー」

バリイン!!

俺はこの厄介な魔法に舌打ちしながら、俺の対抗魔法術式破壊で魔法陣そのものを破壊する。簡単に破壊できたものの、この魔法は強度、規模、威力ともにあの時日本で戦った魔女の夜の魔法使いとは比にならないものだ。魔法は破壊できたが、油断はできない。すぐに次の魔法陣がこちらに攻撃してくる。その攻撃は炎、氷の槍、光、暴風などの様々な属性の魔法攻撃。さらにその魔法は全て威力は計り知れない。あれだけの魔法を高い質で放っている。俺はそれをとっさに避ける。あの手に拘束されていたままでは確実に当たっていた攻撃であった。

カッ!!!

そして、先ほどの攻撃はまるであいさつ代わりと言っているような魔法陣が現れる。俺の周囲、三百六十度、四方八方をおよそ六桁といった数の魔法陣が取り囲んだ。これぞ、八方ふさがりというべきか。それだけでない。空中にいるものだから、下そして上からもだ。魔法陣全てからはすぐに紫色の槍が飛んでくる。当たれば無事ではいられないレベルの槍が六桁！俺は白龍皇との戦いで使った魔法、^{ブースト}倍加を使い、自身の力を上げる。これは、もちろん、赤龍帝の力だ。ドライグを神器から解き放った時、これを使えるようひそかに特訓しておいた。最初は自分の力を倍にするのにそれ以上の魔力を消費して割に合わないものだったが、改良を重ねた結果、ほぼノーリスクで使えるようになった。ただ、これを含めた赤龍帝の能力を模倣魔法を使いながら、他の魔法を発動するといった同時発動マルチキャストはできない。

俺は光速で飛んでくる槍を防御結界で守りながら、魔法陣を分解していく。

ドオオオオオオオオオン!!!!!!
槍が俺の防御結界に当たつて！一斉に大爆発を起こす。

なんとか、耐えきったか。とつさに倍加魔法を発動しなければ危なかった。

「ハハ!!やはり、イッセーには不意打ちは通用しないか!!」

煙が立ち込める中、俺の背後に楽しそうにしている声が聞こえた。

この魔法陣を発動させた張本人だ。

「まあ、むしろこれくらいは当然だろう」

「フツ……」

俺が振り返ると、三人の人物が俺と同じ宙に浮いていた。この三人が、俺が言っていた腐れ縁。邪悪なる存在。人間の姿をしているが、もちろん、人間なんかじゃない。いわゆる、邪龍だ。

「よお、久しぶりだな。にしても、不意打ちとはやってくれるな、お前ら」

「ハッ！よく言うぜ。全て無効化してくせによ」

「さあ、始めようか……」

俺たちは一斉に互いに距離を詰めた。お互いは敵どうし。自分以

外がだ。こうして俺を含めたこの四人でのバトルロワイヤルがスタートしたのだった。

NO, XL 激闘、邪龍

ドライグSIDE

「ふう……まさか、あんなに囲まれるとは思わなかった……」
私はイッセーと別れた後、タンニーンのもとに身を寄せているドラゴンたちに囲まれ、まるで、よく見る人間のアイドルが町を歩いて身バレした時のように見せ物になった。私があんなことを体験するとは思わなかった。慣れないことをしたせいも、少し疲れた。

そこら辺にある平らな石の上に腰かけていると、ティアが私の隣に立つ。

「なんだ？ドライグ。そんなに疲れたのか？」

「そりゃあ、ね……」

「お前、知らなかったのか？赤龍帝ドライグはドラゴンの中では有名中の有名だ。雌ドラゴンで、あそこまでの強さまでたどり着いた唯一の個体。あこがれる者は数多くいたのだから。目の前に現れたらあれくらいにはなるさ」

「そ、そうだったんだ……」

私はティアにそう言われて驚いた。そこまで知名度があつたことに。昔の私は、そんな名誉だとかそんなことは考えていなかった。ただただ強さを求めていたから。白龍皇、アルビオンを倒し、二天龍の天をただ求めていただけだったから。

「ま、私もそのうちの一人だからな」

「え？そんなの？」

驚いた……ティアとは付き合いが長い。私が滅ぼされる前にもいい友人として居てくれた。そんなそぶりは見せなかったけど「ああ。ドライグとは、昔から友人としての付き合いがあつたが、それと同時にあこがれも尊敬もあつたさ。同じ雌でそこまでの強さに到達していたお前にな。私は、そんな友人がいて幸せだぞ？今も昔もな」

「ティア……ありがとう」

私がそう言うとティアはニコツ、と笑みを浮かべた。ティアには昔

からよくしてもらってる。同じ雌として通じる面もあったけど、時には助け合ったり、時には一緒に笑いあったりした仲。白龍皇との決戦に備えて彼女の宝具や伝説の武具の数々を貸してもらったりもした。だけど、私は三大勢力のやつらに滅ぼされて借りた武具は返せずじまい……。彼女に会ったなんて言って謝ったらいいのかといつもいつも神器の中で悩んでいた時もあった。でも、イツセーに復活させてもらって、いざ彼女と出会ったら、彼女は、ティアはこういつてくれた。『あんなものはどうでもいい。ドライブがこうして私のものにもどってきてくれたならそれで充分だ』って言って、抱きしめてくれた。私は涙が出た。大切な宝をなくした私をただ温かく迎えてくれたティア。私もティアと友人で入れてよかった。本当に。

まあ、ティアに借りた宝具や武具はイツセーと協力して全て無事回収したけどね。あれはあれで楽しかったな。ティア、私、イツセーの三人で世界中を駆け巡ったのは。結構バラバラに散らばってた。人間の盗賊団や異界の者たちのところにまでね。そんなこともあったなあと思うと、自然と笑みがこぼれる。

「どうした？ドライブ。そんな嬉しそうに笑って」

「ううん。ちよつと昔のことを思い出してただけ」

「そうか」

久々にこの二人で会話が弾む。滅ぼされる前のことを思い出させる雰囲気だった。そんなとき、私たちの前に小さな美少女が歩いてくる。

「あ、ドライブさんにティアさん。久しぶり」

「あ、アーシャじゃない」

「久しぶりだな」

この子はアーシャ。紫色のキレイな髪にお嬢様結びがとてもキュートな子。本当に可愛い。思わず抱き着いちゃいたいくらい。「うん。それで、ユキやアウローラたちはどこにいったの？私、可愛い妹たちの顔を見に来ただけど……」

アーシャはユキたちを本当の妹のように可愛がっている。それゆえにユキ達もアーシャには甘えている。ちよつと、愛情を込めす

ぎている気がしなくもないけど。

「あの子たちは親の元へいつているぞ。だから、今はここにはいない」
アーシャの問いにはティアが答えた。

「そう。なら、あの子たちがここに戻ってくるまで私も待つてようかな」

「それがいいわね」

そう言つて、アーシャも平らな石に座る。しぐさの一つ一つが可愛すぎる。私を誘惑してるのかしら？私の視線に気づいたアーシャは私にニコツつて笑顔を向けてくる。なんて純粋なんだろう。私の邪な視線を全く疑つていなかった。

「あ、そうそう。ここに来る前、イツセーに出会つたわ」

「そうなの」

「うん。といつても、すぐにお兄ちゃんのもとへ行つちやつたけどね」
少し残念がつているアーシャ。もう少しアーシャもイツセーとお話ししたかっと思ふ。イツセーは戦いになつたらさすがに突つ走るんだから。

アーシャには、一人の兄がいる。義理ではなく、実の兄。それも、とんでもない人物だった。私も、ティアも、タンニンも、そしてイツセーも驚いていた。アーシャと初めて出会つたときは、とても衝撃的な出会いだった。

アーシャの兄は、今現在こう呼ばれている。邪龍、
ディアボリズム・サウザンド・ドラゴン
魔源の禁龍———アジ・ダハーカと。そして、アー
ディアボリズム・ユニゾン・ドラゴン
シャもドラゴンである。二つ名は、聖混の禁龍。アカーシャ———

「では、いまイツセーとあいつは戦つているのか？」

「うん。お兄ちゃんのお友達もいるよ？」

私はアーシャの応答が簡単に予想できた。ぜつたい、四人は暴れまくつてるでしょうね。



イツセーSIDH
ドン!!!ドドドン
ズガアアアアン!!!!!!!

この火山地帯に凄まじい打撃音と山が崩れていく音が鳴り響き、それによる衝撃波があたり一帯を駆け巡った。

俺を含めて、四人は互いにぶつかり合う。

「へっーんいつでもくらっつけ」

嬉々として大地を丸ごと更地にリフォームするくらいの魔法を放つ紫色と黒色が交じり合ったヘテロクロミアの男。邪龍と称されるうちの一体、ディアボリズム・サウザンド・ドラゴン魔源の禁龍、アジ・ダハーカ。千の魔法と禁術を操ったと言われるゾロアスター教に登場するドラゴン。その魔力と魔法力は俺と同等クラス。やつの放つ魔法で油断できるものは一つもありはしない。

アジ・ダハーカは俺だけではなく、他の二人にも魔法を放つ。奴が放ったのは、やつ特有の炎と俺と共通の魔法、ヘル・ブレイズ煉獄の炎。どちらも、脅威でしかないものだ。ヘル・ブレイズ煉獄の炎は実際にある煉獄に存在し続けている炎だ。触れれば最後、すべてを焼き尽くす。魂でさえも、だ。

俺はこの炎が魔法によって生み出されたこともあり、得意の分解魔法である分散霧消グレイシ・ライトで炎を分解して消し去る。

「いざかい……」

「闇よ……」

他の二人はその攻撃をもろともしない。

拳を横に薙ぎ払っただけで炎を消し飛ばした金色と黒色のヘテロ

クロミア、黒いトングコートを着た邪龍が一体。クレッセント・サークル・ドラゴン 三日月の暗黒龍、クロウ・クルワツハ。ケルト神話に登場する戦いと死をつかさどるドラゴン。自身の特有の死の能力を封印し、肉体をこれでもかと鍛え上げ、極め続けたガチ肉体チートドラゴン。こいつの拳を真正面から受けるのは最低三回以下にしたいというくらい。

もう一人は暗黒の闇を腕にまとわせ、炎を闇で包み込み、永遠に闇の中へと葬って消失させた褐色で黒い祭服を身に纏った邪龍。エクリプス・ドラゴン 原初なる晦冥龍、アポプス。エジプト神話の凶悪かつ邪悪なるドラゴン。強大かつ深い闇を司り、かつて太陽神ラーと戦った存在。もとは太陽をつかさどる太陽龍ドラゴンだったが、地獄に墮とされて闇の性質をもつようになった。

どいつもこいつもとんでもないほどの強さを持つ。ゆえに、こいつらを前にして一瞬の気の緩みも許されない。すぐに殺されるからだ。「ふん……ならば次はこちらからいくぞ」

クロウ・クルワツハはアジ・ダハーカに向かって拳を振りぬく。ただ、互いの距離は百メートルは離れている。しかし……。「ぐおっ!?!」

クロウ・クルワツハの攻撃はアジ・ダハーカに届いた。クロウ・クルワツハはその肉体ゆえに拳圧のみでアジ・ダハーカに攻撃を与えた。アジ・ダハーカは突然の攻撃に対応しきれず、地上に吹っ飛んでいった。間髪入れずしておれの目の前に急接近していた。

「くっー!」

「フンツ!!」

ドゴオン!!!!

クロウ・クルワツハの左拳を受け止める。ビリビリと凄まじいパワーが伝わってくる。この怪力つぷりは随一だ。クロウ・クルワツハはさらに裏拳、肘うち、手刀、ボディブロー、回転蹴り、ありとあらゆる近接攻撃を仕掛けてくる。とんでもなく素早くせに威力は人体破壊級。俺は全神経を集中させ、やつの攻撃を受け流していく。目で追ってたらやられる。クロウ・クルワツハの動きの気配を読むしかない。

ミシッ!

おれの肩から嫌な音がした。クロウ・クルワツハのパワーがとうとう俺の体に影響を及ぼし始めた。俺は即座にカウンターに出る。魔法を合わせた攻撃で、やつをひるませる。俺のこの瞬間に放った魔法ではひるませるのが精いっぱいだ。しかし、それで十分だ。この隙におれはやつの側頭部に蹴りをを入れる。

ガシィッ!!!

「!?」

だが、それほど甘くはなかった。クロウ・クルワツハはそれを読んでいたのかのように左手で俺の足をガツチリと掴んでいた。

「うおおっ!!!」

クロウ・クルワツハは俺を勢いよく投げ飛ばす。勢いが良すぎておれは地面を破壊。地面にめり込んだ。それと同時にもう一回地面に人が落ちる音がした。アジ・ダハーカだ。気配から察するにアポプスの闇で飛ばされたらしい。しかし、そんなことを気にしている場合はなかった。クロウ・クルワツハは追撃で俺のもとに猛スピードで接近してくる。俺は砂煙に隠れながら魔法を放ち、これ以上近づかれないうようにけん制する。

「ッ!!」

俺の魔法が唐突に目の前に現れたクロウ・クルワツハは俺への接近をやめ、その魔法を弾く。クロウクルワツハの足止めに成功する。しかし、俺は新たな攻撃を察知する。

「クソッ!!」

ドオオン!!

俺は素早く地面から離れた。俺の落ちた場所には闇の塊があった。アポプスの攻撃だ。俺はアポプスの方に視線を向ける。

カツ!!ドゴオン!!!

すると、アポプスはアジ・ダハーカの魔槍で吹き飛ばされる。

これは自分以外が全員敵同士。ゆえに一瞬たりとも気は抜けない。隙を見せたら三人の誰かに攻撃をされる。誰も動かなくなるのが普通だが、こいつらはそれを知ってて攻撃している。誰かれ構わず目に

映ったものを攻撃しているのだ。

俺はアポプスに一撃を加えたアジ・ダハーカと、逆襲としてクロウ・クルワツハに魔法を放つ。魔^ポを穿^グつ光^{レイ}槍。魔に対して絶大な効果をもたらす。邪龍には悪魔ほどの効果はないがな。アジ・ダハーカとクロウ・クルワツハを白い光槍が襲う。光槍はアジ・ダハーカの皮膚を切り裂き、血が噴き出す。クロウ・クルワツハは拳で光槍を砕く。全く効いてなどいない。アジ・ダハーカに至ってはすでに傷が再生されている。

この程度ではこいつらにはダメージは与えられない。ここで、吹っ飛ばされていたアポプスがすでにこちらに戻ってきていた。

「間違いなく、こいつら……また力を上げてきやがった」

俺は内心確信していた。この邪龍たちはあの時遭遇してからというもの、力を単純に伸ばしてきた。新たな境地に至ってからさらに成長している。

聞いた話ではあるが、邪龍たちはもともとそこまでの力はなかったらしい。龍王クラスを少し超える程度であったという。だが、戦いに戦いを重ね、新たな敵を見つけたことで力を上げたんだ。

四人が互いに距離をあげて向かいあう。

「やはり、この程度では効かんか」

「そろそろ本気と行こうぜ」

俺を含めて全員の左腕に魔法陣と文字が現れる。そして、その魔法陣と文字が消える。その瞬間、先ほどとは比較にならないほどのパワー、気配、威圧感がこの地域を支配した。今まではホンのお遊び。力をセーブしていたからだ。かくいう俺も、その制限を開放する。俺の体からあふれ出る魔力が周囲に影響を及ぼし始める。やつら三人も同様に周囲に影響が出ている。大地が震え、火山の噴火が加速する。

互いに牽制しあう火山の噴火音がする戦場。

俺は先手を取り、三人全員に攻撃を仕向ける。

キーン！

三つの特殊で巨大な魔法陣がアジ・ダハーカ、アポプス、クロウ・クルワツハの目と鼻の先に現れる。そこから俺の主力魔法、カルネージ・ストライカー広域殲滅魔道収束砲を放つ。この至近距離ならば、避けることは容易ではないはず。強大な光源が三人を包み込んだ。

ドオオオオオオオオオオン!!!
はるか遠くでカルネージ・ストライカー広域殲滅魔道収束砲が地を破壊する音がここまで伝わる。手ごたえは十分だ。二つだけならば。

と、その時だ。俺の背後に一人の気配を感じた。

「フンツ!!」

「クツ!!」

ドガツ!!!

俺は背後から放たれた拳をギリギリ防御魔法でガードした。やはり、クロウ・クルワツハは捉えきれなかったらしい。素早さ、パワーでは断トツの邪龍だ。

ピシッ!

俺の防御魔法にひびが入る。俺の防御魔法が立った一撃でこれだ。次は破壊される可能性が高い。クロウ・クルワツハは隙も与えず裏拳を放ってくる。俺はそれを肘でガードする。が、それは囮でやつは蹴りを入れる。

「グハア!!」

俺のみぞおちに蹴りが決まり、俺は吐血する。体勢が崩れたところに俺はさらに連打を浴び、下に叩き落される。速すぎる。知覚系の専用魔法を使わないとやつの攻撃がかすかにしか見えない速さだ。気配で動きを読むことが出来ていても避けるのは容易ではない。俺が地面から起き上がった時にはクロウ・クルワツハは早くも追撃に入っていた。俺はそれを拳で迎え撃つ。そして、とある魔法を発動させる。

ガクン!!

「!?」

クロウ・クルワツハに異変が起きる。それは本人の表情からも分かることだ。クロウ・クルワツハのパワーが半減したのだ。当然速さも

半減する。半減されれば十分捉えきれぬ。俺は先ほどのお返しに連打を浴び得続ける。

「グッ!!」

もちろん、この間にも俺の魔法でクロウ・クルワツハのパワーが半減され続けている。最後にドロップキックでやつを俺の眼の先にある火山へぶつ飛ばす。

ドガアアン!!!

クロウ・クルワツハが火山に突っ込み、山の中腹が崩壊する。

が、あらぬ方向からの攻撃を察知し、俺は腕でガードした。攻撃が俺の腕に当たった瞬間、爆発が起こり、煙が発生する。攻撃が飛んできた方向、正面にはアジ・ダハーカとアポプスが宙に浮いていた。この二体は禁術や魔術、魔法に関してはとんでもないほどの知識量、技量を持っている。クロウ・クルワツハとは対なるものだ。先ほどの攻撃を喰らったはずだが、あまり効いてはいなかった。アジ・ダハーカは得意の魔法で、アポプスは闇を展開してガードしたらしい。アポプスの体を闇が覆っていた。厄介だ。

「にしても、イツセーの魔法はえぐいなあ」

「アルビオンの半減を再現するとはな……」

俺の魔法をアポプスとアジ・ダハーカが称賛する。先ほどクロウ・クルワツハに浴びせたのは半減魔法。ドライグの倍加とはまさに正反対の魔法だ。ドライグの倍加をさせるようになったあの日、倍加が出来るならその反対もできるはずだという仮説を試したが、案の定できたわけだ。相手の力を半減させる。本当に恐ろしいものだ。

「知っているなら、お前たちもその恐ろしさがわかるだろう」

俺は今度は逆に倍加魔法を用いて、自身を強化する。そして、そのまま、やつらに突進する。

「ハアツ!!」

アジ・ダハーカの懐に入り込み、倍加で強化した状態で近接攻撃をする。アジ・ダハーカは魔法を放とうとするが、遅い。この距離は魔法よりも格闘の方が断然早い。

ドゴオ!!!

「グハッ！」

拳が鳩尾に入る。間髪入れずにおれは格闘をアジ・ダハーカに入れ続け、地に叩き落す。

が、背後から攻撃が来る。アポプスの拳が俺に向けられる。俺は氣配のみで察知し、振り向きざまに右腕で撃ちに行く。

ガッ！

アポプスの左腕と俺の右腕がかち合う。アポプスは武術、近接格闘についてはかなりの猛者だ。しかし、クロウ・クルワツハほどのパワーと速さはない。俺はすかさず左の拳で攻撃する。

グオン！！

しかし、俺の拳はアポプスには届かない。奴は、闇を展開して俺の拳を防いでいた。さらには……

「くッ……！」

俺の腕がどんどん闇に飲み込まれて行っている。抵抗してもビクともしない。むしろ飲み込まれていく速さが増していった。

アポプスは黒い笑みを浮かべながらこちらを見ている。アポプスの闇がさらに深淵という言葉にふさわしくなっていた。昔はこんな凶悪ではなかったのだが。

「だが、永遠に闇の中でなんてごめんこうむるね」

ザシュツ！！

俺は自身の腕を切断してすぐに離れる。

「まだだ……」

しかし、それだけではなかった。俺の周りには巨大な深淵の闇がいくつも宙を漂っていた。

グイツ！

アポプスがそれら进行操作し、すべて俺へと向かってくる。

アポプスのこれは基本対処方法が存在しない。唯一ある方法は闇とは対なる力。太陽のような恒星由来の力、もしくは闇を打ち消せるだけの圧倒的な光だけだ。

「………ドラゴニック・グリッター龍炫の覇煌」

カッ！！！！

対アポプスの魔法、龍炫ドラゴニック・グリッターの覇煌がアポプスの操りし闇を完全に打ち消していく。この光の量ならば、アポプスの闇を相殺するくらいはできる。この光の特性故、この魔法はやつには一定の効果がある。倒せないのは当然だが、ひるませることくらいはできる。

「ハアッ!!!」

アポプスが視界を奪われている隙に魔力を上乗せした連撃を浴びせる。

ドツツゴオオオン!!!

アポプスは俺の連打を浴び、地面に叩き落される。俺はその際に自身で千切った腕を再生させる。欠損状態でも、この再生魔法ならば問題ない。治癒魔法とは根本が違うからだ。しかし、流星はアポプスにアジ・ダハーカだ。あの攻撃でも全くダメージが入ったそぶりを見せない。すぐに立ち上がってこちらに向かってくる。その時だった。

ゴウツ!!!

崩れた山の中腹から特大の炎が立ち上がった。その炎ははるか上空まで達していた。金色と赤い炎。その炎で山が丸々一つ消し炭になっっている。クロウ・クルワツハの炎だ。クロウ・クルワツハはその特大の炎をおれつを含めて三人に放った。一網打尽にする気だろうか。その炎は喰らえばもちろん無事で済むようなものではない。その炎は喰らえばもちろん無事で済むようなものではない。

「クソツ……面倒だな」

アジ・ダハーカがそう吐き捨てる。これだけの大量の炎を無効化するにはかなり大変だ。アポプスも口にはしていないが同じことを思っているはずだ。

俺はこの炎に対抗して特大の魔法を放つ。

「絶対氷結」
ヴァリアブル・シエル

炎には温度の低いものをぶつける。シンプルにして効果絶大。これは絶対零度の氷をぶつけ、すべてを凍らせる魔法。また、この魔法の影響で空気中の窒素などが昇華してしまう。これも魔法の副産物だが効果はある。ちなみにこの氷は永久に温度が変化することは無い。

俺の放った極大の魔法でクロウ・クルワツハの炎が丸ごと凍結する。アジ・ダハーカは極大の氷属性の魔法で俺と同じように丸ごと炎を凍結。アポプスは極大の闇で炎を葬り去る。クロウ・クルワツハはもちろん防がれることを予測していたのか、炎をおとりにして急激に距離を詰め、俺の懐に入りこんできた。大魔法を放ったスキを突かれていた。クロウ・クルワツハは拳に大質量のオーラと炎を纏わせ、その拳を思いつきり振りかざす。

ドゴツ！バキツ！！

クロウ・クルワツハの一撃一撃が重い!!おまけに炎を防ぐためにこちらも魔法を展開しているが、破られてもおかしくない。

「グッ!?!」

俺の魔法がやつのオーラと炎に押されてたが、遂に破られ、俺の腹に突き刺さる。その重すぎる攻撃で俺の内臓が圧迫を受け、内部の空気が押され、口からそれが勢いよく飛び出す。先ほどクロウ・クルワツハに掛けた半減魔法だが、力がもう既にもとに戻っていた。俺はやつの濃密なオーラ、そして重く、鋭いこうげきによつて吹き飛ばされる。吹き飛ばされた先には火山があり、俺は中腹に激突。優々表面の中腹を破壊し山にめり込んで瓦礫に埋もれる。

俺は生き埋め状態になっている体を起こし、自身を覆っている瓦礫を吹き飛ばす。上空を見ると、クロウ・クルワツハとアジ・ダハーカ、アポプスたちが乱戦を繰り広げている。俺はそれに加わるためにすぐに急行しようとする。

が、俺の頭の中にある方法が思い浮かんだ。

「.....やってみるか」

俺は火山の方を向いて、試してみる。

念動力という力がこの世界には存在する。それを見習って、魔法で再現する。俺は倍加魔法で自信を強化させ、ありつたけの力を指先に集中させる。火山の内部に干渉し、内部にある溶岩を魔法で操作して地下に埋まっている分すべて丸ごとごとっそりと抜き去る。

「何!?!」

戦っていたアジ・ダハーカたちがこちらに気づいてこちらに視線を

向けた。アジ・ダハーカたちの上には巨大な溶岩の塊が浮いているからだ。これだけの質量を持つ溶岩を空中にとどめておくのはかなりの魔法力に加えて魔法の強度なども必要だ。

「くらつとけ!!」

ドツパア!!!

俺は溶岩を空中にとどめていた魔法を解き、頭から溶岩を滝のように流した。

ジュージュー……

溶岩が地に落ち、大地を焼く音を立てる。溶岩を全て流し終わったが、宙に浮いている三人。

「結構、効いたぜ……」

「やってくれるな……」

アジ・ダハーカとクロウ・クルワツハはあたかもダメージを負ったかのように言った。しかし、あの量の溶岩を全身に被ってもなお、戦うだけの力を残している邪龍三体。皮膚に軽いやけどを受けたただけだった。

「そつちこそ……溶岩掛けられて火傷だけとか、どんだけ頑丈なんだよ」

「邪龍は……しぶとさが取り柄だ」

アポプスが闇を展開しながら言う。ただの闇ではなかった。空を闇で覆い始めていた。

切り札を出すつもりだ。

アポプスだけではなかった。アジ・ダハーカはとてつもない数の魔法陣を展開させていた。さらに、その魔法陣がだんだんと凶悪なものになっていく。ドクロの形をした呪焔、当たれば呪詛に毒され、体に異常をきたして死に至るような暴風、吸い込めば呪殺は免れない瘴気、ヒュドラを思わせる凶悪な毒をもつ大蛇、暗黒色の雷など、不吉でしかない禁術の魔法だ。

クロウ・クルワツハは自身の身体に超高密度の闘気を纏わせた。闘気とは、この世界において一部の妖怪がつかう仙術の発展形。いつの間にかこんな覚えたんだ……。闘気や仙術を使う本家の妖怪と

比べ物にならない気配なんだが。にしても、お得意の死の能力は使わないつもりらしい。

切り札を投入してきた奴らに対抗するため、俺もここで特大の魔法陣を出現させる。

「さあ、最終決戦といこうぜ」

「我が禁術、原初の水を喰らうがいい……」

「……………当たらなければいいだけの話だ」

「やってみろよ、クロウ」

切り札を放つ前に軽口をたたき合う邪龍三人組。

「行くぜ!!」

全員が一斉に攻撃を仕掛ける。俺も力を込めた魔法を一気に解き放つ。

俺たちの目の前には、極大の光が俺の瞼に突き刺さった――

NO, XLI 訪問

イツセイSIDE

「ふう……朝か……」

いつの間にか日の光が俺を照らしている。太陽ももうすっかり上っていた。

俺はベッドから体を起こした。

あの戦いは思いもよらぬ展開で幕を閉じた。

『あ、こんなところにいた！。もう!!お兄ちゃんたちはいつまで戦ってるの!!』

アジ・ダハーカの妹、アーシャの登場によってだ。アーシャは普段いかないような火山地帯に顔を出し、俺たちの戦いをその一声で止めさせた。普通ならば戦いに水を差されることを最も嫌うドラゴンはその水を差した存在に怒りをあらわにするはずだ。特にこいつらドラゴンの中でも単騎で戦いを挑む邪龍ならなおさらのこと。しかし、アーシャだけは例外である。アジ・ダハーカの妹という存在というのも理由の一つである。が、それ以上に存在そのものが理由だろう。アジ・ダハーカの妹ではあるが、その本当の正体はゾロアスターの善と悪を体現する二体ドラゴンの間にできた聖と魔、善と悪の混合を体現する唯一の存在。

ドラゴンであるが、戦いという戦いの経験はほぼ皆無ではある。しかし、その内側に秘める力と可能性はまさに無限大。計り知れないほどの強さを秘めている。俺の推測では無限、もしくは夢幻に匹敵する可能性がある。が、両親には戦いから離れた世界で育てたのと、同じく両親に加えてアジ・ダハーカが妹を戦わせないという無自覚なシスコンつぷりを発現しているため、現時点では強くはない。まあ、アーシャとて凄まじいブラコンぶりを発揮しているがな。傍から見ても明らかかなほどに。

そんな理由で戦闘狂の末路であるクロウやアポプスでさえも中断せざるを得なかった。アーシャに攻撃すれば、その兄貴が黙っていない。戦いの後はアーシャはアジ・ダハーカと一緒に時間を過ごしてい

るだろう。それだけじゃない。クロウやアポプスも共にいる。アーシャはアポプスやクロウのことをアジ・ダハーカの友達っていう認識でいる。まったくもって笑えない。あいつら三人が共にいるなんてことはna。

俺は先日のことを回想しながらリビングの方へと向かった。

「おはよ」

リビングにはもうすでにティア、ドライグ、伽耶とあと珍しいことに人間の姿に変態したタンニーンがいた。

「あ、イツセーおはよ。」

「ん、起きたか」

「おはようございますー!」

ティアとドライグと伽耶がそう返してくれた。客人であるタンニーンが来ていたのだが、三人がすでに出迎えてくれていた。

人間の姿になったことでより鮮明に感情が読み取れるようになったタンニーンだが、呆れていた。

「全く。やっと来たか。俺はこの三日間何度も足を運んだのだぞ?三日間もぶっ続けで戦いおって……」

温和なタンニーンは滅多なことでは怒りをあらわにすることは無い。今回は怒りというより呆れが大きいようだった。

「ああ……それはスマン、タンニーン」

俺は反論の余地もなくただただタンニーンに謝るほかなかった。

「フン。ま、そんなことは今に始まったことじゃないがな。それは置いておいてだ。先日、イツセーに見せたいものがあると言っただろう?」

「ああ。確かにな」

そのことは覚えていた。すっかりとな。確かタンニーンに案内してもらおうというはなしだったはずだ。

「今日、その場に行くぞ」

「了解」

俺はタンニーンの言う通り、その案件を承諾した。しかし、寝起き

だったために申し訳ないが少し待ってもらおうことにした。



それから数十分後。俺は起きて支度をしてから家を出て再度森林の中を歩いてゆく。そして、ワームホールを開いて目的地のある世界へと入る。アナザーワールドに入ると人間の姿をしていたタンニーンが元の真の姿へと変える。タンニーンは人間態よりも自身のありのままの姿の方がしっくりくるということらしい。本人曰く。よって人間態になるのは俺の家を訪れる時くらいだ。

タンニーンとともに移動すること少々。巨大な木、ドラゴンアップルが見え始める。そのドラゴンアップルの栽培地をどんどん進んでいく。タンニーンの背中をひたすら追っていく。そして、農園のもつとも奥のほうへと案内された。

「タンニーン、これは……?」

目の前にある物体に目をくぎ付けにされる。巨大な木に実っている立派なドラゴンアップル。しかし、今までのドラゴンアップルとは全く違っていた。

「イツセー。これが見せたかったものだ」

タンニーンが腕を組みながら自慢げに言った。

「これは、ドラゴンアップルを品種改良してさらに味を上げたもの。試作品ではあるが、一応名前についてはある。見た目通り、ゴールデンドラゴンアップルだ」

「ゴールデンドラゴンアップル……?」

目の前にある輝きを放っているリンゴ。赤ではなく、金色のドラゴンアップルであった。

この金色に輝くドラゴンアップルに目を奪われる。

「凄いな……タンニーン。もはやこんなものまで創り出すなんてな……一体どちらがうんだ?」

俺はこの興味深くてたまらないゴールデンドラゴンアップルについて知りたくて仕方がない。

「ふむ。これは三日ほど前にイツセーを案内した全ドラゴンが食べられるドラゴンアップルと同じく、誰でも食すことが出来る。さらに、味も向上している。特に、糖度については通常のドラゴンアップルの二十五パーセントアップしている。さらには、ドラゴンの傷を癒し、力を与えることもできる薬としての効果もある」

「それもうなんていうか……とにかくスゲエな」

俺はタンニーンの説明を聞いて言葉が出てこない。味については当然のことだが、まさか傷をもらやせるような効果もあるなんてなあ。

「なんでも研究班の自信作だそうだ」

研究班もタンニーンのところにいるドラゴンたちだ。さらにタンニーンの長男と長女もそこにいる。二人は優秀で、学者気質だ。戦闘はあまり得意としていない。戦闘のボーヴァに頭脳が特化している長女と長男。全く、タンニーンの子息たちは様々に秀でているな。

「なるほどな。タンニーンの長男と長女も携わったのか？」

「ああ。大いに関わっているぞ」

「凄いな。タンニーンの子息は優秀だな」

「そう言ってもらえるのなら、親としてもうれしいものがある」

タンニーンは自分の子供の成果をまるで自分のことのように喜んでいる。いい親だな。そこには、人間もドラゴンも、ほとんど変わらない親としての情があった。

「それで、ゴールデンドラゴンアップルは、この一本の木だけか？」

俺はこの目の前にある木を見ながら尋ねた。

「ああ。そもそも、この品種改良もろもろにはそれなりの年月がかかっていてな。残念だが、これもまだ試作段階。この一本しかまだできていないのだ」

「そうか、良く分かった」

俺は再度、このゴールデンドラゴンアップルを見る。

そして、俺の頭の中にはとある新たな研究材料が見つかった。

「ありがとな。タンニーン。おかげで、また新たな研究の題材を思いついたぞ」

「ほう、それは是非聞かせてもらいたいな」

俺がそういうと、タンニーンはとても興味深そうにする。タンニーンは龍王としてその強さを誇るが、このようにドラゴンアップルとそのドラゴンたちに関わるようになってからは研究方面にもある程度精通するようになったのだ。

俺は今のところの考えをタンニーンに述べる。

「ああ。このゴールドデンドラゴンアップルの治癒効果から発展したんだがな、実はかなり前の悪魔との戦闘でそれはそれは興味深いものを手に入れたのだ」

かなり前というのも、俺がこうして今も生きている原因の魔法を放ったあの日のことだ。

「ほう、悪魔嫌いのイツセーが興味を抱く物とはなんだ？」

「ああ。実は、悪魔たちは傷が一瞬で元通りになるアイテムを精製、流通させているんだ。フェニックス不死鳥の涙というらしい。」

「聞いたことあるな」

タンニーンほど長い時を生きていたものなら知っていてもなんら不思議ではない。たとえば悪魔のことであろうと。

「だろうな。昔悪魔から鹵獲して一通り調べてみたんだ。それを応用すればドラゴン専用のそれが出来るかもしれない」

「ほう、それは興味深い」

タンニーンも関心を示した。

「タンニーン。そういえば、このゴールドデンドラゴンアップルは傷を治癒すると言ったが、一体どのレベルまで治癒するんだ？」

俺は疑問を投げかけた。

ひとえに傷をいやすといっても、レベルがある。まず大前提として、治癒というのは自然ならざる力。当然、魔術師は傷は癒すことはできない。そして、魔法使いは治癒魔法というものを持っている。普通の魔法使いが使える治癒魔法は精々切り傷をふさぐ程度。力の強い有名な魔法使いに至っては致命傷でも直すことが出来るということもあるだろう。ただ、欠損は別だ。無から有を作ることになるからだ。

「推測の範囲だが、おそらくは即死級や致命傷の傷でなければいけるだろう。ただ個々の生命力と力に左右される、欠損は直せないというのが俺の私見だ」

「なるほどな」

俺はタンニーンの答えにさらに思考を巡らせる。

欠損はたとえ治癒魔法でも直すことはできない。俺のあの治癒魔法は、アジ・ダハーカの禁術を教えてもらってから改良してできた代物。この世に欠損を治す方法など、アジ・ダハーカの禁術か力の強い神のみだ。

「さらに研究の幅が広がるな。欠損を治す、精神をいやす、体力を回復させるといった効果もつけることをやってみよう。」

「フハハハハ、それが出来ればもう申し分ないほどだ。だが、イツセーにはそんなもの必要ないだろう？ わざわざそんなアイテムなどを使わなくても、魔法でなんとでもなるのではないか？」

タンニーンは俺の実力のことを鑑みて言っているのだろう。俺とタンニーンは交流のある奴らの中でもっとも付き合いが短いドラゴン。とはいえ、お互いに戦った仲間でもあるわけだ。当然俺のことは良く知っている。

「なに、魔法使いとしての興味本位での研究の題材さ。仮に完成したからといって俺が使うわけではないさ」

「なるほどな、そういうことか」

タンニーンは納得したように首を縦に振った。

「ま、とにかくだ。タンニーン、今日は面白いものを見せてくれてありがとうがな」

「礼には及ばん」

タンニーンは少し恥ずかしそうにしながらそう言って、飛んでいった。俺はその大きな背中を見て、おれはこの場を去った。

あと、家について知ったことだが、タンニーンは収穫したままだったドラゴンアップルを俺の家にまで運んでおいてくれたらしい。また世話になってしまった。戦いのことに意識が行き過ぎるのも俺の悪い癖だ。あとでまた礼を言っておかなければ。



冥界。

グレモリー領の名もない山々がこの二十日間、どんどん高さが無くなつていき、平地となつていた。もともと、高々とそびえる山脈であつたのだが、激しい修行によつてもはや見る影もない。

ドオン!!!

「うおおおおおおおお!!!」

見るからに凶悪な魔力が一人の少年を襲う。少年は悲鳴を上げる。ただ、幸いなことに少年はそれを超ギリギリのところで避けていた。しかし、それだけでは終わらない。少年は平地をひたすら走つていく。その上空には悪魔の翼を展開して宙を飛びながら少年を追いかける。

「ウフフ、ほらセーイチ君! まだまだ行くわよお?」

十枚という翼を展開しながら凶悪な魔力を少年、布藤誠一に対して容赦なく撃つていく。

「やべええええええ!!!」

セーイチは叫びの声をあげながらも間一髪のところまで全てを避けていた。放たれた魔力によつて地面がどんどんえぐられていく。

「あのようなギリギリで避けていては、実戦じゃあぜんぜんだ」

ドゴオ!!

セーイチの前に突如として現れた男にパンチをもらに喰らうセーイチ。

「グハアッ!」

そのパンチの勢いでセーイチは後ろに二十メートルほどぶっ飛んだ。あおむけに倒れこむセーイチ。よく見れば、セーイチはボロボロだった。もはや意味をなしていない衣服。泥だらけ傷だらけの体。

それらが、この修行の激しさを物語っていた。

「……まだまだ」

セーイチは立ち上がる。その目は、いまだにセーイチの目の前にいる二人の悪魔に向けられている。その燃えるような瞳が、今だ心が折れていないことを表していたのだった。

「ほう、まだ立つか」

「あつたり前ですよ！さんざんやられたんだ！これくらいなら慣れましたよ。それに、俺はこの程度では諦められねえ！強くなるって誓ったんだ！」

セーイチは自分の決意をさらけ出す。その言葉に悪魔は称賛した。

「いいわねえ。かっこいいわあ」

「いい覚悟だ、クソガキ!!」

二人の悪魔はさらに激しい修行をセーイチに課す。セーイチはそれに必死に食らいついていったのだった。



「ハアツ、ハアツ、ハアツ、ハアツ……」

それから数時間後。セーイチはあおむけに倒れ、息を切らしていた。流石に、肉体に限界が来ていたみたいだ。

「クソガキ、これで俺たちからの修行はシメーだ。良くここまでついてきたな」

「お疲れ様、セーイチ君！」

女性はセーイチに手を差し伸べる。

「ソフィアさん、ベオグラードさん……ありがとうございます
ました」

セーイチは女性悪魔、ソフィアの手をつかんで立ち上がった。セーイチは嬉しそうにしながらも、やり切ったという表情をしていた。

「ねえ、セーイチ君？」

「はい？何でしょうかソフィアさん」

ソフィアはセーイチに思わせぶりの表情をしながら言う。何人の男を落としてきたのだろうか。それとも素でやっているのか。どちらにせよ、セーイチはソフィアに見とれていたのだった。

「セーイチ君。今までずっとこうして修行して、寝泊まりもここでしてきたじゃない？だからね、今日は私たちの家に泊まりに来ない？」

その言葉はセーイチをフリーズさせるには充分であった。

「ちよつ、姉上。何を言っているんです」

その弟、ベオグラードがソフィアに異議を申し立てる。しかし、ソフィアはその異議を即却下するかの如く反論する。

「いいじゃない。セーイチ君が今まで頑張ってきたのはベオだつてわかつてるでしょ？それに、セーイチ君以外の眷属は屋根のあるところで寝て、食べて修行をしてたわ。可哀そうじゃない」

「ええええ?!?!そんなの初耳ですよ、ソフィアさん!!」

自分の今まで二十日間の境遇を聞いて驚くセーイチ。無理もない。セーイチはこの二十日間、固い石の上で睡眠をとり、そこらへんの動物を狩って空腹を満たしていたからだ。救いだったのは主のリアスや先輩の朱乃からの弁当くらだったのだ。

「でしょ？だから、セーイチ君を私たちの家に招待しちゃいます！」

「うおおおおお!!!!あのサタン様のご自宅に行けるなんて!!」

ソフィアの宣言に完全に酔いしれているセーイチ。あこがれていたサタン家に行けるということに舞い上がっている。それと比べてベオグラードは面白くなさそうな顔をしていた。

「姉上、ほんとにこのガキを連れて行く気ですか？」

「もう、しつこい。それに、いつまでベオはセーイチ君のことをガキ呼ばわりするの？いい加減名前を呼びなさい。じゃないと私、ベオのこと、きらいになつちゃうんだから」

「うっ……..わかり、ました」

ソフィアには頭が上がりえないベオグラードであった。

「(ん？ベオグラードさんって、シスコンだったのか……..?? すっげえ落ち込んでいる)」

その会話をはたから見えていたセーイチは内心そんなことを思うのであった。



「おお．．．．．ここが、サタン家、ですか．．．．．」

セーイチ、ベオグラード、ソフィアはグレモリー領から飛び立った。そこから離れた場所、サタン領の中心から西に三キロほど離れた位置にあるサタン家にやってきた。セーイチはそのサタン家の家をその目で見て、疑問に思うものだった。

「あれ．．．．？でも、思ったよりも、広くない．．．．。確かに、すつげえ綺麗で見とれるけど．．．．むしろ、部長の家の方が広い．．．．」

セーイチはその隅々まで行き届いた庭や建物の綺麗さに目をむくも、それと同時にそのようなことを内心想っていたのだった。確かに、セーイチが見たグレモリー家はこれよりさらに広かった。サタン家は最上級悪魔で最も偉いという認識でいるセーイチにとってこれは不思議でならなかったのだ。

「セーイチ、お前。もしかして思ったよりも大きくない、とも思っているようだな」

そんなセーイチの思考を読んだかのようにベオグラードはセーイチに問いかけた。

「あつ、いえ!!別にそういうわけじゃないです!!ただ少し、その．．．自分が想像をある意味超えていたので．．．．」

凶星を疲れてついついぼろが出てしまうセーイチ。ポーカーフェイスは苦手なのだろう。

そんなセーイチを見てベオグラードはため息をつきながら言った。

「はあ．．．ま、気にすんなよ。そんなこと、いつものことだ。ほかの悪魔たちも、初めて来たときはそうだったさ。正直、最上級悪魔の

家、とは思えないだろう？ 上級悪魔であるグレモリー家でさえ、サタン家よりでけえんだからよ」

「ええ、まあ……」

「まあ、そうわよねえ……。悪魔たちは家を大きくすることでひとつのステータスにしているのよ。自分の地位や権力、力を示す。でもね、家つて大きければいいのかしら？ だいたい、私たちつて五人家族だからそこまで大きくする必要はないのよねえ。お掃除も大変だし。昔はもつとちっちゃかったのよ？」

「えつ、昔は……。もつと？」

セーイチは衝撃を受けた。それは、あまりにもほかの悪魔と価値観なるものが違っていたから。悪魔の貴族っていえば、それはそれは実力主義で、自身の力を顕示するようなものだという認識だった。サタンならなおさらだと思っていたのだ。だが、どうだ？ 実際に来てみればこんなにも、自分と価値観が近かったのだ。セーイチのサタンへの印象がここでもがらりと変わったのだ。

「さ、いきましょよ」

「は、はい」

三人は揃って玄関からロビーへと入る。そこにはとある人物が一人いた。

「お姉さま、お兄様、おかえりなさいませ。それと、そちらのどの方は？」

この姉弟と同じく、綺麗なピンク色のツインテールの髪をしている少女。背からして小学生と同じくらいの年齢の見た目だ。

「ただいま、シエリー。紹介するわね。こちら、今代の紅炎龍^{エヴォリユシオン・ドラゴン}児の布藤誠一君よ。」

「え、えつと、初めまして……。リアス・グレモリー様の兵士^{ポーン}やつてる布藤誠一です」

「リアスさんの……。初めまして、布藤誠一さん。私はシエリー・シエル・サタン。サタン家の次女です。どうぞ、よろしくおねがいします」

シエリーはスカートのすそを持ち上げ、お嬢様らしく挨拶をする。

その振る舞いはお嬢様として完璧であった。そのしぐさにセーイチは終始見とれていた。その部分はどこでもデフォルトである。

『全く……相棒君はこんな小さな子にまでその毒牙を……』
「(うつせえ、アグニル。可愛いもんは可愛いんだよ)」

彼の中に眠るドラゴン、アグニルもこの反応である。

セーイチははつと気づいてすぐに体裁を整える。

「気づいたらもうこんな時間ね。夜ごはんにしましょうか。」

「はい」

「そうですね」

「セーイチ君も、遠慮なく食べて言って」

ソフィアはウインクをしながらセーイチに言う。セーイチはまたもや先ほどと同じことをしそうになるがグツとこらえる。

「あ、すみません。ごちそうになります」

と、四人はともにダイニングに移動した。

「え？食事って、ソフィアさんが？」

ダイニングに移動した後、真っ先にセーイチは疑問を投げかけた。

「ええ、そうよ？」

「え？使用さんとかは……？」

「確かにいるけどね。でも、食事は基本私たちで作ってるの。」

「私ですよ？」

「俺もだ」

シエリーとソフィアはさも当然のように言う。

「そうなんですか!？」

セーイチはまたもやほかの悪魔とのギャップに驚愕をせざるを得なかった。セーイチが初めて冥界に来てグレモリー家でごちそうになったときには使用人が食事を作り、運んでいた。しかし、サタン家ではそんな悪魔の常識などなかったのだ。

「ええ。お母さんがいれば四人で。でも、お父さんとお母さんは仕事でいない時がほとんどなの」

「だから、いつも食事はお姉さまとお兄様と私の三人でとっているんです」

「そうなんですか……」

セーイチはどこか人間と似てる、そう思いながら食事を作っている三人を見ていた。



「凄い……」

それから数十分後。食卓にはずらりとならんだごちそう。どれもこれも食欲をそそるものばかりだ。

「い、いただきます。ん！おいしいです!!」

「そう？良かった」

セーイチはそのおいしさにフォークとナイフが止まらなくなる。

「はい、なんかこう……家庭的というか。すっごい温かいです」

セーイチはさらに料理を口に運んでいく。

三人も口に運んでいった。

数十分後、料理を食べ終え、入浴を済ませた四人はリビングでくつろいで談笑をしていた。

「凄いですね！セーイチさん、コカビエルに白龍皇。様々な強敵を相手にしていますわね」

セーイチの武勇伝を聞いて笑うシエリーに、それを笑顔で見守る姉弟。

そして、セーイチもソフィアとベオグラードに質問をした。

「そういえば、ベオグラードさんにソフィアさんに眷属っているんですか？おれ、挨拶とかしておきたいんですけど……」

セーイチは興味本位などで聞いた。しかし、返答はこれまた予想を反していた。

「セーイチ君。私とベオグラードは眷属は一人も持っていないわ。」

「ええ?!?!どうしてですか?」

ソフィアの言葉に驚きを隠せないセーイチはそのわけを聞く。

「簡単な話だ。セーイチ。それは

——
俺と姉上イヴァイルピースが悪魔の駒を持っていないからだ」

No, XLII 来訪者



「これでよしと」

セーイチはサタンの家で一泊した後、グレモリー家へと戻ってきていた。

そして、使用人から渡されたスーツに身を包んだ。

そこに、金髪の少年が現れる。

「やあ、セーイチ君。ずいぶん様になってるね」

「お前に言われてもうれしくねーよ。木場」

タキシード姿の少年、木場裕斗に褒められるセーイチ。しかし、それは気に入らないのか、そっけなく返した。

「アハハ・・・そうかい」

「よお、相変わらずだな。布藤、木場」

そこに、スーツに身を包んだ男、匙元士郎が現れる。

「匙」「匙君」

「お前ら、相当鍛えてきたようだな」

「おうよ」

「お互い様だね」

三人とも、修行の成果が表れていた。発している気配が修行前とは明らかに高まっている。

「負けないぜ、二人とも」

闘志をみなぎらせる元士郎。しかし、それはセーイチや裕斗もおなじであった。

「望むところだよ、匙君」

「匙、俺たち龍王を宿すものとして、どっちが強えか決着を決めようぜ」

セーイチは龍王アグニル、元士郎は龍王ヴリトラ。ここで、伝説に名を遺す龍王同士の対決がもう始まっていた。

「お待たせ、セーイチ、裕斗」

バチバチと闘志をむき出しにしている三人のもとに、ドレスなどで

めかし込んだ女性陣が現れる。

「おおおっ!!! 皆さん見合ってますよ!」

「そう? ありがとう、セーイチ」

「あらあら、褒められてしまいましたわ」

「そ、そんな・・・セーイチさん・・・可愛いだなんて・・・」

「・・・あ、ありがとうございます・・・」

みな、女性陣はそれぞれ顔を赤らめていた。しかし、その中に一人、セーイチが不審なものを見るような目で見ている人物が一人。

「んで? ギヤスパー、お前なんでそんな女の子が着るようなドレス着てんの?」

「だって・・・可愛いドレスが来たかったもん!!」

「もん、じゃねえよ・・・」

セーイチはもうあきらめた。

「おい、お前ら、いつまでそうしてんだ。」

「もういくよー、みんな!」

そこに、桜色の髪をもつ三人、サタン家の兄弟たちが来た。

「あ、はい」

「ただいま行きます」

こうして、シトリー眷属、グレモリー眷属、それに加えてサタン家の三人兄弟たちは悪魔のパーティーへと向かった。



パーティーは華やかであり、滞りなく進んでいた。

会場に着いたセーイチはあいさつ回りなどで疲れ、会場の隅で休んでいる。慣れている木場と女性陣はほかの女性悪魔たちとの談笑を楽しんでいる。

そんな様子を見ていたセーイチだが、突如その表情が険しくなった。

「(小猫、ちゃん?)」

セーイチは後輩である小猫の様子がおかしいことを察知した。案の定、小猫は会場を抜け、一人で森の中に入っていった。

後輩が単独行動することに疑問を抱きつつも、心配するセーイチは後を追ったのだ。

会場を出て、森の中に入っていくセーイチ。そして、そこで見た者は木の枝に腰かけた妖艶な美女であった。セーイチはその見た目に飛びつきそうになるのを我慢して、木の陰に隠れながら小猫と謎の和服美女の話を聞く。

「久しぶり、白音」

「黒歌、姉さま……………」

その言葉がセーイチの耳に入ると、セーイチは驚きを隠せなかった。小猫に姉がいたこともそうだが、それよりも、この雰囲気だ。黒歌も小猫も姉妹に向けるような目をしていなかったのだ。

「おうおうおう、こいつがお前の妹で、グレモリー眷属か？それと、この木の陰に隠れてるやつ出て来いよ、エヴォリユシオン・ドラゴン紅炎龍児よ。隠れているつもりだろうけど、バレバレだぜ」

そこには、会談に現れた猿の妖怪にして、孫悟空の末裔である美猴もいた。そして、すぐにセーイチは場所を悟られてしまう。ばれていたとは思っていなかったセーイチは驚きを隠せない。だが、これ以上それを貫くこともできないのでおとなしくそこから出てきた。

「よお、美猴。ヴァーリはどうしてんだよ？」

「あん？ヴァーリか？あいつは今頃特訓に燃えているんじゃないやねえか？なんでも強敵を見つけたからな。」

「けっ、そうかよ」

セーイチはヴァーリがまるで相手にされてないことにむかつきなながらも、目の前の敵に集中した。

「姉さま……………何しに来たのですか？」

「そうね、まあ……………暇だったから見に来たってとこにや♪」

「……………」

姉妹二人の間に沈黙が流れる。ただならぬ過去があるのだろうか。とセーイチは推測するが、すぐにその考えをやめる。

「セーイチ！小猫!!」

「部長!!」

するとそこに、紅髪の悪魔、リアス・グレモリーが現れる。これによつて、三対二。数では勝っていた。

リアスは黒歌をにらみつける。

「黒歌……小猫は、あなたに渡さないわ。この子は、私が守ると決めた。私の大切な眷属よ」

「それは、上級悪魔様が決めることではないにや。それに、白音は私の妹にや。私と一緒に来るにや」

「それも、姉さまが決めることはありません。私は、姉さまのもとへは行きません。私は、部長と、先輩と、みんなと、一緒に行きますー」

小猫のまつすぐな決意はゆるぎないものに見える。その決意に黒歌は悲痛な表情を浮かべようとしていた。しかし、それはだれにも気づかれることなく引つ込め、すぐにニコニコした表情に戻した。

「そう……もう、不可能なのかもね」

お互いは敵同士だ。すでにセーイチは籠手を展開させて戦闘態勢に入っている。黒歌、猿の妖怪美猴も戦闘態勢になろうとしていた。そこに、黒歌たちにとってさらに悪い状況になる人物が登場してくる。

「リアスにセーイチに小猫、無事か!？」

「ベオグラードさんに、ソフィアさん!!」

ここで、伝説の悪魔の一角、サタン家の姉弟が黒歌と美猴の前に立ちはだかる。先ほどまで余裕という雰囲気をはかっていたがサタンの家の者が出てきたとあつては、さすがに慎重にならざるを得なかった。

「ちっ、マジかよ。サタンのやつらだぜ」

「ちよくと、マズいことになったわね」

実力者である二人も最強の最上級悪魔二人を前にして冷や汗を垂らしている。

「おまえらか、侵入者つてのは」

「ああ、そうだぜい」

「悪いけれど、あなたたちを捕縛させてもらおうわ。ハアツ！」

ソフィアが先手を打つ。手のひらから放たれた凶悪な魔力。それらを避ける美猴と黒歌は互いに撤退する算段をたてていた。

「おい、黒歌。もう引き時だぜい。さすがにこの姉弟が出てきたってのはな」

「そうね……」

「言っただけだ、逃がさない!!」

ベオグラードが猛スピードで接近する。最上級悪魔最強の一角であるベオグラードのスピードは冥界でもトップクラス。流石の美猴や黒歌といえども反応が少し遅れてしまっていた。

「くっ!?!」

「黒歌!」

「捉えたぜ、黒猫!!」

ベオグラードが黒歌に迫ろうとして時だった。ベオグラードに対して極大の光が放たれた。

「クソツ!!」

光は悪魔にとって脅威。それはサタンでも例外ではない。ベオグラードは死角から放たれた光を避け、素早く体勢を立て直した。

「危なかったですね、黒歌。もう少しでやられていましたよ?」

「……助かったわ、アーサー」

そこには、金髪の美青年と同じく金髪の美少女がたたずんでいた。男の方は眼鏡をかけ、神々しいほどの気配を放っている美しい聖剣に加え、腰には別の聖剣を帯刀している。少女の方は同じく聖剣を手に持っている。ベオグラードに攻撃を放って黒歌を助けたのはこの新たに表れた二人で間違いない。

「なにもんだ?」

ベオグラードは新手に問う。問われた紳士的な男は素直に答えて見せた。

「始めまして、サタン家の子息の方にグレモリー眷属の皆さん。私は、ペンドラゴン家の者です。周りにはアーサー、と名乗っていますがね。」

「ちつ、全員。奴の持っている聖剣には気を付けろ。聖王剣コールブランド。二つある地上最強の聖剣の片割れだ。いいか？触れることさえ、俺たちには許されないぞ」

ベオグラードが冗談抜きに本気で警告を出している。それほどまでに悪魔にとっては危険なのだ。聖王剣コールブランド。またの名は、カリバーン。英雄、アーサー・ペンドラゴンが使ったとされている最強の聖剣だ。その格はもう一つの最強の聖剣とならんで、ほかの聖剣とは比較にならない性能を持っている。

「ええ、その通りです。私は、現白龍皇であるヴァーリと行動を共にしています。以後、お見知りおきを」

「厄介ね。聖王剣コールブランドが白龍皇のもとに……」

ソフィアは苦笑した。

「私は、ジャンヌⅡダルク。同じくヴァーリと行動してるわ。よろしくね?」

「なんてこと!? 聖人の子孫がテロに加担しているというの!？」

その名を聞いてその場にいる悪魔一行は驚く。リアスは驚きのあまり、アーサーとともに現れた少女、ジャンヌⅡダルクに問う。

「当然じゃない……あんな仕打ちをした奴らなんか、私は嫌い、大嫌い。だから私は、あいつらを許さない」

ジャンヌはこの世のすべてを恨むような目を向ける。その憎悪には息をのむしかなかった。

「ジャンヌ、落ち着いてください。安心してください、悪魔の皆さん。

私は二人を迎えに来ただけです。ジャンヌ、美猴、黒歌、帰りますよ」「ええ」

「つーわけだ。またやろうぜえ。機会があったらな」

アーサーは聖王剣コールブランドで空間を斬る。すると、空間が裂け、人が容易く通れるくらいまで広がる。そして、冥界に襲来した四人はこの裂け目へと消えていった。



「にいたん!!ただいま!!」

「おにーさん、ただいま!!」

「ただいま帰りました、おにいさま」

俺、ティア、ドライブ、伽耶のもとに妹たちが帰ってきた。妹たちはそれぞれ親の元へと帰っていた。そして、今日は妹たちが帰ってくる日でもあったのだ。

「みんな、おかえり。お父さんとお母さんにちゃんと会えたか?」

「「うん!」」「」

「バツチリだよ!」

「はい!」

「もちろん」

「・・・」

皆の反応を見ると大丈夫そうだ。そして、皆のために計画していたことを実行する。

「みんな、今日はここですぐ最後の日だ。最後にちよつとしたパーティだ」



現在時刻はグリニッジ標準時、九時だ。

現在、俺たちのダイニングは慌ただしい。全員分の椅子をならべたり、テーブルを用意したり、食器を用意したりとでみんなせつせつと準備をしている。

「ううーん、よいしょつと」

「ルル、気を付けてね」

「はーい」

妹たちや、ドライブ、ティアも忙しそうだ。無論俺も例外ではない。収穫したリングゴを使った昼食を準備している。まあ、これもいつものことではあるがな。おれは黙々と作業を進ませ、料理を完成させる。
「わあ~~~~~」

「美味しそうです」

完成した料理を皿に盛りつけ、テーブルの方へ持っていくと、妹たちが顔を覗き込むようにして料理を見る。今回はドラゴンアップルを使ったアップルパイである。それらを人数分に切り分けて、全員にいきわたらせる。

「「「「「「いただきます」」」」」」」

全員で手を合わせてから食事に手を伸ばす。妹たちに加えて、アーシャ、タンニーンも招待している。そして、意外なことにアジ・ダハーカがここと少し離れて部屋の隅で座っていた。多分アーシャが無理やり引っ張ってきただろうな。

「んんんんんんんんんんんん」

「お兄様、美味しいです」

「・・・・・・美味」

「とつてもね!」

妹たちが美味しそうに食べてくれている。あんなに愛らしい笑顔をしてくれるのならうれしいものだ。

「イツセー、とつても美味しいわ」

「そうね」

「ああ、このような嗜みもいいものだ」

「とつても美味しいです!!イツセーさん!」

アーシャ、ドライグ、ティア、伽耶も同様にそう言ってくれた。

「ああ、それは良かった。それに、タンニーンがドラゴンアップルを改良したんだ。それのおかげでもあるさ」

俺がそういうと、タンニーンの方へと視線が向く。

「そうなの」

「すまないな、タンニーン」

「構うことではない。しかし、それを抜きにしても見事だ。ドラゴンアップルにこのような食べ方があるとは」

タンニーンにとって人間よりの味覚は物珍しかったらしい。不思議そうに食している。

「しかし、アジ・ダハーカ。貴様がこのようなことに興じるとは思わな

かったぞ」

そして、タンニーンはこの部屋の隅でただ一人で座るアジ・ダハーカにじろりと視線を向けた。タンニーンは龍王、アジ・ダハーカは邪龍。因縁のある関係でもあるのだ。ゆえにこんなことはよくあるのだ。

そのタンニーンにそう言われたアジ・ダハーカは手で料理を食いながら答えた。

「けっ、別に俺はアーシャに連れられて来ただけだ。テメーにいわれたこつちやねえ。それに、これはついでだ。ほかに目的があんだよ」
「ふっ、そうか。アポプスやクロウ・クルワツハは俺の食客として住処にしているのだがな」

タンニーンは以外そうにしていた。タンニーンは意外にもクロウ・クルワツハやアポプスと気が合うようで、ともに過ごしているとも聞いている。逆にあいつらアポプスとクロウ・クルワツハもタンニーンのところへよく言っているらしい。そして、俺とアジ・ダハーカはともにいることもある。同じ魔法を使うものとして気が合うこともあるし、アジ・ダハーカは妹のアーシャともいることが多い。同じ妹持ちとしてもやはり通ずるものもある。そういえば、アジ・ダハーカに会った当初もこんなだったような……しかし、アジ・ダハーカの目的とは何だろうか？

俺が回想していると、俺の中にいるドラゴンが声を掛けてきた。

「いいな、いいなあ〜〜。私もイツセーの料理を食べたい」

マクナス・ロード・オブ・ドラゴン
龍炫の魔法神ジルニトラが駄々をこねるように言ってきた。

「ふむ。ジルニトラ殿、私としても是非そなたに食していただきたいのだが、イツセーの中にいるとなっては……どうしようもありませんまい」

同情したタンニーンがそう言う。珍しいことにタンニーンが畏まった口調で言った。龍王であるタンニーンがこのような口調で話す相手はニトラ以外存在しない。もちろん、タンニーンもこちらがわのドラゴンのことは知っているし、ニトラのことも知っている。それゆえに敬意を表しているとか。もちろん気さくなニトラは敬語など

いらなうと言ったが、タンニーンはそれでもそのままであった。

「仕方ないだろ？ニトラ」

「うううう~~~~」

ニトラは時々子供っぽくなる場所がある。そこがいいんだけどね。

「ほら、ニトラ。魔法で感覚共有するから。それで我慢してくれ」

「わかった……ん!?美味しい!!!これ!!」

俺がアップルパイを口に運ぶと、俺の味覚がニトラにも共有される。それによつて、ニトラにもその味が伝わる。ニトラの様子を見ると口に会つてくれてよかった。

「良かったな。タンニーン。タンニーンの開発したドラゴンアップルは龍霊界ドラゴニアのドラゴンにも口に会うことが証明されたな。」

俺がそういつとタンニーンは満足そうに行つた。

「そうか、ジルニトラ殿の口にも合つてくれたか」

「ああ。タンニーン、ドラゴンアップル、素晴らしかったぞ。もちろんイツセーもな」

「光荣ですぞ、ジルニトラ殿」

こんな感じで今年のアルトリアとアーサー兄さんの墓参りは終了を迎え、俺たちは日本へと帰還したのであつた



日本に戻つた後、俺たちは眠りについた。イギリスと日本は大体九時間くらの時差がある。イギリスから日本まで一瞬で行けるとはいえ、時差があれば生活リズムは狂うわけだが。

そして、俺の視界には真つ白でとてつもなく広い空間が広がっている。ここに来るには時間が空いてしまった。

「来たか、イツセー」

「ああ、久しぶりにニトラのその姿を見たな」

白い空間から現れたのはジルニトラ。俺の中に宿るドラゴンであり、神でもある存在。この世界の外からきた存在だ。そして、生まれたころからともに生きている。

「全くだな。もう、イツセーがあまりにも相手してくれないから寂しかったんだぞ？」

「す、すまない、ニトラ。このところいろいろあつたんだ」

ニトラは頬を少し膨らませてご機嫌斜めになっている。普段はきりつとしていて、綺麗でかつこいいニトラだが、時にはこのような可愛らしい表情をする。このギャップが凄いのだ。

その時だ。この空間に本来はいない気配が感じられた。それも三人。

「来たか……」

姿があらわになってくる。邪悪なる気配を周囲に放ち続けている。

「ああ。邪魔するぜ」

そこに現れたのは邪龍三人だった。アジ・ダハーカ、アポプス、クロウ・クルワツハ。しかし、この三人がこの世界、俺の精神世界に来たのはこれが初めてというわけではない。実はちよくちよく不定期で来ている。精神を意識体として俺の精神世界に接続する。もとよりスペックの高いドラゴンたちだ。これくらいは普通にやってのけている。

つまり、あのパーティの時アーシヤに連れられてきたのはこういうことだったわけだ。クロウもアポプスもついてきたわけではあるが。

「おお、来たか。わんぱく三人組」

ニトラもこいつらが来たことよって愉快そうな表情をする。

ニトラはいつも邪龍三体のことをまとめて『わんぱく三人組』と呼んでいる。この伝説に名を連ねている邪龍たちをまるですべてどこにでもいる有象無象のように呼ぶことが出来るのはこの広い世界といえど、ニトラだけだろう。ニトラは龍霊界のドラゴンの一体。その強さは俺でさえ未知数。いまだ全力を見たことなんて一度たりとも無い。俺が見ているニトラの強さはその片鱗にしか過ぎないのだ。

だが、そんな呼び方をされた本人たちは当然我慢ならないわけ
で………

「おうよ、来たぜジルニトラ。てめえをぶつ飛ばしにな」

アジ・ダハーカは相変わらずだが、今回に限っては違った。血管が
浮き出ているほどだった。態度には出ていないが、そうとう頭に來て
いるのがわかる。

「ほう？今までそう宣言してきて、一度たりとも実行できたことが
あったのか？」

ニトラも楽しそうに煽り返す。

「して、ジルニトラ殿。貴殿はいつまでそのような呼称で我々を呼ぶ
のだ？」

常に冷静であり続けるアポプスでさえもこれは見過ごせない問題
らしい。

「さあな。もしかしたら、永劫にお前たちはわんぱく坊主のままか
もしれないな」

ヒュン!!

「むっ？」

ドゴオツ!!!

ニトラが挑発をした瞬間、ニトラを鋭い打撃が襲った。しかし、ニ
トラは当然のごとく防ぐ。

「ならば、実力を見せつけてわからせるしかあるまい」

ニトラを一番乗りで攻撃したのはクロウ・クルワツハであった。止
められることはわかっていたようだった。

「やってみろ、わんぱく三人組ども!!!」

ニトラはニヤリと笑みを見せつけ、クロウ・クルワツハの腕を振り
払う。

「フンツ!!!」

クロウ・クルワツハは身をひるがえして肉弾戦による攻撃をニトラ
に仕掛ける。

「フツ………」

ニトラはさも当然のようにクロウ・クルワツハの猛攻を完全に受け

流している。

ニトラは、魔法を主体にして戦うドラゴン。格闘戦は本職ではないはずだ。しかし、それだとしてもこのクロウ・クルワツハの攻撃を涼しい顔をしながら受け流せるこの実力はいまだそこが知れない……。ほんとに、どうなっているのやら、この強さは……。「グツ?!」

ドスッ!

クロウ・クルワツハがニトラの攻撃を受けて膝をつく。その様をニトラは空中から見下ろしていた。

「どうした?この程度では、当分このまま坊やのままだぞ?」

「グッ!まだだっ……」

クロウはボロボロになりながらも立ち上がって向かってゆく。

その様子をただじっと見ているアポプスとアジ・ダハーカ。例え相手との力の差が強大であったとしても、決して手を組んだりしない。ドラゴンとは、常に一対多数での戦闘を好む。邪龍はよりそのような戦いを好む。己の戦いを邪魔されることが最も嫌いなのだ。

「別に、お主一人でなくとも、わんぱく三人がかりでもいいんだぞ?」

私はそれでも負けはしないがな」

「……断る」

「フッフ、強情だな」

ニトラがあのようにして促しても頑なに受け入れようとしない。たとえ、今の相手がアポプスやアジ・ダハーカでも同様にそう言うっていただろう。

俺はこの戦いをずっと見物する。クロウが倒れたら次はアポプス。アポプスが倒れたら最後にアジ・ダハーカ。その順番で魔法神、ジルニトラに戦いを挑んでいった。

「どうした?お主の父親であるアンラ・マンユは比較にならない強さであったぞ?」

「ちっ!!うるせえ!!」

アンラ・マンユ。ゾロアスター最強最悪の悪神にして、ドラゴンと化した怪物。そして、アーリマンと同一の存在。ライバルと対決し、

その末に龍霊界へとたどり着いた存在だ。その強さは、今となったらグレートレッドさえも超える可能性もある。

アジ・ダハーカにとっては父親のような存在だ。伝説のドラゴンで数少ない親という概念を持つ。それゆえにアジ・ダハーカ本人は並々ならぬ思いを抱いているわけで………。

「ハアアアアア!!!」

父親と比べられることなどを嫌う。それをわかっていてニトラはわざと挑発させているようだ。

それにしても

「グオオツ!」

「グツ………」

ニトラの強さだ。

あの三体がまるで歯が立たない。結局三人を同時に相手にしているが、全く変わっていない。ニトラにとって赤子同然のようにことごとくやられている。今や俺と同レベルまでになった三体が足元にも及ばないとなると、俺もわかりだ。

「ま、いっちょあがりというところか?」

気づけばもう邪龍三体は地に倒れていた。ニトラは傷一つなく、邪龍を軽く捻りつぶした。血祭り状態である。

本当に……俺はこの人を超えることが出来るのだろうか?

軽く邪龍を倒したニトラは俺のもとへとやってきた。

「さて、イツセー。今度は、お前の番だな」

俺は冷や汗を垂れ流す。

このすべてを貫くような鋭い瞳を向けられる。正直あそこらへんに無様に倒れている邪龍三体と同じ未来が見えるが………。まあ、もちろん戦うのだがな

「ああ、もちろんだ」

「フフフ……最近、イツセーとはご無沙汰だったからなあ。スキンシップやらじゃれあいもなくて寂しかったぞ?今日はとことんやろうじゃないか」

あれ?いつになくやる気ですね、ニトラさん。やべえよ。手首をボ

キボキとならせている。

「さあ、準備運動も先ほど終わったことだし、ゆくぞ!!!」

「クソツ!!」

ドゴオツ!!!

ニトラの重い拳が俺の手をビリビリと伝わってくる。魔法を一切使わないニトラ。それでも俺は遠く及ばない。だから、俺はニトラに魔法を使わせることが、第一の目標だ。俺は、至近距離で魔法を放つ。

「ハアツ!!!」

「フツ、甘いな」

だが、ニトラは素手で俺の魔法陣を破壊する。相変わらずの規格外さだ。

俺はめげずに格闘戦を仕掛けていった。

しかし――

「ぐっ!!」

俺の攻撃はニトラに届くことは無く、俺は地に落ちていく。よくよく考えれば、ニトラに魔法は通用しない。魔法神相手に魔法は意味ないのだろう。

「チェックメイトだ、イツセー」

俺はあおむけに地面に倒れ、ニトラに馬乗りをされる。脳天に人差し指を当てられ、完全に封じられてしまった。

「ま、参りました……」

俺は降参の意を伝える。

それを聞き届けると、ニトラは指を俺の脳天から離れた。

俺は、ふと思ったことをニトラに言った。

「あの……ニトラ……」

「なんだ？」

「この格好……はたから見ればいろいろマズいと思うんだけど？」

「ん？どこがだ？」

ニトラは気づいていない……この格好、どう見てもあれをやっている絵にしか見えない。だって馬乗りだから……

しかも、ニトラは意味ありげに妖艶な笑みを浮かべている。

く……マズい。マズいぞ……

「い、いや……」

「ん？もしかして、やらしい気持ちになったのか？イツセーのエツチ」

「ち、違うー！」

「ふっふっふ……違うのなら、こうしていても構わないよな？」

ツク……ニトラの奴……わざとだな？この確信犯め……

だが、幸運だった。これが精神世界での出来事で。これももし、現実でお互いに現実の肉体であつたら更にまずいことになってた。

「イツセーよ、今日はとことん私とスキンシップを取ろうじゃないか」

「ニトラのそれは少し過激じゃないか？」

「細かいことは気にしない。ホレホレ」

今夜は、どうやら逃げられそうにない。こうなったニトラは気が済むまで話してくれないからな。俺は、今夜は大人しくニトラの玩具となつたのであつた。

No, XLIII 行動開始



グウォン

何もない場所から人影が現れる。全員で四人。空間が避け、その中から出てきた人物たち。アーサー・ペンドラゴンの持つ聖王剣コールブランドによって空間移動をしたのだ。

「皆さん、着きましたよ」

アーサーは道先案内人のごとく先導していく。猿の妖怪、美猴は愉快そうに歩き、妖怪黒歌は何やら覚悟を決めたようにキリつとした表情をしている。だが、一人はものすごく暗い表情をしている。先ほどから下を向いて歩いていた。そんな少女、ジャンヌを見過ごせないのか、アーサーはジャンヌと歩幅を合わせ、声を掛けた。

「ジャンヌ、落ち着きましたか?」

「え、ええ。ありがとうございます、アーサー」

声を掛けられたジャンヌは先ほどとは打って変わってニコツと笑顔になる。そんな明るい笑顔を見たアーサーは「そうですか、それはよかった」と笑みを向ける。これほど紳士的な男にこんな態度を取られたら、ほとんどの女性は一発で惚れてしまうだろう。おまけに家柄もよし、顔よし、性格良しの完璧さである。ジャンヌはジャンヌでアーサーにこれ以上ない笑顔を見せている。アーサーには絶大な信頼を置いているかもしれない。同じ聖剣使い同士通ずるものもあるのだろう。

四人は歩いていき、巨大な建物に入っていく。そして、入り口でそれを迎える人物がいた。

「戻ったか、アーサー。」

銀髪の男、ヴァーリ・ルシファアが出迎えていた。

「ええ、ただいま戻りました。ヴァーリ」

「よう、ヴァーリ。で、首尾はどうなんだぜい?」

「ああ。とりあえず、俺たちは自由に行動する。やつらを説き伏せるには何も苦勞しなかったがな」

ヴァーリは得意げに言った。ヴァーリが言ったやつらとは組織の構成員のことであった。

「そうですか。それはよかったです。しかし、こんなことならば禍カオス・ブリゲードの団に身を置く意味がありませんね。私たちは彼らのやることには興味も抱きませんから」

アーサーが苦笑しながら言った。

禍カオス・ブリゲードの団は会談時に墮天使総督アザゼルが明かした組織のことだ。この建物は禍カオス・ブリゲードの団の本拠地ということになる。奥のロビーを除けば多種多様な種族の者が出入り、またはそこで駄弁っている光景も見受けられる。他の勢力からはテロリストと位置付けられているが、テロリストにしては少しデカすぎる建物であった。

「アーサーの言う通りなんだけい」

「そう言われたらそうにや」

「そうね」

アーサーの言葉に全員が同意する。

「一理あるな。しかし、ここに来なければ俺たちはこうして出会わなかったわけだ。それもがあるが、まずしばらくは様子を見よう」

「そうですね」

ヴァーリの言うことにも一理あったのだ。禍カオス・ブリゲードの団は様々な奴が己の目的のためにくつついてきた奴も多くいた。そのおかげで、ルシファーのひ孫、ペンドラゴン家の子息、孫悟空の子孫、聖女の魂を受け継いだ者、などといった伝説級の人物たちが同時に会すことになったのだ。

このメンバーで会話していると、とある集団がヴァーリたちに近寄ってきた。

「やあ、ヴァーリ。メンバー全員お揃いだね」

近づいてきた集団のリーダーらしき人物が前に出て声を掛けてきた。黒髪で、東洋人特有の顔立ちをしている。一般的な制服の上に中国の民謡装束のようなものを着ている。だが、纏っている雰囲気はただものではなかった。それは、ヴァーリと同等のものであった。

その人物が近づいてきたとあって、ヴァーリたち一向は力が入っ

た。警戒態勢だ。それは近づいてきた男の後ろにいる者たちもどうようだった。刀剣類などを抜き、戦闘態勢に入っている奴らもちらほらといた。

「曹操………」

不気味な笑顔をしながらヴァーリたちに近づいてきたのは曹操。曹操たちも同じ禍カオス・ブリゲードの団の構成員らしい。だが、明らかにヴァーリのメンバーと曹操のメンバーには確執があった。同じ構成員とはいえ、この険悪なムードである。仲間というわけではないようだ。

「相変わらず警戒されているな。別にここでやり合おうってわけではないのだがね」

曹操と呼ばれた男はやれやれといった顔で言う。

「曹操、そう言うわりには戦意はこちらにひしひしと伝わっているぞ。それと、そちらの主要な幹部たちはどうした？ほとんどいないぞ」

今度はヴァーリが早々に質問をした。曹操はすぐに答えた。

「いないさ。今はな。俺以外の幹部たちは全員外出中だ。」

曹操は何やら企んでいるような言い方をする。もちろんヴァーリたちが気づかないこともなかった。

「何を企んでいる？」

「さあね。我々は何も企んでないさ」

曹操はヴァーリの質問に答えることは無い。そして視線をヴァーリからアーサーとジャンヌに向けた。

「やあ、アーサーにジャンヌ。久しぶりだ。そのついでに、キミたちもこちらに戻ってくる気はないかな？今なら、すぐにでも幹部の席を用意しよう。早急にこちらに戻ってきてくれるのなら、こちらとしても大変助かるのだがね」

「お断りします、曹操。私とあなた方では目指してるものも見えている物も違いますので。それに私はヴァーリについていくと決めました。それにヴァーリと行動を共にするのは退屈しません」

「私もよ、曹操。私も、ヴァーリについていきたいと思ったの。今後あなたのところに戻ることは無いわ。」

曹操の勧誘をアーサーとジャンヌはきっぱりと断った。どちらも

鋭い眼差しを曹操に向けていた。そのような眼差しを向けられれていたが、ケロつとしていた。尋ねる前から返ってくる答えは分かっていたかのように。

「はあ、やれやれ。キミたちも立派な英雄の血を受け継いでいるのではないのか?」

「関係ありません。たとえ、ご先祖様が英雄だとしても私は私です。それ以上でもそれ以下でもありません」

「言っているでしょ。私はヴァーリと一緒に居るって。それに、私は英雄なんかじゃない。そんなものに、なりたくもない……」
アーサーとジャンヌはそう断言した。しかし、アーサーはまだしも、ジャンヌはとてつもなく尋常ではない雰囲気を纏っていた。その瞳には闇が映っているかの如く、暗い眼差しだった。英雄という言葉に嫌悪感を示していたのだ。彼女は、何かを背負っているかのよう

に。
「そうか……まあ、いいだろう。まあ、来る気になったらいつでも言ってくれて構わない。だが、いいのかな?その選択がのちに後悔することになっても」

「言ってなさいよ。私たちは後悔しない」

曹操はあれだけ拒否をされていたのにもかかわらず、涼しい顔をしながら言った。これは別に来てくれなくても支障はないとでも言いたいかのよう

に。
「曹操。勧誘のためにわざわざ来たのではあるまい?」

「まあ、それを言われたらそうとしか言えないな。ヴァーリ、お前は知っているか?強い魔法使いのことを」

曹操が話題を変える。それによって空気が変わる。

「……なぜそれを聞きたがる?」

ヴァーリは顔を険しくしながら質問する。

「キミは会談の時現地にいただろう?その時には見なかったか?実は英雄派の幹部の一人のゲオルクが言っていたことなんだがね。なんでも自分が構築していた魔法使いたちを会談の会場に転送する転送魔法陣があっけなく破壊されたってね。ゲオルクは世界でも優秀な

魔法使いだ。かなり本気を出して構築してみたのだがそれがあつけなくだ。それ以来彼はその正体不明の魔法使いをライバル視しているんだ。三大勢力にそんな強力な魔法使いがいるのか？」

「それを知ってどうするつもりだ？」

「いや、なに。大したことではない。ただ、俺としてもそのような強者と一戦交えてみたいだけさ。」

ヴァーリはその言葉を聞いてニヤツと笑みを浮かべながら口を開いた。ヴァーリとて、強者との戦いを望んでいる。曹操にはある程度共感出来る部分もあるのだろう。この組織に所属する者たちはだれもかれも戦闘好きなのだ。

「・・・曹操。一言言っておいてやる。そいつは強い。それと、そいつは三大勢力には属していない」

ヴァーリはあの時会場にいた。そして、曹操が言っている魔法使い、イツセーと戦ったのだ。当然ヴァーリは知っている。ヴァーリは曹操にそれとなく知っていることを暗示するかにように伝えた。

曹操はその言葉だけで、確信したような笑みを浮かべた。

「フハハ・・・そうか。お前がそこまで言うレベルか。それだけ聞ければ十分だ。ゲオルクも奴も、さぞかし喜ぶだろう。では、ここいらで失礼させてもらおう。礼を言うぞ、ヴァーリ。今日はいい話を聞くことが出来た」

曹操は後ろにいる英雄派一向を連れて満足そうにヴァーリのもとを去っていったヴァーリたちは曹操たちの後姿を無言で見っていた。

「いくぞ」

「はい」

「ええ」

ヴァーリの一声で全員が歩き出す。ヴァーリ一向は建物の中に入っていた。ロビーを抜け、大きな扉の前に立った。ヴァーリたちはその扉を開け、その中に入っていた。

「・・・・・・・・ん」

すると、その中には、大勢の悪魔が一人の少女を取り囲んでいた。悪魔たちはみないかつい顔をしている。見たところ強さも中々のも

のだ。それにもかかわらず、少女は全く動じていなかった。それどころか、少女は淡々とヘビのようなものを悪魔たちに渡していった。しばらくして、全員へ日がいきわたると、悪魔たちはそろそろと部屋を後にした。少女は一人だけぽつんと残されていた。そんな少女にヴァーリたちは近寄っていった。

「オーフィス。またヘビを渡していたのか」

「・・・ん、ヴァーリ。それとアルビオン・・・」

少女はオーフィスと呼ばれた。この世界で最も強いドラゴン、ウロボロス・ドラゴン無限の龍神であった。このような幼い少女が最強の龍神だとはだれも思うまい。黒いつやつやの髪、愛らしい顔立ち、胸元が開いた犯罪チックなドレスを身に纏っている。どこからどう見ても幼い少女であった。

「オーフィス、お前。いったいどれだけのヘビを奴らに与えた？」

「ん・・・だいたい、八割。ヴァーリたちも、いる？」

オーフィスは手のひらからヘビを出した。そのヘビからはとてつもない気配を感じさせた。ヴァーリはすぐに首を横に振った。

「いや、俺たちは必要ない。それは、お前の分としてとっておけ。肝心な時に力が出せなくなるぞ、オーフィス」

「ん、わかった」

オーフィスはヴァーリにそう言われると、素直にそれに従った。手のひらから出現させていたヘビを自身の体に戻した。そして、ポーっとしているオーフィス。それを何とも言えない目で見ているヴァーリ一向。

「・・・オーフィス、お前は・・・いや、なんでもない。とにかく、俺たちは俺たちで勝手にやらせてもらおう。構わないよな？」

「ん、わかった」

「よし、いくぞ」

ヴァーリはオーフィスにそう言った後、仲間たちを連れてこの部屋を出て行った。ヴァーリ達が出ていき、オーフィスはこの部屋にポツンと一人だけ座っていた。その様子は寂しそうに、オーフィスはただ

ただボーッと何かを見ているだけだ。

「イツセー……」

とある人物の名前をポツリとつぶやきながら……
禍の団の首魁と位置付けられているオーフェイスであるが、実際はそんな風には見られなかったのだった。



あれから数十日が過ぎた。

カオス・ブリゲード
禍の団の本部が慌ただしくなっている中、独立部隊ヴァーリチー
ムのリーダーであるヴァーリ・ルシファーは対照的に静かに仲間を集
めて何やら計画を練っていた。

「と、いうわけだ。俺とアーサーと美猴は今日一日探索だ。黒歌、ジャ
ンヌは自由にしていてくれて構わない」

「りよーかーい」

「わかりました」

「わかったにや。にしても、今朝ディオドラ・アスタロトが嫌らしい下
衆な笑みを浮かべていたにや……」

「私もみたわ。ホンと……朝から最悪」

女性二人が愚痴を零す。ディオドラ・アスタロトは冥界の現魔王の
一人、アジュカ・ベルゼブブの身内である。それが、禍の団とつな
がりがあることは冥界にとっては大問題中の大問題だ。

「ああ、そういえば、やつらが動き出すんだったな。奴らは冥界に攻撃
を仕掛けるだろう」

「ああ、あいつらそう言ってたぜい。ヴァーリを旧魔王派に引き込も
うと、これでもかと勧誘してきやがったしな。あいつらしびれを切ら
して力づくで押し通そうとしてたぜい」

「そんなにうるさかったの？」

「まあな。俺は奴らと奴らのやっていることに興味はない。俺は人間
として生きると決めたんだ。今更魔王だとか、血族の血などにこだわ

る気はない」

カオス・ブリゲード
禍の団の内情に精通しているヴァーリが言う。

「ウフフ、ヴァーリらしいわね」

「とりあえず、我々が関知することではありませんね。ヴァーリ、美猴、行きましょう」

「ああ」

シユパツ!!

アーサーは聖王剣コールブランドを取り出し、空を斬る。すると、空間が割れ、異空間が出現する。次元の狭間。無限に広がる何も無い空間である。そこは危険な場所。入れば最後、二度と出てこられないところだ。しかし、力あるものや特殊な武器は例外である。自由に入りできるのだ。聖王剣コールブランドもその一つだ。

「では、いつてまいります」

「いつてら〜」

「いつてらっしやい」

アーサーと美猴、そしてヴァーリ次元の狭間へと入っていった。

次元の狭間をまるで航空機に乗っているかのように移動している三人組。アーサーは聖王剣コールブランドを操り、何もない空間を進んでいった。

「ん〜やっぱ、なんもないぜい。ここはよ」

「当然だろう」

三人は時々無駄話をはさみながらも探索を続けていった。

そして、数時間が立とうとしていたところだった。ヴァーリの様子が変化する。ヴァーリが気配を察知したようにとある方向を向いた。

「どうしましたか？ヴァーリ」

「ああ、ドラゴンの気配がした。おそらく、エヴァリユシオン・ドラゴン紅炎龍 兎布藤誠一だ。

それに、オーフィスまでいるな」

「オーフィスが行くとは思いませんでした」

「んで、ヴァーリどうすんの？」

アーサーは一時航行を止め、ヴァーリの判断を待った。

「行くとするか。アーサー、美猴。探索は今日はここまでにしよう。」

「分かりました。」

「いよっしゃ」

アーサーはここで進路を変更、冥界への舵をきった。

しばらくしてヴァーリたちは目的の場所に到着した。そこには、ヴァーリたちが見知った顔がいたのだった。

「ん、ヴァーリ。それにアーサーと美猴」

「オーフィスか。まさか、お前が来ていたとはな」

「珍しいですね、オーフィス。あなたが自ら出てくるとは」

「我、あれを見に来た」

「あれ?・・・ああ、そういうことか」

ヴァーリたちはオーフィスが指を差した方向へと顔を向けた。それだけで、ヴァーリたちはすぐに察した。

「なっ!!ヴァーリ!!!」

そんなオーフィスとヴァーリたちのもとにぞろぞろと集団が現れた。

エヴォリユシオン・ドラゴン

「紅炎龍児、布藤誠一か。それにアザゼル。」

現れたのは、グレモリー眷属たち。それにヴァーリにとってかつて深い関係だった堕天使総督アザゼル。

「ヴァーリ、何しに来たんだ!?!」

誠一はヴァーリにきつい口調で問いかける。それに対してヴァーリは普段通りに答えた。

「ただの気まぐれだ。俺たちは時空の狭間の探索中にここでここに来ただけだ。それよりあれを見てみる」

バチバチバチ!!!

凄まじい音が鳴り響く。穴のようなものが現れ、そこに、一体の巨大なものが現れる。

「来たか。黙示録の赤い龍が」

「黙示録・・・?」

誠一はいまいちよくわかってない様子だ。そんな様子を見たアザゼルは説明した。

アポカリユプス・ドラゴン

「真なる赤龍神帝、グレートレッドだ。真龍とも言われている。次元

の狭間で永遠にただ飛び続けているドラゴンだ。この世界で最も強い存在だ。オーフィスよりもな」

「そうなんすか!？」

「おうよ。なあ、ヴァーリ。お前がここに来たのはこれだろ？」

「その通りだ。」

そしてまた、全員がグレートレッドの方へと視線を向けた。

そこでオーフィスは指鉄砲のかまえてグレートレッドに向けて打ち出す格好をした。

「グレートレッド……我はいつか、必ず静寂を手にする」

オーフィスが静かに宣言する中、そこへ二人の悪魔が現れる。

「ソフィアさんにベオグラードさん!!」

現れたのは最上級悪魔最強の姉弟たちだった。

「へえ。グレートレッドにオーフィス。それに今代の白龍皇までいるのね」

「あんたたちがサタン家、最上級悪魔最強の姉弟か。俺は白龍皇ヴァーリだ。是非とも一戦交えたいものだ」

「けっ、戦闘狂が」

面白そうな笑みを浮かべるヴァーリに対してベオグラードは悪態をつく。

「ふうん。まあ、私は嫌いじゃないわ。それよりも、重要なことがあるわ。ねえ、オーフィス」

ソフィアはオーフィスへと意識を向ける。

「さて、オーフィス。やるか?」

アザゼル、ソフィア、ベオグラードは戦闘態勢に入る。全員が敵意をむき出しにして本気であった。三人とも、歴戦の強者である。大昔の聖書の大戦で生き延びているのだ。それを目の当たりにしたグレモリー眷属たちはみなひるんでいる。

そんな歴戦の強者たちの敵を射殺するような視線も、気配にも全く動じていないオーフィスは踵を返した。

「我は帰る」

気ままにマイペースな龍神は消えていった。

「さて、俺たちも退散しよう」

そう言った瞬間にはもう空間に割れ目が出来ていた。

「布藤誠一」。その様子だと、ついに禁バランス・ブレイカー手に至ったようだな」

帰り際寸前、ヴァーリは誠一を見てそう言った。

「あ、ああー！そうだ！俺もようやく至ったんだ！」

『ううう………あんな、あんなあ!!!!あんな方法でなんてえ
うわあああああああ!!!!あんなん!!!!』
!!!!!!!

誠一は自信満々にそう言った。しかし、肝心なアグニルはというと
誠一とは全くの正反対にまるで子供みたいに泣き叫んでいた。

この様子に流石のヴァーリも少し困惑していた。

「なあ、アルビオン。アグニルがあのようになっているのだが」

『さあな。私にもさっぱりわからん』

『アルビオン!!聞いてよおおお!!!!僕の！僕の宿主君があああああ
!!!!』

『………ふむ。まあ、機会があればな』

アグニルは悲しみの慟哭をアルビオンに投げかけた。しかし、アル
ビオンはそれとなく躲したのだ。

『うわあああん！それ絶対聞く気ないじゃんかああ!!!!僕はこの悲しみを誰と共有すればいいのおお!!?!』

「アザゼル、これはいったいどうなっているのだ？」

「うっ、それはだな………」

ヴァーリがアザゼルに訊くとアザゼルはバツが悪そうに眼をそむ
けた。ほかのサタン家の姉弟やグレモリー眷属も何とも言えない表
情をしていた。

「………まあ、精々強くなることだ。布藤誠一」

「では、皆さん。ごきげんよう」

ヴァーリたちは空間の切れ目へと消えていった。アーサーは礼儀
正しく挨拶をしていた。



イツセーSIDE

チュンチュンチュン・・・・・・・・・・

「朝か・・・・・・・・」

窓の外から小鳥がさえずっている。

その声と朝日によって目覚めた俺は、ゆっくりと体を起こす。

「全く・・・・・・・・ニトラの奴め・・・・・・・・好き放題しやがって・・・・・・・・」

アルトリアとアーサー兄さんの墓参りに行ってからというものの、精神世界でニトラとの戦いに敗北した俺は毎回ニトラに散々玩具にされたわけだ。まあ、昔からのことだ。しかし、最近に至ってはだんだんと過激さが増している気がする。身体のあるとあらゆる場所を弄ってきたり、遠慮なく抱き着いてきたりだ。本当にこれが現実の世界での話ではなく、精神世界の話でよかった。もう、そろそろ限界に近付きつつある。精神世界でのジルニトラの姿を思い出す・・・・・・・・

少し頬を赤らめて俺に過激なボディタッチを繰り返す。完璧に整った綺麗な顔立ち。それでいて魅力的な体を持って、あれこれとスキンシップをするニトラ・・・・・・・・あんなことされて、俺が何も感じないわけない。実際結構ヤバいのである。

「はあ・・・・・・・・」

変な気持ちになるのを必死で抑えて俺はベッドから立ち上がって寝間着から普段着へと着替える。服は今時の服である。とはいえ、ブリテンのころとそう変わらない洋服だ。いや、あのころのような豪華な感じではない。カジュアルといったところ。

「ん？なんだ、イツセー。昨日の私との戯れを思い出していたのか？」

そのようなことを考えていると、俺の中にいるドラゴン、ジルニトラが俺を揺さぶってくる。どうにも最近は何となくこうしてからかわれている。

「うっ」

凶星を突かれて俺は言葉が詰まる。というか、ニトラに基本は隠し

事は通じないのだ。

「クツクツク、イツセーはエツチだな」

「し、しかたないだろ！ああ！もうこの話は終わり！」

「赤くなつて、可愛いなあ」

うるさい！そんなこと言われたつて嬉しくないやい！

俺は気を取り直してリビングに向かう。いつもどおり朝食を取る。

そのあとだった。

ピンポーン！

インターホンがなった。

この家に尋ねてくるやつは少ない。特に、インターホンを押すやつ等いないのだ。つまり、これは

「ごめんくださいでござる」

昔の日本の武士のような語尾でそう言われる。

「あ、私行ってくる」

ユキがすぐに出迎えに行く。

「おお、ユキ殿。久しぶりでござるな」

「うん、お久しぶり。どうぞ上がってください」

「かたじけない」

その訪ねてきた人物がリビングへやってきた。その人物とは――

No. XLIV 剣闘龍

グレモリー眷属とセーイチはディオドラ・アスタロトとの激戦を制し、シャルバたちを倒した後、冥界である活動を実施。現在布藤家の地下ルームでその活動を収めたビデオを鑑賞していた。

『フハハハハハ!!!』

『ついに追い詰めたぞ!!!』

『覚悟するんだな!!乳龍王よ!!』

『何んだと!この乳龍王がお前たちのような闇の軍団たちに負けるはずがない!!いや、負けることは許されない!!行くぜ!禁手化!!!』
普通の家庭ではありえないほどの立派なシアター。そんな大画面と迫力のある大音量で鑑賞している。ただ、肝心のセリフに至っては残念極まりないワードが使われている気がしなくもない。

巨大なモニターに映ったこの特撮の題名は『乳龍王おっぱいドラゴン』。何とも言えない題名であった。

上映されている中、この特撮の主人公セーイチこと布藤誠一の膝の上で小猫がしつぽをフリフリしながら言った。

「これ、冥界ですぐに広がって大人気だそうですね」

小猫の言った通り、これは冥界の子供たちの中ではとても人気な特撮となっており、すでに放送されている別の特撮とのコラボも決定したという。

「凄いね、これ。セーイチ君の禁手化である紅炎龍児の炎鎧もほぼそっくりだよ」

数少ない男である木場裕斗も満足そうにうなずきながら言った。

この場にいる全員が高評価をしながら鑑賞を続ける。

「ハツハツハ!!つたくよう!セーイチ、良かったじゃねえか!お前、おっぱいドラゴンが冥界のガキどもは大好評だったよ。これでセーイチの冥界での知名度も上がり、人気度も急上昇だ。」

墮天使総督のアザゼルがご機嫌で言った。

信じられないことにセーイチは冥界で着実に支持を得ているのだ。

このおっぱいドラゴンによって。冥界の人々の美的感覚は少し人間とは違っているのかもしれない。

「クックック……セーイチ。お前はホントに面白い奴だぜ。アーシアとリアスの胸をつついて禁手バランス・ブレイカー化に至るなんてよ!!歴史上でも見たことないぜ!セーイチは歴史に名を刻むんじゃないやねえか?こりゃ、一生懸命歌詞を書いた甲斐があるってもんよ」

アザゼルはゲラゲラと笑いながら言った。

「歌詞って……ええ!じゃあ、あのおっぱいドラゴンのオープニングってアザゼルせんせーが!」

「そうさ。結構自信作なんだぜ?」

『くっ!?このままでは!』

主人公がピンチに陥る。そこに、二人のドレスを着た少女が現れる。一人は紅髪、もう一人は金髪の少女だ。

『おっぱいどらごんさん!』

『おっぱいどらごん!来たわ!!』

『おお!!二人とも!!よく来てくれた!!これで勝てる!!』

「みる、これが見せどころだ!」

と、主人公は少女二人の胸をなんのためらいもなく揉みしだき、パワーアップへと至った。アザゼルが自信満々に言った。しかし、その状況に対して二人ほど、恥ずかしそうに顔を赤くしていつ少女が二人。胸をもまれた少女二人にそっくりだ。

「ちよつと、アザゼル。このスイッチ姫ってどういうことよ……」
「ん?ああ、これか。おっぱいドラゴンがピンチになるとスイッチ姫たちの胸を触って最強のおっぱいドラゴンになるのさ。なんだ?お前聞いていなかったのか?」

「聞いたわよ!!グレイフィアから!!どうしてくれるの!?私もアーシアも、もう冥界を堂々と歩けないのだけど!?まずスイッチ姫って何よ!!」

「あうう……恥ずかしいですう」

リアスはアザゼルの問い詰めるが、アザゼルは面白がっているだけだ。アーシアに至っては完全に羞恥に顔を染めている。

「簡単さ。おっぱいをつついたらパワーアップするんだ。お前とセイイチとアーシアがやったことをそのままにしたのさ。何だよ、リアス。いいじゃねえか。これで、お前の名誉も上がったわけだしよ。あ、ちなみにスイツチ姫の名付け親は俺だ。どうだ？いいセンスしてるだろ？」

「……もう冥界を歩くのは諦めた方が良いわね」

リアスはとうとうあきらめの姿勢を見せていた。そしてもう一人、この場に心に傷を負ったものがいたのだ。

『……あはははは……グスツ、ヒッグ……おっぱいドラゴン……乳龍王……もうおしまいだあ……何もかも……ああ、消えてなくなってしまう……グスツ……ヒッグ……』

セイイチの神器に宿っている龍王アグニルはこのような悲惨なことになっていた。龍王と称えられた威厳もどこへやら。すすり泣きをしながら、絶望していたのだ。精神にも異常をきたしているように先ほどからブツブツと独り言を発していた。

「ちよつと、セイイチ。アグニルはあの時からずっとそんな感じなの？」

アグニルの状況を深刻に見たりアスはセイイチに確認した。

「は、はい。俺が部長とアーシアのおっぱいをつついてからずっとこの調子で……」

『……ウヒヒ、アハハハハハ……ウヘエ……ああ……あれ？乳ってなんだっけ……マジかよセイイチ。こりやちよつと深刻だな。軽く精神崩壊を起こしてるじゃねえか』

先ほどからゲラゲラと笑っていたアザゼルも少し顔が真剣になる。

「ど、どうでしょう？」

「長いこと神器に携わっている俺からしても、流石にドラゴンの精神状態までは分らん。俺はカウンセラーじゃないからな。セイイチ。とにかくアグニルに声を掛け続けるんだ。このままアグニルが立ち直らなければ今後、お前の戦闘にも影響が出てくるぞ？いいな？最優

先事項だ」

「わ、わかりました」

バランス・プレイカー

布藤誠一は確かに禁手化に至った。しかし、それは代償としてアグニルに致命的なダメージを負わせたのだった。セーイチは、これからしばらくアグニルとの関係にしばらく悩ませられることになるのだった。



イツセーSIDE

アルトリアとアーサー兄さんの墓参りから帰ってきて数週間後、俺の家に訪れた人物が一人。玄関にはユキが出迎えてくれている。

「久しぶりでござるな、イツセー殿」

「ああ、久しぶりだな、ヤト」

ユキと共にリビングに現れた風格のある青年。忍、忍者といった古来日本特有の戦闘部隊のような真っ黒の服装。背にはこれまた日本特有の武具である日本刀を背負っている。黒髪で透き通った青い眼。それは、俺の昔からの知り合いであるヤトだった。

「まあ、取りあえずこっちに座ってくれ」

「かたじけない」

俺はヤトを立たせているわけにもいかないのでリビングとは別に
ある客室に招いた。ここは訪問者をもてなすための部屋みたいな
なものである。普段は使ったりはしない。兄さんには、客は相手に失
礼に無いようにもてなせ、とみっちり教育されたからな。この客室
は、あのころの王宮の客室に似せて作ってある。そして、ヤトにはペ
ンドラゴン家が使っている茶葉と同じものを使ったティーを出す。
これぞ、ペンドラゴン家直伝のもてなし方だ。ちなみに母さんたちが
使ってたものもある。どちらも日本では手に入らない者なので、入手
するには毎回ブリテンに行っているのだ。

ヤトはひとまずティーカップに手を付け、一口飲んだ。

「ふう、やはり、何度嗜んでも美味でござる。イツセーどのの出すお茶

は格別でござるな」

「ああ、そう言ってもらえるなら光栄だ」

この茶葉は言わずもがなアホみたいにお高い代物だ。ティーカップ一杯数万円はする。それだけではない。俺は、兄さんにお茶の入れ方をしこたま教えられたのだ。この程度、出来なければまた兄さんにゼロからしごかれる。『お茶もろくに入られないとは何事ですか!!! 恥を知らないさい!!!』って感じで。

あの頃は兄さんにアルトリアとそろってめちやくちや叱られたっけ。そんな楽しい過去を思いだす。

「さて、それでヤト。ここに来た理由はなんだ？」

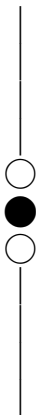
ヤトがここにきて一息ついたところで本題の話を持ち出す。カチャットとティーカップを置いたヤトは語りだした。

「実は、イツセー殿に今日は重要な報告があるでござる。とうとう、天照殿が動くでござる」

「ツ……そうか。ついに天照が……」

ヤトは、天照といった。天照とは、この地の神話体系、日本神話の主神天照大御神のことである。何故ヤトが天照の動向を知っているかというと、ヤトは日本神話の実働部隊のリーダー。さらには高天原の神々とも深いかわりを持つているからだ。

ヤト、そう本人は名乗っている。が、それは愛称というやつだ。ヤトには立派な名前が存在する。それは……英傑なる刀龍、ブレイド・ブラッド・ドラゴン夜刀神。ヤトは、世界でも珍しく特定の神話に属し、神たちと友好的な関係の築いている、数少ないドラゴンなのだ。



「それで？天照は全ての神を掌握したのか？」

「つまりはそういうこととござるな」

ヤトとの情報交換は続いていた。

まず一つに、日本神話主神、天照は高天原の神々、そしてそれに追

随する八百万の神々全員を纏めたらしい。これは相当根気のいることだ。

「やるな、天照も」

「その通りでござるよ。拙者も、天照殿に協力して八百万の神々たちと対話をしたでござる。本当に辛かったでござる。なんせ、八百万でござるからな。しかし何といっても、拙者よりも天照殿が一番の功労者でござるよ。最近は、少しの休憩もとらずに七徹、八徹くらいは当たり前前にこなしてたでござる」

「それは・・・凄いな」

俺は、天照のことを見直そうと決意した。

一つの勢力として団結するためにすべての神を説得するとは……これには頭が下がる。どこの神話の勢力も一枚岩なんてところはな。特に、多神教的な神話勢力では、様々な神が様々な思惑を持っているからだ。今現在では日本神話くらいではないだろうか？流石、主神ともいふべきか。いやはや、御見それいたしました。

ヤトはそう言つて、また一息つくようにティーカップに残っているお茶を飲む。それにつられて俺もお茶を飲む。

「イツセー。入るわね」

と、ここでこの部屋にドライグとティアが入ってくる。ティアは手にお茶の入ったソーサー。ドライグはお菓子を籠に入れて持ってきていた。

「おお、これはこれはドライグ殿、それにティアマット殿。久しぶりでござる」

「久しぶりね、夜刀」

「久しいな、ヤトよ」

「あ、ヤト。これ、食べてね」

「あ、かたじけないでござる。ドライグ殿」

ドライグは目の前にお菓子の入った籠を置いた。

ヤトはそれに手を付けながら言った。

「しかし、拙者は幸せ者でござるな。伝説のドラゴン、赤龍帝ドライグ殿と龍王最強のティアマット殿とこうして面と向かい合っているき

かいをもらえらるとは。同じドラゴンとしてもこれほどのことはないでござるよ」

「ヤト、そんな大げさよ」

「いえ、あなたがたの伝説は聞いてござる。拙者では敵わないほどの実力を持つている。ドラゴンとしてお二人に敬意を払うのは当然のこと。」

ヤトは謙虚に言った。しかし、それはヤトでも同じことだった。

「それを言うなら、私だってあなたのこと、極東の夜刀神のことは知っていたわ」

「私もだ。極東にはまだ見ぬ未知の力を持ったドラゴンがいるとな」

そう、極東、つまり日本にはドラゴンがいた。一体は邪龍、八岐大蛇。もう一体は夜刀神だ。ヤトはなんと刀剣を用いて戦うドラゴンだ。その背中に背負った日本刀で戦うのだ。普通にドラゴンとして戦えばいいのにもかかわらず、ドラゴンで剣を用いるということ、昔から有名だ。本人曰く、剣にハマっているのだとか。さらに、強さもなかなかのものだ。上位の龍王に匹敵、いや凌駕するほど力の持ち主なのだ。

「なんと、お二人に名を知ってもらっていたとは……拙者感激でござるよ」

と、ヤトはポリポリと頭を掻きながら恥ずかしそうに言った。

ドラゴン界ではティアやドライグ、アルビオンといった、強いドラゴンに名を覚えてもらうだけでもステータスになるというものがあるらしい。

「そうそう、そうでござった。もう一つイツセー殿に報告することがあるでござる」

「それってなんだ？」

「天照殿率いる日本神話は北歐神話に会談を持ち掛けられたらしいでござる」

「なに？・本当かそれ？」

俺は思いもしない相手であったので再度ヤトに確認した。

「確定情報でござる。天照殿はそれをどうやら受けるつもりもあるで

ごぎろう。天照殿だけでなく、須佐之男殿や月読殿も同じ見解と聞いているでござる。」

「そうか。流石は三人姉弟。意見が合うんだな」

「そうでござるな。しかし、何といても北の大神、オーディン殿からの通達でござる。流石に敵対勢力と繋がっているといえどもそう簡単には拒否はできないでござるよ。聖書の三大勢力ならそうはいくでござるが、相手は古くからある神話体系。無下にはできないでござる」

「ま、そうだな」

ヤトの意見に納得する。あの、戦いの神であるオーディンからか。よりによって。まあ、狙いは和平だろ。最近、クソ聖書の三大勢力は世界を平和にする路線に入った。その足掛かりとして北欧との和平を結んだらしい。ちよつと裏の世界について調べればすぐにその情報は手に入ったしな。そして次に日本神話。三大勢力は日本神話とのパイプがない。だからオーディンが出てきたというわけか。

「そうか。わかった。すまないヤト。今日はわざわざ」

「構わないでござるよ。さて、拙者はここで暇するでござる」

要件を言い終わったヤトはそそくさと帰る支度をする。もつとゆっくりしていてもいいのだが、ヤトはヤトで多忙らしい。なんせ、色々神話関係の仕事があるとか。真面目だなあ。タンニーンと同じくらい真面目だ。

「あ、そうでござる」

すると、ヤトが何かを思い出したように帰るところを足を止めた。

「イツセーどの。今時間はあるでござるか？」

「あるぞ」

「イツセー殿さえ良ければ、久しぶりに拙者との手合わせを所望するでござる」

ヤトは目をギラリとさせながら言った。その目はドラゴンさながらの鋭さがあった。

「……いいぜ。俺もさしづりにやってみよう」

俺はヤトの提案を受け入れ、すぐにそれにふさわしい場所へと移動

した。

話を聞いていたドライグとティアは妹たちを連れて来ている。

場所はすぐ近くだ。俺の家の裏側。竹林になっていて、少し開けたところに俺とヤトは立っている。そして、それを見物するティアとドライグと妹たち。

「久しぶりでござるなあ。大体四、五十年ぶりくらいでござるか？」

「ああ、そんなくらいだったな」

俺とヤトは正面を向かい合って確認した。

俺とヤトは京都で、出会ったのだ。その昔にな。そして、その出会いは高天原の神々と繋がるに至った。

「では、いくでござる」

ヤトは自身が背負っている剣を鞘から抜いた。鞘から抜かれた剣はまるで生きているかのように、戦いの雰囲気を感じ取って凄まじいオーラを出している。刃が片方にしかなく、しなやかなフォルムを持つ日本刀。日本の武士などが古来から使っている刀剣類だ。しかし、ヤトの持つあの刀はただの日本刀ではない。

妖霊刀、紅桜。妖刀の類では最強の一角とも言われている日本神話に古くから伝えられている刀剣だ。これは、日本神話のとある神が作った剣。様々な能力、妖力、呪いなどが込められている。それほど強力な刀剣を主神から賜っているヤトはそれほど日本神話から信頼されているのがわかる。神がドラゴンに贈り物を授けるなど、普通はありえない。ちなみにヤトは紅桜以外にも刀剣をいくつか所持している。

「すげえ妖力だな。それは」

俺はヤトの持つ紅桜から凄まじい妖力を感じつつ、俺も自身の刀剣を異空間から出現させる。

しかし、透明であるために剣があることは視認はできない。しかし、ヤトレベルの剣士ともなると気配で分かるだろう。

「フルクレリア
顕現せよ」

カツ!!

俺の掛け声の後、何も見えなかったところに剣のフォルムが現れ始

める。光に包まれながらその姿を現した。

「イツセー殿の聖剣は凄いでござるなあ」

俺の手に現れた聖剣。真聖剣エクスカリバー。アルトリアの愛剣にして、もう一つの地上最強の聖剣だ。ゴールド、シルバー、ブルーといった色に包まれた神々しい輝き。この聖剣を見ただけで力の弱い魔物たちはまず立ち上がれないほどだ。

互いに得物を持ち、構える。

「いざ」

「陣上」

「勝負!!」

日本式の合図で俺たちは一気に距離を詰め、剣をふるう。

キーン!!!

刃が当たり、鏝迫り合いとなる。

ヤトはそこから凄まじい速さで剣戟を俺に打ち込んでくる。ヤトはドラゴンでありながら剣を使うが、実際強い。この速さは尋常ではない。おそらく、俺が見た中では最高クラスのスピードだ。アルトリアや兄さんと並ぶほど。俺はそれによりやくついでいけている感じだ。

「くっっ!」

俺は体勢を立て直すために一旦後ろへ飛ぶ。

「逃がさないでござる」

キーン!!

後ろへ飛んだのにも関わらずもう距離を詰めていたヤト。俺はギリギリのところまでエクスカリバーで防いだ。

俺はパワーでそれを弾いて、反撃をする。

「はあっ!」

キーン!!

ヤトは真正面からエクスカリバーの斬撃を受け止める。しかし、そこからヤトは剣を縦にして俺の斬撃をしなやかに受け流した。俺が振るった力が地面方向に受け流され、俺は体勢を崩した。

「隙ありでござる」

シユパツ!!!

俺は体勢を崩されたところを紅桜で切られる。

ブシュツ!! 傷口から血が噴き出る。

あの一瞬で、ヤトは計十カ所も斬撃を俺にくらわせたのだ。

「クソー！」

俺はすぐに体勢を崩したまま反撃に出る。

「行け！ エクスカリバー！」

俺はエクスカリバーで斬撃を飛ばす。エクスカリバーは刃が当たらなくとも斬撃を飛ばすこともできる。しかし、ヤトはその斬撃をすべて紅桜一本で防いでいた。しかし、それは俺が距離をとるには十分な時間を稼いでくれた。

「ふう、相変わらず、エクスカリバーはすさまじいでござる。この聖なるオーラ。紅桜の妖力や呪いが全く役に立たないでござるよ。普通の相手であれば、今頃とつくにこの紅桜の呪殺でお陀仏になっているでござるのに。流石、アーサー王伝説に伝わる聖剣でござるな」

ヤトは呆れながら言った。

確かに、あの脅威的な呪いと妖力をもつ紅桜の能力を封じている。エクスカリバーはその手の能力を全て無効化できてしまうのだ。だから、俺にとっては紅桜は少し霊力が籠った剣でしかない。だが――

「何言ってやがる。そっちこそ、凄まじい妖力と呪いだ。エクスカリバーの聖なる加護でもキツイったらありやしねえ。おまけにさっきの受け流しは何だ？ 俺は知らねえぞ。」

「拙者も進化しないといけないのでござるよ」

武器の性能がこちらのほうが格段に上でも剣の腕でこちらが負けている。それでもヤトは以前は肉弾戦を得意としたドラゴンだったという。どうしたらこんな風になるんだか。よって総合的に俺とヤトは均衡を保っている。とはいえ押されている。

俺はエクスカリバーに魔力を籠める

エクスカリバーは俺の魔力を吸ってさらに聖なる力を増大させる。

「拙者も、力を出すでござる。唸れ、紅桜」

紅桜はヤトの掛け声に呼応し、妖力を開放した。凄まじい妖力が紅桜に結集され、それが形となって表れた。紅桜の刃が紫色に染まっていた。

俺とヤトは再び激突する。ヤトの方が手数が多く、俺よりも多くの斬撃を俺に届かせている。その間にも、紅桜からはすさまじい呪術、妖力、呪いが襲い掛かってくる。エクスカリバーもそれに対抗して聖なる力を放出させる。

しかし、聖なる力でも紅桜のちからを無効化できずにいた。

「これは、仙術か！」

「その通りでござる。紅桜の力に、拙者の仙術も混ぜたでござる」

仙術。それは一部の妖怪のみが扱える特別な術のことだ。それにも関わらず、ヤトはドラゴンでありながらそちらのほうも精通している。妖力や呪術に仙術が加われば厄介だ。聖なる力が効きにくくなる。

本当にとことん異端なドラゴンだ。しかも、かなりの仙術の使い手だ。おそらく、極めかけているレベルだ。これほど聖なる力が押し返されるとなると。本職であるはずの妖怪たちもここまで極めている奴なんていないぞ。

「くっ！」

俺はヤトのあまりの猛攻によるめいた。

傷がヤトの妖刀の力によって悪化しているのがわかる。鋭い痛みが突き刺さる。しかし、その傷口に広がる紫色の痣も消えていく。エクスカリバーの効果だ。持ち主の命を守る。それが、この剣が最強たる所以の一つ。俺の傷はすぐにふさがった。

「ハアッ!!」

痛みが消えたことよって、俺はヤトの動きについていけるようになる。

そして、渾身の一撃を奴にお見舞いする。

「ぬッ!?!」

ブシュッ!!

ヤトの胸部から出血する。

ヤトはそれを確認すると素早く後方に飛び、距離をとる。

「やられたでござるな。この程度の切り傷でも凄まじい痛みでござる」

ヤトはどちらかといえば魔、闇の属性に近い。よって聖剣の力に多少なりとも影響を受けるはずだ。

「丁度いい時間でござる。イツセー殿。今日は礼を言うでござる。拙者はこの後修行があるでござるから、この辺で失礼するでござる」

「ん？この後も修行か？」

「いや、実は拙者は指南役でござる。最近日本神話の戦闘部隊に入った新入りの指南をするように天照殿から頼まれているでござる」

「へえ、天照から」

とことんヤトは日本神話から信頼されているな。ドラゴンが師匠か。なるほど。俺みたいなもんか。おそらく剣術だろう。

「では、失礼するでござる」

ヒュン！

ヤトはすぐさま消えて去っていった。

「おつかれさま、イツセー」

「ああ、ありがとう」

「凄かったねえ」

「うん！ヤトのお兄さんもおにーさんも、すつごいかつこよかった」

「ありがとな、ユキ」

妹たちがおのおの驚いていた。

まあ、そうだろうな。戦い方は違えど、ヤトもヤトで強者だ。妹たちにもいい刺激になったのだろう。

「でも、ヤトはほんとにすごいわね。あの妖刀。私もヒヤツとしちゃった」

ドライグは苦笑しながら言った。

「私は、あれで龍王でないのが不思議でならない」

ティアも同様に驚いている。俺もそう思う。ヤトは龍王に名を連ねてもおかしくなかった。いや、龍王以上の存在であるのは間違いない。

「ああ、ほんとだ。完敗だな。ヤトは切り札を一つも使わなかった。」
「え？・そんなの？」

「ああ。ヤトは力をセーブしていた。まあ、俺が弱いだけかもしれないねえがな」

俺はため息をつきながら言った。兄さんに教えてもらったけどやはり、上達しない。ほんとに宝の持ち腐れだよな。ただ聖なる力を高めて飛ばすしか能のない、俺では。

「確かにあれで力をセーブしていたなら、やつは龍王以上の強さだが、イツセーの本職は魔法と武術だろう。イツセーは弱くなんかないさ。分が悪いとしかいいようがない」

「そうはいってもなあ」

ティアはそう言ってくれているが、なんか腑に落ちない。

「ハハハ、見ていたぞイツセー。相変わらずの剣の扱いが下手だな」

ニトラは逆に俺をからかってくる。

「仕方ないだろう？・昔から剣は苦手だ。兄さんに基本しか教わっていない」

「そうだな、昔はアーサーに死ぬほどしごかれていたな」

ニトラはけらけらと笑いながら言った。

「あれは地獄だったさ」

「まあ、とにかくだ。イツセー、お前は寄り道をせず、魔法を極めていけばいいさ。剣術は嗜む程度にしておけ」

「そうそう。せっかく私と一緒に新たな境地へ来たんだから」

ドライブが凄い笑顔で俺の手を取りながら言った。

「ああ。そうだな」

俺も、ドライブに笑みを見せる。

「くっ……私だって、すぐにその域に追いついて見せる」

「ああ、ティア、待っているぞ」

逆にティアは決意を改めたようだった。

こうして、俺と日本神話は動き出したのであった。新たな目的のため

めに――

No, XLV 　　く 北欧の大神と日本の太陽神く

この真つ白な世界はセーイチの精神世界である。その精神世界では、凄まじい声でなくドラゴンと、それをただただ見ているだけの少年セーイチとそれをなだめている少年がいた。

『うえええん……………乳龍王……………おっばいどらごん……………うわああああああああん!!!』

アグニルはまるで子供ののように鳴き声を上げていた。

「たつくよお、毎日毎日うるせえぞ！アグニル」

『だつてえ、だつてえ!!ハル!!おっばいどらごんだよ!!こんな!こんな!のつてないよ!!!うわああああああああああんん!!!』
「あくあつたく、手に負えねえなこりゃ」

薄い桜色の髪をした少年、ハルは呆れて者も言えないようだった。そして、ハルに近づく少年セーイチは申し訳なきさそうにしていた。

ハルは同じくして、歴代の紅炎龍児の双籠手イグニタス・クロスギアの歴代最強の所有者であり、唯一白龍皇に勝った人物である。そして、この神器の中で意識をもって今もこうしてセーイチやアグニルとコミュニケーションが取れる人物でもあるのだ。

「ハルさん……………これどうしましょう?」

「おお、セーイチか。どうしたもんかねえ。精神状態は少し回復したと思えば、今度は幼児化か。おれにはどうしようもないな」

さすがの歴代最強といっても、このような異質な状況となつては対処はできないようであった。

「そうですか……………」

セーイチは見事に禁手バランス・ブレイカー化へと至つた。しかし、その方法を間違つてしまった。そのおかげでアグニルはこうして情緒不安定となつて悲惨なことになっているのだ。セーイチはこのところ毎日神器へもぐっているが、ことは進展しなかつたのであった。



「あーあ、マジどうしようか」

セーイチはアザゼルから出された課題を全く解決できないまま、今日も学校に通う。

そして、放課後。いつものようにセーイチたちは旧校舎へといき、部活を始めることになった。

「よお、セーイチ。どうだ？アグニルの様子は？」

前髪のみ金髪で後は黒髪の中年男性、アザゼルがセーイチに尋ねる。

セーイチは首を横に振ってこたえた。

「駄目です。精神状態が不安定で……。今日は幼児退行してましたし……」

「そうか……よし分かった。こちらでも調べてみる。わかったことがあったら遠慮なく言えよ？」

「分かりました」

「よし、では今日の活動を始めるがその前に、お前たちに話しておくところがある」

アザゼルは部員全員を集めて会議を始めた。

「アザゼル、それで話すことは？」

部長であるリアスがアザゼルに問いかける。

「近々、この地で神々同士の会談が行われる。北欧神話と日本神話だ」「ええ!?あの爺さんと日本神話が！」

そう言った知識に疎いセーイチは驚きの声を上げる。

「そうだ。オーディンの爺さんが日本神話の主神に直接通達したそうさ。いい返事が返ってたとたいそうご機嫌だったよ。あの爺さん」

アザゼル自身も、この日本神話の返事には満足しているような顔をしている。

平和路線を進む三大勢力は北欧神話をはじめとして、様々な勢力にアポをとっていた。そして、何一つパイプのない日本神話との会談であるが、そこを北欧のオーディンが会談を持ち掛けたのだった。

「しかし、日本神話は良く引き受けたわね」

「借りにも北の大神オーデインだ。そう簡単には拒否できないだろうさ。ともかくだ。近々、オーデインの爺さんとその従者が来るはずだ。お前たちグレモリー眷属とシトリー眷属はオーデインの爺さんが日本にいる間の護衛だ。心してかかれよ？なんて言っても、北欧のトップだ。狙われないなんて保証はない。いいな？」

「わかっているわ」

「はいー」

「がんばりますう」

アザゼルの一声に呼応するかのように生徒たちは元気よく返事をしたのだった。



「行ってらっしゃい、イツセー。天照によろしくね」

「ああ」

ドライブに見送られて俺は家を出発した。そして、転送魔法陣を用いてとある場所へと向かったのだった。

先日、久しぶりにヤトと剣戟を交し、天照達日本神話がとうとう行動を開始したという情報を受け取って一週間たった。俺は今、日本のある神社に出向いていた。

という話をしていくうちにたどり着いた。ここは日本ではとても有名な神宮である。日本神話に通ずる立派なお社だ。もちろん、祀られている神も当然有名だ。ここは日本神話において最も位の高い重要な五柱ある神のうちの一柱、前主神の天之御中主神アメノミナカノヌシノカミを祀っている巨大な神宮。ここは毎年多くの参拝客が来るのだとか。天之御中主神アメノミナカノヌシノカミは高天原に最初に現れた最高神。その実力は主神の天照以上の力を持っている。彼はもともとは日本神話の主神であつたらしいが、天照にその地位を譲つたのだとか。よって日本神話の世界でも珍しい二代目の主神が誕生しているというわけだ。俺も天之御中主神アメノミナカノヌシノカミには

あつたことは無い。是非とも会ってみたいものだ。

そんなことを考えながらこのお社の境内に入つてゆく。すると、そこにとある人物が立っていた。その人物は俺が近づくと俺に気づいた。

「お待ちしておりました、イツセー殿」

「えっと、君が案内役か？」

「はい、天照さまから仰せつかつております。白雪といいます。以後、お見知りおきを」

「ああ、よろしく。知っていると思うが、俺の名はイツセーだ」

頭を下げながらこちらに名乗つてきたこの少女は白雪というらしい。天照から案内役として聞いていた。当日に境内の入り口付近に案内役をつかせる。日本古来の装束である巫女服を着ている。白と赤のみというシンプルではあるが気品のある様相だ。彼女の黒髪がよりその巫女服を映えさせているといったところ。規模が大きく、祀られている神も高名な神社にはこのような巫女さんが一人以上いると聞いている。もちろん、裏世界に通じている人もいるのだとか。白雪はそのうちの一人か。

「ではイツセー殿。この先で、天照さま達がお待ちになられています。こちらへ」

「ああ、分かった」

俺は白雪の後ろをついていった。名を聞いたことのある有名な神社ではあるが、実際来たの初めてだ。ここは案内してもらおう。

境内を歩き、靴を脱いで中に入っていく。木のみで作られているこのお社は京都と同じく風情にあふれている。ギシツ、ギシツ、と歩を進めるたびに木と木がこすれあう音がする。確か京都にある二条城も歩くと床がきしむ音がするような構造だったはずだ。同じ構造なのだろうか？

「ほお、なるほどな。ここは、ただのお社ではなさそうだ。凄まじいほどの神性を感じられるな」

「まあな。なんせ、日本の創造神を祀っているからな」

ニトラがそうつぶやいた。

そう。ここは日本神話において最高神の一柱を祀っている。高天原の神々からも重要視されている神社の一つ。ゆえに特別な気配がするのだ。

ニトラと話しながら歩いていると、とある部屋の前に来た。

「天照さま。お客様をお連れしました」

「そう、入れてあげなさい」

「はっ」

閉ざされた障子の前で白雪がさういうと、中から凜とした女性が部屋にいれるように命じた。

障子が開かれたその部屋には……………

「お待たせしたな、天照」

二代目日本神話主神、天照大御神が座っていた。

日本古来の着物を着ている。おそらくは着物がはやった時代よりもさらに前。たしか、元の原型は古墳時代に存在したものらしい。しかし神が着ているものは様々な点で優れている。太陽神の名にふさわしいきらびやかな赤を基調とした装束、首には勾玉を掛けている。「ええ、大丈夫。まだオーデイン殿たちは来ていないから。そちらに座って」

「わかった」

天照の指示通り、俺は天照の後ろに座した。位置的には従者が座るようなところである。

「おや、イツセー殿。まさかイツセー殿も来るなんて思わなかったでござる」

そして俺の隣にはヤトがいた。

「まあな。天照に俺が頼んだんだ」

「そうだったでござるか。しかし、イツセー殿が護衛をするというのなら、これ以上ないほど安心でござる。イツセー殿ならばたとえ誰が来ようとも関係ないでござるからな。心強いでござるよ」

「おいおい、ヤト。そんなにプレッシャーを掛けるなよ」

なぜ、日本神話の正式な人員ではない俺がここにいいのかという
と—————先日天照と連絡を取っているときに俺が天照に

言って加えてもらったのだ。

『イツセー、久しぶりっ!』

『ああ、そうだな、天照』

『私たちの動向は、ヤト君の方から聞いているよね?』

『まあな、そっちは北の神々、オーデインと会談するって聞いたぞ』

『ええ。オーデインから直々にそのように文書が来たのよ。断るに断れなくてね』

『そこは別にいいだろ?問題はそのオーデインの裏にくっ付いているやつらだ』

『そおねえ………なんでもこの会談の発端は三大勢力。やつらが焚きつけたに違いないね』

『あいつらは必ずこの会談中に動いてくるぞ』

『わかっている。にしても、よくもまあオーデインは三大勢力なんかと和平を結んだよねえ………やつらには、三大勢力はどう考えても他の神話を侵犯し続けている。特に、悪魔の駒を認めるのはどう考えてもおかしいよ………それとも、何か手を使って丸め込んだのかな』

『オーデイン相手にそんなのは通用しないだろ。多分、オーデインは自らの意思で和平を結んだに違いない』

『はああ………面倒なやつらが敵に回っちゃったね』

『仕方ないさ。とにかく、表立って対立するのは三大勢力だけのほうが無難だ。流石に日本神話としても北欧神話を完全に敵に回すのは厄介だろ?』

『そうだね。こつちとしても最高神様が動いてくれればいいんだけど、それは期待できないしね』

『なら、こちらも同盟を結べばいいんじゃないのか?』

『そうだけど、どこと結べばいいのやら………私たち、ろくに外に出ていなかったから今更他の神話とのパイプなんて持ってないし』

『そこで提案がある。聖典神話勢力。あそこは、完全に聖書神話と敵対しているからもしかしたらあるかもしれないぞ』

『そ、そうなの?ありがと!イツセー!次に行われる高天原での最高

会議での議題にさせてもらおうわ』

『お役に立てて何よりだ。そうだ、天照』

『なに?』

『今回の北欧との会談、俺も護衛という名目で参加させてくれ』

『それに関してはいいいどうか、イツセーが護衛をしてくれるなんてこれ以上ないほど安心するけど、どうして?いつもはめんどくさいって言ってるやらないのに』

『なに、ちよつとこの目で、北欧の大神を見てみたいだけさ。それと、なくんかまた起こりそうな気がするんだよなあ』

『やめてよイツセー。イツセーの予感の高確率で当たるんだから。ま、でもその件は承ったからね』

『さんきゅ、天照』

先日、天照とこのような連絡を取って、滑り込みでこの会談に参加しようというわけだ。護衛は俺を含めて三人だと聞いた。今日は会談の日ではないから一人は来ていない。なんでも新しく入った期待の新人なんだとか。今日は北欧からくるオーデインとその護衛達との軽い顔合わせと会談の詳細の確認、日にちを決めるみたいなものと聞いた。

「とはいえ、拙者も北の戦神オーデインをこの目で見るのは初めてで
うげん」

「そうなのか?」

オーデインが来るのはまだということなので、俺たちはひそひそ声
で話す。

ヤトは俺よりも当然長生きしているが、俺と同じくあったことはな
いという。

「まあ、ろくに日ノ本から出たことは無いでござるからな。拙者も、他
の神話の神がどのようなものなのか見たくて天照殿に直談判しての
でござるよ」

「なんだよ、俺と一緒にじゃねーか」

「そのようござるな」

ヤトも天照に頼んで従者という扱いで参加したのだという。これを聞いた俺は親近感がわいた。

「皆さま、オーデイン様とその付き人の方々が到着されました」

ヤトとヒソヒソと話していると、白雪が閉じられた障子の外から報告する。

「分かったわ。お通しして。二人とも起立して」

天照はとたんに雰囲気を変え、プライベートのときとはギャップがある凛々しい声音で言った。

俺とヤトは立つ。

障子が開かれ、そこにはローブを来た老人、オーデインとその従者がいた。

「久しぶりじやの、天照殿」

「はい、お久しぶりです。オーデイン殿」

オーデインは長く伸びたひげをさすりながら上機嫌でご登場した。

「ふうむ、相も変わらず美しいのお。わしの嫁に迎えたいくらいじゃ」

「まあ、オーデイン殿。御冗談はおやめください」

オーデインは会ったとたんに天照をドストレートに口説いていくオーデイン。会ったことがないから厳格な神かと思ったが、これを見るにどこにでもいるフツツのエロジジイであった。見た目は風格ある強そうな爺さんなのだが。

神同士の会話など俺には理解できないが、天照は慣れているのか、女性が良くやる笑顔で受け流した。

「オツ、オーデイン様!!いきなり相手方の主神様に向かって何口説いているのですか!!!」

すると、オーデインを一人の女性が叱責していた。

その女性はオーデインの付き人、おそらく伝承通りならばヴァルキリーといったものだろう。そのヴァルキリーを見た時、俺は驚いた。そのヴァルキリーは古き昔、アヴァロンにいたときとある人にそっくりであったからだだった。スーツを着こなし、いかにもまじめな感じもあの人とそっくりであった。

「綺麗な方でござるな」

オーデインを叱責している女性の美貌はドラゴンであるヤトをも認めるような容姿であった。

「そうだな」

俺もそれに同意する。

とはいえ、昔の知り合いにうり二つの容姿。アーサー兄さんとい、アルトリアといい、母さんや父さんといい、俺の周りには容姿が整っている人が大勢いたのだ。特にアーサー兄さんの周りはそれが顕著だった。このヴァルキリーにそっくりの俺の知り合いも、兄さんの血縁であったのだ。

「少しくらいええじゃろうに。天照殿の美貌はそれくらい凄いいいことじゃ」

「確かにそのことについては同意しますが、場をわきまえてください」「やれやれ、ほんとにお主は堅いのう。それじゃから彼氏の一人もできんのじゃろうて」

「それいま関係ありますう!？」

オーデインとその付き人の一人であるヴァルキリーがコントを展開する。

「おっと、すまんのう天照殿。茶番に着き合わせて」

「いいえ、おきになさらず。こちらにお座りください」

「すまんの。では失礼するぞい」

少し盛り上がったところで、オーデインは脱線した話をこちらに戻す。オーデインは付き人たちをそれぞれ座らせた。

「では、一先ずお互いに自己紹介と行きませんか」

「それがええじゃろう」

今日は会談の前ということを手始めにそこから始めた。

最初は天照からということになった。

「では、私から。日本神話の現主神、天照です。どうぞよろしく」

その次、その護衛という扱いである俺とヤトの番だ。

「初めましてでござる、北の大神オーデイン殿とヴァルキリー殿。拙者は夜刀神、英傑なる刀龍フレイド・ブラッド・ドラゴンとも呼ばれているでござる」

「ほう！ドラゴンとな。では、お主がああ極東の夜刀神なのか？」

「そうでござる。」

「なるほど、日本神話の神々と仲が良いドラゴンがいるというのは真じやったのか」

ドラゴンが神の護衛をする、そんな話は他にない。この事実には北の大神オーデインも、そしてヴァルキリーの方々も驚いていた。

「初めましてだ、北の大神よ。俺はイツセー。魔法使いをやっている」
「お主……たしか、悪ガキ墮天使とミカエルのやつがしてやられたという魔法使いじゃな？」

「その悪ガキ墮天使というのはアザゼルのことか？」

「そうじゃて」

「ああ、それは俺で間違いないな」

「なるほどのお、しかし日本神話に与しているとは知らなかった」

オーデインはやはり三大勢力とつながっていた。さらには様々な情報を受け取っていたらしい。これで俺のことも北欧に伝わったことだろう。

「さて、次はわしじゃな。知っているかと思うが北欧神話主神のオーデインじゃ。これ、お前たちも挨拶せい」

オーデインは従者のほうにも催促した。

「えっ、っと初めましてみなさま。私はヴァルキリーをやっているロスヴァイセと申します。以後お見知りおきを」

「こいつはな、ヴァルキリーの中でも優秀での。現ブリュンヒルデにも匹敵するくらいなのじゃ」

その話を聞く限りそうとう優秀なのだろう。ブリュンヒルデといえば、北欧の戦いの乙女の象徴。半神半人ともいわれているのだ。

「その点は申し分ないんじやがの、いかんせん頭がお堅いのじや。よって、いい男でもいれば紹介でもしてくれんか？のう、その二人さん、ロスヴァイセはどうじや？こう見えても優良物件じゃぞ？」

「オーデイン様!!だからいま私に彼氏がいないのは関係ないではないですか!!」

「何を言うとするんじや。お前さんが彼氏いない歴いこーる年齢とかいっつも言うておるから頼んどるんじや」

「余計なお世話です!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ロスヴァイセというヴァルキリーは顔を真っ赤にしながらオーデインに食って掛かる。俺たちはオーデイン神のノリに微妙についていくことが出来ず、苦笑いをしていた。

「見てくださいよ!!お三方完全に引いてるじゃないですか!!」

ヴァルキリーの悲痛な叫び声がこの部屋にこだました。

オーデイン神は気を取り直して、話を戻す。

北欧側の護衛はそのロスヴァイセという女性ともうひとりのヴァルキリーの二名。そして、ここにはいないが、境内の外には…………

「オーデイン殿、一つよろしいですか?」

「なんじゃ?」

「この境内のそとにもう一人護衛がいるそうですね。しかも墮天使。なぜ墮天使がいるのですか?私はオーデイン殿とその従者の方々はこの地に入る許可を出していますが、墮天使に許可を出した覚えはありません」

天照も墮天使の存在には気づいていた。天照は鋭い目でオーデインを見ていた。日本神話と三大勢力は現在何の関係も持っていない。敵同士と捉えられることが普通だ。今、おそらく墮天使を日本神話の実働部隊が囲んでいるだろう。しかし、気配から見ると墮天使はおそらく幹部クラスの力を感じられる。実働部隊たちでどうにか抑えられるかどうか…………

「はて?日本神話とあやつらは仲が良かったのではなかったのかの?」

「何のことですか?そのような事実はありません。やつらは勝手にこの地を訪れ、占領している、そのような認識で我々は行動しています」
ここで天照は強気の姿勢で出た。早くもこのようなムードになっている。あちらのヴァルキリー二人は早くも焦りが出ていた。

「ふうむ…………困ったのう。天照殿、今日は見逃してはくれないかの?あやつは一応ワシの護衛ということ出来ているのじゃ。ならば

わしの従者という扱いにはならんかの？」

今まで好き勝手に侵入を許してきた日本神話であるが、ようやくそのことについての抗議をしてようなものだ。これを見た天照は少し間を開けて答えた。

「わかりました。今回はオーデイン殿の頼みということで目をつぶりましょう。白雪、部隊を撤退させなさい」

「畏まりました」

天照はそとで墮天使を囲んでいる部隊を下がらせた。

「すまんの」

「いえ、お気になさらず」

このようなやりとりも落ち着いたところで話は進んでいったのだった――

今日は会談の前の挨拶の会のようなもので主神たちは世間話のようなものに浸っていた。出されたお茶を飲みながら会話をしていた。

「して、天照殿。前主神である主之神殿はどうされたのじゃ？」

「最高神様は隠居なされましたと聞いております。そして、私が主神に任命されたのです。最高神様直々に」

そんな会話がされているのが耳に入る。

俺たちも俺たちで自由にしているのと言われていたが、俺は話すことは特に何もなく、ただずっと正座をしている。時折ヤトと話していた。そこへ……

「あ、あのーす、すすすす少しお話をしませんか!？」

そこへヴァルキリーの一人であるロスヴァイセという女性が来た。この上なく緊張して噛みまくっていた。

「あ、う、うん。いいですよ」

「え、えっと、イツセー、さんは魔法使いとおっしゃってましたよね?」「ええ。」

「私も、北欧の魔術、魔法を嗜んでいます。同じ魔法使いとして、交流

をしませんか？」

俺は思ってもみない状況になった。まさか、あちらからこのような申し出があるとは思わなかったのだ。北欧の魔術、魔法を習得している者と知識の交換が出来るようなのだ。北欧の魔法技術は独特であり、とても進んでいるのだ。俺は、北欧の魔術、魔法だけはまだ手付かずなのだ。基本程度は書物でしか見たことがない。

「ああ、ぜひそうしよう。北欧魔術を扱う者とこのように話すのは初めてなんだ」

このまたとない機会を逃すことは流石にしたくない。

俺はヴァルキリーをやっているロスヴァイセさんとこの会が終わるまでお話をした。

一時間かそこらがたったくらいだろうか？その辺で今日の挨拶会のようなものは終了した。

オーデインとヴァルキリーはここに滞在するためにホテルへと移動していった。もちろん宿泊するところは日本神話が用意したところである。

その帰る際、オーデインは俺に近づいてきて少々会話をしたのだ。

「のう、魔法使いや」

「何用だろうか、オーデイン神よ」

「ロスヴァイセのやつはどうじゃった？」

「はあ・・・どう、というと？」

「鈍感じゃのお。お前さんは魔法使いというからあやつろ話が合うと思っただのじゃが」

「はあ、確かに話は面白かったですよ」

確かにロスヴァイセさんは勤勉な人で努力であそこまで言ったのだという。研究という共通の話題で盛り上がった。

「そうかそうか。それだけきければいいぞよ」

と、いつてよく分からないまま帰っていった。

ちなみにヤトはヤトでロスヴァイセさんと普通に話をしていたし、もう一人のヴァルキリーと話していた。両手に花とはこのことらしい。

あつた。
　　というか、ヤトは普通に女性の扱いになれているのだと思った俺で

No, XLVI 寝坊助

「よお、バラキエル。オーデインの爺さんの護衛、ご苦労だったな」
『アザゼルか。ああ、まあな』

とある日の夜、オーデインとの戯れを終えたアザゼルは墮天使組織の幹部、バラキエルと通信をとっていた。アザゼルが座っている机の前にはスクリーンみたいなものが現れ、映っているのは墮天使の幹部であるバラキエルであった。アザゼルは意気揚々と構えているが、それとは対極にバラキエルは厳しい表情をしており、ただならぬ雰囲気漂わせていた。

「おいおい、なんだ？随分と元気ねえじゃねえか。ま、朱乃にあれだけきつく拒絶されたからわかるけどよ。いつまでも落ち込んでいらねえぞ？」

バラキエルを何とか元気づけようとアザゼルは振舞うが、当の本人は変わらぬ顔をしかめたままだった。元からいかつい顔をしているが、さらにその顔のいかつさが極まっている。バラキエルはその堅い口を開いた。

『それもあるがな。むしろ、そのことが大半なのだが。まあ、それは置いておいてだ。アザゼル、組織のトップに一応伝えねばならんと思つてな』

「ん？なんだ？」

バラキエルのいつもと違う雰囲気のアザゼルは違和感を覚えるが、バラキエルに続けさせた。重苦しい雰囲気にも包まれる。

『お前も知っているかと思うが、私がオーデイン殿の護衛をしていた時だの話だ。』

「おお、それがどうしたんだ？何かあったのか？」

『オーデイン殿と日本神話の会談の前の会合でのことだ。私はいきなり数十人の集団に囲まれ、襲撃を受けた。』

「何だと!？」

バラキエルがその旨を伝えると、アザゼルは声を荒げた。自身の仲間が他の勢力かもしれない集団に襲われたのを知れば、普通は冷静に

いられないだろう。

「そいつらは何もんだ？ 禍カオス・ブリゲードの 団カオス・ブリゲードか？ 被害は？」

アザゼルはすぐに素性をバラキエルから聞き出す。しかし、バラキエルは顔をしかめながら言った。

『禍カオス・ブリゲードの 団カオス・ブリゲードならば、どれだけマシだったことか……』

「何だと？ 禍カオス・ブリゲードの 団カオス・ブリゲードではないのか？」

アザゼルは禍カオス・ブリゲードの 団カオス・ブリゲードとにらんでいたようだが、見当が見事に外れて意外そうな顔をした。実際、このところ禍カオス・ブリゲードの 団カオス・ブリゲードという組織は様々な勢力へ喧嘩を売っており、各勢力の上層部の頭を悩ませているゴロツキの組織だ。

『私を襲撃したのは……。おそらく格好からして日本神話だ』
「何っ!？」

バラキエルの言葉を聞いたアザゼルは驚きのあまり立ち上がった。その際、テーブルの上の酒ががたがたとこぼれそうになる。

「どういうことだ？ なぜ日本神話が……？」

『おそらく、私を敵とみなしているのだろう。だから、私を部隊を使って襲撃したのだ。それ以外考えられることは無い』

「……それで、どうなった？」

『実際に日本神話の戦闘部隊と刃を交えた。しかし、すぐに部隊は何事もなかったかのように撤退していった。おそらく全員人間だ。それでも大したことは無かったが』

「そうか……今回は相手が人間だったとはいえ、日本神話にはいまだ滅茶苦茶強いやつはいるんだ。主神の天照はもちろん、須佐之男や武御雷とかな。今回は助かったな」

アザゼルは一先ず安心する。しかし、バラキエルは事態を重く見ていた。

『アザゼル……どうやら、日本神話は俺たちが思っていた以上にこちらを良く思っていない。これは警告と捉えても不思議ではない。日本神話は世界の神話と比較しても侮れない相手だ。全戦力を向けられたら、こちらの被害はどうなるかわかったものではないぞ』

アザゼルはバラキエルの懸念を真剣に受け止めた。日本神話は、二

代目の主神に変わったということでは知られている。そのため、他の神話の神々からは様々なことを思われている。だが、侮れはしなかった。なぜなら、日本神話には他の神話の主神たちを圧倒するような存在がいるともいわれているからだ。

「ああ、分かっている。今になってようやく日本神話が動くのか……。こりや、相当やべえかもしれないねえな。」

『とにかく、やつらをあまり刺激しないのが一番だ。次は何をされるかわからんぞ』

「ああ。俺たちとしても、日本神話と友好関係になりたいと思っっている。そうすればより和平へと躍進できる。だから、このロキの襲撃をなんとかしても阻止する。俺たちだけでだ。そうすれば、日本神話にも少しは接触できる可能性を掴めるかもしれん」

今宵、アザゼルは三大勢力の中でいち早く脅威を知ることとなったのだ。しかし、日本神話にとっての超えてはならない一線を、すでに悪魔、墮天使、天使たち三大勢力は超えているのを知ることが無かった。



「おじやまするでござるぞ、イツセー殿」

「ああ、ヤト。ではさっそく始めるとしようか。ドライグもティアも準備完了しているぞ。」

「了解でござる」

会谈の後、ある理由からヤトが俺の家へと訪問してきた。そして、ヤト、俺、ドライグ、ティア、妹たちとともにある儀式の準備を始めたのであった。



「ドライグ、きみはそこに居てくれ。ティアはもう少し右だ。そう、そこだ。」

「うん。わかった」

「ヤトはティアの正面に」

「了解したでござる」

今、俺たちは魔法陣を発動するために決まった位置にドライグ達を配置している。これから実行しようとしていることはドラゴンゲートを開くことだ。ドラゴンゲートは別名龍門とも呼ばれている特殊な術の一種だ。主に二点間の移動に使うことが一般的に使われているらしい。文字通りこれはドラゴンのみしか操れず、ドラゴンのみしかこの門をくぐることはできないものだ。

なぜおれ達がドラゴンゲートを開こうとしているかというのと、あるドラゴンに接触を仕掛けるからだ。

実は、あの会の翌朝、天照から連絡があつたのだ。なんでもオーデインが襲撃を受けたらしい。しかも、その相手は同じ北欧神話の悪神ロキだという。まあ、いわゆる予感的中したわけだ。しかもロキはゴ丁寧にあの神殺しのフェンリルまで使ってきたらしい。この世界には神殺しと呼ばれる存在が二つある。フェンリルはその一つだ。別名フローズヴィトニル。二天龍に勝るともいわれている魔獣だ。そんな奴とは是非戦ってみたいものだ。だが、相手はこちら側、天照や高天ヶ原をも攻撃対象としていたらしい。オーデインからはこちらから防衛部隊を編成すると言っていたが、おそらく三大勢力がしゃりやり出てくることは明確だ。天照は「あちらの護衛など信用できるはずがない」なんて言っていたので、こちらはこちらで部隊を組むらしい。よって、急遽北欧のことについて本格的に情報収集をするわけだ。そこでその情報源を探し、白羽の矢が立ったのがとある一体のドラゴンってわけだ。

「にしても、ドラゴンゲートなんてものは知ってはいたけど、これを発

美しい色を発している。

グウオン!!

ゲートが開き、お目当てのドラゴンが現れた。俺たちの目の前に。『ふわあ~~~~ん~~~~?なにになに?まだ何かあるの・・・!!?』

眠たそうな声音をしている巨大なドラゴンである。だが、俺たちの姿を見た瞬間眠気は吹っ飛んでいった様子だ。先ほどまで半開きというよりも、ほぼ閉じようとしていた瞼はしっかりと開かれている。

「おお~~~~」

「おつきなドラゴンさん!!」

「壮観・・・」

「ドライブグ姉よりおつきいね」

初めて見る新たなドラゴンに妹たちは心を躍らせているようだ。あちらが何も言っていない。まあ、俺たちが呼び出したのでとにかくこちらからあいさつでもしよう。

「初めましてだな、ミドガルズオルム」

『キミなの?僕を呼び出したのって』

「ああ、そうだ。悪かったな、寝るところだったのか?」

ミドガルズオルムは基本この世界の何処かで眠りに付いていると聞いている。寝ているところを起すのは忍びないが、こちらもちからの事情があることは説明したい。

『いや、それはいいけどさ。さつきまで起きてたし』

よかった彼はそれほど気にしていないようだ。

「久しぶり、と言っておこう。ミドガルズオルム」

「私はこうして面と向かって会うのは初めてね、ミドガルズオルム」
ティアとドライブグはミドガルズオルムに声を掛ける。と、ミドガルズオルムはまた目を見開いた。

『ええ!!ティアちゃんに、ドライブグう!?なんで君たちが!?いや、ティアちゃんは分からなくもないけど、ドライブグ!キミに至っては千年くらい前に三大勢力に討伐されて神器にされたはずじゃ!』

ミドガルズオルムはドライブグが復活していることに驚いた。しかし、眠っていると聞いていたのだがよく知っているんだな。このドラ

よお!! 昔のことを話すの!!」

ドライグが少し涙目で顔を赤くしながら必死にミドガルズオルムに訴えていた。時々こちらを横目で気にしながら。

『ん? 何を慌てているのさ? ドライグ。ん? ははあん。なるほど、なるほど。そういうことねえ.』

ミドガルズオルムは俺とドライグをきよきよと見た後、何かを悟ったようにうなずいた。対してドライグはというと、今だ顔を赤くしていた。

ミドガルズオルムは何をニヤニヤしているんだ? まあ、いいか。

『ま、ドライグやティアちゃんが人間の姿でこんなところで暮らしているなんてね。夢にも思わなかったよ。それに、そちらのおチビちゃんたちもドラゴンかな?』

ミドガルズオルムがドラゴンゲートを開き、それを維持している一役を担っている妹たちを見ながらいった。

『うん! そだよ!』

『はじめまして、龍王さん』

『よろしくね!』

『うん、よろしくね、チビちゃんたち。なるほどね。君たちもその年でそこまでの力があるんだね。このドラゴンゲートを開いているのも納得だね。育ては親の教育がいいのかな?』

ミドガルズオルムはまたしても俺の方を見てくる。本当に察しが良いドラゴンだ。こんな龍王も面白くてたまらないな。

『うん。今日は本当に面白いな。ドライグにティアちゃん。上級種の龍の子供にも会えるなんてね。そして、さらに珍しい存在がいるね』

ミドガルズオルムに視線を向けられたヤトは一步前に出て口を開いた。

「はじめましてで御座る。偉大な龍王殿。拙者はブレイド・ブラッド・ドラゴン英傑なる刀龍、夜刀神でござる。こうして会えて光栄でござる。ミドガルズオルム殿。拙者のことはヤトとよんでほしいでござる。」

『うん、わかったよ。でも、そんなにかしこまらなくてもいいよお。僕なんて、龍王なんて呼ばれているけど、全然大したことないから。こ

うして引きこもっているだけの龍王の面汚しだよ』

ヤトの敬意に少し嬉しそうにしながらも、謙遜するミドガルズオルム。ま、ヤトはドラゴンとは言い難いほどの礼儀の良さだ。特に龍王や二天龍などの名を残す伝説級の存在を敬っている。

『君のことは噂程度には知っていたよ。なんでも、日本神話の神々と友好的で、日本神話にその存在を承認されているドラゴンだとね』

「おや、ミドガルズオルム殿にも知ってもらえようとは。嬉しい限りでござるよ」

『う〜ん、もうどう見ても君のほうが強いと思うけどなあ。なんでヤト君が龍王じゃないわけえ?』

龍王と日本神話の戦闘部隊のリーダーが謙遜し合う。そんなドラゴン同士でもお目にかかることのできないような光景を目の当たりにしている。

『それで、僕を呼び出したということはそれなりなことなんですよ?』
「それについては拙者から説明するでござる。実は、北欧のオーディン殿と日本神話の会談後、北欧の悪神ロキが襲来したとのこと。これを受けて日本神話としては自衛行動をすることになり、そこで保険として北欧の情報を得ることになったのでござる。結果、拙者は日本神話の依頼を受け、イツセー殿に協力を依頼して貴殿をドラゴンゲートで召喚したでござる。」

ヤトは簡潔にその旨を伝えると、ミドガルズオルムは何やら浮かぬ顔をしていた。

『ああ、なるほどねえ。君たちもなのかあ』

「ん?ミドガルズオルム、君たちも、とは?」

『ん?ああ、君たちが僕を呼び出す前にも同じようなことを聞かれたんだよお。三大勢力かな?言ってしまうば。ああ、アグニルにも会ったよお。なんかすつごく精神が崩壊しかけてたけどお。まあ、まだまだ若いししょうがないよね』

ミドガルズオルムの発言に、俺たちは確信した。オーディンの方の防衛部隊は奴らしい。全く持って大丈夫なのかと心配する。あのような奴らじゃ突破されかねない。

「そうであったでござるか。しかしそれは気にしなくていいでござる。拙者を含め、日本神話は奴らを信頼していいでござる。それに、今回のことは日本神話がやつらを追及する材料になるかもしれないでござる」

『アツハハ！ そうなんだ。いやあ、辛辣だねえ。これは総督たちも魔王たちも大変だねえ、これからが』

ミドガルズオルムは他人事のように言った。

まあ、日本神話の考えも間違っていない。北欧のロキ、さらにはフェンリル、さらにそのロキの娘のヘルときた。そんな強敵相手に未だ力のない学生を神の護衛に充てるとは本当に三大勢力は何を考えているんだ。しゃしゃり出てきたくせにこれとは。本当に護衛をする気はあるのだろうか？ フェンリルなんだぞ？ あれの牙はどの神だろうと一撃で葬るんだ。

『ま、とにかくわかったよ。というか、誰が戦うの？ ヤト君とドライグ？』

「いや、拙者とイツセー殿。それと、日本神話の部隊でござる」

『そつか。それでも僕からしたら戦力としては十分だと思うよ。いいよ、分かった。僕はどの勢力にも肩入れする気は今のところはないからね。で、えらくと、じゃあまずは今回の襲撃の親玉であるダディからかな』

いろいろと本題に入るまで時間がかかったが、ミドガルズオルムは説明を始めた。

『んくと、ダディは正直あまり脅威じゃないと思うよ。特に君たちのような規格外の連中にはね』

ミドガルズオルムは俺やヤトのことをそんな風に思っているらしい。まあ、それは置いておこう。引き続き、俺たちはミドガルズオルムの話に耳を傾けた。

『ダディよりもやっぱ脅威なのはワンワンかなあ。でもグレイプニルっていう鎖があればワンワンの動きを止められるよお』

「グレイプニル、でござるか……」

「それは、北のダークエルフでしか精製できないと聞くな。俺の魔法

の監獄レージングの鎖でも果たして捕らえられるかどうか……」

『わお！魔法使い君はそんなのもあるんだねえ。強度はどれくらいなの？』

俺がつぶやくと、ミドガルズオルムは魔法に興味を示してきた。

「まあ、いいとこ龍王を完全にとらえるくらいだ。そんなに使ったこともないから強化もしていない。今のティアには効かないな」

「やめれくれ、イツセー。あのころの私にとっては軽くトラウマものだったぞ」

『いやいやいや、ティアちゃんを軽くトラウマにするとかどんな魔法なのさ』

昔のことを回想しながらも話がそれたので元に戻す。

「イツセー殿、とりあえずグレイプニルは拙者らが調達をするのでござる」

「分かった。俺もレージングを強化しておこう。万が一使える時があるかもしれないからな。ミドガルズオルム、他の手段は？フェンリルは正面から抑えられるか？」

俺はグレイプニル以外の方法を探るために他の聞いた。

『うくん、ワンワンは少なくとも滅ぼされる前のドライグと同等かそれ以上だからねえ。でもそれ以上に気を付けるべきなのはやっぱり牙かなあ。それにさえ気を付ければ君たちならなんとかなるんじゃないかなあ』

「なるほどな、戦前のドライグと一緒に、か。なら大丈夫そうだな」

そのあと、俺たちはロキやフェンリルについての情報をミドガルズオルムから聞き出した。ミドガルズオルムは自身を生み出した、いわば親であるはずのロキなのだが、平気でペラペラと情報をくれた。ロキがやられても心配ないのかと聞いても、気にしていない様子だった。まあ、その辺はドラゴンらしいところだ。

『ああ、そうそう。言い忘れてたよ。』

「ん？なんだ？」

ミドガルズオルムがふと思いついたことがあるという。俺はその話に耳を傾けた。

『えつとね、フェンリルって二体いるんだよね。』

「そうなのか？」

『うん。それが赤いフェンリルなんだよ。ダデイが生み出したものか
どうかは知らないけどね。昔いたのを思い出したんだ。そのフェン
リルはダデイには従わないと思うから、戦闘に参加するかは知らない
けどね』

「なるほどな」

これは知らなかった情報だった。フェンリルは知っていたが、まさ
か赤いフェンリルがいるということは初耳であった。

『むしろそいつも厄介だよ。知能が異常に高いんだよ。何故かワンワ
ンなのに魔法が使えるっているね。昔そのフェンリルに優しくして
もらってたなあ。僕はねえねえと呼んでたけどね』

「そうなのか・・・すまない、助かった。」

知りもしなかった新たな情報をくれたミドガルズオルムに感謝す
る。これを知っていると知ってないとは大きく戦況が違っていた。

『ああ、そのことなんだけど。もしねえねえが戦場に来たときは殺さ
ないでほしいな。一応昔のことがあるし、死んでほしくないとは思っ
てるから』

ミドガルズオルムからそのような依頼が来る。それを聞いて俺は
少し面食らった。このドラゴンにもそのような感情があったのだと。
しかも相手は異種族であるはずなのにだ。

「とにかくわかった。その赤いフェンリルが来たら捕縛を優先しよ
う」

俺の答えを聞いたミドガルズオルムは顔をにっこりとさせた

『ありがとう、魔法使い君。恩に着るよ』

「俺のことは、イツセーでいいぞ、ミドガルズオルム」

『そう、じゃあイツセー。ありがとうね』

「お互い様さ」

俺とミドガルズオルムの中が深まったその時、俺たちに訪問者が現
れた。

「え〜何々？何をしているの?」

ドラゴンゲートを開いている俺たちのもとに一人の美しい姫君。アーシャが現れたのだ。

「アーシャか。見ての通り龍王をドラゴンゲートで呼び出しているところだ」

「そうなの、初めて見るドラゴンさんね」

アーシャは種族上はドラゴン、のはずだ。実際俺でもアーシャは不思議な存在とだっていい。当然、ドライグやティアともまた違った雰囲気を纏っているアーシャには興味を引き付けられるわけで

『えー？キミもドラゴンなの？それにしてもなんか神聖なオーラを纏ってるね？ほんとにドラゴン？どちらかという神や天使っぽいなあ』

大いにわかる。あの美しい見た目ならばそう見えても仕方がなかった。

「ええ。そうよ。私はアカーシャ。アーシャって呼んでね？大きなドラゴンさん？」

『うん、よろしくね』

初対面同氏のミドガルズオルムとアーシャ。この世界のドラゴンとあちらの世界のドラゴンが顔を合わせた瞬間だった。ミドガルズオルムはあちらの世界のことを知っているのだろうか？知っていたら凄いなと思うが。

ふとここで俺は気づいたことがある。アーシャは普段だいたい兄貴といえることがある。ということは、当然アジ・ダハーカはいるわけで……

「んあ？んだよ、誰かと思ったら北の引きこもりやろうじゃねーかよ。それと、知らねえドラゴンがいやがるな」

案の定、ディアボリズム・サウザンド・ドラゴンの禁龍、アジ・ダハーカが俺たちの前にいた。

アジ・ダハーカの姿をみたミドガルズオルムは顔を豹変させていた。

『ちよっ!?なんでここにアジ・ダハーカがいるのさ!?!』

「あ？俺がどこにいよーと勝手だろ？」

『そうじゃなくてさ！大体君は何千年も前に滅んだはずだよねえ？』

ミドガルズオルムの言った通り、分かる人にはわかる言い伝えだ。

悪の体現したドラゴン、アジ・ダハーカは封印される形で永久に滅ぼされた。しかし、それは真実ではないのだ。

「イツセー殿、イツセー殿」

「なんだ、ヤト?」

アジ・ダハーカがミドガルズオルムとやり取りをしていると、ヒソヒソ声でヤトが俺に尋ねてきた。

「あの方が良くも悪くも有名な邪龍、アジ・ダハーカ殿でござるか?」

「そうだ。邪龍最強候補だな。まあ、強いぞ。滅茶苦茶」

「イツセー殿のおっしやる通りでござるな。ああ見えて隙が無いでござる」

ヤトはアジ・ダハーカの強さを感じ取ったようだ。

「なんだ、お前もそんな迷信を信じていたのか?確かに俺は封印されたがそれはもう過去の話さ。俺は封印を自力でぶち破ってこの世に復活したってわけだ。伊達に邪龍やってねえんだよ」

『そんなことが……』

「お兄ちゃんのお友達もいるよね?クロウお兄さんにアポプスお兄さん」

「やめろ、アーシヤ。あいつらは友達じゃない」

「そんなこと言いつつも、いつもバトルしてるじゃない」

真実を聞いたミドガルズオルムは開いた口が塞がらなかった。自分の知識が間違っていたからだろう。

そんなミドガルズオルムは

『えええ……クロウ・クルワツハもアポプスもいるのお……ドライグといい、邪龍たちといい、イツセーは世界征服でもするの?』
盛大に引きながらミドガルズオルムは俺を呆れた目で見ながら言った。

「なぜそうなる?」

失敬な質問をされる。俺はどこぞの魔王でもなんでもないぞ。

『いや、だってさあ。明らかに昔よりも力をつけてるドライグ。それだけじゃないよね。ティアちゃんもアジ・ダハーカだって昔とは比べ物にならない強さになってるよお。そんなやつらが周りにいたら普

通じやないよお』

「確かにみんな強くなったがそれは世界征服などというくだらない目的のためなんかじゃない」

『アハハ・・・まあ冗談で言ったつもりだったけどねえ。さてと、今日はこんなところでいいかな?』

「ああ、すまないな。ミドガルズオルム」

「かたじけない、ミドガルズオルム殿」

『ううん、いいよ。今日はとっても面白かったし。意外な出会いもあったからねえ。あ、そうだ。時々話し相手になってほしいなあ。君たちとなら全然退屈しないから』

「ああ、わかった。時々ドラゴンゲートを開くことにする」

『ありがとね、イツセー。ヤト君も、お仕事頑張つてね。まあ、怠け者の僕に言われたくないと思うけど』

「龍王からの激励、痛み入るでござる」

『じゃあね、またお話しよ』

こうしてドラゴンゲートは閉じ、俺たちは手に入れた情報をさっそく活用するのであった。

NO, XLVII 決戦前

ミドガルズオルムをドラゴンゲートで呼び出し、いろいろと情報を聞いたあとだ。俺は今日あった出来事を思い返しながら自身の魔法である監獄の鎖の強化にあたっていた。魔法を発動すると、監獄の鎖が発動し、鎖の一部が現れる。この魔法は対魔獣用の鎖だ。魔獣を確保、または自由を奪うために作られた魔法である。ミドガルズオルムにはグレイプニルを紹介してもらった。しかし、グレイプニルにも多少の欠点欠陥がある可能背も否めない。ダークエルフがどれほどの技量を持っているかはわからないが、準備しておいて損はないだろう。

にしても、これで俺がドライグやティア、ましてや邪龍たちをも味方につけているということが新たな人物に知られてしまったわけだ。だが、ミドガルズオルムは口外しないということは約束してくれていたからまあ、心配ないだろう。ドライグは俺にとって切り札とっていい。だが、ドライグという切り札をここで切るわけにも行かない。いまここでドライグが復活したと広まれば、面倒だ。まだ、ここじゃないのだ。しかし、相手はフェンリル。ましてや、それが二体が増えるかもしれない。油断はならない。

「フム、面白いやつだったな。ミドガルズオルムは」
「そうだな。あんなドラゴンもいたんだな」

ミドガルズオルムとは会話をせず、ずっと俺の中で聞いていたニトラはミドガルズオルムに興味を持っていた。

「またやつを呼び出すときには私も混ぜて話しておきたいものだ」

「ああ。それにしても、あいつの驚く顔が浮かぶぞ。龍霊界の世界のドラゴンだっことを知ったらな」

ミドガルズオルムも流石にはこの世界のことしか知らないはずだ。ただ、気づくかもしれない。アジ・ダハーカとアーシヤのことは見ているからな。アジ・ダハーカに縁者がいるということは基本知られて

いない。彼女はもともとこの世界にいたドラゴンの子で、あちらの世界で生まれ、育った。アーシヤはそれほど特別な存在なのだ。今度、そのことも交えてミドガルズオルムに教えてやろうと思う俺であった。

そんなことを思いだし、対北欧勢とのことをあれこれと考えていると、俺のもとを尋ねる人物が一人。

「ねえ、イツセー。ちよつとだけいいかな？今時間ある？」

「ああ、ドライグか。いいよ、入ってきても」

まさに今俺が思っていた切り札、赤龍帝ドライグである。

俺はドライグを自分の部屋に入れた。

「う、うん。ありがとう」

「イツセーよ、ドライグとは二人で話せ。私は先に行っている」

「あ、ああ……」

ニトラはドライグの姿をひと目見て、何かを悟ったように俺の精神世界の奥へと帰っていった。

ドライグはすこしことばに詰まらせ、礼を言った。にしても、勘違いだろうか？ドライグの頬が少しばかり赤いような気がしなくもない。

たどたどしく入ってきて、ちよこんと俺のベッドに腰掛けた。こんな時間にドライグが俺の部屋に来るのはそう珍しいことでもないが、今日はいつもとは雰囲気違っていった。

「それで？今日は一体どうした？いや、別に用がなかったらきちやだめってことではないんだが」

誤解されそうだったので、俺は言葉を補ってドライグに聴いた。

すると、ドライグは少し間を開けて喋り始めた。

「うーんとね、その……ミドガルズオルムが言ってたよね？その、私の昔のこと……」

ドライグは自分でも言いたくなさそうにいった。そこまでのいいにくいことなのだろう、と思いつながらドライグの言葉に耳を傾ける。

「それで、その……イツセーはさ、私のことどう思ってる？」

唐突すぎる質問に俺は言葉を失った。それにまず、質問が抽象的すぎて答えに迷う。そりゃあ、今も昔も俺を支えてくれたり、した時間をともした仲だ。なんにせよ、判断材料が少ない。俺はもつと情報を引き出すことにした。

「どう、とは？」

俺が困っているのもあつてか、ドライグは喋りだした。

「ミドガルズオルムが言ってたじゃない？私の過去のこと。血で血を洗うなんて。イツセーからしたら、そんな血生臭くて、暴力的な女なんて、いい印象を抱かないでしょ？」

それを聞いて俺は納得した。あのとき、ドライグが必死になって過去のことを話そうとするミドガルズオルムを止めようとしていたが、そういうことだったらしい。こちらの顔色を伺っているドライグ。少し目尻に涙を浮かべている。俺は目の前にいる女性の不安を取り除くべく、俺は本心を話した。

「別に、そんなことを俺は気にしちやあいなさ。むしろ、いいんじゃないか？ドライグは、ドラゴンとして戦いをしていたんだろ？ドライグはドラゴンなんだから、戦いを求めるのは当たり前じゃないか？それに、女でありながら、それほどの強さになるまで力をつけてきたドライグを俺は尊敬するよ、カッコいいじゃん。赤龍帝ってさ」

「ほ、ほんと？じゃあ、私のことは……」

「嫌う理由がどこにあるの？むしろ好意しか抱いていないよ」

「そ、そうなんだ……よかった……」

俺の言葉を聞いたドライグは、先程までの自信なさそうな顔が一転し、嬉しそうに笑う。やはり、こうでなくっちゃな。ドライグは。

そういえば、ドライグの過去のこととはあまり聞いたことがなかった。これだけ一緒にいても、俺は過去のドライグ、生前のことはあまり知らなかった。ただ、三大勢力に対して、相当な被害を与えながら討伐されたとしか聞いていない。ドライグに聞こうとしなかったという点もあるが、なんとなくドライグが言いたくなさそうだったからなあ。今度はドライグに聴いてみてもいいかもしれない。

話題を変えようと、ドライグは口を開く。

「そ、そうそう！イツセー、今度はフェンリルたちを相手にするのよね？大丈夫？」

「あ、ああ。心配するなよ、ドライブ。俺の今の实力はドライブが一番よく知っているはずだ」

ドライブは、俺の修行を一番近くで見てきたんだ。それも、俺が生まれて弔い合戦で悪魔たち葬ったときからだ。あれからずっと共に強くなってきた。それでも、ドライブは心配しているらしい。しかし、こんなに気にかけてくれる人がいるのはとても嬉しいことだ。幸せというべきか。

「それはそうだけど……今までとは相手が違うじゃない？神なのよ？北欧のロキに、ヘル、それにフェンリルたちだよ？」

「わかってる」

そう言われれば、今回が初めてかもしれない。神二体を相手にするかもしれないというこの状況だ。しかし、ロキやヘルはそんなに武神としての性質はあまり強くないと聞く。それに比べれば、雷神トールやオーディンのほうがはるかに強い。勿論相手は腐つても神だ。油断はできない。だが……

「なーに、大丈夫だって。ロキやヘルなんかよりも、よっぽどアジ・ダハーカやクロウ・クルワツハやアポプスを相手することのほうが質悪いだろ？今回は俺ひとりじゃない。ヤトや、日本の部隊もいるんだ。それでも、きつくなったら呼ぶから」

「イツセー……約束だからね」

ドライブや、ティアは俺にとっての切り札とわかっていい。今まで、ドライブやティアをこうした場面で戦わせていない。いや、正確には戦わせないように俺がそのようにもっていつている。ドライブが復活していることを悟られないためだ。ティアも、討伐はされていないが、こうして表舞台から姿を消しているのは知られている話。それを、ここでおおっぴらにしたら、また面倒だ。だが、それでやられたら元も子もない。そして、あのドライブの有無を言わさない鋭い眼。俺は絶対にやばくなったら応援を呼ぼうと誓った。

「……………」

「・・・・・・・・・・」

と、あれから会話がなくなっている。お互いを見つめたままだ。だんだんと顔が赤くなる。やはり、さっきのことを引きずっているのか
「えっ・・・・・・・・とそれじゃ、私、戻るから」
「あ、ああ。うん。おやすみ」
パタン。

この雰囲気には耐えきれなくなったドライグはさっさと俺の部屋を出て行ってしまった。

あとになって、とても恥ずかしいことをドライグに対してしてしまったのだと思うと、急に恥ずかしくなってきた。自分でも、顔が少し赤くなっているのがわかる気がする。

「フッフッフ・・・・・・・・見ていたぞ、イツセー。中々に楽しめた」
そして、ここで絡んでくるニトラ。こういうことに関しては鼻が敏感なのである。

「というか、精神世界の奥に行つたのじゃなかったのかよ」

「何をいつている。あれはフェイクだ。私はイツセーに気付かれなようにドライグとのやり取りを見ていたぞ?」

「なんだと・・・・・・・・では、あの会話はすべて、筒抜けだとも?」

「当たり前だ。しかし、イツセーがあんなことをドライグにささやくとは。成長したなあ」

「ぐっ・・・・・・・・仕方ないじゃないか、あの状況なら」

「まあ、及第点だな。だが、ドライグのあの曇った表情を消し去ることができたから良しとしよう」

手厳しい・・・・・・・・

精神世界でニヤニヤしながらこちらをからかってくるニトラの姿が思い浮かぶ。きつと新たなじり材料ができて楽しんでんだろうなあ。

そんなことを思いながら、俺は寝るまで対フェンリル用の魔法の強化作業を続けるのだった。



パタン

私はイツセーと少し会話をしたあと、部屋をあとにした。廊下を歩いて、自分の寢床に行く。

ガチャ

自分の部屋のドアを開け、自分のベッドに飛び込んだ。

今までは、妹たちと一緒に寝ていたけど、少し前、妹たちは自分たちだけで寝るって言い出し、妹たちだけの部屋ですやすやと寝ているはず。前まで、夜は苦手のようで私と寝ていたけど、成長したなあとつくづく思う。

今、この部屋には私しかない。

仰向けに倒れ、私はさっきのイツセーとの会話を思い出す。

『嫌いになる理由がどこにあるの？むしろ好意しか抱いてないよ。』

イツセーが私にいつてくれた言葉。その言葉が頭の中でループする。

「うう．．．．．」

顔が熱い。顔が赤くなっているのが自分でもわかる。でも．．．

「うへへえ．．．」

口が勝手ににやけてしまう。

嬉しかった。ミドガルズオルムが余計なことを喋ってくれたおかげで、私はイツセーに変に思われてしまったんじゃないかと心配した。今の世の中、人間界ではインターネットと呼ばれる一種の通信技術みたいなものがあって、そこで聞いたことがある。一般的に男はおしとやかな女性、守ってあげたくなるような女性、可愛らしい女性のほうが好まれる傾向が強いつて。私の周りでいうとアーシャとか、妹たちとか、時々会うイツセーの昔からの知り合いとか。私はお世辞にもそれに近いとは言えないと思つた。でも、それは杞憂だつた。イツセーはむしろ、私に好意を抱いている、そう言つてくれた。私の耳がおかしくなかつたら。聞き間違いではないよね．．．．．？イツセーの言葉があまりにも嬉しくて、本当に現実なのかと疑つてしまふ。だ、大丈夫だよ．．．．．？

私はあれこれと考えながら寝返りをうつ。

にしても、復活してからというもののいろんなやつに変わったのだ、女性らしくなったただの言われる……昔の私ってっそんなにひどかったのかな……？今思えば、少しショック。

「んん……」

でも、今日はとってもいいことがあった。おかげでいい夢が見れそう。

イツセーの好意がどういう意味での好意なのかわからない。でも……嫌われてないってことは、期待してもいいんだよね？

私はそのような幻想をいだきながら眠りについた。



同時刻、世界のとある場所で世界を混乱に落としている組織、カオス・ブリゲードの団のなかの部隊である白龍皇チームが何やら様々な調べ物しながら計画をしていた。

「なあよお、ヴァーリ。本当に乱入するのかい？」

「なんだ美猴？不服か？」

この集団のリーダーであるヴァーリは特別な書物を見ながら、美猴の質問に横目で答えた。

「俺はぜひともロキやフェンリルと戦ってみたい。なにせ、相手は神だ。神と戦える絶好の機会ではないのか？お前としても、新たな戦闘相手ではないのか？」

「そりゃ、そうだけんどよおくでもよお、今までの相手と違うぜい？フェンリルとか正直どうすんだよ？あれ、話に聞く限りアルビオンと同レベルだったんだろ？」

「まだそんな事を言っているのですか？美猴。いつものあなたらしくない。確かに、強敵ですが、だからこうして北欧に関しての勉強をしているのではないですか」

美猴がなおも愚痴を言っていた。そこに、山のように積み上がった本の数々を持ってきた金髪の男が一人。品位のある高そうな服を着

ている。

「へえへえ、わかったよ」

妖怪、美猴はアーサーが持ってきた書物の一冊を手に取りながら
渋々承諾した。ヴァーリたちが読んでいるのはまさに北欧に関連す
る書物諸々であった。ヴァーリはそのなかにある北欧の魔法に関し
ての本であった。北欧の魔法は世界でも突出していると言われてお
り、その術式などは一般の者共やゴロツキが知ることはできないも
のだ。しかし、例外としては書物にある。世界の誰かが書いた魔法に関
する書物がこの世界に散らばっているわけだ。ヴァーリが目を通し
ているものはそのうちの一つ。ヴァーリは先程から真剣に北欧の魔
法について研究しているようだ。

「アーサー、これ持ってきたよ」

「ありがとうございます、ジャンヌ」

「ううん、どういたしまして」

そこにジャンヌがさらに書物を持ってきて、テーブルにおいた。
アーサーがジャンヌにお礼をいうと、ジャンヌは笑顔で応える。本当
に嬉しそうであった。

「どうやら、フェンリルには、これといった対処方法はありませんね。
強いて言えば、あの牙さえどうにかすることぐらいでしょうか」

アーサーは書物を読みながら言った。

「アーサー。俺達がフェンリルを抑えている隙に、その
教会が謳^{エクス}カ^スリ^バー!^ラの聖剣でフェンリルを支配できるか?」

ヴァーリの狙いに気づいたアーサーは笑みを浮かべて言った。

「なるほど、わかりました。検討してみましよう。あ、そうそう。美
猴、いろいろ調べているときに聞いた話ですが、あなたのご先祖様が
動き出しているそうですよ。なんでも、龍王の玉龍^{ウーロン}と一緒にあなたを
探しているのだとか」

アーサーが書物のページを捲りながらしれつと美猴に伝える。そ
れを聞いた美猴は顔色がどんどん悪くなっていき、ダラダラと冷や
汗を目に見えて流していた。

「げえっ!?ま、マジかよ、あのクソジジイめ……俺がテロをやっ

ているのがバレたんか？しかも玉龍ウーロンまで！」

「ハツハツハ、孫悟空の初代か、それは面白そうだ。美猴、一度お前の故郷を訪ねてみるとするか？孫悟空と玉龍ウーロンに会ってみるのも楽しそうだ。」

ヴァーリが冗談交じりにいうと、美猴はさらに顔を青くさせていった。

「おいおいおい、ヴァーリい、それはほんとにやめとけよお……引退気味の玉龍ウーロンはともかくとして初代のクソジジイは正真正銘のバケモンだぜえ？未だに現役つつつても差し支えねえし、仙術と妖術を完全に極めてつからマジで手がつけらんねえんだ」

「んにゃくく、美猴がシバかれる未来が見えるにゃ」

「ちつくしよう……おまえらよお、みんな他人事だと思つてよお……」

周りからさんざんイジられるキャラ付けとなっている美猴。全員、美猴と初代孫悟空の話で盛り上がっていた。しかし、このときは全員思いもよらなかつただろう。この集まった子孫たちのうち、しごかれるのは美猴だけではなかつたということ……



時刻は午後六時を過ぎたところ。

三大勢力にとって、決戦の時の数時間前であった。不動誠一は悪神ロキとの決戦ギリギリまで自身の精神世界に入っていた。目的は、そう。相棒であるアグニル対話をするためであった。アグニルを宿すセーイチは二人の少女の胸を揉みしだいて禁バランス・ブレイカー手に至ったのは周知の事実である。しかし、それと同時にアグニルはダメージを追ってしまった。それを改善すべく、セーイチは神器の中に潜っているのだ。

『……………』

「……………」

セーイチとアグニルはこうして面と向かっていた。お互いに無言

で喋ろうともしなかった。それを歴代最強の宿主、ハルがじつと傍観していた。このままじゃ何も進まないと思ったのか、ハルは口を開いた。

へ二人共、黙ってちやあ、埒が明かねえぞ

その言葉を聞いて、アグニルは渋々口を開いた。様子を見ると、アグニルの精神状態は回復しているように見られた。

『ねえ……相棒くんさ……』

「あ、ああ……怒ってる？」

セーイチは恐る恐る聞いてみる。セーイチも、セーイチで罪悪感を感じていた。

『いいや、僕は怒ってるわけじゃないんだよ。』

「え？」

セーイチはぽかんとした表情をした。アグニルは続けた。

『確かにさ、君が禁 バランス・ブレイカー 手に至ったことは素直に褒めてあげるよ。でもさ、そのおかげで、ぼくらなんて呼ばれてるか知ってる？』

「お、おっぱいドラゴンです……」

ギロリと視線をセーイチに向けながら言うアグニル。その気迫に気圧され、ほそぼそとセーイチは言うしかなかった。

『そうだよ、そうなんだよ。ぼくはさ、悲しいんだよ……』とある人に憧れて、力を付けてきた。それはそれは毎日毎日必死こいたんだよ？それでも、頑張ってぼくは龍王入りしたんだよ？それで？行き着いた先が『乳龍王』？『おっぱいどらごん』？本当に冗談じゃないよ……ぼくのあの日々を、一瞬でぶち壊してくれたよね？ねえ？どうしてくれるのさ？ぼくは一生このままあんな巫山戯た名前で呼ばれると思うと、もう怒る気もわかないよ。泣けて来るよ……グスツ……』

「その節は本当に申し訳ありませんでした」

セーイチはアグニルの悲痛な思いと、涙をみて土下座を決める。それをみたハルはこのやり取りを仲介した。

へまあまあ、アグニルよお。そのへんにしてやれつて。セーイチも才能がゼロながらたどり着いた結果じゃねえか。それに、今までのよう

な運命も変えたんだぜ？これも一つの道だと思って、突き進んじまおうぜ？」

「ハルさん……」

「オメーもだぞ？セーイチ。本当に強くなるなら、アグニルのことも考えてやれよ？女のことを考えるなどは言わねえけどよ」

「わ、わかりました」

『……グスツ……わかったよ。とにかく、この件はひとまずここで保留にしろくよ。ロキと戦うもんね』

セーイチは必死の対話を続けたおかげで、アグニルとの関係をどうにかロキ戦に間に合わせることができた。

と、セーイチは現実世界に帰還する。セーイチが外を見ると、もう日は暮れていた。

時計を見ると、午後八時丁度。

セーイチは慌てて仲間のところに合流する。

「お、おまたせしました」

「お、セーイチ、来たか。どうだ？アグニルは？」

「は、はい。一応、対話は成功しました。」

「おお、よくやった。セーイチ」

「はい、頑張ったかいがありましたよ」

アザゼルは神器に理解あるので、少しアグニルの状況を心配していたが、セーイチの報告を聞いて安堵した。

「あ、セーイチくん。ぶきげんよう」

そこに、最上級悪魔の筆頭、ソフィアがセーイチに近寄ってきた。

「あ、ソフィアさん。助っ人っていうのはソフィアさんだったんですねー！」

「ええ、そうよ」

お互い、再開を喜んでいるようであった。

「でも、ベオグラードさんは一緒じゃないんですか？それに、お二人は眷属すらいらないのに」

「ベオは別の件で出払っていたから、私だけなの。それに、眷属を私達サタン家が持たないのは前に話したでしょ？」

セーイチがそれを聞いて、考え込んだ表情をした。セーイチは、冥界で修行をしたあと、サタン家の二人がなぜ眷属を持つていないか理由を聞いたのだった。そのセリフが、セーイチの中で過った。

◎◎◎

『私達が眷属を持たないのはね、私達自身が、イーヴイル・ピース悪魔の駒にいい感情を抱いていないからよ』

『え？それって……』

『あれはまあ、お前に分かるように行ってしまうえば、命を冒瀆する行為だ。神以外なら、意志にかかわらず転生させてしまうものだ。あれを乱用しようものなら、他の神話が黙っているはずがない』

『他の神話に、悪い印象を持たれていると？』

『ええ。さらには、イーヴイル・ピース悪魔の駒に関してのこの制度。これじゃあ、眷属なんて奴隷も同然に扱う悪魔も出てくるし、黙認状態。残念だけど、私達が意見を押し通すのも難しい。だから、私達は行動に表すべく、イーヴイル・ピース悪魔の駒の受け取りを拒否したの————』

◎◎◎

『そ、そうでしたね……しかし……』

理由を知ったセーイチは衝撃を受けた。しかし、それは悪魔の方針を否定しているも同然だった。セーイチはそのことを理解した反面、サタン家の考えも否定できるものではなく、そのことが気にかかっているようだった。

『ま、とにかく、今は目の前の敵を葬りましょ』

『は、はい。そうですね！』

セーイチは考えることをストップして、目の前の敵に集中した。

このあと、決戦の時間まで、グレモリー眷属と談笑などをしあっていた。

北欧神話と日本神話の会談日。

俺は天照に指定された場所へとやってきた。そこは、最初にオーディンとの会談の打ち合わせに使用された神宮であった。そこにはもう既に人が数十人待機している状態であった。そこにはヤトの姿も見られた。

「イツセー殿、来たでござるか」

「ああ。ヤト？そっちのやつは？」

ヤトは俺の存在に気づくところちに近づいて来た。ただ、やってきたのはヤトだけではなかった。どこかで見たような少年を引き連れ、
ていた。

「なあ、ヤトの旦那。こっちのひとがもしや……？」

「おまえ……たしかコカビエルと一緒にいた……？」

「そうでござる。イツセー殿、紹介するでござる。あのコカビエルとの一件の後、日本神話の戦闘部隊に配属されたフリードでござる」

「ご紹介にあずかりやした、フリードでやんすよ。魔法使いの旦那のことはヤトの旦那や天照の姉御からたくさん聞いてるっす。よろしく頼むでやんすよ」

「ああ。こちらこそ。俺はイツセーだ」

フリードとか言ったな。少し前にコカビエルと行動を共にしていたはず。あの場面で血だらけで倒れてたが生きて、しかも日本神話に入っていたとは知らなかった。もとはクリストの戦士のはずであるが、他宗教の人間をも軍門に入れる……日本神話は本当に寛容というか、手段を選ばないというか。

ともかくにも日本神話は着実に戦力を増長させつつある。来るべき戦いの為に――

「魔法使いの旦那、よかつたらいいんすけど、俺っちに旦那の持っている聖剣を見せてください。旦那の聖剣は、俺っちがこうしてここにいる理由の発端何です」

「何？では、お前は聖剣の真実を知っているのか？」

「そうつすよお。教会のクソ爺イどもははなつから俺つちたちを全員騙してたんですわあ。教会は聖剣を謳ってるすけど、俺つちは偶然旦那の聖剣が本物であることを知ったんす。俺つちは教会ではやっていく気が無くなつて飛びだしたんすよ」

おどろいた。教会が聖剣を偽っていることに加え、世界各地から聖剣の類を強奪していること、俺が真のエクスカリバーを持っていることを知っているのは俺の身内以外基本いないはず。だとすれば、フリードはあの事件を偶然見たかもしれない。この存在を知らせるのは少々危険だ。しかし、日本神話に入っているのなら心配はなさそうだ。

「いいぞ」

「そうでやんすか!!ありがとうございます!」

俺は魔法陣を展開させ、亜空間世界に保管してある真聖剣エクスカリバーを取り出す。

「一顕現せよ《フル・クリア》」

この聖剣には常時視界にとらえられなくするような術式を掛けている。真聖剣エクスカリバーは紛れもない国宝級の武器、宝具である。これを持つだけでも箔が付くというもの。いろんな奴らがあわよくば手に入れてやろう、と思っている。よって姿を隠している。それをここでは解除する。

「スツゲエ.....これがモノ本かよ.....俺つちが使つてたやつなんてこれに比べたらただの板切れじゃねえか.....」

当然。いや、あんなものは比べる事すらおこがましいくらいだ。あんなものと真聖剣エクスカリバーは決定的に性能が違う。

フリードは真聖剣エクスカリバーを食い入るように見ている。まあ、絶対にお目にかかることは無いものだから当然だろう。

「皆様、そろそろお時間です。お二人は私についてきてください」

会談の前に聖剣のお披露目会をしていると、この巫女さんである白雪が部屋に入ってきた。俺とヤトは白雪についていく。白雪がとある部屋に案内してくれた。そこから、門を開いた。開かれた門をくぐると、そこに広がっていたのは人間界とはまるで違った世界――

——高天ヶ原であった。今回の会談、どうやらここでやるらしい。高天ヶ原は日本神話の神々が住む世界だ。ここにつながる門を開ける白雪さんは日本神話において重要な人間の一人ではなからうか。

そして、いかにもVIPたちがいるような部屋に入り、今回の主役たちを待つ。それほど時間が経たないうちに今回の主役たちである北欧と日本の神々のご登場だ。

「それでは、始めましょうか」

北欧側はオーディン、日本側は天照。両者が席に座ったところで会談が始まったのだった。



大きく開けた土地にロキ迎撃部隊であるグレモリー眷属、助っ人のソフィア、堕天使幹部のバラキエル、北欧のヴァルキリーであるロスヴァイセが今回の敵であるロキとともに転移された。岩肌がむき出しになっている古い採石場跡。周りは人気がなく、周りに配慮する必要のない場所である。

「逃げないのね……そうする余裕はあったはずなのに」

リアスが憎々しげに言うが、ロキは鼻で笑った。

「わざわざ逃げる必要などどこにある？ 貴殿らをここで一人残らず始末すれば済むことだ。遅いか早いかだけの話だ。まあ、会談の成功失敗に関係なく、オーディンにはご退場いただく」

「危険な思想にとらわれているようだな」

「そのことば、そっくりそちらにお返ししよう。本気で、各神話と協力するつもりなのか？ 今まで好き勝手やってきた三大勢力が」

「……もはや、話し合いなど不毛か」

ロキの言葉が、バラキエルに突き刺さった。今の言葉は、正直耳の痛いものであったのだ。

交わす言葉がなくなり、お互いに戦闘態勢へと入っていく。バラキエルは雷光を手にまとわせ、十枚もの翼を展開させる。

『Evolution Dragon Balance Break
er!!!』

セーイチは禁手バランスブレイカー化に至る。炎がセーイチの体を包み込み、それらが鎧となって具現化する。ソフィアはサタン特有の魔力を出現させ、いつでも放つことができる状態だ。

「いくぜ!!!」

セーイチはロキにかなりのスピードで特攻する。

ガキン!!!!

セーイチはスピードを上乗せした拳を振るうが、ロキの魔法陣を貫通することが出来ない。

「フハハ!どうした、炎の龍よ?この程度では我に攻撃は届かないぞ?」

「じゃあ、これならどう?はあっ!!!」

ソフィアが強大な魔力による攻撃をロキに向けて放った。凄まじい規模の攻撃であり、このフィールドの三分の一を包むほどの攻撃であった。

ドドドドドドオン!!!!

ソフィアの攻撃がロキに炸裂する。

「————フハハハ!!」

しかし、ロキは何事もなかったかのように高笑いをしながら姿を表した。ほぼ無傷であったのだ。

「なるほどな、流石は悪魔の象徴のサタンだ。良い攻撃だ。我が北欧の魔法陣を貫通してくるとは」

「くっ……………」

「無傷かよ……………」

セーイチは腰につけていたあるものを取り出した。それは、北欧神話に出てくる神造兵器、ミヨルニルのレプリカであった。セーイチはそのミヨルニルのレプリカをロキへと突き出した。

「……………チツ、ミヨルニルのレプリカ……………なんとも危険

極まりないものを持っているではないか。しかも、よりによつて悪魔などに持たせるとは。オーディンめ……」

ロキは何よりも、レプリカとはいえ、一介の悪魔にミヨルニルを持たせたことにどうやら怒りが湧いていた。

「うおおおおお!!!」

セーイチはミヨルニルを持ち、全速力でロキへと向かっていく。そして、渾身の力でミヨルニルをロキへ振り下ろした。

ドオオオオン!!!

しかし、ミヨルニルは空を切り、地面を破壊した。ミヨルニルはレプリカとはいえ、その力は絶大で地面に巨大なクレーターを形作つた。しかし、セーイチは浮かない顔をしていた。

「な、なんでだ……？雷が出なかつた？」

セーイチは聞いていた話とは違っていたのか、首を傾げている。

「残念だったな、炎の龍よ。それは強く、純粋な心を持つものにしか十全に扱うことが出来ない代物だ。貴殿には邪な心があるのだろう。だから雷は生まれれないのだ。本来のミヨルニルならば、重さすら感じることはない、羽のように軽はずだ」

「くっ……まじかよ」

「さて、こちらも本格的にいくとしよう」

ロキがパチリと指を鳴らすと、フェンリルが現れる。

「神を殺す牙。それを持つ我が息子、フェンリル。お前たちが我が息子を倒せるというのならば、遠慮なくかかってこい!!」

フェンリルを見たソフィアはすぐさま合図を出した。

「リアスちゃんたち!!」

「はい!!!」

グレモリー眷属たちは魔方陣を展開させ、巨大かつ太い鎖を出現させた。魔法の鎖、グレイプニルである。三大勢力たちはフェンリルの対策としてグレイプニルを作戦通り出現させる。

これを全員で持ち、フェンリルに対して展開させた。

「小賢しい。そんなもの、フェンリルに通じるわけが——
——なに!？」

ロキの思惑通りとは行かず、グレイプニルはフェンリルの体に巻き付いていき、完全に動きを止めた。

「フェンリル、捕獲完了だ」

バラキエルが完全に動けなくなったフェンリルを見てそう口にした。

しかし、ロキはこれを見ても余裕な面構えをしていた。まるで、これさえも想定内であると言わんばかりであった。

「ククク……やってやったと言わんばかりの顔だが、フェンリルは——一匹ではないぞ?」

ロキの両サイドの空間がゆがみだしたかと思うと、そこから新たに獣が現れた。灰色とところどころ赤が混じった毛並み。鋭い爪。大きく避けた口。なんと、フェンリルがさらに二体出現したのだ。

「そ、そんな!!」

「一体じゃなかったのか!」

眼の前の現実についていけない三大勢力。

「この子達はフェンリルの息子だ。スコルとハティ。神殺しの牙は健在。貴殿らを葬るには十分すぎるだろう。さあ、行け!!スコル、ハティ!父を捕らえた者共を蹴散らせ!」

スコル、ハティは猛スピードで迫っていく。

やられまいと、セーイチたちは散開する。

「はあっ!!」

「雷よ!!」

朱乃、リアス、ソフィアがそれぞれ魔力による攻撃をするが、スコルとハティはそれを軽々と避ける。凄まじい速度を誇っていた。

「がら空きだぞ?」

フェンリルに気を取られている隙きにロキは七色の魔術攻撃をセーイチに放つ。

「クソツ!!」

「バチツ!!!」

セーイチは直撃は免れたものの、鎧をかすめていた。かすった部分は鎧が欠けていた。

「行けえ!!炎よ!!」

セーイチは反撃とばかりに炎をロキに放った。火球が次々に生み出され、ロキへと向かってゆく。

ドオン!!ドオン!!

ロキはその火球を魔法陣で防いでいく。

「まだまだあ!!」

セーイチは更に大きな火球を放つ。バランス・ブレイカー禁手化に至ったことで、更に威力を増した炎はもはや神をも脅かしたアグニル本来の炎にはまだ及ばないが、それでも最初と思うと十分進化していた。

その威力にはロキもだんだんと押されていった。

「ほう……やるな……しかし、いいのか?我ばかりに気を取られていて。分かっていると思うが戦っている相手は、我だけではない」

「何?ゴホツ……」

その瞬間だった。

ブシュツ!!

セーイチの身体から鮮血が勢いよく吹き出した。

セーイチはロキに集中をするあまり、周りに気が行っていないかった。フェンリルの子であるハテイの爪がいと簡単イグニタス・クロスギア・スケイルメイルに紅炎龍児の炎鎧を軽々と破壊。その爪は身体にまで通っていた。明らかな重症であった。為す術なくセーイチは血を吹き出しながら地面へと落下した。

「セーイチ!!」

「セーイチくん!!」

地に落ちたセーイチを心配したりアスと朱乃がセーイチに駆け寄ってくる。すぐさま、セーイチの懐からフェニックスの涙を取り出し、セーイチの身体に振りかけた。

「ぶ、部長……すみません」

「いいえ、良かったわ無事で」

「はっ」

セーイチは立ち上がり、もう一度バランス・ブレイカー禁手化を発動させる。

ドゴオオオン!!!

セーイチたちが飛び上がった瞬間、セーイチのそばに人が落ちた。

「う、ぐ……ゴホツ、ゴホツ……」

「ソフィアさん!!!」

「だ、大丈夫ですか!？」

「え、ええ……なんとか、ね」

ソフィアはヨロヨロとしながら立ち上がった。その美しい体は血だらけで、痛々しい大きな傷跡を残していた。フェンリルの爪によって付けられたものだった。ソフィアはフェニックスの涙を用いて傷を癒やした。とはいえ、傷が治っただけで戦況は依然として不利であった。

「ククク……ここでダメ押しだ」

ロキが指を鳴らすと、また空間に歪みが出る。その歪みから現れた存在にはもはやセーイチたちに勝ち目などないといわんばかりの絶望であった。

「そ、そんな……」

「四体目……」

「赤い……フェンリル……?」

「なんなんですか!?!あれは!?!」

出てきたのは赤きフェンリルであった。しかし、その瞳は少し覇気がなく、虚ろのようであった。北欧のヴァルキリーであるロスヴァイセすらも知らないと言っているようだった。

出てきた正体不明のフェンリルをロキは高らかに笑いながらセーイチたちに紹介した。

「紹介しよう!!今回我に力を貸してくれた盟友だ。ちなみにスコルとハテイの母親でもある。盟友は一応フェンリルだ。しかし、普通のフェンリルとはひと味もふた味も違う。さあ、盟友よ。ともに我らの敵を打ち砕こうではないか!!」

『……』

ロキに反応することはなく、機械のように動く赤きフェンリル。

赤きフェンリルはセーイチたちに虚ろな目を向ける。そして、勢いよく前足を踏み出した。

「な!?魔法!?!」

「あのフェンリル、魔法が使えらるといふの!?!」

赤きフェンリルが足を空中に踏み出すと、なんとそこから魔法陣が出現した。ロキが扱っていたものと同じ北欧の魔術であった。魔獣であるにもかかわらず、魔法を扱えるこのフェンリルにはセーイチたちも目を見張るしかなかった。

「くっ!?!」

フェンリルが放った魔法がセーイチたちを襲う。

ドドドドドドオン!!!

間一髪のところまで避けるセーイチたち。

「きゃあ!!」

「部長!?!」

「ぐうっ!!」

「裕斗先輩!!」

「うあああっ!!」

「ギヤスパーあああ!!!」

しかし、あまりの数故にリアス、裕斗、ギヤスパーに魔法が直撃。防御する間もなかった三人には有効打となつてしまった。三人は地面へ一直線に落ちていった。ロスヴァイセは赤きフェンリルに対抗して北欧魔術を一斉に撃ちはなつ。しかし、その数も質も赤きフェンリルのほうが勝っていた。

朱乃が落ちていったリアスたちの救援に向かおうとする。しかし、それは悪手であった。魔法によってその道を阻まれ、そして朱乃に迫る驚異。フェンリルの子であるハティが迫っていた。猛スピードで大きく口を開いて牙で攻撃しようとして接近する子フェンリル。その速さは尋常ではなく、朱乃のスピードでは到底避けきれぬものではなかった。

「くっ!!」

「朱乃さん!!くっ!?!」

セイイチは朱乃の救援に向かおうとするが、赤きフェンリルの魔術に妨害を受ける。フェンリルの牙が朱乃の肢体に突き刺さろうとしたその時だった。

ザシユツ!!

「ゴフツ!・・・」

フェンリルの牙は朱乃、ではなくその父バラキエルの胴体をたやすく貫き、その傷口からは大量の血が流れ出ており、口からも血の塊を吐き出した。バラキエルが朱乃をかばう形でフェンリルから致命傷を食らったのだった。

助けてもらったのにもかかわらず、朱乃は困惑した表情で満身創痕のバラキエル視線を向けていた。

「そんな・・・どうして・・・?」

「親が子を守る・・・至極、当然のツ、ゴフツ・・・こと、だ・・・」

バラキエルは苦しみながらも朱乃にそうつぶやいた。

「くっ!セイイチくん!!バラキエルを!!」

「わかりました!!」

まだ戦力として健在であるソフィアはセイイチにバラキエルの救援に向かわせる。

「そのひとを離せえー!ー!ー!!」

セイイチは全速力でフェンリルに迫った。フェンリルは危険を察知したのか、すぐさまバラキエルをペツ、と吐き出した。フェンリルは知能が異常に高かった。危機管理能力、戦闘能力などが備わっている。まさしく最高クラスの魔獣である。

「うわっ」とー!

吐き出されたバラキエルを救出し、すぐさまアシアの神器で回復をさせる。それを見届ける間もなく、セイイチはすぐさま前線に復帰する。その様を見たロキは愉快そうに言った。

「墮天使バラキエルは戦闘不能・・・そちらには優秀な回復役がいるようだ。が、しかしフェンリルの牙をまともに受けたのだ。傷は治れどしばらくはダメージで動けまい。それと・・・」

ロキはソフィアに目を向けた。

「ハアッ!!!」

ドスツ!!

ソフィアの魔力のこもった強烈なケリがスコルとハテイたちに炸裂する。濃密かつ大質量の魔力のこもった一撃を顔に食らったスコルトはテイ。さすがのフェンリルといえども、この攻撃には体制を崩した。

その様子を見たロキはソフィアに向けて言い放った。

「フハハ！流石はサタン家の才女、ソフィア・ソルーネ・サタン！フェンリルの子供とはいえ、二匹を相手にしてそこまで立ち回るとはな。しかし、それがどこまで続くかな」

今回のロキ防衛戦において、最高の戦闘力を持っていると言っているソフィア。ほとんど一人でフィエリルあいてに孤軍奮闘を続ける。

「ソフィアさん!!」

ドゴツ!!!

ソフィアに襲いかかってくるフェンリルの死角からスピードを乗せた拳を食らわせる。

「助かったわ」

「いいえ!!さつきからソフィアさんの負担は大きいですから」

セイイチとソフィア、ロスヴァイセ。三人だけで肩を並べ、ロキとフェンリルたちに目を向ける。

「さあ、やれ。フェンリルたちよ、盟友よ」

親玉のロキが支持を出した。フェンリルたちはすぐさま三人に襲いかかった。

カッ!!!

赤きフェンリルは更に威力を増大させた魔術を放つ。

「私があれば撃ち落とします！全てというわけにはいきませんが！申し訳ありませんが、お二人はフェンリルを」

ロスヴァイセはフェンリルの魔術攻撃を少しでも減らすことに専念した。

フェンリルには劣るが、人間としてはありえないほどの魔術で対抗

する。

しかし、フェンリルたちも動く。赤きフェンリルが放った魔法に合わせ、超スピードで空中を駆ける。フェンリルたちはセーイチを目標に定めていた。

「くっ!!やっぱりセーイチくんを!!」

ロキの作戦をソフィアは読んでいた。魔法に専念したロスヴァイセを除き、力の弱い方を先に仕留める作戦だった。それを察知してセーイチの方に向かうソフィア。

「だ、駄目です!!ソフィアさん!!!」

「くそっ!!」

しかし、ロスヴァイセはそれを止めようとした。

「くっ!!」

ロスヴァイセの言ったとおり、フェンリルのはなった魔術攻撃がソフィアを襲った。ソフィアはその類まれなる身体能力と反射神経でそれを魔力で相殺させる。ソフィアに向かってきていた魔術攻撃は全て無効化された。が、そんな攻撃は単なる囮に過ぎなかった。

「あっ——」

ソフィアに向かって、フェンリルが襲ってきていたのだ。その距離わずか十数メートル。しかし、フェンリルのスピードからしたらそんな距離はあつてないようなもの。

ソフィアは声にならない声をポツリとつぶやいた。いや、声を上げる暇さえなかったのだ。

ガッ!!!

ソフィアは死ぬんだと、あきらめて目を瞑る。しかし、ソフィアには何も起こらなかつた。痛みがなかつたのだ。ソフィアは恐る恐る目を開ける。

「う、ぐ．．．ソフィ、アさん．．．間に合つて、よかつた．．．」

「え—————そんな．．．セーイチ、くん．．．」

ソフィアの視界には、フェンリルの牙で貫かれ、今にも死にそうな状態のセーイチが映っていた。ソフィアは目の前の出来事が信じられないのか、受け入れられないのか。そんな目をしていた。

「ゴフツ……」

吐血し、大量の血が流れ出る。

フェンリルはこれまたペツ、とセーイチを吐き出した。もちろんセーイチはこの傷で動けるはずもなく、ただただ重力に引かれて地に落ちていくだけだった。

「セーイチくん!!!」

それをみるやいなや、真つ先にソフィアは飛び出していった。強者として、的に背を向けて傷だらけの仲間を助けに行った。涙を流しながら……

ギリギリのところまでセーイチをキャッチして地面にそつと寝かせた。

「セーイチ!!!」

「セーイチさん!!!」

あまりの出来事に思考停止していたリアスたちもセーイチのそばへすぐさま向かった。

「そんなんっ!!私がつ!!私のせいでツ!!!」

が、最もショックを受け、自分を攻めているのはソフィアだった。ソフィアは敵の戦力に焦っていた。最初からロキはソフィアを狙っていたのだった。が、ソフィアはその焦りと恐怖とプレッシャーで選択を誤ってしまったのだ。

「フハハハ！サタンの娘をやるつもりだったのだがな。嬉しい誤算だ。どちらもノックアウトだ……。特に炎の龍は牙を二度食らった。あれでは助かる見込みは少ない。さあ、ヴァルキリーよ。残るは貴殿だけだ。貴殿を軽く捻り潰して日本の神々共々オーデインを屠ってくれるわ」

「ぐっ!!!」

フェンリルの魔術に押され、宙に浮いているのがやつとというロスヴァイセ。気づけば、戦力はもう彼女だけであった。セーイチが致命傷を負ったことよって、ソフィアさえもが精神的に崩れてしまっていた。

ロスヴァイセに向かって一斉にフェンリルが接近する。たとえば

リユンヒルデに匹敵しようとも、この状況ではもはや絶望的であった。

魔法を重視するロスヴァイセにとってフェンリルのスピードはまさに欠点というべきもの。たとえ魔法陣を展開しても紙切れのごとく破られる。

「さらばだ!!」

バクン!!!

誰もがロスヴァイセにとどめが刺されると思った。それはロキでさえも。しかし、実際はそうはならなかった。フェンリルの牙にロスヴァイセの姿はどこにもいない。

フェンリルは獲物を見失い、キョロキョロと周りを見ていた。

「大丈夫でござるか？ロスヴァイセ殿」

「な、あなたは……」

ロキは声ができる方に向いた。フェンリルも同様であった。

ロスヴァイセはフェンリルに噛み砕かれる寸前でとある人物に助けられていたのだった。

「どうやら、間に合ったでござるよ」

「ヤトさん!!」

その人物は日本の龍、夜刀神であった。

NO, XLIX くろキ戦く

時を少しさかのぼり、場所は日本神話と北欧神話の会談の場。

会議は滞り無く進んでいた。

北欧側と日本側での主張は一致とは言えるものではないが、消して完全に食い違っているというわけでもなかった。日本神話側はとにかく慎重だった。北欧側としてもこれ以上日本神話との溝を深めたくないのだろう。

会議は順調化に見えたが、少し会場内がざわつき始めた。オーデインの護衛の一人が何やら通信をしていた。それと同時に顔色が悪くなっていった。オーデインの護衛の人はだれかとの通信を終えると、ただちにオーデインに接近し耳打ちをし始めた。オーデインはそれを聞き終えると、こちらに顔を向き直した。

「天照殿……実は困ったことになってのう」

「困ったこと、といいますと？」

「ふむ、実はロキのやつがな……」

「そのことに関してはそちらの迎撃部隊が応戦したのでは？」

「それなんじやが、困ったことにどうも戦況が悪いらしいのじや。それどころか、突破されてここへやつが襲撃してくるのも時間の問題じやと」

「左様ですか……それは困りましたねえ」

天照はオーデインに当たり障りのない返答をした。しかし、内心では予想通り、といった感じで呆れているだろう。天照は主に三大勢力で構成された迎撃部隊を全く信用していなかった。

「仕方ないわね。イツセー、ヤト。出番よ。行つてあげなさい」

「了解したでござる」

ヤトは待つてましたと言わんばかりに前に出て天照の命に従う形で応えた。本当にフェンリルたちと戦うのを楽しみにしてるな。神と手を組んだとはいえ、戦いを求めるドラゴンという本質は今も健在というわけだな。

「というわけで、我々は自衛行動に入りますが、よろしいですか？オー

「デイン殿？」

「ふむ、それに関して儂が拒否することはなにもないぞよ。もともとこちらの不手際ということもあるからの」

オーデインの了解も得たことなので俺は早速ヤトと一緒に現場に向かおうとした。と思つたのだが……ヤトはもう行つてしまつていた。なんとも行動が速いことか。

「イツセー、私達の部隊も連れて行つても構わないわ。実践としては良い訓練になるから」

「分かつた。」

天照がそのように言うと、そろそろと集団がこちらの部屋に入ってきた。天照直属の戦闘部隊らしい。天照いわく、このご時世に実戦経験があまりにも乏しいから連れてつて欲しいらしい。とはいえ、いきなりフェンリルとロキ相手とか天照もだいぶ鬼畜なもよう。

こいつら、これから戦う相手分かつているのだろうか。俺はとりあえず、ともに行く日本の戦闘部隊のやつらに確認を取る。

「なあ、今回の相手ははつきり言つてレベルが違うぞ？相手は北欧のロキ、そしてフェンリルだ」

俺が問うと、連中の一人が行つた。

「イツセー殿、我々は全員覚悟の上です。それに、団長がいち早く行つたのならば我々が行かなくてどうするといふのです」

ヤトが行つたから、か。ヤトはずいぶんと慕われているらしい。ドラゴンでここまで人望があるというのは本当に凄いことだ。彼らは人間であるにもかかわらずだ。タンニーンはドラゴンから絶大な信頼を得ている。対してヤトは人間たちから信頼を得ている。状態は違えど、二人はウマが合いそうな気がする。

「じゃあ、さっそく行くぞ。乗れ」

俺は転移魔法陣を発動させ、そのうえに全員をのせる。

全員が乗るのを確認して直ちに敵のいる方へと飛ぶ。

「ここか」

到着すると、そこは何もない場所。人の気配のない場所だった。ここなら、安心して戦えそうだ。

すると、ヤトと北欧のヴァルキリーの姿が確認できた。確か、ロスヴァイセさんだったけな。ロスヴァイセさんの前にでてフェンリルたちから守っていたのだ。早く行って正解だったようだ。俺たちはヤトの方へ近づく。

「どうやら間に合ったようだな」

「イツセーさんに、みなさん」

俺たちが近づくとロスヴァイセさんはこちらに気が付いた。今の時点でかなり消耗しているようだった。

「フハハハハ!!皆さんお揃いで。して? 貴殿たちは何をしにここへ?」

俺たちを見下ろすようにして高笑いしながら言う人物が一人。これが、北欧きつての悪神、ロキか。それにフェンリルたち。なんと四体もいるではないか。ロキの奴、増やしやがったか。

「貴殿がロキ殿でござるな? 拙者は日本神話、夜刀神。貴殿たちと戦いに来たでござる」

「なに? 日本神話か・・・・・・ククク、面白い。貴殿は気配から察するにドラゴンだな? ドラゴンと神が手を結んでいるとはな。つくづく面白い存在だ。とはいえ、貴殿ら日本神話が出てくるとは思わなかったな。」

「降りかかる火の粉は払う、当然の行動でござるよ。貴殿らが今会話中のオーデイン殿や天照殿にを襲撃しようとしているのは分かっているでござるよ。さらには、貴殿らが先程まで相手していた連中では物足りなかったのでござろう?」

確かに、ヤトの言う通り奴らは全く涼しい顔をしていた。傷一つなかった。対して、したにいる奴らはみんな消耗しており、重症のやつもいるようだ。まあ、助ける義理も理由もないのでそのまま放置しておく。

「いいだろう! 面白い! 我も先ほど程度の相手では物足りなかったところだ!」

「そうこなくては・・・」

ヤトは笑いながら自身の武器となる紅桜を抜いた。紅桜も強敵が

目の前にいるということを知っているかのように多大なる妖力が溢れ出している。

「というか、俺さつきから忘れられている気がするな。」

「フフフ・・・さあフェンリルたちよ!!新たな敵を一掃するぞ!!」

フェンリルたちは一斉に俺たちに襲いかかる。

「イツセー殿。悪いでござるがイツセー殿はあの赤いフェンリルとロキをお願いするでござるよ。拙者はフェンリル。みんなは子フェンリル二体を頼むでござる。」

「分かった」

「了解しました!」

「おまかせを!」

「ロスヴァイセ殿、あなたは休んでいてください。ここは拙者ら日本神話が受け持つでござる」

俺たちは分担して対処にかかる。

ヤトはロスヴァイセさんのこともきつちりとフォローしていた。流石だ。

「イツセー、わかっているな?」

「ああ。今回は神とフェンリル。強敵だ。制御は第二段階まで解く」

俺は自身にかけて制御魔法を二つ解除する。これで、俺は今までの比ではない力を出せる。

俺が先行して赤いフェンリルを叩く。

ドゴツ!!!

赤いフェンリルの周りから魔力が感知できた。ミドガルズオルムの言ったとおり、本当に魔法を放つことができるらしい。

「せやあつ!!!」

キーン!!!!

俺の後ろでヤトとフェンリルがぶつかる。紅桜でヤトはフェンリルの攻撃を受け止める。流石に紅桜と言えどもフェンリルの爪は切り裂けないらしい。

「フツ、重いでござるな。流石は最強の魔獣・・・」

ヤトはフェンリルの爪と力比べをしながらそうつぶやいた。

そして、フェンリルとヤトは凄まじい速度で斬り結んでいる。フェンリルの速さについていつているようだ。

「フム、私の相手は貴殿か？」

「そのようだ」

赤いフェンリルを体術で翻弄していると、親玉のロキが出てきた。「やるではないか。貴殿は人間だな？人間でそのような動き。その年でそこまでとは、恐ろしい限りだ」

実は、俺見た目通りの年齢ではないんだけどもねえ。まあ、それはいいや。

北欧のロキ。その強さを見せてもらおうかな。

「いくぞ」

「来い！」

赤いフェンリルとロキに向かって距離を詰める。

赤いフェンリルの周囲から魔法陣が出現した。本当にフェンリルが魔法を放つとは。流星はミドガルズオルムの姉というだけはあるのか。しかし、あのフェンリルは何か違和感がある。あの虚ろな目、焦点が合っていない。

俺はフェンリルの異変を感じながら多種多様な魔法避ける。一発一発の威力は流星に高い。だが、避けられないほどでもない。単調な攻撃だ。

「我を忘れてもらっては困る」

「もちろんだ」

バリバリバリイン!!!!!!!

凄まじいほどの雷が俺目がけて突き進んでくる。だが、それは俺には届かない。俺の防御魔法陣がその雷を阻む。

「光を制する魔槍」

カツ!!!

魔槍をフェンリルとロキへ向かって放つ。

ドドドドドドドオオオオン!!!!

凄まじい轟音がこのあたり!!帯に鳴り響いた。しかし、撃った感触からするとすべて防がれているだろう。

「なるほど」……貴殿は魔法使いであつたか。」

煙の中からロキと赤いフェンリルの姿があらわになる。流石北欧式と言つたところなのだろうか。やつの魔法は俺の知らないもので構築されていた。北欧の魔術並びに魔法の知識は未だ未知なるものだ。

「ああ。一魔法使いとして北欧魔術の使い手と戦うのは良い経験になる」

「フハハハ!! 貴殿は中々いい性格をしているな! 面白い! 今日のことんやりあおう!! 貴殿を抹殺し、必ずオーデインの元へ行つてやろう」

「さて、果たしてそううまく行くかな? 悪神ロキさんよ」

「なに、直ぐに現実にしてやろう」

ロキはすぐさま魔法陣を出現させる。やはり、流石は神という存在。魔法も俺から見ても一流だ。魔法陣の中身は俺の知らないことだらけ。これは解析のしがいがありそうだ。

俺は雨のごとく降りかかつて来る攻撃を避ける。

「盟友よ、今だ!」

そこに赤いフェンリルが攻撃を仕掛けてくる。二対一では当然の戦法だろう。

カツ!!!ズビィ!!!!!!

フェンリルが大きく口を開ける。そこからとてつもなく太い閃光が放たれた。あれもいわゆる魔法の一種だな。俺の魔道収束砲と同類の魔法だ。避けるのは簡単だがロキの攻撃をよける事もあつて動きが制限されている。このままでは当たるのは確実だ。

魔道収束砲を防ぐため、直ぐに防御魔法陣を展開する。

ドオン!!!!

魔法陣は攻撃がぶち当たる。だが、フェンリルは更に魔道収束砲に力を込めてきた。先ほどの攻撃から威力が上がっている!?

バキツ!!

魔法陣にひび割れが生じる。これは長くはもたないな。

「フハハ! チェックメイトだ」

ロキがさらに攻撃を強めてきた。この止むことを知らない波状攻撃はついに展開した魔法陣を破壊した。どうやら、ロキの攻撃によって壊されたようだ。

「ちっ!!」

ドオオオオオオン!!!!!!

ロキとフェンリル!!両方の攻撃が同時に俺に届いた。

凄まじい轟音が鳴り響いた。

直前に倍加で自身を強化したおかげでダメージは少ない。少々傷を負った程度だ。あのフェンリルの攻撃……間違いない。間違いない。戦前のドライブと同程度のレベルだ。

「イツセー殿!」

俺の後ろの方からヤトの声が聞こえた。攻撃を受けた俺を気に掛けている。俺は姿の見えないヤトに聞こえるように言った。

「問題ない!!そっちはそっちの相手に専念しろ!」

「!了解でござる」

俺はヤトの方をちらりと見る。案の定、ヤトはそうとうやられていた。対するフェンリルは想定よりも元気で居やがった。ヤトでもやはり食らいついていくのが精一杯ってところか。やはり、俺が引張ってやるか。本当は手の内をあまり見せたくなかったがな。とくに……

「フハハ!!あの攻撃は力の低い神なら消し飛んでも可笑しくない攻撃だった。それをくらってその程度の傷とはな!恐れ入ったぞ、人間」

「そりゃ、どーも」

「しかし、その余裕もここまでだ。確かに貴殿は強い!認めよう。だが、貴殿の仲間はそうでもない。いつ死んでもおかしくないぞ」

ロキのような魔法に精通した神がいるのだ。この場で俺の魔法を使えば魔法の中身がばれるということも十分あり得る。相手がロキでなければまだどうとでもなっただろう。しかし、ロキの言う通りだ。ヤトもだいたいぶ消耗している。だが、それ以上にヤトの部下たちだ。力の低いフェンリルとはいえ、やはり危機的状況だ。あいつらを死なせるわけにはいかないからな。

「ああ、だから早めに終わらせるさ」

「ほう？この状況でか？やってみるがいい！策があるようだが、所詮はハツタリだろう！」

ロキは再度、自身の周りに魔法陣を展開させる。それは赤いフェンリルも同様だ。下級魔法ではだめだ。ならば、魔法の弱点を突くまで！

「はあっ!!」

俺は右手に魔力を集中させ、一気にそれを爆発させてロキの方へ放った。

パキパキパキパキパキパキパキイン!!!!
「なんだと!？」

俺が放った魔法はロキが展開していた大量の魔法陣を全て綺麗さっぱりと消し去った。対魔法用対抗魔法、術式破壊グリム・レイザー。魔法に対して最高の効果を発揮する。相手の魔法陣を破壊してしまう代物だ。

ロキはこの事態に目を丸くしていた。

ドゴオン!!バチバチバチ!!!

俺はその隙にロキ目がけて蹴りを入れる。しかし、ロキはギリギリのところまで俺の蹴りを防いだ。魔法陣とぶつかり、凄まじいエネルギーがあふれている。

「先ほどのあれは、一体なんだ？何をした？」

「さあね、あんたも魔法を使うものならば、解き明かしてみたらどうだ？もつとも、できないだろうがな」

ドゴツ!!バチツ!!!

俺は構わず連打を入れていく。ロキは北欧の防御魔法陣で俺の打撃攻撃を防いでいるが、それも時間の問題だ。だんだんと、ロキは押され始めていた。

「グッー！」

「もういつちよー！」

バキイン!!ドゴオ!!

「ぐほおおお!!？」

遂にロキの防御魔法陣が破れ、俺の拳がロキの顔に突き刺さった。

俺はロキに攻撃をしている間、常にドライグの能力を魔法化した倍加を自身に掛けていた。例えばロキの神クラスの魔法陣でも破るのはたやすい。

俺は拳に魔力を込め、さらに連打を与えていく。

ドゴオ!!

「グハアッ!!!」

ズガアアアン!!!

そして、最後にかかと落としを食らわせ、地面にたたきつける。

「そらー！そっちもだー！」

パキパキパキパキパキパキパキイン!!!!

赤いフェンリルが展開させた魔法も全て無効化する。赤いフェンリルは魔法を全て無効化されたというのにも何も感情を示さない。機械のようだった。

バツ!!!

フェンリルは魔法の攻撃を諦めたのか、こちらに超スピードで迫ってきた。思考は停止していないらしい。

シュツ!!

「!!」

「こつちだー！」

俺は瞬間移動でフェンリルの背後を取る。

俺はフェンリルに向けて光速の槍を放つ。

「ガウウツ!?!」

オレが放った魔法の槍はフェンリルには当たらなかった。いや、わざと当てなかった。ミドガルズオルムの頼みだしな。槍はフェンリルの背中ギリギリをかすめていった。それだけなのにフェンリルは空中から地に落ちた。実は、やつの神経を凄まじい圧力で圧迫した。たとえ魔獣とはいえども、身体の構造は生物上にいるものだ。神経を麻痺させて行動不能にしているのだ。

ここで、オレの魔法を使い捕獲する。

「戒めの鎖ー！」

紫色の魔法陣から鎖が出現し、赤いフェンリルの体に巻き付いてい

く。この鎖は久しぶりに使ったな。今となつてはドライグやティアには直ぐに引きちぎられるだろうが、この相手ならば問題ない。強化も施している。

「……………」

赤いフェンリルは生気のない虚ろな目でオレを睨んでいる。やはり、違和感があるな。あつちで生き生きと戦っているフェンリルや子フェンリルとなにかが違うのだ。少し調べてみるか。

オレは戒めの鎖レージングを倍加でさらに強化して動けないようにしたのを確認してから赤いフェンリルに近寄った。

「……………これは……………」

赤いフェンリルに近づき、解析魔法でよくくみてみるとなにやら魔法の痕跡が見て取れた。赤いフェンリルに書けられていた魔法を解析してみる。

すると、答えが見えた。

「なるほど、一種の催眠の術……………ロキのやつ、これでこのフェンリルを……………」

ロキはこの魔獣を使役に近い形に置いていた。どおりで目に最強の魔獣の一角であるはずなのに覇気がないわけだ。

にしても、このことをミドガルズオルムが知ったら怒るだろうなあ。

オレはそんな事を考えながら、赤いフェンリルにかけられた魔法を術式破壊グリム・レイザで消し去る。魔法の反応が消えた。

「悪いな。とりあえず、お前は邪魔だから眠つといてくれ」

更に、これ以降こいつが相手にならないように眠らせる。おもに獣によく効く精神干渉魔法。安息サクラメント。精神干渉を起こし、睡眠を誘発させる。しかし、フェンリルクラスの魔物にこれほどうまくかかるとはそうない。おそらく、この赤いフェンリルも眠ることを受け入れた、そんな気がする。オレが相手二体を封殺。そのようすをヤトは感じ取ったようだった。

「フフフ……………流石はイツセー殿でござるな。拙者も、やられてばかりではドラゴンとは名乗れないでござるよ。ここで一矢報いるで

「ごぎる。紅桜、もう少し力を出すでござるよ」

紅桜はヤトの意志に答えるように更に更に妖力を蓄積していった。あの妖刀、紅桜。本当、剣いうよりも一つの生命体の様に見える。なんというか、ヤトに使ってもらえるのが嬉しそうだ。その力の集まりようにあのフェンリルも興奮し、ヤトに向かって超スピードで突進した。

ヤトはそれを迎え討つ気だ。

「………一斬必殺………からくれない華羅紅」

シュバツ!!!

フェンリルとヤトが切り結ぶ。両者、お互いが背を向けている状態だ。

ブシユウウウウ!!!

「ぎやうん!!!」

ドスウウン!!!

フェンリルの左脇腹から大量の鮮血が吹き出した。

ヤトのやつ、やるじゃねえか!!あの居合斬り、凄まじいキレと速さ。フェンリルと対峙する瞬間にスツパリと斬りやがった!あの分厚くて頑丈なフェンリルの体表にあんなにデケエ傷を付けたのだ。フェンリルの傷は深く、ここから見てもよく分かるくらいの大きさだ。フェンリル相手にこれは大金星ではないだろうか。

地表に落ちたフェンリルは意識は失っていないようだった。だが、出血とあの剣戟のダメージで動けないようだ。ヤトの技の名の通り、紅の花が咲き乱れたな。

「グッー」

とはいえ、ただで地に落ちるフェンリルではなかった。ヤトにもダメージを与えていたようだ。

「グハツ!!!」

「ゴボツ!!!」

「うわああああ!!!」

と、そこに悲鳴が聞こえてきた。その悲鳴が聞こえてきたほうを見ると、ヤトの部下たちであった。子フェンリル二体を相手にして今ま

でどうにか持ちこたえていたらしいが、そろそろ限界が来ていた。

ザシユ!

「ぐあ!!」

フェンリルの爪できりさかれた、牙で貫かれたものも出ていた。

「今助けるでござる!!」

それを察知したヤトはいち早く救援に行った。オレも後に続く形で急行する。

「はあっ!!」

ザシユツ!!

「ぎやうう!!」

ヤトは子フェンリルの一体を斬りつける。顔の左側面から鮮血が飛び散る。フェンリルはヤトの部下の一人を吐き出してすぐに俺たちから距離をとった。

「くっらえ!!^{アラストール}龍帝の豪炎!!」

赤色の魔法陣から飛び出る特大の炎をもう一匹の子フェンリルに放つ。

「ガウツ!」

炎が子フェンリルを灼く。本来ならば、この魔法ではなく、ドライグの技である?焔の炎火でもよかったがこの状況ではそうはいかないからな。フェンリルどころかヤトやヤトの部下たちまでみんなまとめて消し炭にしてしまうからな。『?焔の炎火』よりもかなり威力は落ちるとはいえ、これでも子フェンリルならば十分だ。死にはしないがダメージは見込めるだろう。

案の定、子フェンリルが苦しむ悲鳴を上げる。

「イツセー殿!!かたじけないが、今のうちに治療を!!」

「わかった」

「わ、私も手伝います!!」

俺はすぐさま取り掛かる。ロスヴァイセさんも協力してくれるよ
うだ。

とにかく、時間が惜しい。悪いが重傷者からやらせてもらう。

見たところ、だいぶ被害を受けている。四肢の欠損、腹に風穴が開

いている奴もいる。とにかく、そいつから治癒魔法をかける。魔法をかけるのとデカい風穴があいていたやつの傷が無くなる。

「な！す、すごい……この重傷をこんな一瞬で……なん
て魔法の完成度なんですか……!?」

ロスヴァイセさんが軽傷の治療をしながらこちらに愕いている。

俺が治療をしていると、比較的軽傷の一人が懺悔のようにヤトに言った。

「すみません、団長。俺たち、何もできませんでした……」

「気にする必要はないでござるよ、拙者もみての通りこのぎまでござるから」

そうヤトは自分の状態を強調した。たしかに、ヤトもボロボロだ。

やはり、いかにヤトが龍王の上位クラス、否もはやそれを超えつつあるとはいえ、さすがにフェンリルは一筋縄ではいかなかった。

「イツセー殿も、申し訳ない」

と、治療中のヤトの部下の一人からそういわれた。

「気にするな、今回は天照の鬼畜命令だからつてことにしとけ」

さすがにいきなりすぎたのだ。フェンリルを相手にするのは。

「イツセー殿は別格でござるからな。今回、イツセー殿は本気を出していないのでござろう？拙者に気を使って」

「そ、そうなのですか？さすがはイツセー殿」

「まあな」

たく、余計なことを。たしかに、ここで対あれ用の魔法を使えばこの空間がヤバいことになるんだけどな。

「……まったく、神を素手で殴り、あまつさえ足でけり落とすとは、なんと罰当たりな」

こうしているうちにロキが復活していた。

「魔法使いであるというのに体術とは……」

ロキは傷の部分をさすりながら厭味つたらしく言った。

「わかってないな、悪神ロキ。魔法を使うものこそ体術を高めるべきだ。だから魔法も有用性が上がるってものだ」

俺は逆に皮肉を込めて言った。

「まあいい。第二回戦と行こうではないか!!」

ロキがどこかへ向けて魔法を放った。

それは俺たちに向けてではないのはすぐわかった。

フェンリルたちが復活していたのだ。子フェンリルとフェンリルだ。ヤトの一撃を受けたフェンリルの傷は傷口が塞がれていた。しかし、傷跡は消えていないな。

「なるほど、我が盟友を倒したか」

よく言うぜ。精神、もしくは催眠系魔法を使って操っていたくせによ。

「では、こちらも追加の戦力を出そう!!」

ロキが指をパチツつと鳴らす。

すると、巨大な魔法陣が出現する。そこから現れてきたのは見覚えのあるドラゴンであった。

「イツセー殿!? あれは!」

「ああ、ミドガルズオルム……に似ているがあれは本人じゃない。おそらく、ロキが作り出したドラゴン、コピーに近い存在だろうな」

俺はそう推測した。ミドガルズオルムにしては力が弱かった。とはいえ、あの数だ。ミドガルズオルム擬きが15体か。骨が折れるな。あつちは計19体に対してこつちはヤトと俺の二人だ。

「イツセー殿。申し訳ない。拙者はフェンリルを相手にするのが精いっぱいごさる」

「ああ、気にするな。ヤトは十分戦っている。ほかのやつらは俺がまとめて相手してやる」

と奴らを相手取ることを決めた時だった。この空間に何やら違和感が生じた。何者かがこちらへ転移してくるような気配を察知した。

しかも、この感覚。どこかで……まさか、まさか!?

ドオオオオオオオン!!!

なんと、いきなりロキへすさまじい光の攻撃が放たれたのだ。ロキはおそらく魔法陣でガードしただろう。

「イツセー殿、これは……」

「ああ、今のは俺じゃない。だとすれば……」

俺は攻撃したやつがいる方向を特定し、目を向けた。

「やあ、また会ったね」

そこには、白龍皇がたたずんでいたのだった。

NO, L く白龍皇チーム! く

「やあ、また会ったね」

ロキへと攻撃したのは俺ではない。勿論ヤトでもない。今代の白龍皇にして悪魔の血を引いているヴァーリ・ルシファーであった。

「イツセー殿、あれはもしや……?」

「ああ、ヤト。あれが今代の白龍皇だ」

「あれが……とはいつても、拙者は白龍皇をこうして実際に見るのは初めてでござるよ」

ヤトは白龍皇似合うのは初めてだろう。珍しいものを見るように眼を白龍皇に向けていた。それに、史上最強の白龍皇。そのことも、ヤトならば気づいているはずだ。だが、俺が気になるのはやつだけではない。今日は白龍皇一人だけではないかった。白龍皇の仲間らしき集団。まずは会談の時にもいた孫悟空の末裔、美猴。そして、見覚えのある猫又、いや猫?。金髪、おそらく俺と同じ欧米出身と思われる、正確な名前は分からないが、何らかの聖剣を携えている美少女。そして……俺が今最も気になっている人物が一人。聖王剣コーブルブランドに加えてもう一つの聖剣を携えている。アーサー兄さんに瓜二つ、もはや本人ではないかと思うほどにそっくりな人物がいた。あそこまで似ているものだから、すこし感傷に浸ってしまう。唯一兄さん違うところと言えばメガネをかけているかないか、それくらいだ。

「……っ!」

どうやら、あちらも俺の視線に気づいたようだった。油断したな、少し見すぎてしまったようだ。しかし、そんなに気にする必要は無かった。アーサー兄さんそっくりさん、おそらく兄さんの末裔は俺にニコリと意味ありげな笑みを一瞬だけ見せ、すぐにロキの方へと視線を戻した。

俺もそれにつられて白龍皇へ視線を戻した。

「久しぶりだな白龍皇、ヴァーリ・ルシファー。あの会談の時以来か。ところで、何をしにやってきた?」

「見て分からないかい？俺たちもキミに加勢しよう。見れば、キミたち二人しか戦力が残ってなさそうだ。それならば、これといった損害は減らせると思うがな」

白龍皇が何を考えているかは知らん。が、どうやらこちらと共闘する気であるらしい。確かに、白龍皇ならば戦力に関しては何と申し分ない。あれほどの実力者がいるならばヤトの部下たちを庇いながら戦うのが楽になるはずだ。

俺が当事者であるロキをのけ者にして白龍皇と会話していると奴が割り込んできた。

「ほう……我に不意打ちをしてきた輩がいると思えば今代の白龍皇であったか。今日は実に愉快な一日だ。規格外の魔法使い、日本の龍にくわえて白龍皇!!なんと刺激的な日だろう！」

「ごきげんよう、悪神ロキ殿。唐突ではあるが貴殿らを屠りに来た」「よかろう!!白龍皇一向、日本神話よ!!どちらも相手にしてくれるわ!!」

「ハハッ!そうこなくては!」

白龍皇は不敵な笑みを見せ、戦闘態勢に入った。それにつられて白龍皇一向も戦闘態勢に入る。

『Vanishing Dragon Balance Breaker!!!』

白龍皇の身体表面に強大かつ高密度なエネルギーが集まっていき、それが白き美しい鎧となって顕現される。まったく、いつみても白龍皇の光翼はかっこいいじゃねえか。

バリバリバリバリイン!!!!

白龍皇はあいさつがわりといった大規模な魔法をロキへと放った。子の空を全て覆うような攻撃はロキのみならず、フェンリルたちをも襲った。

ドオオオン!!!!

ロキは自分に向けられたその大規模な魔法を防いだ。それによる地響きがこのあたり一帯を包んだ。白龍皇が放った攻撃、あれは北歐系列の魔法だった。どうやらこの戦闘にそなえて覚えて来たのだと

予想される。俺から言わせればあれはいろいろとツツコミどころがあるのだが、まあそれは置いておく。

「北欧の魔術に少しは理解があるようだが、そんな付け焼き刃の魔法などでは効かん!!」

それに関してはロキに同意だ。しかし、初学者にしては威力だけは褒められたもんだ。白龍皇の力という部分もあるだろうな。

「というわけだ。イツセー・ヴァーミリオン。ロキとあのフェンリルは俺たちが相手をする」

「お、おいおい!ちよつとま——」

「行くぞ、アルビオン!」

『ああ、いいだろう。北欧の悪神と魔獣フェンリル、相手にとって不足はない』

ビシユン!!!

白龍皇は俺の反論を待たずしてロキとフェンリルに向かっていった。白龍皇だけではなく、やつの仲間まで。

まあ、これで戦力的には互角以上となったわけだが……前と同じことが怒ったなこりや。しかも、今回はヤトもだ。

「イツセー殿、どうするでござるか?」

同じくして対戦相手をぶんどられたヤトが困惑しながら言う。

「全く……あいつら……一度までもならず、二度も……」

俺は恨み言をちよつとだけ吐く。しかし、それをヤトに聞かれていた。

「イツセー殿、まさか、前にも同じようなことがあったのでござるか?」

「まあ、な……しかし、今回ばかりはそうは言っていられそうにない。」

俺はそう言いながら後ろにいるヤトの部下たちに視線を向けた。

「今はこいつらがいる。今の日本神話とはかく人が足りない。そうだろう?」

「まあ、そのとおりでござる。それこそ、猫の手をかりたいくらいでござる」

俺はヤトの傷を回復させながら言う。

「これ以上人を減らすわけにもいかんだろう。今日限りは乱入してきた白龍皇と共闘が望ましい。二人だけでヤトの部下を守りながら戦うのは難しい。中身に難がありそうなロキのことだ。こいつらに攻撃を向けたって不思議じゃない」

「済まないでござる。そうでござるな……わかったでござる。白龍皇が乱入する前にケリをつけられなかった拙者らの不手際でござるな」

「はは、全くだ」

ヤトも納得したようだ。

「んで、どうする？あとの残った奴らのどれを相手にする？先に選んでいいぞ」

白龍皇との共闘を決定したところで次は戦う相手を選ぶ話をする。

カツ!!ドオン!!ドーン!!

戦いの音がする方に目をチラツツと向けると白龍皇一向がロキたち相手に俊敏な立ち回りを見せている。あのフェンリル相手でも全く危なっかしい雰囲気は感じられない。

「いいのでござるか?」

「ああ、構わない」

「では、拙者はあの子フェンリルの相手をさせてもらうでござるよ」

「んじゃ、俺は残ったミドガルズオルム擬きだな」

戦う相手が決まったところで俺たちは行動を開始した。

「ハアツ!!!」

ヤトは紅桜を抜刀。

こちらの殺気を感じたのか、子フェンリルがこちらに襲い掛かってくる。フェンリルの本能はすさまじいな。

ガキーン!!!

ヤトと子フェンリルが相対する。紅桜と子フェンリルの鋭い爪がぶつかり合った。

「重い……だが、親に比べたら軽いでござる」
ギーン!!!

ヤトが力押しで競り勝った
シュバツ!!!

子フェンリルの脇腹を切り裂き、大量の鮮血が噴出した。子フェンリルは悲鳴を上げる。

傷が回復したに加えてフェンリルを相手にしていたヤトと子フェンリルではどうやらヤトの方が少し上だったようだ。

俺は後ろを振り向いて白龍皇の方を見た。

「ふっ」

ドゴオツ!!!

『ギャウウンー!』

白龍皇の戦いを見ると、流石は歴代最強と言われるだけはある。あのフェンリル相手に近接攻撃に加えてあの強大なルシファアの魔力で翻弄している。

「おらおら!!いくぜわんころう!!」

あの伝説の筋斗雲と如意棒を用いて戦う孫悟空の末裔。ロキ相手に涼しい顔をしながら次々とロキの攻撃を聖王剣で切り裂いて無力化しづづけている兄さんとうり二つの末裔。子フェンリル相手に慎重に立ち回っている金髪の少女と黒猫。どれもこれももうまい具合にロキたちを相手取っていた。

どいつもこいつも相手にしたら厄介な奴らだ。ロキは白龍皇たちの巧みな連携、個々の強さに攻め切れないでいた、

「ええい!!厄介な奴らだ!いけ!!ミドガルズオルムたちよ!」

ロキが先ほど召喚したミドガルズオルムのコピーたちに指示を出した。ミドガルズオルムのコピーたちはフェンリルと戦っている白龍皇の後ろから巨大な火球を撃ち出した。

ドドドドドオオオオオオン!!!

その攻撃は白龍皇へは届かなかった。俺はあえて白龍皇へ向けられた攻撃を全て魔法陣で防いだ。

俺は白龍皇と背中を合わせる形で後ろに瞬間移動した。

「どうした?ヴァーリ・ルシファア。背中が完全になら空きだったぞ

「少し警戒心が足りていないのではないか？」

俺が背中越しに白龍皇へ他愛もない言葉を吹っ掛けた。

白龍皇は余裕の笑みを浮かべながら言った。

「なに、あの程度の攻撃などなんともなかったさ。キミが防ぐまでもなく、俺は避けられたよ」

「だろうな。まあ、これはいいとしてだ。俺はあのミドガルズオルムのコピー体をやってやる。そっちは好きにするんだな」

俺はこの戦いにおける交渉まがいの話をチームのリーダーである白龍皇と始めた。

「意外だな。いいのかい？」

「別に構わない。今回はこっちにも連れがいるしな。そうも言ったられない。日本神話側も白龍皇との共闘は了承している」

「その日本神話側というのはあそこで子フェンリルを相手にしている者のことか？良く見ればドラゴンのようだが？」

同じドラゴンを宿す者としての性なのか、ヤトにすぐに興味を示してきた。

「その通りだ。日本神話に所属しているドラゴンだ。今ここではヤトの意思が日本神話主神の意思だと思ってくれて構わない」

俺の言葉を聞いて白龍皇はさらにテンションを上げた

「面白い。神とドラゴン。絶対に手を取り合わないに種族だと思っていたがこんな奴もいるとは思わなかった」

この話に白龍皇、アルビオン本人が食いついてきた。

『聞いたことあるな。極東に変わったドラゴンが居るとい話は』
「アルビオン、知っていたのか？」

『噂程度だな』

「まあ、どちらにしても面白そうだ。剣を使うドラゴン。是非とも戦ってみたいな」

まだ目の前に戦う相手が居るといものにもうすでに先のことを考え出している白龍皇。大物なのか、それともただのバカなのか・・・
「戦場でおしやべりとは余裕だな！だが、よそ見をしていると痛い目にあうぞ！」

と、白龍皇と言葉を交わしているとロキがこちらに向けて攻撃を放とうとしていた。

「それはあなたもですよ、悪神殿」
「ぬおっ!？」

だが、兄さんの末裔が攻撃を阻止する。いや、正確には攻撃をさせなかった。聖王剣の力で凄まじい斬撃を飛ばしてロキの魔術を切り裂いたのだ。あの使い方、とても久々に見た。

「チイツー！」

ロキはいったん俺たちと距離をとり、ミドガルズオルムのコピーたち、フェンリルたちを下がらせた。

こっちも白龍皇と共にいる俺たちの元にメンバーが集まってきた。集団でお互いが向き合っている状態だ。が、敵が一体減っている。子フェンリルが一体戻っていないのだ。

「悪神殿、一体倒させてもらったでござるよ」

ヤトがこちらに合流した。ボロボロになりながらもだ。紅桜を握る左腕からは血が流れている。地上を見ると幾重にも体を切り刻まれて血まみれの状態で横たわっている子フェンリルがいた。ロキはその姿を見て苦々しく言った。

「くっ、スコルがやられたか……厄介な連中だ。我が野望も達成せねばなるまいが、それ以前に危険な奴らだ。ここで排除せねばあとで脅威となろう」

あちらが戦闘態勢に再び入る。殺気がこちらに伝わってくる。

「黒歌、ジャンヌ。二人は準備をしてくれ」

白龍皇がメンバーのうちの二人に指示を出した。何やら企んでいるらしいが。まあそれはいいとしてだ。

二人が俺たちの後方に移動した。そこで最終戦の開始だった。

「俺はロキをやろう」

「では私はあのもう一体の子犬とじゃれあいます」

「拙者はフェンリルを相手取るでござる」

「んじゃ、おれっちも同じくフェンリルだな」

即席の混合チームではあるが、みんな好き勝手に相手を決めてい

く。当然俺は残り物だ。

「はあ、んじや、おれはあのミドガルズオルム15体だな」

というわけでそれぞれの相手が決まる。俺たちは一斉にやつらへ攻撃を仕掛ける。

「行け！息子たちよ!!あの危険な存在たちを薙ぎ払うのだ!!」

ロキたちもこちらに接近する。

それぞれが決めた相手と相対する。俺が一番弱い相手だ。だが、数が多い。

ゴオオオオオオオオツ!!!!

ミドガルズオルムのコピーたちが一斉に炎をこちらに吐いた。

「ふっ」

とてつもない巨大な炎を俺は防御魔法陣で防ぐ。確かに炎の威力はそこらのものとは比較にはならない。だが、邪龍あいつらが放つ炎に比べたら何も恐れるに足らない。

それでもなお、ミドガルズオルムのコピーたちは俺に向かって炎を吐き続ける。

「見せてやる、見本をな。龍帝アラストールの豪炎!!」

俺は倍加で強化した龍帝アラストールの豪炎を奴らに放った。

ゴオオオオウン!!!!

龍帝アラストールの豪炎はミドガルズオルムのコピーたちの吐いた炎を簡単に押し返し、その体を焼く。

『グギヤアアアアア!!』

悲鳴を上げながらその身体が燃えていくミドガルズオルムのコピーたち。そして、跡形もなく灰と化していった。

今の攻撃で一五体いたミドガルズオルムのコピーたちは九体まで数を減らした。

「おうおうおう!!!凄まじい火力だねえ!!!」

俺の攻撃の一部始終を見たであろう美猴がフェンリルを相手にしながら叫んだ。こっちはいいからフェンリルに集中しろってんだ。

「更に威力を上げる」

倍加を掛け、魔法の威力を上げる。

「終わりだ!!^{アラストール} 龍帝の豪炎!!!」

ゴオツ!!!

シユババ!!バババババ!!!

放たれた炎は残ったミドガルズオルムのコピーたちをまとめて灰燼に変えた。

というか、直ぐに終わってしまった。

「バカな!!量産体とはいえ、十五体もいたのだぞ!それを・・・」

ロキは驚愕の眼をこちらに向けていた。

対して白龍皇は禁^{フランス・ブレイカー}手となっているため表情は分からなかったが、面白そうに言った。

「あの魔法の威力があの一瞬で段違いなまでに上昇している。本当に面白い存在だ」

『あれほど興味をそそられる強者はそうはいない』

「こちらも早く倒さねばな」

「くっ!おのれえ!!」

ロキは激昂して、白龍皇に攻撃を放つ。

『DividDividDividDivid!』

ロキの魔法はアルビオンの能力の一つである半減で威力が下げられていき、限りなくゼロになってしまっている。

「ちいつ!!厄介な!」

「神格にだけはこの能力があまり効果がない。ならば、それ以外のものに使わせてもらう」

なるほど、良いことを聞いた。

どうやら神格というものには効きにくいらしい。俺の半減魔法にはそう言った制約はないが。

「ハアツ!!!」

「伸びろ!!棒!!」

フェンリルを相手にしているヤトと美猴は二人でどうにか抑えている。

まあ、白龍皇たちが来る前はヤト一人でフェンリルを相手にしていたからな。まだ先ほどと比べて負担は軽いだらう。

「ふっ、ほら、こちらですよ」

『グウウウ』

兄さんの末裔に至っては完全に遊んでいた。子フェンリルは明らかにイライラしている。

子フェンリルの攻撃を完全に見切っており、相手が好きを見せたときに攻撃を仕掛ける。

「まずは視力を奪いますか」

ザシユ!!

聖王剣でためらいなく両目を潰した。

「次に爪」

ザシユツ!!

ヤトの紅桜でも切り裂けなかったほどの硬度を持つ爪をあんなにたやすく切り裂いた。

「最後に牙」

ゴリユツ!!

そして最も固いであろう牙さえも切り裂いてしまった。

子フェンリルはその三連撃をあびて悲鳴を上げる。魔物にとって聖王剣のダメージはデカイようだ。明らかに動きのキレが鈍っている。

動きの鈍い子フェンリルはまさに格好の獲物。全身を切り刻まれ、亡き物となってしまった。

「ふう、もう終わってしまいましたか。とはいっても、一番乗りというわけではないのですがね」

子フェンリルをたやすく仕留めた。

それだけではない。聖王剣の力もあるが、それだけでは爪や牙を紙のように切り裂くことは出来ない。自身の技量も相当なものだと見える。さらにはあれでまだ本気のほの字も出していない。恐ろしいな。本当に。

——兄さん。あなたの末裔はとんでもない逸材だ。

「ハティまで!!!なんてことだ!」

ロキがもう動かない子フェンリルを見ながら悲しそうに言った。

「どうした？よそ見をしている暇があるのなら自分の心配をした方が
良いぞ？」

ドオン!!!

「グウツ!?」

スキを見せたロキに白龍皇の魔術が突き刺さった。いくら神とい
えども相手は神をも超える存在になる可能性を持つ白龍皇の攻撃を
食らったのだ。しかもほぼノーガード。ダメージはあるだろう。

「喰らつとけ!!!」

ドゴオツ!!

美猴の拳がフェンリルに突き刺さった。フェンリルの身体は分厚
い皮膚で覆われているため、ただのパンチではびくともしない。しか
し、フェンリルは明らかに苦しそうにしていた。

「へへッ！仙術でおめえの身体んなちよちよつといじらせてもらっ
たぜい。仙術を込めた攻撃の味はどうだ？さすがのフェンリルとい
えど体の中までは鍛えることは出来ないだろう？」

なるほどな。

しかけは仙術にあるということか。

俺も詳しいわけではないが仙術は身体などに深く干渉できたりと
特殊な力だというのは聞いている。あれで体内に何かをしたようだ。
習得が難しいと言われている仙術をある程度は使いこなせるようだ。
さすがといったところだ。

「未だぜい！ドラゴンの兄ちゃん！」

「助太刀、感謝するでござる！」

シュバツ!!!

ブシュウウウウウウウウウ!!

仙術で動きが鈍っている間にヤトが攻撃を叩き込んだ。

先ほどと同じ箇所を的確に切り裂いた。フェンリルには巨大な切
り傷が再び刻まれ、大量の鮮血を撒き散らしながら地に落ちていっ
た。

「ヴァーリイ!!こっちは終わったぜ!!」

「そうか、あとは二人に任せよう」

「行くにやん♪ジャンヌ」

「ええ」

いつの間にか現れた黒猫と金髪少女がたった二人で巨大な鎖を宙に浮かせていた。

弱ったフェンリルに対して鎖を巻きつける。あれは確かグレイプニル？こいつら、どれだけ用意周到なんだ。

「邪魔したな。あとは任せる」

鎖を巻き付けたフェンリルとともに白龍皇とそのメンバーはいつの間にか集まっついて転移をして去っていった。

「つたく……あいつらフェンリルをどうする気だ？まさか飼いならすのか？」

白龍皇のたちは堂々と乱入してフェンリルを持ち去っていきやがったのだ。最初から神殺しの牙を手に入れたかったとでも言うのか。

「イツセー殿……」

「ま、これであとはやつだけだ」

残った俺とヤトはロキの方へと視線を向けた。

「おのれ白龍皇……最初から我がフェンリルが目的だったわけか……」

既にボロボロとなったローブを着たロキはよろよろとよろめきながら立ち上がり、俺達が浮いている同じ高さまで昇ってきた。

フェンリルを奪われたことにたいそう腹を立てているようだ。

「ま、おかげでこっちは拍子抜けするほどサラッと終わってしまったがな。どちらにせよ、あとはあんただけだ、悪神ロキ」

子フェンリル二体にフェンリル一体、紅いフェンリルに加えて十五体のミドガルズオルムのコピーもない。

「クツ……仕方ない。引きどきだな。我はここで失礼させてもらう。三度ここに現れ、次は必ず仕留めて見せよう——」

そう来ると思っただけ。ロキは悪名高いことで有名だ。ならば、自己保身に走るのは分かっていた。

「ぬっ!?何故だ!?転移が出来ないだど!?!」

ロキは魔方阵を用いてここから転移しようとした。しかし、ロキの姿はこの場から消えることはなく、ずっとそこに存在し続けていた。「残念だったなあ。悪いがこの辺一带にすべての魔法魔術を封じる結界を張らせてもらった。つまり、ここであんたは魔法を使用することは出来ない」

「なんだとっ!？」

この技は俺のもともと俺のものではない。邪龍アジ・ダハーカが元来持っている魔法の一つだ。ここで邪龍との戦闘で得られた知識が役に立った。

こんな魔法までも使えるとは、流石は千の魔法を操るドラゴンだ。
ディアボリズム・サウザンド・ドラゴン
魔源の禁龍の名は伊達ではないな。

「馬鹿なっ! そのような力、もはや神の領域だぞ!？」

ロキは明らかに動揺していた。まさか、魔法に長けた自分が一切の魔法を禁じられるとはさすがの神でも夢には思わなかっただろうな。転移も魔法の一種として数えられる。ここで逃げ切る方法があるとすれば俺たちを倒す他ならない。

「グホオオオッ!？」

俺はなんとも隙きだらけのロキの腹を一発殴ってやる。魔法に長けてしまうとその力に反比例して肉体が弱い。

これは魔法を主に使うものには効果的だ。

ロキは俺の連打に為す術もなく、ぼろぼろになっていく。

「おのれええええ!!！」

ロキはヤケクソとばかりに俺に殴りかかる。ロクに体術などやっていないだろうその拳はあまりにも軽く、遅く、鈍かった。

バキッ!!

「グハアッ!」

ドオオオオン!!!

俺はそんな攻撃を避け、ロキを踵落として叩き落とした。

そしてすぐさまトドメの攻撃に入る。

「グッ……馬鹿な……貴様、何故魔法が使える!？」

俺がこの結界の中で魔法が使えることに動揺する。

「いや、この結界内は俺も魔法が使えなくなる。が、一部は例外な
さ」

アジ・ダハーカと戦った際にはこれに苦しんだわけだ。よって、一
部のみではあるが結界内でも使える魔法になるように改良を施した
わけだ。数は少ないがな。

「終わりだ、悪神ロキ。広域殲滅魔導収束砲」

オレの目の前に出現した強大な魔法陣からは青白い太い光が放た
れる。

「おのれえ……おのれえええええええ!!!」

ロキは青白い光りに包まれていった――

「終わったでござるな」

「ああ」

「拙者は天照殿と通信をするでござる」

と、ヤトはそう言つて天照と通信を取り始めた。

ちなみにロキは死んでもいないし消滅したわけでもない。神を消
すのは今となつては簡単だ。しかしその影響は計り知れない。悪神
ロキとはいえ北欧の支柱。消滅すれば影響は大きいのだ。おそらく
北欧の奴らに更迭されるはずだ。

そのあと、ヤトとその部下たちと戻るのであった。



イツセーたちが戦闘を終えた直後、その知らせは天照のところに伝

わっていた。

「そう、わかったわ。帰投してちょうだい。オーデイン殿。悪神ロキは倒したとのことですよ」

「おお、そうかそうか。これで一安心じゃ」

会談も終盤に差し掛かっていると。オーデインは不安の種であつたロキをどうにかおとなしくさせる事ができてホッと一息ついていた。

「それでのう・・・天照殿」

「北欧側の言わんとしていることは分かっております、オーデイン殿。日本神話と北欧神話の同盟。しかし、今回のようなことがあつては少し不安が残るといふもの。三大勢力の防衛部隊とやらもほぼ機能していないかつた」

天照は今回の件での問題点を指摘する。これにはオーデインも険しい顔を強いられることになる。

「ふうむ・・・確かに今回はこちらに非があることは否めないのう。じゃがのう、天照殿・・・」

「ええ。ひとまずこちら側としても前向きに考えたいと思つています。何もたつた一度の会談で決めるのは早計でしょう。しかし、前向きに検討するのはあくまで北欧神話のみとの同盟。そこに三大勢力は含みません。そこは誤解なさらず」

「わかつた。その路線しかあるまいな」

こうして、第一回北欧神話と日本神話の会談が集結したのであつた。

NO, LI く新人獲得く

イツセーたちがロキとの戦いを終えて少し時間が経過した頃、世界のとある場所では何やら怪しげな会話がされていた。

「白龍皇に孫悟空の末裔、アーサー王の末裔、ジャンヌ・ダルクの魂を継ぐもの、いやはやどれも化物揃いだ」

「それだけではないだろう？あの日本の龍。あれも凄まじい驚異だ。何よりも恐ろしいのはあの金髪の魔法使い。あれはそこが知れん」

「俺としてはぜひとも一線交えてみたものだ。同じ英雄の血を引き、魔法を極めるものとして」

「俺もだ。アーサーに加えてあの日本の龍。剣士としては全力の勝負をしてみたいね」

ロキが日本の神々と主神オーディンに牙を向いたのはもはや周知の事実。それを分析しつつも戦うことを楽しみにしている集団だった。

剣士、魔法使いなど様々な人材がそこにはあった。

「ヴァーリ・ルシファー。また腕を上げてやがったな。 ジャガーノート・ドライブ 覇 龍 を

使わず、だったな」

「ジャガーノート・ドライブ 覇 龍 の攻略法はあるのか？」

「単純に持久戦に持ち込む、ということしか今のところ無いな。流石の歴代最強とはいえ、長時間あれになっていれば精神にも肉体にも致命的な影響を与えるだろう」

「幸いこちらには体力や魔力が消耗するのを加速させる神 セイクリッド・ギア 器がある。それ禁 バランス・ブレイカー 手に至らせて練度を高めれば対抗できるでしょ。そんなことよりもあの魔法使いはどうするのさ？」

「それに関しては適任がいるだろう？なあゲオルク」

「あまり期待しないでくれ。実際に見たわけでもないんだ」

「だが、知ってはいるんだろ？」

「ああ。偉大なるご先祖様の遺品にいろいろと書いてあったよ」

ニヤリと不気味な笑みを浮かべている眼鏡をかけた魔法使いは分厚い辞書のようなものを周りに見せながら言った。

「そうか、頼むぞ。あれをなんとかできるのはお前しかない」
「まあ、なんとかやってみるさ」

「それで？今後の予定はどうするんだ？」

「まずは、不動の存在である真なる赤龍神帝アポカリユプス・ドラゴンを呼び寄せんדר？」

「ああ。そのように曹操から聞いているが」

そのような会話をしているところに一本の連絡が入った。

「みんな、その曹操から連絡が入った。どうやらお目当ての龍喰者ドラゴン・イーターが見つかったらしい」

「へえ……これで、無限が有限に墮ちる時ももう近いな」

また、新たに動き出す者たちがあるのであった……



そのころ、日本神話の戦闘部隊、並びに伝説の魔法使いの直系と共闘した白龍皇一向は次なる行動に出るための準備に出ていた。

それに加えてペンドラゴンの末裔は教会の聖剣、支配の聖剣エクスカリバー・ルーラーで確保したフェンリルに突き刺していた。支配の聖剣はフェンリルの

眉間に突き刺さる。しかし、血が出るわけではなかった。

「これで、本来の力を失うことにはなりません、こちらの支配下にフェンリルを置くことができますよ」

支配の聖剣エクスカリバー・ルーラーで刺されたフェンリルはサイズが小さくなっていき、

その大きさは全盛期の半分以下、大型犬よりも二回り大きい程度となっていた。これで、ヴァーリたちの軍門に下ることになったフェンリルであるが、そのことに関しては嫌ではなさそうだった。

「ご苦労だった、アーサー。あとは、その傷を何とかせねばな」

ヴァーリがフェンリルを見ながら言ったのは先の戦闘でヤトに着けられた巨大な傷であった。流石にこの傷による消耗は大きい。直ぐには死には至らないだろうが、このままにしておけばいずれ出血多量と妖刀の呪いで衰弱し、死ぬのも時間の問題だった。

「そうですね……しかし、傷をいやす力は今のメンバーには……」

今代のアーサーが難色を示した時だった。二人の近くに魔法陣が

突如出現した。

「なっ!?この魔法陣はまさかっ!?」

アーサーだけはこの魔法陣に見覚えがあるようで、焦りを見せていた。

「ようやく見つけましたよっ!お兄様っ!!!」

魔法陣から現れたのは一人の少女。十代位の年齢で、髪は金髪。一般的なイメージとして定着している魔女が身につけているような三角帽子をかぶっており、服装はどこでも見かけるような制服姿だった。

「ルフエイ!?何故ここがっ!?」

「そんなの、探し続ければ何とでもなります!それよりも、初代ご先祖様の時代から大切にされていた家宝のカリバーンを持ち出して、勝手に家を出て良くなんて!!一体どういうことですか?せめて、私に一言くらい言ってくれてもいいではありませんか?私達、兄妹ですよね?」

この場にいるヴァーリを差し置いて、兄妹で言い争いに発展していた。ヴァーリはそれを無言でただ見ていた。いや、その話に入り込むタイミングがなかったのだった。

「それについては謝ります。しかし、ルフエイに言ったら絶対についてきたでしょう。私は自分自身の欲のためにルフエイを巻き込みたくはなかったのです」

「そんなことありません!水臭いじゃないですか、お兄様。私だって、家を出て外の世界を見てみたかったです。だから、こうしてお兄様のもとへときました」

ルフエイは兄であるアーサーの眼を見て自信の確固たる決意を突き刺した。

「戻れと言つても、戻らないようですね」

「ええ、さすがお兄様です。私のことをよくおわかりで」

アーサーは説得を諦め、ため息を付きながら言った。

「頑固なところは昔からですね。わかりました。もう家に戻れとは言いません。ルフエイが好きなようにしてください」

「はあ〜い！じゃあ、好きにさせていただきますね、お兄様」

兄妹どうしの話に決着がついたところで、ヴァーリが話を切り出す。

「終わったのか？」

「ええ、すみませんでした」

アーサーはヴァーリを差し置いて話していたことを謝罪する。ルフエイも同様であった。

「お見苦しいところを見せて申し訳ありませんでした。あなたが白龍皇ヴァーリ・ルシファア様ですね。申し遅れました、私はルフエイ・ペンドラゴン。ペンドラゴン家の長女でこちらのアーサー・ペンドラゴンの妹です。これからよろしくおねがいますね」

それに加えてルフエイは初対面であるヴァーリに礼儀正しく自身のことを明かした。慣れたようにスカートの短い裾をつまみ、ヴァーリに頭を軽く下げて一礼する。流石に高名なペンドラゴン家の淑女であって、教育がしっかりと行き届いていた。

「ヴァーリ・ルシファアだ。よろしくたのむ。俺のことはヴァーリでいい」

「わかりました！私のことはルフエイでいいですよ、ヴァーリ様っ!!」
「わかった」

「ところで、この魔物はなんですか？」

ルフエイは早速アーサーの後ろに鎮座している大型の獣について尋ねる。アーサーがルフエイの間に答えた。

「これはフェンリルです。先程わたしたちで確保してきたものです」

「これがかの有名な北欧のフェンリルですか。ということはお兄様たちは北欧神話と戦ってきたということですか？」

「ええ。正確に言うならばロキだけですけどね」

ルフエイはフェンリルと言う存在は知っていたようで、ヴァーリたちが北欧の神から分捕ってきたということまでも推理していた。ルフエイはずいぶんと博識であるようだった。

「あら？このフェンリル、怪我をしているようですね」

「ああ。こいつを生け捕る際に日本神話の龍がやった傷だ。俺達とし

てもこの傷を治療できず困っていたんだ」

「そうだったんですか。なら、私にお任せください！」

「やってくれるのか？」

「はい！」

ルフエイはフェンリルに向かって魔法を発動する。黄色の魔法陣がフェンリルの傷口部分に現れた。すると、フェンリルの傷はみるみるうちに塞がっていった。ヴァーリやアーサーでさえ手をこまねいていた傷がいつも簡単に回復してゆく。

「終わりました。あの傷は、ただの傷ではなかったです。呪いに加えて毒性もありました。それで傷が中々塞がらなかったのだと思います」

フェンリルの傷は塞がっていた。傷跡はそのまま残ってしまっているが、流血も止まっていた。また、ヴァーリやアーサーでは直せなかった原因まではつきりと理解していた。

「素晴らしい腕だな」

「流石ですね、ルフエイ」

この手際にアーサーやヴァーリも素直に称賛する。

「いえいえ、とんでもないですよ。この世界にはもっとすごい魔法使いがいますから」

ルフエイは謙遜する。今の魔法の技術といい、ルフエイほどの技量、なによりもこの若さでこの領域レベルに到達している人間は人間の片手で数える程しかない可能性が高い。だが、ルフエイは確信していた。まだ見ぬ魔法があるのだと。

こうして、ヴァーリたちに魔法の才能あふれる少女と北欧の神殺しの狼が加わることになったのであった。



ロキとの戦闘が終わってその次の朝、俺はいつもどおりの時間に起

床する。そして俺と同じ時間に起床する伽倻とともに始まる朝。いつもどおりの静かな日常が戻った。

北欧神話と日本神話の会談だが、北欧側としてはまずまずの成果を得られたのではないだろうか。結局同盟とまでは行かなかつたようだ。まあ、流石に同盟を結ぶにはまだまだ問題が山積みなのは否めない。とはいえ、北欧神話と日本神話との間にはある程度のつながりができたことに変わりはない。今後もおそらく日本神話は北欧との会談を余儀なくされるだろう。日本神話が牽制、圧力をかける対象である三大勢力とつながりを持つている北欧神話だが、どれくらい日本神話は譲歩するのだろうか。今後も目を離せないな。

それよりも俺は二つある世界最強と名高い神話の片割れ、聖典神話との会談が気になるところだ。聖典神話は今までどこともつながりを持たない一匹狼であったが、果たして日本神話との会談が成立するのだろうか。もし成功したら世界初となるだろう。聖典神話はいらんなどころから警戒されているからな。

「イツセ、おはよ!!」

「あ、ああ。おはよう、ドライグ」

そんなことを思いながら準備しているとドライグが起きてきた。大胆すぎる格好で……。

クツ……最近ドライグの格好が刺激的すぎる。

そんなことに悶々としながらも、意識を正した。

「で、イツセー。庭にいるあれはどうするの?」

ドライグが言っている庭にいるアレ。それは先日戦った紅いフェンリルのことである。

戦闘でロキは殺してはおらず、戦闘後に北欧側が連行、投獄したという。子フェンリル二匹は殺害、フェンリルは白龍皇たちが連れ去っていった。そして、あの場に残ったのが紅いフェンリルだった。非常に興味惹かれる存在であったので俺がここに連れてきたというわけだ。

「そうだなあ……ひとまず飼っていい?」

「ええ……イツセー、本気?」

割と真剣だったのに呆れられてしまった。

「だつてさ、あの紅いフェンリル魔法を使えるんだよ」

「ええ？ そうなの。ミドガルズオルムが言っていたことは本当だったのね」

ドライグは魔法を使えるフェンリルの存在に懐疑的だったのだが、オレが実際に体験したことを伝えると驚いていた。やはり、赤龍帝からみてもそんな存在は珍しいらしい。

「ああ。魔法使いのオレからしたら面白いことこの上ない。それに、ミドガルズオルムに会わせてやるのにも、ここにいたほうが都合がいいだろ？」

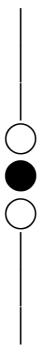
「そうは言っても伝説の魔獣よ？」

「心配するな。ここには神を軽く凌駕する伝説のドラゴンがわんさかいるだろ」

「……そうね」

神を凌駕するドライグはその中の一人だ。

その中に自分も含まれるということをおレの言葉から察したドライグは渋々了承した。



そんなわけで、裏にある庭でぐつすりと寝ている紅いフェンリルのもとへとやってきた。

相変わらずでかい図体をしている。

ちなみにドライグも一緒だ。ドライグいわく、『フェンリルに敵意があつてイツセーに襲いかかってきたら大変』、だという。別に問題ないのだけど、ドライグは頑なに意見を曲げなかった。

このフェンリルは俺が構築した結界の中にいるので、こいつを手に入れて私利私欲に利用しようとする様なやつらや駆除しようとするやつらが侵入することはない。

『……』

「よお、起きたか」

俺が近づくと紅いフェンリルは目を開け、俺を見た。

あの時とは違う、覇気のこもった眼差しだ。やはり、こいつは本物だ。

どうやら、ロキに掛けられた催眠魔法による影響はもうないと考えていいだろう。

『はい』

その瞬間俺は驚いた。この目の前のフェンリルは確かに言葉を発したのだ。『はい』と。

「おまえ……言葉を理解するだけでなく、発することができたのか」

このフェンリルだけでなく、ロキが生み出したフェンリルたちもおそらく言葉を理解することができていただろう。しかし、意思疎通を取ることはできていなかった。それなのに、このフェンリルは言葉を発し、コミュニケーションが取れるようだった。

『はい。あなたに礼を言います。あのときはありがとうございます。私を正気に戻してくれたこと。本来なら殺されてもおかしくなかったのですが、生かしてくれたことを』

「別に気にしなくていい。ミドガルズオルムの頼みだったからな」

『そうだったんですか……あの子が……』

ミドガルズオルムのことをあの子、か。ミドガルズオルムもそうだがこのフェンリルも相当思い入れがあるらしい。お互いに大切に思っているんだろうか。通じ合っているのだろうか。ドラゴンと狼。まったくもって異なる種族だというのに、だ。人間の俺から見ても羨ましいと思った。

「合わせてやろうか？ミドガルズオルムに」

『良いのですか？』

「ああ、構わない」

そして俺は早速、ドラゴンゲートを開く。今回はドライグと俺、ふたりだけでドラゴンゲートを開く。普通はもつと人数を割いてやる

ものだが、二人なのでかなりの力を使う。

バチッ！バチバチバチ！

魔法陣が現れ、ドラゴンゲート龍門が開かれる。前回同様にミドガルズオルムの意識を呼び出す。門はミドガルズオルムが司る灰色となった。

『んん？ああ、誰かと思っただらイッサーじゃあないか。あの時ぶりだね』

相も変わらず眠たそうにしている彼、ミドガルズオルムだが今回に至っては眠気もすっ飛んでしまうのではないだろうかと予想している。

「ああ。今日はお前に合わせるやつがいる」

俺が変わって紅いフェンリルがドラゴンゲート龍門の意思疎通できる範囲に入る

『久しぶりですね、ミドガルズオルム』

『えっ！姉ちゃん!?!』

予想通りの反応ありがとう。

ミドガルズオルムは先程の様子が嘘のように変化し、ビシツとした姿になった。グレート・レッドを遙かに上回る長い巨体をとぐろを巻くようにしていたが今ではそれもなく、体を完全に起こしていた。なんなんだ？この差は。龍王の威厳そのものだ。

『ミドガルズオルム、あなたは噂通りの様子ですね』

『ななななな、なんのことかな、姉ちゃん。僕は今まで通りだよ』

『フフフ。まあ、それはいいですよ。久しぶりですね』

『う、うん、久しぶり』

なんか、俺たちを無視して二体だけの世界に足を突っ込んでいないだろうか？

まあ、何にせよ、久しぶりの再開を喜んでもらいたいところだ。

『姉ちゃん、どうしてイッサーのところに行ったの？』

ミドガルズオルムがこのフェンリルがオレのところに行った理由を問う。その問いには俺が応えた。

「ロキとの一戦でいたのさ。ロキに操られてたんだ。だから、こつちに連れてきたというわけだ」

『はい。私は悪神ロキに隙をつかまして。操られてしまったというわけです。拳句の果てにフェンリルの子を産まされてしまった。あれごときの軍門に下されるとは情けない』

『……………そうだったんだ。ありがとう、イツセー。姉ちゃんを無事に保護してくれて』

「いいさ。俺も面白い体験をさせてもらったんだ。」

言葉を発し、魔法を放つ。そんな狼をこの間近で観察することができたのはとても幸運だったと言えることだろう。保護して運ぶことなんて何も苦ではなかった。

『にしても、ダディ……………やってくれたね。絶対に許さないよ。姉ちゃんを操った。そして、貞操をも……………。今度あったときは容赦はしない。』

それはさておいて、ミドガルズオルムはもうすでにカンカんだ。自身の大切な存在を操り、汚されたのだ。これで怒らないほどやつは怠け者ではなかったのだ。先程とは豹変し、殺気が龍門ドラゴンゲート越してもヒシヒシと伝わってきている。流石、腐つても龍王というわけだ。

自分を生み出したロキをやる気だ。親離れの時か。

『ミドガルズオルム、そんなやつのはどうでもいいのですよ。落ち着いてください。私は、あなたにこうして出会えたことが何よりも嬉しいのです。』

『つーご、ごめんね姉ちゃん。』

『いいえ、それでも私のことを大切に思ってくれるのは嬉しいです』
……………なんなんだ？この姉弟。とたんにイチャつきやがって。

あそこだけ雰囲気が違うじゃないか。

まあ、とにかくだ。この姉弟には付け入る隙きがないのでこのままにしておこう。再会して話すことも多いだろう。

「ゲートはこのままにしておくからな。二人で過ごすと良い」

『はい、そうさせていただきます』

『うん、ありがとね。バイバーイ』

俺とドライグはこの姉弟カップルを置いてここをあとにした。



ミドガルズオルムと紅いフェンリルたちをあとにして今俺とドライグは買い物に来ていた。定期的に行かなければならない食材やらなんやらの買いだした。珍しく今日はドライグといっしょだ。

「すごかったね、あの二体。私見えて恥ずかしくなっちゃった」と、ドライグは少し頬を赤くしていった。

「まあ、な。あんなに中がいいとは思わなかった」

「うん。羨ましいなあ。私もあんなふうに……」

「ああ、そうだな」

「うえっ?! い、イツセー。もしかして、私と!？」

「あ、ああ。まあ、その、なんだ。あんな深い関係になる人なんてオレの周りには数えるほどしかないからな」

「あ、うう……」

ミドガルズオルムたちに当てられてオレもこんな話をしてしまった。ドライグは顔を更に赤くしてしまって俯いたままだった。それとなく言ってみたらこうなってしまった。

「なんだ、イツセー。お前もたまには言うじゃないか。お前はドライグのことをなんとも思っていないかと思っていたが」

何をバカなことを。あれだけ長く過ごしている人だ。何も思わないはずがない。だが、さっさとそういう関係に成れそうになかった。オレの中で、まだあの子のことが心残りなのだから。

「そうか。まあ、いい選択だ。曖昧な気持ちでドライグにそんなこと言ってもドライグが可愛そうだ。だが、かと言っていつまでもそれは許されない」

「(ああ、わかっている)」

ニトラにそう釘を刺される。そうだな。いつまでもこれではだめだな。ドライグとの関係を進めるためにも、な。

「ん？」

気を取り直してドライグと二人であるっていると、見知った人が路上で座っていた。哀れな格好で。

「うっ……うう……グスツ……」

銀髪にスーツ。

そう、この人は。

「ううっ……あれ？イツセーさん？」

共に戦った北欧のヴァルキリー。ロスヴァイセさんだった。

オレはドライグがいたが、流石にこの人を無視することは心が痛かったのも、この人を連れて喫茶店に来た。

ドライグとオレは隣同士で座り、ロスヴァイセさんは向かい側と言った形だ。

「イツセー、このひとは？」

「ロキと共に戦った北欧のヴァルキリーだ」

小声でロスヴァイセさんには聞こえないように話す。ドライグは『ああ、』と納得する。

とにかくこんなところでは目立つので落ち着いた雰囲気、喫茶店にロスヴァイセさんとともに移動した。

「んで？どうしてあんな泥だらけで路上に？」

ロキとの戦いが終わったあとこの日本にい他理由を聞いた。

「オーデイン様に、オーデイン様に置いていかれたんですう……！！！！」

ん？置いていかれた？どゆこと？

ドライグも訳がわからないといって顔になっているだろう。あの爺さん、優秀な人をほっぽり出すとか何考えてんだ。

「それでえ!!それで、どこにも行くアテがなくてえ!!!」

ロスヴァイセさんは突っ伏して泣き始めた。大声で。ここ喫茶店だから少しどころかとても目立っている。まあ、半分以上はドライグに注目しているが。そんな下心満載の視線を入店時から向けられているドライグは気にしていないようだった。

「イツセーさん！どうか、どうかかしてくれませんかあ!？」

ロスヴァイセさんは大声で必死に頼み込んできた。

フム。そう言われてもな。どうしようか。

「ちよつと、イツセー。まさか、うちに連れてくるつもりじゃないでしょうね？」

ドライグは機嫌が悪くなっていた。どうやら知らない女を家に入れるのは嫌らしい。まあ、そんなことはするつもりはないからはずきりいう。

「ドライグ、それは考えていない。だからそんな機嫌を悪くしないで」「そ、そう。それならいいんだけど」

俺はドライグに真剣な目を向けて言う。するとドライグは直ぐに機嫌を直してくれた。

さて、とはいえどうしようか。ロスヴァイセさんはヴァルキリーとしては優秀。また、魔法の使い手としても若くてまだまだ伸びる。これを活かせるところ……

「あ、そうだ」

思考していると妙案が浮かんだ。あるじゃないか。裏の事情に精通している人材を欲しがっているところ。ロスヴァイセさんならやっていけそうなところが!!

俺は早速連絡を入れた。

『イツセー殿でござるか。今日はどういった件で?』

「至急、ここにきてほしいが、できそうか?」

『大丈夫でござる。では、今から向かうでござる』

連絡した相手は日本神話実行部隊総隊長のヤトだ。

「なるほど。つまり、ロスヴァイセ殿をうちに入れると」

「ああ、そういうことだ」

数十分後、ヤトも交えての会話だ。

俺の答えは日本神話に丸投げすることだ。人手不足の日本神話の

実行部隊にロスヴァイセさんをぶち込むのだ。日本神話側からしてもこの話は決して悪いわけではないはずだ。

「ヤトさん、お願いします。私もうここしか行くアテがないんです」
ヤトの隣に座るロスヴァイセさんも必死に懇願する。救いの手がすぐそこまで来ているのだ。わからなくもない。

両腕を掴まれてまで懇願されたヤトは以外にも考える素振りなく言った。

「そうでござるな。ロスヴァイセ殿は優秀でござるし、魔法力も申し分ないでござる。拙者だけの権限では部隊を編成するのは無理でござるから天照殿にこの件を相談するでござる。まあ、よほどのことがない限りは大丈夫だと思うでござるが」

「ありがとうございますっ!!!ヤトさん!!!」

ロスヴァイセさんは本当に嬉しそうにヤトに笑顔を向けた。これは、ただの親愛ではなさそうだ。

こうして俺、ドライブグ、ヤト、ロスヴァイセさんのお茶会はお開きになった。四人分の金を払って店を出る。

「イツセーさん、今回はありがとうございます。そちらのキレイな方も」

「ええ」

「気にしないでくれ」

帰り際、ロスヴァイセさんに頭を下げられる。

ロスヴァイセさんはドライブグのことは知らないはずだ。そんなことよりも気になる男のもとへ行けることが嬉しくてそれどころではないだろうが。

「では、イツセー殿、ドライブグ殿。拙者らはこれで」

「またな、ヤト」

「またね」

ヤトとロスヴァイセさんは一緒に術で帰っていった。早速天照がいる高天ヶ原に行ったのだろう。

「イツセー、じゃあ行こっか」

「ああ、そうだな」

俺とドライブも買い物続きを再会したのであった。

No, L I I 西の妖怪勢力

とある日、禍々しいオーラを周囲に遠慮なく放つ剣を持った男が分厚い魔導書を読み込んでいる男に近づく。

「やあ、ゲオルク。首尾はどうだい？」

魔導書を読み込んでいる男は試しがてらに魔法を発動させながら応えた。その魔法は木の机が金属に変化していた。

「ああ、まあまあ、といったところだ」

「招待状は出せたのか？」

「当然だ、抜かりはない」

「果たして、彼は来るのかねえ」

「来るさ。そうでなくては俺が困る。それよりも、曹操はどうした？何をしている」

「曹操なら、今人材探しに行っているよ」

「人材探しだつて？」

魔導書を読むことをやめ、剣を持った男の方へと向いた。剣士は自身の魔剣を懐にしまいながら言った。

「ああ。なんでも、優秀な魔法使いを見つけた、だつてよ。仲間に加えたいらしい」

「優秀？だれだ？」

「先祖が大物らしいよ。それに、君が戦いたがっているあの魔法使いと深い関係があるとか……」

「本当か!？」

魔法使いの男が席を勢いよく立ちながら言った。

「ああ。本人がそう言ったからな。お、噂をすれば」

ちようどタイミングのいいときに一人の男が現れた。先ほどの剣士が持っていた魔剣と対極とも言っているいい神々しいほどのオーラと雰囲気を持つ槍を持っている。

「やあ、曹操。ちようどいいタイミングだったね」

「それで、どうだったんだ？」

「ん？ああ、残念なことに逃げられたよ」

槍を持った男がやれやれっといった表情で言った。

「逃げられた？キミからそんな真似ができるなんて、その魔法使いも相当だな」

「ああ。凄かったよ、彼女。」

「お前がそれほどまで言うのだから、ぜひとも仲間になりたいね」

逃げられたというのに余裕そうに言う三人だった。



イツセーとドライブがいわゆる買い物デートをしているところ、冥界ではとある人物の復活を皆で喜んでるところだった。

「やあ、セーイチくん。意識が戻ったようだね」

「サーゼクス様」

「お兄様!!」

冥界、王都ルシファードで最も大きい病院で今代の紅エヴォリユシオン・ドラゴン炎龍児を宿すもの、布藤誠一は目を覚ました。ロキ戦において大ダメージを負い、今の今まで意識不明の状態であったのだった。

そのセーイチはベッドから身を起こして会話程度なら十分できるようになるまで回復していた。セーイチの周りにはグレモリー眷属たちが見舞いに来ていた。そこに悪魔界のトップであるサーゼクス・ルシファアが来ていた。魔王の登場により、セーイチ以外の全員が例のごとく膝をついた。

「みんな、今日はセーイチ君が目を覚ましたって聞いて私的に見舞いに来たんだ。気楽にしてくれ。」

「はい」

「わかりました、魔王様」

サーゼクスは膝をつく眷属たちに楽にするように言う。眷属たちは了承して姿勢を元に戻した。

「それでセーイチ君。気分はどうだい？」

「だいぶ良くなりましたよ。まだ戦いには参加できませんけど」

セーイチはサーゼクスの質問になんなく受け答え出来ていた。

「何を言っているんだ。そんな状態の君を戦いに参加させるわけにはいかないさ。せつかくドラゴンが悪魔側に来てくれたんだ。そんな貴重な存在を捨て駒のように扱えるわけがないだろう」

サーゼクスはニツコリと笑顔をセーイチたちに向けていた。

「そうよ、セーイチ。今は体を大事にするときよ」

「そうですね。無理をすれば確実に体に支障をきたしますわ」

リアスや朱乃もセーイチに言い聞かした。セーイチは二度、神殺しの牙をその身に受けた。神でさえも牙に貫かれたら必ずといつていいほど消滅するはずだが、セーイチは二度も生還している。とはいえ、ダメージは否めない。ここで無理をせず、療養するという選択はまず外せないだろう。

『ほんと、どうなるかひやひやしたよ、全く。相棒君は本当に運がいいね。あのフェンリルの牙を二度も喰らって生きているなんてね。こんなに運がいい宿主は君が初めてだね。ほかの宿主だったらこうはいかないよ』

悪魔に比べればはるかに長い時を生きたアグニルでさえもセーイチの運の良さを称賛するほどであった。

「セーイチさん。ほんと、よかったです」

「心配、したんですから……」

アーシアや小猫がセーイチに寄り掛かる。

「ああ、ごめん。今度はこうならないように頑張るから」

セーイチは二度と悲しませないようにと、二人の肩に腕を回していった。その言葉を聞いて二人、いや、みんなが顔を緩ませる。

ガラッ

サーゼクスの後ろからドアが開く音が聞こえた。そして後ろには涙を浮かべたサタン家の長女、ソフィアとその兄妹のベオグラードとシエリーがいたのだった。

「セーイチくん!!!」

「ソフィアさん」

ソフィアはセーイチの姿を見ると超速でベッドに駆け寄っていた。この速さには全員が驚く。

「よかった!!!よかったよお!!意識が戻って!!」

涙やなんやらで顔をぐちゃぐちゃにしながら言うソフィア。あまりの勢いにセーイチ自身も反応に困る。

「ごめんね、私のせいで。私のせいで、こんなけがを負わせて……」
「ソフィアさん……いいんですよ、ソフィアさんが無事で。体張った甲斐があつたもんですよ!!」

セーイチは目の前で涙を流している女の子を放つてられない気質だ。ソフィアをフォロースべく、このようなありきたりな言葉を発した。しかし、今のソフィアにはそれだけでも十分心に響いていた。

「セーイチくん……」

見つめ合う二人。そして気づいたときはもう遅し。すでに二人だけの世界になっていた。

「ちよつと、セーイチ。なにソフィアさまに変な視線を向けているの？」

二人だけの世界から呼び戻すべく、リアスがセーイチにそれらしい理由をつけて耳を引っ張る。

「イタタタタ!!部長、別にそんな視線向けてないですつて!!」

二人はそれを気に現実に戻された。ソフィアは顔を少し赤くさせており、まんざらでもなさそうな雰囲気醸し出していた。

セーイチは気づいていないが、女性陣はソフィアがセーイチに対して少なくともいい好意を向けているのを感じ取っていた。

「よお、セーイチ。元気か？」

姉、ソフィアの暴走によつて出所を失ったベオグラードが落ち着いたところでセーイチに一声かける。

「ええ、まあこんな感じっすよ。しばらく戦闘は無理ですがね」

セーイチは病院の寝間着から包帯を見せながら言う。まだ包帯を巻かなければならないほどの傷であつたことが良くわかる。

「そうか。セーイチ、礼を言うぜ。姉上を助けてくれたこと。サタン家次期当主としても、姉上の家族としても」

「セーイチさん。本当にありがとうございます」

サタン家の長男と次女がそろって頭を下げた。サタン家という最

上級悪魔という地位をもっている物が下級悪魔に対して頭を下げるというのは異様な光景であった。それほどまで、家族のことを思っており、その家族を助けたセーイチに感謝しているということだ。

「いえ、そんな！体が勝手に動いただけですって」

二人が数多を下げているのは気が滅入るのか、必死で謙遜するセーイチ。

「いや、セーイチくん。それは誰にでもできる事じゃないさ。それもフェンリル相手にね。キミはまさしく。悪魔にとって目指すべき姿の一つかもしれないよ」

魔王さえも今回のセーイチの働きは称賛するものだった。

だんだんと賑やかになっていくセーイチの病院室であるが、そこへさらに現れる者が一人。

「はあく〜い、セーイチくん」

「セラフォル様」

魔王セラフォル・レヴィアタンもセーイチの見舞いに来ていた。

「元氣そうで何よりだよ☆」

今回は魔法少女の格好ではなく、濃い緑色のジャケットに黒い長めのスカートというものだった。

「おや、セラフォル。今日はいつものあの格好じゃないんだね」

サーゼクスが眼にするあのピンク色の格好ではないことに彼自身が以外そうに言った。

「まあね。今日は色々と大事な外交があったから流石にね☆」

「外交、ですか？」

「そうだよ☆三大勢力としては、これから日本の西の妖怪勢力といういろいろ交渉とあっていてね☆京都の妖怪と打ち合わせがあるんだよ。なんでも、妖怪勢力は須弥山と会談するらしくてね☆」

会談と聞いて、セーイチたちはまた顔がこわばる。過去に会談のときは戦いとなったからだ。今回も無事に進むとは思えなかった。

「セラフォル様、でしたら今回は……」

「そうだ。セーイチくんたちが修学旅行として行く京都で、ということになりそうだ」

「じゃ、じゃあ俺たちが今回会談の護衛として行くのですか？」

セーイチが先読みしてサーゼクスに質問する。しかし、サーゼクスは首を横に振った。

「いや、それには及ばないよ。なんせ、セーイチくんは手負いの状態だ。それにせつかくの修学旅行だ。戦いのことはこの際忘れて、修学旅行を楽しんでくると良い。こちらのことは我々にまかせてくれたまえ」

「わかりました」

「では、私達はこのへんで」

「じゃあねー☆」

サーゼクスとセラフオルーの両名はここでセーイチの部屋をあとにした。残ったセーイチたちはまだこの部屋で退院の時を待っていたのであった。その間、当のソフィアはというと、お節介すぎるほどにセーイチの世話をしていた。

そして退院の時。セーイチの部屋に看護師が来てその準備を一通り終わらせる。セーイチは病院着から普段着に着替えられこの病院をあとにした。

「セーイチ、退院おめでとう」

「おめでとうございます」

「体は大事にしてくださいね、先輩」

人間界の布藤家に帰宅すると周りから祝福の言葉を掛けられる。セーイチはそれを嬉しそうにしながらも心に誓った。久々に平穩を迎えた兵藤家では修学旅行へと話題が移り変わっていったのだった。

このまま、何事もなくセーイチたち二年生は修学旅行という一大イベントを迎えるが、その行き先が京都ではなく、沖縄になっていることはまた別の話である。



「にいた〜くん!!お手紙が来てたよ!!」

「お、ありがとな、ルル」

「えへへ、どういたしまして」

数日後の朝のことだ。

ルルが玄関のポストから手紙を持ってきてくれた。ルルにお礼を言つて頭をなでると嬉しそうにはにかんだ。うん、愛らしい限りだ。さながら太陽のような輝かしい笑顔である。

「んくくと、誰からだあ？」

ルルからもらった手紙を開封し、内容を確認する。

「ああ、なるほどな。もうそんな時期になっていたのか」

「イツセー？手紙？」

「ああ、京都の妖怪。八坂からだよ」

「ああ、あの化け狐ね」

「おいおい……」

ドライグは仮にも西側の妖怪勢力のトップをそのように呼んだ。確かにドライグと八坂は古くから存在する伝説の存在同士でドライグのほうが格上ではある。しかしこんなにも嫌悪を表すかのような言い方をしている。ドライグは何故か八坂をよく思っていないようだった。少なくとも仲は悪そうだ。

そう。手紙の送り主は他でもない。この日本に古来から住む異形の存在。妖怪の西側勢力の長、八坂からだった――



八坂からこうして手紙が送られてくるというのはただのあいさつ、という面もあるだろうが本当の目的はそのほかにあるのだ。

というわけで、今リビングにドライグ、ティア、俺、妹たち、そして今回の当事者になるだろう伽耶を集めた。

「みんな、というわけだ。俺は京都、正確に言うと裏の京都へ行く予定だ」

「ふうん………イッセーはあの狐に会いに行くんだ」

ドライグが何故か不貞腐れているように言った。明らかに不機嫌な様子である。

「別にそういうわけではない。というか、ドライグも分かっているだろ？この時期なんだからよ」

「まあ、ね………」

納得はしていないようだが、少しは分かってくれたようだ。だが、今回はいつもと違う。いつもは俺だけで京都に行っているが、今回はみんなに違う提案を試してみる。

「まあ、今回はみんなで行ってみることにしないか？」

「ここにいる全員でか？」

俺が提案すると、ティアがすぐに食いついてきた。

「にいたん、にいたん。キョートって？」

「確か、西のほうにある古からある都市………」

「ねえ、にいに。そこって楽しい？」

妹たちが一気に質問してくる。みんな、好奇心というものが強いのだろう。ドラゴン、そして多感な年ごろに入りつつある妹たちだ。気になって仕方ないのだろう。というか、クロア。博識すぎないか？古からある都市って普通はその年で表現する言葉じゃない。流石だな。鍛錬だけでなく勉強までしてるとは。

「ああ。こっちじゃ見られないものばかりあるからな。経験として行ってみたほうがいいだろう」

「本当ですか？おにいさま」

「ああ。いい機会だからな」

「わーい!!旅行だあ〜〜!」

旅行と聞いて一気にはしやぎだす妹たち。三人ほど落ち着いているが、表情を見ればワクワクしているのは同じようだ。

「それで、その。イッセーさん。私も今回行くというか、当事者というのはどういうことでしょうか？」

なぜ自分も行くのだろう、と疑問を捨てきれないような表情をした伽耶がこの少し騒がしい部屋で俺の耳の近くで尋ねる。

「ああ。そうだ。伽耶、君の故郷に行くんだ」

伽耶は意表を突かれたかのような気の抜けた顔になる。

「こ、故郷、ですか・・・？」

「ま、君の故郷といったら少し語弊があるな。正確には君の母の故郷らしいぞ」

「お、お母さんの・・・」

そう、今回は京都へ行くことに加えて、伽耶の正式に住む場所となるかもしれない場所に行くことだった。



「みんな、荷物は持ったな？」

「うん!!」

「抜かりはありません」

「大丈夫だよ」

俺の声に元気よく反応してくれる妹たちに、それを後ろからニコニコと綺麗な笑顔をしながら見守るドライグとティア。そして、楽しそうにしながらも複雑そうな表情をしている伽耶。今回は大所帯だ。この人数で移動するとなるとはぐれる可能性が出てくる。しっかりとしていなければな。

今回は流石に人数が多すぎたので前回同様に転移魔法で目的地へ向かうことにする。旅としてはロマンのかけらもないけども。

「みんな乗ったな。じゃあ、行くぞ」

全員と荷物を載せたことを確認して俺は転移魔法を発動させる。転移する場所はあらかじめ決められている。一般人からすれば、いきなりなにもないところから人が現れたら驚くだろう。目立ってしまったのは目に見えている。俺たちは一目に着かない京都市内の端に転移する。

シユン、と転移の音をたてながら一瞬で目的地に到着する。

目の前には一般人が認識できない寺院がたたずんでいる。ここはいわゆる裏側のもので、表の京都にある施設の一つだ。京都に転移するときはだいたいこの場所が集合場所となることが多い。

現在の時刻は午前十時。約束の時間だ。

ちようどだった。目の前の寺院の門が木と木が擦れあう年季の入った音をたてながら開いていった。

「お待ちしておりました。イツセー殿」

開かれた門から姿を現したのは一人の少女だ。だが、人間ではない。姿はそっくりだが、頭にピンと立った耳と後ろでふわふわと動いている尻尾がついている。裏の京都に身を置く妖狐だ。この京都ではもつともよく見かける種族の一つである。

昔から続いているという赤と白の巫女服を着ている。

少女はお辞儀をこちらに深くした。

「ああ、時間通りだ。久しぶり、大きくなったな、月夜」

目の前にいるこの妖怪の名前は月夜^{つきよ}。この京都の長、八坂の一人娘である。

端正な顔立ちに妖怪特有のこの妖艶さ。まさに八坂の遺伝子を受け継いでいるだけあって男が好きそうな容姿である。

「はい、お久しぶりです。イツセーさん。イツセーさんのお連れの方もこちらへ。」

俺たちは月夜の後についていく。俺たち全員が境内に入ると門は閉められる。

「では、今から裏の京都へ参ります」

境内の建物にはいいり、月夜は呪札を取り出した。呪文をとなえろと、目の前に現れたのは扉だ。

そう、ここから裏の京都へ向かうのだ。昔はこんなことしなくても行けたのだが、色々な事情があるのだ。その話はあとにしよう。

裏の京都へ入ると景色ががらりと変わる。

濃い霧と暗がり。妖怪たちが好むこの空気。表では昼だが、こっちは夜だ。

「真っ暗……」

「そとではあんなに明るかったはずなのに……」

「すつごおくくいい！真つ暗!!」

初めて見る光景にキョロキョロと周囲を見回し、ワイワイと騒いでいる。

魔物に近いドラゴンにとってもこの環境は悪いわけではない。すぐに適応できるだろう。むしろ、人間にはあまり居心地は良くない。裏の京都のは木造の建物がずらにと並び、妖怪たちでにぎわっている。日本の本に出てくるような妖怪たちがたくさんいる。妹たちは興味深そうに妖怪たちを見ている。その一方伽耶は母親以外の同族たちを見るのは初めてなのか、緊張しているようだった。

「皆様を宿泊する宿へと案内します。そこはこちら側の人間が経営しているところなのでご安心を」

どうやらこちらに気を使ってくれたらしい。まあ、そちらのほうが慣れているのでありがたいが。

「皆様はこちらへ。それと、イツセー殿と伽耶殿はわたしとこちらへ」宿に着くと、俺と伽耶は月夜と一緒に総本山のもとへと向かうように言われた。ドライグたちとはここで一度お別れということになっ
てしまう。

「えっ？イツセー、一緒に今日は行かないの？」

ドライグは俺のもとに寄って、心なしに悲しそうに言った。そんな表情されたら一緒にいたくなるじゃないか。

「ちよ〜と八坂に挨拶するだけですぐ帰るよ」

「八坂といやらしいことをするなよ、イツセー」

「(んなことしねーよ、ニトラ)」

ニトラが話をエロい方向へもっていくがそれを軌道修正する。

ともかくドライグたちと別れ、俺と伽耶は八坂のいる御殿へと向かった。

八坂がいるのは裏の京都の中心部。八坂がいなくてはここは成り立たない。中心に近くなるにつれ、妖怪たちの姿が変わってくる。屈強なまでに鍛えられた兵士たちの数がどんどん増えている。八坂たちを守る警備隊たちだ。

しばらく歩き、門へと到着した。

「月夜です。お客様をお連れしたので通してください」
「はっ」

月夜が一声かけたただけですんなりと通ることが出来た。流石は京都の姫。

そして、本殿の前に数人の姿が目に入った。周りには護衛部隊。そしてその中心には俺の知った顔と知らない顔がいた。

「久しぶりやじやなあ、イツセーはん」

「ああ、久しぶりだな。八坂」

「一先ず、あがってえな。そちらの子も」

「は、はい」

俺たちは本殿の方へと案内され、応接室に招かれた。もちろん、和風の応接室だ。座布団の上に正座。これは慣れるまできつかった。

「では、イツセーはんはんに頼まれたことから話そうかのう。伽耶、といったな？」

「は、はいー」

伽耶は目の前の大妖怪、八坂にタジタジであった。まあ、仕方ないか。今まで同族を見たことのなかった子が妖怪の長を相手にしているんだからな。

「そなたの母親のことはすでに調べてある。そなたの母親、京はここみやこ京の者じやった」

少し前、この子の家族のことを八坂に調べてもらおうように言っていた。そして、今回こちらでその結果を聞きに来たわけでもある。そして、伽耶のこれからの身の振りを決めるため、これが第一の目的だ。
「そ、そうなのですか・・・」

「いかにも。実際に京は下級の妖怪ではあったが力のあるほうじゃった。彼女は神社の巫女をしていたんじや。その場所も判明しておる。今日は遅いから明日にでもその場所にいってもよかろう」

「は、はい・・・ありがとうございます」

伽耶にとってはどれもこれもすぐには受け止めきれないだろう。俺が助けたときはすでに一人だった。悪魔などに襲われもしていた。

両親とどれくらいの間を過ごしたのか知らないが、苦勞していたはずだ。家族ともども散りじりになって。

少し重い話になったが、俺は先ほどから気になっていたことを八坂から聞いた。

「なあ、その子は誰だ？」

八坂のとなりに先ほどから黙って座っている小さな子。こちらをずくずくと見つめている。八坂や月夜とおなじ耳、尻尾。しかも九尾。まさかとは思うが……

「ん？九重のことかえ？この子はわしの娘じゃ。ほれ、あいさつせい。この方が前話した人じゃ」

「は、初めましてなのじゃ、わ、わしは九重と申す。そ、その、よろしく頼むのじゃ、イツセー殿」

噛みつ噛みの自己紹介をする八坂の次女、九重。どうやら人見知りらしい。

にしても、ここ十年くらい京都に行かなかつたのだが、二人目がいとは。知らなかつた……いつのまに二人目を……

「おう、よろしくな、九重」

そんなことを考えながら俺は九重言うのだった。

No, L I I I 　　く京の都く

八坂と会ったあと、俺は一人でドライブたちの元に戻った。伽耶はというと、同族たちのいるところに泊まることになった。これは八坂や月夜たちの強い希望があつてのことだ。

宿についたら俺はすぐに大浴場に向かう。大浴場の入り口にかかっている暖簾をくぐり、脱衣所で服を脱ぐ。脱衣所は今どきのロッカー式だ。セキリユティ面の心配もあるだろうから鍵をかけられる仕様となつている。それだけに目を瞑れば雰囲気を感じさせるものになつている。衣服をすべて脱いだところでいざ、温泉へと向かう。ここは屋根のない露天風呂だ。見上げれば夜空が広がっている。石でできた大きな湯船に目の前には日本庭園が広がっている。こういった落ち着いた雰囲気は俺は好きだ。こういった西洋にはない文化が俺たちにとって人気なのだ。更にはこの露天風呂のすぐ下を川が流れている。風呂に入りながらこんな絶景を見られるのは素晴らしい。温泉に入る前に体を洗う。この日本ではごく普通の温泉マナーである。

「あああ~~~~~これこれ」

屋内にも温泉はあるが、俺はせっかくなので屋外の温泉に入ることにした。今は夜だから景色は殆ど見えないが。

肩までつかるとその心地よさについて声が出てしまった。まあ、いつものことだし仕方ない。

観光地としてもこれほどの魅力が詰まったここ、京都は裏の京都でも超重要な場所なのだ。

京都。この国の始まりとも言つていい場所の一つ。そのため、今でも歴史的価値のある建物、景観を残す素晴らしい場所だ。世界でも唯一といつていい、長く続いている国家であり、その国をまとめ上げてきたこの国の王族も現存するなかで世界最古の家系とも言われているほどだ。その当時は裏との関りも今より断然高かった時代でもあるわけだ。もちろんその王族も陰陽道や裏の事情とつながっていた

とみていいだろう。要するに陰陽道の力などが強かった時代だ。今はその影も薄くなりつつあるが。

さてところでなぜ俺がこの国と関わりを持つているかというところ、その昔、裏の京都で起きた大事件がきっかけだった。

数十年前

俺とドライグはさらなる強者を求めて世界を回っていた。そして俺たちは日本に初めて訪れていた。世界を飛び回っていた俺たちはその時は転送魔法ではなくて、パスポートを取り、一般の交通手段で日本に来ていた。ま、一応人間だからな。ドライグも説得して人間界のルールに従ってもらったわけだ。目立つわけにもいかなかったからな。

俺は当時日本に凄まじく速く、強いドラゴンがいるという情報を聞きつけて日本に訪れた。しかし、日本に来たはいいもの、お目当てのドラゴンは姿を現さず、ただ時間が過ぎていった。俺たちは日本での観光に切り替えて最初の目的地である京都へと赴いた。だが、ここで予想もしないことが起きたのだ。

邪龍

ヴェノム・ブラッド・ドラゴン
靈妙を喰らう狂龍

裏の世界にかかわるものなら知っているであろう伝説のドラゴンだ。八つ首に八つの尾をもつ巨大なドラゴンだ。日本神話でもその名が語り継がれている。一般人でも知っているような有名な怪物だ。そんなやつが――裏の京都に突如として現れたのだった。

八岐大蛇はその昔、日本神話の武神である須佐之男命が倒したときれている。実際事実ではあるのだが、なぜか復活してこの裏の京都に襲来したのだ。俺が京都に来た時とちょうど重なることになってしまったのだ。

邪龍は本当にしぶとい奴だ。八岐大蛇が自分でよみがえったのか、それとも誰かが仕組んだのか。もし八岐大蛇が自分自身で復活したのだとしたらとんでもなく厄介だ。やつはこの先も何百年かの周期

で復活するのだとすればそのたびに滅ぼす必要があるからだ。

八岐大蛇はやはり伝説に残るだけあって、とてつもない力を持っていた。龍族としての力はもちろんのことだが、それよりも厄介なのは八岐大蛇特有の能力だった。この世界のドラゴンはそれぞれ固有能力を持っている。八岐大蛇は魂を汚染させて元の魂の原型さえ保てなくなるほどの猛毒、そして高い再生能力だ。八つある首は切り落しても直ちに再生するというレベルの再生能力。この厄介な能力と強さは周りに甚大な被害をもたらしたんだ。当時、邪龍が復活するなんて予想もつかない事態。それに加えて少々平和であることにかまけていた京の妖怪たちに八岐大蛇を撃退するすべなど皆無だった。あれはひどかった。戦闘向きではない妖怪たちは次々に八岐大蛇の餌食となった。あるものは首と胴体が分断され、あるものは四肢をちぎられ、あるものは踏み潰され、あるものは魂を汚染され……。戦闘員でさえもまるで歯が立たず、この京都の長である八坂でさえも八岐大蛇には防戦一方であった。下位の龍王に匹敵する八坂でさえ、結果、裏の京都は半壊。妖怪たちも総数の四分の三が八岐大蛇によって命を落とした。まさに、最近起きた大災害とも言えるだろう。

八岐大蛇は偶然居合わせた俺、そしてこの事態に駆け付けた日本神話たちとともに八岐大蛇を倒したってわけだ。この機会にヤトや日本神話、高天ヶ原の神々とそれなりの友好関係を築けたというわけだ。

——今思い出しても痛々しい事件だ。あれ以来だっただろうか。八坂が妖怪たちの身をさらに気にかけるようになったのは。だから、伽耶のことについてもあれほどに自分のことのように心配していたのだ。

あれから数十年たった裏の京都もだいぶ再建が進んでおり、一時期激減した妖怪たちの数も全盛期には遠く及ばないが、それでも少しづつ数は増えているのだ。加えてあれ以来戦闘員の数を増やしている。自分たちの居場所は自分たちで守る、ということらしい。ともあれ、

あれ以来前に向かっていることは良いことだろう。温泉に浸かりながらそのようなことを回想していると、後ろから人の気配がした。ま、大浴場だから当然だろう。この遅い時間にも入る人はいる。ペタペタと足音がこの静かな開放された空間でも聞こえてくる。

だが、俺はすぐに異変に気がついた。おかしい。この気配……知らないやつじゃない。いつも一緒にいれば、いやでもわかる。まさか、まさか……

「え？イ、イツセー？ど、どうしてここに……」

後ろを振り返ると、そこには……

困惑しながらも、顔を少し赤く染めているドライグがいた。

ドライグは大きめのバスタオルを体に巻いている。が、しかし、かえってそれがなんとというか……余計にその非の打ち所のない完璧な肢体を強調させていた。こんなことがあつていいのだろうか……俺は目の前にあるユートピアに夢中であった。

「なるほど、やるではないかドライグよ。にしても、うむ……エロい!!!」

うろろくん、ニトラが興奮しながら言うのもわかる。大いにわかる……!

特に大きめのバスタオルに包まれていることによつてむしろ強調されているおぱーいが!!!おぱーいがああ!!!

「ハハハ、いいところに目を付けたな、イツセー。あの豊満に実つて柔らかくて形の美しいもつちりしたおっ○いは至高だぞ?」

なんだと……

豊満なのは今見て分かったが、それだけではなくて柔らかくてもつちりしているだっ!?

ん?ちよつとまで?ニトラ。なぜそんな詳しいんだ?まさか……触ったことがあるのかっ!?

ニトラがとんでもなくドライグのおぱーいに詳しいのでふと疑問に思った。

「ん?ああ、触ったことあるぞ。一度と言わずに二度三度」

い、いつのまに!?先を越されていたかあっ!?

ニトラのやつ、いつのまにそんなことを……。しかし、ニトラは外には出れない。だとすればっ!ドライグが精神世界に来たときかっ!?

いやいやいやっ!今はこんなこと考えている暇はない。思わず目の前のユートピアに夢中になりすぎるところだった。早くこの場を収めなくては!

「い、いや、ドライグ。俺は男湯に入ったはずだが?女湯はお隣だろ?」

「え?そんなわけないじゃない……私だって、女湯の暖簾くぐったんだから」

お互いに正当性を主張する展開となつてしまった。俺は間違つていないはずだ。だがドライグも間違いなく女湯のほうに入ったという。どういうことだ?

このようなハプニングが起き、互いに目を合わせられるようなメンタルもあるわけでもなく、目をそらしてしまう。ドライグは日本庭園のほうに目をそらした。ドライグの目の色が変わった。プルプルと体を震わせている。?なにをみているのだろうか?

「ドライグ……どうしたんだ?」

「イッセー……あれ見て……」

ドライグが指をさしたほうを見てみると……そこに書いてあるのは――

【ここは、混浴専用です。通常の温泉は3階です】

と看板に書いてあったのであつた……

「……」

「……」

互いに一時無言になるほかなかつた。

つか、混浴う~~~~~!?!いやいやいやいやっ!ウソオン!?俺温泉の場所間違えたあ!?

「よかつたではないか、イッセー。しかも今お前とドライグの二人だけだ。ナニをしても大丈夫だろう」

「そういう問題じゃねえよ!?てか、問題ありありだよっ!」

ニトラが狙って言っているとしたか思えないほどの下ネタをぶっこんできやがった。てかそういうのは威力業務妨害なんだぞ!

「え? イッセー、ジルニトラが何か言ってたの?」

ドライグは俺の中にいるニトラの存在を知っているので俺が急に焦りを出した理由がわかっていているようだった。

「ん? ああ、いや、なんでもない」

当然こんなことを面と向かって言えるわけでもないので適当にごまかす。

「まあ、そのなんだ。俺はもう体も洗ったし頭も洗ったから先出るよ。ドライグはゆっくりしていくといい」

この状況で一番無難な解決策をドライグに伝える。女性の入浴は長いのが普通。ならば、ここはドライグに譲る場面だ。本当は今すぐに出て三階の男女別の方に移るべきなんだが。

俺がとにかく出ていこうとするとドライグに待ったをかけられる。

「イッセー、別に制度的に問題ないんだからさ……その……一緒に入ろうよ」

ほええつええええ!?

俺の予想の斜め上を軽く超えるような答えが帰ってきた。それに俺の頭の中は真っ白になってしまった。

「し、しかし。誰か来てしまうかもしれない」

「来ない。こんな時間だし。来たとしても魔法で如何にでも出来るでしょ? あ、そっか……。私と一緒に入るのは、嫌なんだ……」

おおうっ!

そんな泣きそうな顔をするのはやめてくれえっ!!!

「おい、イッセー。ドライグの必死の覚悟を不意にするのはこの私が許さん」

内側にいるニトラにもいらまれてしまった。ここはやるしかないか。

「わかった、ドライグ。ここは混浴の場。ドライグがいいならそうしよう」

「……………うん。じゃ、じゃあ私は先に体洗ってくる、ね」

「あ、うん」

「ドライグは今来たばかりらしく、スタスタと洗い場へ向かったのがあった。」

「お待たせ」

数十分くらいしただろうか。

ドライグは温泉につかる。俺のすぐ隣へときた。ちなみにここは混浴なのでバスタオルなどをお湯につけても一応問題ないのだとか。

……………緊張する

「心地いいね、温泉」

「ああ、そうだな」

なんて言葉しか出ない。隣にいる一人の異性が気になってしゃーない。混浴……………なんて恐ろしいものなんだっ!?

……………

……………

……………いや、しゃべることが何もないっ!というか、ドライグもだろうけど緊張して口が開かん!

ドライグのことを横目でチラッと見る。顔を赤くしてずっとうっむいているだけだ。というか、のぼせてるのでは……………?!

……………っ~~~~~~~~!!?わ、私っ!もう出るねっ!?

なにやらプルプルとしていたが、ついに我慢の限界だったのか、ドライグは急に勢いよく立ち上がってこの温泉から出ていこうとした。しかし、予期せぬことが起きた。

「わわっ!」

「えっ————」

ドツシャ————ン!

ドライグがバランスを崩してこちらに倒れてきたというところまでは理解した。しかし、それ以降は視界が真っ暗になったままだった。とっさのことに瞼を閉じてしまった。大きな水しぶきを上げるような音がし、水が周りに飛び散った。

——— とうか、この体勢、ヤバくない？はたから見たらさ。

おれ、ほぼドライグに押し倒されているんだけども………いや、いやじゃないんだけどさ。むしろそそる。

とにかく俺は今の状態から脱却するためにドライグにも今の状態を伝える。

「な、なあ……ドライグ。とにかくドライグもどいてくれないか？はたから見たらとんでもない状態になっているし、さ」

「えっ………あっ………」

ドライグは今の俺と己の体勢がまずいことに気が付いたのか、顔をさらに真っ赤にさせた。

「あつそのっ……めんなさいっ!!!」

ドライグは俺に一言ゴメンと言って勢いよく立ち上がる。温泉に落ちてしまっているバスタオルを拾い上げてすべて頭になってしまっている自分の体に巻いた。

「じゃっ！わたし先に出てるからっ!!!」

取り付く島もないほどの超スピードでこの温泉から上がって女性のほうの脱衣所に駆け込んでいったドライグ。

あまりの衝撃的な事態に俺もボケツと呆けながらドライグの後ろ姿を見ることが頭になかった。

「おい、イツセー。いつまでその情けない顔をしているんだ」「っ……そ、そうだな………」

俺があまりにも長い時間を無駄にしすぎたのか、俺はニトラにそう言われるまですつとあの甘い世界に浸ってしまった。やっここさこの現実に戻った。

ひとまず、のぼせているも同然なので温泉から出て脱衣所に入った。タオルで体についた水滴を拭き取って行く。そのとき、おかしなものがある白いタオルを汚した。

「ん？なんだ？これ」

タオルには赤い斑点がいくつもいくつも浮かんでいた。

「おい、イツセー。鏡の前に立ってみろ、まったく」

ニトラに呆れられる。

俺はとにかく言われたとおりに鏡の前に立った。

「えっ!? なんじゃこりゃあ!？」

鏡に映る自分を見て俺は驚愕した。自分の鼻から大量の鼻血がドバドバと出てきているのではないか。その勢いは止まることを知らないうてくらい。

タオルにあつた赤い斑点はすべて自分の垂らした鼻血であつた。

まさか……全く気づかないとは……。

「フッフ……それほどドライグの裸と体の感触は良かったと。いや、イツセーには刺激が強すぎたかな?」

「仕方ないだろう!? あれはっ!」

俺はこの場に誰もいないことを良いことについて声を出してしまった。これではいきなり声を荒げている変人としか見えないう。

「ハツハツハ、ま、イツセーは本当にそういう女性経験がまるで皆無の男だからな。にしても、これだけ生きていて未だ童貞これとは」

「うるさいやいっ!!」

全く大きなお世話だ!!

俺はかなり精神をえぐられるような口撃を受けながらもとにかく着替えて鼻血をなんとかし、部屋に戻るために大浴場を出た。

にしても、血を流しすぎだな。余計なところで。血がたりなさすぎてフラフラだ。歩くことさえも少しきついくらいだ。

俺がフラフラと歩いていると、ちょうど部屋の前でティアとばつたりと会った。

「ん? イツセー。風呂に行っていたのか。にしてもどうしたんだ? ぶらついているし、顔色も悪いぞ?」

「い、いや別に心配されるようなことじゃないんだ」

「そうか。それと、ドライグのやつが変だったぞ? 風呂から帰ってきたと思ったら、顔を真赤にしているし、ブツブツと独り言をずつと言って挙げ句布団にくるまってなにか身悶えていたぞ? イツセー、何

か知らないか？」

ギクリ。

絶対さっきのことだ。間違いない！

しかし、バカ正直にティアに言えるはずもない。ここは知らんふりをしておこう。

「さ、さあな。風呂でなんかしてたんじゃないか？俺は男だからもちろんわからないが」

「む、そうか」

「なにかと女性だからあるんじゃないか？そつとしておくのがいい」
「それもそうだな。イツセーも女心というのがわかってきているな」
俺はなんとかティアをその場でぐまかすことに成功するのだった。



朝、窓の光がカーテンの間から差し込んでくる。俺の普段の生活から身に着いた体内時計が俺の意識を覚醒させる。宿のベッドから身を起こし、着替えなどの準備をした。

それにしても昨日はとんでもないハプニングがあったがな………ドライブと顔を合わせられない。というか、ドライブ顔に出しすぎでは？

「うわあ~~~~~！たっかっ~~~~い!!」

「すっごーい!!」

「ちよつと、みんな、走ったら危ないですわよ」

今、俺は妹たち、ドライブ、ティアと京都旅行中だ。

昨日のことはとにかく今は置いておいてせつかくここに来たのだから観光すればいいだろうということだ。ちなみにこれはティアと妹たちの提案である。ドライブとおれは正直それどころではないレベルだったのだが、これで少しでも気を紛らわせればいいのだが。

ちなみに伽耶は今日、八坂のところまで母親が巫女をやっていた神社へと向かっていった。みんな楽しんできてくださいとまで言われた。ま、本人がそう言うのなら仕方ない。それに、母親の唯一と聞いていいほどの手がかりだ。必死になるのは当然だろう。

今訪れているのは京都おなじみ。JTR京都駅の目の前にある京都タワー。ターミナル駅のすぐ近くにある摩天楼のごとくそびえたつ巨大な構造物だ。実際に上ってこの京都を周囲一帯、一望できる。ぶつちやけ、ドラゴンなんだからいくらでもできそうではあるが、それを言ったら雰囲気台無しだからな。

不意にドライグと目が合った。すると、ドライグに目をそらされてしまった。昨日のこと、やはり気にしているのだろうか。まあ、あんなことになってしまったのだから当然か。

京都タワーを堪能したら次は京都市の東側に移動。この私鉄の阪京線一帯は観光地がずらりと並んでいる。俺たちはそこに行くことにした。相変わらず楽しそうにしている妹たちとそれを見ているティア。そしてその後ろに俺とドライグ。横に並んではいるが、俺たちは終始話せなかった。

今向かっているのは清水寺である。清水の舞台で有名な寺である。その途中には土産などを売っている店がずらりと並んでいる。その通りを歩いている時だった。急に俺に魔法陣による連絡が入ってきたのだ。

『イツセー殿、少し今時間があるでしょうか?』

「ん?なんだ?」

連絡をしてきたのは裏の京都の警備隊。いわゆる八坂たちの部下だ。

『実は今朝から九重様の姿が見当たらないのです。八坂さまも』

「ん?今朝から?どういうことだ?」

『それが、八坂さまの姿が見えなくなり、九重様が探しに行っただけり.....』

「戻ってこないと?」

『その通りで』

「そうかわかった。こっちでも探してみる」

『ありがとうございます!!』

俺は連絡を絶った。

しかし、面倒なことになりそうだ。

「イツセー、なんかあったの?」

ドライグが神妙な顔でこちらに問いかけてきた。

「ああ、どうにも面倒なことになるかもな」

俺がそう言った瞬間、おかしな空間に俺たちは転移することになった。周りにいた観光客たちはいない。周りにいた人間がいらないということは見た限りでは俺たちだけがこの疑似的な空間に移されたようだ。

「ドライグ」

「うん、わかってる。イツセーも気を付けてよね!!」

「ああ、妹たちを頼む」

ドライグはみなまで言わずとも、妹たちをつれてここから脱出した。

「さて、とりあえず、九重を探すとするか」

俺はここから移動し、九重の居場所を探知する。少し高いところに浮きながら九重の気配を探す。

すると、現在位置から少し離れたところに丁度いた。たった数人の護衛を連れて。

「九重!」

「イ、イツセー殿! どうしてここへ!」

「それはこっちのセリフだ。何をしているんだ? おまえのところの護衛から連絡を受けた」

「えっ、そ、それは・・・母上を探そうと・・・」

「なに? 八坂がどうしたんだ?」

「おかしな輩たちにさらわれたんじゃ! 息を引き取った母上の護衛殿がそういっておったんじゃ!」

九重の話を聞けば、まーたおかしなことが起きたようだ。ほんと、京都は災いだらけだ。

この必死さ。嘘を言っているわけではなさそうだ。周りの護衛も九重の言葉に嘘はないと言っている。

俺たちがこうして合流してまもなくだった。俺は気配を察知して目の前の建物に目を向けた。正確にはその上に立っているやつらに。「だれだ？おまえら」

数十人の集団が俺たちの目の前に現れていた

NO, LIV 英雄の子孫たち

「誰だ？お前たちは？」

九重たち一向と合流した直後、俺たちの目の前に立ちはだかる集団に遭遇した。京の由緒ある建物の屋根に堂々と立っている集団は少し数が多い。おそらく幹部だと思われる6、7人の後ろにもまだ2、30人いた。

京の都に住み、この京を守らんとする九重たちはこの京に侵入した異邦人たちに完全に敵意をむき出しにしていた。

数十人の集団を代表するかの如く俺たちの前に立ちふさがる連中。その中の一人が俺たちに声をかけてきた。

「やあ、初めましてだね。魔法使い。いや、僕たちの同業者。おなかまさんここに来てくれたということは、僕からのささやかなる手紙を読んでくれた、ってことでいいのかな？」

落ち着いた雰囲気で話し始めた男。見た目は俺と変わらないくらい。そんなことはどうでもいいが、それよりも気になるのは奴の格好だ。とんでもなく分厚い書物を抱え、魔法使いを思わせるようなあのローブ。あの分厚い書物。おそらくは魔法関連のものだ。どこか見覚えのあるものだった。いや、ただの魔法書ではない。魔法書はこの世界にありふれているものだ。あれはそこら辺にある有象無象とは違う。高位魔術書グリモワールだ。有名な魔術師が執筆した可能性が高い。そんなものを持っているということはやつは並みの魔術師ではないはずだ。奴の後ろにはほかにも何人も魔術師がいやがる。よくこんな人数を集めたもんだ。

「手紙？そんなものは知らん。知らん奴から送られてきたものには覚えはないな。俺が最近受け取った手紙は京の八坂からのものだけだ」「おや？おつかしいなあ。結構苦労して調べたつもりなんだけどなあ。もしかして間違ってたのかなあ？まあ、曾おばあ様の書物にもかろうじて載ってたくらいだしなあ」

「どうやら手違いがあつたようだ。」

「というか、俺の家がそう簡単に特定されたら困るってもんだ。」

「まあいいや。仕切り直してだ。改めて初めまして。僕たちは英雄派と名乗っているよ。一応、禍カオス・ブリゲードの団カオス・ブリゲードに名を連ねている」

どんな集団かと思ったら、一度耳に入れたことのあるような名前だったのだ。おそらく俺の教え子から聞いたものであった。

「へえ、お前らが禍カオス・ブリゲードの団か。最近耳にする三大勢力に敵対する奴らを集めた不穏分子たちだったな。たしか、魔女ヘクセン・ナハトの夜やニルレムも加担してた組織だったような気がするが」

「その通りだ。さすがというべきかな？」

「そんなことはさして重要なことじゃないだろ。お前らは何をしにこへ来たんだ？」

俺が奴らに目的を尋ねる。こんどは魔法使いではなく、そのとなりの東洋人っぽい男が答えた。衣服を見ると中国特有の漢服を身にとっている。

「俺たち英雄派がこの京に訪れた目的はおおまかに言うとなつた。まずひとつは、この地でとある実験をすること。もう一つは君だよ、魔法使い」

どんな実験かも気になるが、俺が狙いだということのも気になった。

「俺だど？なぜ俺のようなただの人間に、お前らみたいな連中にとつて用がある？」

俺はまじめに言っているつもりだったが、東洋人はあきれたように言った。

「ははは！謙遜にもほどがあると思うがね。第一、君のような存在がただの人間だと言われたら、それこそほかの末裔たちはただの人間以下に成り下がることになるだろう」

「その通りだよ。そうだろう？偉大なる大魔法使い、マーリンⅡアンブロジウスの末裔よ」

幹部らしき魔法使いが放った言葉に俺は衝撃を受けた。ほとんど俺の存在という存在を看破されていた。ま、唯一相手が勘違いしていたことは俺が正しくは末裔ではなく、その子供だということだ。しかし、末裔というのはほぼ合っているようなものだった。

今まで俺のことはこの裏世界において全くと言っていいほど知られなかった。いや、なるべくそのように仕向けていたはずだ。どこで知られた？これには流石に俺も警戒を強めざるを得なかった。

「……どこで、それを知った？」

相手の目を見るに、ハツタリでもカマかけているわけでもなさそう
だ。ここで言いつくろつても駄目だろう。おれは大人しく認めるこ
とにした。

「ははは、これだよ」

魔法使いは抱えていた分厚い高位魔術書グリモワールをとりだした。

「魔術書だ？」

俺は怪訝な目でその魔術書を見た。

「そうさ。これがなければ、僕はおそらく君のような存在にきがつけ
なかつただろう。あ、そうそう、申し遅れたね。僕の名前はゲオルク
と名乗っている。ファミリーネームはファウストだ」

ゲオルク、ファウストだと………

聞き覚えのある名前どころじゃない。奴はこの界限では大物中の
大物であつたのだ。

「おまえ、ファウストということは、あの偉大なる大魔術師、ゲオルク
Ⅱファウストの末裔か」

「その通りだよ。まあ、僕と曾おばあ様では実力差がありすぎて、ファ
ウストと名乗るのは申し訳が立たないけどね」

曾おばあ様、奴はそういった。つまり、あいつはファウスト四世だ
ということになるな。

ゲオルク・ファウスト。本名はヨハン。昔、俺と切磋琢磨し、技を
研鑽しあつてきたおれの良きライバルだった。それでいて、聡明な女
性であつた。ヨハンはその後、めちやくちやでかい魔術結社の創設に
携わつた、と聞いた。そのあとのことは知らないが。

ちなみに、なぜか現代ではゲオルク・ファウストは男という風に伝
わっている。どこでどのようになつたのかは知らない。だが、過去の偉人には男装女装など転装は珍しくない。このおかげで性
別が異なつて伝わることも少なくはない。もしかすれば意図的かも

しれないが。

にしてもなあ。ヨハンのやつ、いつのまに子孫なんて作ってやがったんだ？知らなかったなあ。あのやろうそんなそぶりは見せていなかったが。

「俺たちはそんな集団だ。おれは曹操と名乗っている。三国志、魏の皇帝曹操の末裔だ」

昔の良きライバルのことを懐古していると、隣の東洋人が名を名乗る。

「曹操………、ということとは、CAO, CAOか」

「そうだな、それは英語での読みだが、一応曹操よりもそちらのほうが正しいがな」

「僕はジーク。北欧の剣士、ジークフリードの末裔だ。同じ西洋人同士、よろしく」

隣の東洋人はまたもや大物の末裔だった。そして、皇帝、曹操のとなりにいる禍々しい西洋の剣を帯刀した男は名を名乗る。ジークと言った。こいつもまた、歴史に名を遺す英雄だった。剣一本で龍を滅ぼした英雄中の英雄だ。

そして、やつらが名乗ると同時に彼らが手にしている武器に目が行った。

「曹操の末裔………、それは神滅具か。そちらは魔剣らしいな」

「その通り。わが身に宿りし神器、黄昏の聖槍だ」

「さすが、博識だな。これは魔剣の帝王。魔帝剣グラム」

「ちなみに僕はこれ、絶霧だ」

ヨハンの末裔が自身の周りに紫色の濃い霧を出した。あれではつきりわかった。こいつ、ゲオルクの子孫でありながら神滅具を持っているとは。

「まさか、新滅具や伝説の武具までも持っているのか。さすがは英雄つてどころか」

やつらの神器に目が引き寄せられる。黄昏の聖槍、絶霧。

どちらも今確認されている十三ある神滅具のなかで上位四つと言われているものだの二つだ。あの伝説の偉人、イエスを貫いた血に濡れ

た聖槍。結界に関しては最強かつ最悪の能力を有する神器。どちらも極めれば手が付けられない上位神滅具だ。

正直、新滅具ロンギヌスだらけの集団など、厄介極まりない

「そんなことはない。これが宿ったのは単なる偶然さ」

「まさかとは思うが、全員セイクリッド・ギア神器を所有しているのか？」

「その通りだ。俺たちは世界中の英雄たちの子孫やセイクリッド・ギア神器所有者たちをかき集めたんだ。ほかにも、ロンギヌス神滅具やセイクリッド・ギア神器所有者はいるさ」

「ほう、それはさぞ面白そうな集団だな。にしても、よくそんなに集めたな」

「ははは、おほめにあずかり光栄だ」

「というわけだ、アンブロジウスの子孫よ。早速本題に入ろう。単刀直入に言おう、我々は君を勧誘に来た」

「勧誘だと？」

「そうだ。我々、英雄派に加わらないか？キミには正真正銘、英雄の血が流れている。キミは僕らの同胞となるに相応しい」

「俺を加えてどうする気だ？お前たちにメリットがあるのか？」

「当然だ。メリットでしかない。君のような伝説の偉人の末裔が仲間になれば、さらに我々は行動の幅を広げられる。どこもかしこも人材不足でな。それは我々も例外ではない。人員は多いに越したことはないさ」

「こんどは勧誘か。」

「そういえば、俺の生徒もこいつらに勧誘されたって言ってたな。それも相当しつこかったとか。」

「いきなり勧誘されて、俺が首を縦に振るとでも？」

「ははは、だろうな」

「うぬぬぬ……貴様ら、黙って聞いていれば！母上をさらったのは貴様らじゃな！母上を返せ!!!」

先ほどからずっと相手にされていなかった九重がついに堪忍袋の緒を切らした。

「ちいさな女の子とは思えない怒号を英雄派のやつらに突き付けた。おや、仲間外れにしてしまつて申し訳ありません、小さな姫君よ。で

すが、安心してください。お母上どのは一切傷つけないと約束しましょう」

「貴様らのような輩の言うことなんて信用できるわけないじゃろ！」
「まあ、それならば仕方ありませんね。しかし、我々としても、スポンサー様がいるのでね。どうしても八坂姫にはご協力してもらわないといけませんですよ」

「き、貴様ら……」

残念だが、こいつらがいまだここに八坂を誘拐しているかわからない。言葉ではああいっているが、最終的に人質にする可能性もなくはない。大妖怪である八坂は龍王の下位クラスの実力はあれど、こいつらの力量は今のところ未知数。簡単にはやられはしないだろうがもしかするということもありうる。今の時点では下手に動けないということがわからない九重ではないだろう。

「おたくらがどこでどうしようと俺が口を出すことではないんだがな、ここで暴れるのは遠慮してくれないか？京は数十年前に邪龍によつて壊滅的被害を受けてな。それでいろいろ今もそういつたことには敏感なんだ」

「なるほど、それであればほど殺気だっていたと。しかし、安心してくれ。できる限り、我々は悪魔たちのような破壊活動はしないと約束しよう。それは、我々の目的から外れるからな」

曹操の末裔は俺たちに破壊活動はしない、とに言った。いわゆるテロリストと定義されるであろう奴らにしてはなかなか話の分かる奴ららしい

「お前らがこうして活動する目的はなんだ？仮に俺を構成員にして、その先に何を見据えている？」

「我々がこうして活動する目的は単純明快だ。人間として、異形たちを相手にしてどこまでやれるか。人間の限界とやらに挑戦したいのさ」

「アンブロジウスの子孫よ、ドラゴン、天使、悪魔、神、吸血鬼。数多の異形たちを退治してきたのは人間———そうだろう？そうであるならば、我々は英雄を目指す者たち」

やつらが見るからに用意周到なものだから、どんな目的があるのか
と思ったが意外と簡単な話であった。簡単だが、それは壮大なもの
もあつた。人間として、か。おれはそんなこと、考えもしなかつたこ
とだ。

だが、気持ちは分からんでもない。ただこいつらは戦いを求めている
のだと。100パーセント相いれないと思っていたが、少しは通ず
るものがあると思う自分がいることに俺は少し驚いた。

「なるほど。お前らようするに戦い好きな集団か。あの白龍皇とさ
して変わらないな」

「ははは、確かにそうかもしれないな。言われてみれば彼とも似通つ
た部分はあると思つたよ。やり方は違うけどね」

こいつらの目的は理解した。

だが、こいつらがいろんなところに勝手にケンカ売ると、俺の古
き友人とその子供を巻き込むことはまた別の問題だ。俺はそのこと
だけは、認めることが出来ない。その静かな怒りも含めて目の前の奴
らに忠告してやる。

「そうか。お前らの考えは分からなくもない。だがな、俺はそのやり
方には賛同しない。聞けば、様々な神話勢力に喧嘩を売っているよう
だな。超常の存在と戦うのはいいが慎重に行動しなければ、我が身を
滅ぼすことになるぞ？ 英雄派。俺は、俺のやり方でやらせてもらう」
「そうか、キミの考えは分かつたよ、アンブロジウスの末裔よ。なら
ば、少し手合わせ願おうか。同じ、英雄として」

「いいだろう。お互い戦いを求めるもの同士だ」

話し合いも結論は出た。ここからは言葉は不要だ。

俺とやつら、英雄派は互いに戦闘態勢に入る。

と、その前にやることがあつた。

「京の警備隊、九重を頼むぞ」

「はっ！」

俺は残り少ない護衛たちに九重を任せた。

それに納得がいつてなさそうな九重は俺に反対した。

「イツセー殿！無理じゃ！あの人数を一人で相手にできるわけがない

「ここは我々も！」

九重は俺の身を案じてくれているのか、共に戦ってくれると言ってくれた。

しかし、正直九重たちが相手どることができるとは思えない。ここは九重を守るという選択をとる。

「九重。気持ちはありがたいが、敵わないということはじぶんでもわかるだろう?」

「じゃが！」

「気持ちは嬉しいよ。それなら、九重。月夜や鞍麻たちを呼んできてくれ。あの人数だからな」

「お姉さまたちをか?」

「ああ。お前はまだ戦闘に慣れていないだろう。ここで無理に戦う必要は無い。現状、お前が出来ることはすぐにこのことを京の主戦力に伝えるべきだ。これはお前たちの町を守るためでもある」

「しよ、承知した!それまで、無事でいるのだぞ!」

「ああ」

そういつて九重たちはここから離れていった。

「話はすんだか?、アンブロジウスの子孫よ」

俺は英雄派の方へ向きなおした。正直、こうしている間にも攻撃を仕掛けてくるかと思ったが、律儀に待ってくれていたようだ。

「ああ、すまないな。ああそうだ。一つ聞いていいか?」

「ああ。俺たちの持ち得る拙い知識で答えられることならば全て答えよう」

戦いにはいる前に俺は先ほどから少し引つかかっていることを尋ねた。

「先ほど、お前らはスポンサーとか言っていたな。背後に何がいる? バックには誰が付いている?」

「済まないな。悪いがそれだけに関してはこちらもお答えしかねる。スポンサー様のことは口止めされているからね」

「そうか、だったらいいさ」

「では、始めようか」

「ああ」

こうして、戦いの火ぶたが切られる。

今回は同じ人間が相手。同族だ。今まで異形たちと戦ってきたが、ここで同じ種族と戦うことになるとは。

まずは、英雄派たちがどう動くか、見極める。

ついでに、やつらの手の内というカードを切らせることが出来れば上等だ。

「ゲオルク様!! 私たちに相手をさせてください!!」

戦いはすでに始まっている。しかし、連中は大隊クラス以上の団体さん。誰が俺の相手をするかでもめているところだった。

「わ、我々こそ! あの魔法使いに一太刀浴びせます! ジーク様! 我々に行かせてください!!」

「キミたちがかか? やめておいたほうがいい。今の君たちでは彼の相手は務まらない」

「それでもっ!」

「こんな機会は貴重なんです」

「やれやれ困ったものだ」

しかし、流石、英雄の末裔と言ったところなのだろうか。慕う人間も多いらしい。やはり、なんだか言って人を引き付けるカリスマ性というものがあるのだろうか。ヨハンの末裔の周りには主に女性の魔法使いらしき群衆が、そしてジークフリードの末裔の周りにもこれまた主に女性剣士が群がっている。ホント、英雄の末裔たちは異性を引き付けるのか。

結局、彼らの制止を振り切って集団が俺に向かってきた。

「大魔法使いの末裔!」

「覚悟!!」

三流の台詞を吐き捨てながら彼らはこちらに向かってきた。

魔法使いたちはこちらに魔法を放ってくる。魔法陣を見れば、そこそこ勉強はしているらしい。連携もなかなか形にはなっている。そこらへんの奴らになら通用するだろう。よほど、こいつら末裔たちが鍛えているのだろう。しかし、俺から言わせてみれば厳しいだろうが

まだまだだ。

彼らの攻撃をすべて無力化し、全員に攻撃を叩き込む。俺の攻撃をくらった英雄派の構成員たちは全員のびている。

「ふむ、やはり彼女等では相手にもならんか」

「いうまでもないけど、全員気をつけるべきだよ。気を抜けば一瞬でやられるよ」

「あつ、おい！ゲオルク！抜け駆けは汚いぞ！」

「早い者勝ちだ」

ヨハンの末裔、もとい、ゲオルクの末裔は格好の敵を見つけたような笑みを浮かべる。後ろでなにやら文句を言っている大柄な男を背にして軽快なステップで建物から飛び降り、俺と同じ高さ、地面に着地した。

「ここからは僕が相手をするよ、アンブロジウスの子孫」

「いいぜ、こいよ」

ここで会ったのは宿命ともいうべきか……

我がライバルの子孫と戦うことになるとは思ってもよらない。ましてや、ゲオルクの子孫がいること自体知らなかった。

楽しませてもらう。

「ふっ……」

奴は即座に攻撃をこちらに放つ。それを跳躍して躲す。ヨハンの奴がかつて極めたのは魔法と似ているようで似ていない魔術。

奴が放ってきた攻撃は魔法とも見れるが少し魔術のものが混じっている。

「なるほど、この魔法。見たことない術式が混じっているな」

「流石だ。わかるのか。ではこれはどうかかな？」

余裕そうな表情をし、さらなる攻撃を放つ。やつの魔法、視てみても俺にもわからんところがある。流石、ファウストの末裔ってどこか。

「いけっ！」

俺の放つ光槍が暗黒色の奴の魔法を撃ち落としていく。魔法同士が衝突し合うたびに騒音と粉塵が舞う。

「そら、お返しだ。龍帝の豪炎!!」
アラストール

子フェンリル相手にその威力を証明した炎をやつに放つ。

「っ!!これはっ!」

自分に向かつてくる魔法の威力をある程度把握したのか、驚きの声をあげる。だが、ヨハンの末裔だと名乗るのなら、この程度では倒れてくれるなよ。

炎がヨハンの末裔に直撃した。フェンリルのその身を焼いた炎を喰らって、生きていられる人間などいない。だが………
「ふう………流石の僕も走馬灯が見えかけたよ。ほんと、凄まじい魔法を見せてくれる」

ヨハンの末裔は冷や汗を垂らしながら言う。奴がおれの魔法を防いだカラクリを見定める。

「へっ、その神器、そんなことも出来んのかよ。器用すぎるだろ」

ヨハンの周りには紫色の霧が浮かんでいた。

「これも、僕の神器デイメンション 霧ロストの一つの能力さ。これがなかったら危なかったよ」

結界系の神器だったか?だとしたら、自分の周りの空間を隔絶させたのか?

そんなことをされたら、いくら強力な魔法でも届かない。

「ほんとに厄介な神器だ」

「まだまだこれからさ」

「っ!」

俺の周りを取り囲むほどの魔法陣の数。なるほど、この威力のものをこの数生み出せるとは中々研鑽をしているようだ。

「北欧式、ルーン魔術、黒魔術、白魔術、e t c 。よくもまあそんな種類取得したな。」

「まあね。結構しんどかったよ」

たしかに、ヨハンを思わせるこの才能。魔法使いとして、魔術師としては世界でも最高の逸材の一人かも知れない。

だが………一つ年長者からアドバイスを送ってやるとするか。少し大人げないかもしれないが。

「……術式破壊」

俺は自身の最も得意な魔法の一つを唱えた。

俺の魔法が発動した瞬間、この空を覆いつくしていた魔法陣が全て無に消え去った。

「なっ……」

ヨハンの末裔は何が起こっているかわかっていない顔だ。自分の発動した魔法陣が一期に消え去った状況に理解が追い付いていないようだ。

「なんだと……？何が起こっている……？グハッア!!」

隙だらけであるやつの顔面に俺の拳がクリーンヒットする。やはり、魔法にはたけているよだが、武術に関してはからっきしらしい。「確かに、流派の全く異なるものをあそこまでやっているのは驚いた。だが、練度も強度も足りないな。あの程度の強度なら簡単に無効化できさるさ」

「くっ……」

ヨハンは苦虫をかみつぶしたような顔をする。少し厳しかったか？

「ん？」

奴の魔法を無力化した瞬間、背後から気配がした。大柄な男が俺の背後から襲い掛かってきた

「はっ！相手してもらうぜえ！魔法使い!!」

「なっ!?邪魔をするな、ヘラクレス!!」

「はっ！固いこと言ってるじゃねえよ、ゲオルク。俺も混ぜろってんだよ！」

「……」

大柄な男の背後から繰り出される攻撃。確かに力が込められた重い攻撃だ。だが……

俺は大柄な男の攻撃を躲し、鳩尾にするどい肘撃ちを浴びさせる。

「ごほっ……な、なんだそりゃ……」

ドッ、という人体にとってよろしくない音がしたと同時に大柄な男が後ろに吹き飛んでいった。だが、思ったよりも飛距離が出ていな

かった。やつはどうやら少しはダメージを軽減させたようだ。

「ほう……ヘラクレスは我々のなかでも武術に関して達人級なのだが……不意打ちを完全に返り討ち、か。魔法使いだということに、武術にも精通しているとは……化け物だな。いや、さすがというべきかな」

高みの見物を決め込んでいる曹操は驚きを隠せていなかった。

「へっ、不意打ちなんざ想定範囲内さ。不意打ちなんざ、戦いにつきものだろう？」

「おや、君は不意打ちなどといった卑怯な手は好まないと思つていたが」

「勝手なことを。これは戦いだ。スポーツじゃない。最後に立っていたやつが勝つんだ。反則技なんて普通だろ？というか、反則技なしで神やドラゴンに挑もうなんて考えてないよな？それだったら認識を改めることをお勧めする」

「……そうだな、愚問だったな。」

「では、僕も参加させてもらおう。」

と、曹操と会話が途絶えた瞬間、俺上方に気配を感じた。

鋭い斬撃が俺のもとへ届く、そのような予感がした。俺はそれをかろうじて避ける。俺の感覚に刷り込まれた剣戟の感覚だ。

「ふ、やるね。今も避けるかではこれは？」

白髪の男が間髪入れずに斬りかかってくる。奴の手には魔帝剣グラム。使い手が券を選ぶのではなく、剣が使い手を選ぶ魔剣の頂点に君臨する剣。おそらく、聖王剣、真聖剣とは対になるような存在だ。それを軽々とこのスピードでふるって来やがる。兄さんほどではない。速さも鋭さも重さも。しかし、それでも俺の剣より遥かに上だ。剣が俺により届くようになっていた。自身が剣を持たずに相手の太刀筋を見切るのは剣戟において難しいのだ。俺は限界を感じ、即座に切り札を取り出した。

刃と刃が交錯する音が鳴り響いた。白髪の男は初めてうれしそうな顔をした。

「へえ、なんだ。君、魔法使いであるのに剣も持っているんだね。面白

いよ。アーサーも面白かったけど、君もだね」

笑みを浮かべた白髪の男は俺から距離をとった。その直後、奴の周りからは7本の剣の柄が出てきた。

「僕は魔剣を集めるのが趣味だね。今はグラムを合わせて8本だ。まだまだ少ないけどね。ああ、今回はグラムしか使わないよ。こいつも、君と戦いたがっている。正確には、君のその剣とね」

奴が意味ありげに言う。俺はため息をつき、この剣に施された秘匿技術を解除した。

「……フル・クリア 顕現せよ」

俺が呪文を唱えると、光が俺の剣へと集まっていく。そして、何もなかった虚空から聖剣が現れる。

「真聖剣エクスカリバー」

完全に正体を表す切り札、エクスカリバー。これを表に出すのはこれで2回目か。

この聖剣をみた正面の白髪の男は非常に興奮していた。

「っーこれは……」

英雄の子孫たちはこの剣の全貌を目の当たりにし、驚愕した。

「ははっ！はははははは！！それは……こんなものに出会えるとは！！まさかあの伝説中の伝説の武器、もはや宝具といっても過言ではない最強の聖剣真聖剣のもう一つの片割れエクスカリバーに出会えるとは！！こんなにうれしいことはない！！道理で見つからないわけだ！だが！アンブロジウスの子孫の手に渡っていたのなら、納得がいくな！！」

そんなに雄弁するほど、うれしいのだろうか。クールな雰囲気だった魔帝剣の使い手は別人かと思うほど熱くなっていた。

「これなら本気になれるよ！行こうか、グラム」

魔帝剣はそれに呼応するかの如く、禍々しい力が増す。

「はっ！！」

再び、刃と刃が交錯する。

剣に関する才能はからっきしの俺だが、流石にわかる。間違いなく剣術に関しての技量は相手が圧倒的に勝っているのは間違いないさそうだ。

相手の剣戟に合わせ、エクスカリバーで防ぐ。やはり得物があるとないとではやりやすさがちがった。

「ふうん、なるほど。さすがのアンブロジウスの子孫も剣術までは完全に体得してはいないようだね」

北欧の英雄ジークフリードの末裔は勝ち誇ったように言う。だが、その勝ち誇った表情もすぐに消えた。

「技量はこちらが勝っているだが……武具に関してはそちらのほうが上のようなだね。この魔帝剣をもつてしても真聖剣には及ばないようだ。」

その通りだった。俺は完全に真聖剣の性能だよりだ。剣術の才能がかけらもない俺は真聖剣でなければ負けているだろう。

俺は魔法を交えた戦いに切り替える。

「なにつ!? 魔法か!」

突然地面に魔法陣が現れ、太い針のようなものがジークフリードの子孫を襲う。

しかしさすがは英雄といったところか。ギリギリのところを攻撃をよける。

「はっ!!」

「グウツ!!」

俺はその隙を見逃さず、エクスカリバーを振り下ろす。先ほどの攻撃の分、反応が鈍かった。

「グハッ!」

蹴りをやつの顔に叩き込んだ。こんなのはもはや剣術でも何でもない。何でもありの戦いだった。

蹴りを食らって吹き飛んだジークフリードの末裔はよろよろと立ち上がり、恨めしそうにこちらをにらんだ。

「くっ、蹴りと魔法とはやってくれるな……」

「悪いなあ。こちらら剣術はお話にならないほどだからな。はなっから剣の戦いをするつもりはねーよ」

みたところダメージはあるようだ。

「ジークフリードは龍を滅ぼし、その肉体は堅く、不死とまで言われた

そうだな。みたところ、子孫を名乗るお前にはその特性はないと見た」

「くっ……よく知っているじゃないか」

英雄にはあった特性がないと看破された子孫は悔しそうに言う。もしもそんな特性があれば厄介極まりないものだ。

「苦戦をしているようだね、ジーク。わるいが、退屈していたところだ。参加させてもらおうかな」

俺の背後に曹操の末裔が凄まじい跳躍で降り立った。今まで俺の相手をしてきたジークフリードの末裔は納得していない様子であった。

「さて、ではいくとするか」

神滅具ロンギヌスである黄昏トウルーロンギヌスの聖槍を構え、戦闘態勢に入る。前後の警戒を俺は強めた。前には魔帝剣、後ろには聖槍。どちらも真聖剣には劣るとはいえ、伝説の武具だ。油断は許されない。

互いに相手の出方をうかがう。その刹那――

「なんだ――？」

この戦いのなか、唐突に金色こんじきの魔法陣が俺と英雄派たちを遮るようにして現れた。

その現れた魔法陣から、英雄派に向けて攻撃が放たれた。俺にとって援護という形になるかのようには。

英雄派たちはその攻撃をことごとくよけていく。

また新たに魔法陣が現れる。しかし、今度は攻撃を放つ魔法ではない。転移魔法陣であった。その魔法陣から現れたのは一人の可憐な少女とそれに追隨している巨大なゴーレム、そして因縁のある見たことのある獣であった――

t o b e c o n t i n u e d ~ ~ ~

No, LV くペンドラゴン家の魔法使いく

突如としてあらわれた三体の気配。だが、種族はバラバラ。神造兵器、人間、獣。三人組の中心にいる少女。よくある学生の制服に三角帽子、魔法が付与されているマントを身に着けていた。

その少女が放ったであろう攻撃をすべてよけきった英雄派たちは現れた少女たちのほうを向いた。

「おやおや、また新たなお客さんが現れたようだ」

「やれやれ、そのようだ」

魔帝剣を肩に担いで新たに表れた者たちにガンを飛ばしている。少女だけでなく、神造兵器や凶悪な獣もいるからだろう。

現れた魔法使いの少女はこちらを向き、かわいらしい笑顔で微笑みかけてきた。

「初めまして、魔法使い様。私はルフエイ。ルフエイくペンドラゴンです。まだまだ未熟ですが、魔法使いをやらせてもらっています。どうぞ、ルフエイと呼んでください」

——ペンドラゴン

彼女はそういった。確かに、彼女の容姿は、似ている。アルトリアと、モーガン姉さん、二人の面影があつた。間違いなく、彼女はペンドラゴンの、兄さんたちの末裔だ!!

「なるほど、ペンドラゴン家の。では、聖王剣の現所有者、アーサーくペンドラゴンとはやはり?」

「はい。アーサーくペンドラゴンは、私の兄です。私も、白龍皇、ヴァーリ様と行動を共にしています」

目の前の少女からの言葉に俺は苦笑した。

兄妹そろって、白龍皇とつるんでいるとは。

それにしても、ペンドラゴン家の人間はなぜこんなにも二天龍と縁があるのか。確かに、ウェールズの赤い龍、つまりドライグと関係は深いというのは通説にもある。しかし、今のペンドラゴンの子息は白龍皇、たいして初代の二人は赤龍帝。偶然とは思えないほどだ。

「あ、そうでした。ヴァーリ様たちがまたあなたに会いたがつていま

したよ。『また戦いたい』——と」

「それは伝言か？」

「はい！私も、魔法使い様に会えるのを楽しみにしてましたっ！」

くったくのない笑顔を見せつけられる。まぶしい……

ともかく、白龍皇からそのような伝言をもらったので俺はその返答を目の前の少女に依頼した。

「それだったらちようどいい。白龍皇に伝えてくれ。いつでも相手になるってな」

「はい！そのように伝えておきますね！」

目の前の少女こと、ルフエイIIペンドラゴンは快く承諾してくれた。

と、唐突にガラガラと瓦礫をどかす音がした。そこには先ほどの攻撃を避け切ったであろう英雄の子孫たちだった。

「これはこれは、ペンドラゴン家の姫君。ルフエイIIペンドラゴン殿。お久しぶりですね」

曹操はどこで身に着けたのかは知らないが、しっかりとした作法で少女、ペンドラゴンの子息に相對した。

ルフエイもこれに応じる。

「ええ、お久しぶりです、曹操様。カオス・ブリゲード禍の団での作戦会議以来です」
「それで、今日はどういった用件で？しかも、そのような凶悪な神造兵器に魔獣まで連れて」

曹操はルフエイの両隣にいる魔獣フェンリルと神造兵器に目くばせをしながら言う。当然、こんな凶悪なやつがいたら警戒しないほうがいい。

「そんなこと、言わなくてもわかっているのではありませんか？曹操様。あなたがたが送り付けていただいた刺客たちに私たちは襲われたのですよ」

「はてさて、何のことやら？身に覚えがないことですね」

二人の会話から状況を推測する。

どうやら、カオス・ブリゲード禍の団の二大巨頭であろう英雄派と白龍皇チームでもないごごぎはあるらしい。互いをけん制しているようだ。

「ふふふ、シラを切るつもりならそれでけっこうです。ああ、それとヴァーリ様からの伝言です♪『刺客とはやってくれたな。邪魔だけはするな』といったはずだ』——だそうです♪我々を監視していただけではなく、邪魔をした報いを受けてもらいますっ!!」

ルフェイは先ほどのかわいらしい笑顔とは違って、キリつとした顔になる。それは、まさにモーガン姉さんを思わせるような雰囲気であった。魔法発動させている。その魔法は英雄派に向けられる。

「くっ、厄介なっ!!」

英雄の子孫たちは向けられた攻撃を対処していく。

曹操は聖槍でことごとく魔法を打ち落とし、ジークフリードはその魔帝剣で切り裂いていく。ゲオルク四世は魔術によって防御している。

ルフェイは自身が放った攻撃を房業されていくが、そんなことはわかっていたようだ。次なる手を打って出た。

「まだ行きます。ゴツくん!!」

ルフェイが変わった魔法を神造兵器にかけると、動き出す。

その巨体が動く。見た目の割にはスムーズに動くらしい。にしても、停止状態で放置されていたはずの神造兵器の起動をさせるすべをすでに構築してあるというのか。なるほど、素晴らしい技能だ。

「それは、数ある神造兵器のなかでも、最上位の一つ、ゴグマゴグか」

曹操が低い声でうめいた。

「そのとおりです。古の神々たちの手によって生産された、聖戦の遺物。いわゆるゴーレムです。ゴツくんの攻撃はなかなか強力ですよっ!」

ゴーレムの腕から大量の弾丸が発射される。凄まじい発射速度であった。

その発射された弾丸が容赦なく降り注いでゆく。ルフェイが放った魔法とも合わさって相当な密度攻撃だ。英雄派たちは全員その攻撃を避けるべく、跳躍し、一気に距離をとる。

「ヴァーリはよほどお冠というわけか!!!聖槍よっ!!!」

曹操は高笑いしながら聖槍に力を込めた。その聖槍は持ち手が急

速に伸び、ゴーレムに一直線で向かっていった。

たとえ古の神造兵器といえども、神器である聖槍は効くはずだ。しかし、その刃はゴーレムには届くことはなかった。

「なんだとっ!?!」

なんと、ゴーレムは自身に刃が届く前に防御していたのだった。しかし、ただの防御ではない。魔法にいたもので防いでいた。

「魔導障壁だとっ!?!ええい、ヴァーリめ、なんという厄介なものを見つけて出してくれたっ!」

自身の聖槍が防がれるという未来はさすがに予測できなかったであろう。

曹操は悔しそうに吐き捨てた。

曹操の攻撃はあつさりと受け止められ、そのカウンターとまでにゴグマゴグの胴体の中心から光の光線が曹操に向けられた。

その放たれた光は曹操に直撃する。

流星は、古の神々お手製の兵器であった。とんでもない戦闘能力だった。

「ヴァーリ様がここ最近狭間に潜られていたのはこのためです。オーフィス様の調査をもとに見つけ出しました」

話を聞く限りではあるが、白龍皇は頻繁に次元の狭間に出向いているらしい。あそこはたとえ異形の存在でさえ行くことをためらうような危険地帯。冥界などよりもよほど危ない。そんなところへ平気な顔で行っているのは普通ではないことだ。

まったく、流星、ルシファーであり、白龍皇だ。

「そこだっ!」

ゴグマゴグに加え、ルフエイの攻撃を躲しいつのか背後へ回っていたジークフリードが北欧に伝わりし魔剣、グラムで切りかかろうとしていた。

俺はいち早く察知し、やつの攻撃を阻もうとしたがすでにそれをやっている獣がいた。

「なにっ?!クソッ!神喰狼か!!」
フェンリル

フェンリルがその鋭い爪でグラムを受け止めていた。さすがは最

強の魔物の一角のフェンリルだ。弱体化しているようだが、英雄の末裔たちとも互角に渡り合えているようだ。

不意打ちに失敗したジークフリードはフェンリルとのぶつかり合いの慣性を利用して後ろへ大きく飛んだ。

「さて、報復はこれくらいにしてまして、早くヴァーリ様のところにもどりますね♪」

「なんだ、もう終わりか？」

俺は英雄派たちに攻撃しただけで帰ろうとするルフエイに尋ねる。

「はい、今日はただのご挨拶みたいなものですので。フェンリルさん、ゴツ君！いくよー！」

ルフエイが二体の名を呼ぶとその通りにルフエイのところに行く。さながら、姫とそれを守護する使い魔だな。

——と、そのなかでフェンリルと目が合う。一度戦った仲だ。しかし、すぐに視線をルフエイに向きなおした。

「では、魔法使い様、また会いましょうね!!」

ルフエイはこちらに向き直して一礼をしてから転送魔法陣で去っていった。

思わぬお客に俺は度肝を抜かれたが、戦っていた奴らに目を向けた。

「やれやれ、困ったものだ。とんだお客が来たものだ」

曹操が聖槍を地面に立てて杖替わりにしながら言う。どうやら先ほどの攻撃をどうにかして対処したようだった。

「そうか？ だいたい、お前たちの自業自得だろう？ 彼女がここに現れた理由なんて」

ボロボロになりながらもこちらに槍を向ける曹操。いや、奴だけではない。四世も魔法陣を展開し始めた。

俺も、奴らに付き合おうと魔法陣を展開しようとした時だった。

「イツセー殿!!」

後ろから見知った声があった。

振り向くと、妖怪の大群が向かってきていた。しかも、その先頭には意外な人物がいた。

「久方ぶりでごさるな、イツセー殿」

「ヤト、おまえなんでここに」

「なんと、日本神話の実働部隊の隊長、夜刀神ことヤトがいたのだ。
「ちっ、新手か」

「曹操、もう引き際だ！あの軍勢の大半は大したことはない。だが、真
ん中にいる奴はわけが違う。おそらく神話クラスの實力だ！」
「そのようだな」

俺の後ろにいる大群を見てここで撤退をしようとする英雄派たち。
しかし、流石は英雄たちの血筋を受け継いだものといったところか。
ヤトの實力を一瞬で見抜き、引き際だと判断したのはいい選択だ。
「待て！四世！逃げるのか」

俺はゲオルク四世に問いかけた。

「いいや。今日はただのあいさつ代わりさ。アンブロシウス。次は
もっと楽しくなるだろう。次は二条城でやろう。そこで実験を行う。
八坂姫はそれまで預らせてもらうよ」

四世は次の場所を伝えながら消えていった。転送魔法陣のみなら
ともかく、奴の作り出した空間に加えてあの神器が使われたら対処は
困難を極める。

俺は消えていく英雄派たちを厳しい眼で見ているのだった――



戦闘後、俺はヤトたちとちよつとした会議を開いた。

「にしても、まさかお前たちが来るとは思っていなかったぞ。今まで
京となんら関係を成さなかった日本神話が介入してくるとはな」

俺が驚いていると、ヤトは苦笑しながら言う。

「本来はそうでごさるよ。しかし状況が状況でごさる。過去に邪龍が
暴れまわった土地でごさるからな。京は日本神話にとっても、そして
この土地にとっても決して無価値なものではないでごさるからな。
神からしても、これは無視できない、と天照殿が判断を下したでごさ
る」

「なるほどな。だから、ドラゴンであるお前のみを派遣したわけだ」
「そういうことでござるよ」

ヤトの見解に納得する。

天照たちはなるべく下界への干渉を避けたいようだ。しかも、ここは京。同じ日本とは言え、高天原の神々が過度に干渉しては調和が崩れる。そこでドラゴンであるヤトだけを投入したわけか。なるほど、天照もよく考えているようだ。

「とりあえず、ここはお開きにしよう。奴らとの決戦に、体を休ませておきたい」

「そうでござるな。では、拙者は月夜殿のところにお世話になることになっていてござる。何かあればここに」

「ああ、了解した」

ヤトと京の自警団たちはここでさつていく。

俺もドライグたちがいる宿へ帰ろうとした矢先、ひとりここにポツリと残っているものが一人。

——京の姫君、九重であった。

俺はさつきからずっと下を向いている九重に近づき、声をかけた。

「どうした、九重。月夜たちはもう戻っているぞ」

九重は答えになっていないことを口にした。

「母様、なぜ、どうして、こんなことに……」

ポタポタと地面に涙のしずくが落ちる。

どうやら、今回のことでさうとう精神が参っているようであった。しかたのないことだった。まだこの子は齡10そこそこだ。まだ、母親には甘えたい年ごろ。こうなるのも無理はなかった。

「ふむ、昔のイツセーを思い出すな」

「……まあ、状況は似てるけどな」

ジルニトラの言葉は置いておき、俺は目の前で打ちひしがれている少女と目線を合わせた。

「九重。気持ちはわかる。俺も、こんなことはあった」

「そうじゃったのかっ!？」

九重は目を見開いた。ようやく、言葉が届いたようだった。

「ああ。だが、そのときはもう手遅れだったよ。だが、今回はその時とは違う。お前の母親は、まだ死んでいない」

「っ……」

「ならば、取り戻すことを考えるんだ。余計なことは考えるな」

「……そう、じゃな。こんなところで泣いていても、状況は変わらないの。すまない、イツセー殿」

「それでいい」

案外、しつかりした子だ。

九重はグイッと涙を袖でふき取る。

あまりしたくない話だったが、九重がその気になってくれたのなら、した甲斐があるというものだ。

「九重、何をしているのです。さっさと戻って、陣営を立て直しますよ」

後ろにはまだ月夜たちが待っていた。転送の準備はできているようだ。

「すまぬ、今そつちに行くのじゃ、お姉さま」

「イツセー殿、では、わしはこれで」

「ああ」

九重は駆け足で仲間の元へと戻る。

ヤトたちと京の自警団は総本部へと帰還していったのだった。

さてと、俺も戻るとしますか。

元の世界に戻ったことなので、俺はドライグたちのいる宿への帰路につく。

「ねえねえ！おにいちゃん!!」

「ああ?」

「次っ！これ見に行こうよ!!」

観光客でにぎわう京都。さきほど戦闘をしていたとは思えない場所だ。ここは年中こうである。

しかし、なんだろうか。先ほどの兄妹の声。どっかで聞いたことがあるような……?」

すぐそばで聞いたことある声に違和感をいだきながらその声が聞

こえた方向に目を向ける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

その瞬間、時を絶した。

「ん？いつらはわんぱく邪龍三人組のアジ・ダハーカじゃないか。それに、我が好敵手の娘、アーシヤか。なんだ、あいつらも来ていたのか」

そう。そこにはアーシヤとともに行動する邪龍。

これが何を意味するかは言うまでもなかった。

「イツセーよ、いいのか？あのままにしておいて」

「いいわけがないっ！」

ニトラにそういわれてようやく現実に戻って帰ってこることができた。あまりの事態に思考停止してしまった。

俺は超ダツシユで二人の元へ向かった。

「おいっ！」

二人の近くで大声で叫ぶと、二人はこちらに気づいた。

「んだよ、誰かと思えばイツセーか」

「あ、イツセー久しぶり！そうそう、一緒に遊ばない？」

「アーシヤ、悪いけど、その話はまた今度にしてくれ。ところで、アジ・ダハーカ。そもそもどうしてここにいる？」

「あ？俺はマイシスターの初めての旅行に付き添いに来ているだけだぜ？ああ、あとクロウとアポプスのやろうも来てるぜ」

「さもここに居て当然の反応をする、目の前の厄災こと邪龍。」

だが、俺からしたら冷や汗どころでは済まされれない事態なのだ。しかも、あの二人もいるだと？冗談ではないっ!!!

「あのな、知らないなら教えてやる。この地は、かつて日本神話の宿敵、邪龍の八岐大蛇が暴れまわった土地なんだ。だから、京の妖怪たちは邪龍には敏感だ。いいか、とにかくアーシヤの旅行をするならするで構わないから、おとなしくしてくれ！」

アーシヤには気を使い、アジ・ダハーカに強調して言う。

「やるじゃねえかよ、八岐大蛇のやつ。だが、やられちゃったのが残念だぜ。生きていたら楽しくなりそうだったのによ」

「おまえ……」

「わーってるっての。つか、今回はアーシャの旅行だ。そのへんは理解してるっつの。つか、こうして京の妖怪にもスルーされてんだからいいだろうが」

たしかにやつこの言う通り、こいつが京の妖怪たちに全く探知されていないのだ。邪龍を見つけたとなったら、真つ先に俺のもとにその情報 comes はずだがそれは全く来ていない。こいつ、京の妖怪たちにさえ気づかれないレベルで気配を消しているということか。

「ああ、ぜひおとなしくしてくれ」

「だが、アーシャにかすり傷ひとつでもついたらその限りではないがな」

「何言ってるんだか。まずお前たち三人がそれを許すはずないだろ。」
「当たり前だろ。つかそうなたら俺が親父ヤッに殺される」

アジ・ダハーカはまるで地獄を体験したことがあるかのように言う。まあ、アジ・ダハーカ生みの親、俗に言う父親はガチの化け物だからな。アジ・ダハーカ含め、邪龍なんて即死だわな。

ひとまず、俺は不安要素たちに釘をさしたところで気を取り直して宿に帰宅した。



宿に戻ると、部屋ではチビ達とティアは就寝中であった。

彼女たちを起こさないようにと、足音を立てないように移動する。

「あ、イッサー。おかえり」

とそこでドライグと出会う。

二人してテラスに移動し、今日あったことをドライグに話した。もちろん、ペンドラゴン家の子孫のことも。

「そっか。アーサーやアルトリアの子孫と……」

ドライグの顔に笑みが浮かぶ。

ドライグとて、俺が赤龍帝であり、宮廷魔道士であったころは兄さんやアルトリアと深い交流があったわけだ。ウェールズの赤い龍、ブ

リテン——はたまたアヴァロンの守護者という斬っても斬れないこの関係にあるのだから。ドライグが子孫のことを気にかけるのは道理であった。

「元気そうだった？その子」

「ああ。元気いっぱいの子だったぞ。魔法使いだな。アルトリアとモーガン姉さんを足して2で割ったような子だよ」

「そっか、よかった。二人の子孫が元気で」

「ああ、ホントだな」

こうしてドライグとともに夜を過ごすのであった。

No, LVI

ペンドラゴン家の長女、ルフェイ・ペンドラゴンは問題の魔法使いに遭遇したのち、フェンリルとゴグマゴグとともに仲間の元へと帰還した。転送魔法陣から3人は出現した。その近くには今代の白龍皇ヴァーリ・ルシファー、ペンドラゴン家の子息にして戦いに身を投げているアーサー・ペンドラゴン、三蔵法師の弟子、孫悟空の子孫である美猴である。

「ただいまもどりました」

「ああ、お疲れ」

戦いから帰還したルフェイを全員で出迎える。

「あら？ヴァーリ様、ジャンヌ様と黒歌様はどちらに？」

「お二人なら、町に出かけていますよ。たまには羽を伸ばしたいですから」

ジャンヌ、黒歌は年頃の少女である。このような戦いの最前線にいて息も詰まるのは当然だ。ましてや、今となつてはテロリスト扱い。いつ討伐されてもおかしくはないのだ。

「もうっ！ひどいですわお二人っ！どうせなら、私も誘つてくださればよかったのに!!お兄様っ！お二人はどこへ？」

「ふ、二人ともここから西へ少し離れた町へ行きました」

「ありがとうございますっお兄様!!」

「あつ、待つてくださいルフェイ!!」

ルフェイは二人の居場所を兄から勢いで聞き出し、すぐに飛び出していった。

「ふっ、行ってしまったな」

「ヴァーリ、見ていないで止めてください」

妹を一人で行かせるのは心配なアーサーはヴァーリに言う。

「おうおうおう、妹がそんなに心配かあ？アーサー。シスコンここに極まりだな」

「黙っていてください、美猴。今すぐその汚名を撤回すれば今の発言は水に流します。」

シスコンなどと不名誉極まりない肩書を払拭すべく、美猴に剣を向ける。その美しく、神々しい宝具の力が美猴の背筋を震え上がらせた。腐っても妖怪である美猴にとっては聖剣の権能には相性が悪いものがある。

「おいおい待て待て冗談だっつーの」

実力では逆立ちしてもアーサーに歯が立たない美猴はアーサーに頭がどうしても上がらない。ヴァーリチームでの扱いは微妙である。

「まあ待て、アーサー。仮にもペンドラゴン家の長女だ。そのルフェイが簡単にやられることはないだろう。それに、ジャンヌと黒歌が行った町は遠くはない。すぐに合流できるはずだ」

「……そうですね」

すかさずヴァーリがこの場を諫める。このチームのリーダーだけあって、メンバーをうまくまとめている。アーサーもその言葉に落ち着きを取り戻した。

三大勢力から離反し、様々な相手と戦い、狙われる立場にありながら、緊張感もない。伝説の白龍皇を有するこの集団は、実にフリーダムという言葉がお似合いである。

「今頃、曹操たちはあの魔法使いと一戦を交えているころだな」

「ええ、そういえばヴァーリ。あなたもその魔法使いと戦ったと聞きましたか」

ヴァーリは曹操から送られた刺客を尋問したことを思い出しながら言う。

「ああ」

「どうだったのです？」

アーサーとて、強者との闘いを求める人間。ヴァーリと戦ったという相手には興味を抱かざるを得ない。

「奴は強かった。おそらく、俺は奴に劣るだろう」

「——本当のですか」

ヴァーリほどの存在をもってしてもかなわなかったと言わんばかりであった。アーサーは驚きを隠せない。

「もちろん俺も、あの魔法使いも力の片鱗を出したに過ぎない。だが、

俺には奴が違和感だらけにしか思えなかった。何か、別の力を持つていそうだな」

「白龍皇であるあなたがそこまでいいいますか」

「ああ。直観だがな、アルビオン、君はどう思う？」

『今の時点では何とも言えんがな。だが、私とて奴のような違和感だらけの人間は初めてだ』

いまだに正体の知れぬ存在は、ヴァーリたち全員にとって興味深い存在であった。それは百戦錬磨の白龍皇アルビオンも例外ではなかった。その魔法使いはいま、日本の京都で一苦労しているところであった。

この魔法使いの全容が知れる日は近い



ところ変わって、ここは京都。英雄派を名乗る不法集団と一戦を交えたイツセーはどうにも気が気ではなかった。一夜明けてもなお、その懸念がイツセーの中を渦巻いている。そんな見慣れないイツセーをドライグが見逃すはずがなかった。

「ね、ねえイツセー。どうしたの？ そんなにそわそわして。何かあったの？」

「いや、何かあったとかじゃないんだ。」

「どうしたの？」

イツセーはドライグには言っていないかった昨日の出来事の続きを始めた。

「昨日言ってなかったが、邪龍とそのお姫様がここにきてんだよ」

「ええ……なんで邪龍あいつらが来てるのよ？」

ドライグにとつて、邪龍というのはどちらかといえば苦手な存在である。今となつては邪龍たちは丸くなつているほうではあるが、それでもであった。ドライグはあからさまに嫌そうな顔をした。

「知らん。気づいたら居やがったんだよ。全く。想定外だ」

「えっと、私からしたら冷や汗しかかかないのだけだ」

ドライグはこの京の妖怪たちが邪龍にとつても強い警戒心を持つてい事情を知る者だ。それゆえにイツセーの心配がよく分かった。

「とにかく、やつらは今のところ大人しくお姫様のエスコートをしているようだ。京の妖怪たちも、皮肉なことに全く気付いてないが」
「そうなの。ま、とにかく大人しくしててほしいよね。あいつらが暴れだしたらめんどくさいから。にしても、変わったわよね、あいつら」
「まあ、俺と最初に戦ったあいつらがああなるとはな」

相対的に普通のドラゴンよりもさらに戦いと強さ、ときには残虐さを求める。それはイツセーが初めて邪龍と対峙した時だった。しかし、今は変わった。邪龍という存在を知っており、長く生きるドライグは邪龍の変化には内心驚きであった。しかし、それ以外の要因もあるようだった。なんにせよ、イツセーは英雄派と邪龍たちが対面するという面倒なことが起こる前に片づけなければならなくなったのだ。

ちなみに、アジ・ダハーカ、アポプス、クロウ・クルワツハ、アーシャは本来イツセーが受け取るはずであったゲオルク・ファウストからの招待状に入っていたチケットでこの地に来ていることをイツセーが知るの少し先の話……



英雄派に攻撃を仕掛ける日、それがこの日であるが、イツセーはひとまずヤトと合流した。京に侵攻した英雄派たちを退けるべく集まった戦力はざっと十数人といったところだ。あまり多いとは言えない。しかし、その中には月夜、九重といった姿も見られた。

「イツセー殿、我もいくぞ」

「九重、いいのか？」

幼いながらもその心に秘めた覚悟がイツセーにも伝わる。

「行くでござるか」

「ああ」

イツセーを含めた京の部隊は敵の根城への一步を踏み出したのであった。向かう先は京都の文化財のひとつ、二条城であった。イツセーたちが二条城前に到着する。しかし、中には入ることができない。

「イツセー殿これは……」

「ああ、ヤトが想像していることで間違いない。あの神滅具ロンギヌスの力で全体を覆っているようだな」

「どうするでござる？」

「仕方ない、力尽くで突破する」

イツセーが絶デイメンション・ロスト霧による結界を吹き飛ばそうとする。が、イツ

セーが結界を破壊する前に紫色の霧がイツセーたち一向を囲んだ。間もなくしてイツセーたちはある場所に一瞬で転移をした。いや、させられたといったほうが正しかった。イツセーたちの目の前には先日戦闘となった相手、英雄派が待っていた。

「やあ、みなさん。ごきげんよう。意外と来るのが早かったね、びびつたよ。結界を壊されると面倒だから勝手ながらこちらに来てもらった」

強制的に入らせたゲオルク・ファウストⅣ世は手を広げながら言った。

「母上!!」

九重はゲオルクⅣ世の背後にいるものしか視界に入らなかった。この京の長、八坂であった。九つの大きな尾がみられる。それが八坂である証拠であった。八坂は魔術の類で拘束されていたのだった。意識はなく、外傷などはイツセーたちの目には見られたなかった。まずそこでほっとするのであった。

「おやおや、これは姫君までこられたのですか。ご足労ありがとうございます
ございます」

「貴様……ふざけるなっ!!母上を返せっ!!」

九重は敵意をむき出しにして曹操に怒鳴った。

「勇ましい限りです。しかし、申し訳ないですが八坂殿にはもう少し
実験にご協力いただきます。ゲオルク」

「了解だ」

曹操は相も変わらず九重を敵とも認識していなかった。曹操はゲオルクになにやら指示をだした。ゲオルクは何やら不可解な術式を発動させた。

「うつ……ぐつ、が、ああああああああ!!!」

突然、八坂は苦しみだした。

「母上っ!？」

美しく、妖艶であった人間の姿が一瞬にして獣へと姿を変える。大きさが数十倍にもなった。金色の毛並みをもつ狐。これが、西の大妖怪、九尾の狐の真の姿であった。

「おおっ!!なんと素晴らしいっ!これほどの力かっ!!」

「ははっ、龍王下位の力があるのは本当らしいね」

曹操とゲオルクは笑みを浮かべた。あきらかに悪いことを考えている顔であった。たいして、イツセーを率いる京の自警団はその姿に目を見張る。イツセーとヤトは見慣れた光景だった。しかし、八坂の真の姿、そしてその力を目の当たりにした自警団は驚かざるを得ない。初めて見るその光景に圧倒されたのだ。今の自警団はあの事件以来から発足されたが、それゆえに若い妖怪が多いのだった。

だが、その娘である九重と月夜は驚いてばかりではいられない。自分の母親が苦しむ姿を見たいわけがなかった。

「おのれ……どうして、こんな……」

「九重、下がっていなさい」

「?お、お姉さま?」

「わたしが、私たちが母上を取り戻す。これ以上は何を言っても無駄よ」

月夜はその着ている着物からどこに隠しているの、という量の札を取り出しながら言った。そしてその札は紫色の呪詛を垂れ流している。凄まじい力であるが、怒りのあまりに力が制御できていなかった。

「その通りだ。ここで奴らの下らん目的をつぶすぞ」

「ふふ、力づくでこの地にいる異邦者を叩きのめすでござる」

「その前に月夜。気持ちはわかるが、その感情は表に出すな。あいつらは腐っても英雄派、あの人数でケンカを売りまくってる連中だ。余分な感情は付け入る隙を相手に与えてしまうぞ」

「っ……申し訳ありません」

「謝ることはない。経験だ」

イツセーは年長者として月夜の弱い部分を指摘した。気を取り直して、イツセーたちは英雄派たちに向き直った。

「よし、では初手は俺がやる」

イツセーは英雄派に向けて魔法陣を展開した。複数の魔法陣からなる光の収束砲が英雄派たちを襲った。英雄派たちがその攻撃を躲す。イツセーたちは全員散開し、それぞれの相手を追った。

「拙者の相手は貴殿でござるか」

「そのようだね」

「はははっ！んじゃ俺の相手はこのきれいなねーちゃんかつ！面白れえ!!」

「ふん、下品な」

「やあ、また戦えることを楽しみにしてたよ、アンブロジウス」

「そうだな、ゲオルクⅣ世!!」

ヤトとジーク、ヘラクレスと月夜、イツセーとゲオルクがそれぞれ対峙した。

「おやおや、相手を先に取りられてしまった。全く、仕方ない。では、俺はこちらの妖怪さんたちと遊んでいよう」

「くっ、九重様！離れていてください!!」

ひとりだけ忘れ去られた曹操は妖怪たちと対峙した。

「いくでござるよ、紅桜……」

「ほう、それが君の剣か。見たところ妖刀にようだ」

「その通りでござる。それは魔剣でござるな。それも、かなりの脅威を感じるでござる」

「魔剣の最上位にあたる武器、魔帝剣グラムだよ。君にこの魔剣の恐ろしさを味合わせてあげよう」

ヤトとジークフリートはすさまじい速度で移動しながら剣戟を交わす。どちらも最初は小手調べといったところで余裕が見える。剣の特性や能力も使用していない。

「我が妖気を吸え、紅桜」

ヤトは自身の操る妖刀に命令を下す。すると、紅桜の刀身が怪しげ

な紫色の色を纏った。そしてそれは周囲に影響を及ぼしかねないオーラを発した。同じ剣士としてジークフリートはその異様さをすぐに悟った。

「恐ろしいね。見た感じ触れただけでもアウトだ」

ジークフリートはそれだけの危険を感じながらも笑ってすました。

「グラム、僕たちも力を見せよう」

魔帝剣グラムも刀身から力を発する。その魔帝剣本来の力とドラゴンスレイヤー龍殺しの呪いはドラゴンであるヤトに少なからず影響を及ぼした。

「ぐっ、やはり、ドラゴンスレイヤー龍殺しは少しばかりきついでござる」

力の一端をここで見せたところで両者は再びぶつかつた。

「はあっ!!」

ところ変わつて英雄の末裔、ヘラクレスとの戦闘に入ったのは京の自警団の隊長である八坂の長女、月夜である。月夜は自身の妖力を最大限に発揮した妖術、古くから続く陰陽道、気を扱う仙術を駆使して攻撃する。ヘラクレスに向けて妖術を記述した札を飛ばし、術を発動させる。

「ぐおっ!!」

ヘラクレスはその妖術をもろに受けた。しかし、その鍛え抜かれた肉体はその妖術をもろともしなかつた。妖術や仙術などを駆使して相手との距離をとる戦術をとる月夜にとつてやりにくい敵であつた。

「へへ、まだまだだなっ!!」

ヘラクレスは攻撃を受けてもなお距離を詰める。

「ぐっ、これならどうですか!」

月夜は妖術に加えて仙術を織り交ぜた術をヘラクレスに向けて攻撃した。

「ぐおっ!!ゴホツゴホツ・・・やるじゃねえか。だが、まだまだだなっ!!」

仙術は気を扱う。それゆえ、その影響は身体の調子に深く影響する。ヘラクレスはそれを食らつてもなお、動けるほど頑丈であつただ。

「これでも駄目だといふのですかっ!!」

戦闘が繰り広げられている中で、イツセーはそのままの勢いでゲオルクに拳をふるった。しかし、それは神器、デイメンション・ロスト 絶霧によって阻まれる。霧によって視界不良となったところにゲオルクはカウンターとばかりに雷の魔術を放つ。イツセーはそれを気配と凄まじい反射神経で避けた。

「ははっ、今のを避けるか。ほぼ見えてなかったはずだというのに。魔法使いの体力じゃないね」

「そりゃ、そりゃどーもっ!!」

イツセーは空中で慣性に逆らって空中で静止し、体勢を整える。その刹那に魔法陣を展開した。人間業とは思えないほどの速さで攻撃を繰り出した。

「ぐっ!!」

ゲオルクはその攻撃をすべて防ぐことはできず、いくつかの攻撃をその身に受けた。

「やるね……ちよつとあぶなかつたよ」

ゲオルクは攻撃を食らってもまだ涼しい顔をしている。さほどダメージにはなっていないかった。

「そういえば、ここで実験をするとか言っていたな」

「ああ、確かにそうだったね」

「この京は世界のなかでも特殊だ。この京の土地特有の力を使って何かしようとしているわけだな?」

「その通り。全く博識だね。ここは存在自体がもはや完成された術式といってもいい。そのおかげで霊力、魔力、揚力があふれている。だが、それゆえに様々な異形の存在を引き付ける。その地脈のパワーと九尾の狐は切っても切れない関係だ」

「……………」

イツセーとゲオルクは相手に攻撃をしながら会話をするという高度なことを先ほどから続ける。互いに攻撃は当たらない状態であった。

「よって、その力を利用してこの地にグレートレッドを呼び出すのさ」

「なんだと？あの真龍をだど？」

「その通り。本来なら龍王たちを数匹使つて龍門ドラゴン・ゲートを開くのが理想なんだけどね。かと言って龍王を捕らえるのは我々だけでは骨が折れる。そこでこの地を借りることにしたのさ」

「あの真龍をどうするつもりだ？」

「別に同行したいわけではないが、捕らえて生態調査などをしようかと。龍喰者ドラゴン・イーターを試してみるのもいいかもしれないしね」

イツセーは内心、あの龍を捕らえるのは逆立ちしても不可能だと断言した。しかし、それ以上に龍喰者ドラゴン・イーターという言葉が引つかかる。

「龍喰者だど？それはドラゴン・スレイヤーのことか？」

「はは、おおむねその通りだ。どうだい？面白そうだろう？これで僕らの仲間になる気になつたかな？」

「なるほどな、ようはおかしなことを企てているということにはわかつた。だが、その気はないさ」

「そうかい、それは残念。では、力尽くでも仲間にしよう」

ゲオルクはここで攻撃のテンポを変えた。銀色の物体が現れる。イツセーはその魔法の正体を理解した。

「ファウストお家芸の錬金魔法アルケミカかつ！」

「錬金魔法は得意でね」

ゲオルクは自身で自負する言葉の通り、空中の分子や原子から金属などを錬成していた。鋭い剣のごとくするどい物理攻撃がイツセーを襲った。実体のある武器であるので速度は遅いものの、それでもかなりのスピードで迫る。

イツセーはこれまでと違う攻撃を体術だけでなく、防御魔法陣で防ぐ。

「さらにつ！！」

ゲオルクはさらに錬金魔法を発動させる。イツセーの背後に西洋の甲冑を身にまとった騎士が現れる。これも金属で構築されたものだった。

「くっ！」

錬金術による騎士がその剣を振る。その凄まじい速度はイツセー

の防御魔法陣を打ち破った。その剣がイツセーの肌をかすめる。すかさず騎士から距離をとり、体勢を整えた。

「どうだい？ 錬金魔法もなかなかだろう？」

「そうだな。だがな、悪いがお前らには速攻でかえってもらわねばならない理由があるのさ」

「ほう？ それはどういったものかな？」

イツセーの後ろにはいつのまにか曹操が聖槍を肩に担いでいた。

「曹操、悪いがアンブロジウスは僕の相手なんだが？」

「そういわないでくれ、ゲオルク。俺の相手は遊んでいたらもうばててしまったんだ」

イツセーが仲間のほうを見ると数十人の集団があおむけで倒れていたり、膝をついていたりとギブアップしていた。やはり、月夜抜きでは曹操を相手にするのは難しかったようだ。

「ちっ、仕方ない。ここからは二対一だ」

「さあ、続けよう」

曹操とゲオルクは一齐にイツセーに攻撃を再開した。ゲオルクと曹操は常にイツセーを囲みながら放った。イツセーは片方の攻撃を避けても片方の攻撃が絶え間なく向かってくる状況だった。曹操は最強の神滅具ロングヌス、黄昏の聖槍トルル・ロンギヌスを、ゲオルクは自身のお家芸である錬金術を駆使してイツセーを着実に追い詰めていった。そして、曹操の操る聖槍の刃はイツセーを捕らえた。

「くっー」

鈍い音とともにイツセーの右腕が宙を舞った。イツセーにはその右腕を奪取するという選択肢はない。すぐにその場を凄まじいスピードで離れた。

「ちっ、あの一撃で畳み込めると思ったのだが一筋縄ではいかないようだ」

「だが、あの深手では勝敗は決まったも同然だ」

たとえ達人といえども腕を失った状態で二人の相手をするのは至難の業である。しかし、イツセーは何事もなかったかのように涼しい顔をしている。腕を斬られたというのに全く同様をしてない。

「ふう、腕をちぎられたのは久々だな。少々油断をしたな」

「ははは、強がるのはよし——なんだと?」

「っ!?これは驚いた」

曹操とゲオルクは驚きを隠せなかった。なぜなら、自分たちが確かに腕を切ったはずだったのが、イツセーの右腕がもとにすつかり戻っているからだ。

「驚いたね・・・そんなレベルの治癒魔法まで使えるとはねこれで、ますます仲間に欲しくなったよ」

「だが、状況は変わっていない。次こそ畳み込む」

「どうかな。そちらこそ、バランス・ブレイカー 禁 手を使わないつもりか?」

「まあな。俺の禁 バランス・ブレイカー 手はまだ未完成なんでね。とはいっても、使う

わずともなんとかしてみせるさ」

「そうかよ」

(仕方ない。あれを使うとするか。)

イツセーは自身の体に魔法をかけた。これは、赤龍帝由来の力である。ゲオルクと曹操は攻撃の手をやめない。しかし、イツセーの動きが先ほどとは違っていた。ゲオルクの攻撃を簡単にすり抜け、ゲオルクが危険を覚悟した時にはすでにイツセーは目の前にいたのだ。

「ぐっ!動きが変わった?!」

ゲオルクはイツセーの拳をギリギリのところまで魔法で受け止めた。

あまりの速さに神 セイクリッド・ギア 器を扱う暇などなかった。

「貫け」

「ごはっ……………」

ゲオルクの防御魔法陣を簡単に貫き、複数の槍がゲオルクの体を穿った。風穴の空いた傷口から大量の鮮血をまき散らしながら地面に墜落する。

「よくもっ!」

ゲオルクを仕留めてできたこの隙を曹操は見逃さなかった。イツセーの背後から曹操は黄昏の聖槍を急所となる心臓に突き刺した。曹操はとどめを刺したと確信した。しかし、イツセーは曹操のほうを振り返るとニヤツと笑った。その顔に曹操は戦慄した。

「残念、こっちだ」

「っ!？」

イツセーはいつのまにか曹操の背後を取り返していた。それと同時に背後からイツセーは曹操に向けて闇の魔法、魔槍をはなった。魔槍は曹操の右腕とわき腹を穿った。右腕が宙を舞う。曹操はすぐさま距離をとった。しかし、ダメージが大きく、地面に膝をつく。曹操はかろうじて宙に舞った自身の右腕を回収した。

だが、どちらも瀕死の状態なのは見るまでもなかった。

「どうだ？まだやるか？さすがの英雄様でも人間である以上、その傷では満足に戦えないだろう。それとも、バランス・ブレイカー 禁 手で奇跡を起こすか？」

勝負は決まったかに見えたが、曹操とゲオルクは懐から液体の入った瓶を取り出した。それらを傷口に振りかけると煙を上げて見る見るうちに傷がふさがっていく。曹操のちぎれた腕も切り口に振りかけてくつつけることで完全につながった。

「ほお、そんな珍しいものも調達していたのか。用意がいいな」

「知っていたか、フェニックスの涙。これほど持っていてよかったと思うものはないね。これは闇市場で手に入れたのさ。金さえ払えば売ってくれるのさ。これを精製しているフェニックス家の者たちは俺たちのようなテロリストに使われているとは思ってないだろうね。これは何かと持っていると便利だ」

「知っているさ。そもそも俺はそれをとつくのとうに手に入れてる」

「なに？」

「ちなみに俺は前戦った悪魔から鹵獲して量産化したがな。もう十分な量を確保している」

「恐ろしい男だ。我々がこれを手に入れるのにかなり苦労したのだがな」

「運がよかったのさ。たまたま殺した悪魔が持っていたからな」

傷を癒した曹操とゲオルクは立ち上がる。あれだけの傷をきれいに消してしまうフェニックスの涙の効果はすさまじいものであった。

曹操とゲオルクの戦意はまだ失っていない。

「まだ続けるか？」

「当然だ」

「それはいいのだが、いいのか？俺ばかりに気を取られていて？」

「なんだと？」

イツセーの視線の先、それは確保した九尾、八坂であった。先ほどから八坂の大妖怪としての力が放出されていた。しかし、それがどんどんと弱まっていつているのだ。そして、大妖怪だった壮大な姿はどんどんと変化していき、最初の人間の姿に戻ってしまった。曹操は手はずとの齟齬が生じていることに動揺し始めていた。

「どういうことだ、ゲオルクっ！」

「おかしい、今回の実験のための術式は研鑽を重ねた。術式の自動化も完べきはずだ」

動揺を始める二人をイツセーは苦笑しながら言う。

「あの術式、たしか妖怪の力を引き出すだけじゃない。この京の地の地脈の力を引き出す術式でもあった。ほかにも様々な効果をもたらす。はつきり言って素晴らしい術式だ。よくこの地を理解しているようだ。そうとう研鑽と分析をしたのではないか？」

「ならばなぜっ！」

「ふっ、流石にあの術式を解除するために戦いながら分析をするのは少々骨が折れたぞ」

「ばかなっ！ならお前は、俺と戦いながら術式を解いていたというのか!？」

「ああ。お前らの生死はさして関係ない。俺の目的はお前らの実験を阻止し、早くこの地から立ち退いてもらうことだ。鞍馬、九重！今のうちに奪還しろ！」

「了解。さ、姫様」

「あ、ああ!!」

苦虫を噛み潰したような顔をしている曹操とゲオルクを横目に、イツセーは鞍馬と九重に指示を出した。鞍馬と九重はすぐさま八坂の元へいき、保護をする。

「母上っ！母上っ!!」

「んん．．．」

九重が必死に八坂に声をかける。

「大丈夫です、姫。八坂様は気を失っているだけです。妖力は弱くなっていますが問題ありません」

「くっ！どうする曹操。八坂姫を奪還されたぞ。我々の主目的がこれでは果たせない」

「．．．．．」

「ぐあっ!!」

主目的を果たせなくなった曹操とゲオルクのそばに悲鳴を上げながら落ちてきたのは剣士、ジークフリートであった。刃による切り傷だらけで血だらけであり、切り傷のいくつかは変色していた。

「ふふふ、なかなか楽しめたでござる。魔帝剣グラム。龍ドラゴンスレイヤー殺しの魔剣は脅威だったでござるよ」

イツセーのとなりにはジークフリートを空中から叩き落した本人、ヤトが下りてきた。ヤトは少々の切り傷があるのみでジークフリートとの実力の差が現れていた。そのジークフリートはグラムを地面に突き刺し、体を支えながら立ち上がる。

「ゴホッ．．．．．凄まじいよ。してやられた。さすがは日本神話の龍の一角をなす夜刀神だ。ゲオルク、フェニックスの涙はあるかい？」

「あるにはある。が、ヘラクレスも使うとなればこれで打ち止めだ」

「サンキュー」

ゲオルクからフェニックスの涙を受け取ったジークフリートはそれらを自身の体にかける。煙を上げて傷をみるみるうちに消していく。しかし、傷が消えてもジークフリートから苦痛の表情は消えない。

「くっ、傷は消えるが、流星にあの妖刀の呪いが痛むな．．．」

「はあ、はあ、があっ、クソッ！あの女結構やりやがる。ゲオルク、俺にもだ」

「ハイハイ、」

ヘラクレスも同様に治療をする。一方、ヘラクレスと戦闘した月夜はかなり消耗をしている様子だ。

「月夜、平気か？」

「はい、ハア、ハア、ハア……大丈夫です」

両者は再びにらみ合った。曹操は険しい顔をしながら今回の敵、イツセーをにらんだ。

「やられたな……八坂姫を奪還され、実験が失敗した今ここにとどまる理由もない……引き際だ。ゲオルク」

「……了解」

ゲオルクは絶

ロスト・ディメンション

霧で霧を発生させる。霧は英雄派一派を包み、

虚空へと消えていく。その間、ゲオルクは消えて見えなくなるまでイツセーをにらんだままであった。

「終わったか」

「そのようでごさる」

イツセーはこの事件が収束したことにほっと一息をついた。

「もし英雄派が邪龍たちとここで遭遇したら本当に面倒なことになっていたな……」

内心、邪龍たちと英雄派が遭遇しなかったことに最も安心するのであった。それはそれとして、今回の戦いを乗り越えたヤトと月夜に声をかける。

「ヤト。あの魔帝剣グラムを受けたのだろうか？ やせ我慢もほどほどにしろよ。治療してやる」

「イツセー殿、すまないでござる。正直立っているのもやつとでござる」

「月夜もだ。その傷だらけの状態ですぐ屋敷に返すわけにはいかないからな」

「はい、お願いします……」

イツセーとヤトたちはこの事件の後処理をすることになるのであった。

No, LVII

カオス・ブリゲード

禍の団の一派である英雄派と京での戦闘があった時と同じくして駒王学園の修学旅行先である沖縄でもどうように戦闘が起こっていた。修学旅行中にセーイチ達二年生を英雄派は襲った。曹操は京、そして悪魔たち同時に二勢力に対して攻撃を仕掛けていた。セーイチ達は英雄派の主戦力が京で別の勢力と戦っているのを知るも、相対している人間たちの数と神セイクリッド・ギアの練度を高めているのが要因で思っただよりも苦戦を強いられていた。

「いけっ!!」

「グウツ!!」

聖剣デュランダルに選ばれた元人間、ゼノヴィアが英雄派の構成員の攻撃に耐えられず、後方へかなりのスピードで吹き飛ばされる。

「ゼノヴィア!!クソっ!!こいつらっ!!」

セーイチはこんなにも苦戦するとは思ってもみなかった。またもや、自分たちの力のなさを実感することになったのだ。

「(クソツ!!なんでだ?なんでなんだっ!どうしてこんな時につ!!あと一歩が出ないんだっ)」

セーイチは声には出さないが心で嘆いた。前回の戦闘の時に大けがを負って、復帰直後の戦線だった。顧問のアザゼルたちに止められたが、それでも仲間と戦いたいがために満を持して参戦したセーイチであったが、敵を倒すには至れない。

「(クソツ、これじゃあ前と同じじゃねえか。どうしてここって時につ!!)」

「ふっ、これでトドメを刺す。曹操様にいい報告ができそうだ」

「クソツ!!」

『おい、聞こえるか?セーイチ、おいっ!』

絶体絶命という状況でセーイチの内側、神器の中からセーイチの精神に直接声が聞こえた。セーイチはその声を前も聞いたことがあったのだ。

「(あ、あなたは、歴代先輩のシャルルさん!)」

セーイチに声をかけてきたのはセーイチが飛行機の中で対話した歴代で二番目の実力者である人間、シャルルであった。

セーイチはこのピンチの中、歴代の神器の継承者の言葉に耳を傾けた。

『セーイチ、お前は確かに歴代の中でも強いほうだとは言えないだろう。だがな、それと同時にこの先どう進化するかわからない可能性の塊だともいわれたらどう?』

「(そ、そうだった。あのとき、アザゼルせんせーはそういつてくれた……この才能のないおれに……)」

『そうだ。おまえはおまえだけの道を行け、後輩』

「(お、おれだけの……道に……)」

『さあ、声に出して叫ぶんだ、セーイチ。お前が信じてやまないものをつ!!』

『へ?ちよつと?シャルル?何をするつもり?何かスツゴクいや〜く〜な予感がするんだけど?』

歴代最強のハルに次ぐ実力を手に入れたシャルルは冷や汗を垂れ流しているアグニルをよそにセーイチを導く。セーイチを次のステージへ昇華させるために。

「(叫ぶ……おれが、信じてやまないものを?そんなもの、決まってるじゃないかつ!!)」

『ふっ、叫ぶ言葉はもう決まってるようだな、セーイチつ!!!』

『なっ、なんだ?冷や汗が止まらない……こんなもの、現役時代に白龍皇アルビオンと戦った時よりも寒気がするつ!!あゝつ!!あぐっ……あ、頭がっ!!!』

シャルル、セーイチの気分が高揚したところだが、反対にアグニルは頭を押さえて蹲る。今この瞬間、アグニルは凄まじい頭痛に襲われている。アグニルは痛みあまりに神器内でのたうち回る。

『おいっ!!アグニルっ!大丈夫かっ!!』

最高の相棒であったハルは苦しむアグニルに近寄って心配する。

『すまないアグニルっ!後で謝るから今は耐えてくれっ!!』

『どうということだっ!シャルルっ!どうしてアグニルは苦しんでいる

!?何をするつもりだ!?』

『まっ、前にもっ!!こんなことがあったっ!!まさかっ』

『さあっ!言えっ!セーイチっ!!』

苦しみつづけているアグニルをよそにセーイチは特殊召喚スペシャル・サモンを発動させる。

中召喚サモン!!おっぱああああああああああいいいいいいいいいい!!!」

!!!セーイチが悪魔特有の魔方陣を展開する。セーイチの遙か上空に展開された赤い魔方陣。その魔方陣には堂々とおっぱいと記されていた。そのおっぱい魔方陣からは一人の麗麗?しい女性が降臨する。

「あれはっ!部長おとおおとおおおおおお!!?!?!」

魔方陣から姿を現したのは上級悪魔リリス・グレモリーリリス・グレモリー(下着姿)であった。この状況を飲み込める者はセーイチとシャルルのみであった。

『はあああああああ?!?!?!?』

いたって常識人であるハルにとってこの事態と特殊召喚スペシャル・サモンは理解の範疇を超えていた。

『うっ!!!!や、やっぱり……あ、っ、ぐっ……あ、あた
まがっ!!!』

『おいしい!!!叫ぶっておっぱいこっぱいかよっ!!!』

あまりのひどい事態にハルはよく見るギャグマンガのごとくツツコミを入れざるを得ない。

「えっ?どうして?私、こんなところへ?召喚されたのっ!?!」

召喚対象となったりアス自身もこの状況を瞬時に理解できるほどの強さを持ち合わせていなかった。

『さあっ!セーイチっ!!儀式はまだ終わっていないぞっ!!』

『おいっ!まだやるのかっ!!』

『セーイチっ!儀式を続けろ!この次に何をするか、もう言わなくてもわかるよなっ!』

「シャルル先生っ!わかりませんっ!この先はっ!?!」

シャルルの言葉をそのまま実践にうつしただけのセーイチはこの

本質を理解できていなかった。真の儀式はこの後が重要なのであった。

「仕方ねえ、いいかつ！セーイチ！つつけっ!!!」

「つつ、つつく……だ……だ……だ……だ……」

「時間がねえっ!!この状況を打開したいのなら、やれえええええっ!!!」

「わっ、わかりましたっ!!!布藤誠一っ！つつかせていただきますっ!!!
というわけで部長ツ!!!細かいところはあとで説明するのでお願いしますっ!!!つつかせてください!!!」

「な、なんだかよくわからないけどわ、わかったわ!」

セーイチとシャルルは勢いでこの惨状をさらに加速させる。リアスはこの状況についていけない。しかし、セーイチの勢いそのままに下着に手を付ける。セーイチはその顕わになったボタンをつついた。

リアスの喘ぎがスイッチとなりセーイチの鎧が光り輝き、変化していった。

「なっ、なんだこれは!」

「この凄まじい波動はっ!」

『よしっ!!!成功だ!!!』

セーイチの発するオーラが目に見えて強くなっていく。セーイチはスイッチをオンにすることでさらなる力を入れることとなった。その力はこの場の英雄派を圧倒した。

『あ……あああああ……あああ……あああ……あああ……あああ……あああ……
あああああ……あああ……あああ……あああ……あああ……あああ……
!!ドライブさあ……あ……あ……あ……あ……あ……あ……あ……あ……あ……
!!だがしかし、アグニルという尊い犠牲を払って……』



セーイチによって沖縄で撃退された英雄派の構成員たちは倒され、アザゼルたちに確保された者以外は生還することとなった。生還した者たちは曹操のもとへと帰還した。

「戻ったか」

それよりも一足早かった曹操は聖槍を地面に突き立てたまま立つ

ていた。

「はっ、遅くなりました」

「ふむ……見たところ人員が大幅に減っているようだな。何かあったのか？」

英雄派の首魁である曹操は大幅に減った生還者たちを見ながら言う。

「はっ、申し訳ありません。敵があり得ない方法で力を覚醒したのです……にわかには信じがたいのですが」

「そうか……まあいい。そのあり得ない方法とやらは気にはなるが、その覚醒も想定内。それよりも、次の作戦がある。レオナルドを休ませておけ。ロンギヌス神滅具、アナイレイション・メーカー魔獣創造のデータもとることができた。今回の作戦でそうとう消耗しているはずだ。」

「はっ。レオナルド様、こちらに」

曹操のもとに帰還した英雄派の構成員はレオナルドと呼ばれた少年をつれてゆく。少年ながらも、かの有名なイタリアの芸術家レオナルド・ダ・ヴィンチの末裔であった。さらにはロンギヌス神滅具である魔獣創造をその魂に宿している。彼は曹操の計画で各勢力に魔獣を送り付け、データをとっていたのだ。曹操は実験を繰り返し、より強力な魔獣を生み出そうと画策していた。曹操の描いたこの計画は順調に進んでいっていたのだ。

「よし、レオナルドが生み出した対種族別魔獣のデータは大方集まった。これで悪魔、天使、ドラゴンに対する対策は整った。ん？どうしたゲオルク、怖い顔になっているぞ」

「……」

英雄派幹部の一人、ゲオルクは京での戦線のあとからずっとしかめっ面をしていた。

「ゲオルク、まだ根に持っているのか？あの戦いに」
「……」

ゲオルクは言葉では語らずとも、その表情がそう示していた。先の京での戦いで実質敗北を期した英雄派であった。しかし曹操はそれはそれとして次なる行動に舵をきるところであった。反対にゲオル

クはいつまでもそのことに気を取られているのだった。

「ゲオルク、気持ちにはわかるがそうしては何も始まらない。それにあの戦いはあくまでも実験にすぎない。互いに本気は出していない。次に奴を倒す機会はまだあるさ」

曹操はゲオルクの肩に手を置いて彼に言葉をかける。それによって冷静さを失い、報復することに行き過ぎていた思考をとりもどした。

「すまない、少々熱くなりすぎたようだ」

「よし、ではかねてから計画していたあれを実行しよう。冥府へ向かう準備をしなければな」

曹操は不気味な笑みを浮かべる。ゲオルクは紫の霧を操り、英雄派のメンバーとともに禍カオス・ブリゲードの本拠地へと帰還する。禍カオス・ブリゲードのマジト、その巨大な建物の最上階にはその首魁、無限の龍神ウロボロス・ドラゴン、オーフィスがいる部屋である。曹操はその部屋のある上の上階に目を向けながらつぶやくのだ。

「曹操、とうとうあの計画を実行に移すのか。どこまでも恐ろしい奴だ。だが、愉快だ。これで、あの魔法使いも、ヴァーリも討ち倒せる力をつけることができる」

「ああ、その通りだ。オーフィス。無限の龍神ウロボロス・ドラゴンよ……あなたはこの有限へと堕ちる」

「しかし、ヴァーリのやつが妨害してこないとは限らないかもね」

「なに、どのみちヴァーリとは一線交えるつもりだったさ。これが、白龍皇ヴァーリの最後となろう」

次の作戦へと行動をする英雄派。それに対して、白龍皇であるヴァーリは現在もつとも脅威となっている英雄派の行動をマークしていた。

「……曹操、貴様の思い通りにはさせはしない。貴様とは決着をつける」

ヴァーリは自身のもつとも脅威となりうる英雄派の動向をマークしていた。とはいえ、下手な監視をすれば悟られる確率が高い。だが禍カオス・ブリゲードの団のアジトであれば、互いが顔を合わせる数少ない機会であ

る。ヴァーリはその機会に英雄派の動向から一つでも多くの情報を抜き取ろうとしていた。

「(しかし、曹操の行動が予測できない……曹操はオーフィスをどうするつもりでいるんだ……)」

ヴァーリは曹操ウロボロス・ドラゴンが無限の龍神、オーフィスに目を付けていることを見抜いていた。しかしヴァーリには曹操の行動が予測できない。だが、曹操がオーフィスを狙っているとわかれば、ヴァーリの次なる行動は決まった。ヴァーリはぞろぞろと集団で歩いている英雄派の死角にいる位置から離れ、仲間の元へと向かった。

「(ククク……ヴァーリ、アジトに戻っているとはな。我々が帰還した時を見計らうとはさすがだ。しかし、貴様がどう動こうと、結果は変わりはない。貴様が朽ち果てるという結果は)」

曹操はヴァーリが自分たちの姿を見ていることは悟っていた。しかし、曹操はあえてヴァーリを無視した。それでもなお、曹操には勝利を確信していたからだ。

英雄派は今では禍カオス・ブリゲードの団の最大戦力の一角。もはや、英雄派の台頭により他の勢力は一気に飲み込まれた。英雄派と互角に戦えるのはもはや白龍皇たちのみ。ここで、三大勢力を含め、世界中の神話勢力を悩ませてきた禍カオス・ブリゲードの団の二大派閥による混乱が始まろうとしていた。

NO, LVIII



「よし、ゲオルク。出発だ」

「ああ、了解だ。霧よ……」

英雄派、白龍皇一派が禍の団のアジトへ帰還した数日後、ひっそりと英雄派はアジトから姿を消した。ゲオルクが操る神滅具、

絶霧ロス・テイメンションによって転移していった。魔法や魔術と違い、神器セイクリッド・ギアであればひとかけらも痕跡を残すことはない。よって、禍の団では常に独断行動をとることができた。もつとも、英雄派にとって好都合でしかなかった。

日の光が全くない世界。紫色の霧に包まれた英雄派たちが現れたのは青い空の広がる人間界と180度異なる世界。黒き空に灰色の雲。大地の草木はすべて枯れ果て、草一本生えていない不毛の土地。そのような何もない土地に、英雄派の首脳陣である曹操、ゲオルク、ジークフリートの三人は尋ねた。

「ふう、着いたな」

「初めてきたが、なんともいえないな。ここは」

「言いたくはないが、あまり長居したくないね」

英雄派三人はひそひそと聞こえないようにつぶやく。そこに、黒いマントを被った髑髏顔の飛行物体が近づいてきた。足は体を覆うほど大きいマントによって見えない。極めつけは、大人一人くらいある大きさの刀身を持つ巨大な鎌、死鎌デスサイクスである。これは死神。魂を管理する存在である。その死神は曹操たちの前で止まる。しかし言葉を交わすことはなく、すぐに振り返り、宙に浮きながらゆっくりと移動した。

「……どうやら、彼が案内役のようだ」

曹操は死神の意図を理解したのか、死神についていく。ゲオルクとジークフリートはその曹操についていく。不毛な土地をぞろぞろと歩いていくと巨大な神殿が現れる。死神と曹操たちはその神殿に侵入していく。そして、とある部屋に招かれた。

「ふつ、来たか。貴殿らか、儂に会いたいという人間は」

その部屋にはとてつもない死のオーラを放つ者。法衣を身にまとい、ミトラを頭部に被る死神。ギリシア神話、オリュンポス三柱神の一角、ハーデスであった。ここは冥府。ハーデスが支配する領域である。



「お初にお目にかかる、冥府の神ハーデス殿。私は曹操。カオス・ブリゲード 禍の団のリーダーの一人です」

「私はゲオルク。同じく禍の団のリーダーです。」

「僕はジークフリート。お会いできて光栄だよ、ハーデス様」

英雄派の態度がいつもと違うのは当然のこと。目の前の存在は、神である。さらに神の中でも人間にとってはもつとも重要な存在の一つだと過言ではない。實力でも地位でも世界上位の神であることは曹操たちはよく理解していた。

「フアフアフア……知っておるぞよ、貴殿ら禍の団のことは。鴉の小僧どもを困らせているという英雄派という名の集団じゃったな」
「ええ、おっしゃる通りです。しかし、ハーデス様が我々のことをご存じとは」

「フアフアフア……何、儂とて世界で起きていることに無関心ではいられんよ」
前置きを少し置き、ハーデスは不意に真剣な雰囲気をつかがわせた。

「して、おぬしらがなぜこのようなところを訪ねてきた？おぬしらは活動に忙しいのじやろう？このような死者の魂が集まるだけの不毛な土地に来て何も得るものはないぞよ」

オリュンポスの神ハーデスは自身の領域を自ら墮とすように言う。しかし、曹操は首を横に振った。

「いいえ、ハーデス殿。それはちがいます。私たちはハーデス殿、あなたに少しばかりの用がありました」

「ほう、儂にか。これはまた、物好きなやつよの。いいだろう、申してみよ」

ハーデスのもとを訪れたとしても、ハーデスが一介の人間を相手にするはずもない。しかし、冥府などという危険地帯に足を踏み入れる人間もこれまたいない。ハーデスは目の前の若造が何を言い出すのか、以外にも楽しそうにしていた。

「はい。回りくどい言い方はしません。単刀直入に言います。ハーデス殿、この冥府、詳しくは冥府の最下層に眠るドラゴン、サマエルを我々に貸してほしいのです」

「フッフ、ハハハハハ……曹操とやら、まずは、サマエルが封印されている場所を突き止めたことをほめてやろう」

「ありがとうございます」

曹操が口に出したのは、サマエル。かつて、天使として聖書神話のエデンに存在した生物であった。

「かつて、エデンに住み、アダムとイブを誑し込み、聖書の神に抹消され、神の悪意、呪い、毒をその一身に受けた存在か。貴殿ならば、サマエルがどれほどの存在か、すでに知っておろう」

「左様。その性質から我々はサマエルを龍喰者と呼んでいます」

「龍喰者か、言いて妙じゃな。それで、先ほどの回答じゃが却下だ。さすがにサマエルは貸し出すことはできない。その理由もない。我々冥府に協力する理由がな」

「ええ、ハーデス殿のおっしゃる通りです。我々も、無条件で貸していただけるなどという甘い考えは持っていません」

世界に害を成すサマエルを解き放つわけにいかないハーデス、そのサマエルを利用したい曹操、ゲオルク、ジークフリート。ここから交渉は本格的になっていく。

「ハーデス殿、我々英雄派のことをご存じならば、禍の団のこともご存じですね？」

「多少なりとはな」

曹操、ゲオルク、ジークは三人でハーデスに挑む。

「では、無限の龍神、オーフィスについてもご存じのはず」

「ああ、あれがお主らテロリストの首魁であることくらいは有名じやが、それが？」

「実は、我々にはある考えがありましたね。それを実行するにはコキユートスにあるサマエルが必要なのですよ」

「ほう……」

「ハーデス殿、ご興味は、ありませんか？」

「……話を聞こう」

三人はハーデスの興味を引き付けることに成功した。三人は交渉を続ける。

「実は、無限の龍神の力を我々のものにする事ができる可能性を算出したのです」

「なに？」

「オーフィスは、我々に自身の力を切り分けて与えていました。それを我々は通称蛇とよんでいます」

「それで、その蛇の力をオーフィスから強制的に吸い上げることができれば、その力を十全にこれまで以上に使える。それには……」

「なるほど、それにはサマエルが必要というわけか」

「ええ。いかに世界最強と言えど、ドラゴンである以上サマエルであればこちらにも勝機はあります」

「なるほどな……確かに一理ある」

「ハーデス殿、これは貴殿にとってもメリットとなると思われます。今回の作戦が成功すれば、ハーデス殿にもオーフィスの力を扱えま

す。これはあなたにとって少なくとも損ではないはず」

「確かに……世界最強の存在、それほど邪魔なものはない。それを葬ることができるといふのなら……」

ハーデスは少し考えるそぶりをして三人の来訪者たちに向き合った。

「……いいだろう。今回は先行投資という形で、おぬしたちにあれを貸すことを許可しよう」

「ありがとうございます、ハーデス殿」

「しかし、かといって無条件というわけにはいかない。危険極まりない存在であることには変わりない。よって、フルパワーで開放することとは禁ずる。サマエルにはいくつかの枷を設ける。最低限の枷を取

り外すことは禁止、というところでしょうか?」

「了解しました。それだけであれば結構です。我々も、なんの制限もないあのような化け物を従えることはできないでしょう」

「封印処理が施されているとはいえ、サマエルだ。毒やほかの技を使えばオーフィスにも十分対抗できるでしょう」

交渉に成功し、なんとかハーデスの譲歩を引き出した三人。肩のしかかった重みが取れたようにリラックスをする。すると、ハーデスは交渉の席から立ちあがった。

「せっかくだ。貴様らに見せよう。サマエルをな」

「いいのですか?」

「なに、遅かれ早かれサマエルを見ることになる。それを操るとなれば先に見ておいてもよからう」

ハーデスの計らいにより、曹操、ゲオルク、ジークフリートは世界に厄災をもたらすサマエルを見る権利をもらうことになった。このような貴重なことは普通はない。

ハーデスと交渉したところからさらに地中奥深くへと進んでいく。冥府のさらに下、地獄の最下層と呼ばれている極寒の地、コキユートスへと向かった。

「ここが……」

「コキユートスか……」

そこは立っていることが困難なほどのブリザードが吹き荒れ、肌を突き刺すような寒さのする場所。光などなく、暗黒なる世界であった。

「こつちだ」

ハーデスは驚愕している三人を連れ、目的の場所へと向かう。ブリザードの中を進んでいくと、それは突然現れた。

「こ、これはっ!?!」

「っ……これが……」

「ドラゴン・イーター
龍喰者……サマエルか!」

見上げるほどの大きな巨体。上半身は黒き翼が生え、下半身はドラゴン。体には巨大な十字架に貼り付けられ、聖釘で打ち付けられてい

る。それだけではない。幾重にも施されている枷、封印術が施され、全く身動きが取れないほどガチガチに束縛されていた。体はこのコキユートス特有の寒さで凍り付いている。見る人が見れば残酷なほどの封印を施されている。何重にも枷をかけなければならぬほど、サマエルは危険な存在だということが伝わってくる。おそらく、この世界に存在する畏敬の中でも最凶の存在の一つであろう。

「……じかに見るとすさまじいな。あれが絶対に動かないと分かっている、足が竦む」

「ゲオルク、今回はお前がキーだ。サマエルはお前に託すが、行けるか？」

「……そりゃ、これを見たら驚くに決まっているさ。だけどね、それと同時にワクワクするよ。こいつで、やつらを蹴散らせると思うからね」

強力な封印が施され、いまここで動くことができないサマエル。しかし、それでもその体から放たれる威圧感はけた違いであった。世界の強者たちと戦闘をした三人でもサマエルが与える威圧感、オーラは凄まじいものであった。ゲオルクはこの化け物を前にしても笑みを浮かべていた。

この化け物がオーフィスに襲い掛かるのも、すぐの話で合った。



「よし、では作戦開始だ」

曹操、ゲオルクたちを率いる英雄派が行動を開始したのを見計らった白龍皇、ヴァーリはそれに対抗して行動を開始した。ヴァーリは先日から英雄派たちがオーフィスに目を付けていることを察知した。白龍皇と龍神、この世界に影響を及ぼすほどの存在が手を組んだこと自体が異常である。ただそれだけの関係であった。しかし、この禍の因で過ごす中で別の感情を抱いたのか、そのオーフィスを英雄派の手から遠ざけることにしたヴァーリ。しかし、それだけではないようだった。

「ふふ、ヴァーリ様がこのようなことを言い出すなんて思いもせずでしたわ」

「ええ、まったくです」

ペンドラゴン兄妹は苦笑しながら術式の準備をしていた。

「それだけ、ヴァーリはオーフィスに入れ込んであるってことだにや
〜」

「バカをいうな。曹操たちがおかしなことを企てているのは間違いない。あれを放置するわけにはいかないからだ。それに、奴らを好きにさせてはのちにその力で我々も襲われる」

「へえへえ、そういうことしておくぜ」

ヴァーリが思いつく限りの方便を口にするが、周りはなかなか納得してくるはずもなかった。

「いいからやるぞ。英雄派はそろそろ仕掛けてくるぞ」

ヴァーリは英雄派との戦いを見据え、チームを急かせた。

少々時間が過ぎたところで準備が完了した。

「よし、美猴たのむぞ」

「へいへいっと。変化の術！」

伝説の妖怪、孫悟空の末裔である美猴は妖術、仙術などに長け、あらゆる術を得意としている。才能にあふれた戦士だ。

「これでどうだ？」

煙が晴れるとそこにはオーフィスがもう一人いた。

「おー、我そつくり」

「へへ、どんなもんよ」

普段から感情を見せることはないオーフィス本人が認めるほど、美猴の変化の術は完ぺきな完成度であった。さらに、声質までもオーフィスその本人であった。伝説の妖怪、孫悟空直伝の術の完成度、再現度は恐ろしいほど高かった。

「だめだ、美猴。オーフィスはそのような口調ではない。そうでなければそれをやる意味がない」

見た目がオーフィス本人とはいえ、ヴァーリは苦言を呈した。

「うげえ、そうだった。オーフィスの口調って難しいな」

「そうよねえ、声はオーフィスだけど、口調がもう美猴なのよねえ」

「ん、頑張つて、美猴」

オーフィスそっくりに変身した美猴は指摘を受けて試行錯誤する。

「ん、我、オーフィス」

「……まあいいだろう。口数を極端に少なくすればまあ、ましにはなるはずだ」

結果、ヴァーリはその様に結論を下した。これはヴァーリにとって、曹操たち英雄派を欺くために必要不可欠な要素。下手に取り繕うよりも、黙ることを選んだのだ。

「よし、ではここから行動を始める。黒歌、ルフエイ、ジャンヌ、うまくやれよ」

「うん」

「まかせてにや」

「承りました、ヴァーリ様」

黒歌、ルフエイ、ジャンヌはオーフィスとともに魔法陣の上に乗る。その魔法陣によって彼女ら四人を別の場所へと送る。ヴァーリ、美猴、アーサーは四人を見送る。

「よし、俺たちはこのままここに残って、英雄派たちをおびき出し、かく乱する」

「はい」

「……」

「曹操たちが来なければ始まらないが……とりあえず奴らが帰還するまで待機だ」

アーサーは短く応え、美猴はコクリとうなずいた。三人は禍の団カオス・ブリゲードのアジトの最上階、オーフィスが完全に姿をくりますまでの囿。それゆえに曹操本物のオーフィスが完全に姿をくりますまでの囿。それゆえに曹操たちの姿がなければその意味がなかった。曹操が来るまでの間、この最上階の部屋は静寂そのものだった。ヴァーリは腕を組み、椅子に座ったまま動かない。アーサーは立ったまま仮眠をとっていた。オーフィスの姿をした美猴は何もしやべらず、テーブルに座って足をパタパタと動かしているのを繰り返した。しぐさなどは完ぺきにオーフィスに似せていた。

数時間が経過しただろうか。ヴァーリがピクリと反応した。

「来たか、曹操」

禍カオス・ブリゲードの団のアジトの中で気配を察知したヴァーリ。どうようにアーサーもそれに気づいていた。ヴァーリにはそれが曹操たちだとすぐに断定する。ヴァーリには黄昏トウルー・ロンギヌスの聖槍からあふれ出すその力を熟知している。間違えるはずもなかった。

曹操たち英雄派がこの最上階へとどんどん近づいてくる。ヴァーリの目論見通り、曹操がオーフィスに化けた美猴のもとに進んでいる。そのタイミングを見計らったヴァーリはここから逃げるための準備に入る。そして、オーフィスの部屋、最上階の扉が開かれる。

「オーフィス、ただいま帰還……おやヴァーリ、いたのですか」曹操、ゲオルク、ジークフリード、ペルセウス、ヘラクレス率いる英雄派は最大戦力と言っているほど巨大な組織となつてこの最上階へとやってきた。少数精鋭と言っているいい白龍皇組とは違った組織を作り上げていた。

「ふっ、ずいぶん遅かったな、曹操。収穫はあったのか？」
「まあまあといったところさ。さて、ヴァーリ。我々はそのオーフィスに用がある。悪いが、一度この場から退出願おうか」

曹操は内心ここで戦闘に入ることも考えたが、まずは穏健に事を済ませようとした。しかし、ヴァーリがそのような言葉に素直に従うことはない。

「貴様の言うとおりにする理由はない。オーフィス、行くぞ」
「ん」

ヴァーリ、オーフィス、の姿をした美猴、アーサーは魔法陣の上に立つ。

「ふっ、ヴァーリ。一応聞いておくが、オーフィスを連れてどこへ行くつもりなのだ？」

「さあ、どこだろうな」

涼しい顔をしながらヴァーリは言う。それによって、英雄派たちの殺気がヴァーリに向けられる。

「逃がすと思うか？」

曹操の持つ神滅具ロンギヌス・ストウルー・ロンギヌス黄昏の聖槍を向けられる。ソロモンの七十二柱

の悪魔とは違い、魔王ルシファアの血を引いているとはいえ、自身を容易く葬り去ることができる聖槍を向けられても涼しそうな顔をするヴァーリ。

「ゲオルクっ!!」

「霧よっ、奴らをつつめ!!」

ゲオルクは空間を絶対的な力で支配する絶 デイメンション・ロスト 霧でヴァーリたちを捕らえることを試みた。しかし、

「させませんっ!」

その霧はヴァーリに届くことはない。アーサーの聖王剣によって霧は晴れた。アーサーが聖王剣を一振り薙いただけで、紫色の霧は消し飛んでしまった。

「バカなっ! 神器の力をこころもあつさりと!?!」

「聖王剣コールブランド……あの剣はやつかいにもほどがあるな」

聖王剣コールブランド。この地上最強の聖剣の力はまだ謎にまつまれている。聖書の神が作り出した神器、それも格の高い神滅具ロンギヌスの力を無効化してしまうほどであった。

「じゃあな、曹操」

何事もなかったかのようにヴァーリ、アーサー、美猴は魔法陣によつてどこかへと消えていった。

「ちっ、逃げられたか、すまない曹操」

「気にするな。だが、これで終わったわけではない。各員、全力をもつて必ず探し出せっ!! いいなっ!!」

「ああっ」

「了解だ」

いつもは冷静である曹操は珍しく声を荒げた。その様子に曹操をよく知るゲオルクは驚いたのだった。

曹操たち英雄派すぐに各地に散らばり、ヴァーリたちの手掛かりとなる痕跡という痕跡を調べつくしたのだった。

NO, LIX

悪魔や堕天使たちが支配する冥界の更に下層にある世界、冥府を支配する神ハーデスと交渉し、サマエルを召喚する権利を獲得した英雄派はオーフィスを捕らえようとしたがヴァーリに逃げられてしまった。曹操、ゲオルクを中心に急ピッチで捜索に当たっていた。カオス・ブリゲードの団のともとの首魁、オーフィスがヴァーリとともに逃亡したことによって実質この組織は英雄派という形になった。アジトの最上階にあるオーフィスの部屋を英雄派が占領し、英雄派の事務室になっていた。

「どうだ？見つかったか？」

「申し訳ありません、いまだ発見できておりません」

「そうか。なら探索に長けた神器を使って、入念に探せ」

「はっ」

その部屋で指揮をとる英雄派のリーダーの一人、曹操は大人数である組織を武器にして手当たり次第にヴァーリが逃げた先を追跡させていた。曹操は焦りからか、少々熱くなっているように見受けられた。

「………曹操、次はお前が熱くなりすぎだ」

もう一人のリーダーであるゲオルクが曹操に指摘した。

「すまない。俺も少し焦っていたか………」

「らしくないな、曹操。そんなに早くヴァーリと戦いたいのか？」

「もちろんだ。それに、サマエルを早く試したいね。あれがどんな威力を發揮するのか、な」

「そうか。しかし、残念ながらサマエルはまだ使えない。僕のこの神器、ロスト・デイメンション霧の調整がまだ済んでいない。サマエルを使えるのはお

そらくあと一回だけだろう。万全の状態で戦うために、焦るべきではない」

ゲオルクは神器、ロスト・デイメンション絶霧から紫色の霧を出しながら言う。

「ふっ、そうだな、その通りだ。ならばゲオルクは早めに調整を終わらせておいてくれ」

「了解だ。それに、僕は個人的に習得したい魔法もあるから、少しばかり修行に出るよ」

「ちなみにその魔法はなんだ？」

「それはできてからのお楽しみということにしておくよ」

「それは楽しみだ。では俺も、この神器を多分に生かせるように仕上げておこう。バランス・ブレイカー 禁手をな」

「みんな張り切っているねえ。それはいいことなんだけど。では僕も、グラムはもちろん、ほかの魔剣を使いこなせるようにしておくか」

曹操、ゲオルク、ジークフリードはヴァーリが見つかるまでの短い時間を自身の鍛錬に費やすことを選んだ。そして、三人が別々に修行の場に向かおうとしたその時だった。

「曹操様あつ!!!」

唐突に英雄派の構成員の一人が勢いよくこの最上階の部屋に突入してきたのだ。この屋へに入ってきたその男は異常なほどに焦っているのがわかる。

「何事だ、さわがしい」

「白龍皇、見つかりましたっ!!!」

「なにっ!?それは本当か!!!」

曹操、ゲオルク、ジークフリードは白龍皇がこんなにも早く見つかるとは思ってもみなかったのだ。曹操たちはもつと時間がかかると思っていたのだ。

「はい、場所は冥界。白龍皇の気配、力を簡単に探知できました。すぐ向かわれますか?」

「ああ、すぐに準備を済ませろ」

「はっ!!」

「待て」

曹操に指示され、その報告をしに来た構成員は部屋を出ていこうとする。だが、それをゲオルクに呼び止められた。

「一つ聞いておきたい情報がある」

「なんででしょう?ゲオルク様」

「ヴァーリを見つけたといったが、人数は?」

「人数……ですと、我々が探知したのは三人です。おそらく、白龍皇ヴァーリ、アーサー・ペンドラゴン、オーフィスかと思われます」
「……そうか、わかった。行っていい」
「はっ、失礼します」

ゲオルクはその報告を聞いて考えこんだ。その様子を見た曹操はゲオルクに疑問を投げかけた。

「どうした、ゲオルク？何か考え事でもあるのか？」

「……いや、ふと疑問に思っただけだが」

「言ってみてくれ」

ゲオルクは腕を組み、神妙な顔をしながら話した。

「ヴァーリがこの部屋から逃げるとき、アーサー、ヴァーリ、オーフィスの三人だけだった」

「ああ、そうだな」

「だが、ヴァーリチームはそれだけじゃない。僕はつきりジャンヌ、美猴、黒歌、ルフェイたちと合流すると思っていたがそれもない」

ゲオルクは今までのヴァーリたちの行動から情報を洗い出す。英雄派の参謀である彼は魔法のスペシャリストとも言っている。魔法、魔術では頭脳が物を言う。その頭脳で思考を深めていった。

「それに、いかに我々が神セイクリッド・ギア器を多用しているからと言って、こんなにあつさりで見つかるだろうか」

「……確かに、いわれてみれば疑問にはなるが」

「とにかく、向かおう。だが、ヴァーリが何を企んでいるのかわからない。我々を釣っている可能性もある。用心すべきだ」

「そうだな」

「よし、行くぞ」

ゲオルク、ジークフリード、曹操たち首脳陣はそのような結論を出し、ヴァーリの行方を追った。ゲオルクの絶ロスト・デイメンション霧によって、英雄派たちは霧に包まれ、転移する。



一方、英雄派たちを引つ掻き回す算段に出た白龍皇ヴァーリ、アー

サー、オーフィスに化けた美猴は冥界に来ていた。ヴァーリは少しでも時間を稼ぎ、つきなる英雄派たちの攻撃を迎撃するための手段を増やすことが目的だ。いくら悪魔や墮天使の領地と言えど、このような辺境に逐一監視には来ない。よって、絶好の逃げ場所となっているのであった。

この場で、ヴァーリは目を瞑り、自身の白龍皇の力を周囲に発する。その様子を、アーサーとオーフィスの姿をした美猴は黙って見続けている。ヴァーリたちにとっては大きな賭けとなった。白龍皇の力を発すれば、その力はあらゆるものを引き寄せる。それにここは冥界。いくら辺境とはいえ、白龍皇の力を周囲にまき散らせれば、悪魔や墮天使に気づかれる可能性も十分に存在する。英雄派が先に来るか、それとも悪魔や墮天使が先に来るかの博打である。

「む、来たか」

ヴァーリは自身に接近する気配を察知し、周囲にまき散らしている白龍皇の力を止める。ヴァーリの正面に紫色の霧が発生する。

「やあ、ヴァーリ。まさか、冥界に逃げているとは思わなかったよ」
紫色の霧からは英雄派、曹操、ゲオルク、ジークたちが現れた。その姿を確認したヴァーリは笑みを浮かべた。それはもちろんヴァーリにとつて、賭けに勝ったのだから。計算通り、ヴァーリは英雄派をおびき出すことに成功した。

「曹操、ずいぶん早かったな」

「神 器の力をフル活用すればこんなものだ。さあ、ヴァーリ。オーフィスを渡してもらおうか」

曹操はヴァーリとアーサーの後ろにいるオーフィスを指さしながら言う。

「この俺が、大人しく言うことを聞くと思うか？」

「だろうな」

ヴァーリはオーフィスを差し出すわけもなく、アーサーとともに前に出て戦闘態勢になる。

「ヴァーリ」

戦闘態勢に互いになっているが、その前にゲオルクはヴァーリに尋

ねた。

「なんだ？」

「美猴やジャンヌたち他の連中はどうした？ やつらは一体どこにいる？」

「さあな。それを知ってどうするっていうのだ？」

「なあに、少々気になっていたのさ。ヴァーリ。キミが何を企んでいるのかをね」

「ほう？」

「キミは、逃げたにしてはまるで我々に見つけてほしいとしか思えないような行動だった。その証拠に白龍皇の力を周囲にまき散らしていた。それで我々は君のいる場所を探知できた。それに、よく見れば、オーフェイスから感じる力には、少々違和感を覚える。――

――そこにいるオーフェイスは、誰だ？」

ゲオルクはこれまでの経緯から、もはやオーフェイスの存在を疑った。これはヴァーリにとっても誤算であった。まだ、このまま隠し通せると思っていたがオーフェイスの存在を疑われたのだ。しかし、ヴァーリにとって存在がばれたとしても、次の作戦に移るだけであった。

「フツ……」

「何がおかしい？」

「おめでどう。よく見破ったな」

「ん？」

ヴァーリが笑みを浮かべ、オーフェイスに合図を出した。すると、オーフェイスは突然煙に包まれた。その煙から出てきたのは、彼女ではなかった。

「ようつ、ゲオルク。相変わらずキレイキレイな頭しているじゃねえかよ」

「貴様つ、美猴つ!!!」

「そうだぜえ、オーフェイスに化けていたのはおれっちだったってわけさ」

オーフェイスに瓜二つとっていいほどの完成度を誇っていた変化

の術がここで役目を終える。しかし、英雄派にとってこれはずいぶん
んと時間を取られていた。いまごろ、本物のオーフィスはとつくに姿
をくらましているくらいだろう。

「クソっ、ヴァーリ。貴様、我々を最初から欺いていたのかっ!!!」

曹操は激高し、聖槍をヴァーリたちに向ける。

「そう熱くなるな、曹操。少し面白かったぞ」

「ヴァーリ、本物のオーフィスはどこだ？おそらく、お前の他の仲間と
一緒にいるのではないか？」

「ふっ、教える義理はない」

ヴァーリは当然のごとく、口を開かない。そうと分かったゲオルク
は戦闘態勢を解いた。

「ならば、君に用はない。さっさと本物のオーフィスを探しに行くだ
けだ」

「ではな、ヴァーリ」

オーフィスが本物ではないと分かった曹操、ゲオルクたちはさっさと
と転移の準備を始める。しかし、それを見逃すヴァーリではなかつ
た。

「グッ!？」

「曹操っ!？」

突然、曹操がゲオルクが発生させた霧から外へ叩き出される。それ
はヴァーリの仕業であった。転移をしようとしたその隙を見逃さず、
凄まじいスピードで接近し、拳を曹操に向かって放った。

「ヴァーリ、てめえっ!!」

「行かせると思うか？お前たちはここで俺たちと戦ってもらおう」

ヴァーリ、アーサー、美猴はそれぞれ武器を構える。アーサーは聖
王剣コールブランドを抜き、美猴は如意棒を構える。

「くっ、なるほど……ヴァーリ、キミはあくまで時間を稼ぐつ
もりというわけか」

曹操は立ち上がりながらヴァーリのほうに目を向ける。

「だが、ヴァーリ。たった三人で戦うつもりか？」

曹操はヴァーリを煽るように言う。曹操の言う通り、英雄派は規模

が大きい。曹操は人材を集めることにもつとも時間を割いた。それによって人員は増える一方だ。現に、ヴァーリたちを数十人という規模の人員で囲っている。その先頭に立つのが、曹操、ゲオルク、ジーク、ヘラクレスだった。

「ああ、そのつもりだ！」

ヴァーリの背中から、翼が出現する。ヴァーリが今代の白龍皇と言われる所以。ロンギヌス神滅具の一つ、デイバイン・デイバイディング白龍皇の光翼である。ヴァーリは瞬間移動のごとく、空中へと飛翔し、英雄派の上をとった。

「まずい、全員回避しろ!!!」

「遅い」

ヴァーリから凄まじいスピードで攻撃が放たれる。それは、ヴァーリが半分血を引く魔王、ルシファー特有の魔力からなる電撃。他の悪魔とは格の違う魔力。それに加えて白龍皇としての力を上乗せされている。バランス・ブレイカー禁手でなくても、その威力は絶大であった。

「ぐわああああ!!!」

「カハツ!!」

その攻撃にいち早く気づいた曹操、ゲオルク、ジーク、ヘラクレスを除いたほかの英雄派の構成員は回避すらできず、その攻撃を食らう。あれほどいた人数差が、すでに一人となっていた。

「雑魚は片づけた。これで人数差もなくなったと同然だ」

「たとえそうだったとしても、キミたちはだれかが二人を相手にするしかない」

「そんなことはわかっている。俺が、曹操とゲオルクを相手にしよう」

ヴァーリが自ら、もつとも負担の重い役を買って出た。

「では、私はジークフリードを」

「おれっちがヘラクレスを相手ってことだな」

「後悔するなよ、ヴァーリ!!!」

曹操が怒号の声を上げる。そして、両者が自身の相手とぶつかり合う。

バランス・ブレイク「禁手化!!!」

ヴァーリは神セイクリッド・ギア器を禁手へと至らせる。凄まじい力がヴァー

りの体の周囲に鎧となつて具現化する。

「ちつ、バランス・ブレイカー禁手か」

ヴァーリの禁手、一白龍皇の鎧《ディバイン・ディバイディン
グ・スケイルメイル》の恐ろしさは曹操もよく知っている。すでに完
成をさせているヴァーリと、いまだ禁手バランス・ブレイカーを完成させていない曹操
とゲオルク。これによつて、曹操とゲオルクが二人束になつても苦し
い戦況となる。

「舐められたものだな、曹操。バランス・ブレイカー禁手なしで戦おうなど」

「黙れっ!!」

煽られた曹操は吐き捨てる。曹操バランス・ブレイカーの禁手はまだまだ未完成。し
かし、それをヴァーリに悟られるわけにもいかなかった。

「さて、アーサー。覚悟はいいかな?」

「どこからでもどうぞ」

その間にも、聖王剣と魔帝剣の戦いも熾烈を極める。互いに剣士と
して最高峰の戦いが始まつていた。

「オラオラ、美猴!よくも欺いてくれたなっ!覚悟しろ!」

「へっ、ヘラクレス!そんな攻撃は当たらないぜっ!」

美猴とヘラクレスの戦いも始まつた。ヘラクレスのパワーをよく
知る美猴は筋斗雲に乗つてスピードで翻弄する。

英雄派と白龍皇チーム。この二つは完全に袂を分かつときがいま、
この瞬間であつた。



「あ—————、めんどくせえ!!」

イギリス、ウェールズ地方。そこは現代のイギリスの一部となつて
いる地方である。そのウェールズ地方のとある田舎の森。その森に
ある人物の声が響いた。

「クソっ、あの野郎、めんどくさいことしやがつて」

その人物とは、現代に生きる魔法を操りし者、イツセー・V・アン
ブロシウスである。彼は京都における英雄派との一戦のあと、自身の
故郷であり、彼の両親の家があるこの地に訪れていた。普段であれば
この時期に用事があるというわけでもないイツセーだったが、急遽こ

の地でやるべきことがあった。それについては時を少し遡る。



「イツセー！」

「ん？どうした、アーシャ」

「今更で、ちよつと言いつらいんだけどね？この手紙の中にあつた無料宿泊招待券とかもろもろ使っちゃったんだけどね……？よかつたかな？」

京の戦いは収束し、イツセーたちは別荘に帰っていた。そんななか、邪龍、ディアボリスム・サウザンド・ドラゴン魔源の禁龍アジ・ダハーカの妹、アーシャがイツセーのもとを訪れた。

「無料招待券つて、どこのだよ？」

「ほら、京都で会つたでしょ？あそこの超高級旅館に泊まつたの！！あゝゝゝ本当に良かったあ」

「そ、そうかそれはよかったな」

冗談みたいな存在であるアーシャ。しかし、その精神はまだまだ幼い。旅行というのは初めての経験だった。それほど、いい経験をしたのだ。イツセーとしても、アーシャに何事もなく、楽しんでもらえたことはほつとしている。もし、アーシャに何かあれば、兄であるアジ・ダハーカどころか、イツセーまでももしかしたらコキユートスが生ぬるいほどの地獄を味わうかもしれない可能性があつたからだ。それはおいておいて

閑話休題。

「な、なあ……ちなみになんだが、差出人はなんて書いてあるんだ？」

イツセーに自覚はなかつたが、なぜか少し不安であつたのだ。京で出会つた、ゲオルクIV世のあの言葉が気になつていたのであつた。アーシャは手紙を取り出し、裏を見る。

「ん？ええーつとねえ、これは魔法使いが使う言語だね」

便箋には確かに名前らしきものが書かれていた。しかし、それは一般字が決して読めるような文字ではない。表の世界で扱われているどの言語でもない。それは魔法使いたちにしか読めないものであつ

た。しかし、アーシヤにそんなものは関係ない。両親から受け継いでいるその魔法力と知能、それゆえに魔法使いの文字など余裕で理解してしまふのであった。

「普通の文字で言うよね、ゲオルク・ファウストIV世だよ？ イッセーのお友達？」

「なっ——」

その名前を聞いた瞬間、イッセーのかなにはすさまじいほどの衝撃が走った。それはこの地球という次元において、トップテンに入るほどのイッセーが崩れ落ちるほどのものだった。

「ん？ どうしたの、イッセー？」

崩れ落ちているイッセーを心配するアーシヤ。アーシヤは知らない。そのゲオルクとイッセーは戦っているということ。

「ちなみに、アーシヤ。その手紙をどこで？」

顔を上げないままアーシヤに尋ねるイッセー。アーシヤは少しイッセーを心配しながらも応える。

「んーつとね、ほんとに偶然なんだけどね。イッセーのあつちの家の前を通りかかったら、直接ふつうの人に渡されたんだ。お兄ちゃんに聞いたたら、郵便を届ける人だって」

「そうか、ありがとう」

イッセーはある決心をし、立ち上がった。

「イッセー、どこ行くの？」

「ああ、少し用事を思い出したんだ」

「そっか、じゃあねー」

とぼとぼと去っていくイッセーをアーシヤは元気いっばいに送り出した。



このようなことがあり、イッセーは今自身の実家に来ているというわけだが。当然、そんなイッセーの様子に気づくドライグは心配していたが、イッセーは必死になだめてここに来たのだ。

とイッセーは歩き倒し、自分の実家の目の前に着くのである。イッセーはさっそくこのあたり一帯に発動させている魔法を見直す。

「クソツ、なんてことなんだ。この家の在り処が公開されているも同然じゃないか……個人情報が流出しているとは」

イツセーはぶつぶつと文句を垂れ流しながら作業を続ける。イツセーの言っていることももつともであった。今となっては敵である存在にそんな機密情報が知られているのは、戦う者にとって、とんでもない失態である。

「何をしている、イツセー。貴様、そんな簡単に場所を突き止められるなど……この家には、人間の魔術師、魔法使いたちが命を代償にしても欲しがるとような遺産が山ほどあるのをわかっているのか？アンブロシウスとしての名が泣くぞ」

これにはイツセーの中にすむドラゴン、ジルニトラもあきれ果てていた。

「クツ……流石に、一般人をこっちに来させるとは……考えが甘かったというのか」

イツセーが家の周りに展開している結界は、人畜無害、何の力も持たないただの一般の人間には発動しなかったのであった。いざとなれば、力の大小の条件よつては神仏さえも弾くような完璧に見えたその結界にも弱点があったのだった。

「とにかく、これ以上めんどくさいことならないようにしないと」

イツセーは苦虫を噛み潰したような顔をしながら大急ぎで作業を進める。どうやら、イツセーが発動させている数重もの結界に不備はなかったようだった。イツセーは家の存在する場所の次元を魔法で捻じ曲げ、普通の方法では侵入できないように創りかえる。

「よし、こんなもんか」

「ふむ、まあこれなら良しとしよう」

ジルニトラの及第点ももらったところで、イツセーはさっそく実家の中へと入り、くつろぐ。それなりに魔法を使用したことで一息ついた。

「（少しはゆつくりできるだろう）」

イツセーはソファーに寝ころび、楽になろうとした時だった。イツセーがあらた創り出した次元に凄まじい歪みが生じる。その歪みの

奥には、凄まじいほどの力の塊。イツセーがその気配に気づかないわけがなかった。

「なんだっ!？」

目に見えるほどの異変にイツセーは飛び起きて、すぐに家の敷地へと飛び出す。

「何者かがテリトリーに侵入したようだが……」

イツセーの経験から、家の周囲半径数百メートルの領域には結界が構築されている。この結界を破ることのできる存在など、数えられるほどだ。さらに、次元を歪めて現実世界の住所をごまかしている。それだというのに、相手は安々と次元を突破され、結界さえ何事もなかったかのように侵入している。イツセーにとって、この領域に足を踏み入れる者はすぐに探知できる。

「だが、すぐにトラップが発動しているはずだが……行くか」
イツセーは自身が仕掛けた侵入された場合に発動する攻撃術式が発動していることを確認する。その間に、距離を詰めてその正体を見極めようとした。だが、目にした集団はイツセーにとって意外な人物であった。

幾重にも展開され、侵入者たちに向かって放たれようとしている攻撃は、イツセーの意思によって無効化される。

「まさか、おまえなのか？ オーフイス——」

「……久しい、イツセー……」

この領域に侵入した者たちは、無限の龍神、ウロボロス・ドラゴン オーフイス。そして、白龍皇ヴァーリとともに行動する者たちであった。

NO, LX

ヴァーリ、アーサー、美猴が見送る中、ジャンヌ、黒歌、ルフエイ、本物のオーフィスは先に禍カオス・ブリゲードの団本部を脱出した。彼らはとりあえず、禍カオス・ブリゲードの団の本部から遠く離れ、ひとまず人間界に降り立った。全員、移動を続けるが、黒歌が疑問を抱いた。

「ねえ、脱出したはいいけどさ、どこにいくにやん？」

「それは、ヴァーリ様から伺っています。なんでも、オーフィス様が行きたい場所があるのだとか」

「へえ、オーフィスが？」

「うん」

オーフィスはこくりとうなずいた。オーフィスは何も求めない。ただただ、静寂を欲した。無欲なのだ。そんなオーフィスの個性を知っている女性陣が、オーフィスの数少ない希望には驚いたのは無理もなかった。

「ふーん、それってどこなの？」

「はい、これからその場所へ向かいますわ。皆さん、乗ってください」

ルフエイは新たに魔法陣を形成させた。全員が乗ったのを確認したルフエイは転移を開始した。

「んー？その口ぶりからすると、ルフエイはその場所知っているのかにやん？」

「えーと、私が知っているのはあくまで大まかな場所にすぎないんです。そこまで行った後は、オーフィス様が自分で案内するって、ヴァーリ様からはうかがっています」

「ふーん、オーフィスが行きたがってるところ、ねえ……」
ジャンヌはただ単に興味がひかれた。無欲なオーフィスが自分から行きたがる場所にだ。

「心配ありませんわ。ヴァーリ様曰く、我々が潜伏するには絶好の場所だと、下手に逃げるよりは面白いかもしれないと」

「下手に逃げるより面白いって、どういうことによ」

いまだに真意をわかりかねている面々の頭の上にははてなマーク

が浮かんでいる。

「とりあえず、急ぎましょう。ヴァーリ様たちが時間を稼いでいるうちに」

「そうね」

こうしている間にも、囿役となったヴァーリ、アーサー、美猴はいまも絶賛戦闘中だった。その一方で狙われているオーフィスを逃がす役を担った通称ヴァーリチームの女性陣たちは早急に目的地へと向かう。

「着きましたわ」

そうこうしている間に、目的地についていた。そこは、ルフエイ自身に縁のある地であった。

「ねえ、ここって……」

「はい、ブリテン島ですわ」

「ブリテン島って、ルフエイの出身地じゃない」

「はい、そのとおりです」

たどり着いた場所は人間界、グレートブリテン島であった。そこは、ペンドラゴン家の本拠地である。逃げた場所がルフエイ出身の地であることに黒歌、ジャンヌは不思議でならなかった。

しかし、オーフィスは違った。この地に来たのはまるで今回が初めてではないかのような真つすぐな目を向けていた。それはウエールズ地方の方角だった。ちなみに、オーフィスが行きたがっている場所を知るのは今のところ、陽動作戦をしているヴァーリのみである。

「オーフィス様、ここからは道先案内人役、お願いしますね」

「ん、わかった」

この中でただ一人、行き先を知るオーフィスはコクリとうなずいた。ここからは、道先案内人はルフエイからオーフィスに代わるのだった。

「のって」

オーフィスは自ら魔法陣を展開させ、この上に乗るように言う。

「また魔法陣で行くの？オーフィス」

「ん。こう、じゃないと、そこには行けない」

「わかったわ」

オーフィスの短い説明に納得した三人はオーフィスの言う通り、魔法陣に乗る。龍神が操る魔法陣に乗るのは初めての体験である。とくに魔法使いであるルフェイにとってはとても貴重な体験だった。

ウロボロス・ドラゴン
無限の龍神の魔法陣に行けない場所は無い。それがたとえ、結界の中だろうと、魔法陣の中だろうと関係なかった。なんということはなく、オーフィス率いる白龍皇チームの女性人たちは”目的の場所”へと到着した。

「ん、ついた」

ついた場所は、周りを木々に囲まれたちよつとした平地。その奥を見えると、家が見えたのだった。

「.....」

見た目は普通の家だ。しかし、なにやら普通とは違った雰囲気。ルフェイ、黒歌、ジャンヌは息を？んだ。しかし、そんな雰囲気はすぐに壊されることになった。少々遠くに見える家に向かって足を踏み出した瞬間だった。踏み出した地面から魔法陣が現れる。それだけではなかった。最初に現れた魔法陣を皮切りに、空中からも凄まじい数の魔法陣が次々に出現する。数々の死線を潜り抜けてきた彼女らにとつて、その魔法陣がどんなものなのかなど、それくらいのことにはすぐに察しがついた。明らかに攻撃を放つ魔法であった。

「ちよつ、何よこれ!!」

「オーフィス！これどういうことなのっ!？」

もともと、オーフィスの身を隠すために訪れた場所。その目的のために来たというのに、さつそく攻撃では愚痴の一つや二つ言いたくないというものだった。しかし、流石は白龍皇が選んだメンバーだけあって、すでに戦闘態勢に入っていた。

「みなさん！気を付けてください。一つ一つの魔法の威力がけた違いです。今まで戦ってきた魔法使いと天地の差があります！」

チームの中で最も魔法に詳しいルフェイが注意を促す。魔法陣はすでにいつでも攻撃が加えられる段階に入っている。4人を取り囲んだ魔法陣は様々な種類の攻撃をする魔法陣。死角ができないよう、

4人は背中合わせで迎撃しようとした。

「ツ！来るわよ!!」

そして、魔法陣から攻撃が4人に向かって放たれる。冷や汗を垂らしながら、4人は迎撃をしようとしたその時だった。

「えっ！これ……」

オーフィス以外の3人は困惑を隠せない。なぜなら、今先ほどまで自分たちを攻撃するはずだった魔法陣から放たれた、炎や氷、雷、槍といった攻撃が自分たちに届く前に、空中に静止していたのだ。そして、唐突に人間の声が聞こえた。

「あくあ、なんだ、お前たちかよ」

どこか怠そうな声質。そしてどこかで聞いたことあるような声で合った。その声の聞こえた先を見ると、そこにはとある人物が立っていた。

「あ、あなたは……」

「イツセー、久しぶり」

そこには何かしらの縁があり、共闘した仲である男がいた。



マーリン・アンブロシウスとクリスチャン・ローゼンクロイツの息子、イツセー・V・アンブロシウスは家のセキュリティ（魔法）を固めた。しかし、思わぬ来客が来た。困惑したイツセーであったが、ひとまず家に来訪者を上げさせた。

「（この家に来客を上げるなんて、兄さんやアルトリア以外しなかったなあ……）」

なんだかんだ他人をこの家の中に入れたことなんて現役のところ以来だったと回想するイツセーであった。たいして、来客用の部屋でいかにも年季の入った来客用ソファに4人並んでいるルフエイ、黒歌、ジャンヌ、オーフィスである。そのイツセーの目の前にいる来訪者たちはなぜかソワソワしている。オーフィスを除いて落ち着きがなかった。そんなにソワソワされて落ち着きがなくてはイツセーと

て気になってしまふ。イツセーはため息をしながら言う。

「なあ、とりあえず落ち着け。それと、そんなに見ても面白いものはないぞ」

「え、あ、うん・・・」

「す、すみません」

全員を落ち着かせたところで、ようやくお話ができるスタート地点にたった。ルフエイは少々顔を赤くしながら出された紅茶に口をつける。

「！お、おいしい・・・これ、お兄様が使っている茶葉と一緒に・・・？」

「ほんとだにや!!」

「ふふ、おいしい・・・」

「・・・にがい」

普段から紅茶をアーサーから振る舞われている三人にとっては、イツセーの紅茶も口に合った。だが、幼いオーフィスにはまだ早すぎたようだった。

一服したところで、また少し張り詰めた雰囲気になる。

「さて、ひとまずはようこそといったところか。歓迎するよ、オーフィスと、白龍皇の仲間たち」

「は、はい」

「ええ」

「こうしてちゃんと面と向かって会うのは初めてだにや」

黒歌の言った通り、イツセーと3人はこれまで戦いの場では会うことはなかった。こうしてゆっくりと対面するのは文字通り初であった。そして、イツセーがちらつとオーフィスを見る。何も聞かなくても、オーフィスがいるとなにやら察してしまふイツセーである。ただ事じゃないことはわかるのだった。

「で、オーフィスがいるあたりにかあつたんだろうが、ただごとじやなんだろう?」

「あ、あのそれについては私から説明しますね」

「ああ、頼む」

ルフエイはこれまでの経緯を説明し始める。

「実は、私たち、禍カオス・ブリゲードの団を離反しましてですね、」

それを聞いた瞬間、イツセーはああ、やっぱりか、と思いつつ聞く。話の腰を折らないために黙っているのであった。

「曹操様率いる英雄派と全面対決になりそうでした」

これまたイツセーにはやっぱりか、と感想を抱く。なんだかんだ、こうなる予感はしていたのだった。

「なるほどな。そうなる予感はしていたが。しかし、ではなぜオーフィスと一緒に？」

「それは、オーフィス様を利用して、なにやら企んでいる曹操様の手から守るため、とヴァーリ様が」

「それは心配することなのか？ 無限世界最強の龍神だぞ？」

「それが、そうでもないのよ」

イツセーの疑問にジャンヌが首を突っ込む。

「ジャンヌ様・・・」

「龍喰者、この名前に見覚えは？」

「いいや、知らないな」

「曹操は、どうやらその龍喰者ドラゴン・イーターでどうしようもないのよ」

「・・・」

イツセーはオーフィスを見る。龍喰者ドラゴン・イーター。字面だけを見れば、知

識の豊富なイツセーは龍殺ドラゴン・スレイヤーしを思い浮かべる。

「しかし、いくらオーフィスがドラゴンとはいえ、龍殺ドラゴン・スレイヤーしごときで

はそう簡単に消滅しない」

オーフィスは不動の存在、真龍を除いて圧倒的な力で世界一位という強さを誇る。1位と2位で絶対的な壁がある。いかに弱点が

龍殺ドラゴン・スレイヤーしとはいえ、最強の武器で龍殺ドラゴン・スレイヤーし、魔帝剣グラムに突き刺さ

れたとしても、びくともしないのである。

イツセーにとってどうにも腑に落ちなかった。

「・・・白龍皇がいうのなら、何かあるのだろうか。お、話は分かった。それで、このあとはどうするつもりだ？」

「はい、ヴァーリ様が言うには、英雄派と決着をつけるのだそうです」

「なるほどな。で、その肝心の白龍皇はどこに？」

「私たちが逃がすために、曹操と戦ってるにや」

「陽動作戦をしているのか」

「そうにや」

断片的な話からイツセーはこれまでの流れを頭の中でくみ上げる。そして、過去に戦った英雄派を思い出す。人間であり、英雄にこだわる集団。しかし、その言葉の裏腹には、それを実現しうる実力。最強の名をほしいままにする神滅具ロンギヌスを宿すその希少さ。油断ならない相手。イツセーとしては、そのうちこちらにも仕掛けてくる可能性をはじき出す。実際、これはイツセーにとってもそう無関係、というわけではなかった。

「……で、曹操との戦いが終わった後は？戦うまでは？戦うと言つても、まだそのときじゃないんだろ？」

「そーにやあ……今と変わらず、世界をブラブラするのにや？」

「たぶん、そうなるわね」

「……放浪者になるわけか」

「べつに、今までと変わらないわ」

「……」

イツセーは考え込む。これから、定住する間もなく、戦っては移動を繰り返すのかと。イツセーにとって、もはや他人というくくりから脱した目の前の存在をどうにかしてやりたいという感情が心のどこかに芽生え始めていた。なにせ、イツセーにとってかけがえのない存在の子孫と、その仲間であるからだった。

イツセーはとりあえず、白龍皇たちの意思を理解したところで、先ほどから半ば放置されているオーフィスに目を向ける。先ほどからずーッと静かにしているオーフィスであった。

「それにしても、久々に会う、オーフィス」

「うん、久しぶり、イツセー」

オーフィスと言葉を交わすイツセー。その声を久々に聞く。

「(前会ったときは老人の姿だったが、これまた癖のある姿だなあ……)」

イツセーは姿に注目する。前の姿と差異がありすぎて、流石のイツセーでも気にはなる。目の前の幼女。姿はがらりと変われど、それは本質ではない。そんなことを思いながら、思考を戻す。

「えーと、お二人は以前も会ったことがあるのですか？」

「ああ、ちよつと昔にな」

ルフェイは気になってついオーフィスとイツセーの関係を聞く。

「ん。正確には50年、6カ月、9日、ぶり」

その瞬間、凄まじいほどの核弾頭が落とされた。

「はあっ!？」

「どどどど、どゆことにや!？」

「……ほんとなのですか？オーフィス様？」

「ん」

各々のリアクションはオーバーであった。それもそのはずだった。イツセーは見た目はルフェイやジャンヌ、黒歌と変わらない、10代だ。しかし、オーフィスの口から5倍近くの数字を出されては、驚くほかなかった。

「……」

イツセーは『ああ、行ってしまったか』と手を顔に当てている。思えば、オーフィスのような幼い子というほうが無理なのだった。

「あんだ、ほんとに何者よ？」

ジャンヌは思わずイツセーに尋ねてしまう。

「ああ、わかったわかった。どうせなら、全員そろってからしやべることにする。同じことを二回もしやべるのは御免だ」

「それってつまり、またここにきてもいいと言っているようなものなのだけれど？」

「……ああ、かまわない。どうせ、もう場所はわれている」

オーフィスのピンポイントな記憶力の良さにより、ついに、イツセーの違和感の正体が割れる。

三人にとって、見た目と実年齢が異なるなんてことがいまだに信じ

られないでいた。だが、ひとまず、合間を挟んだところでルフエイは連絡を誰かにつないだ。

「はい、ヴァーリ様。もう大丈夫です。時間稼ぎ、ありがとうございます。ではまた合流ポイントで」

ルフエイは陽動作戦を実行しているチームにしてリーダーである白龍皇、ヴァーリに連絡を入れる。

『わかった。了解した』

「連絡は、取れたのか？」

「はい。作戦はうまくいったようですわ」

「じゃ、私たちはとりあえず合流ポイントまで一回向かうわ」

と言って三人とオーフィスはソファアールから立ち、アンブロシウスの家を出る。しかし、その時だった。オーフィスは立ち止まってイツセーのほうを向いた。

「どうした？」

イツセーは疑問に思い、ついオーフィスに言葉をかける。女性三人もそれに気づいてイツセーのほうを向いた。

「手伝って、イツセー」

「……手伝うというのは、真龍、グレートレッドを倒すのを手伝えということか？」

「ん。むかしから、そう、いつている」

「オーフィス……」

「オーフィス様……」

「……」

イツセーは無言になる。"それ"は、オーフィス唯一の望みであり、悲願である。そのことは、カオス・ブリゲード禍の団に身を置いていた3人もよくわかっている。だが、心の中ではそれを実行することは不可能だと、そう思っているのだ。

イツセーはオーフィスに何度も"お願いをされた"。それはかなり昔になる。イツセーの実力はどんどん頭角を現してきた。イツセーはその綿密な計算と用心深さでその存在を悟られないようにした。が、世界最強である無限にはそうはいかなかった。ある日、オー

フェイスは以来、気まぐれで来るオーフェイスには、毎回こんな感じになるのだ。

「何度も言っている、オーフェイス。無理だ。真龍はどう頑張っても、かすり傷が関の山だ。あいつは倒せない」

会うたび会うたびイツセーの返答は変わる。しかし、ルフエイ、黒歌、ジャンヌには、傷を与えられはするんだなとそう言葉通り受け取った。

「そんなことは、ない。我とイツセーなら、倒せる」

「俺と、ね……」

「できる。なぜなら、我と、この、無限と、同じくらいの強さだから」
「ッ!!」

「っ……」

イツセーの強さは、すでに無限の龍神ウロボロス、ドラゴンの領域にいる、オーフェイス自らが、そういつた。3人は驚かざるを得ない。オーフェイスの強さ。それは、真龍を除けば圧倒的なまでに世界の頂点。たとえば、神だろうと凌駕する。最強の神話とうたわれている、インド神話、聖典神話さえも敵わないほどだ。

「……俺以外にも強い奴はいる。それこそ、インド神話の三巨神か聖典神話にでも頼め。あいつらは、真正正銘のバケモンだ」
イツセーが言った助言は間違っていない。現に、オーフェイスの次に強い、また神としては最強であるシヴァ、ブラフマー、ヴィシュヌ、聖典の神であった。この神たちとオーフェイスが手を組めば、それこそ最強の名をほしのままにするのは確実だった。

「……無理。それに、イツセーは、ほかに仲間、もいる。それこそ、イツセーと、戦ったほうが、いい」

オーフェイスは神と手を組むよりも、イツセーとイツセーの仲間に目をつけていた。当然、イツセーとともにいるドラゴンはほとんどが同じ域にいるからだ。そのことに、オーフェイスが気づかないわけがない。

「それでもだ。必ず何人が死ぬ」

「……」

「そんな顔をしても駄目だ。真龍は相手にできない」

「……わかった」

オーフィスは無理だとわかると、その場から歩き出した。

「……オーフィス様」

「いいのにかにや？」

「……ん」

オーフィスの用事に区切りがついたところで、4人は仲間との合流場所に向かう。イツセーはひとまず客人を見送るため、開いている魔法陣の近くまで出てくる。

「……イツセー」

「なんだ」

「……ひとまず、納得、する」

「……」

オーフィスは先ほどのことに思うことはあったが、区切りをつけようとしていた。

「でも」

「？」

「もし、我の邪魔、するなら、その時は、容赦、しない……」
「……」

去り際、オーフィスは明確な意思をもって、イツセーを敵とみなした。去り際にとんでもない爆弾を落としていったのだ。明確な敵意を抱いたイツセーは厳しい目を、今は誰もいない4人がいた場所に向けていた。

「はあ、オーフィスにああまで言われるとわね」

「ドライグ、いたのか」

イツセーの後ろには、相棒にして超越した存在となった赤龍帝、ドライグがいた。

「ええ。ちよつとひやひやしたわよ。行ったきり帰ってこなかったし、何かと思えばオーフィスまでいるし。それに、オーフィスにああも言われるとはね」

「ああ、なんか、ちよつと変わったよな、あいつ。次あつたら殺される

のかな」

「笑えない冗談はやめて」

「ま、世界最強の存在に敵として認識されたのはある意味いいことだけれど」

少しづつ、変わりつつあるオフィスに思うところがたくさんある二人であった。

NO, LXI

「ハア、ハア、ハア……」
「フツ……」

ルフェイたちが目的の場所、アンブロシウスの家で過ごしているころ、ヴァーリたちは曹操、ゲオルク率いる英雄派を足止めしていた。「くつ、ヴァーリめ、これほどとは……」

「こればかりは、流石としか言いようがないな。最強の白龍皇は伊達じゃないな」

チームのリーダーであるヴァーリは同じくリーダーである曹操とゲオルク、剣士アーサーは同じく剣士ジーク、そして美猴はヘラクレスとの戦いであった。

『貴様たちはヴァーリを甘く見すぎたな』

「クツ……認めざるをえないな」

地に足を付けているゲオルク、曹操。対して空中に浮かぶアルビオン。否、バランス・ブレイカー禁 手バランス・ブレイカーとなっている。一白龍皇の鎧《テイバイン・テイバイディング・スケイルメール》は神々しいほどの輝きを放っている。戦場に光り輝く恒星のごとく、存在感を放っている。

その力は本物であった。バランス・ブレイカー禁 手を温存しようとしているゲオルク、曹操にとつて二人がかりだとしても荷が重い相手であった。そんな英雄派のトップを相手取るヴァーリは見下ろしながら言う。

「曹操、いい加減手の内を明かしたらどうだ？ 少しまらなからやってみてくれないか？」バランス・ブレイカー禁 手を「

「ゲオルク、わかっているな？」

「ああ……」

ゲオルクと曹操は顔を見合わせる。なにやら覚悟を決めようとしている時だった。ヴァーリの耳元に魔法陣が現れる。

「ああ、ルフェイか。そうか、あの場所に着いたか。わかった、今から帰還する。打合せ通りの場所で落ち合おう」

通信が終わると、ヴァーリは曹操たちに向き直る。

「曹操、我々の目的は達成した。ここで失礼させてもらう」

「くっ……」

曹操はヴァーリから聞かされた言葉で意味を理解した。曹操は何とかしてヴァーリたちからオーフィスの居場所を聞き出そうとした。しかし、もはやそれもかなわない場所にオーフィスがいることを。

「美猴、アーサー、行くぞ」

「はい」

「あいよつと」

ヴァーリが展開した魔法陣に飛び乗るアーサーと美猴。その様子を曹操、ゲオルクは厳しい表情をしながら眺めるだけであった。だが、それを良しとしない人物は、英雄派にいた。

「おいおいおい！曹操、いいのかよー！」

美猴との対決でさして傷を与えることのできなかつたヘラクレスは何もしようとしない曹操に食って掛かった。

「無駄なことだ。オーフィスに逃げられた以上な……それに、セイクリッド・ギア神器はまだ調整ができていない。ここで無理は、深追いをすべきときではない」

「それにだ。やつらも、決着をつけにくるさ……」

二大トップの二人に反対され、ヘラクレスは仕方なくそれに従うのであった。その時すでにヴァーリ、アーサー、美猴は去っていた。

「さて、我々も引き上げる。まだやることなのこつているからな」

「ああ、決戦に向けて、ドラゴン・イーター龍喰者と禁手ドラゴン・パラシス・ブレイカーを仕上げないとね」

ヴァーリたちが去った跡を見ながら、英雄派たちもこの場から離れた。



唐突に訪れたルフエイ、オーフィス、黒歌、ジャンヌは一度イツセーのもとから去り、ヴァーリたち陽動作戦チームと合流している。その間、イツセーはオーフィスに言われた言葉を思い出していた。

『そのときは——容赦、しない』

オーフィスは世界の中で最も強い存在である。いわば、天敵が存在

しない。強すぎるゆえに、滅多に敵意を抱かない。たとえば、神の目の前に現れたとしても、のほほんとしているだろう。そんな彼女がこの世界で唯一、自身の敵と認められた存在。それが、アンブロシウスの子、イツセーである。

イツセー自身と、その周りにいる存在が、世界最強にとって脅威だと、オーフィスの本能がそう判断したのだ。そんなことを面と向かって言われたイツセーは驚いているのと同時に、悩みの種となったのだ。

「……………」

イツセーは一人でこの聖地、アンブロシウス生まれの地で考えていた。

「(オーフィスと戦うかもしれない、か……………冗談きついで)」

「ほう、イツセー。ずいぶんと珍しいほどに弱気だな」

「オーフィスがああまでしていったんだ。いざそうなったら、あいつは本気でくるぞ」

「だろうな。しかし意外だ。あの子がああまでして言うとは」

「……………ああ、そうだな」

イツセーにとってそれだけ衝撃だった。

それ以上に、イツセーはどうかあの子たちをしてあげたい、そんなことを思うのであった。



「ヴァーリ……………」

「オーフィスカ……………どうした？」

「我、行く。イツセーのもとへ」

「ふっ、心配するな。今丁度向かうところだ」

英雄派の追跡を振り切ったヴァーリ、アーサー、美猴は予定通り、オーフィスたちと合流した。白龍皇ヴァーリ、アーサー、美猴、ジャ

ンヌ、ルフエイ、黒歌、そして鹵獲したフェンリルがそろっている。オーフィスが狙われるということは一時的には避けることが出来た白龍皇チームで会った。

数日後、再度アンブロシウスの家へ向かうのであった。アンブロシウスの家へと移動中、如意棒を担いだ美猴がふと言い出した。

「なあ、こんな面倒なことしなくても、俺たちが直接その魔法使いの拠点に行けばよかつたんじゃないのかあ？」

合理的に考えれば、美猴の言う通りだった。わざわざ一度別の場所で落ち合わなくても、ヴァーリたちが後から訪問すれば済む話だった。

「残念ながら、それはできないのです、美猴様」

「んあ？なんでだよ？」

「それはですね、アンブロシウス様の領域に向かうにはオーフィス様でなければいけないからです」

「なにそれ？どういうわけにや？」

「あの領域に展開された結界はあたしたちが知っているレベルの結界ではないのよ」

同じく結界や魔術、魔法に造詣のあるジャンヌは言う。

「ジャンヌ様の言うとおりです。今まで私達が見てきた魔法とは、一線を画するレベルの強度、威力、範囲を有しています。もはや根本から違うと言っても過言ではありません」

「そ、だから、たとえばヴァーリでもあの結界を抜けられないってことよ。まあ、ヴァーリがジャガーノート・ドライブ覇龍ジャガーノート・ドライブを使えば、五分五分ってところだけど」

「ほう、それは面白い。是非ともやってみたいところだが……まあ、いまはいい。優先すべきことがあるからな」

「ほーん、だから世界中どこでも行き放題の龍神の転送魔法陣が必要なのわかってか」

「はいそのとおりです。あ、そろそろ付きますね」

「ん、ついた……」

そうこうしているうちに、ヴァーリたちは目的の場所へと到着した。ジャンヌ、ルフエイ、黒歌にとつては数日振りである。

そして、ここでこのトラップを経験して来ていた女性陣はとっさに気を引き締めた。そんな姿をはじめてくるヴァーリ、アーサー、美猴は疑問に思うのだった。

「どうした？ そんな殺気立てて」

「ここは外敵が踏み入れたらすぐに魔法攻撃が来るようなところなのよ！ あたしたちが先に来たときは死ぬかと思うほどだったんだから！」

ジャンヌの言葉にルフエイ、黒歌が目で同意した。オーフィスが下見という形でともこの地を訪れたジャンヌたちはその記憶は新しかった。よほど、アンブロシウスが構築した自動撃退用の魔法が脅威に感じたのだった。

しかし、女性陣のこの焦り様にも全く動じないのが、白龍皇ヴァーリである。

「ほう、それは面白い。軽い運動になりそうだ」

まだその魔法を見ぬヴァーリ、美猴、アーサーはむしろ楽しんでるように見えたのだった。

「しかしよ、その魔法ってのはいつ発動するんだ？ 俺たちたちがこの領域に入ってから結構経ってるぜ？」

「あ、たしかに……」

ヴァーリたちがこの領域に入ってからすでに時間は経過していた。ルフエイたちが前来たときには、この地に踏み入れた瞬間にすでに発動していたのだ。

なぜ、攻撃魔法が発動しないのかは、すぐにわかるのだった。

「来たか……こんどは全員揃っている、らしいな」

そこにヴァーリたち以外の声が聞こえた。

その正体はすぐに判明した。

「やあ、魔法使い。お邪魔するよ」

ヴァーリはその目の前の存在にひとまずあいさつをする。相変わらず、ヴァーリは堂々としている様子である。

「ああ、歓迎するよ。世界をまたに駆けるテロリストさん」
そんな目の前に堂々と入ってきた侵入者にイツセーは皮肉を込めて歓迎するのであった。



このアンブブロシウスの家に初めて来るヴァーリ、美猴、そしてアーサーだが、ヴァーリと美猴は楽しんでいる。この状況を。なぜなら、目の前には、自分たちをも超えるかもしれない存在がいるからだ。それに対してアーサーは目の前に出された紅茶を嗜んでいる。

「おお、これは……！」

「美味しいですよね、お兄様っ」

「ええ……」

イツセーが出した紅茶がアーサーの舌をうならせる。

「へえ、あの三度の飯より紅茶好きなアーサーにここまでいわせるたあな」

アーサーの紅茶に対するこだわりをいやというほど知る美猴は言漏らす。一息いれたところでイツセーは目の前にいる白龍皇ヴァーリに視線を移した。

「ひとまずは、大体の事情は知っているつもりだ」

「それはありがたい。説明の手間が省ける」

「にしても、英雄派に、ドラゴン・イーター龍喰者か……」

「曹操たちは、その龍ドラゴン・イーター喰者でオフィスをどうにかしようとしている。ついでに、俺たちもだろう」

「まあ、オフィスだけをどうにかしてお前たちには何もしないなんてことは無いだろうな。それにしても、面倒な敵を作ったもんだな。まあ、白龍皇だからだろうがな」

「ずいぶんと他人事のようなだ。だが自分でも分かっているんだろう？ おそらく曹操とゲオルクはあんたも狙っているぞ」

「……まあ、宣戦布告をされたばかりだからな」

白龍皇チームと世界からは認識されているチームのリーダーと魔法使いとの間で軽く情報のやりとりをする二人。

イツセーにとっては一度対戦した相手。しかし、さらに力をつけていると聞いてイツセーの中で知らないふりはできなくなってきた。さらに、イツセーは先ほどから龍喰^{ドラゴン・イーター}者のワードが引つかかっていた。

「にしても、お前たちがこんなところにこのタイミングで来るとはな」「もともとオーフィスが望んだことだ。俺は、オーフィスの願いをかなえたいに過ぎない。ま、俺がもつとも興味があり、倒したい相手のもとに行けるのは面白そうだったからな」

と、ヴァーリは苦笑する。それは戦闘マニアであり楽しいことに目がないヴァーリらしかった。イツセーは自分の中で納得する。とはいえ、イツセーはイツセーで何も不都合などはなかったのだ。なぜなら、目の前には白龍皇と子孫がいるのだから

「あの、わたしから少しよろしいですか？ああ、紅茶、ごちそうさまでした」

と、そこにアーサーが話を切り出す。紅茶を何よりも優先するアーサーはだされた紅茶を味わい尽くして礼を言った。とても満足しているような顔をしていた。

「こうした場は初めてですので、改めて。私はアーサー・ペンドラゴンと言います。英雄派の人間が言いふらしていたことを耳にしかただけですが、あなたは一体何者なのですか……?」

アーサーは少々懐疑的にイツセーに問いかける。アーサーはイツセーの正体の真実に迫ろうとしていた。本人の口からどうしても聞きたかったのだ。アーサーだけではなかった。強者揃いで、常に戦闘相手を求めるヴァーリチームの面々も同様であった。

「君たちの期待する通りだ。俺の名は、イツセー・V・アンブロシウス、だ」

「?!?」では、あなたはかの有名なマーリン・アンブロシウス様の子孫なのですね!？」

ヴァーリチームで唯一の魔法使い、ルフエイはイツセーの姓を聞いた瞬間に体に乗させ、目を星でキラキラ輝かせながらイツセーに迫る。あまりの眩しさにイツセーはたじろぐ。

「まあ、おおむねその通りだな」

「やつぱり、そうなのですね!!わたし、今とっても嬉しいですつ!!」
「ハハハ、すみません。ルフェイにとってアンブロシウスの家系は憧れだったのですよ」

ルフェイは飛び上がった。なぜなら、マーリン・アンブロシウスは現代につながるまでの魔法体系の始祖である。魔法使いにとってマーリン・アンブロシウスの存在はあこがれであり、目標にしている魔法使いも多かった。

「でも、それだけじゃないでしょ?」

腕を組みながらいかにも怪しいものを見るような目でイツセーを見る。ジャンヌには、オーフィスが口にしたことが引つかかっていた。

「まあ、もつと正確に言うならば、偉大なる大魔法使い、マーリン・アンブロシウスは俺の母親だ」

イツセーのその驚愕の事実にはヴァーリチームの顔ぶれの平静を失わせるには十分だった。

「マーリン・アンブロシウス様が、お母上……?」

マーリンを何よりも憧れと見ているルフェイはフリーズしている。それほどの事実を受け止めきれない。

「ま、待ってください。マーリン・アンブロシウスは私のご先祖様の時代に生きていたはずですよ!」

アーサーはイツセーに追求する。目の前の人間が、それほど長く生きていたとは到底思えなかったのだ。

「ああ、そのとおりだ。俺は、昔にある事故というか、魔法の副作用みたいなもんでな。なんやかんやあって、300年くらい生き延びてしまった人間さ」

「そ、それでは……あなたは……」

イツセーはアーサーの意図を読み取ってそれに応える。

「ああ、君のご先祖、一国の国王であり、初代アーサー・ペンドラゴンは俺の兄のような存在であり、彼の王国で宮廷魔導士長をしていた。この場合は……」

またこうして巡り会う機会

ができましたね、我が王よ、といったほうがいいか？」

「っ……」

アーサーとルフエイはガクガクと震える。目の前に、自分の目と鼻の先には、自分自身のご先祖を知る、さらにはそのご先祖とともに生き、戦った存在がいるのだ。世界中には自分と同じような英雄といわれる血筋の子孫がごまんといた。しかし、その生き証人がいて、それが自分とつながりの深い人物だった。こんなことは稀なことがまさに自分自身の身に起きていることを理解するのは、まだ若い二人にはできなかった。

「へへっ、マジかよ……」

「ただものじゃないとは思っていたが——」

「とんでもない大物だったにや……」

驚愕しているのはペンドラゴン兄妹だけではない。まさに英雄たちの血を引いている美猴、ジャンヌはもちろん、強者を求め続けているヴァーリも例外ではなかった。今すぐにも戦ってみたい相手がそこにいるのだ。

「改めて、君らに倣って名乗るのなら、マーリンと、名乗るべきかな？」

魔法使いの間で常識となっている魔法体系の始祖、マーリン・アンブロシウスの唯一の血縁の存在を知るものが、今ここに現れた瞬間であった。